～長髪の美少女～

Sagittarias

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～長髪の美少女～

【Ｎコード】
Ｎ５０５９Ｊ

【作者名】
Ｓａｇｉｔｔａｒｉａｓ

【あらすじ】
『ポケットモンスター　プラチナ』を原作とした笑いあり・バトルあり・三角関係あり・シリアスありの冒険小説です。ポケモンを知らない人でも楽しめるように書いています。

長髪の美少女ヒカリはせっかちな幼なじみに振りまわされたり、ロマンチストな男の子に言い寄られたり、初恋の人と再会して親密になったり、謎のイケメンとすれ違ったり、怪しいファッションの集団と戦ったりしながらポケモンチャンピオンを目指しているうち

に大きな争いに巻き込れてしまいます。

世界が大きく揺れ動く中、果たして彼女は運命の相手を見つけられるのでしょうか?そして彼女自身も知らない自分の秘密とは!?

プロローグ

＞i31889—699＜

なんのために生まれ
なにをして生き
なにをなしとげて死ぬ？

なぜ死んだ？
なぜ生まれた？
どう育った？

流れる黒髪
発するはプラチナの輝き

ゆれる瞳
こぼれる真珠の涙

震える唇
放たれるダイヤモンドの意思

ヘラにかわいがられ
アテネに育てられ
アフロディーテに祝福された

彼女は長髪の美少女
神々に愛された世界の光

————————————————————

ーーー

・図鑑所有者がパソコンで預けたポケモンは普段は研究所の近くの牧場にいる。

・基本的にポケモンを持つのに年齢制限はない。０歳でも可能。

・普通の人がポケモンを持つ場合、役所で書類を提出しなければならない。

・普通の人はポケモンを１０匹以上所有してはいけない。

・ポケモンを１０匹以上所有する場合は書類を提出しなければならない。（例：農場、会社、ポケモンブリーダー、育て屋など）

プロローグ（後書き）

みなさん初めまして。見習い小説家のＳａｇｉｔｔａｒｉａｓです。名前はサジタリアスと読みます。長い名前なので好きなように呼んでください。Ｓａｇｉ（サギ）さんでもＯＫです（笑）。得意なジャンルはラブコメです。よろしくお願いします！

第1話　始まりの朝

私はずっと我慢していた。目の前にいるのは好きな人。2日前会ったばかりだけど、私はその人が好きで好きでしかたなかった。なにか言おうとしたけど言葉がでない。だって今なにか言ったら、私はきっと泣いてしまう。

「本当に行っちゃうの？」

私は涙をこらえながら言った。目の前にいるアキラとヒコザルがぼやけてよく見えない。もう会えないかもしれないのに、好きな人の顔がこぼれそうな涙のせいで見えないよ。

「ごめん。この町に寄り道しただけなんだ。でも……」

アキラはゆっくりと私の頭をなでた。

「おかげでヒカリに会えた」

その一言でとうとう涙がこぼれた。どうしよう。ふいてもふいても涙が止まらないよ。アキラを困らせたくないのに。口の中が涙と鼻水でしょっぱいよ。上手く話せないよ。

「また……会えるよね……？」
「もちろん」
「ヒコザルにも？」
「もちろん」

アキラの肩に乗っていたヒコザルがウキキッと鳴いた。

「ヒカリもいつか旅に出な。楽しいよ」
「……うん」
「ヒカリ」

肩にやわらかい感触がした。アキラが私の肩に手を置いたんだ。手袋をしているからアキラの手がいつもより大きく見える。

「……いい女になれよ」

＞ｉ４０６２―６９９＜

＊＊＊

―ピピピピピピピピッ。

「ん……」

―カチッ。

私は耳障りな目覚まし時計を切った。もう朝か～……げっ。９時５分前だ。寝すぎちゃった。

「ん～ん」

軽く体を伸ばした。アキラの夢を見るなんて久しぶり。どういう風の吹き回しかしら。艶のある短い黒髪。キリッとした眼。細いけれどガッチリした体。私より頭一つ分高かったアキラ。黒いミリタリーコートが似合ってかっこよかった。……ただ単に思い出を美化しているだけかもしれないけど。アキラと出会ってから３年が過

ぎた。私ももう12歳。アキラは今頃15歳。今頃どこでなにしているのかしら。

―ピッ。

なんとなくリモコンでテレビをつけた。丸顔の怖そうなおじいさんが画面に写った。

「ご存知のようにこの世界にはポケットモンスター、縮めてポケモンという不思議な生き物が住んでいる」

「はい。ずっと昔から人間とポケモンは仲良く遊んだり、一緒に力を合わせたりしながら、暮らしてきたんですよね？」

特別番組『ナナカマド博士に訊く！』だ。寝坊したから放送が終わりかけている。アナウンサーと博士の会話を聞きながら私は着替え始めた。

「私達の隣にはいつだってポケモンがいる……その意味を考えていきましょう」

「以上、カントー地方からシンオウに戻ってこられたナナカマド博士のお話でした」

番組の終わりを告げる短い音楽が流れた。あ～あ。終わっちゃった。あいかわらずナナカマド博士いいこと言うな～。CMが流れるなか私はパジャマを脱ぎ捨て、子ども用ブラジャーのフックをとめた。

ベッドから離れてタンスに近づいた。上の引き出しを開けて私は悩んだ。今日はなんの服を着ようかな？服を物色していたら誰かが階段を上がる音がした。……ママ？どうしたのかしら。2個目の引

き出しを開けたとたん、ドアが勢いよく開いた。

「おいヒカリ！今のテレビ観たか？観たよな！」

「キャーッ！！」

＞ｉ４０６０―６９９＜

私は慌てて胸元を両手で隠し、後ろを向いた。ノックせずに部屋に入ってきたのは幼なじみのジュンだ。しかも女の子じゃなくてお・と・こ・の・こ！なんでこんなときに男の子が入ってくるのよ！？

「ん？ヒカリなんで水着なんか着てんだ？」

このバカ……！

「水着じゃなくて下着よ！このヘンタイ！」

私はベッドに戻るなりまくらを投げつけた。

「ごふっ」

クリーンヒット。枕は見事に顔に命中した。

「いいから出てって！！」

私は時計やヌイグルミなど手元にあるものを投げまくった。

「わかった！わかったからもの投げるのやめろ！」

ジュンは慌ててドアを閉めた。ジュンがまたドアを開くとは思え

ないけど、念のためにドアストッパーをドアの下の隙間に置いた。これで安心して着替えを再開できる。

「はぁ……」

私はため息をついた。もう。最悪。せっかくアキラの夢を見たのに、ジュンのせいで台無しだ。私はワンピースを手に取った。これならすぐ着替えられる。着替えている間もジュンはドア越しから話しかけきた。

「ナナカマド博士ってポケモンの研究をしてるとってもすごい人だろ!?」

「そうよ」

「ということはポケモンだってたくさん持っているはずだ!」

「まあ、そうなるわね」

「だからさ、頼めばオレたちにもポケモンをくれるぜ!きっと」

一瞬着替えの手を止めた。……なにをどう考えたらその結論に至るの?

「ヒカリ、着替え終わったか?」

ジュンの辞書には『忍耐(にんたい)』という言葉はないのかしら?私はすべるようにドアストッパーを取った。

「うん。もう入って…」

―ガチャッ。

……早いわよ。もう少しでドアにぶつかるところだったわ。

「なんだ。ワンピースかよ。どうりで着替えるの早いと思った。」

服をゆっくり選べなかったのは誰のせい？

「えーと。なんだったっけ？」

ちょっと。

「そーそー！ナナカマド博士にポケモンもらいに行くんだよ！オレ町の外で待ってるから！」

「えー」

今日は日曜日だから家でゆっくりしようと思ってたのに。

「いいか、ヒカリ。遅れたら罰金１００万円な！」

言うが早いがジュンは行ってしまった。静かになった家で私は顔を洗って歯磨きをしたあと髪をとかした。３年前よりかなり伸びている。アキラとお揃いの黒髪は密かに誇りだ。少しは女らしくなったかな？階段を降りたらママの声が聞こえた。

「ヒカリ！さっきジュンくん帰っていったわよ。」

そりゃ見てわかるわよ。ダイニングルームにはママしかいないもの。

「なんだかよくわからないけど大急ぎなんだって！ジュンくんどうしたんだろうね。話を訊く前に行っちゃったの」

「あいかわらずせっかちなんだから」

私はママに渡されたサンドイッチにかじりついた。やっぱりトーストされたＢＬＴ（ベーコン・レタス・トマト）サンドイッチはおいしい。ジュンはちゃんと朝ご飯食べたのかしら？

「そういえばさっきジュンくんに水着と下着の違いを訊かれたわよ。」

「え？」

私はパンを噛むのをやめた。いやな予感がする。

「……で、ママはなんて答えたの？」

ママはクスッと笑った。

「そうねぇ……『水着はみんなに見せるもの、下着は好きな人にだけ見せるものよ』って答えておいたわ」

「ママ！！」

あっきれた！ママはおっとりしている。少しは恥じらいというものを知ってほしい。……ジュンにも言えることだけど。

「そしたらジュンくん、『へぇ。ヒカリのやつ色気のねえ下着姿だな』って言って帰っちゃった」

「なんですって！」

私はイスをどけてサンドイッチを手に取った。

「私、ジュンをぶんなぐってくる！」

人の着替えを見ておいて『色気のねえ下着姿』ですって？…許さない！

「いってらっしゃい。……あ、ヒカリ！」

開きかけたドアを止めた。ジュンをなぐる回数の制限でも言うつもりかしら？一発なぐりに行くだけなのに。

「草むらに入っちゃ駄目よ！野生のポケモンが飛び出すからね」

「はーい！」

なんだ。そんなことか。

「自分のポケモンを持っていれば大丈夫なんだけど……。じゃ、行ってらっしゃいね！！」

「行ってきまーす」

私はドアを閉めた。町の外って２０１番道路のことよね？消化に悪いけど、サンドイッチを食べながら走ろっと。

第1話　始まりの朝（後書き）

部屋に入るときはノックをしましょう（笑）。

第2話　幼なじみ

ここはフタバタウン。若葉(わかば)が息吹(いきぶ)く場所。ジュンと私の生まれ故郷。なにもない田舎だ。私達は一度も他の村や町に行ったことがない。だって草むらに入るとポケモンが出てくるんだもの。

「遅刻(ちこく)遅刻～」

トーストされたサンドイッチをくわえながら私は２０１番道路に向かって走っていた。ＢＬＴサンドイッチのベーコンとレタスとトマトとパン一枚は既に食べ終えていたから残りは私がくわえるパン一枚だけだった。

正直私もそろそろポケモンがほしい。手に入れようとすればカンタンに手に入る。だって私のおじいちゃん、この町の市長だもの。おじいちゃんに頼めば適当なポケモンをどこからか連れてきて「ほ～ら、ヒカリ～。プレゼントじゃぞ～」とニコニコ笑いながら私にくれるに違いない。でもそうしたくはない。だって初めてのポケモンだもの。そんな夢のない方法でポケモンをもらって旅に出てもうれしくない。それにやっぱりポケモンは自分で選びたい。

あ～あ。自分のポケモンがいればどうどうと草むらを歩けるのに。そしたらこの町を出て都会に行って素敵な恋がしたい？田舎の男の子ってダサいんだもん。私だって年頃の女の子。ボーイフレンドくらい普通にあこがれる。そんなことを考えながら走っていたら道行く人々に次々に声をかけられた。

「おはよーヒカリ！」
「ヒカリさん白いワンピース似合うね♪」

「今日もかわいいね～」

この町の人はみんな友達だ。声をかけた人たちのほとんどは学校の友達だった。

「ジュンが探してたぞー」

「迎えに行ったらー？」

ジュン、いったん自宅に帰ったんだ。一応ジュンの家に行ってみようかな。

「おふぁよー！（おはよー！）みんふぁありふぁふぉー（みんなありがとー！）」

私は走りながらみんなに挨拶とお礼を言った。トーストを噛んでいたからあんまり上手く話せなかったけど。……さて。そこの角を曲がればジュンの家だ。早くトーストを食べきらないと……。

―どんっ！！

「キャッ！」

曲がり角で誰かとぶつかった。トーストは落としてしまった。私の貴重な朝ご飯が…！

「なんだってんだよー！」

トーストを加えていたら曲がり角で男の子とぶつかるだなんてなんてベタな展開。

「いった〜い……」
「ってヒカリか！おい！ナナカマド博士に会いに行くぞ！早く来いよな！」

でも私がぶつかったのは見知らぬ運命の相手ではなかった。ただの幼なじみのバカなジュンだった。ジュンが着ているのはオレンジと白のボーダーのシャツ。下はグレーのズボン。首には緑のマフラー。足元を飾るのは山吹色の靴。ファッションセンスはまあまあかな。

髪の毛はキレイな金髪。でもくせっけのせいでサイドの髪がはねてる。ちゃんと髪の毛とかしてるのかしら？顔を合わせると目に写るのは相手の勝ち気な目とつりあがっているまゆげ。口元に浮かぶイタッズラぽい笑みが心にひっかかる。ファッションセンスがまあまあなら顔もまあまあ。１００点中５８点ってところかしら。

「あ！忘れ物！」

ジュンは私に謝りもせず家に戻った。どこまでもムカつく奴。ワンピースが汚れちゃったじゃない。白だから汚れがよけい目立つ。ワンピースについた土埃を払っていると前方から声がした。

「あ、ヒカリちゃん。大丈夫？ジュンを呼びに来たの？」

開きっぱなしのドアからジュンのお母さん―通称ジュンママ―が出てきた。

「はい。なんとか……」

私はなんとか笑みを浮かべた。ジュンはあわてんぼうだけどジュ

ンママはいい人だ。

「あの子ったら今出てったのにすぐ戻ってきちゃったわ。ほんとにじっとしてないの。誰に似たのかしら」

「ハハハ……」

苦笑いをした。ジュンの家族写真を見る限り、少なくとも外見は父親似だ。

「お茶でも飲む？」

「はい」

私はくつを脱いでジュンの家に上がった。

＊＊＊

家に上がるとジュンママから冷たい緑茶を受け取った。のどがかわいてたから助かるわ。

「ジュンなら2階にいるわよ」

「ありがとうございます、おばさま」

私は緑茶を一気に飲み干した。コップをジュンママに返して私は2階に上がった。ジュンと違って私は他人の家のドアをいきなり開けるなんてことはしない。ドアを開けるまえにきちんとノックした。

―コンコン。

……ノックをしたけど返事がない。部屋からは音がガチャガチャ聞こえてくる。

「ジュン？」

恐る恐るドアを開けた。だってもしかしたらパンツ一丁で部屋にいるかもしれないもの。幸いながらジュンは普通に机の前で荷造りをしていただけだった。

「寝袋と冒険ノートも持っていくか……おっ！ヒカリ！」

ジュンは履いている靴と同じ山吹色のバッグに色んなものを詰め込んでいた。きっとあわてていたから土足で部屋に上がったのね……。

「ジュン。ポケモンをもらいにいくのは聞いたけど旅に出るとは聞いてないわよ」

「道路で待ってるから遅れたら罰金１００万円な！」

ジュンは用件を言うなりダッシュで駆けた。人の話を聞いてよ……。話が全くかみあっていない。仕方なくジュンの家を出ようとしたら、ジュンママに話しかけられた。

「またジュンと一緒に遊ぶの？ほんとに仲良しね。今日はどこに行くの？」

「ちょっとそこまで」

私は力なく笑った。マサゴタウンに行くだなんて言えない。心配させたくないから適当にごまかした。

「湖のほうに行くの？気をつけてね。草むらには入っちゃダメよ」

「はい」

ママと同じことを言われた。そのときは草むらに入るつもりはなかったからすんなりママの言葉を受け入れられた。でもジュンママに同じことを言われたとき、私は罪悪感を覚えた。だって私とジュンは草むらに入るつもりだもの。……ううん。少なくとも草むらに入りたいのはジュンだけ。それを知っている私ならがんばって止められる。……そうよ。ママたちの言ったことは守らなきゃいけない。私がしっかりしなくっちゃ……！

＊＊＊

フタバタウンを出て２０１番道路についた。ジュンは看板の前で足踏みしながら待っていた。

「遅ーい！！」

ジュンは私を見かけるなり叫んだ。私が起きてから４０分以上過ぎている。

「何時に来いとは言われてないわ」

私の正当な言い訳にジュンは罰の悪そうな顔をした。だって本当のことだもの。

「……まあいいや。さ！ナナカマド博士の研究所に行くぜ！」

迷わずマサゴタウンへ向かおうとするジュンの腕を私はすかさず掴んだ。

「隣町に行くには草むらを通らなきゃいけないわ」

そうカンタンに草むらを通らせるわけにはいかないわよ、ジュン。

「なんだよ?草むらに入るなって言いたいのか」

「そうよ。危ないわ」

私はジュンの腕をひっぱったけど抵抗された。それどころか逆に私の手をふりはらわれてしまった。

「……っ!?」

思わずジュンの腕を見た。いつのまにか私の腕より太く硬くなっていた。昔は同じ太さだったのに……いつからそんなに強くなったの?ジュン。

「平気!平気!ポケモンいなくても大丈夫。オレに考えがあるんだよ!」

「本当に?」

私は目を細めた。ジュンの考えにろくなことはない。昔からジュンの無茶苦茶な考えのせいで痛い目にあってきた。

「いいか?草むらに入ると野生のポケモンが飛び出てくるだろ!」

「うん」

「だけどさ、それよりも早く次の草むらに入るんだよ!」

「はあ?」

あのー、わけわかんないんデスケドー?

「そうやって駆けぬければ野生のポケモンに会わずにマサゴタウン

に行けるってわけ！！」

ストップ。

「私が足遅いの知ってるでしょ！私ジュンほど早く走れないからムリだよ…」

昔からかけっこではいつもビリのほうだ。ジュンが私より優れていることがあるとすれば足の早さだけ。

「大丈夫！オレがヒカリの手を引っぱってやるよ。なにかあってもオレがヒカリを守るから！」

ジュンは二カッと笑って手を差し伸べた。

―ドキン。

ジュンのセリフに少しクラッとした。前は守ってやるなんてこと言わなかった。ジュン……もしかして……成長した？

「……うん」

私はジュンの手を取った。お互い手を放さないように指に力を込めた。

「んじゃ、ついてこいよな。それじゃ行くぜ！せーのっ……それ！」

私は走り出した。ジュンに手をひかれながら。

＞ｉ４０６５―６９９＜

第2話　幼なじみ（後書き）

幼なじみっていいですね＾＾

第3話　禁じられた遊び

私とジュンは草むらを駆け出した。今まで遠くで見ていただけの場所を走るのは新鮮だ。通り過ぎていく柵（さく）、木々、花、生きもの。周囲の景色は少しずつ変わっていく。走るのに夢中でよく見てなかったけどあちこちにいる生きものがポケモンかしら？ビーバーみたいな生きものと鳥みたいな生きものが見えたけど、普通の動物よりサイズがひとまわり大きかった。

「もう少しで草むらを出るぞ！がんばれ！ヒカリ！」

私の前を走るジュンが振り返って言った。３メートル先に草の生えていない平地が見える。そのさらに先には再び草むらが広がっていた。ひとまず休憩はできそう。

「うん！」

私が握る手に力を込めたそのときだった。

―ウォォォォォン。

「「！？」」

前方の草むらから水色のライオンのようなポケモンが出てきた。

「おわっ！」
「キャアッ！」

私たちは思わず立ち止まった。手は握ったままだ。前にいるポケ

モンは私たちをにらんでいる。

「グルルルル……」

そのポケモンのたてがみと下半身は黒く、顔と耳と前足は青かった。ぎらつく眼は怖いけれど、それ以上にそのポケモンの爪と牙のほうが怖かった。

「ジュ、ジュン……」

私はガタガタふるえながらジュンの手を強く握った。私の手もジュンの手も汗でびっしょりだった。青いポケモンは私たちをにらんでいる。急に動いたら飛びかかってきそう。だからといってじっとしていれば安全という保証はなかった。

「ヒ、ヒカリ……」

名前を呼ばれた。ジュンがこわがっている。どうしよう。私がしっかりしなきゃいけないのになにも思いつかない。青いポケモンのヘビにらみで動けない。どうすればいいの…？

「……お前は逃げろ」

「え？」

今なんて言った？

「オレがあいつをひきつけるからその間に逃げるんだ」

なに言っているの……？

「で、できないよ。そんなこと……」

見捨てろっていうの？

「いいから言う通りにしろ。町に戻って助けを呼ぶんだ。オレが時間かせぎするから」

ジュンはへへっと笑ってみせた。だけど私は知ってる。ジュンは強がってるだけ。

「オレは平気だから」

うそ。私と同じくらい足がふるえてるじゃない。

「巻き込んでごめんな」

私に謝りながらジュンは足元にある棒切れを拾った。……ふざけないで。かっこつけないでよ。バカなこと考えないで……一緒に逃げよう？

「うおおお！」

合図もせずにジュンはポケモンに向かった。棒切れを振り回したけどポケモンは軽々とジュンの攻撃をよけていく。

「ジュン！」

人間がポケモンにかなうはずがない。ジュンはあっという間にポケモンに取り押さえられた。おおいかぶさりながら噛みつこうとするポケモンに棒切れで必死に応戦するジュン。

「なにやってんだ！早く逃げろ！！」

＞i32024―6996＜

私はハッとした。ジュンはあんなに一生懸命私のためにがんばっている。なのに私はバカみたいに立ちつくすしていた。ジュンの努力を無駄にするわけにはいかない。

「必ず助けに来るから！！」

私は村に向かって走り出した。涙がほほをつたっていく。私ってなんて無力なんだろう。

「ハァ……ハァ……」

こわがっているせいで呼吸が速い。口の中はカラカラにかわいているのに目から涙がどんどん出てくる。……バカだ私。いつもジュンのことバカだと思っていたけどバカなのは私のほうじゃない。あのときちゃんとジュンを止めていればこんなことにならなかったのに。もっと早く逃げ出せばジュンをあんなに追いつめることなかったのに。

「あっ！」

私はあおむけに倒れた。最悪なタイミングで石につまづいてしまった。

「ヒカリ！」

後ろを振り返るとポケモンが私に迫ってきた。きっと私のほうが弱そうだと判断したんだ……！立ち上がろうとしたけど足に力が入らない。モタモタしている間にもポケモンが迫ってくる。

「やめろ！ヒカリーー！！」

私は眼をつぶった。こんな現実、もう見たくない。

いやっ。

こわい。

死にたくない。

まだ死にたくない……！

マタ死ニタクナイ。

生キタイ。

モット生キタイ。

マダ告白シテナイ。

夢モ叶エテナイ。

モウ死ニタクナイ！

息ができない。そのとき一瞬、私は水の中にいるような錯覚がした。

「ヒコザル、『火の粉』！」

……誰かの声がした。そのあとすぐ前方に熱気を感じた。

第3話　禁じられた遊び（後書き）

遊ぶときは親の言いつけと門限を守りましょう。
気をつけないと恐ろしいことが起きます・・・ヒカリとジュンのように！＝Д＝

第４話　出会い

一体なにが起こったの？まぶたを恐る恐る開くと目の前にサル型のポケモンの後ろ姿が見えた。しっぽがあるべきところには炎がゆらめいている。小猿ポケモン、ヒコザルだ。アキラが持っているポケモンと同じ……。

「アキラ！？」

ヒコザルが出てきた方向を見た。そこにいたのはショートヘアーの黒髪の男の子……でもヒコザルの持ち主はアキラではなかった。私と同い年くらいの知らない男の子。……６７点？……はっ！？私ったらなんてことを！助けにきてくれた男の子の顔に点数をつけるだなんて……！

現状を確認するためヒコザルに目を向けた。ヒコザルは青いポケモンをにらんでいた。青いポケモンはヒコザルの火の粉をくらって警戒している。

「グルルル…」
「ヒコザル、『ひっかく』！」
「キキッー！」

ヒコザルは爪を出して青いポケモンをひっかき始めた。相手も同じ技を繰り出してきた。２匹のひっかきあいが続く。でも見たところ体格も攻撃力も青いポケモンのほうが有利。ヒコザルは段々押されていく。このままじゃ負けちゃう…！

―ボォッ。

そう思ったとき、ヒコザルのおしりの炎が勢いよく燃え上がった。

「今だ！もう一度『火の粉』！」

―ゴォッ。

ヒコザルは思いっきり息を吸ったかと思うと火の玉を敵に向かって吐き出した。さっきの火の粉よりあきらかに威力が高い。

「ガアアァッ」

青いポケモンは苦しそうにもがいた。きっとやけどしたんだわ！青いポケモンは顔をひきつらせた。ヒコザルが『火の粉』を喰らわせたところからけむりがでている。青いポケモンはヒコザルをにらんでいたけれど、予想以上の戦いに疲れたのか逃げてしまった。……ふぅ。よかった。私、まだ生きてる。助かった…。

「ヒカリ！大丈夫か！？」

ジュンが私に駆け寄ってきた。ジュンも無事みたい。よかった。本当によかった……。

―パンッ。

私がほっと息をついたそのとき、ジュンのほっぺたがたたかれるのが見えた。

「なんだってんだよー！」

ジュンをたたいたのは私を助けてくれた男の子だった。男の子は静かにジュンを見ている。

「ポケモンを連れずに草むらを走ったの？……なに考えてたの？」

男の子は怒っていた。当然よね。私たちはやってはいけないことをやってしまったんだもの。おとなしくしていればいいのにジュンは逆ギレしてしまった。

「なんだよ！助けてもらったのを感謝してたのに。ビンタすることねーじゃないか！」

「ルクシオの爪には強い電気が流れているんだぞ！ひっかかれていたら死んでいたかもしれない。君は自分がどれほど危ないことをしたのかわからないのか！」

「うっ……」

男の子の言ったことは正しい。ジュンは言い返す言葉も見つからない。あの青いポケモンはルクシオって言うんだ……。

「君1人ならともかくレディーまで巻き込むなんて…君は紳士失格だね」

「ぐっ」

男の子はクルッと私のほうに振り向いた。

「お怪我はありませんか、お嬢さん」

お礼を言わなきゃ。怒られるのも覚悟の上で。

「ええ。助けてありがとう」

＞ｉ４０６９―６９９＜

私はにっこり笑った。感謝の気持ちを込めて。

―ポロッ。

男の子の手から赤白のボールが落ちた。恐らくヒコザルを入れていたモンスターボールだ。あのボールでポケモンを捕まえたり、捕まえたポケモンを自由に出し入れしたりできる。

「ウキッ？」

ヒコザルはキョトンとしていた。だって男の子は口をポカーンと開けたまま私を見ているんだもの。どうしたのかしら？

―ボカッ。

「いってー！！」

男の子は私をぼーっと見ていたかと思うと今度はジュンの頭をなぐった。

「今度はなんなんだよ！？」

「君はこんなにかわいい女の子を危険（きけん）な目に合わせたのか？！この疫病神（やくびょうがみ）め！！」

「はあ？」

男の子はジュンを無視して私の手を取った。

「はじめまして。ヒカリさんというのですか？ステキな名前ですね。ぼくはポケモントレーナーのコウキと申します。ナナカマド博士の研究のお手伝いをしています。以後、お見知りを…」

「は、はぁ…」

＞ｉ４０６８―６９９＜

ポケモントレーナー……ポケモンを扱う者。ポケモンを持つ人は誰であれそう呼ばれている。私にとってアキラが初めて見たポケモントレーナーだった。３年前以来、私は今日までポケモンを見たことがなかった……ってそうじゃなくて！

う～ん。コウキと名乗った男の子はさっきから私を熱い視線で見つめている。……少しドキドキする。都会の男の子って女の子に積極的なのかしら？

「ちょっと待てっ！ヒカリに気安く触るなー！」

ジュンは私の手を握るコウキくんの手に向かってチョップをかました。コウキくんは間一髪で手を放した。……ちょっとジュン！私にも当たるじゃない！

「オレのヒカリにさわるなー！」

―ドキッ。

心臓が一瞬大きく鼓動（こどう）した。ジュン……それって……どういう意味…？

「君はヒカリさんのなに？」

コウキくんは不機嫌そうに言った。私には優しい眼差しを向けるのにジュンには厳しい。

「オレとヒカリは赤ん坊のときからずーっと一緒なんだぞ！あいつはオレにとっていわば妹のような幼なじみ。いきなりどこの馬の骨ともわからねー奴にヒカリをやれるか！」

ガクッ。私は肩を落とした。期待して損した。そうよね。私たち幼なじみだもんね。それ以上でもそれ以下でもない。バカよね、私。ジュン相手に一瞬でもときめいたなんて……。

「わかったらヒカリから離れろ！」

ジュンは今にもグルルとうなりそう。まるでさっきのルクシオみたい。

「見たところ君はずいぶんせっかちですね。それに賢く見えません。どうせいつも彼女に迷惑をかけてるんじゃないですか？」

「うっ……」

残念だけど大当たり。ジュンは昔から私を助けているつもりだけど迷惑をかけている。私のために本を取ろうとして本棚ごと倒したり、私の絵に余計なものを描き加えたり、伸びてきた髪を切ろうとしたり……数えあげたらキリがない。

「なんだとーっ！」

ジュンがコウキくんを殴ろうとしたら、遠くからしぶい声が聞こえた。

「待ていっ！！」

ガンコで怖そうなおじいさんが私たちに向かって走ってきた。手にはトランクを持っている。どこかで見たことのある顔。茶色いスーツに青のベストを着ている。顔は３０点だけどなんてオシャレな上級テクニック……ってなんで私老人相手に『いい男度チェック』してるの？

「ルクシオに襲われていたみたいだが大丈夫か？」

おじいさんは息を切らしていた。さすがに急な運動は老体に響いたみたい。

「はい」

私はていねいに答えた。

「君たちポケモンを持っておらんようだな？」

「「……」」

ジュンと私は黙り込んだ。返す言葉もない。

「それなのに草むらに入るとは一体どういうことだ！？」

「……」

重苦しい空気が私たちをつつんだ。こういうときは、なんて言えばいいんだろう。ジュンはそわそわしながら、声をひそめて私にささやいた。

「……なあ、ヒカリ。この人って……ナナカマド博士だよな？なんでここにいるんだよ……？」
「私に訊かれても……。」
やっぱり。ジュンも気づいていた。このおじいさんが、ナナカマド博士だということを博士はコウキくんのほうを向いた。
「……彼らはポケモンが欲しくて草むらに入ろうとしたのか…。」
「どうやらそのようです。」
「うむぅ……どうしたものか……。」
博士は腕を組んでなにか考えこんでいる。説教の内容を考えているのかしら。
「ポケモンと出会うことで彼らの世界は変わるだろう。私がそのきっかけを与えてもいいのか？」
えっ？
「ボクは博士からきっかけをもらいました。彼らにもきっかけを与えては？」
博士は真剣な表情で考えている。なかなか謝るタイミングがつかめない。
「君たち、本当にポケモンが好きなんだな？」
私はアキラとヒコザルを思い浮かべた。ヒコザルを連れたアキラがうらやましかった……。

「はい」

迷わず答えた。アキラのようなポケモントレーナーになりたい…！

「オレも！オレもポケモン大好きだぜ！」

ジュンもアキラのこと思い出したのかしら。

「もう一度訊く！君たちは本当にポケモンが好きなんだな？」

同じ問いにジュンはムスッとした。

「なんだってんだよー！１００回訊かれたって同じだぜ。オレもこいつも１００回答えるよ！ポケモンが大好きだって！な、ヒカリ？」

「うん」

一体博士はなにを考えてるの？

「……ポケモンも持たずに草むらに入るという危ないことをした人間がポケモンを持ったらなにをしでかすか心配だがな」

―ギクッ。

「……うぅ。それは…その……」

ジュンは口ごもった。……ごめん、ジュン。フォローできないわ。

「じゃあオレはいいからヒカリにはポケモンをあげてくれよ！」

「ジュン！」

全ての責任を取るつもり?!

「ヒカリはオレを止めたんだ。でもオレが無理やりヒカリを草むらに引っぱって…」
「!?生意気を……」

私はジュンに同意したうえで草むらに入った。私だって同罪よ!けれど私がジュンを弁護する前に、博士の口が開いた。

「なるほど。わかった!ポケモンは君たちに託そう!」
「「!?」」

さっきからなにが起こっているの?!展開速すぎない?

「こちらこそ君たちを試すような真似をして悪かった。」
「よっしゃー!」

ジュンは嬉しそう。単純ね。

「ただし!もう二度と無茶をしないと約束してもらうぞ!」
「はい!」
「おう!」

……ジュンは信用できないな。いつも無茶ばっかりしてるし。

「私たちはポケモンと共に生きておる。人にはそれぞれポケモンと出会うべきときがある。共に歩むべき世界がある。」

歩むべき道…?

「君たちにとって今日がそのとき！ここがその場所なのだ！」

そう言うと博士は持っていたトランクを開けた。書類の他にモンスターボールが2個入っている。

「さあ、ボールを開けて好きなポケモンを選べ！」

「ほんとか！？ナナカマド博士！オレ、嬉しくって嬉しすぎて今すごい変な顔だぜ……」

驚きと困惑と興奮が混ざった顔。目はクロワッサンみたいな形になって笑ってる。……うん。変な顔ね。５８点の顔が４３点に見えるわ。

「みっともないわよ、ジュン」

一応ジュンに注意した。でもジュンに聞こえたのかどうかはわからない。

「おいヒカリ！先に選んでいいぜ！なんたってオレは大人だからな。こんなときよゆうを見せるのさ！」

そんな変な表情をしてどこが大人よ。余裕（よゆう）があるならもう少し落ち着いてよ。博士はウォッホンとせきをした。

「さあ、どのポケモンにするか選びたまえ」

第４話　出会い（後書き）

ロマンチストな頭脳派、コウキくんの登場です！ヒコザルの持ち主はアキラではありませんでした。残念……？

第5話　相棒

目の前にあるのは2つのボール。選ぶのは、私。冷静に振る舞っているつもりだけど私も緊張している。その証拠にボールを取ろうとしている手が震えている。私は左のボールを掴んで中央にある丸いボタンを押した。

―ボムッ。

ボールの開閉スイッチを押して出てきたのは陸亀みたいな緑色のポケモン。黄緑色の体に茶色い甲羅を背負っている。頭から2枚の葉っぱがにょきっと生えている。……なんだかボーっとしてる子。

「ル～」

目が合ったらあいさつされた。おっとりしててかわいい？

「うひょー！なんだよこいつ？変な顔！」

ジュンは黄緑色のポケモンを指さしてケラケラ笑った。……さっきのジュンの顔ほど変じゃないわよ。

「若葉ポケモン、ナエトルだ。草タイプで攻撃と防御が高い。このポケモンにするのか？」

笑うジュンを無視して博士は説明した。んー、悪くはないけど……。

「もう1匹見てから決めます」

「そうか」

生涯(しょうがい)を共にするパートナーなんだからしんちょうに選ばなくっちゃ！私はナエトルが入っていたボールをトランクに置いた。そしてもう1つのボールを開けてみた。

―ボムッ。

「ポッチャ！」

現れたのは丸くて青いズキンをかぶったような水色のペンギン。初対面なのになぜか胸を張っている。……えらそうに見えるのは気のせいよね？

「ペンギンポケモン、ポッチャマだ。水タイプで特殊攻撃が強いぞ。」

「ポォッチャア！」

ポッチャマはファイティングポーズからパンチを繰り出した。……かわいいけど性格に難(なん)あり？

「なんだぁ？……やろうっていうのか？！ホワッチャア！」

ジュンもポッチャマにつられて構えた。両手を挙げて片足だけで立っている姿はお菓子メーカーのグリ●がインチキ拳法をやっているみたい。私はなんとなくコウキくんをちらりと見た。私たちを静かに見守って……ん？コウキくんが見ているのは私だけ？？コウキくんに話しかけようとしたら博士がコホンとせきをついた。

「こいつはいじっぱりで負けず嫌いだ。ナエトルはおとなしくての

んびりやだぞ。」

私は2匹をまじまじと見つめた。よい子とわるい（？）子、どっちを選ぼうかしら？

「おいおい、ちょっと待ってくれよ！ヒコザルはくれねえのかよ？」

そういえばそうだ。ナエトルとポッチャマに気を取られてすっかり忘れてた。

「あいつすばしっこいじゃん？スピーディーなポケモンは好きだぜ！」

たしかにヒコザルはすばやい。攻撃力も高いのが自慢だとアキラが昔言っていた。

「うむ……残念ながらヒコザルはコウキにあげたばかりでな……今手元にはないんだ」

「えー！？」

ジュンは落胆（らくたん）した。私もちょっとショック。憧れのアキラがヒコザルを連れていたからか炎タイプのポケモンに愛着がわく。さむいのはキライだし温かいポケモンは歓迎するわ。

「どうしても欲しいのなら取りよせるが1週間ぐらいかかるぞ。」

「待てねーよ！今ここにいるポケモンから選ぶよ！ヒカリ！さっさと選べよ！」

……せかさないでよ。大人だから余裕があるんじゃなかったの？

私はため息をついた。ヒコザルをもらおうとすればもらうことがで

きる。ただ時間がかかる。取り寄せたとしても手に入るのはおそらく明日以降。ヘタしたら5日はかかるかもしれない。ふとアキラの姿が頭にちらついた。確かにアキラには昔から憧れている。アキラのような強いポケモントレーナーになりたい。ならここはアキラと同じヒコザルを選ぶべき？

「ヒカリ～まだかよ～」

「またあなたは！レディを待つのが紳士の役目です」

「そのしんしの役目っていくつあんだよ！おまえさっきと話し方変わってないか？」

ジュンとコウキくんがなにか言い合ってるけど2人の会話は耳に入らない。それほど私は真剣に考えていた。

……2、3分経ったかしら。30分くらい悩んだ疲労感がする。私は肩の力を抜いた。……結論が出た。私は私。アキラはアキラ。アキラのように強くなりたいけど、アキラの真似をすることが全てじゃない。私には私の道がある。私は手を強くにぎった。

「……この子にします。」

私はポッチャマをそっと抱き上げた。

「ポチャッ！？」

ポッチャマはおどろいて私を見た。けれど目が合ったとたんプイッと顔をそらされてしまった。フフッ。今流行りのツンデレかしら？このポッチャマはいじっぱりだけど、きっと根はわるくないわ。負けずぎらいってところは共感できるし。

「本当にポッチャマでいいのか？」
「はい」
「ポチャポチャァ？」

ポッチャマは博士をにらみながら私の腕の中でジタバタした。「文句あんのかぁ？」とでも言いたげに。

「ヒカリくん……悪いことは言わない。なんならもっと素直な性格のポッチャマを取り寄せ……」

―ベシッ。

「ぶっ」
「ポッチャア！」

ポッチャマは私の腕から抜け出し博士の顔をはたいた。博士の言ったことが気に入らなかったみたい。なんて大胆なの！シンオウ一えらい博士をはたくだなんて…！

「じゃあオレはこいつ……ナエトルにするぜ！！」
「ル～」

ジュンは博士とポッチャマを無視してナエトルが入っていたボールを手に取った。ナエトルの表情は読み取りにくいけどナエトルも喜んでる……はず。

「なるほど！２人ともいい……いいポケモンを選んだようだな。」

ポッチャマは博士をにらんでいる。きっと気に食わないことを言

ったらまたはたくつもりなんだ。博士はほおをさすりながら続けた。

＞ｉ３２１１３―６９９＜

「いいか！君たちに託したポケモンはまだ外の世界を知らない。そういう意味では君たちと似ているかもな。うむ。似た者…似た者…似た者同士？」

博士は複雑な表情をした。確かにナエトルは私に、ジュンにはポッチャマのほうがお似合いかもしれない。でも私、もう決めたんだもん！１００万回訊かれたってこの子にするわ。

「とにかく似た者同士、上手くやってくれい！なにか困ったときはマサゴタウンにある私の研究所に来るといい！では失礼するぞ」

「「ありがとうございました！！」」

私とジュンはぺこりとおじぎをした。顔を上げたら博士はもうすでに私たちに背を向けて歩いていた。右手だけ私たちにヒラヒラと振っている。

「それじゃあまたどこかで、ヒカリさん」

コウキくんは私の手を取った。

「あっ」

気がついたらコウキくんのくちびるが私の手の甲にふれていた。

―キュン？

顔が熱くなった。こ、こここれってキス？くちづけ……？突然すぎて拒むひまもなかった。

「ギャーー！？ヒカリが汚れたー！こらーー！！」

自称私の兄のジュンはコウキくんに飛びかかった。だけどコウキくんはジュンをひらりとかわして走り始めた。ヒコザルもコウキくんにつられて走り出した。

「博士ー！待ってくださーい！」

博士とコウキくんがマサゴタウンに向かうのが見える。私はコウキくんが見えなくなるまでぼーっと眺めていた。なんだか頭がクラクラする。でも気持ちいい。

「なんだよーあのコウキって奴！なれなれしいな。ヒカリの手、あとで湖の水で清めようぜ」

コウキくんかぁ……。短くサッパリした黒髪。穏やかで優しそうな顔。６７点……悪くないかも？

「それにしてもナナカマド博士って優しいな。テレビだとすっごくいかめしくてこわそうな雰囲気だったのに」

ん？なにか言イマシタカ？コウキくんのこと考えてたから聞こえなかったわ。

「そうね」

話を聞いてなかったけど適当にあいづちをうっておいた。コウキ

くんのこと考えていたから聞いてなかったと知ったら怒るだろうし。……さて。ポケモンももらったことだし、私たちはフタバタウンに戻ることにした。ポッチャマとナエトルは私たちの横を歩いている。ふいにジュンは立ち止まった。私に向けたジュンの表情は輝いている。

「へへ！ヒカリ！お互いポケモン持ってるんだ。やることは１つ！だろ？」

「ポチャ？」

「ル～？」

どうしたの？ジュン。もったいぶっちゃって。ポッチャマとナエトルはなぜ私たちが立ち止まったかわからず私たちを見上げている。

「なに？ポケモン交換はしないわよ」

私はボールを持つ手をジュンから遠ざけた。

「そうそう。ポケモンといえば交換だよな～……ってちげーよ！とにかく心の準備はオーケーか？」

ナイスノリツッコミ。だけどジュンがなにを言いたいのかわからない。

「なんの準備よ？」

「ずっと言いたかったこのセリフ……やっと言えるときがきた！」

「え？」

―ドキッ。

また胸の鼓動が一瞬高まった。

ジュ、ジュン……それって……それってもしかして……愛の告白!?

「な、なによ…」

私はみがまえた。なにしろ相手はジュンだ。期待はずれのことを言うかもしれない。……うーん。ダメ。ダメよ、私。ジュンにはもうなにも期待しちゃダメ。ジュンの性格を考えたら告白じゃなくて勝負を申し込む確立が高い。ジュンはいつも私の期待を裏切ってきたんだから。でも……でももしかして!今度こそはいい意味で私の期待を裏切ってくれるかも?!

「ヒカリ!ポケモン勝負だぁっ!!」

……はぁ。やっぱり。

「ハイハイ……おいで、ポッチャマ」

「ポチャ?!」

ポッチャマは呼ばれて一瞬とまどった。けれど結局私の元へテクテク来た。われながら自分に腹がたつ。もう二度とジュンに恋愛関係で期待しないんだから……!

「受けてたとうじゃない、ポケモンバトル」

ボールを持つ手が怒りでふるえた。ボロ負けしても知らないからねっ!ジュン!

第5話　相棒（後書き）

ジュンは読者の期待に応えてくれました！（笑）

第6話　慌ただしい昼

私とジュンは間合いを取るために数歩下がった。これが記念すべき初めてのポケモンバトルになる。……不思議なことに私は冷静だった。今まで何度もしてきたように、対戦相手と向き合った。

「……ポチャ」

ポッチャマはナエトルに向かって「来いよ」と手招きをした。戦う前からやる気満々ね……。

「ル～？」

ナエトルは目をパチパチさせた。ポッチャマの挑発（ちょうはつ）を理解できなかったみたい。

「おし、これくらい距離を取れば十分だろ」

ジュンは鼻から息を出すと腕を組んで得意げに言った。私に勝つ気でいるみたい。

「負けたら５００円な」
「かまわないわ」

バトルが終わったら敗者は勝者に手持ちのお金を１０分の１を渡すのが決まりだ。その決まりのおかげで腕のいいポケモントレーナーは働かなくてもいいくらい。……でも今私お財布持ってないのよね。家を出るとき急いでたし、まさか本当にポケモンもらえるとは思わなかったもん。ま、私がジュン相手に負けるはずないけど♪

ジュンは知らないかもしれないけど私はアキラと出会ってから独学でポケモンを勉強した。だからポケモンの知識には自信がある。私はポッチャマが入っていたボールを見た。後ろ側にシールが貼ってある。シールにはポッチャマの簡単なデータと使える技が書いてあった。

『ポッチャマ　Ｌｖ．５

ペンギンポケモン
高さ０．４ｍ
重さ５．２ｋｇ

覚えている技
・はたく
・なきごえ』

……やっぱり最初は使える技が少ないなぁ。おっと！ジュンにもシールのこと教えてあげなきゃ。

「ボールにポケモンが覚えている技が書いてあるシールがついてるわよ」
「おっ。サンキューな、ヒカリ！」

さっそくジュンはボールをまじまじと見つめた。……まさか覚えている技も知らずにポケモンに戦わせるつもりだったの？ジュンはシールを拝見したあと財布からお金を取り出した。

「この５００円玉が落ちたら勝負開始な」
「うん」

ジュンは５００円玉を親指ではじいた。

―ピーン。

キレイな音が広場に響く。

１。お金が宙に浮く。２。お金が降下しはじめた。３。お金がジュンの手を通りすぎた。４。お金が太ももまで落ちてきた。５。お金は地面に落ちた。

―チャリーン。

私たちのポケモンバトルは静かに始まった。まずは小手調(こてしら)べ……！

「ポッチャマ、『鳴き声』！」

「ポチャア♪」

ポッチャマは普段のツンツンぶりからは想像できないくらいかわいく鳴いた。『鳴き声』はかわいい声で相手の同情を買い、攻撃力を下げる技。少しは効果があるといいけど。

「ナエトル、『からにこもれ』！」

―キュポンッ。

ナエトルは頭と手足を引っ込めたけど少し遅かった。ポッチャマの『鳴き声』で攻撃力は下がったはずよ。

「やるじゃない」

私はジュンをほめた。こっちがこうきたらそっちはそうきた。殻に籠もったポケモンは防御力が上がる。しょっぱなからお互い防御に専念したわけね。ジュンのことだからなんの考えもなしに突っ込んでくるかと思ったらそうでもないみたい。少しは考えてるのね。

「ポッチャマ、『はたく』のよ！」

「チャッ！」

―バシッ。

ポッチャマは様子を伺うために頭を出したナエトルを容赦なくはたいた。

「ル～～」

ナエトルは悲しそうな声で鳴いた。うっ……ちょっとかわいそう。

「なんだってんだよー！いいのくれるじゃないか！ナエトル、『体当たり』！」

ナエトルは『からにこもる』のをやめて攻撃してきた。

―ガッ。

「ポッ！？」

ポッチャマはおなかに体当たりを喰らった。

「ポッチャマ！」

ポッチャマは苦しそうにせきこんだ。私のさっきまで感じていた後ろめたさは消えた。ナエトルにはわるいけど勝たせてもらうわ！

「相手の手足を『はたいて』！」

「ポーッチャアッ！！」

―バシッ。

「ルッ！？」

ナエトルはバランスを失ってひっくり返った。甲羅を裏返されたのでジタバタしている。

「しまった！『からにこもれ』！」

「そのまま『はたく』のよ、ポッチャマ！」

―バシッ。バシッ。バシッ。

ポッチャマの猛攻撃は続く。ナエトルは防御せざるをえない。

「くっそ～。『からにこもる』『からにこもる』『からにこもる』～！」

ジュンの命令は一見ヤケクソに聞こえるけどそうでもない。ナエトルは防御に徹しているせいでポッチャマの攻撃は最初の攻撃ほど効いていない。このままナエトルがひっくり返らない程度に『はたいて』体力を減らせば私の勝ち。だけどポッチャマも与えるダメージが少なくなっているのに気づいてイライラし始めた。

「ポ～ッチャー！」
「ダメっ！ポッチャマ！」

―バッシーン！

止めるのが遅かった。我慢できなくなったポッチャマはナエトルを思いっきり叩いた。その反動でひっくりかえしたナエトルの体制が直ってしまった。

「ル～」

ナエトルは４本の足で大地を再び踏みしめると、頭を左右にふった。

「まだまだ！まだ戦える！ここからが本番だぜ！！」
「くっ…」

ナエトルとポッチャマは距離を取って再び向きあった。のんびりやのナエトルもやる気になったのかけわしい顔をしている。今にも２匹の間に火花が飛び散りそう。

「『はたいて』！」
「『体当たり』！」

―ダッ。

２匹はすれ違いざまに攻撃しあった。でも明らかにポッチャマの受けるダメージのほうが大きい。だからといって今さら『鳴き声』を使って防御にまわる余裕はない。攻めて攻めて攻めまくるわ！

2匹の攻撃は続く。『はたく』。『体当たり』。『はたく』。『体当たり』。ずっとその繰り返し。

「さっきから同じ技ばっかじゃねーか」

「そっちこそ」

ポッチャマもナエトルもだいぶ息があがっている。そろそろ限界だ。

「これで最後だぁ！体当たり！」

ナエトルはポッチャマに向かってダッシュした。そうは簡単にやられないわよ！

「ポッチャマ、よけて！」

「今さらよけられるかよ！」

ナエトルが走ってくるのにポッチャマはよけようとしなかった。それどころかその場に踏みとどまって構えを取った。ナエトルにぶつかる……！そう思ったときポッチャマは近づいてきたナエトルの頭に手を当てジャンプした。

「なにぃ！？」

半円を描きながら宙に浮かぶポッチャマ。その動きは跳び箱を跳ぶより軽やかでキレイだった。……はっ！？今よ！

「そのまま『はたく』のよ！」

「チャーッ！」

―バシーンッ!!

会心の一撃だった。落下スピードも加わった攻撃でナエトルは声も出さずに倒れた。ジュンはあわててナエトルに駆けよった。ナエトルを色んな角度から見ているけど、どう見たってナエトルは戦闘不能だ。

「なんだってんだよー!オレ負けちまったのかよ!」

「まあね。おつかれさま、ポッチャマ」

ジュンと私は同時にポケモンをボールに戻した。危なかった。ギリギリで勝ったけどポッチャマもヘトヘト。私の初陣(ういじん)は勝利で終わった。

「ふー。家に帰ろうぜ。今の勝負で疲れたポケモンを休ませないとな」

「そうね」

「バイバイ!ヒカリ」

そう言ってジュンは先に帰ってしまった。私はジュンの残した500円玉を拾ったあと帰路についた。

＊＊＊

「……で、なあに?」

ママは台所でパスタをゆでている。お湯が規則正しくグツグツ音を立てていた。もうすぐお昼の時間だ。家にはいつものように私とママしかいない。……なんて平和な時間。さっきまでのゴタゴタが嘘みたい。

「ママ、実はね……」

私は固く結んでいたくちびるをほどいた。

＞ｉ９２５２―６９９＜

私はこの数時間で起きた出来事をママに話した。草むらを走ったら野性のルクシオに襲われたこと。コウキくんに助けてもらったこと。博士からポッチャマをもらったこと。ジュンとポケモンバトルをしたこと……こうして話してみると、ここ数時間で色んなことがおきたことに気づいた。ママは私の話を静かに聞いてくれた。時折驚いた顔で私を見たけど、落ち着いてパスタをお湯から取り出した。今はパスタをクリームソースと混ぜている。

「そんなことがあったんだ。あなたもジュンくんもナナカマド博士に会えて良かったね」

ママはテーブルに出来たてのパスタを3つ置いた。ダイニングルームに濃厚なクリームの匂いがただよう。

「うん…」

私はうつむいたまま答えた。話の途中で「すわったら?」とママに勧められたので今はイスに腰かけている。ママと目を合わせられない。パスタを食べる気にもならない。ママはエプロンをはずして私の向かいの席にすわった。

「でももしコウキくんが来なかったら2人とも草むらでポケモンに……」

体がビクッとした。私はママの言いつけを守らなかった。私はわるい子だ。

「ごめんなさい…」

目が必要以上にうるおった。……涙が出そう。

「ポッチャマだっけ？ヒカリのもらったポケモン……見せてくれる？」

「……」

私はだまってママの要望に答えた。ずっと手に持っていたモンスターボールのスイッチを押した。

ボムッ。

ボールが開いて光ったあと、私のプライドの高い小さな王子さまが出てきた。

「ポッッチャ！」

ポッチャマは両手と片足をあげてかまえた。……なんでジュンのマネしてるんだろう。

「まあ！かわいらしいポケモンね？」

「ポチャ？」

ポッチャマはかまえるのをやめた。ママに戦意がないと感じたのね。ジュンはバリバリ戦意があったけど。ママはポッチャマをしば

らくながめると、落ち着いた声で私に言った。

「ヒカリ、ポケモンをもらったのならきちんとお礼をしてきなさい」

え？

「ナナカマド博士の研究所はマサゴタウンにあるんでしょ？」

「う、うん……」

「それにポケモンと一緒なら草むらだって平気じゃない！」

顔を少しだけ上げてママを見た。怒ってない……？それどころかママはニコニコしている。

「……怒らないの？」

「どうして？男の子に守ってやるなんて言われたら普通ときめいちゃうじゃない！ジュンくんも言うようになったわね～？」

ママは笑いながらパスタを食べ続けている。

「それに…コウキくんだっけ？素敵な男の子に助けられて博士からポケモンまでもらっちゃうなんてラッキーじゃない♪」

「ママ……！」

私は涙ぐんだ目をゴシゴシ拭いた。なんて心が広くて優しいんだろう。私、ママの娘で良かった。

「パスタが冷めちゃうわよ。ヒカリも早く食べなさい。ポッチャマのぶんも用意してあるわよ」

「…うん！」

安心したら急にお腹が空いてきた。ポッチャマを抱いて洗面台に連れて行った。私が手を洗ってお手本を見せると、ポッチャマはそれをマネした。手を洗い終わると私はポッチャマをテーブルの上に置いて席についた。

「フォークで食べる？手で食べてもかまわないけど、食べ終わったら手を洗ってね」

ポッチャマに説明したあと私は右手にフォークを取った。

「それじゃあいっただきまーす♪」

＊＊＊

一足先にパスタを食べ終わったママは、リビングで箱を抱えて待っていた。おなかいっぱいになったポッチャマはソファーの上で眠っている。

「ヒカリ。ママからもプレゼントをあげるわ。開けてみて」

私はしんちょうに包み紙を取って箱を開けた。中には私好みのピンク色のブーツが入っていた。ブーツなんて初めて見た。かわいい…！

「これを履いて行かない？かわいいでしょv」

「これは？」

私はブーツを手に取ってみた。私のひざまでカバーする高さだ。

「ランニングブーツ。マサゴタウンに行くのだって冒険みたいなも

のでしょ。これを履いていけば遠くだってあっという間！」

ブーツで走る？私はまじまじとブーツを見た。両脇に白い丸型のプラスチックの飾りがついているピンクのブーツ。ヒールはついてないから走るのに支障はなさそう。でもブーツを履いたからって足が速くなるとは思えない。

「これを履けば足が早くなるの？」

「両脇についている白いボタンを押せば加速するのよ！ハイテクね～。これでノロマなヒカリでも早く走れるわ」

もう！お母さんまで！

「どうせかけっこではいつもビリよ」

「ふふっ。冗談よ。気をつけてね」

私もママに釣られてふっと笑った。

「いつもありがと、ママ」

私はママに抱きついた。

＊＊＊

「おそーい！ヒカリ！待ちくたびれたぞ！」

博士に会いにいこうと２０１番道路に出たら、ジュンが私を待ち構えていた。

「私たち待ち合わせしたっけ？」

「してないけどさ……。オレさ、これからナナカマド博士にお礼をしに行くのさ」
「私もよ」
私は手に持ったバスケットをかかげた。
「そのためにママと一緒にカップケーキを作ったんだから！」
「だからおそかったのか」
ジュンは頭をボリボリかいた。男の子にはお菓子作りの楽しさなんてわからないわ。ジュンは食べるのが専門だし。
「でもさ、オレのお礼のほうがもっとすごいぞ！いいこと思いついたからオレの話聞けよな」
「うん」
ジュンはどうせ言い出したら聞かないわ。今度はなにを言い出すのかしら？
「いいか！オレたちがいつも遊んでる湖あるだろ」
「シンジ湖ね」
マサゴタウンとは逆の道に行けばそこにはシンジ湖という美しい湖がある。シンジ湖への道には草むらがない。だからあそこは昔からみんなの遊び場だった。
「あそこには伝説ポケモンが眠っているっていうだろ？」
「一応そう伝えられているけど」
……あきれた。私、ジュンがなにを言おうとしてるかわかっちゃ

った。

「そう！オレたちでそのポケモンつかまえようぜ」

はぁ……やっぱり。そう来マシタカ。

「そうすりゃナナカマド博士も大喜びだろ！」

「つかまえられたら、ね」

ジュンは一人で勝手に盛り上がっている。

「ついでにコウキによって汚れたお前の手も清めよう！おまえとオレがいればこわいものなし！行こうぜ！」

「はいはい…」

失礼ね。私の手は汚れてないわよ。コウキくんにキスしてもらったから、むしろ洗いたくなかったくらい？……パスタ食べるために仕方なく洗ったけど。まあ、コウキくんのことは置いといて……。

野生のポケモンを捕まえるには空のモンスターボールが必要。ワカバタウンにはポケモン関連の道具なんて売ってないからマサゴタウンに行かなきゃ。伝説のポケモンをそう簡単につかまえられるとは思わない。ここは適当にジュンに付き合って、飽きるまで待とう。ボールを買えるだけ買えば運よくつかまえられるかもしれないし。ボールを買おうとマサゴタウン方面を歩き出したら案の定ジュンに腕を引っぱられた。

「おいっ、ヒカリ。湖はそっちじゃないって！反対方向だぞ」

「えっ？」

もうモンスターボール持ってるの？

「早く早く！伝説のポケモンもいつまでもオレたちを待ってくれないぞ！！」

私はジュンに無理やりUターンさせられた。

「でもジュン！モンス……」

「ほら、行くぞ！」

ジュンは私の背中を押しながら歩き始めた。私の話など聞いていない。仕方なく私はジュンに言われるがまま、シンジ湖に向かった。

第6話　慌ただしい昼（後書き）

原作通りの展開です。

第7話　思い出の湖（前書き）

重要なイベント発生！

第7話　思い出の湖

「あの湖にはきっと伝説のポケモンがいる！」

ジュンは息巻いていた。私たちは今シンジ湖に向かっている。でも私たち2人が湖に行く理由は異なっていた。ジュンは博士のために伝説のポケモンを捕まえるため。私はジュンに付き合わされてしかたなく……ね。

「みんな『ただの伝説だよ』って言ってるけどオレにはわかるのさ」

確かに私とジュンが襲われたとき、コウキくんと博士は湖のほうからやってきた。研究者が調べにくるくらいだから、伝説のポケモンも案外いたりして。

「そうね。伝説のポケモンにちなんだ恋のおまじないもあるし」

でもシンジ湖に住むと言われている幻のポケモンに関する情報は少ない。湖の看板にも本にも詳しく書かれていない。私たち地元民の間でかろうじて伝えられているのはおまじないだけ。覚えている記憶を頼りに私はおまじないの伝承（でんしょう）を口にした。

「ほら。『真夜中の12時。湖のほとりにて、桃色の花の冠と指輪を身に付けた男女。口づけを交わしたのならば、精霊の加護のもと二人は永遠に喜びと悲しみを共有する』ってやつ」

どこにでもあるただのおまじない。小さいころ幼稚園の先生が教えてくれた。ママも昔パパとやったことがあるって言ってた。

「なつかしいよな～。5歳のときやったっけ」
「そうそう……はっ!?」

体の血の気がひいた。……ヤダ。思い出しちゃった。私ジュンとファーストキスしたんだ!!よりによってこんなバカと!急に体が熱くなった。さっき体が冷えたばっかりなのに。汗がドンドン出てくる。たぶん今の私、顔真っ赤。

「おい!ヒカリ!どうしたんだ!?顔赤いぞ!熱でもあるのか?」

ジュンの声が遠ざかる。やっぱり……今の私……顔まっかっか……。

＊＊＊

「ヒカリ!おおきくなったらケッコンしようぜ!」
「やだ」

私はつないでいた手をはなした。幼稚園からの帰り道。2人で歩いていたらジュンがいきなりプロポーズをしてきた。

「なんだってんだよー!ケッコンしようぜ。オレ、ヒカリのことだいすきだぞ!」
「やだ。だってジュンとケッコンしたらジュンのめんどうず～っとみなきゃいけないんだもん。そんなのやだ」

立ち止まったジュンを気にせず歩き続けた。ジュンはあわてて私についてくる。もやもやした気持ちがして足元の石を蹴ってみた。石はまえに転がったけど、私の気持ちはちっとも晴れなかった。

「そんなことねーよ。らくさせてやるぜ？」

ジュンに腕をつかまれた。

「いいからケッコンしろっていったらしろー！」

「やーだー！」

＊＊＊

……う～ん。やだ……私ジュンと結婚したくない……ん？なんかおでこがひんやりしてきた。気持ち良い……。

「ポチャ？」

私はゆっくり目を開けた。はっきり見えないけど青くて丸っこいものがいる。

「ポッ……チャ……マ……？」

「ポチャー！？」

ポッチャマが飛び上がった。目が点になってあたふたしている。びっくりしたのはこっちよ！一発で目が覚めたじゃない！

「お！ヒカリ！気がついたのか？」

ジュンの声が聞こえた。私は周りを見渡した。風が涼しくて心地良い。緑があちこちに生い茂っている。うしろを向いたらジュンと湖が見えた。ナエトルは湖に漬かっている。ここってシンジ湖？

「急に倒れたからおどろいたぜ。フタバタウンよりシンジ湖のほう

が近かったからここまで運んだんだ」

そっか。私、気絶しちゃったんだ。私は地面にあったハンカチを拾った。水で濡れている。きっと私のおでこに置いてあったのね。さっき起き上がったとき落としたみたい。

「ポッチャマのやつ、おまえが気絶したらボールから出てきたんだぜ？湖に着いたあともずっとおまえの看病して……」

―ガッ。

ジュンはポッチャマにすねを蹴られた。

「いってー！」
「ポチャッ」

ポッチャマはぷいっと私からもジュンからもそっぽを向いた。

「ポッ、ポポチャ、ポチャチャチャチャ、ポチャ、ポッッチャマ！」

え？ま、まさか……『べ、べつにあんたのためにやったんじゃないからね！』って言ってるの！？

「なんだってんだよー！」
「ポチャチャー！」

ポッチャマは腕をパタパタさせながらジュンにつっかかった。…
…ツンデレよ。このポッチャマ、完全にツンデレよーーー！

「わかったよ。わりいって」

「チャマ！」

２人……じゃなくて１人と１匹の話はついたみたい。ナエトルはあいかわらず水辺で涼んでいる。

「まあ、飲めよ」

コップを渡された。きっと湖の水だ。湖の水はとてもキレイで飲みやすいもの。そのまま飲めるくらい。おかげでフタバタウンは天然水の生産地として成り立っている。水を飲んだら生き返った気がした。この湖の水を飲むといつも元気が出る。伝説のポケモンが棲んでいるからかしら。

はぁ。それにしても……ああ、はずかしい。今はっきり思い出した。昔ジュンにプロポーズされた日にケンカしたんだ。あのときムカついて１週間ぐらいジュンを無視したっけ。しばらく遊ばなかったけどつまらなくなって仲直りの証に例のおまじないやったんだ。ママたちに内緒で。

＞ｉ３２２９９―６９９＜

眠い目をこすって１１時に懐中電灯を持ってこっそり家を出た。湖に着いたあと桃色のお花を取ってかんむりを編んだ。ジュンも不器用なのに私のためにがんばってお花の指輪を編んでくれた。ただくちびるを押しつけあうだけのキスをした直後にママたちが駆けつけてきた。結局ママとジュンママとジュンパパにバレたけど、怒られるどころか祝福されちゃった。今考えてみるとよく仲直りのためにあんな無茶したわね。幼稚園児で夜更かしだなんて。あのときは我ながらがんばったなぁ……なんで思い出しちゃったんだろう。はずかしい……。

「おまえチャンピオンって知ってる？」
「え？」

ジュンがいきなり話しかけてきた。ポッチャマはナエトルと水遊びをしている。

「そう呼ばれるすっごく強いポケモントレーナーがいるんだ！オレもいつかチャンピオンと戦えるぐらい強くなる！こいつと一緒なら絶対に強くなれるぜ！」

ジュンはナエトルを指さした。肝心のナエトルはポッチャマに水を浴びせられまくっていた。雪合戦とかしたら確実に負けそう。

「チャンピオン……」
「そうだよ！そんでもって親父とポケモン勝負で勝つ！」

チャンピオン……本で読んだことある。アキラも言ってた。……そうよ。私、チャンピオンにならなきゃ。

『女はチャンピオンになれねーよ』

昔誰かに言われた気がする。あのときとてもくやしかった。そう言ったのは、誰だっけ？

「じゃあ私たちライバルだね」

いやな思い出をかき消すように笑った。今日は色んなことをよく思い出す日ね。

「なんだよ！おまえもチャンピオン目指してるのか？負けないぞ！」
「私もよ」

２人で笑った。ポッチャマを見たらナエトルの上に乗っていた。
あんなのんびりしてるパートナーで私に勝てるかしら？ジュン。

―ピカッ。

「「！？」」

湖の真ん中にある小島が突然光った。私はとっさに腕で顔をおおった。……目をつぶるのが遅かった。まぶしくてなにも見えない……！

―きゃううーん！

ポケモンの鳴き声がした。心に直接響くような綺麗な鳴き声。

楽しい。

憎い。

愛しい。

悲しい。

嬉しいけど切ない……！

色んな感情がわきあがってくる。そんな声だった。

「うっ」

光はすぐに消えた。目がチカチカする。

「今の聞こえたかヒカリ！」

「うん」

「絶対伝説ポケモンの鳴き声だよ！やっぱりいるんだよ！」

だいぶ目が慣れてきた。ポッチャマはナエトルから落ちていた。

2匹とも小島に釘付けだ。

「よーしっ　つかまえよーぜ！……！……って　あれーっ！？」

ジュンはバッグの中をあさった。

「ない……ない……ない！」

やっと私が買おうとしたものがないってことに気づいたみたい。

「オレたち1個も持ってないじゃん！モンスターボール！！あれがないとさ、伝説のポケモンもつかまえられないじゃん！」

あ～あ。やっぱりモンスターボール買ってなかったんだ。

「だから私マサゴタウンに行こうとしたのよ。モンスターボールを買いに。なのにジュンったら私をひっぱって……」

「うーん……ナナカマド博士に訊けばもらえるかなー！？」

って話聞いてないし！

「ほら、博士も言ってただろ？なにか困ったときは研究所に来るといいって！」

「でもポケモンもらったばかりなのにボールまでくれって失礼じゃ……」

「よーしッ！ヒカリ！博士のいるマサゴタウンまでどっちが先に着くかしょーぶ！！」

ジュンはナエトルをボールに戻すと走っていってしまった。……と、思ったらバックしながら戻ってきた。

「消毒忘れたーーー！」

「は？」

消毒？ジュンったら消毒液持ってたの？インフルエンザ対策に。

「ヒカリ！こっちこい！」

「なによ？」

湖まで無理やりひっぱられた。今日はジュンに腕をひっぱられっぱなしだ。そのうち私の腕外れたりないよね?ジュンの腕の力が強くなったから心配。

「ふう。危うくヒカリの手を消毒し忘れるところだったぜ!」

ああ、そのことね!コウキくんにキスされちゃったのよねー?…って消毒?よけいなお世話よ!

「コウキくんはバイ菌じゃないのよ!失礼じゃない」
「あいつのバカがうつるかもしれないんだぞ!」

うつらないわよ。そもそもコウキくんバカじゃないし。仮にコウキくんがおばかウイルスを持っていたとしても私にうつるはずないじゃない。ジュンと長い間一緒にいてもバカにならなかったのが証拠よ。きっと私、ジュンと一緒にいるうちにおばかウイルスに対して免疫ができたのね。

「アブラカタブラ~♪伝説のポケモンよ~」

ジュンは腕をくねくねさせてうさんくさい呪文を唱え始めた。…
…やめてよ。はずかしいじゃない。

「コウキによって~汚れたヒカリの手を~清めてくれたまえ~♪」

スミマセーン。誰かジュンの中にあるおばかウイルスを撤去してくれマセンカー?ジュンはくねくねダンスを終えるとコウキくんにキスされた私の手に湖の水をかけた。

「よし！これでカンペキだな。じゃあ先に行くぜ！」

ジュンはあっというまにいなくなった。今度こそ本当に私とポッチャマは湖に取り残されてしまった。

第8話　安らぎ

ジュンがいなくなると湖は静まり返った。ポッチャマは気を取り直して湖で泳いでいた。涼しくて綺麗で落ち着く場所。これが本来の湖の姿。でもさっきまでジュンがいたから静かすぎて逆に変。さっきの謎の光も気になる。それ以外にも落ち着かない理由があるんだけど……。

「ポッチャマ」

話し相手がほしくてポッチャマに話しかけた。と、言ってもポッチャマは人間の言葉なんて話せないからどっちかっていうと聞き手になるけど。

「ポチャ？」

ポッチャマは泳ぐのをやめた。泳ぐのを邪魔されたのを怒っている様子はない。ジュンがいなくなったから機嫌が良いのかしら？

「私ね、実は水ポケモンより炎ポケモンが好きなの」
「ポチャッ！？」

ポッチャマはまばたきした。うっ。ショック受けてる。ごめんね……。

「本当はヒコザルがほしかったの」
「ポチャチャー？！」

ポッチャマは右手を胸にあてた。ボクのどこが悪いんだよ、と言

っているのかもしれない。

「ポチャ！ポチャ！ポチャーー！」

言いかたがわるかったのかしら。ポッチャマは見るからにご機嫌ナナメだ。

「私……水が怖いの」

「ポチャ？」

ポッチャマは騒ぐのをやめた。そうなの。私、水恐怖症なんだ。日常に使う程度の水なら平気。顔も洗えるし、お風呂だって入れる。ただ湖のような水がたくさんある場所が苦手だ。足が浸かるくらいなら平気。でも腰までつかるのはイヤ。私の肩より深い量の水は勘弁してほしい。湖はキレイで空気がおいしいけどやはりどこか落ち着かない。

「泳げないから水が怖いんじゃなくて、水が怖いから泳げないの」

「……」

ポッチャマはだまって私を見てる。怒ってはいない……はず。

「別に水ポケモンがキライなわけじゃないのよ？ただ水がたくさんある場所が苦手なだけ。海なんて見たくもない。だって、海の中は暗くて冷たいイメージがあるもの」

深海なら実際にそうかもしれない。深海どころか浜辺にも行ったことないからわからないけど。私が知っている世界はワカバタウンとシンジ湖だけ。

「だから水は苦手。明るくて、暖かい炎ポケモンが好きなの」
「ポチャ～」

ポッチャマはぺたんと座り込んだ。落ち込ませちゃったかな。

「でもペンギンは好きよ」
「ポチャッ！」

ポッチャマはむくっと起き上がった。わかりにくいようでわかりやすい子ね。

「あこがれの人がいてね、昔ペンギンのぬいぐるみをくれたの」

＊＊＊

アキラがワカバタウンを去って1ヵ月。アキラが来る以前の平凡な日々が続いて私は退屈していた。なにもする気になれない。今日はリビングでゴロゴロしていた。

「イ～モ～む～し～ゴ～ロゴロ♪」

私は体を回転させた。文字通り寝転がっている。ママは台所でおやつを作りながら話しかけてきた。

「こらこら～。ヒカリ。芋虫ごっこしてないで外で遊んだら～？」
「おそとであそんだらアキラのおてがみうけとれないも～ん」
「ちゃんと私が受け取るから」
「じぶんでうけとりたいの～」

私はほっぺたをふくらませた。好きな人からの手紙は自分の手で

配達員から受け取って自分の手で開けたかった。

―ピーンポーン。

私はガバッと起きた。この1ヶ月間呼鈴が鳴ったら体が即座に反応するようになってしまった。私は玄関へ走った。今度こそ郵便配達のお兄さんがアキラの手紙を持ってきてくれますように……！

「ヒカリ～。揚げ物作ってるからかわりに出てくれる～？」

ママの言葉が終わるころには私はドアのまえにいた。ドキドキしながらドアをゆっくり開けた。青いスーツに青いキャスカット風の帽子。私のほしいものを持ってきてくれたかどうかはわからないけど、とりあえず郵便配達のお兄さんは来てくれた。

「こんにちはー。ヒカリちゃん」

「アキラのおてがみある～？」

私はせがむようにお兄さんのズボンをつかんでひっぱった。アキラが去ってからというものほぼ毎日お兄さんと顔を合わせている。

「おてがみはないなー」

「えー！？」

私はヘナヘナと座り込んだ。毎日毎日同じようなやりとりをくりかえしている。ガッカリするのはなれたけど、今回ばかりは泣きたくなった。

「でもお手紙よりいいものを預かってきたよー」

私はお兄さんのズボンから手を放した。どんなにステキなプレゼントでもアキラからもらったものじゃないと意味がない。私は期待せずにお兄さんから箱を受け取った。

「うわっ！？」

足元がふらついた。箱は思っていたより重かった。苦労して床に降ろすと差出人の名前が目に入った。

『宛先：ヒカリ・ハナゾノ
差出人：アキラ・クロサキ』

「アキラからだ！」

私は両手をあげてバンザイした。アキラは手紙よりもずっといいものを送ってくれた。でもそれ以上にアキラが私のことを覚えていてくれたことがうれしかった。

「お兄さんありがとう！」

「ハハハ。よかったねー。それじゃあお母さんによろしくー」

郵便配達のお兄さんは帽子を片手であげると次の配達先へ向かった。私はドアを閉めた。半ばひきずるようなかたちで箱をリビングに持っていくとラッピングを乱暴にはがした。いつもなら丁寧にはがして一枚一枚とっておくけど私は急いでいた。

「あらあら、そんなに興奮しちゃって……。やっとアキラくんからなにか届いたの？」

「うん！」

わき目もふらず私はラッピングを破り続けた。早く中身が見たくてしかたなかった。めんどうなラッピングを全部はがして箱を開けてみると、中にはペンギンのぬいぐるみと本が入っていた。空色の便箋がぬいぐるみに持たせるように置いてあった。

「あら。手紙？読んであげよっか？」

ママが手をのばすまえに手紙を取った。でも漢字も使われているから上手く読めない。

「……よんで」
「はいはい」

くやしかったけどママに手紙をわたした。次からはアキラの手紙を自分で読めるように漢字を勉強しようと決めた。まだ小学校にも入っていなかったけど。

『ヒカリへ

元気にしてるか？オレは順調だ。ヒコザルは進化してますます強くなった。今ヨスガシティにいる。とてもオシャレな町だ。かわいいぬいぐるみが売っていたからヒカリのために買ってみた。オレには似合わないからな。

道具を整理していたら昔使っていた教科書が見つかった。オレはもういらないからヒカリにやる。それでポケモンの勉強をしてくれ。ジョウト地方のやつだが基本は同じだ。ポケモンの知識はいつか旅に出るとき必ず役に立つ。

次はいつ会えるかわからない。ぬいぐるみによってヒカリが寂し

くならないことを祈る。またな。

アキラ』

ぬいぐるみと手紙をもらったときとっても嬉しかった。ペンギンを知らなかった私はわくわくしながら動物図鑑で調べた。私と違って泳げるペンギン。海もシャチも恐れずに泳ぐペンギン。勇敢に泳ぐペンギンの姿をテレビで観てからペンギンは私の一番好きな動物になった。アキラからもらったあのペンギンのぬいぐるみはまだベッドの上にある。今朝はついジュンに投げつけちゃったけど、とっても大切なぬいぐるみ。

＞ｉ３２３００―６９９＜

＊＊＊

「アキラっていう男の子なんだけど、ヒコザルを持っていたの。とてもかっこいい人。私の好きな炎ポケモンを持ってたからあこがれてて……私もヒコザルを選びたかったの」

「……」

ポッチャマはうつむいている。キズつけちゃったかしら？

「でもそれじゃダメだと思ったの」

ポッチャマは頭を上げた。

「アキラのように強くなりたいけど、アキラのマネなんかしたくない」

私は私だ。私には私の道がある。

「それで、ペンギンのぬいぐるみのことを思い出してあなたにしたの。アキラと戦えるように……ヒコザルに対抗するために、水ポケモンのあなたを」

私はポッチャマの前でかがんだ。

「水は怖いけど……逃げてばっかりじゃ駄目だから。いつか水に対する恐怖を乗り越えてみせるわ。でも……もし私がおぼれたら、……そのときは助けてくれる？」

私は両手を差し伸べた。ポッチャマは下を向いているので表情が読み取れない。

「ポ、ポ、…ポッチャー！」

「キャッ！？」

ポッチャマは私の腕の中に思いっきり飛び込んできた。ポッチャマの悪気のない『体当たり』に私は倒された。みぞおちに当たったので息がつまって苦しい。こ、これは予想外ね…！顔を覗き込むとポッチャマの目がうるうるしているのが見えた。

「ポチャ！ポチャポチャー！ポッッチャッマ！」

感激してるみたいだけどなに言ってるかわからないよ、ポッチャマ。

「ありがとう、ポッチャマ」

私はそっとポッチャマの頭をなでた。

「ポチャポチャ～」

ポッチャマは目をふいているあいだも片手は私の服をつかんでいた。ううう…どうしよう。ワンピースがポッチャマの涙と鼻水でますます汚れちゃった。帰って着替えようかしら。

「ポチャ、ポチャ……」

しばらくポッチャマと抱き合っていたらようやく泣き止んできた。

「ポッチャマ、そろそろ離れてもいい？」

私はポッチャマと目を合わせた。

「ポチャーーッ！」

ポッチャマは急に叫んだかと思ったら私をつきとばした。

「キャッ！」

私はまた地面に倒れこんだ。もう。なんなのよ？

「ポッ、ポポチャ、ポチャチャチャチャ、ポチャ、ポッッチャマ！」

ま、まさか……『べ、べつにあんたのこと認めた訳じゃないからね！』って言ってるの！？……なんていじっぱり！

「はいはい。わかったわよ。私に同情しただけね。でもありがと。これからもよろしくね」

しゃがんだままポッチャマに握手を求めたけどそっぽを向かれた。ある意味ジュンより扱いにくい。

「汚れた服で博士に会いに行ったら失礼だから、いったん家に戻ろっか」

「ポチャッ！？」

立ち上がろうとしたらポッチャマに手を握られた。顔はそむけたままだったけど……もしかして服を汚したことに責任を感じたのかしら？

私はポッチャマの手を握り返したけれど、ポッチャマはすぐ手を引っ込めてしまった。ぎこちない握手。まだ私たちの間にはまだ距離があるけど、いつか離れ離れになれないくらいにちぢめてみせるわ！ひとしきり笑ったあと私は立ち上がった。

「それじゃあ、行きましょっか」

着替え終わったらマサゴタウンに行って、博士にお礼を言わなきゃ！

第8話　安らぎ（後書き）

今回の話は盛り上がりに欠けますね。でもたまにはこういう話も必要かもしれません。

第9話　託される思い

＞i27549—6996＜

デニムのワンピースに着替えて私とポッチャマは再びマサゴタウンを目指した。せっかくブーツも履いてるからそれに合わせてピンク色のスカーフを首にまいた。髪型はポニーテールに。だってまたコウキくんに会うかもしれないもん。少しはオシャレしなくちゃ♪

歩いてみて思ったけどマサゴタウンは意外とフタバタウンからそんなに離れてなかった。ただ途中でビーバーとハトのポケモンと戦ったから1時間くらいかかっちゃった。

そのかわりポッチャマは新しい技を覚えた。水タイプの攻撃技、『泡』…属性のついた技だから場合によってバトルを有利に進められる。水タイプの技だから炎タイプと岩タイプのポケモンに効果テキメン！疲れたポッチャマをボールに戻し、マサゴタウンにたどりついた。

「あっ！待っていましたよ、ヒカリさん」
「コウキくん？」

マサゴタウンに入るなりコウキくんに出迎えられた。私が来るまでずっと待っててくれたんだ……。こんなことならもっと早くくればよかった。

「着替えたのですね！さっきとはまた違った魅力が出ています。」
「ありがとう、コウキくん」

わぁ♪違いに気づいてくれた？

「くつもブーツに履き替えていますしオシャレです。ピンクがとても似合います。それにそのポニーテール……活動的なあなたも素敵です？」

―キューーーン？

胸がしめつけられた。きついけど痛くはない。キャー！ほめられちゃった！コウキくんは優しいまなざしで私を見ている。そんなに見つめないで……赤い実がはじけちゃう……！

「こっちに来てください。博士が待っています」

コウキくんは優しく私の手を取った。ジュンとは大違いね。

「こちらが研究所です。中で……」

―どんっ！

「きゃっ！」

「うわっ！」

いたたた……誰よ！？

「なんだってんだよー！」

ジュン！またなの？！

「ってヒカリか！おまえのワンピース汚れてないか？真っ白だった

のに真っ黒じゃん」

失礼ね。それに私のワンピースは黒じゃない。藍色(あいいろ)よ！胸から腰までデニムのジャケットみたいにボタンがついてて下はプリーツになってるお気に入りのやつなのに。

「着替えたのよ！」

「そっか。それにしてもあのじいさんこわいというか無茶苦茶だぜ」

「なにやらかしたのよ？」

どうせいきなり「ボールくれー！」っておしかけたんでしょ。

「なんだよその言い方。オレが悪いみたいじゃねーか。まぁいいや……。ヒカリ、オレ行くよ。じゃあな！」

「ちょっと！どこ行くの？」

ジュンの腕をつかもうとしたけどそのまえに行ってしまった。私はいつもジュンにあっさり腕をつかまれるのに。

「なんですか彼は！マナーがなっていませんね。せっかちすぎます」

「あはは……よく言われるの」

「まあいいです。中にお入りください」

コウキくんはドアを開けてくれた。

「レディーファーストです」

キャッ？

「ありがとう、コウキくん」

＊＊＊

研究所の中には機械がたくさんあった。白衣を着た大人たちが部屋の中をバタバタしている。博士は奥の部屋にいるというので、メガネをかけた女性の研究員に案内してもらった。

「お来たのか」

私たちが部屋に入ったとき、博士は机の上で書類仕事をしていた。博士は机から離れると私たちのまえに立った。堅い表情が柔らかくなる。やっぱり思ってたほどこわくないわ。

「服が変わっているな。別人に見えたぞ」
「はい。転んで汚れてしまったので着替えました」
「そうか」

話をしていくらか緊張がやわらいだ。私はつばをごくりと飲んだあと改めてあいさつした。

「こんにちは、ナナカマド博士。先ほどはポケモンをくださりありがとうございます」
「うむ」
「お礼にマフィンを作ったのでよかったら他の研究員たちと一緒にどうぞ」

私はマフィンの入ったバスケットを差し出した。

「おお！ちょうどいい。休憩しよう。ハマナ、お茶を持ってきてくれ」

「はい」

バスケットはテーブルの上に置かれた。ハマナと呼ばれたメガネの女性の研究員は冷蔵庫へ向かった。

「さすがヒカリさん！お菓子作りができるだなんて…！ボクも食べていいですか？」

「もちろんよ」

コウキくんはマフィンを手に取った。私はふと冷蔵庫を見た。ハマナさんがお茶を冷蔵庫に戻していた。冷蔵庫の中には大量のあんみつが……って、え？あんみつ？

私は声をひそめてコウキくんに訊いた。

「博士って甘党なの？」

「うん」

強面（こわもて）おじいちゃんなのに意外……！おどろきとまどいの間でゆれていたらハマナさんがお茶を持ってきた。

「アールグレイのアイスティーでよろしかったですか？」

「うむ。たまには紅茶と洋菓子もいいものだな」

和菓子派なんだ……。博士はマフィンを食べながら話を続けた。

「ヒカリだったね。もう一度ポケモンを見せたまえ」

「ポッチャマ、出ておいで！」

―ボムッ。

閃光とともにポッチャマがボールの中から現れた。

「ポチャ！」

いきおいよく現れたポッチャマ。だけどどこか警戒している。少しキョロキョロしたあと私の後ろに隠れた。

「ポチャポチャ」

どうしたのかしら？

「心配しなくとも研究所に閉じ込めたりせんよ。ふむう……なるほど……このポケモン、なんだか嬉しそうにしておる」

「ポチャッ！？」

ポッチャマは素早く私から離れて博士の足をギューッと踏んだ。

「ギャーッ！！」

「こらっ！ポッチャマ！」

トレーナーとして叱ったけどポッチャマは私の足元で知らん顔している。困った子ね…。

「博士、ごめんなさい」

「いや……君のせいではない。ウム！そのポッチャマは君に託して良かったようだな！」

「ありがとうございます」

私はおじぎをした。

「どうだ。ニックネームをつけるかね？」

ニックネーム……ポケモンにつける愛称ね。今までポケモンバトルのことしか勉強してなかったからポケモンにニックネームをつけられることを忘れていた。ニックネームをつければ愛着がわく。それにステキなニックネームをつければポッチャマもよろこんでくれるかもしれない。

「はい」

私は後ろをふりかえってポッチャマを見た。ポッチャマ。ペンギンポケモン。動物図鑑で見たことある。ペンギンには皇帝ペンギンという種類がある。……皇帝か～。ポッチャマには強くて賢いポケモンに育ってほしいな。

「……『ナポレオン』」

「ポチャ？」

「ふむう…ナポレオン皇帝からとったのか…。なるほど……そのニックネームでいいのかね？」

「はい」

皇帝という言葉を聞いてポッチャマはほおをかいた。まんざらイヤでもないみたい。歴史に名を残したフランスの皇帝ナポレオン。立派な皇帝ペンギンに育ってね、ポッチャマ。

「……実はな、君たちがポケモンを持たずに草むらに入ったことに非常に驚いた！向こう見ずな子供たちだと」

博士は痛いところをついてきた。うっ……しっかり覚えてるわね

……。

「だが今は別の意味で驚かされたぞ！」

「え？」

「君とポケモンの間には既に絆が生まれておる！君たちに出会えて良かった。きっとポッチャマも同じように思っているだろう！」

ポッチャマはギロリと博士をにらんだけど博士は無視した。確かに私はポッチャマに殴られたことはない。少なくとも嫌われてはないよね？

「だからそのポッチャマを大事にしてやってくれ！」

「はい！」

話がいったん落ち着いたら後ろにいたコウキくんが私のとなりにきた。

「あぁ…ヒカリさん！やはりあなたは僕が見立てたようにポケモンに優しい方です？初めてあなたを見かけたとき天使だと思いました！生まれたてのアテネのように流れる黒い髪、ヘラに守られた汚れのない美しい瞳、フローラからゆずられた優しい香り、アフロディーテからたくされた白いワンピースに身を包んだ可憐な乙女…。あなたこそ地上に降り立った無邪気な天使！最後の神の使い！今！３千５００年のときを超えて！ギリシャ神話が蘇る！…ああ、なんて素晴らしいことなんでしょう。けれど異形の神がヒカリさんをほうっておくはずがありません。それならばさっそくテュポーンの生まれ変わり、ジュンを一刻も早く始末しなければ……！」

なにこの長ったらしいセリフ！？ギリシャ神話？花の神話なら少

しは知ってるけど聞き覚えのない神さまの名前がいっぱい出てきた。
う〜ん…ほめてくれるのは嬉しいけど恥ずかしいやらなにやら…。
コウキくん演劇部に入ったほうがいいかも。

「ウォッホン！」

あ、博士。

「これだから最近の若い者は……。発情するには早すぎる……！」

博士はブツブツ文句を言っていた。発情って……私たち動物じゃないのに。

「とにかくポッチャマはヒカリになついているな。ナエトルがジュンになついているかはわからないが……あ　あ、考えるのはやめよう」

「た、たぶん大丈夫ですよ」

私は博士をなぐさめた。少なくともジュンは虐待だけは絶対しないし。

「さて本題だ。君に頼みたいことがある。その前に改めて自己紹介させてもらうぞ。わたしの名前はナナカマド！ポケモンの研究をしている」

うん。シンオウ地方で博士を知らない人はいないもんね。

「まずシンオウ地方にはどんなポケモンがいるのかその全てを知っておきたい！そのためにはポケモン図鑑に記録していく必要がある」

ふむふむ……。大変ね。

「そこでお願いだ。このポケモン図鑑を託すから君はシンオウ地方にいる全てのポケモンを見てくれい！」

「はい……ってえぇー！？」

えっ……？なんですって！ストップ！ストーップ！

「ちょっと待ってください！私なんかにそんな大役務まりません！」

なにこの急展開！？まるでママがたまに見るドラマみたい！

「私は博士と今日会ったばかりですしポケモンだってもらったばっかりです。コウキくんのほうがふさわしいのでは？」

「コウキも旅に出る。だが人手が足りない」

もっともな質問をしたけど博士にあっさり答えられてしまった。

「ジュンは…？」

「話を聞かずに出ていった」

「……」

そんな……引き受けるしかないの？この歴史に残るかもしれない重大な出来事を……！？

「……このまま何時間でも黙っていていいのだがな、わたしは」

半ば強制的じゃない！！

「は、はい！私でよければよろこんで…」
「うむ。いい返事だ！」

自分から言わせておいてなにを……。ムスッとしていたら博士から電子辞書みたいな赤い機械を渡された。

「そのポケモン図鑑は君が出会ったポケモンを自動的に記録していくハイテクな道具だ」

これが最新機種の図鑑……！私はポケモン図鑑を開いて電源を入れた。中だけでなくカバーの裏にも画面がある。下の画面に触れたら光が私の顔を照らした。

「キャッ！」
「君の顔写真と指紋を登録しただけだ。おどろくことはない。悪用されないようワタシと図鑑登録者だけがその図鑑を使えるようにしてある」

すごい……。初期の図鑑にはそんな機能なかった。時代は進んだのね。

「これで自動的にポケモン協会でもポケモントレーナーとして登録されたはずだ。一石二鳥だな。市役所でトレーナーカードを受け取るといい。ジュンにも市役所で登録するように伝えてくれ」
「はい」

ポケモンを持つようになった人―すなわちポケモントレーナーになったものは1週間以内に役所で自分のデータと持っている全てのポケモンを登録しなければいけない。それがポケモンの悪用をふせぐために定められた法律だ。連れて歩けるポケモンの上限は6匹ま

でと決めたのもポケモン協会だ。手持ちが６匹いる状態でポケモンをつかまえたらパソコンの転送システムに自動的に送られるようになっている。

「ポケモン図鑑は一定距離の間にいるポケモンを見るだけで名前と姿を記録してくれる。つかまえればもっとくわしいデータがわかる。つかまえたポケモンは転送システムにあずけられるようにしておいたから何匹つかまえてもかまわない。だが今はとりあえずポケモンを見るだけでいい。色んな所に行って全てのポケモンに出会ってくれ！」

「はい！」

うじうじしていてもしかたがない。こうなったら与えられた使命をとことん果たしてやるわ！さっそく帰ったら旅したくね。

「ポケモンと一緒に２０１番道路を歩いたときどんな気持ちだった？」

「とても新鮮でした」

見慣れない景色。ポケモンと一緒にいる安心感。野生ポケモンとの熱いバトル……。

「わたしは生まれて６０年、未だにポケモンと一緒にいるだけでドキドキする」

博士がそう感じるってことはそれだけポケモンは不思議な生き物ってことね。

「いいか？世界にはとてもたくさんのポケモンがいる。つまりそれだけたくさんのドキドキが待っている。さあ、行きたまえ！今、ヒ

カリの……そしてナポレオンの冒険が始まるのだ！」

「はい！」

「ポチャ！」

私は元気よく答えた。ええ、ついに始まるわ……私のステキな恋の物語が？

第9話　託される思い（後書き）

私が目指す小説……それは！読者が少女漫画を読んでいると錯覚するくらいキュンキュンしちゃうラブコメ物語です！（笑）

第10話　デジャヴ

私はポケモン図鑑を胸に抱いた。あぁ、明日から私の恋の冒険が本格的に始まるんだ……。今日ルクシオにおそわれてから運命の歯車はすでに動き出している。どの服持っていこうかなぁ？私ロングヘアーだからシャンプーとリンスとドライヤーも持っていかなきゃ。でも荷物多すぎると困るし……。都会にはコウキくんよりかっこいい男の子いるのかな？でもどんなにステキな男の子でもアキラには敵わないかも。ジュンは論外ね……。

「うむ。差し入れありがとう。うまかったぞ」

旅立ちのことを考えていたら博士に現実に引き戻された。やだ。私ったらみんなのまえで乙女チックワールドに入っちゃった。

「おお、そうだ。コウキ、ヒカリにトレーナーが利用する施設を案内してやってくれ」
「はい」

私とコウキくんは博士の部屋をあとにした。

＊＊＊

廊下を歩きながら私は博士の言ったことについて考えた。トレーナーの利用する施設と言ったらポケモンセンターとフレンドリーショップかしら？ポケモンの病院とポケモン関連の道具を売るお店。それくらいわかってるのに。博士もコウキくんも私のこと初心者扱いしすぎだなぁ。独学とはいえポケモンの知識はそれなりにあるのに。

「ボクも博士に頼まれて図鑑のページを埋めているんです。だからヒカリさんとは同じ目的の仲間になります。あとで色々教えてあげますね」
「うん」

たぶんすでに知ってることを教えるんだろうけどコウキくんとゆっくりできるからいっか。コウキくんやさしいしマナーも知ってるから彼氏候補にしちゃおっと？しばらく2人で歩いていたら入り口で男性の研究員に会った。

「こんにちは。コウキの父です。君がヒカリさんですね。フローラのように美しいと聞きましたがどうやら本当みたいですね」
「えっ！？」

いきなりメガネをかけている研究員に話しかけられてびっくりした。ハマナさんもメガネかけてるし研究所ってメガネ率高いわね……。それにしてもフローラ？フローラってたしか花の女神？コウキくんいつのまにお父さんにそんなこと言ったの？

「ナナカマド博士を手伝う君のことも手伝いましょう！あと、僕のことを『お養父（とう）さん』と呼びたかったらどうぞ♪」
「えぇっ！？」

ストップ！この歳で『お養父さん』って気が早いよ！私たちまだ12歳だよ！ジュンパパでさえ『お養父さん』と呼んでくれ、なんて言わなかったのに！

「ハハハ。これからもよろしく頼みますよ」

コウキくんのお父さんは笑いながら私とコウキくんの背中を押した。う～ん……コウキくんを運命の相手と決めるには早すぎるなぁ……。

＊＊＊

コウキくんのお父さんに見送られながら外へ出たら博士に呼び止められた。

「ヒカリ！」

「「！？」」

なに！？忘れもの？それともジュンのことについて文句を言われるとか…。

「いいものがあった。これも持っていくといいだろう！」

私は博士から小さなディスクの入っているケースを受け取った。これってＭＤ？まさかポケモンをリラックスさせる効果があるとか？でもなんか違う気がする。もっと役に立つもの……。

「これは？」

「それは『恩返し』の技マシンだ。技マシンを使うとポケモンに一瞬で技を覚えさせることができる。使い捨てだがな」

私は改めて手に取ったディスクを見た。ＭＤと同じサイズのディスク。見たところ普通のＭＤと変わらない。ＣＤにもラベルにもきちんと『技マシン２７　恩返し』とプリントされてあった。これが技マシンか～。教科書にはポケモンの頭にくっつけて技を覚えさせる道具と書いてあったからもっと機械っぽいものを想像していた。

本物は初めて見るなぁ。

「『恩返し』はポケモンが君になつけばなつくほど威力が強くなる技だ。もちろん技マシンを使うかどうかは自由だ。では楽しい旅になるよう私も祈らせてもらうぞ」

用事が済むと博士はさっさと研究所に戻った。

「博士技マシン持っていたんですね……博士も若いころはポケモン勝負とかしてたのでしょうか？」

「さあ……」

博士の若いころの姿なんて想像できない。おじいちゃんおばあちゃんの昔の姿ってギャップが大きいし……。

「ヒカリさん、町の施設について僕が色々教えてあげますね。ついてきてください」

コウキくんに差し出された手を当たり前のように握った。

＊＊＊

博士から大事な使命を与えられてしまった私。今はコウキくんからこれからの旅に必要不可欠な施設の案内を受けていた。コウキくんと手を繋ぎながら。よく考えたらジュン以外の男の子と手を繋ぐのは初めてかもしれない。幼稚園のお遊戯は別にして。ジュンにはいつも引っ張られているけど、コウキくんは私と歩調を合わせてくれた。ジュン以外の男の子と手を繋いでドキドキするのは罪ですか？

気がついたら研究所が小さく見えるくらい離れていた。連れてこ

られたのは赤い屋根の丈夫そうな建物。他の建物よりひと回り大きい。屋根以外の部分は白いレンガで造られている。……どこかで見たことある気がする。フタバタウンにはこんな建物ないのに。

「この建物はポケモンセンター。戦って傷ついたポケモンを元気にしてくれる場所です。災害があったときはここに非難するそうです。ポケモンセンターはほとんどの町に配置されています」

「ふーん」

私の町にはポケモンセンターなんてない。ってことは緊急時はマサゴタウンまで行かなきゃいけないのかしら？……最悪。フタバタウンって本当に田舎！でもまあ、このさき避難するほどの大災害なんて起こるとは思えない。ニュースなどで見る限り、この世界は平和そのものだもの。

ポケモンセンターの角を曲がらずさらにまっすぐ進むと青い屋根の建物が見えてきた。白いつるつるのレンガで造られている。ポケモンセンターよりモダンでオシャレな感じ。……変ね。この建物も見たことある気がする。本やテレビとかじゃなくて、実物を。

「こちらはフレンドリィショップ。色んな道具を買ったり売ったりできるお店です。モンスターボールも買えますよ」

どちらの施設も重宝しそう。このさいデジャブの件は置いておこう。

「ボクの家はポケモンセンターを曲がったところにあります。この町の南口には海があるんですよ。よければ見に行きますか？……」

海……その単語を聞いただけでゾクッとする。お昼に食べたパス

タがのどまで上ってきた。気持ちわるい。吐きそう。本物の海なんて見たこともないし見たいとも思わない。おぼれたことなんて一度もないはずなのに、やっぱり怖い。ポケモンの生態調査のためには海も渡らなきゃいけないの？イヤ……。

「大丈夫ですか？」

っ！？コウキくんが私の顔を覗いてきた。いつもの私ならドキドキするところなのに、そんな気分じゃない。

「顔色が真っ青ですよ。家まで送りましょうか？」

そんなに顔色悪いのかしら？でも言われてみればなんだかふらふらしてきた…。急にクラッときて足元がふらついた。体が後ろに傾いたらコウキくんが私を支えてくれた。

「その様子ではフタバタウンまで持ちませんね。ボクの家で休んでいきませんか？」

時計に目をやったらもうすぐ４時だった。もうちょっとマサゴタウンにいてもいいかも。休めるならどこでもいいや……。

「ええ。そうさせてもらうわ」

私は力なく微笑んだ。コウキくんの家ってどんな家だろう……？

第１０話　デジャヴ（後書き）

Ｌｅｔ，ｓ家庭訪問♪（笑）

第11話　姫と王子

疲れた私はコウキくんの家で休むためにポケモンセンターまで戻った。ポケモンセンターの角を曲がって進むと住宅街が見えてきた。

「もう少しの辛抱ですから」

「うん」

コウキくんと私はさっきより遅いペースで歩いていた。めまいはもうしないけど疲れたことはたしか。疲れているせいで顔を上げる元気もない。

「着きましたよ、ヒカリさん」

フレンドリィショップから歩いて5分も経っていなかった。私が顔を上げたとき、目の前には大きな家があった。

「え？」

４時を告げる鐘がなった。鐘の音はまるで私の驚きを表しているようだった。周りにある民家とはあきらかに違う。白い屋根に水色の壁。北アメリカにありそうな、シンプルだけどきれいな家。お屋敷と言ってもいいくらい。ご丁寧に監視カメラのついた立派な門まである。しかも庭つき！

「え？え？えーーーっ！？」

私はおどろきの声をあげた。すごい家ー！！さっきまでの疲れも飛んでいっちゃった。

「あはは。こういう家を見るのは初めてですか？」
「おっきい！すっごーい！コウキくんってお金持ちなの？」
「生活するのに充分なお金はありますよ」
うーん……お父さんがナナカマド博士の助手の研究員だからお給料高いのかしら？
「ちょっと待っててください。門を開けてもらいますね」
動揺している私をよそにコウキくんはインターホンのボタンを押した。
―ピンポーン。
「妹が家にいるんです。家に入る前に、お客さんが来たことを知らせておこうと思って……ヒカリさんという素敵なお客さんを」
「妹っ！？」
さりげなくほめられたけどよろこびよりおどろきのほうが強かった。コウキくん妹いたんだ！
「はーい、アキコでーす♪……ってお兄ちゃんか。どうしたの？」
インターホンから明るい声が聞こえてきた。ふ～ん、アキコちゃんっていうんだ。
「ヒカリさんを連れてきたんですけど、家ちらかっていませ……」
「えーー！？あのヒカリさんを連れてきたの？会いたい会いたーい！！今開けるね！」

―プツン。

話の途中なのにアキコちゃんは通信を切ってしまった。それにしても「あのヒカリさん」って……コウキくんったら、私のことなんて話したの？

「切られてしまいました。よっぽどヒカリさんに会いたいみたいですね」

―ギィーー。

門が自動的に開いた。ハイテクね！

「さあ、行きましょうか」

私はコウキくんのあとについていった。庭には緑が広がっていて、門からお屋敷まで道路がまっすぐ続いていた。お花は家の周りにしか植えてないけど派手すぎなくてちょうどいい。田舎者（びんぼう？）まるだしで恥ずかしいけどつい目があちこちに向いてしまう。お屋敷まであと１ｍというところで窓から女の子の顔がひょっこり見えた。と、思ったらすぐいなくなって、今度はドアが勢いよく開いた。

「お兄ちゃんおかえり！初めまして、ヒカリさん！」

家から現れたのは髪の毛にパーマがかかった7歳くらいの女の子だった。やまぶき色のパフスリーブのブラウスに白色のスカートをはいていた。ブラウスの襟にはリボンが結んである。……やーん！かわいいー☆

「コウキの妹のアキコです。よろしくおねがいしまーす♪」

＞ｉ９２２３―６９９＜

元気な子！ちょっと背伸びしてる感じがかわいい？

「こらこらアキコ姫。ヒカリさんは疲れているんですよ」

「ごめんなさーい。お兄さまー」

兄妹のやりとりに思わず胸がくすぐったくなった。いいな～、コウキくん妹がいて。私一人っ子だもん。……自称兄のジュンがいるけど。

「こんにちは、アキコちゃん。ワカバタウンのヒカリよ。少しだけアキコちゃんのおうちにお世話になるけどよろしくね」

「わ～♪姿だけでなく声もキレイ！本当に大きくなったらアフロディーテみたいな美人になりそう！」

……アフロディーテ？

「そうです。ヒカリさんは今でも充分かわいいですが、きっと将来はギリシア神話の美・恋愛・豊穣の女神アフロディーテのように更に美しくなるでしょう。美しさと愛らしさと慈悲深さを備えた完璧な女性……オリュンポス十二神の一人であり、戦の女神としての側面を持った女神に似たヒカリさんならさぞかしポケモンバトルも強いことでしょう！」

私は自分の目を疑った。セリフ長っ！ちゃんと息継ぎしてるの？コウキくん絶対どこかの劇団に入るべきよ！研究所でも思ったけど

コウキくんってたまに暴走してるような……。

「真珠のように綺麗な泡から生まれたかアフロディーテのごとく美しいヒカリさん。けれど移り気な女神と違って一途で純粋です。ああ、ぜひともボクの妻として迎えたい…！話を聞いたところ、知性も備えているみたいですし料理もできるんですよ。先程もナナカマド博士と研究員の方々に手作りマフィンを差し入れするという優しさを……」

「ヒカリさんのマフィン食べたーい」

「え？ええ、いいわよ」

確かあと1個残ってたはず。私はバッグの中からラッピングされたマフィンを出した。

「はい、どうぞ」

「わーい、ありがとう！お礼にアキコのおへや見せてあげるー？」

体が勝手にまえに動いた。アキコちゃんに手を引かれながら私はお屋敷の中に入った。今日の私はみんなに引っぱられてばっかり。私って振り回されるタイプなのかなぁ……。でもアキコちゃんのタイミングよかったかも。このままコウキくんにしゃべらせるとキリがないし。アキコちゃんは手を使わずに靴を脱いだ。

「ブーツはここで脱いでね。お兄ちゃんお茶持ってきてー」

「かしこまりました」

私は左手でブーツを脱いだ。右手はアキコちゃんが独占してるし。

「早く早くー」

アキコちゃんは玄関の左側の壁にくっついている曲線状の階段を上り始めた。うわっとっとっと……転んじゃうってば！右側の壁にも同じ階段があった。２つの階段が行き着く先は廊下。……もしかしてこれが噂のお姫さま階段！？

「こっちだよー」

アキコちゃんは廊下の突き当たりにあるドアを開けた。私は息を呑んだ。ドアの先には、異世界が広がっていた。

「うわ～」

部屋の中は白とピンクであふれていた。まず目に入ったのは中央にある薄いピンクの天蓋ベッド。ベッドの柵は濃いピンク色の鉄で出来ていて優雅な曲線を描いている。左の隅っこにはアイボリー色の机と本棚。本棚には薄いピンク色生地のカーテンまでついてる！ベッドの前にはハートの形をした低いテーブル。テーブルの上には暖色系のバラの造花で出来てたランプシェードの電灯が置いてある。壁紙はパステル色の花模様で、上部にある細長い木の板には淡い赤紫色の薔薇の造花が飾られていた。天井にはシャンデリラまである。これってまさに……。

「お姫さまの部屋みたーい？」

「でしょー？」

やーん！私もこんな部屋に住みたい！せめてお姫さまベッドだけでもほしい！！

「素敵なお部屋ね！うらやましいｖ」

「お兄ちゃんと結婚すればヒカリさんもこういうおへやに住めるよ」

うっ。私は一瞬迷った。コウキくんは超かっこいいわけではないけど優しい。マナーも良いし知識も豊富。それにお金持ち……計算高い自分がちょっといやになったけどお金のことを抜きにしても気になる男の子なのは事実。それにしても…。

「やだ～。アキコちゃんったら冗談言って…」

「冗談じゃないよ。わたしまえからヒカリさんのようなお姉ちゃんがほしかったんだもん！」

―ズッキューン！

アキコちゃんの一言は私に響いた。だって私も……私も前から妹がほしかったんだもん！

「いとこのお姉ちゃんはいないの？」

「いるけどボーイッシュだから私の趣味を理解してくれないのー」

「ふ～ん」

私は本棚を覗いてみた。棚にはお姫さま関係の絵本と少女マンガと少女小説がずらりと並べられていた。いい趣味をお持ちで……。

「わたしね、お姫さまにあこがれてるの。だからお部屋もロココ調にしたの。あとは王子さまがいればカンペキなんだけどな～」

「アハハッ」

わかるわ。その気持ちすっごくわかる！私もこれから王子さまを探す旅に出るところだもん！

「でも私のとしで王子さまってなかなかいないでしょ？あと何年か

待たなきゃいけないんだけど待ちきれないって言ったの。そしたらお兄ちゃんが『じゃあかわりにボクが王子さまになってあげますよ』って言ってくれたの」

わお。

「コウキくんやさしいね」

「まあね。だからお兄ちゃんにプリンセス・レッスンならぬ、プリンス・レッスンをみっちりほどこしたわ！」

「…え？」

私は目をパチクリさせた。コウキくん……だからあんなに紳士的な性格なんだーー！！アキコちゃんに仕込まれたから！アキコちゃん私よりも計算高くてしたたか！ませてるなんてものじゃないわ！

「お兄ちゃんって女の子にはみんな優しいの。でもこんなに1人の女の子ばかりほめるのは初めてだよ。今日は1日中ずっとヒカリさんのこと話してたの！」

「本当？」

私は内心うれしかった。誰かに好かれることはやっぱりいいこと。わるい気はしない。

「ただそのせいでまえより暴走するようになっちゃった。今までも興奮するとベラベラ話すことはあったけど……。そういうときはてきとうに話題を変えるか無視すればいいよ」

「それでいいの？」

「妹の私が言うんだから信じて♪」

それでいいのかなぁ…。ちょっとかわいそう。

「お兄ちゃんってふるまいはイギリスのジェントルマンだけどフランスのヘンタイさもそなわってるのよねー」

「え？」

ヘンタイって……変態（へんたい）？変態性欲（へんたいせいよく）？フランスってゆうがなイメージがあるけどヘンタイってどういうこと？そもそもコウキくんがヘンタイなわけ……。

―コンコン。

ノックの音がした。うわさをすれば影ね。

「入っていいですか？」

コウキくんの声だ。

「いいよー」

―ガチャッ。

コウキくんはワゴンでクッキーとティーポットとティーカップを運んできた。さすが上流階級！私びんぼうじゃないのにびんぼうな気がしてきた。いちおうフタバタウンの市長の孫娘なのに。

「お茶の用意ができました。カモミールです」

「えー。ダージリンがよかったー」

なんて上品な会話！お茶の話かしら？コウキくんは私たちにおし

ぼりを渡したあと慣れた手つきでお茶をカップに注いだ。おしぼりをもらうのはありがたかった。さっきアキコちゃんに手をひっぱられてて手を洗うひまがなかったのよね。

「お兄ちゃーん。わたしヒカリさんのようなお姉ちゃんがほしーい」

「えぇ!?」

そんないきなり!

「こらこらアキコ。あせってはいけませんよ」

ほっ。私は胸を撫で下ろした。だって私がアキコちゃんのお姉さんになるには私がコウキくんの家族の養子になるか、コウキくんと結婚するしかないもの。

「……式はヨスガシティで挙げましょうか」

「ええー!?」

コウキくんは優しく微笑んだ。私の胸の動悸が早まる。これって…これって俗に言うプロ、プロ、……プロポーズ?!

「あそこには大聖堂がありますからね」

「わたしフラワーガールやりたーい」

2人の兄妹は私をよそに勝手に話を続けていた。えっ?えっ?えっ?えーっ!

「……と、いうのは冗談です」

「え〜」

アキコちゃん落胆した声で言った。だけど私はほっとした。12歳で結婚を考えるのは早すぎるもの。

「プロポーズはしませんよ。…今はね」

―ドキッ。

コウキくんにウインクされた。意味深……！

「6年後が楽しみだねー、お兄ちゃん」

「ええ。ではレディーの会話を邪魔したくないので失礼します」

コウキくんはティーセットを部屋に残してワゴンを廊下へ出した。ドアが完全に閉まる直前コウキくんは声をあげた。

「あっ！」

「なにっ？！」

忘れもの？でもジュンじゃあるまいし……。ジュンのせいでついなにかあるたびに忘れものをしたかと思っちゃう。

「家に帰ったら、ナナカマド博士のお手伝いでポケモン図鑑を作ることを言っておいたらどうでしょうか？」

「あ！」

そういえばまだママに言ってない！

「遠くに行くこともありますから言っておいたほうがいいと思います」

「そうだね。ありがと、コウキくん」

水色の空が赤みがかってきた。あと３０分したら帰ろっと。

第１１話　姫と王子（後書き）

コウキはセリフを書くのが面倒くさいキャラＮｏ．１です（笑）。

第１２話　最後の晩餐

「お兄ちゃんの外見は６９点かなー。容姿がぱっとしないぶん内面で勝負しなくちゃねー」
「そ、そうね……」

私はティーカップを手に取った。アキコちゃん、本当に7歳なのかしら?私と同じように男の子の顔に点数つけてるだなんて……。大きくなったら男を手玉にとりそう。私は残りのカモミールティーを飲んだ。コウキくんの家に来てからしばらく時間が経った。私とアキコちゃんはベッドの端に座っていた。体の疲れもとれたし、ナポレオン（ポッチャマ）も充分休めた。そろそろ帰りたいところだけど……。

私はナポレオンをちらりと見た。ナポレオンはアキコちゃんのひざの上にいる。渦巻き模様のクッキーをもぐもぐ食べていた。ずっとボールの中にいたらかわいそうだから、コウキくんが部屋を去ったあと出しておいた。いじっぱりのナポレオンでもおだてには弱かったのか、アキコちゃんにかわいがられることを許していた。

私はこっそり木製のハト時計を盗み見した。４時３４分だった。それにしてもいいなぁ、この部屋。私の部屋もお姫さまベッドとハト時計があるだけで見違えるのに……ってそうじゃなくて!楽しそうに話すアキコちゃんには悪いけど帰らなきゃ。現実に。私はそっと立ち上がった。

「アキコちゃん、もうそろそろ帰りたいんだけど……」
「ポチャ?」
「えー」

予想通りアキコちゃんは不平をもらした。ナポレオンはアキコちゃんのひざから離れた。

「お母さんに電話してここに泊まりなよー」

なんて素敵な提案！こんなに綺麗な部屋に泊まれると考えただけで素敵！もう少しで「うん！」と答えそうになったけどこらえた。明日から旅に出るなら家に帰って荷造りをする必要がある。『マサゴタウンのお屋敷。プリンセスルームあり。コウキくん・アキコちゃんつき』は魅力的だけど断らなきゃ。

「ごめんね。また今度ね」

「えー」

私はアキコちゃんの頭をなでた。アキコちゃんはほっぺたをふくらませたけど、すぐ機嫌を直した。

「仕方ないか。お兄ちゃんに送ってもらうといいよ」

「うん」

コウキくんとはまだゆっくり話したことないし、ちょうどいいかも。

「じゃあお兄ちゃんの部屋に案内するねー」

言うが早いがアキコちゃんは部屋から飛び出した。廊下の真ん中で振り返って私に手招きをした。私はナポレオンをボールに戻してついていった。コウキくんの部屋はどうなってるんだろう？アキコちゃんはドアをノックした。

―コンコンコン。

「お兄ちゃーん。ヒカリさん帰るってー。おうちまで送ってあげてー」

足音がしたあとドアが開いた。

「お帰りにならられるんですか？」

「うん。名残惜しいけど」

「わかりました。お送りいたしましょう」

コウキくんが廊下に出られるように私とアキコちゃんは一歩下がった。好奇心に駆られてドアが完全に閉まるまえにそっと部屋を覗いてみた。白い壁紙に現代的なこげ茶のソファが栄えていた。机とイスはアンティークっぽく脚がスチールで出来ている。モダンでシック。コウキくんらしく落ち着いた雰囲気の部屋だった。

「お兄ちゃんの部屋はイギリスのヴィクトリアン風にしたの」

アキコちゃんに耳打ちされた。部屋覗いたのバレちゃった。

「ヒカリさんを困らせてはダメですよ、アキコ」

「別に困らせてないもーん。ねー？」

「アハハ」

＊＊＊

こうして私たちは玄関まで降り、アキコちゃんにお礼を言って別れた。コウキくんは私を家まで送るためついてきてくれた。途中で

わがままを言ってフレンドリィショップに寄ったらコウキくんにモンスターボールを5個買ってもらっちゃったvジュンはちゃんとボール手に入れられたのかしら?

フタバタウンまで歩きながら、コウキくんにポケモン図鑑の使い方を教えてもらったけどポケモン図鑑ってすごすぎ!図鑑をポケモンに向けるだけでそのポケモンの名前と性別とレベルがわかるんだもの。さっきナポレオンに戦わせた鳥のポケモンとビーバーみたいなポケモンの名前も判明した。ナポレオンの経験地の糧となったポケモンはムックルとビッパっていうのね。ポケモンを捕まえたらもっと詳しいデータがわかるみたい。明日試してみよっと。

空は見事な茜色に染まっていた。今日の夕食はなんだろう?限られた時間を楽しく過ごすため、私とコウキくんはポケモンや家族、将来の夢などを話していた。

「ママったらいつまでたっても本当の歳教えてくれないのよ。ママは自分のこと30歳って言ってるけどそれじゃあ18の時に私を産んだことになるじゃない。いくらなんでも早すぎだって」

確かにママは若々しいけどいくらなんでもありえない。うそつかないでって問いつめても「うそなんてついてないわよ」っていつも笑うし。

「ハハハ。大人の女性は歳を言いたがらないものですよ」

「ジュンママの36は普通だと思うけど…。コウキくんのお母さんは?」

「同じくらいじゃないですかね?失礼なので実際に訊いたことはありませんが」

自分のお母さんにも歳を訊ねないなんて優しいな。落ち着いたコウキくんを見ていて急に自分が恥ずかしくなった。自分がとっても子どもっぽく感じたから。もっと真面目なことを話そうと話題を変えることにした。

「お母さんも研究者？家では見かけなかったけど」

「いえ、母は専業主婦です。おそらく買い物に出かけていたのでしょう。以前は父と共に博士の研究所で働いていたそうです。父とは大学で出会ったとか」

インテリー！フタバタウンでは高学歴の人はいない。田舎だしほとんどの人は親の職業を継ぐからだ。八百屋や文法具屋など個人経営の店の跡継ぎになるか、そうでなければ農場経営者とか。私のおじいちゃんは昔公務員だったみたい。そういえば女の人の職業ってあんまりないなぁ……。

「ボクの夢は父のような立派な研究者になることです。ヒカリさんは？」

「私は……」

言葉につまった。自分が本当になりたいものなんてわからなかったから。ジュンでさえ「最強のポケモントレーナーになる」という（幼稚とはいえ）夢があるのに。私はただ都会に出て素敵な恋をしたいだけ。そんな下心ありまくりの目標を言うわけにはいかないし……。私は肩をすくめた。

「なにになりたいかはまだはっきりわからないの。とりあえず今はチャンピオンを目指してみるわ」

アキラもジュンもポケモンチャンピオンを目指していた。周りに

チャンピオンを目指している人が多いせいかしら？私はチャンピオンにならなければいけないという妙な義務感があった。なにがなんでも、私はチャンピオンにならなきゃいけない。あいつを見返すために……え？

「ヒカリさんならなれそうですね」

「え？あ、うん。ありがとう」

私はなんとか笑顔を作ってみた。なにかが心にひっかかる。あいつって……誰？私は一体、誰を見返したいんだろう。

＊＊＊

そのあともあれこれ話していたらいつのまにか家の前まで来てしまった。時刻は５時１８分。コウキくんは帰宅が遅れた理由と私たちの使命をママに説明すると言って残ってくれた。そういえばジュン以外の男の子を家に連れてくるのってひさしぶりかも。ママなんて言うかなぁ…。

―ピンポーン。

複雑な気持ちで呼鈴を押した。家からシチューの匂いがする。パタパタ音がしたあとドアが開いた。

「おかえりーヒカリ。遅かったわね。あら、後ろの男の子は？」

丸みを帯びたミディアムショートの美人ママ、３０歳（真偽は定かではない）がエプロン姿で玄関に立っていた。

「初めまして、ヒカリさんのお母さま。マサゴタウンでナナカマド

博士のお手伝いをしているコウキと申します。本日はヒカリさんを家までお送りにまいりました」

コウキくんってやっぱり礼儀正しい。これで第一印象はバッチリね！

「ヒカリさんとは結婚を前提にしたお付き合いをしたいと思います」

「え？」

ストップストップストーップ！会ったばかりでいきなりそれはないでしょー！！ただいまを言う暇すらない。

「あら。よくいらしたわね。ちょうどシチューができたところなの。さあ、あがってちょうだい」

ママーー！なんで冷静なのー？さっきコウキくんが言ったこと聞こえてなかったのー！？

「いえ、ボクはただ挨拶しにきただけなので……」

「遠慮しないでくださいな。ご飯食べながら話しましょう。ね？」

「は、はあ……」

コウキくんまで丸めこまれてるし。ママ天然だからなぁ……。ママに言われるがまま私たちは家の中に入った。ママがお皿を用意してる間、コウキくんは電話を借りて家に連絡していた。ママの手伝いをしようとしたら断られちゃった。やることがないからしかたなくソファに座ってナポレオン、ことポッチャマをブラッシングしていた。だってさっきなでようとしたら拒否されちゃったんだもん。ポケモン図鑑によるとポッチャマはプライドが高いポケモンらしい。それにくわえて私のポッチャマはいじっぱり。機嫌の良いときと私

が落ち込んでるときだけなでさせてくれるみたい。うーん。

「準備できたわよ～」

ママに呼ばれた。私はブラシを置いて手を洗いに行った。

＊＊＊

「よかったわね、ヒカリ。お婿さん候補が2人になったのね」

うっ。私は危うくジャガイモを喉につまらせてしまうところだった。いただきますと言ったあとの開口一番の言葉がこれ。ママ、コウキくんの結婚前提の話ちゃんと聞いてたんだ。

「2人？もう1人いるのですか？」

コウキくんは眉をひそめた。ナポレオンとヒコザルは私たちのことなどおかまいなしにシチューを食べ続けている。

「ええ。別にあなたでもいいんだけど、私としてはジュンくんをお勧めするわ」

「なっ！？」

「えぇー！？」

私は声をあげた。冗談じゃない！なんであんなやつと！ジュンのこと嫌いじゃないけど疫病神じゃない！

「お母さまはなぜ彼を……？」

コウキくんと私のスプーンを取った手は止まっていた。ママとポ

ケモンたちだけあいかわらず手を動かしている。

「ウフフフ。知りたい？だって……」

話の途中なのにママはシチューを口にした。私たちはまじまじとママを見た。お肉なんて頬張ってないで早く答えてよ。

「そのほうが面白いじゃない」

「「は？」」

肩の力が一気にぬけた。なにそれ？

「ジュンくんなにするかわからないでしょ？ジュンくんといれば絶対退屈することなんてないと思うの」

「は、はあ……」

コウキくんは困惑していた。ママと会ってからペースをみだされっぱなしだ。むぅ～。ママの言うことにも一理あるけど、退屈しないかわりに私の寿命が縮むわよ…。ジュンったら無茶ばっかりするんだから。

「まあ、最終的に決めるのはヒカリだけどね」

ママは手を休めることなくシチューを食べ続けた。ボールの中のシチューはもう半分以上減っている。ポケモンたちはすでに食べ終わっていてソファで横になっていた。私も早く食べよう。

＊＊＊

「で、どうしたの？ヒカリ。コウキくんを紹介するためだけに連れ

てきたんじゃないでしょ？」

テーブルを拭きながらママは訊いてきた。いつもおっとりしているのに変なところでするどい。

「ママ、おどろかないでね。今度は……」

私は博士にお礼をしにいったら頼みごとをされたこと、コウキくんの家にあがって帰るのが遅れたことを話した。博士の頼みごとの内容はコウキくんが詳しく説明してくれて、私の帰りが遅くなったことを謝った。こんなにすごいことを話しているのにママはあまりおどろかず、ほとんど感心しているみたいだった。

「そう！ナナカマド博士からそんなすごいことを頼まれたの」

「うん。明日から旅に出ようと思うの」

「コウキくんと一緒に？」

ママ……この時世に血の繋がってない年頃の女の子が男の子と旅するわけないでしょ。漫画やアニメとは違うんだから。

「いえ、効率よくするため二手に分かれます」

「あらそう。よーし！がんばれー。ママ応援しちゃうから」

うーん。ママが驚いている姿なんて見たことないから、今度こそおどろくかもしれないとちょっと期待したのに。

「止めないの？」

「楽しそうじゃない。そうだ！ヒカリ。いいものあるから持っていきなさい」

ママは自分の部屋に入るとノートを持ってきた。

「冒険ノートよ。シンオウ地方のポケモンの分布を調査するんでしょ？ならヒカリ自身もノートに旅の出来事を記録するべきよ！」

そっか。大事な研究だもんね。ポケモン関連の話なら、どんなに些細なことでも書いておけば博士の役に立つかもしれない。でもポケモン関連の出来事なら別のノートにレポートを書いたほうがいいかしら？

「そうね。日記代わりに使うわ」

「いーなー、冒険の旅。しかも1人じゃなくてポケモンと一緒でしょ？ママが行きたいぐらい……なんてね！　うん！ヒカリ。ママは大丈夫だから思いっきり旅を楽しんで！」

「お父さまには伝えなくてもいいのでしょうか？」

傍らで話を聞いていたコウキくんが口をはさんだ。もっともな話だけど、パパは……。

「パパは仕事の関係であちこちを移動しているの。今は町にいないわ」

「そうですか」

コウキくんは納得したけど、正直私はパパのことは全くわからない。姿はおろか、名前すら知らない。ママに訊いても「ひ・み・つ☆」って話をはぐらかされるし。

「ヒカリ、あなたが色んなことに出会って色々感じることがママのハッピーになるんだから！」

「うん」

「でもときどきは帰ってきてよ。あなたがどんなポケモン捕まえたかママも知りたいし。あとパパに会ったらよろしくね」
「私たちをずっとほったらかしているのに？」

私は口をとがらせた。パパの写真なんて一枚も見たことがない。ママと町の大人の話によるとめちゃくちゃかっこいいということくらいしかわからない。会えばわかるかしら？今頃ジュンパパと同じように渋いナイスミドルになってたりして。

―ガタッ。

コウキくんが椅子から立ち上がった。時計は6時を指していた。

「ではボクは帰ります。夕食までご馳走してもらいありがとうございます。シチューおいしかったです。ご馳走さまでした」
「あらあら。もうこんな時間？色々説明してくれてありがとう。またいらしてね」

ママがコウキくんのためドアを開けたら、2人はふと止まった。どうしたんだろ？

「すみませ～ん、アカリさん。こちらにジュン来てます？」
「えっ？来てないけど……」

家の前まで来ていたのはジュンママだった。

「そうですか～。じゃあもう行っちゃったんだ。困ったなあ…。あの子『冒険するから！』ってそれだけ言って飛び出しちゃって」

ハァ～。私は大きく息をついた。興奮したジュンはあのあとすぐ

冒険しにいったみたい。私がコウキくんの家にお邪魔している間に旅立ったのかしら。

「向こう見ずで無鉄砲だから地図だけは渡しておきたかったのに」
「大丈夫。ヒカリが届けてくれるわ。ね！ヒカリ」
「うん」

昔から忘れものが多かったけど大掛かりな冒険のときまで迷惑かけないでよ、ジュン。

「そお？じゃあお願いしちゃっていい？ヒカリちゃんこれジュンに届けてね」
「明日旅に出ますから会ったら渡しておきます」

私はシンオウ地方の地図の入った封筒を受け取った。

「悪いわねえ……たぶんまっすぐコトブキシティに向かってると思うけど……。じゃあジュンのことよろしくねぇ」

ジュンママは帰ろうとしたらコウキくんの存在に気づいた。

「見かけない子ね。どなた？」
「初めまして。ジュンくんのお母さまですね。ボクはヒカリさんを守るプリンス、コウキです」
「は、はあ……」

話をややこしくしないでよ！ジュンママまでため息ついでるじゃない！

「悪いけどヒカリちゃんは私の息子が頂くわ。あの子女の子には人

気ないのよ。あなたはまあまあかっこいいし、頭も良いでしょう？女の子ならほかでも見つけられるからヒカリちゃんはうちに譲ってくれない？」

……なんでこの家には空気を読めない人たちがこんなに集まってるの？みんな何気に私の意見無視してない？

「誠に失礼かもしれませんが、ジュンくんがヒカリさんを幸せにできるとは思いません」

「はあ。それもそうね。がんばってね」

ゆるっ！

「それじゃあまたねえ、アカリさん」

「おやすみなさ～い」

ジュンママはあくびをしながら帰っていった。ママはジュンママをニコニコ見守っている。コウキくんはポカーンとしていた。

「本当に彼女はジュンくんの母親ですか？」

「うん。たぶんジュンママがのんびりしてるから、ジュンはせっかちに育ったんだと思う」

親の影響、恐るべし。

第１２話　最後の晩餐（後書き）

今回の話はグダグダです。最初のころは原作に忠実すぎて展開が遅いですが最初のジム戦（ＶＳヒョウタ）以降から早くなる予定です。

第13話　自立

―カーン。カーン。

教会の鐘が鳴り響く。そう。ここはヨスガシティの大聖堂。ずっとこの瞬間を待っていたわ。白いドレスに身を包んだ私。美しい旋律を紡ぐピアノ。ヴォージンロードを歩く中、さまざまな思いがこみ上がってきた。お母さん、今まで私を育ててくれてありがとう。ジュンママ、ごめんなさい。やっぱり私、ジュンとは結婚できません。さようなら、フタバタウンの皆さん。私、結婚します？

祭壇では白いタキシードを着たコウキくんと牧師の姿をしたナナカマド博士が待っていた。私の後ろには花びらをまきちらしているアキコちゃんがいる。祭壇に着き、コウキくんの隣に並んだら博士が口を開いた。

「その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います」

「誓います」

―トクントクン。

私の心臓が高鳴る。いよいよだわ……！

「では誓いのキスを」

来たーーー！！コウキくんは私のベールを上げた。私はそっと目をつぶった。コウキくん……！

―バンッ。

「異議あり！」

私たちはふりむいた。いきおいよく開いた扉から出てきたのはジュンだった。なんのつもり？

「ヒカリ！だまされるな！そいつは女たらしだ！きっと愛人が何人もいるにちがいない！」

「はぁ？」

私は目を細めた。コウキくんが浮気するわけないじゃない。なに言ってるの？抗議しようとしたらコウキくんが前へ出た。

「よくもボクたちの神聖な結婚式を邪魔しましたね……。あなたにはギロチン処刑ですら生ぬるい。そう簡単には死なせません。地獄の業火でじわじわ苦しみながら堕ちてください！行きなさい、ヒコザル！」

コウキくんはボールからヒコザルを繰り出した。

「冥界でハデスの裁きを受けてください！ヒコザル、『火の粉』！」

「ウキキーッ」

ヒコザルは両手から炎を出してジュンに跳びかかった。えぇ！？丸腰の相手にちょっとやりすぎじゃない？

「おわっと！」

幸いジュンは間一髪のところでよけた。

「なんだってんだよー！出てこい、ナエトル！」

「ルー」

何も知らないナエトルはのんきにボールから出てきた。

「あいつの首をかき切ってやれ！『葉っぱカッター』！」

「ルー！」

コウキくんに向かって高速で葉っぱが飛んできた。キャーッ！私にも当たるー！腕でガードをした瞬間、体がふわっと浮いた気がした。

―カカカカカカッ。

刃物が硬いものにぶつかる音がした。気づけば私はコウキくんにお姫さま抱っこされていた。葉っぱの刃は祭壇の机に刺さっていた。すごい。コウキくん私を抱えたまま左によけたんだ！

「君たち！ワタシを巻き込むなー！」

葉っぱだらけの机から博士が顔を出した。あ、博士いたんだっけ。

「レディーを巻き込むなんてつくづくあなたはヒカリさんにふさわしくありませんね。ヒコザル！そのバカ面の顔をひっかいてやりなさい！」

「させるか！ナエトル、ヒコザルに『体当たり』！」

博士が言ったことが聞こえなかったのか、コウキくんとジュンはそれぞれのポケモンに命令した。

「ウキッ」
「ルー！」

―ガッ。

二匹のポケモンは取っ組みあった。ナエトルがヒコザルの腕を押さえているからヒコザルは『ひっかく』ことも『火の粉』をだすこともできない。

「ヒカリさん、しばらく離れてお待ちください」

コウキくんは私を床に下ろした。

「勝利の女神はボクの元にいます！おとなしくやられてください！」
「やられるかよっ！」

ジュンはコウキくんに向かってパンチした。トレーナー同士も殴りあうの！？このカオスなフィールドのなか私は腕をつかまれた。

「キャアッ！」

誰！？

「落ち着けヒカリ！俺だ！」
「アキラっ！？」

私の腕を掴んでいるのは私の初恋の黒髪ショートの美少年、アキラだった。最後に会ったときと姿が全く変わってない。

「すまない。迎えにくるのが遅れた。俺と一緒に旅に出よう！」

「えぇ！？」

次から次へと男の子が現れてわけわかんない。ナエトルはヒコザルにやられているし、コウキくんはジュンにボコボコにされているしどうすればいいの？

「ポッチャ！ポチャポチャ！」

「ナポレオン！？」

足元で声がした。これ以上状況がひどくなるはずがないと思ったらひどくなった。私の足元にいたのは白いタキシードを着ているポッチャマだった。え？なにこれ？私自分のポケモンにまで求婚されてるの？

「イヤーーーーーー！！」

＞ｉ９２３５―６９９＜

＊＊＊

―ピピピピピピピピッ。

―ガチッ。

私はとっさに目覚まし時計を止めて起き上がった。

「はぁ……はぁ……」

身体には汗がベットリまとわりついていた。なんていやな夢……！でもよかった。夢で。

「おはよう、ペンちゃん」

ペンちゃんはアキラからもらったペンギンのぬいぐるみにつけた名前だ。私はいつもペンちゃんを抱いて寝ている。朝起きたら一番最初におはようを言う相手はペンちゃんだった。だけど今私の腕の中にいるのはペンちゃんではなかった。私が抱いていたのは規則正しい寝息をたてているナポレオンだった。

「キャーーーーーーーッ！！」

夢と現実がごっちゃになった私は、今度は現実世界で叫んだ。

＊＊＊

『4月3日　日曜日

今日は色んなことがあったからとても疲れた。まず朝にジュンに着替えしてるところを見られた。もう！最悪！そのあとジュンと一緒に草むらを走っていたらルクシオというポケモンに襲われた。絶対絶命！大ピンチ！だけど白馬の王子さま、コウキくんとヒコザルに助けてもらっちゃったvしかもそのあとナナカマド博士から初めてのポケモン、ポッチャマをもらったの！

午後に博士にお礼をしに行こうとしたらジュンにシンジ湖まで強制連行された。そこで幻のポケモンと思わしき不思議な光を見たけど捕まえられなかった。諦めて博士の研究所に行ったら今度はポケ

モン図鑑を渡された。博士のためにシンオウ地方に住む全ポケモンのデータを集めるため、私は旅に出ることになった。

夕方に具合が悪くなったからコウキくんの家で休んだの。その家がまた素敵な家で思わずコウキくんとのお付き合いを真剣に考えた。しかもコウキくんの妹のアキコちゃんってすっごくかわいいの！そのあと私の家までコウキくんに送ってもらい、ママに旅に出ることを伝えた。明日の旅立ちが楽しみv』

―パタンッ。

私は日記を閉じた。そうだった。今日は故郷から旅立つ記念すべき日だった。きっと昨日色々あって疲れたからあんな夢見たのね。まったく。2日連続で朝に叫んじゃったじゃない。

「ふぅ」

気持ちを切り替えて自分のファッションチェックをした。首元には桃色のスカーフ。胸元に白い当て布がついた黒いノースリーブのギザギザタンクトップ。プリーツのついたピンク色のミニスカートと黒いオーバーニーソックスから生まれる絶対領域（ぜったいりょういき）。……イケてる。イケてるわ、私！これなら絶対田舎の人に見えない。スパッツはあえて履かない。いい男を見つけたらスカートの中をちらりと見せつけてでも気を引いてやるわ！

あとは髪型だけ。私は上の髪をつかんでバレッタで止めた。下の髪の一部を取り真ん中で分けて前へ持っていき、左右を黄色いバレッタで留めた。そして最後の仕上げに白いニット帽を被る。よし！完璧♪

「あら。おはようヒカリ。悲鳴が聞こえたけどどうしたの？」

うう……。いいよね、ママは。ママにはバカな幼なじみもいじっぱりのポケモンもいないもんね。

「聞いてよママ！ナポレオンったら私のペンちゃんをゴミ箱に入れたのよ！」

「まあ。きっとペンちゃんに焼きもちを焼いたのね」

はぁ？

「でもナポレオン私が抱っこしようとしたらあばれるんだもん」

「素直になれないだけよ。ねえ、ナポレオン」

ナポレオンはぷいっと横を向いた。

「ほら、照れてるじゃない」

「ポチャァ？」

ナポレオンは「あぁん？」とでも言いたそうにママをにらみつけた。まるで不良みたい。

「まあまあ、朝ごはん食べましょう。今日は特別な日なんだから」

私は納得しないままシリアルを食べ始めた。

＊＊＊

＞ｉ９２５３｜６９９＜

―ガラガラガラ……。

私はキャリーバッグをひいていた。ママは町の入り口まで送ると言って私のスポーツバッグを持っていた。これからは野宿だってありえる。念のためにテントやら寝袋やら詰め込んだら荷物が多くなってしまった。ポッチャマはボールに収めている。だってポケモンはめずらしいからボールから出しておくと町中の子どもにもみくちゃにされそうだもん。

「ん？」

ワカバタウンの入り口には人だかりができていた。どうしたのかしら。

「ヒカリー！見送りに来たよー！」
「旅に出るってほんとー？」
「行かないでくれ～ヒカリちゃ～ん」

わあ！？村中の人たちが集まってる！私はママを見た。

「うふふ。昨夜みんなに知らせておいたの。驚(おどろ)いた？」

うわ～。月曜日なのに私を見送りに来てくれるなんてみんなヒマなんだな～。でもわざわざ来てくれたんだもん。お礼を言わなきゃ。

「おはよう、みんな。見送りに来てくれてありがとう！」

私の一言でみんなはどよめいた。

「やっぱり本当に行っちゃうの！？」

「さみしいー」
「いつ帰ってくるのー？」
「彼氏できたら紹介して～♪」

女の子から友好的な言葉が聞こえる一方男の子からは悲痛な叫びも聞こえてきた。

「学校一のかわいこちゃんがー！」
「都会の男に騙されるなー！」
「ジュンとだけは結ばれるなよー！」

なっ……！最後の一言にはカチンときた。

「誰がジュンと結ばれるもんですかーー！！」

みんなの間にどっと笑いが広がった。からかわないでよ！確かに昔ジュンと恋のおまじないしちゃったけどその呪いから逃れるために旅に出るんだから！

「いや～。ヒカリも大きくなったな～」
「ジュンもいたら祝ってやったのに」
「町がさみしくなるね～」

子どもたちと比べて大人たちは余裕がった。これが歳の差かしら。ママはまだクスクス笑っていた。

「あなたがいないときはね、ジュンくんのママと色々お話してるのよ」

それって昔から私がジュンと遊ぶたびにお話ししてたってこと？

どんなこと話してるんだろう。

「といってもいつもあなたたちのことなんだけど」

「えー」

私たちのこと話してなにが楽しいかしら？もっと別のこと話せばいいのに。テレビとかお料理とか。

「他に話すことないの？」

「共通の話題だもの。……ヒカリ。いい？ポケモンには優しく、どこまでも優しくしてあげてね。あなたのポケモンはあなたのためにがんばるんだから！」

「うん！」

言われなくても愛情たっぷり育てるわ。

「ヒカリ行ってらっしゃい！冒険の旅楽しんできて！」

「うん！」

いつ帰ってくるかわからないけどこわくない。私にはナポレオンがいる。平凡な日々はもう終わり。これからなにがおこるかわからない日々がやってくる。刺激的（しげきてき）な毎日が待っている。私は大きく手をふった。

「いってきまーす！」

ママにはなるべく連絡するわ。ジュンと私のいないフタバタウンが退屈（たいくつ）にならないように。

第１３話　自立（後書き）

ついに出発しました！それにしても主人公が故郷を離れるのに１３話もかかるだなんて我ながら呆れています。人物描写が細かすぎましたね・・・。

第１４話　酔い

「ふ～んふんふふ～ん♪」

鼻唄交じりに私は双眼鏡を覗いた。辺りは見渡す限り緑でいっぱいのフィールド。

「ポチャア？」

私のかわいいポッチャマ、ナポレオンは私の行動を理解してないみたい。

「めずらしいポケモンいないかな～？もしくはいい男ｖ」

「ポッチャ！」

双眼鏡からポッチャマに目を移すとナポレオンが誇らしく手を胸に当てていた。ぷっ。自分がいい男だってアピールしてるのかしら？

「アハハッ。確かにめずらしいポケモンね。おまけにいい男ｖ」

「ポチャアッ！」

私はナポレオンをなでた。ほめられて気を良くしたのか今回は手をはねのけられなかった。こういうときぐらいしかさわらせてくれないからさみしいのよね。

「それにしても見たことのあるポケモンしかいないわね」

ここは２０２番道路。マサゴタウンの北口を出たところにある。この道路の先は初めて訪れるであろう都会、コトブキシティへと続いている。しばらく散策してみたけどここの分布は２０１番道路に出てくるポケモンと変わらない。

「ビッパとムックルしか出てこないわね。ビッパはもうゲットしたから今度はムックルを仲間にしようか」

「ポチャ！」

ガサッ。

「「！？」」

後ろから音がした。振り返ったら左の木から野生のムックルが飛び出してきた。

「クルッポー」
ムックルは地面に着地した。逃げる気配はない。私たちがどう出るか見ているんだわ。ラッキー☆いいタイミング。さっそく捕獲開始！
「つかまえるわよ！ナポレオン、はたいて！」
「ポチャ！」
ナポレオンはムックルに向かって走った。ペンギンポケモンのポッチャマは地上では上手く歩けない。素早さは低いけど、レベルの差でなんとか埋められるはず……！
バシッ。
「クッルー！」
ナポレオンの『はたく』攻撃が当たった。先制攻撃は成功！
「クルッポー……」
ムックルは羽を羽ばたいてバランスを取った。目つきが変わってる。緊張感が私たちを包んだ。私とナポレオンを敵と認識したのね。今のところ空へ逃げる気配はない。ムックルは立っていた位置から2、3歩下がった。来る……！
「『体当たり』がくるわ！よけて！」
「クルーッ」
ムックルがナポレオンに向かって跳んできた。ナポレオンは正面から30度の角度でよけようと移動した。雑草とナポレオンの足が摩擦（まさつ）する音が聞こえる。
「ポチャッ？」
だけど6歩進んだところで足が滑って転んでしまった。しまった！ポッチャマは地上で歩くのが苦手だった！
「ナポレオン！」
ドカッ。
「ポチャッ！」
よけるのに失敗したポッチャマは体当たりをもろに受けてしまった。私は図鑑に目をやった。受けたダメージはＨＰの3分の1。急

所のおなかに当たったからダメージが大きかったのね。
「クルックー」
バサッバサッ。
ナポレオンに一矢を報いてスッキリしたのか、ムックルは羽ばたき始めた。やばい。逃げられる！
「ナポレオン！『泡』で攪乱（かくらん）！」
「チャマッ」
プポポポポッ。
ナポレオンの口から吐いた泡がムックルを囲む。
「クルッ？」
視覚を閉ざされてとまどっている。今のうちに……！
「ナポレオン！」
「ポチャーッ！」
ポッチャマは1メートルくらい走ってジャンプした。
「地面にはたきおとして！」
ベシッ。
「クルーッ！？」
ムックルは地面にぶつかった。今だ！私は急いでバッグから空のモンスターボールを取り出した。
「えいっ！」
ヒュッ。
カッ。
投げたボールはムックルの背中に当たった。ボールが半分開き、中から閃光が走った。光に包まれてムックルはボールの中に吸い込まれていく。
ガタッ。ガタッ。
ポケモンをボールの中に捕らえても気が抜けない。ボールの中央にある開閉スイッチはまだ赤く点滅している。ボールが動かなくなるまでが勝負だ。
ガタッ……フォン。

ボールの揺れと点滅が収まり、ドレミのソの音がした。ふう……捕獲完了！私はムックル入りのボールへ歩んだ。そ～っとボールを右手で掴むと、柄じゃないけどポーズを取りたくなった。だって初めてポケモンをつかまえたんだもん。記念にポーズくらいとってもいいよね？ボールを右手に取ったまま前に出し、左手を曲げて顔の横でピースしてみた。

「ムックル、ゲットだぜ♪……な～んちゃってw」

パチパチパチ。

え？拍手の音？反射的に音のするほうへ振り向いた。拍手をしていたのは……。

「おめでとうございます、ヒカリさん」

つま先から頭のてっぺんまで熱くなった。数メートル先で手をたたいていたのはさわやか笑顔のコウキくんだった。そ、そんな……

……よりによってコウキくんにポーズ取ってるとこ見られるなんて……！？ふと昨夜見た結婚式の夢が脳裏に浮かんだ。

「キャーーーー！！私もうお嫁に行けないーーーー！！」

「ポチャッ！？」

「ヒカリさん……？」

私は素早くナポレオンをボールに戻した。驚くコウキくんをよそに私はマサゴタウンに向かって逆走した。

はずかしい！はずかしすぎる！なんでポーズなんか取っちゃったんだろう？しかも私おちゃめに右足まで上げてた！なんでアニメのセリフ言ったんだろう？なんでもっと周りを確認しなかったんだろう？もう前なんて向いて走れない！

鈍足の私が早く走れるのはママからもらったランニングブーツのおかげだ。ありがとう、ママ。まさかこんなときに加速スイッチ付のブーツが役に立つなんて……。私は顔を上げた。だって下ばっかり向いてたら上手く走れないんだもん。でもすぐに私は前を見ないで走っていたことを後悔した。道を走っていたつもりが、いつの間にか目の前には林が広がっていた。げっ。

「ぶつかるーーー！」
ゴンッ！
止まれるはずなんてなかった。痛みが体の縦から垂直に走った。
痛い……。私は自分の意識が薄らいでいくのを感じた。

＊

「はっ！？」
「わっ！？」
私は飛び起きた。……ってイタッ。目が覚めたと同時に体がズキッとした。なにがおこったんだっけ？
「大丈夫ですか？ヒカリさん」
「ポチャポチャア？」
横を向いたらコウキくんとナポレオンがいた。２人とも……いや、１人と１匹？とにかく両方とも心配そうに私を見ている。身体はまだ痛むから上半身しか起き上れない。
「ん……なんとか」
私が返事をしたらコウキくんとナポレオンは胸をなでおろした。
「よかったです」
「ポチャ～」
私はもう大丈夫だということを証明するために笑ってみせた。それにしてもどうして私倒れたんだろう？周りを見渡す限りまだ２０２番道路にいるみたい。
「どうして気絶したんだっけ？」
なぜか気絶する前の記憶が曖昧だわ。
「ああ、ヒカリさん……！」
コウキくんは私の前で膝をつき、右手を私に差し出すかのように上げた。なんだか長いセリフを言いそうな予感。
「あなたが無事でなによりです。コトブキシティに向かうであろうヒカリさんをお待ちしていたらなにかが遠くでキラリと輝いたので

す。常人にはわかりませんがボクには一目でわかりました。虹色に輝く黒髪。風でなびく流れるような長い髪。なにを隠しましょう？それはプラチナのごとく輝くあなたの髪の毛だったのです」

うわっ。前振りながっ！私はただ自分がどう倒れたか知りたいだけなのに。

「ただ事ではない様子のあなたの後姿。邪魔をしないよう、そっと近づいてみるとあなたが野生のムックルと交戦中ということを知りました。失礼ながら後ろであなたの戦いの様子を拝見させていただきました」

あ、ムックルを捕獲しようとしてたときからいたんだ。

「第三者のボクの目から見ても力の差は歴然。ただでさえ戦闘能力の高いポッチャマにアフロディーテの化身、ヒカリさんが指揮を取られているのでムックルが敵うはずありません。ところが慈悲深きあなたはムックルを倒さず捕虜にしたのです」

出た。アフロディーテ。倒すもなにも最初から捕獲するつもりだったんだけどな。モンスターボール手に入れるまで野生のポケモン何匹も倒しまくってたけど…。

「あまりにも見事な腕前だったのでボクはあなたに話しかけました。ところが…」

「ところが……？」

私は体を引き締めた。ようやく肝心の話が聞ける。

「転んでしまったのです」

「え？」

そうだっけ？

「ボクが褒めた直後ヒカリさんは仰向け（あおむけ）に転んでしまったのです」

「そ、そうなの？ナポレオン」

「ポ、ポチャ！」

話しかけられたナポレオンはビクッとしたあと2度頷いた。ぎくしゃくしてるみたいだけど突然話しかけられてビックリしたのかし

ら？

「きっと緊張が解けてうっかりしていたのでしょう。気にしないでください」

「ありがとう、コウキくん」

私たちは互いに笑った。コウキくんの笑顔には癒されるなぁ。でもなにか肝心なことを忘れているような……。

「ああ、ヒカリさん…！気絶したあなたはまるで眠れる森の美女。その美しい寝顔を少しでも長く眺めていたいと思いましたが、悪夢から姫を救うのが王子の務め。いつ甘味な夢が悪夢にすりかわり、あなたの気高い精神を蝕むか想像をしただけで恐ろしい。永遠に眠る美しい少女は神秘的ですが、同じ時を過ごせないのはボクにとって永遠の苦痛を意味します。そんなのボクに耐えられそうにありません。一刻も早くあなたを目覚めさせようとキスを……」

「えぇ！？」

私は慌てて唇を覆った。顔が熱くて目から火がでそう。もしかして私キスされちゃったの？コウキくんに？は、はずかしい…！

「……しようとしましたが」

「へ？」

私は手を下ろした。当たり前のことだけど、息がしやすくなった。

「キスをしようとした」けど……？

「ヒカリさんのナポレオンにはたかれてしまいました」

「は、はあ……」

顔の熱はすぐにクールダウンした。そっか。私、コウキくんにキスされなかったんだ。もったいないようなほっとしたような…。私はナポレオンをチラッと見た。

「……チャッ！」

ナポレオンは地面に唾を吐いていた。……お行儀悪いわね。私のしつけが悪いのかしら？う～ん。これはナポレオンにお礼を言うべきか叱るべきか迷うわね。コウキくんの手前でナポレオンをほめるのも失礼だし。ナポレオンの対応には困ったけど、とりあえずコウ

キくんの目を盗んで頭を撫でておいた。
「ポチャッ♪」
機嫌取り成功。次はコウキくんの機嫌を取らなきゃ。
「ごめんね、コウキくん。また助けられちゃったね。」
「いえ、当然の義務です！」
「ううん。初めて会ったときからお世話になりっぱなし。お礼になにかできることないかしら？」
私は髪をかきあげた。私の予想ではコウキくんは私の負担になることは願わない。きっと私にとってもコウキくんにとってもプラスになることを提案するはず。
「ではボクにコトブキシティを案内させてください！あとぜひお食事をともに！」
コウキくんは右腕を胸に当てて答えた。ビンゴ。計画通り。
「そんなのでいいの……？」
私は戸惑っているふりをするため人差し指をあごに添えた。
「もちろんです！それにヒカリさんに紹介したい場所がたくさんあるんです」
「じゃあお願いするわv」
私はふっと笑った。ナポレオンは私の足元でこっそりへっと笑っていた。私って実は悪女なのかしら？アキコちゃんには敵わないと思うけど。

第１４話　酔い（後書き）

とあるウェブ漫画では「いつでもどこでもかっこつけろ！必ず誰かが見ている！」と書いてありました。かっこつけるのはいいですがほどほどに・・・＾＾

第15話　知る

ガラララララッ。
キャリーカートの音が林道に響く。私はあいかわらず202番道路にいる。気絶するまえと違うのはコウキがいるところ。私は今、コウキくんの好意に甘えてカートをひいてもらっている。それにしてもさっきから誰かに見られているような……気のせいかしら？
ま、なにかあってもコウキくんが守ってくれるわv……実際に戦うのはヒコザルかもしれないけど。ナポレオンもいるし大丈夫よね。現在ヒコザルは私たちを守るため手前を歩いている。なのにナポレオンときたらちゃっかりカートの上に座ってる。いくら歩くのが苦手だからって……。あっ！あくびした！もう……。
「ムックルの愛称は決まりましたか？」
カートをひきながらコウキくんは訊ねてきた。えらいなぁ、コウキくん。ナポレオンも乗ってるから重いはずなのに嫌な顔を一つもしないで。
「ええ」
私はバッグからムックルの入ったボールを取り出した。ムックルをボールから出すため、真ん中にある開閉スイッチを押した。
「出ておいで」
ボムッ。
「クルー！」
ムックルは翼をバサバサ羽ばたかせながら私の肩にとまった。
「こんにちは、ムックル」
「クルックー」
ムックルは元気な声で挨拶を返した。私の捕まえたムックルはオス。性格は陽気。さっき図鑑で調べたから間違いない。
「私はヒカリ。あなたのことクルル♪って呼んでいい？」
「クルッ！」

クルル♪は右翼を挙げた。ＯＫって言ってるみたい。
「さっきは攻撃してごめんね。この子はポッチャマのナポレオン」
「ポチャッ？」
寝ぼけ眼でナポレオンは私の肩にとまっているクルル♪を見た。
さっきまで寝てたわね……。
「クルル♪ですか。かわいらしいお名前ですね。さすがヒカリさんｖ」
「クルー♪」
「アハハ。ありがとう。クルル♪も気に入ったみたい」
クルルは私の肩から離れた。喜んでいるのか辺りを飛び回っている。
「あ、そういえばボクもヒカリさんを見習ってヒコザルに名前を付けました」
「本当！？」
ちょっと意外。コウキくん真面目だから愛称付けないと思った。
「はい。アポロンと名付けました」
「ウキッ」
私は思わずクスッと笑った。きっとギリシャ神話の太陽神アポロンから取ったんだ。さすがロマンチスト。
「ギリシャ神話から名付けるなんてコウキくんらしいね」
「恐縮です」
そんなこんなで話しているうちに町が見えてきた。景色は緑から灰色へ移り変わった。自然の静けさは都会の騒音でかき消された。
まもなくコトブキシティ。ちょっとドキドキしてきた。私、華麗に都会デビューできるかしら？

＊

コトブキシティは一言でいうとコンクリートジャングルだった。
ビルはあるしマンションもあるし高い建物がたくさんある。それ以

外のお店はカラフルで看板を見ただけで目がチカチカする。人工的な色。不自然な色。建物にやさしい色を使うフタバタウンとは大違いだ。あちこちから足音が、人の声が、音楽が、聞こえる。不安だけどワクワクする。初めて見る世界。

「すっご〜い！大きい建物がたくさんある！」

私は思わず辺りをキョロキョロ見渡した。田舎者丸出しなのがバレるかもしれないけど体が勝手に動いちゃう。周りにあるものは全てこの目で刻みたい。そんな気分だった。

「ハハハハ。コトブキシティは近代的な町ですからね。ＩＴが発達してるんです。もっとも、トバリシティのほうがビルは多いみたいですけど」

うそ！じゃあこれはまだ序の口なの！？

「この町以上に都会なところが他にもあるの！？」

「はい。東のほうに」

えっ〜と東ってどっちだったかしら？北と南ならわかるんだけど……。

「ただでさえこの町で迷いそうなのに……」

私は息をついた。これじゃあジュンを見つけられるかどうかもわからない。ジュンも私と同じように初めての都会にワクワクしてるはず。きっとこの町の隅々まで回ったあと次の町へ行きそうだけど……。

「安心してください。そのためにボクがいるんですから。つい最近までこの町に住んでいたので道案内はお任せください」

「えぇっ！？」

じゃあやっぱりコウキくんは都会の男の子だったんだ！マサゴタウン出身じゃなかったんだ。

「あれ？言ってませんでしたか？ボクはコトブキシティ出身なんです。ナナカマド博士がマサゴタウンに戻ってきたので引っ越したんです」

「は、初耳だわ……」

うぅ……コウキくんと会ってからペースが乱されっぱなし。これはポケモンと出会ったせい？それとも都会のせい？まるで急に運命の歯車が動き出したみたい。

「言い忘れてすみません。お詫びはランチで後ほど……。ヒカリさんにボクのこと知ってもらいたいですし、ボクもヒカリさんのこともっと知りたいです」

ドキン。

胸がきゅんとした。嬉しい。フタバタウンでは町中の人が知り合いだったからそんなこと言われたことなかった。

「ポチャポチャーッ！」

ビクッ。

私はぎょっとして振り返った。ナポレオンがカートの上でバタバタしていた。せっかくのムードが台無し。もしかしてわざと邪魔したのかしら？

「ああ、すみません。お腹が空いたんですね」

「ポチャ！」

ナポレオンは腕を組んで顔を横に向けた。ヒコザル……もとい、アポロンはコウキくんの肩に乗ったままナポレオンをなだめていた。

「ウキキキキッツ。ウキッ」

「もうしばらく我慢してください。これからトレーナーズスクールに行きますから。そこで荷物を置いたあとご飯を食べにいきますから」

「ポチャ～」

ナポレオンはまだムスッとしている。私もお腹が減ってきたし、仕方ないか。私は数歩下がって、ナポレオンの前でしゃがんだ。

「ごめんね、ナポレオン。もうちょっとだけ我慢して、ね？」

両手を合わせて謝った。ポッチャマはプライドの高いポケモンだからトレーナーが下手に出るしかない。コウキくんとアポロンの前だ。恥ずかしくないといえば嘘になる。でも私はまだトレーナーとして未熟だもの。これからはもっとしっかりしなきゃ。

「……」

ナポレオンはじっと私を見ている。まるで私を試しているように。

「ポチャッ」

ナポレオンはカートから飛び降りて歩き始めた。私たちより前を出たあと振り返った。

「ポチャ、ポチャポチャ？」

もしかして「で、トレーナーズスクールってどこにあるんだ？」と、言ったのかしら。

「まっすぐ進んで曲がり角を左に行ったところにあります」

答えを知らない私のかわりにコウキくんが答えた。私の方向音痴もいつか直さなきゃ。

「ポチャッ」

ナポレオンは再び歩き始めた。それに私とコウキくんとアポロンが続く。まだ旅は始まったばっかりだ。あせらずじっくり味わおう。ジュンにもそれが理解できますように。

第１５話　知る（後書き）

今回の話はイマイチです。序盤は番外編みたいな話が多いです；

第16話　変人

ようやくコトブキシティについた私たち。お腹が空いたけど、お昼を食べるまえにポケモン塾へ寄ることにしたわ。私たちはコウキくんのおかげで、私たちは確実にポケモン塾に近づいていた。

「この十字路を渡って左に曲がるとポケモン塾、こと、トレーナーズスクールがあります。右側にポケモンセンターがあるのでそれを目印にするとわかりやすいですよ」

「ふ～ん。ありがとう」

信号が青になった。私たちは横断歩道を渡った。ナポレオンとアポロンは私とコウキくんの左右に並んで歩いている。ナポレオンは眉を吊り上げて周囲を確認していた。……私と同じね。初めて都会に来たんだもの。見るもの聞くものめずらしくて落ち着かないのね。

「あの木造の建物がトレーナーズスクールです……ってあれ？」

コウキくんの足が止まった。それにならって私とポケモンたちの動きも止まる。道を間違えたわけじゃない。トレーナーズスクールの看板もちゃんとある。問題は建物の横にある街灯にあった。茶色いコートを着た３０代くらいの長身の男性が街灯の後ろに隠れている。それも黒くて細い棒の上にランプがついているエレガントな街灯に、よ。いくら細身の男性だからって街灯に隠れるには無理があるわ。どうみても丸見え。子どもの私でさえ隠れきらないのに。

「……怪しい人がいますね」

「う、うん……」

正直どう対応するべきか迷う。通報すればいいのか無視すればいいのかわからない。コウキくんに話しかけようとしたとき、ナポレオンが鳴いた。

「ポチャ」

「ん？」

下にいるナポレオンを見たら黒いものを持っていた。これは……

手帳？
「落し物ですか？」
「そうみたい」
私は手帳を開いてみた。
「ちょうどいいですね。警察に届けるついでに通報を……」
「あ！」
手帳には街灯に隠れている問題のおじさんの写真が貼ってあった。黒髪で前髪が眉上。眉毛は太くてつりあがっている。口元はひらがなの「へ」みたいな形で、眉毛との相乗効果で怒っているように見える。ちょっと堅苦しいな。
「あそこにいるおじさんの写真だ！渡してくるね」
「ええ？」
コウキくんを置いて私は走った。ナポレオンも私に続く。
「ナポレオン！グッジョブ♪」
「ポチャ！」
私はナポレオンにウインクした。助かったわ。手帳渡したらさっさとトレーナーズスクールに行こうっと。
「ヒカリさ～ん！待ってくださ～い！」
コウキくんが慌てて追いかけてきた。でももう遅い。
「おにいさん、落としましたよ」
話しかけちゃった。おじさんって呼んだら失礼だからおにいさんと呼んだ。
「ナヌー！！」
おじさんは驚いて街灯から離れた。そっと話しかけたほうがよかったかしら？
「なぜ私が国際警察の人間だとわかってしまったのだ！？」
おにいさんはなぜか動揺していた。あ、これ警察手帳だったんだ。初めて見たわ。
「えー。普通に話しかけただけなのにー」
コウキくんはいつもより低い声で答えた。呆れているのかしら？

なんだか私に話しかけるときと違って冷たいような……。
「……へっ？普通に話しかけただけ？」
おじさんは目をパチクリさせた。
「いーや。私をただ者ではないと見抜いて話しかけたのだろう？その眼力恐るべし……！」
「は、はあ……」
なんだか勘違いしてるみたいだけど……ま、いいわ。私は忘れないうちに手帳を差し出した。
「おにいさん、手帳落としましたよ」
「ややっ。親切なお嬢さんだ。ありがとう。君たち、名前は？」
えー？普通名前を訊くとき自分から名乗るんじゃないのー？
「初めまして、おにいさん。私はヒカリと申します」
「……こんにちは、おじさん。コウキです。」
コウキくーん。言葉に棘があるよー。確かに変な人だけど初対面の人に失礼だよー。
「少年！おじさんではなくおにいさんと呼びなさい！」
あ。やっぱり気にしてるんだ。
「レディーに先に名乗らせるなんて……。紳士ならまず自分から名乗るべきですよ、おじさん」
「うぐ……す、すまない」
この2人仲がわるいなぁ…。ふと気になってナポレオンとアポロンを見た。水タイプと炎タイプのポケモンなのに2匹とも仲良く昼寝をしていた。……まさかおじさんに関わりあいたくないからって狸寝入りしてるわけじゃないよね？
「と、とにかく！正体がバレたんだ。自己紹介をさせてもらおう」
おじさんはせきをついてごまかした。
「わたしは世界をまたに駆ける国際警察のメンバーである。名前は……いや、君たちにはコードネームを教えよう」
はいはい。それで？
「そう。コードネームはハンサム！みんなはそう呼んでいる」

「ぷっ」
今笑ったのは私じゃない。コウキくんだ。
「なにか問題あるかね？」
「いえ。別に」
コウキくんは目をそらして答えた。ちょっといじわるね。
「このシンオウ地方に近頃人のポケモンを奪ったりするわるいやつらがいるらしい。そして私は怪しいやつがいないか探していたのだよ！」
「おじさんが一番怪しいですけどね」
「ぷっ」
今笑ったのは私。だってコウキくんの言うとおりだもん。街灯のうしろに隠れるなんてまるでストーカーみたい。
「……聞かなかったことにする。君たちも怪しいやつらを見かけたら気をつけてくれ！」
都合の悪いことは忘れるのが大人デスカー？
「それにしてもお嬢さん、手帳を届けてくれてありがとう。親切なお譲さんにはこれをあげよう！」
ハンサムさんはポケットから赤い腕時計みたいなものを取り出した。
「これは？」
「ポケッチだ。時計だけでなく計算機、メモ、歩数カウンター、ポケモンリストの機能を備えている」
うわー。便利ー♪
「キャンペーンでもらったがわたしには不要のものだからな。お嬢さんなら使いこなせるだろう」
「ありがとうございます」
時計持ってなかったから助かるわ。
「ボクにはなにもないんですか」
痛っ。コウキくーん。口をとがらせないでー。
「こういうときはレディー優先だろう？な～に、町のあちこちにい

るピエロの出す問題に答えれば少年ももらえるさ」
「そうですか」
コウキくんそっけないな。うーん。やっぱりコウキくんも子どもね。
「そこまでいうならかわりにこれをやろう！最近流行のバトルレコーダー！」
ハンサムさんは反対側のポケットから青いリモコンみたいな機械を取り出した。
「これを使えばバトルを記録・発表・鑑賞できるぞ！」
「……ありがとうございます」
「うむ！」
話が一段落したところでハンサムさんは周囲に目を配った。
「……それでお願いだが、もしわたしを見かけても仕事中だから話しかけないでくれ。…いや、やっぱりさみしいから……じゃなくて怪しいやつを見かけたりなにかあったりしたら声をかけてくれ！さらば！」
そう言ってハンサムさんは十字路まで走り、曲がり角で消えてしまった。慌ただしい人だな。ジュンを思い出すわ。
「へー。国際警察って大変なんですねー」
「コ、コウキくん……？」
あ～ん。ハンサムさんがいなくなったのにブラックコウキくんのままだ～。
「ヒカリさん」
「ほえ？」
いきなり呼ばれたからまぬけな返事をしてしまった。コウキくんはもらったばかりのバトルレコーダーを私に向けた。
「これはヒカリさんに差し上げます」
「えっ？いいの？」
せっかくハンサムさんからもらったのに。
「ぼくは研究専門ですから。バトルは専門外です」

そっか～。じゃあいいのかな？
「ありがとう」
私はおとなしくバトルレコーダーを受け取った。今のところ使うつもりはないけど。
「疲れましたね。さっさと荷物を置いてお昼にしましょうか」
さっきまでのブラックさが嘘のように、コウキくんは爽やかスマイルを浮かべた。……そうよね。きっとお腹が空いていてイライラしたのね。ナポレオンのときと同じよ。私たちはトレーナーズスクールの入り口の階段を上がった。お昼ご飯なににしようかなぁ……。

第１６話　変人（後書き）

コウキは腹黒くありません。・・・・・・・・たぶん。

第17話　優等生

目の前にあるのは都会にしてはめずらしい木造の建物。となりには『トレーナーズスクール　トレーナーの第一歩！』と書かれた看板がある。

「トレーナーズスクールって便利ですよ。以前通っていたんですけど、ポケモンの基礎知識を教えてくれるだけでなく旅のトレーナーも泊めてくれるんですよ」

「便利だね～」

私たちはトレーナーズスクールの入り口を通った。すぐ横には階段がある。コウキくんは受付の人に軽く挨拶すると階段に向かった。

「ジュンも昨夜はここに泊まったのかもしれませんね。ここの経営者は父の学生時代の知り合いなんですよ」

「へ～。すごいね～」

やっぱり高学歴は違うな～と感心しながら2階に上がった。フタバタウンには塾なんてない。正直塾がどういうものか正直気になる。

「1階は一般の塾生徒用です。2階はエリートトレーナー養成クラスです。エリートトレーナー養成クラスはいわば小学6年生しかいない少人数の学校です。普通の学校と同じ授業を教えていますが、ポケモンの授業に1番力を入れています」

「本格的ね！」

「はい」

いいなぁ……もしフタバタウンにあったら私も通ってたのに。2階は1階と同じようにいくつか教室があった。コウキくんは1番さわがしいクラスのドアノブに手をかけた。変なおじさんと会って予想以上に時間がかかったけど、やっとトレーナーズスクールに入れた。ポケモンたちは疲れていたのでボールに閉まっておいた。もう1時過ぎてるし早く荷物置いてご飯食べた～い。

ガチャッ。

「なんだってんだよー！」
ドアを開けたと同時にその声は聞こえてきた。うっ。この声。この口癖。まさか……。声の持ち主の姿は見えない。黒板の前のほうの席に同年代の子の人だかりがあるけど、たぶんその中心にいるんだと思う。
「なんだってオレがテストで４０点取るんだよ？ありえねーよ！」
「まあまあ、模擬試験だし」
「超初心者にしては悪くないと思うぜ？」
ドンッ。
机をたたく音が聞こえた。
「ちきしょう！オレは体育しか取り柄がねーのかよ！」
クラス中がどっと笑った。あ～あ。ジュンだ。絶対ジュンだ。探す手間が省けたわ。見つかったのはいいけど、今クラスで笑いものにされているジュンにはあまり近づきたくないなぁ……。だって私までバカだと思われちゃうもん。どうしようかと迷っていたらコウキくんが１歩前に出た。
「どうかいたしましたか、みなさん？」
みんなはいっせいに振り向いた。ドアを開けた音とジュンの叫び声が同時だったから、気づかなかったんだわ。みんなはコウキくんを見たとたん、コウキくんのほうに寄ってきた。……特に女の子を中心に。むぅ～。妬けちゃう。それだけでも嫌なのに故意か事故か、女の子に押しのけられた。もうっ！
「キャーー！コウキくーんｖ」
「コウキ！久しぶりじゃん！」
「元気にしてたー？」
「ポケモンバトルしようぜ！」
「わたしに会いにきてくれたの？」
「またここに通ってーｖ」
次々に発せられる好意的な言葉。私はただ後ろでその様子を見守っていた。コウキくんは人気者だ。アキコちゃんによると、女の子

には誰でも優しいらしい。もしかして、私以外の女の子にも甘い言葉をささやいていたの……？そう考えると胸が痛くなった。私はコウキくんのことをまだよく知らない。十分ありえる。

一瞬視界がぼやけてバランスを失いかけた。ふらついた足元にぐっと力をこめる。めまい？お腹が空いたせいかしら。居心地が悪かったから黒板のそばにある窓に近づいた。荷物はその辺に適当に置いてきた。風に当たれば少しはよくなるかも。重いか軽いかわからない足取りで歩いていたら誰かに腕をつかまれた。

「おっ！ヒカリ！おまえも勉強か？」

腕をつかんだのはジュンだった。机に座ったままこっちを見ている。コウキくんのほうに気をとられて忘れていた。

「ま、まあね……」

「オレ今日1日だけ体験授業受けたんだ！けっこう面白かったぜ！フタバタウンにもこういう塾あったらいいのにな～」

私は周りを見渡した。あちこちに生徒がいたけど、ほとんどコウキくんのほうに集まっていた。先生はどこにも見当たらない。

「先生は？」

「もういないぞ。テストやったらさっさと帰ちまった。始業式からいきなり授業とテストがあるだなんてひどいよな～。ポケモンの授業だったからいいけどさ」

うわっ。さすがエリートクラス。初日から授業とテストがあるんだ。

「オレなんかポケモンのタイプと相性全部覚えたぜ！……そこしか覚えてなかったからテストではわりぃ点取っちまったけど」

ジュンは頭をかいた。４０点か……。普段の学校の成績よりマシだから努力したほうだと思う。私は軽く息をついた。

「昨日ポケモントレーナーになったばっかりなんでしょ？それにしては良いほうじゃない」

「そうか？」

「うん」

ジュンの顔が電球みたいに明るくなった。本当に行動も機嫌もころころ変わるんだから。

「でもなあ、自分の大事なポケモン傷つけたりしないためにがんばるのがトレーナーだからさ。もっとがんばらなきゃな」

「そうだね」

ふ〜ん。ジュン、少しは成長したな。幼馴染の成長は素直にうれしい。異性としてはあんまり興味ないけど。

「勉強は嫌いだけどポケモンのことなら歓迎だぜ！ヒカリは黒板に書かれてること覚えたのか？」

私は黒板を見た。ざっと見たところテストの復習みたいだ。ポケモンのタイプ、相性、状態異常、道具について書かれてある。これさえ覚えれば戦況はまるわかりといった感じにまとめられていた。

「もう知ってるから覚える必要ないわ」

「そっかー……って、ええーーー！？」

頭をかたむけたと思ったら即座に顔をしかめてこっちを見た。ジュンのような百面相だと顔の筋肉が忙しいわね。

「いつ覚えたんだよ！フタバタウンにはポケモン教えてくれる人いないじゃん！オレのダディはめったに帰ってこないし」

ポケモンは奥が深い。確かに普通の学校ではポケモンを授業では扱っていない。フタバタウンのような田舎町ならなおさらだ。だからこそポケモントレーナーになりたい人はこういう塾に通う。

「昔アキラからもらったポケモンの教科書で勉強したの。基礎知識は全部暗記したわ」

「アキラかよ……」

ジュンは舌打ちした。ジュンもアキラと面識がある。だけどアキラの切れ長の目と黒い服のせいでジュンはアキラを不審者（ふしんしゃ）扱いしていた。しかもアキラをこわがって３ｍくらい離れたところで隠れて監視していた。私にもアキラにもバレバレだったけど。

「まだあんなやつのことを覚えていたのかよ。今頃あいつおまえのことなんて忘れてるよ」

むっ。そんなことないもん！！
「余計なお世話よ！それよりハイッ。これ」
話題を変えるため半ば無理やり忘れ物をジュンの胸に押し付けた。
例のジュンママから預かった封筒だ。
「なんだこれ……？」
ジュンは封筒を開けた。中には三つ折りされた地図が入っていた。
ジュンは地図とは知らずに折られた紙をカサカサ開いた。
「おっ♪やった！タウンマップ！」
地図には上の角が出っ張っているいびつな六角形みたいな島が印刷されていた。ニホンの北側の先っぽにある島、それがシンオウ地方だ。地図かぁ…。いいなぁ、私もあとで買おっかな。
「サンキュー☆……って二つも入ってる！？」
私はすかさず反応した。ほ・し・い……！方向音痴なせいか地図があると安心する。たとえシンオウの全体地図でもないよりかはマシだ。
「うーん。二つあってもなー。いいや。ヒカリ、これやるよ」
「ありがとう」
やったー♪地図ゲットー！でもこれだけじゃ心細い。私は深く息をついた。
「はぁ……」
「どうしたんだよ？ヒカリ」
私は地図をぼんやり見ながらつぶやいた。
「バラ売りでもいいからシンオウ地方の町・道路・森・洞窟・水路、ありとあらゆる場所の詳しいルートが描かれてある地図があったらいいのに……」
ジュンは目をパチクリさせた。腕を組んでしばらく考え込んだけど頭をボリボリかいた。
「さすがにそれは無理だろ」
「だよね」
さすがに欲張っちゃいけないわね。詳しい地図は道中で手に入れ

るしかないか。
「えーーっ！コウキくんお昼まだなのー！？」
　コウキくんがいる場所で女の子の1人が大きな声を上げた。クラスの注目がコウキくんのいる場所に集まった。
「ええ、ちょっと忙しくて……」
「一緒にご飯食べに行くー？」
「ダメー！コウキくんはわたしと食べに行くの！」
「お弁当余ってるけど食べない？」
「私が今からここで作ってあげるv」
　む～～。なによあの女の子たち！コウキくんが逆ナンされている様子を見て胃がムカムカしてきた。ただ単純にお腹が空いたわけじゃないと思う。ああ、これがやきもちなのね…。コウキくんのことが好きかどうかまだわからないけど、他の女の子に取られるのはなんだかくやしい。ジュンに私の気持ちなどわかるはずがなく、のんきに話しかけてきた。
「モテモテだな～。あんなやつほっといて飯でも食いに行こうぜ、ヒカリ」
　こういうときジュンと話すと気がまぎれる。迷惑だけど、やっぱりいいやつ。
「……まだ食べてなかったの？」
「テストの直前まで勉強してたんだ！」
「えらいね」
　胸を張って話すジュンを見て笑った。いつまでたっても子どもなんだから。
「それでさー、オレ安くてうまそうな店見つけたんだぜ！たしかマグ……」
　店の名前を言いかけてジュンは黙った。うきうきした顔が丸い粘土をつぶすようにしかめっ面になった。どうしたのかしら？ジュンの視線を追うとその先にはコウキくんがいた。私たちに向かって歩いてくる。

「すみません、ヒカリさん。だいぶ待たせてしまって。では約束通り食事に行きましょうか」
きゅんv
胸に小さな炎が灯った。他の女の子たちに誘われたけど、私のために全部断ってくれたんだ。うれしい……！
「あっ。うん！」
コウキくんに返事したあと、ジュンのほうを向いた。
「ごめんね、ジュン。コウキくんと先に約束してたの」
ジュンの右のまゆげがぴくっと動いた。見るからに不機嫌そう。
「また今度ね」
コウキくんに誘われて本当はうれしかったけど、ジュンの前ではなるべく残念そうな顔をした。ジュンに背中を向けた直後ジュンは小さいけどはっきりした声で言った。
「オレも行く」
急に周りが静かになった。クラスに緊張が走る。きっと氷ポケモンが攻撃技の『凍える風』を使ったらこんなふうにひんやりするのかも。コウキくんは小さなため息をつくとジュンに言った。
「……残念ながらそれはできません」
「なんでだよ？」
目をつり上げながらジュンは訊いた。私はコウキくんとジュンを交互に見た。二人の間からただならぬ空気が流れている。その中心にいる私はきまずい思いをしていた。恋のときめきとは違う感覚で息苦しい。
「それはぼくたちはこれから高級フランス料理を食べに行くからです」
あ。もうお店は決めてくれたんだ。
「……予約はしたのかよ」
「ええ、もちろん」
コウキくんがさわやかに笑ったにもかかわらず、緊張は解けなかった。……ん？ストップ。いつ予約したの？もしかして私が気絶し

てるあいだ？……だとしたら用意周到ね。
「今さら人数を変えられません。残念ですが、また次の機会に。それでは、もうすぐ予約した時間になるので失礼します」
コウキくんは私の手を優しく取った。ドアの前までくると、帽子を取ってみんなに一礼した。
「それではみなさん、ＡＵ　ＲＥＶＯＩＲ（オ・ルヴワール）」
コウキくんはドアを閉めた。私と手を繋いだままで。

第17話　優等生（後書き）

知っているかもしれませんが”ａｕ　ｒｅｖｏｉｒ”はフランス語で「さようなら」という意味です。
コウキはフランスかぶれの紳士ですね。そのうち”Ｂｏｎ(ボンジュール)ｊｏｕｒ”とか言いそうです（笑）。

（特別編）　第１７．５話　金髪くせっけ少年　（前書き）

ジュン「よっ！みんな！オレはフタバタウンのジュン！……ってもうみんなオレのこと知ってるよな？なんたってオレは未来のポケモンチャンピオンだもんな！ん？作者のサギタリアスはどこだって？……そんなのオレが知るわけないじゃん。ヒカリに訊けば？」

（特別編）　第１７．５話　金髪くせっけ少年

オレは机の上にあるペンケースを思いっきり投げた。ペンケースはドアにぶつかり、中に入っていた鉛筆はあたりに飛び散った。

「なんだってんだよー！」

オレは椅子にドカッと座った。ヒカリはコウキに連れてかれちまった。たったそれだけのことなのにムカつく。今までだって似たようなことはあった。女友達と遊ぶ約束をしていたからオレと遊べなかったこともある。２人で話している最中に男友達がヒカリに勉強を教えてもらいにきたこともある。だけどあいつだけは……コウキだけはいやだ！

昨日知り合ったばかりなのにヒカリに馴れ馴れしくしやがる。何様だよ、あいつ。あいつの全てが気に入らない。なにもかも気に食わない。なんだかくやしい。コウキにはなにひとつかなわない気がした。勉強も、お金の数も、ポケモンバトルも。高級フランス料理？ふざけんな！いくらすんだよ？オレ今４０００円くらいしか持ってねーぞ。ヒカリがあいつに取られると思うと胸がムカムカして頭がカッとなる。なんなんだよ？この気持ち。

「おい、ジュン。拾ってきてやったぞ」

こげ茶色の角刈り頭のクラスメイトがペンケースを机の上に置いた。テストで悪い点取ったときも慰めてくれたやつだ。名前はなんだったっけ？そいつは心配そうにオレを見ていた。そいつの顔を見て、オレはペンケースを投げたことを後悔した。こんなにいいやつに迷惑かけちまうなんて……。

「サンキューな。ええっと……」

「ナオトだよ」

「サンキュー、ナオト」

オレは口元を緩めた。ちゃんと笑えたかな、オレ？気分転換に冒険ノートを広げた。昨日取ったノートだ。コウキを見返してやりた

い。そしてなにより、ヒカリにほめられたい。オレだってやればできるんだ。いつかポケモンバトルでヒカリとコウキに勝ってやる。

オレは改めて鉛筆を握りノートの最初のページを開いた。まずはテストで１００点取れるようにがんばるか。

『モンスターボールでつかまえたポケモンは同時に６匹持ち歩ける。そうしてつかまえたポケモンを育ててたたかわせる人をポケモントレーナーと呼ぶ。トレーナーにはさまざまなしゅるいがあるが、多くのトレーナーの目ひょうはかく地のポケモンジムにいる強いトレーナーに勝つことだ！』

うん。これは基本だな。これは誰でも知ってることだな。先生が口走ったことをメモったけど漢字あんま書けねーから所々ひらがなと漢字が混じって読みづらくなっちまった。次はポケモンのタイプと相性が書かれているページを開いた。ここは黒板に書かれたものを写したから漢字はバッチリだ。ここらへんももう覚えたけど復習するか。

『全てのポケモンにはタイプ（属性）がある。タイプは全部で１７種類ある。炎、水、草、電気、氷、格闘、毒、岩、地面、飛行、エスパー、虫、ゴースト、悪、鋼、ノーマル。とくにこれといった属性がない場合、そのポケモンはノーマル（無属性）だ。どのタイプにも得意とするタイプと、弱点となるタイプがある。草は炎に弱い。炎は水に弱い。水は草に弱い。ノーマルに弱いタイプはいないが、そのかわりノーマルの弱点は格闘だけだ』

……ノーマルタイプは特別なんだな。あとで一匹捕まえようかな。オレのナエトルは草タイプか。ヒカリのポッチャマには勝てるけど、コウキのヒコザルには負けちまうな。

『タイプはポケモンとわざの両方にある。ポケモンが自分のタイプと同じタイプの技を使うと、相手に与えるダメージが1．5倍になる。さらに相手のポケモンのタイプが自分のポケモンの技のタイプを弱点とする場合、ダメージは2倍になる』

ということはナエトルがポッチャマに『葉っぱカッター』を使えばダメージが……ええっと……3倍？4倍？……1．5＋1．5＝3．0だから1．5＋2．0は……そうだ！3．5倍になる！これであの生意気なポッチャマもイチコロだぜ☆…って違う！たしかにヒカリのポッチャマは生意気だがコウキのほうがムカつくやつだ！そのうちヒコザルが弱点とする水タイプのポケモンを捕まえなきゃいけねーな。お次はポケモンの状態異常を覚えるか。

「なあ、ジュン」

ナオトが話しかけてきた。なんだよ、人が真面目に勉強してるときに……。でもこいつにはペンケースを拾ってもらった恩もあるし、まあいっか。

「なんだ？」

「さっきの女の子ジュンの知り合いか？」

胸がチクッとした。さっきのコウキとのやりとりを思い出しちまったじゃねーか。

「……オレの幼なじみだよ。家が近所でさ、家族同然に育ったんだ」

オレとヒカリの付き合いは誰よりも長い。ヒカリとオレは母親同士仲が良かったから、赤ん坊のときから一緒だった。町の他のやつらと友達になったのは幼稚園に入ってからだ。

「かわいーなあ……。ガールフレンドじゃないのか？」

「いや、ヒカリはオレの妹のようなもんだ」

「はっきり言うなあ……」

ヒカリはオレの幼なじみで、親友で、妹だ。血は繋がってないけど家族だ。今までそうだったし、これからだってそうだろ？オレたちはず～～っと仲良し兄妹でいるんだ。昨日ポッチャマとナエトル

がオレたちの仲間に加わった。これからも色んなポケモンがオレたちの仲間に加わるだろうけど、オレたちはいつまでも仲良しでいるんだ。

「じゃあヒカリはコウキとできてるのか？」

ナオトがまた質問をしてきた。できてる？なんだそりゃ。

「できてるってなにがだよ？」

「つきあってるかってことだよ」

「コウキとは昨日会ったばかりだぞ？オレとヒカリのつきあいのほうが長いっつーの」

「そういう意味じゃなくて……」

ナオトは肩をすくめた。オレ、なにか悪いことでも言ったか？さっきから話が通じてないような……。

「だ～か～ら～……ヒカリはコウキのガールフレンドなのか？」

「はあっ？？」

ヒカリがコウキのガールフレンドだぁ？ねーよ。……ぜったいにありえねー！なったとしても全力で止めてやる！ポケモンを使ってでも！……ヒカリとコウキが恋人になった姿を想像してみた。ヒカリの腰に手を回すコウキ。……てめぇ、コウキ。その汚い手ぇどけろや。

「んなわけねーだろ！オレもヒカリもあいつとは昨日会ったばかりなんだぞ？それにヒカリがあんなヘラヘラした男の恋人になるわけねーだろ！」

「なによその言い方！」

斜め後ろでイスが動く音がした。さっきコウキにベタベタしていた女の一人だ。茶色い髪の毛を一つに縛っている。女にしては背が高い。見るからにかわいくねー顔だな。

「コウキくんはヘラヘラしてないわよ！あのヒカリって女のほうが遊んでるんじゃない？」

「なんだと！？」

オレも立ち上がった。ヒカリのことを悪く言うやつをほっておく

わけにはいかない。ヒカリは遊んでなんかいない。まじめに勉強していた。遊んでばかりいたのはオレだ！ヒカリをバカにするやつは誰であろうと許さねー！オレはあの女のところへ向かおうとした。

「やめろよ！ジュン」

ナオトに左腕をつかまれた。なんだよ。あのブス女を殴ってやろうと思ったのに。

「はなせよ」

「暴力はダメだよ！」

ヒカリに同じことを言われたことがある。誰かとケンカするたびにヒカリはオレを止めようとする。

「チサ、言いすぎだよ」

「ヒカリちゃんは悪い子には見えないよ」

２人の女がブス女をなだめた。あの女チサっていうのか。よし、いいぞ。おまえら。もっとやれ。

「どーだか。人を見た目で判断しちゃダメよ」

こいつそっぽ向きやがった。おまえは見かけも性格も悪そうだな。

「まあまあ、２人とも落ち着いて」

ナオトがオレとチサの間に割って入った。本当にこいついいやつだな。まるでヒカリみたいだ。

「ヒカリだっけ？あの子。コウキくんにふさわしいとは思えないけど」

ちげーよ、バカ。

「ヒカリがコウキにふさわしくないわけじゃねーよ。コウキのほうがヒカリにふさわしくねーんだよ」

「コウキくんをバカにするのっ！？」

やべえ。つい心の声を外に出しちまった。

「コウキくんはかっこいいし頭もいいしスポーツもできるんだから！ポケモンの知識も豊富。おまけに優しくてお金持ちなのよ！あんたと違ってね！」

ああん？なんだと？オレはともかくヒカリをなめるなっ！

「ヒカリなんて町一番かわいいって言われてるんだぞ！料理できるしオシャレだし頭だっていいしポケモンにも詳しいんだぞ！しかも市長の孫娘！誰にでも優しいしみんなに好かれてるんだぞ！」
「コウキくんだってオシャレでみんなに好かれてるわよっ！」
「お～ち～つ～い～て～！」
オレはチサとにらみあった。こんなやつの顔見ていてもうれしくないけど売られたケンカは買ってやる！ついでに勝ってやる！オレとチサトのにらみあいはどちらかが顔をそらすまで続くと信じていた。
「ヒカリちゃんとコウキくんって似てるね」
「くやしいけどお似合いだよね～」
沈黙は2人の女によって破られた。さっきチサをなだめていた2人だ。
「お似合いじゃねーよっ！」
「お似合いじゃないわよ！」
チサとオレの声が重なった。げっ。よりによってこいつと同時に同じこと言っちまうなんて……。
「たしかにお似合いだなー」
「2人とも黒髪だし」
「くやしいな～。コウキにはかなわね～」
男たちも次々に口にした。な、な、な……。
「つきあってるって言われても納得しちゃうよねー」
「ヒカリちゃんにならコウキくんゆずってもいいかなぁ」
おいおい。なに言ってんだよ？オレのヒカリがコウキとつきあうわけないだろ…？やばい。なんとかしねーと……！
「に、に、似合わねーよ！コウキは知らねーけどヒカリってけっこうドジなところあるんだぜ？足遅いし運動神経わるいし方向音痴だし恐いものが苦手で・・・」
「少しくらいどんくさいほうがかわいいぞ」
「女の子なら恐いものが苦手で普通だし……」

「さっきまでほめてたのになんでわるいところ言ってんの？」
男女に反論された。ううん、オレはどうすればいいんだ……？
「なんだってんだよー！」
オレは立ち上がると急いで持ち物をバッグに入れてドアに向かって走った。
「ジュン！どこに行くんだ？」
わりぃ、ナオト。オレ急いでいるんだ！
「ヒカリとコウキを探しに行くに決まってるじゃねーか！」
そう答えてオレは廊下を出た。……ん？ストップ！オレはクラスにUターンした。
「ナオト！コトブキシティで一番高いフランス料理店はどこだ？！」
居場所がわからないと探せないじゃん！
「コトブキスカイビルだと思う！たしか３８階に……」
「サンキュー！」
オレは廊下を突っ切ってトレーナーズスクールから飛び出した。
待っていろよ、ヒカリ。今助けに行くからな……！

（特別編）　第１７．５話　金髪くせっけ少年　（後書き）

ジュン「……ってなんだってんだよー！オレ今回限り主人公なのか！？この小説の主人公はヒカリ？なんでだよ？！」

第１８話　嵐と静けさ

私はとまどっていた。四角いテーブルの向こうでコウキくんは微笑んでいた。ナポレオンとナエトルは隣りのテーブルでポケモン用の食事を食べている。染み一つない真っ白なテーブルクロス。透明なグラス。白いお皿。銀色の食器。白いティーカップ。一見無機質なテーブルは色とりどりの食べもので寂しさを免れていた。

暖かい色をした木製の床。頭上にある謎の巨大な輪。銀色の輪はまるで天使の頭の上にあるリングみたい。そして私たちがいる場所はその輪以上に大きな円柱の上。この不思議な空間にはテーブルが１２個並べられていた。まるで時の流れを大切にするかのように。中心にはカウンターと厨房が設けられている。きっとその真ん中のスペースは時計みたいな場所の心臓なんだ。壁で厨房は隠されているけど、ここではなくてはならない存在。４つの通路がこの聖地をかろうじて他の大地とつなげていた。同じフロアながら独立している場所。私たちはコトブキスカイビル３階のフランス料理サロンにいた。

「気に入っていただけましたか？」

紅茶を一口飲み終えたコウキくんが訊ねてきた。私とは対照的にとても落ち着いている。

「ええ。でもこういう場所慣れてなくって……」

私はコウキくんを真似て紅茶を飲もうとした。だけどティーカップを持つ手が震えて上手くいかない。紅茶はどんどん小皿にこぼれていく。あ～ん、もったいない！誰か私の緊張感を取り除いてー！！私は救いを求めるようにナポレオンを見た。残念なことにナポレオンはウェイターにコンソメスープの味付けに文句を言っているところだった。

「すみません。いきなり高級レストランにお連れするとびっくりすると思ったので、質素なサロンを選んだのですが……」

「え？」

私は紅茶を飲むのをあきらめてテーブルの上に戻した。かわりに鴨肉のローストを切って口にした。舌の上でほどよいしょっぱさが広がる。ここってレストランじゃなくてサロンだったんだ。サロンって喫茶店のようなものかな。このサロンは一見地味だけどとても清潔感がある。むしろ潔癖すぎる。これが洗練された高級感なのかしら。う～ん……質素と言えば質素かなぁ……。

「ここはＳａｌｏｎ　ｄｅｓ　ｐｒｅｍｉｅｒｅｓ　ａｍｏｕｒｓと言います。コトブキシティで１、２を争うフランス料理を味わえます。もう１つの３８階にあるフレンチレストランもお勧めですがランチメニューはこちらのほうが豪華です。上にあるレストランはやや大人向けでフォーマルな格好をしないと入れません。あそこから見る夜景は格別ですよ」

鴨肉を飲み込んだ。ポルチーニソースと絶妙に合っていておいしい。濃厚だけどしつこくない味。口に近づけるとしょうゆみたいな匂いがする。あまりにもぜいたくだったから最初食べたとき緊張してて味がわからなかったわ。

「じゃあディナーに行くとしたらそっちね」

私はティーカップを手に取った。手の震えはもうおさまっている。……ディナーかぁ。行きたいな。いつか。この町は明日には去るから次いつ来るかわからないけど。そのときは誰と行こうかな。

「この店の名前はサロン・デ・なんとかだっけ？なんていう意味なの？」

私はくちびるをティーカップから離した。看板はアルファベットで書かれていたけどフランス語はさっぱりだ。英語読みだとＳａｌｏｎ　ｄｅｓ　ｐｒｅｍｉｅｒｅｓ　ａｍｏｕｒｓはサロン・デス・プレミア・エーモアになる。中学レベルの英語のわかる範囲で言えば、プレミアはたしか「最初」もしくは「最上級」という意味だわ。

「サロン・デ・プリミエール・アモール。初恋の間、とも言えますが、ここはオーソドックスに初恋喫茶店……と、いったところでし

ょうか」

コウキくんは紅茶を混ぜながら答えた。砂糖とミルクが溶け合い、明るい黄燈色がミルクオレンジになった。

「初恋……」

ふと思い当たるところがあって両手をひざの上に乗せて考えた。私の初恋の相手はアキラだ。よく考えたら1回しか会ったことがない。ときどき手紙やプレゼントを送ってくれたけれどかれこれ3年も会ってない。私の初恋は終わったの？まだ続いてるの？コウキくんを男の子として好きになれないのはアキラのことがまだ好きだから？私が食事をしない間も時間はすぎていく。お互い黙り込んでいるのでサロンに流れる音楽がよく聞こえる。

Je t'aime depuis jet e vois au premier fois.
Tout le temps je te vois, tu es ebblouissant
Et mon couer battant.
Ah! J'ai trouve que ce sentiment est amour.

男の人が歌っている。低いけどなめらかな歌声。きっとテノールで歌っているんだ。

Malgre je t'aime beaucoup,
Tu vas me laisser.
Tu as choisi un autre garcon.
Pas moi, mais lui.

力強いのにビブラートでむなしさが伝わってくる。一体なにを歌っているんだろう。

Pourquoi pas moi?
Je t'aime plus qu'il t'aime.
Ne sortira pas!
Je ne peux pas vivre sans toi.

ここでいったん音楽が止まった。沈黙がテーブルの上を支配する。
「最近初めて恋というものをしました」
ドクン。
心臓が大きく揺れた。沈黙を破ったのはコウキくんだった。真剣な眼差しで私を見つめている。あまりにも真剣だったから息を吸うのも失礼な気がした。

Mon vie est enfer depuis je t'ai vu.
Je souffris tous les jours.
Mais je ne renoncerai.
J'attende pour toi au monde supraterrestre.

「でもぼくは初恋で終わらせるつもりはありません。この恋を最初で最後の恋にしたい」
トクントクントクン……。
音楽が完全に止まった。早くなった胸の鼓動がよく聞こえる。胸から頭に血が上る。それって、もしかして……私……のこと?コウキくんの初恋が私?答えを知りたいのに、のどから声が出ないのはなぜ?
「今流れている歌は初恋の歌であり、失恋の歌でもあります」
そうだったんだ。だから切なかったんだ。
「初恋は実らない、と言いますがぼくは実らせてみせます」

まっすぐ私を見つめる瞳。顔をそらせない。まばたきもできない。
「ですから、覚悟してください……ね？」
ここでコウキくんはようやく笑った。いつもの笑顔だ。私は胸をなでおろした。心拍数は元に戻った。やっと楽に呼吸ができる。
「うん。がんばってね」
私は再びナイフとフォークに手をつけた。モッツレラチーズとトマトのサラダ、カボチャのポタージュ、チキンのロースト。緊張していて食事がのどを通らなかったのでテーブルの上にたまってしまった。どれを食べるか迷った。ナポレオンはテーブルを軽くたたきながらデザートを待っていた。ヒコザルはナイフとフォークを使って器用にステーキを切っている。コウキくんは迷うことなく規則正しく順番に食べていた。自分が誰を好きか、何をしたいか、何になりたいかはっきりわかっているコウキくんとナポレオンがうらやましかった。

＊

サロンから出ると下の階が騒がしいのに気づいた。サロンの周りを囲うガラスの通路から覗いてみると警察が1階でバタバタしていた。なにかあったのかしら？下をじっと見ていたら会計を終えたコウキくんがやってきた。
「どうかいたしましたか？」
「なにか事件があったみたい」
私たちが話をしている瞬間も入り口から次から次へと警察官が入ってくる。
「ここはセキュリティがしっかりしていますから大事には至らないと思われますが……スカイビルから出ますか？それとも他の階も見ますが？」
「う～ん……」
ランチは食べ終わった。もうスカイビルに用はない。この建物に

ある店は大人向けだし高級ブランドに興味はない。どうせなら外に出てハロースキティの店とかに行きたい。ハロースキティは私のお気に入りのネコのキャラクター。ホウエン地方のピンク色の子猫ポケモン・エネコがモデルで世界中の女の子に人気なブランドだ。

「ここから出よっか。ハロースキティが好きなんだけどいいお店知らない？」

「はい。テレビコトブキの近くにスキティ専門の店がありますよ。アキコのお気に入りです」

「じゃあ期待できるわね♪」

うきうき気分でエスカレーターで2階に降りたら警察官の中で見覚えのある顔を見かけた。周りが青い服を着ているなか1人茶色いコートを着た「へ」の字口のおじ……おにいさんがいる。コウキくんは気づかないフリをして通りすぎようとしたけど案の定おじさんに声をかけられた。

「やあ！君たち！偶然だね」

間違いない。1時間以上前にトレナーズスクールの近くで会った国際警察のハンサムさんだ！

「きみたち！あれから怪しいやつを見かけなかったかね？」

いきなりだなぁ。わたしがいいえと言うまえにコウキくんが先に答えた。

「はい。今まさに目の前に怪しい人が……！」

「ぷっ」

私はとっさに口元を押さえてせきをするフリをした。だって笑ったらハンサムさんに失礼だもん。

「君はあいかわらず礼儀正しいんだか生意気だがわからない子だな」

ハンサムさんは目を細めた。怒ってるというよりあきれてる顔ね。

「よく地元の警察があなたのような怪しい人の協力を許しましたね」

「ああ。警察手帳を見せなかったら危うく逮捕されるところだった」

「ぷっ」

失礼だけど笑いが口からもれてしまった。ハンサムさーーーん

！なにやってるんですかーーー？！やっぱり他の人から見ても怪しいんだ…。微妙な空気を変えるために私は話題を変えた。

「上の階でなにかあったんですか？」

コウキくんとハンサムさんは私を見た。コウキくんもなにがおこっているか知りたがっているし、ハンサムさんも無関係とは思えない。

「３８階のレストランに野生の草ポケモンがまぎれこんだようだ。困っているみたいだったから捕獲に協力しているんだ」

３８階って…！

「ぼくたちが行こうか迷ったレストランですね。３階のプリミエー・アモールにしてよかったです」

「うむ。現在は下の階に向かって逃げているらしい。君たちなら大丈夫だと思うが気をつけてくれたまえ。それでは失礼！」

ハンサムさんは別れを告げたあと他の警察官と合流して行ってしまった。やっぱり都会って大変なんだな。フタバタウンは平和そのものだったのに。

「野生の草ポケモンっていうとスボミーですかね。ちょうどコトブキシティの北側にある２０４番道路に生息していますし」

草ポケモンかぁ……。私も草ポケモンほしいなぁ……。ジュンはナエトルを持っているからいいよね～。

「スボミーってどんなポケモン？」

「つぼみポケモンです。小さくて体つきが丸いんです。後頭部がねじれていて青いつぼみと赤いつぼみを隠し持っています。ロゼリアに進化すると両手のつぼみが咲いて見事な薔薇になるんですよ」

「本当！？」

バラかぁ……。バラのポケモンなんているんだ。エレガントだなぁ……。

「ええ。さらに最近ロゼリアが進化することが判明したんです。ロズレイドといって両手の薔薇がブーケのように増えて、肩からマントみたいな葉っぱが生えているんです。身のこなしはスペインのダ

ンサーのごとくかっこよくて美しいとか……」
キャーー！！スパニッシュ・ダンサー？カワイイつぼみポケモンがバラのダンサーに進化するの…？ほしい！絶対にほしい！
「仲間にした～いｖＶ」
「ハハハ。スキティのお店に行ったあと２０４番道路を案内しますね」
はっ！？そうだった。私たちハロースキティのお店を目指しているんだった。スボミーも捨てがたいけど今は念願のスキティ・グッズを見にいかきゃ！
「ありがとう、コウキくん！」
私は上機嫌で歩き始めた。

＊

入り口に向かっていたら宝石店を通り過ぎた。宝石にはあまり興味はなかったけどガラスケースにあるダイヤモンドを見たらつい足が止まってしまった。ケースの中でキラキラ光る指輪、ブレスレット、ネックレス、イヤリング……。細かい光が違うタイミングで次々と現れては消え、その光が途絶えることはなかった。
「見たいんですか？」
「きゃっ！」
肩が反射的に上がった。こんなに宝石を見る機会なんてないからつい見とれてしまったわ。
「えーっと……ちょっとだけ、ね」
「かまいませんよ。入りましょう」
ぎくしゃくしながら足を動かすとお店の人に「いらっしゃいませ」と迎えられた。店員さんは全員ほぼ女性だった。宝石店なんて初めて入った。フタバタウンには眼鏡屋さんはあっても宝石店なんてないもの。宝石店は眼鏡屋さんみたいに壁が白かったけれどもっと高級なイメージがした。店の中は宝石の入ったガラスケースでいっぱ

いだ。
「ヒカリさんはどの宝石が好きですか？」
「う～ん……宝石にあまりくわしくないけどやっぱりダイヤモンドと真珠かなぁ？」
なんとなくダイヤモンドコーナーのほうに目をやった。やっぱりダイヤモンドは目立つからついそっちのほうに目がいっちゃう。キラキラ輝いていてきれいだけど目立ちすぎかしら？
「ダイヤと真珠ですか～。ヒカリさんには真珠が似合うと思います。幾多のカットをほどかされて磨かれたダイヤも素敵ですがやはりここは天然物の真珠でしょう。未だに信じられませんがこんなに美しいものが貝の中で生成されるんですよ？真珠は泡から生まれたアフロディーテを連想させますし、そのアフロディーテと同一視されたのがヴィーナスです」
案の定コウキくんの暴走のスイッチが入ってしまった。そういうときは適当に流すようにアキコちゃんに言われたので私はコウキくんを無視してダイヤの指輪を見た。
「イタリア画家ボッティチェリの名作『ヴィーナスの誕生』では貝から生まれたヴィーナスが描かれています。このように美しい女神は海と関係する貝や泡と関連をもち、貝から作られる泡のような宝石は女性を飾るのに最適だと古来から言われています。ですからもしぼくがヒカリさんに求婚するとしたら真珠のエンゲージメント・リングを……」
花をかたどった指輪があった。８つの小さいダイヤから成る花びらの中央には大きめのダイヤがはめこまれていた。花びらと同じくらい細くて小さい値札には０．７７カラット、１８金ホワイトゴールドと記されていたけど私にはさっぱりだった。いくつかの長方形から成り立つ値札よりかは大きい黒い台には白い数字でくっきりと￥１，０５６，０００と表示されていた。￥１，０５６，０００……１０５万６千円！？
「高いっ！」

「え？」
　店員さんはクスクス笑っていた。私の発言がおかしかったのか、コウキくんと私の温度差がおかしかったからなのかはわからない。私が引き金になったことは確かだ。でも１００万円って……ジュンがよく「罰金１００万円！」って言うけどこの指輪に１００万円以上の価値があるんだ……。もし私が罰金を払うとしたらこの指輪を渡せばいいのかしら？そもそもなんで私が遅刻したくらいでジュンに１００万円も払わなきゃいけないわけ？普通宝石は男性から女性にプレゼントするものでしょ……。
「ほしいものでも見つけたのですか？」
　混乱していたらコウキくんに話しかけられた。違う！違うの！勘違いされるまえに否定しなきゃ。
「ち、違うの！きれいだな～って思って値段を見たら高かったからびっくりしただけなの」
　私は腕を半分挙げながら両手を振った。こんな高価なもの、私のような子どもにはもったいないもの。
「アハハ……。やっぱりこんな派手なもの私には似合わないよね～」
　はずかしくなってお店を出ようとしたけどコウキくんは真剣にダイヤの入ったケースを眺めている。
「いえ。似合わなくもありません。でもせっかくですからここは同じ５８面体ラウンドブリリアントカットでも中央に天然ピンクダイヤが使われているこちらの指輪のほうがいいのではないでしょうか？」
　ここまで言われて無視するとさすがにコウキくんにも店員さんにも悪い。しかたなく戻ってケースを見るとさっきの指輪と同じ花形だけど全てのダイヤをがっちり台で留めていた指輪を見た。めしべに当たる中央の部分には色違いのダイヤが輝いている。
「お客様お目が高いですねー。こちらは貴金属がプラチナ９００の天然ピンクダイヤモンドリングですよー。さきほどの天然ホワイトダイヤモンドリングよりやや高めの￥５，０６１，０００ですが見

事な出来でしょう?」

５０６万１千円……!?あまりの金額に頭がクラッとした。なにがやや高いよ……さっきの約5倍の価格じゃない!!

「でも派手すぎますね……。やっぱりヒカリさんのような清純な方には真珠ですね。真珠のほうを見ても構いませんか?」

「もちろんです、お客様」

動じてない。あんなに高い金額を教えられたのにコウキくんは眉一つ動かさなかった。コウキくんどれだけお金持ってるの……?別の店員に誘導されて真珠の飾られたケースの前にあるイスに座った。コウキくんは楽しそうに真珠を観賞している。私はこれ以上宝石の瞬きも価格も見たくなかったので目をつぶっていた。

「これなんかどうですか?９．０ミリの大粒真珠リング!貴金属はプラチナ９００で細かい花の模様入り。しかも０．２３カラットのダイヤモンドが模様に埋め込まれているんですよ。ヒカリさんにぴったりです!￥４６９，０００だなんて安いですね」

コウキくんはニコニコ笑っていながら巨大な真珠のついた指輪を指さした。４６万９千円……ダイヤモンドよりかは安いけど……。５００万円でも動じず４７万円を安いだなんてコウキくんの金銭感覚はどうなってるの?

「せっかくですからこの￥３，６００，０００の花珠のネックレスとイヤリングもセットで買いましょうか?このイヤリングならクリップ式ですから耳に穴を開けなくても大丈夫ですよ」

「そ、そう?」

３６０万円……!?なにを言えばいいかわからない。もしかしてコウキくん本気で私に真珠の指輪とネックレスとイヤリングを買うつもり?困惑する私をよそにコウキくんは店員さんのほうを向いた。

「支払いはカードでいいですか?」

「はい。大丈夫でございます」

本気だーーー!!コウキくん、本当に買おうとしてる!やばい!止めなきゃ!!

「い、いい！いらない！そんな高いもの買わなくていいわ！」
あわてて椅子から離れたら転びそうになった。店員さんとコウキくんはキョトンとしている。店員さんも店員さんでなんで止めないんだろう？
「私まだ子どもだし宝石には興味ないから！そんなきれいなもの私が身に付けても『豚に真珠』だよ。コウキくんとは昨日あったばっかりだし、そういうのは大きくなったら恋人に……」
「ヒカリさんは豚ではありません」
言い訳は中断された。コウキくんの論点がずれている発言で。次はなんて言えばいいんだろう？
「ヒカリさんにはこれらのものをプレゼントする価値のある女性だと思います」
ドクン。
息苦しくなった。あのときジュンに守ってやると言われてから私の胸は苦しんでばかりだ。コウキくんは椅子からゆっくり降りた。私に近づくと私の髪をすくった。まるで壊れやすいものを触れるように。
「サロンでも申し上げましたがぼくはヒカリさんのことが好きです。ヒカリさんのためならなんでもしてあげたいんです。プレゼントをするなら服も宝石も余るくらいがいいです。あなたには幸せになってほしいですから」
ドクン。
さっきより激しく心臓が鼓動した。苦しくて変になりそう。
「真珠は6月の誕生石です。ぼくの誕生石でもあります。宝石言葉は『健康・富』。ぜひあなたの細い指に真珠をはめさせてください。きっとあなたの幸せを守ってくれるでしょう」
コウキくんはさっき選んだ真珠の指輪を右手で掴んだ。もう片方の手で私の左手を取った。きっと私の薬指にはめるつもりなんだ…！店員さんたちはうらやましそうに私を見ている。それどころじゃないのに。身体が動かない。真珠の指輪が薬指の先端に触れた。

もう逃れられない。
「なんだってんだよー！」
通路から大きな声が聞こえた。こんなセリフを言う人物は1人しか思い浮かばない。金髪の男の子が草ポケモンを脇に抱えて店を通り過ぎた……と、思ったら靴が床にこすれる音が聞こえ、店の入り口に戻ってきた。
「ヒカリ！そんなところでなにやってんだ？12歳で宝石身に付けても『豚に真珠』だぜ！」
「は？」
なんというKY発言。周りを見なくてもきっと店内にいる人は全員目が点になっているはずだ。いつもならカチンとくるとこだけど、この緊迫した空気を壊してくれたジュンに感謝した。
「それに宝石と言えば真珠よりダイヤモンドだろ！ヒカリは地味だからやっぱインパクトのある宝石を身に付けなきゃな！」
そう言いながらジュンは宝石店にずかずかと入ってきた。1番宝石に縁がなさそうなのに。
「なあ、ダイヤモンドの宝石言葉ってなんなんだ？」
ダイヤモンドのコーナーにいた店員さんはまばたきした。周囲を見渡したあと自分に話しかけられたと気づき、あわてて返事をした。
「え？ええっと……はい！ダイヤモンドは4月の誕生石でございます。宝石言葉は『永遠の絆・純潔』です」
店員さんはとまどいながら答えた。ジュンったら！大人の人には敬語使わなきゃ！ナナカマド博士と話すときもタメ口だったし……。
「なんだ！じゃあヒカリにぴったりじゃん。ちょうどオレの誕生石だし」
「は、はい。そうでございますか」
なんていう偶然なんだろう。ダイヤモンドをおすすめするジュンの誕生月は4月。真珠を好むコウキくんの誕生月は6月。2人とも好きな宝石が自分の誕生月を代表しているんだ！これは偶然？それとも必然？店員さんたちもこの妙な展開にざわついている。

「ヒカリ！大きくなったら友情と義兄妹の証にオレとおそろいのでーっかいダイヤの指輪やるからな！だから他の男とは結婚するなよ。とくにコウキと」

「失敬な！どういう意味ですか？！」

「おまえのようなヘラヘラした男にヒカリをやれるかよ！」

ジュンとコウキくんは言い争いを始めてしまった。お互いに悪口や偏見を言っている。店員さんたちは固まっていた。どうしよう。ここは私が止めに入るべき？それとも納まるまで大人しく待とうかしら。コウキくんが指輪をはめようとしていたときと違って動けるから2人を止めようとしたらまたもや通路から声が聞こえた。

「いたぞ！あいつだ！」

「乗り込むぞ！」

数人の警察官がハンサムさんを先頭に店に入ってきた。

「手をあげろ！」

「ひえ～～～！」

ジュンは頼りなそうに両手を挙げた。手を離したせいでナエトルは床に落ちた。

「ル～？」

事情が飲み込めずにナエトルはのんきな声を出した。

「そこのポケモンも手を挙げろ！」

「ルー♪」

ナエトルはうれしそうに手（前足？）をあげた。ナエトル……ぜったい手をあげる意味をわかってない……。

「このお騒がせトレーナーめ！いったい何件の洋食レストランを襲ったと思ってるんだ？！」

ハンサムさんはジュンを問い詰めた。すごい……ハンサムさんがめずらしく警察らしいことをしてる……！

「知らねーよ！オレ数えてないもん！」

私は呆れて頭をかかえた。ジュンったらなんでレストタンを襲撃したの？お金がなかったとか？

「まったく君はレストランを葉っぱまみれにして……。レストランとお客さんから苦情がたくさんきたぞ！皿は割るわ、食べ物を粗末にするわ、お客さんの服は切れるわで大惨事だぞ！」
「知るかよ！オレはヒカリをコウキのやろうから守ろうとしただけだ！」
ええーー！？なんでここで私の名前が出るのよ？共同責任になっちゃうじゃない！
「君！ポケ免は持ってるのかね？」
「ポケメン？なんだよそれ！」
あっ。ジュンまだポケモン免許持ってなかったんだ！ポケモントレーナーになった人は1週間以内に役所でトレーナーになったことをポケモン協会に申請しなければいけない。ポケモンを持っていることを申請したらポケモン免許、通称ポケ免が発行される。私はポケモン図鑑をもらったときに自動的に登録されたからいいけど、ジュンは図鑑をもらってないからまだ登録してないんだ！
「ポケ免を持ってないのにポケモンを連れるのは違法だぞ！そのポケモンはどこで手に入れた？めずらしいポケモンだな」
ハンサムさんはナエトルを見た。確かにナエトルはめずらしい。ポッチャマもヒコザルも同様だ。博士たちが研究に重要視するポケモンは野生ではなかなか見かけないポケモンだ。
「これはナナカマド博士から……」
「盗んだんだな！」
「なんだってんだよー！」
ダメだわ！状況がどんどん悪化してる。なんとかしなきゃ！
「待ってください！」
私は前に出てジュンをかばった。
「なんのつもりだね？ヒカリくん。これは君には関係な……」
「ジュンは昨日ナナカマド博士からポケモンをもらったばっかりなんです！私も昨日ナナカマド博士からポケモンをもらいました！」
私はバッグからナポレオンの入ったボールを取り出した。ナポレ

オンは好戦的にボールから出てきた。
「ポッッチャ！」
ナポレオンは右手でジャブをした。それを見たハンサムさんは2歩下がった。
「そういえば君のポケモンも野生では見たことがないな……」
ナポレオンは「ケッ」とハンサムさんに悪態をついてからナエトルに挨拶をした。ナポレオンに続くようにヒコザルのアポロンがナエトルに寄り添った。コウキくんがアポロンをボールから出したんだ。3匹は久しぶりに全員そろったのがうれしいのか仲良くすりよっていた。ナポレオンはつーんとしてたけどよろこんでいるのはみえみえ。
「ぼくも博士からポケモンをもらいました。博士が昨日2人にポケモンをわたすときも同伴していました」
「むむっ」
ジュンの無実を証明するまであと一歩……！
「信じてもらえないなら今すぐナナカマド博士の研究所に叱られに行ってください！」
ハンサムさんは頭をかいた。うしろにいる警察官に助けを求めるように振り向いたら肩をすくめられた。
「そうか……。そこまで言うなら信じよう」
私は両腕を下げた。よかった……。誤解は解いてもらったわ。
「でも『はっぱカッター』で起こした被害は弁償してもらうぞ！割れた食器、破れたテーブルクロスとカーテン、切れ目だらけの服、無駄にした食材を含めて１０００万円はかかるぞ！」
「ひえ～～～！」
「ジュン！」
私はうしろに倒れたジュンを支えた。１０００万円なんてコウキくんが私のために買おうとした真珠のジュエリーセットより高い。ジュンの口癖「罰金１００万円」の１０倍じゃない！そんな大金子どもには払えない……！

「ななななんで１０００万円もするんだよ？」
「君が襲撃したレストランの中には高級レストランも含まれる。払えないなら親に払ってもらうぞ」
「ぐっ」
やばい。やばすぎる。ジュンはくちびるをぎゅっと結んで涙目になってる。千万円なら少しづつ払えばなんとかなるかもしれない。ジュンママとジュンパパに半分払ってもらって残り半分は私とジュンが協力してポケモンバトルで稼げば……それともレストランで雑用でもさせられるのかしら？
「ジュン！私も手伝うわ！半分親に払ってもらって、残りは私とジュンが働けば二十歳になるまえになんとか……」
私が言い終えるまえにコウキくんがまえへ出た。ハンサムさんの顔を見ると落ち着いて言った。
「ぼくが払います」
「「えっ！？」」
私はジュンと顔を合わせた。口をぽっかり開けて唖然としている。きっと私も同じような顔をしてると思う。店内にいた人全員がその発言にどよめいた。警察官もどう対応すればいいか困っている。
「もとはといえばぼくのせいです。ヒカリさんをランチに誘った結果彼が嫉妬し、このような惨事を招いてしまったのです。全てぼくが弁償します」
コウキくんはアポロンをボールに戻して歩き始めた。ハンサムさんはあわててコウキくんを呼び止めた。
「き、君！」
「カードで払えばいいですか？現金ならＡＴＭから引き出しますが」
ハンサムさんはあごに手を当てて黙りこんだ。深いため息をついたあと口を開いた。
「ジュンくん。コウキくん。一緒に署まできてくれないか。逮捕はしないから」
「あ、ああ……」

ジュンはよろよろと立ち上がるとハンサムさんについていった。
それに続いて警察官たちも去っていく。私も彼らを追って入り口までついていった。ハンサムさんはいったん止まって無線機で連絡を取っていた。
「ヒカリさん」
ハンサムさんを見ていてコウキくんが近づいたのに気づかなかった。私も警察署までついていくべきかしら？
「時間がかかりそうなのでトレーナーズスクールで待っていてください。警察官に送ってもらうように頼みますね」
「でも……！」
反論しようとしたけどすでにコウキくんは警察官の1人に話しかけていた。どうすればいいかわからず私はしゃがんでナポレオンに話しかけた。
「これからどうしよっか？」
「ポ……ポチャ」
ナポレオンは首をかしげるだけだった。

第１８話　嵐と静けさ（後書き）

「静」だと思ったら「剛」になりました。今回の話は下調べが大変だったことを覚えています。
作中に出てくるサロンは六本木にある新東京美術館のレストランをモデルにしました。
フランス語は少し間違っているかもしれません；
ちなみにコウキはヒカリの指のサイズを測ろうとしただけです。決して無理やり婚約指輪をはめさせようとしたわけではありません（笑）。

第１９話　釣り（前書き）

今回の話は長いです。覚悟してください（笑）。

第１９話　釣り

「ありがとうございましたー」
私は雑誌を持ってコンビニから出た。コンビニって便利ね。品揃えいいし２４時間開いているもの。警察はトレーナーズスクールまで送るって言ってくれたけど、私はまだそこに戻りたくなかった。かわりに２０４番道路までの道を教えてもらった。コンビニで『コトブキガイドブック』も買ったしこれで迷っても大丈夫。まだ遠いけどまっすぐ先に草むらが見えてきた。ナポレオンとクルル♪も戦いたくてうずうずしている。まだ町の中だけど２匹くらいポケモン出しても問題ないよね？私は２匹が入ったボールを投げた。
「ポチャ！」
「クルックー！」
ナポレオンは私の足元まで歩いてきた。クルル♪は私の肩にとまった。
「もうすぐ２０４番道路よ。スボミーっていうポケモンを仲間にしたいからよろしくね」
「クルー♪」
「ポッチャァ！」
元気な声が返ってきた。でもポッチャマはやる気がありすぎて困るな。私はポケモン図鑑を開いた。ポッチャマは現在レベル９。ここらへんで出てくる野生ポケモンはレベル３～４だからポケモンを捕獲するときは手加減してもらわないと…。クルル♪はつかまえたばかりだからレベル４ね。
「あー！」
誰かが声をあげた。なんだろう？キョロキョロしたら同年代の子たちと目が合った。１人の女の子と２人の男の子が私をじっと見ている。その中のリーダー格の男の子が私に近づいてきた。
「おまえもしかしてヒカリ？」

「そ、そうだけど……」
この子たち誰？トレーナーズスクールの生徒かしら？
「うわー！本物かよー」
「すごーい」
「そのムックルが『クルル♪』か～」
え？なんで私とクルル♪のこと知ってるの？コウキくんから聞いたのかしら。でもトレーナーズスクールにいた生徒たちはコウキくんに私に関する質問はしなかったはず……。
「なんで私と『クルル♪』のこと知ってるの？」
「え！知らないの？」
「テレビでやってたのにー」
私は首をかしげた。テレビ……？
「ぼく録画したよ。ほら」
ほかの２人より小さい男の子は首にかけていたケータイ電話をいじった。しばらくすると液晶にテレビ番組が写った。すごい！ケータイってこんなに小さいのにテレビまで観れるんだ。
『ポケモン！捕獲だぜーっ！！今回もポケモンを捕獲したトレーナーの記録をみんなにお伝えするぜーっ！さあ、今回ナイスな捕獲を繰り広げたトレーナーは黒髪ロングのかわいこちゃん、ヒカリだーっ！！』
「えーっ！？」
本当だ！私がテレビに映ってる！いつのまに？！
『ヒカリが捕獲したポケモンはなんと！ムックルだってよーっ！ヒカリ！ナイスだぜーっ！しかも捕獲に使ったボールはモンスターボールで、たったの１回で捕獲したんだってよーっ！まったくグレートなトレーナーだぜ！！ヒカリはよーっ！』
ＤＪのうしろにある画面はナポレオンとクルル♪の戦闘の映像が短く写ったあと、私がボールを投げるシーンに切り替わった。このＤＪテンションが高いなぁ……。
『……ん？ちょっと待ってくれっ！また新しい情報が入ったぞ。ヒ

カリが捕獲したムックルにつけたニックネームがわかったぜ！なんと『クルル♪』だってよーっ！ヒカリ！！もう勘弁してくれよー！どこまでイカすんだよアンタ！ホント最高だぜーっ！ヒカリみたいにみんなもガンガンポケモンを捕獲しくれよなーっ！！』

「いや、ポケモンを大量に捕獲すると自然のバランスがくずれるからほどほどに……って！」

初めてテレビに映ったのに複雑な気分だった。私の許可なしでテレビに放送されたというのもあるけどこっそり誰かが私をカメラで映したということ自体気味がわるい。そういえばコウキくんとコトブキシティに向かう途中で誰かに見られている気がした。もしかしてさっきの映像と関係あるのかもしれない。そう考えると背すじがぞっとした。

「かっこいいー！同じ女の子としてあこがれるー。サインもらっていい？」

「おれにも一応くれ！」

「ぼくも～」

3人が騒いだから人が集まってきた。

「なんだなんだ？」

「有名人か？」

見知らぬ人たちに囲まれたら不安が押し寄せてきた。こんなところで時間をくっている場合じゃない。

「ごめん！私急いでるの！」

適当に言い訳すると私はナポレオンを抱き上げてブーツのスイッチを押した。振動が伝わり私の足は加速した。うしろで何人か追ってきたけど、ランニングブーツの性能には適わなかった。

＊

「はぁ……はぁ……」

走ったあとだから息が荒い。追っかけからなんとか逃れ、私たち

は無事に２０４番道路に着いた。それにしてもナポレオン重かったなぁ……。ポッチャマって5．２kgもするもの。これでもピカチュウよりかは軽いらしいけど……。ナエトルほど遅くないけど心配だから抱き抱えて走っちゃった。ついこわくなって逃げたけどさっきの映像が気になる。追っかけは撒いたけどどこからか視線を感じる。これってもしかして……ストーカー！？

ガサッ。

「キャアッ！」

草むらから音がした。な、なに？まさか予感的中？

「だ、だれ？出てきてよ！」

ナポレオンとクルル♪も気配を察知したのか戦闘体勢に入った。本当はこわかったからナポレオンを抱いてクルル♪に戦わせたかったけどそれじゃあナポレオンが戦えない。しかたなく私も２匹に続いて構えた。

――５分後。

「なんで誰も現れないのよー！！」

私は頭をかいた。戦闘体勢に入って5分。音がした草むらのまえにずっと立っていたけど人もポケモンも現れそうにない。もしかして気のせいなんじゃないかと思えてきた。

「ううん。そんなことない。音がしたのは確かだもん。そうだよね？ナポレオン。クルル♪」

「ポチャー！」

「クルー！」

現に２匹とも戦闘体勢を解いていない。私にはわからないけどポケモンのナポレオンとクルル♪ならなにかしら気配を感じているはずだわ。

「いい加減出てきなさい！」

５分前までは恐怖を感じていたけど今は苛立ちのほうが大きかった。たとえストーカーだろうと野生のポケモンだろうとやっつける自信があった。

ガサッ。

さっきと同じ場所から再び音がした。やっぱりそこにずっと潜んでいたのね……！

「ナポレオン！『あ……』」

ガサガサッ。

私がナポレオンに『泡』攻撃を命じようとしたときそのポケモンは現れた。

「コ、コリ～ン？」

草むらからおずおずと出てきたのは大きな丸い耳をした子ライオンだった。ナポレオンより大きくクルル♪より小さい。上半身が水色で、下半身は黒い。その色と頭のはね毛は昨日私とジュンを襲ったルクシオとそっくりだった。でもその目はくりくりとしていてルクシオのように鋭くなかった。むしろ愛嬌さえ感じる。

「コ、コ、……コリ～ン！」

キューンｖ

か、かわいい…！ルクシオの進化前のポケモンかしら？私は図鑑を見た。図鑑はナポレオンとクルル♪の攻撃力が下がったと警告していた。もしかして今の弱気な声が威嚇のつもりなの？むしろ相手の攻撃力を下げる技、『鳴き声』に近いような…。もう一度図鑑の画面を見るとそのポケモンの体力ゲージの上に名前と性別が表示されていた。『コリンク　♀　Ｌｖ．５』。女の子か～。

「リ～ン……」

コリンクはあとずさった。え？逃げちゃうの？

「コ、コ、コ、……リ～ン！」

コリンクは走り出した。元々いた草むらにではなく、私に向かって。

「えーー！？私？！」

私コリンクに『体当たり』を喰らうほどひどいことしたっけ？まだなにもしてないよね？！

「ポチャチャッ！」

あっけにとられていたらナポレオンがコリンクを横からはたいた。

「リッ」

コリンクは地面に転がった。苦しかったのか咳をしている。

「リ、リ～ン……？」

コリンクはつぶらな目で私を見ると悲しそうに鳴いた。そのとたん私の胸はまち針が刺さったピンクッションのようにチクリと痛んだ。ちょ、ちょとぉ……。

「そんな悲しい目で私を見ないでよ～！まるで私が悪いみたいじゃな～い！」

初めてナポレオンにナエトルを攻撃させたときより罪悪感を覚えるのはなぜだろう？こんなにかよわいコリンク、野生では生きていけないのかもしれない。キズつけた責任もあるし私が保護しなきゃ！

「と、とにかく仲間にするわよ！ナポレオン、下がって」

コリンクのＨＰは半分以上減ったので体力ゲージが黄色になっていた。もう１度ナポレオンに攻撃されるとコリンクは瀕死になってしまう。ナポレオンは納得してないみたいだけど一度ボールに戻した。

「いくわよ、クルル♪！『体当たり』！」

クルル♪は斜めに少し飛ぶとコリンクに軽く体当たりをした。

「リ～ン！」

コリンクは倒れた。ＨＰのゲージは赤だ。これくらい弱らせればつかまえられる！

「いけっ！モンスターボール！」

コンッ。

ボールを軽く投げたらコリンクの頭に当たった。

「リ～ン？」

疑問に鳴くコリンクをボールはみるみる吸い込んでいく。
カタッ。
いけるかしら……？
カタタタタッ。
「えっ？」
「クルッ？」
思ってたより抵抗してる！そんなにつかまるのがイヤなのかしら？
カタタタタッ……フォン。
……ふぅ。よかった。ちゃんとつかまえられた。コリンクを捕獲したら図鑑が反応した。

『Ｎｏ．０１７　コリンク　閃光ポケモン
高さ０．５ｍ　重さ９．５ｋｇ
体を動かすたびに筋肉が伸び縮みして電気が生まれる。ピンチになると体が輝く』

ふ～ん。まだレベルが低いから電気タイプの技は使えないのね。
さっき体光ったっけ？光るまえにボールなげちゃったかも。かわいそうだから回復させてあげよっと。
「ありがとう、クルル♪。おいで！コリンク！」
クルル♪と入れ替わりにコリンクを出した。
「コリ～ン……」
ＨＰが減ったままなのでコリンクは弱々しそうに鳴いた。それに呼応するようにコリンクの体が光り始めた。うっ……だからごめんってば！今回復させるからそんな悲しい声で鳴かないで～！
「痛い目にあわせてごめんね。すぐ回復させてあげるから」
私はコリンクをひざの上に乗せるとスプレー式の傷薬を取り出した。昨日フレンドリィショップに行ったときにおまけでもらったものだ。ぐったりしているコリンクに傷薬をシューッとかけた。
「リンッ！」

最初は痛がっていたけどすぐに穏やかな表情を浮かべた。痛みがやわらいだのね。コリンクはゆっくり起き上がった。

「コ、コ、……」

コリンクはそわそわしていた。さっきつかまえたばかりだからこの状況にとまどっているのかしら？

「コリ～ン」

ところが意外なことにコリンクは私にすりよせてきた。遠慮がちだけど私のおなかにすりすりしている。攻撃するそぶりは少しもない。もしかして……。

「あなた、もしかして私にすりすりしたかっただけなの？」

思えばこのコリンクは初めて会ったときからそわそわしていた。なかなか草むらから出てこなかったし私のポケモンに攻撃してこなかった。いきなり私に向かって走ってきたのは勢いで甘えようとしていただけかもしれない。

「コリ～ン♪」

コリンクは引き続き甘えていた。私はコリンクの性格を調べるために図鑑を開いた。

『ひかえめな性格。物音に敏感。』

アハハ……。加えて恥ずかしがりや、といったところかしら。どうして私のところに集まってくるポケモンは扱いにくいのかしら。ナポレオンは意地っ張りだしクルル♪は陽気すぎるし……。

「よろしくね、キララ★」

「コリン？」

「あなたの名前よ」

「リ～ン」

キララ★は嬉しそうに鳴いた。私はキララ★をなでながら考えた。次につまえる予定のスボミーはどんな性格かしら……？

＊

「ダメ……！死んじゃダメ……！」

私は必死で走っていた。こんなに必死で走るのはルクシオに襲われたとき以来だ。手にかかえているのは6個のモンスターボール。その中の1匹は特に弱っていて息も絶え絶えだった。

「しっかりして！ビッパー！」

ビッパーからの返事がない。きっとHPを消耗しすぎて鳴く元気もないんだ。十字路にある赤い屋根が見えてきた。ポケモンセンターまであと4メートル。お願い！ビッパー！それまで耐えて！

「！？」

私は走るのを止めた。ビッパーの呼吸が聞こえない。そんな……！

「ビッパー、そんな……」

体中の力が抜けて立てなくなった。間に合わなかった……！

「ビッパー！ビッパー！……ビッパーーーー！！」

私は自分の無力さを嘆いた。

時は30分前にさかのぼる。コリンクを仲間にした私はその勢いでスボミーも仲間にしようと204番道路の草むらをあさっていた。

「見つからないなー。スボミー」

「ポチャー」

「クルー」

「コリ～ン」

私は3匹のポケモンたちに手伝ってもらいながらスボミー探しをしていた。いつ、どこから出てきても対応できるように私はまえ、キララ★は右、ナポレオンは左、クルル♪はうしろと4方向を見張りながら歩いていた。でもコウキくんから聞いた話によるとスボミーは緑色。自然に溶け込んでいてなかなか見つからない。

ガサッ。

「！？」

キララ★のいる方向から4歩離れた場所から音がした。今までノーマルタイプのムックルとビッパ、虫タイプのケムッソ、電気タイプのコリンクと目当てではないポケモンばかり出てきた。今度こそスボミー?!

「スッボミ〜!」

「スボミー!?」

丸い体の上に重なる2つのつぼみ。細い目に「v」の字の口。首元には濃い緑色のまえかけみたいな模様。ビンゴ!やっと会えたわ、スボミー♪でもイメージとちょっと違うな。赤ちゃんみたいに大きな目をしているかと思っちゃった。でもこれはこれでありよね。私は空のボールを構えた。

「ここはキララ★に任せるわ!キララ★、『体当た…」

ガサガサッ。

え?

「スッボ」

「ミ〜!」

なっ!?

「コリ?」

「ポチャ!?」

「クルッ!?」

スボミーが3匹……!ナポレオンとクルル♪がいる場所にもスボミーが現れた。2匹のスボミーは最初に現れたスボミーの元に集まった。3匹は呼吸を合わせるように鳴き始めた。

「スー」

「ボー」

「ミ〜」

「「「スッボミ〜!」」」

3匹は一斉に鳴くと一直線に私たちに向かってダッシュした。えー!?なんでこうなるのー?!シングルバトルとダブルバトルは聞いたことあるけどトリプルバトルなんて聞いたことがないわ!

「戻って！ナポレオン！」
私はあわててナポレオンをボールに戻した。水タイプのポッチャマは草と電気タイプに弱い。野生のスボミーたちのほうがレベルは低いけど油断は禁物だ。ナエトルはノーマルタイプの技しか使えなかったけどスボミーたちは違うかもしれない。
「お願い！ビッパー！」
ナポレオンの代わりに丸ねずみポケモン、ビッパを戦闘に出した。ニックネームはビッパー。主力に入れるつもりはないけど数合わせのためにいちおう連れていた。
「キララ★！ビッパー！クルル♪！『体当たり』！」
３匹はそれぞれの相手に『体当たり』した。レベルの低いポケモン同士、覚えている技が似通ってしまった。レベルが上がればもっと戦術的なバトルができるのに……。でもそんなこと考えてる場合じゃない！
「「「ミー！」」」
スボミーたちは『体当たり』を喰らいながらも手のようなつぼみで私のポケモンたちをがっしりつかんだ。これはまさか……！
「みんな！ふりはらって！」
注意したけど遅かった。スボミーたちの体が輝き、キララ★とビッパーとクルルは小さな叫びを上げた。草タイプの技、『吸い取る』だ！ＨＰを吸い取られちゃった！
「負けないわ！また『体当たり』して！」
３匹はまた『体当たり』した。だけどスボミーたちも再び『吸い取る』を使ってきた。キリがない。こっちが攻撃しても相手はこっちのＨＰを吸って回復してしまう。あ～ん、もう！ここはゴリ押しするしかないわね！
「距離をとりつつ『体当たり』！攻撃したらすぐ逃げて！」
「リンッ！」
「クルッ！」
「ビップ！」

私は3匹にヒット・アンド・アウェイ戦法を命じた。こっちの体力がなくなるまえにカタをつけなきゃ！

「あれ？」

私はふと気づいた。ビッパーの様子がおかしい。キララ★とクルル♪はスボミーに『体当たり』したあと上手く離れたけどビッパーは違う。動きがにぶい。スボミーから逃げ切れずにＨＰを吸い取られてしまった。どういうこと？私は図鑑に目をやった。ビッパーのＨＰの減りが早い。キララ★とクルル♪より明らかに減っている。ＨＰのゲージの左に状態異常が表示されていた。ビッパーの現在の状態は『毒』。毒……！

「しまった！いつのまに！？」

私はバッグの中をあさった。毒消しがないか期待したけど私の記憶通りあるはずがなかった。それにしてもいつのまに毒を受けたの？スボミーたちの行動をしっかり見ていたから『毒針』を使っていたら気づいたはずだ。でも今のところ『吸い取る』しか使ってない。ということは……。

「まさか特性！？」

特性はどのポケモンにも生まれつき備わっている能力だ。コリンクは威嚇、ビッパは単純、ムックルは鋭い目。威嚇は相手の攻撃力を下げ、単純は道具と技の効果による変化を2倍にし、鋭い目は自分の技の命中率が下がらない効果がある。たぶんビッパと戦っているスボミーの特性は『毒のトゲ』だ。同じポケモンでも特性が異なることもあるから、残りのスボミーも同じ特性とは限らないけど……。

「がんばって！ビッパー！キララ★とクルル♪もスボミーのトゲに気をつけて！」

「ビ～！」

ビッパーは私の気持ちに応えようと弱りながらも『体当たり』をした。だけどフラフラしていたのでスボミーにあっさりと避けられてしまった。

「ミ～♪」
スボミーはぴょんぴょん跳ねていた。赤ん坊の無邪気さはときに恐ろしい。悪気はないだろうけどビッパーが毒で苦しんでいるのに喜んでいるなんて……。
タランタランタラン。
図鑑から不快な音が鳴り始めた。ビッパーのＨＰを示すゲージが赤くなったからだ。スボミーたちのＨＰはまだ黄色いままだ。少し早いかもしれないけどしかたがない。
「キララ★！クルル♪！もう攻撃しなくていいわ！」
２匹が私の元へ戻ったのを確認すると私はボールを投げた。まずはビッパーを苦しめたスボミーからよ！
「わるい子！」
「ミッ！」
よしっ！当たった！
「めっ！」
今度はクルル♪に攻撃したスボミーに向かって投げた。
「あなたもよっ！」
最後にキララ★と戦っていたスボミーに投げた。あとは待つのみだ。
ガタッ。ガタッ。ガタッ。
３個のボールは違うタイミングで揺れた。けれどボールの揺れは順番に治まった。最後に捕まえたスボミーは手持ちがいっぱいになったのでパソコンに転送された。ふぅ……捕獲完了！
「ビッパー！」
私は動けないビッパーに駆け寄った。スボミーたちは捕獲できたけどビッパーは弱ったままだ。私は傷薬を取り出すとビッパーにかけた。
「ビッ」
ＨＰは回復して赤から黄色になった。でも毒は治らない。
「みんな！戻って！」

私は次々にポケモンたちをボールに戻すとポケモンセンターへ急いで向かった。

だけど結局ポケモンセンターまで間に合わずビッパーは瀕死になってしまった。呼吸があまりにも微かだったから死んだと思ってしまった。私はポケモンセンターのベンチに座りながら反省していた。ポケモンは瀕死になったら戦う元気がなくなるだけで、死ぬわけじゃない。それはわかっているけど初めてポケモンを瀕死にさせてしまったので落ち込んでいた。こんなことなら傷薬だけでなく毒消しと麻痺治しも買っておけばよかった。

「受付番号6番のヒカリさま、カウンターまでおこしください」

ポケモンのナースに呼ばれた。きっとポケモンの回復が終わったのね。ボールの入ったトレーを渡され、私はおそるおそるビッパーの入ったボールを覗いた。

カタタタタッ。

ビッパーはニコニコしながらボールを揺らした。よかった。元気そう。それに怒ってないみたい。

「おまちどうさま！お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ！またのご利用をお待ちしております！」

女医さんがお辞儀をしている間にボールをバッグに詰めた。長居は無用だ。

「お世話になりました」

お礼を言うとカウンターから離れ、パソコンのあるイスに移動した。なにをするか考えようとしたら鐘が鳴る音が聞こえた。腕につけたポケッチを見たらもう5時だった。

「はぁ…」

私はため息をついた。ジュンとコウキくんは警察から解放されたのかしら？　私はポケモンセンターを出たらどこへ行くか迷った。

＊

いきなり3匹のスボミーに襲撃され、さらにビッパーが毒を受けたからたから動揺してスボミーを3匹ともつかまえてしまった。おかげでコウキくんに買ってもらったボールを使いはたしてしまった。フレンドリィショップで道具を調達するまえにスボミーを2匹逃がすことにした。

ビッパーを一時的にパソコンのボックスに預けて3匹目のスボミーを引き出した。3匹のスボミーをボールから出すと1匹1匹調べるために図鑑を当てていった。

「スッボ！」

「はいは～い。おとなしくしててね～」

1匹目のスボミーはオスでなまいき。特性は『毒のトゲ』だった。きっとリーダー格のスボミーね。ビッパーと戦った子。ビッパーを苦しめた子だしなまいきな性格は扱いにくいからこの子は逃がそう。

「スボッミー！」

2匹目はやんちゃなメス。クルル♪と戦った子だ。この子も特性が『毒のトゲ』だからちょっとヤダなぁ……。やんちゃってことはおてんばだからクルル♪とケンカしそうだし……。

「ミ～」

こうして鳴き声を聞いてみると同じポケモンでも鳴きかたが微妙に違う。最後のスボミーはキララ★と戦ったまじめなオスだった。特性は『自然回復』。……ん？『毒のトゲ』じゃないんだ！

『自然回復
戦闘から引っ込むと状態異常が治る』

「この子がいいわ！」

「ミ～」

相手のポケモンをじわじわ苦しませる『毒のトゲ』より自分の身を守る『自然回復』のほうがよっぽどいい。私はまじめなスボミーを

抱き上げた。まだ幼いスボミーは宙にいるのが面白いのか足をバタバタさせてよろこんでいた。まるで「たかいたかい」をされてよろこぶ赤ちゃんみたい。この子を仲間にすると決めたらさっそくニックネームをつけてあげなくっちゃ！え～っと……この子はまだツボミだけど立派なバラを咲かせるはずだわ。バラ、バラ、……バラといえば情熱の赤。赤といえば闘牛士……情熱のスペイン。

「セニョール」

「ミィ？」

「あなたの名前はセニョールよ」

「ミ～♪」

セニョールはスペイン語の男性に対する敬称だ。いわゆる英語でいうミスター。将来はフラメンコを華麗に踊るスパニッシュ・ダンサーよｖよ～し！どのスボミーを連れて行くか決めたし、私は残りの２匹を野生に帰した。

＊

フレンドリィシップを出て私は計算をしていた。ナポレオンはボールに入りたがらないので外に出している。２００円のモンスターボールを５個、３００円の傷薬を３個、１００円の毒消しと２００円の麻痺治しを２個づつ買った。合計金額は２５００円。はぁ…一気に減っちゃった。

「一、十、百、千……」

もしかしたらと思い数え直したけどサイフの残りはあいかわらず３２４０円だ。買い物するまえはジュンと２０２番道路のトレーナーからもらった賞金を含めて５７４０円も持ってたのに……。まあ、しかたないか。最初のモンスターボールはコウキくんからもらったものだし、使った傷薬ももらいものだしランチはコウキくんにおごってもらった。むしろ節約できたほうね。

「ママが払ってくれないとつらいな～……ってあれ？」

「ポチャ？」
　計算していて気づかなかったけど、私は町のはずれにきていた。トレーナーズスクールはとっくに通り過ぎていた。目の前にはオレンジ色の水が広がり、木で作られた橋が小島と陸地を結んでいる。小島からさらに続く橋は水の真ん中で途切れていた。
「ポチャー♪」
ナポレオンは勝手に水の中に飛び込んだ。やっぱり水ポケモンは水を見ると泳がずにはいられないんだ。横から風が吹いてきた。
「うっ」
　私は鼻を覆った。潮の匂い……これが海の香り？なつかしいけどこわい。風がきた方向を見ると岩の壁が海を分断していた。シンジ湖より水が少ないように見えるけど、岩の向こうには海が広がっているに違いない。ほんの一部分とはいえ海を見ていると気持ち悪い。それにこんな人気のないところにいると危ない人に襲われるかもしれない。例のテレビの件も気になる。
「帰ろ、ナポレオン」
　海を背にして歩きはじめたけど立ち止まった。帰り道がわからない。ここはどこ？町のゲートにある看板には『２１８番道路』と書かれていた。居場所がわかればこっちのもの。コトブキガイドブックについている地図を見れば道がわかるはずだわ。
「……ない」
　イヤな汗が流れた。ガイドブックが見つからない。タウンマップはあるけど私が今必要なのはコトブキシティの地図だ。あれがないと帰れない。
「うそ……」
　バッグの中にはサイフ、ティッシュ、ハンカチ、タウンマップ、ポケモン関係の道具はあるけどコトブキガイトブックだけない。たぶんポケモンセンターに忘れてきちゃったんだ！
「そんな……どうしよう……」
　野宿するにもテントも非常食もトレーナーズスクールに置いたま

まだ。それに追い討ちをかけるようにお腹が鳴った。いつもならママが夕ご飯を用意してくれる時間なのに。

「うっ……」

私は口を押さえた。目が熱くなってくる。涙を流すときはいつも目が熱くなる。

「うっ……うっ……うわ～～ん！！」

「ポチャッ！？」

どうせ人気はない。無性に泣きたい気分だから泣き始めた。道具がないとなにもできない自分がなさけない。コウキくんのまえで転んで気絶して迷惑をかけた。ジュンの弁償金も払えなかった。ビッパーが毒を受けたのに治せなくて瀕死にしてしまった。スボミーを3匹もつかまえてボールを無駄にしてしまった。迷子になったあげくガイドブックを忘れてしまった。1人ってなんて心細いんだろう。シンジ湖で迷子になったこともあるけどそのときはジュンがなんとかしてくれた。いつもえらそうにジュンに説教してたけど、私って1人じゃなにもできないんだ。

「ポチャチャ～」

ナポレオンの困った声が聞こえた。ナポレオンは心配してるのかしら？それとも呆れているのかしら？うしろから砂利を踏む音が聞こえた。誰？こんなときになんのよう？

「声が聞こえるから来てみれば女の子が泣いているじゃないか。こんな時間になにをしているんだ～？」

おじさんののんびりな声が聞こえた。しゃっくりみたいな呼吸を抑えてハンカチで目を拭いた。ぐちゃぐちゃな顔を見られるのがはずかしくって、ティッシュで鼻をかんだあとようやく私は振り向いた。涙は止まらなかったけど。

「迷子になってしまったんです」

もう1度目をふいた。ナポレオンはおとなしくそばにいる。話しかけてきたおじさんは赤い帽子と赤いベストを着ていた。Tシャツは白でズボンは茶色。服装が誰かに似ていたけどそれが誰に似てい

るのかわからなかった。
「おじょうちゃん、海は好きかい？」
「えっ……」
この人はいきなりなにを訊くんだろう。
「いいえ。あんまり……」
「あちゃ～。最近の若い子は海が嫌いなのか～」
おじさんは頭をボリボリかいた。
「じゃあ釣りは嫌いかい？」
「いえ、そんなことありません」
海じゃない場所なら釣りは歓迎だ。釣りなんで1度もしたことないけど。
「うむ！そりゃあよかった。君には私のお古の釣竿をあげよう！」
私がなにか言うまえにおじさんは折りたたみ式の釣竿を押し付けた。
「釣りはいいよ～。水のあるところならどこでも釣りをするといいよ！」
そう言いながらおじさんは自分の持っている釣竿を構えた。
「まずは水面に向かって釣り糸を投げる！」
ルアーのついた釣り糸が海にぽちゃんと落ちた。
「次に気持ちを集中！ポケモンが喰いついてきたらそのときに素早く釣竿をひくんだよ！ほら、君もやってみな！」
「は、はぁ……」
言われるがままにもらった釣竿を使った。ナポレオンが警戒してる様子はない。わるい人ではないわね。釣竿タダでくれたし。
クンッ。
「！」
私の釣竿が反応した。
「ほら！ひいて！」
私は夢中でリールを回した。けれどポケモンが抵抗するからリールを回すのに限界があった。

「逃げられるぞ！ひっぱるんだ！」
私は腰に力を入れて思いっきり釣竿をひっぱった。
バシャアッ。
水しぶきから現れたのは頭に黄色いかんむりみたいな背びれがついている赤い魚ポケモンだった。
「コイキングだわ！」
「おお！おじょうちゃんよく知ってるね」
まだ図鑑に登録されてないポケモンだ。つかまえなきゃ！コイキングが逃げないように地面に降ろした。捕獲開始！
「ナポレオン！海に逃げないように見張って！」
「ポチャアッ！」
ナポレオンは海に逃げようとするコイキングをとおせんぼした。
その間に私はキララ★の入ったボールを投げた！
「キララ★！つかまえるわよ！『体当たり』！」
「コリ～ン！」

数分後、私は地面にあるボールを拾った。
「コイキング、捕獲完了！」
「リ～ン♪」
「ポッチャ！」
「ワッハッハッハッハッハ」
おじさんは私たちを見て笑い始めた。なんで笑ってるんだろう？別に変なポーズとってないのに。
「すごいね～。コイキングを3分で捕獲しちゃうなんて。さっきまでの悲しさはどこにいったんだい？おじょうちゃん」
「あっ！」
コイキングを捕獲して初めて気づいた。釣りおじさんは私を元気づけるために釣りを教えてくれたんだ！
「もう大丈夫です！ありがとうございます！」
私は頭を下げた。キララ★もつられて頭を下げる。ナポレオンは

乗り気じゃなかったけど、けっきょく頭を下げた。
「いや、釣りの素晴らしさをわかってもらえればそれで充分さ！道案内は休憩ゲートにいるおまわりさんがしてくれるよ。私はもうちょっと釣りをするね」
カラスが鳴く声が聞こえる。もう夕方なのに釣りをするの？それとも夜のほうがかえって大物を釣りやすいのかしら？
「はい！お世話になりました！」
「釣竿大事にするんだよ～。魚のエサを使えば普通の魚も釣れるからね～」
おじさんと手を振って別れた。なんだか胸がポカポカする。困ったときは知らない人でも助ける。そんな当たり前のことを改めて釣りおじさんに教えられた気がした。

（特別編）　第１９．５話　金髪くせっけ少年　２　（前書き）

ジュン「よっ！みんな！久しぶり！念のために言っとくけどオレはフタバタウンのジュン！……ってもうみんなオレのこと知ってるよな？なんたってオレは未来のポケモンチャンピオンだもんな！ん？作者のサギタリアスはどこだって？……そんなのオレが知るわけないじゃん。明日には帰ってくんじゃね？」

（特別編）　第１９．５話　金髪くせっけ少年　２

市役所を出てオレは上機嫌だった。レストランの損害は全部コウキに弁償してもらったしポケ免も手に入れられた。これで安心して旅を続けられる。もらったばかりのポケ免を空にかざしてみた。赤いカードは夕焼けと同じ色だ。カードにはオレの写真にＩＤと名前、誕生日と出身地、そしてトレーナーになった日が書かれていた。角度を変えてポケ免の色が変わるのを楽しんでいるとコウキはため息をついた。

「なんだよ？」

「発行してもらったばかりなのにそんなことしているとなくすよ」

さっきまで感じていたワクワクは一瞬でなくなった。こいつマジムカつくな。ヒカリと話してるときと全然ちがうじゃねーか。

「ポケ免の別名はトレーナーカード。身分証明書として使えるから大事にしなよ」

「へいへい」

オレはしぶしぶカードをサイフにしまった。こいつさめてるな。

「なあ、ポケモンって状態異常になることあるよな」

「とつぜんなに？それがどうしたの？」

あ～～～～。こいつなぐりて～～～～～！ガマンだ、ガマン。こんなやつに頼りたくないけどヒカリにほめられるためだ…。

「ただ確かめてるだけだよ。たしか６種類あって毒、マヒ、やけど、ねむり、氷、こんらんだよな？」

ノートに書いたことを思い出しながら言った。毒とやけどは時間がたつたびにダメージを受けて、マヒはすばやさが下がって体がたまに動かなくなる。ねむり状態はポケモンが起きるまで動けなくなって、氷状態も氷がとけないかぎり動けない。こんらんはポケモンがたまに相手ではなく自分を攻撃しちまう。ねむり、氷、こんらんは時間がたてば自然に治るけどどの状態異常もやっかいだ。

「そうだよ」
コウキはオレに見向きもせずに答えた。かわいげのねーやつだな。ヒカリのかわいさをわけてやりたいくらいだ。あ、でもそしたらヒカリのかわいさがなくなるからやっぱいいや。
「じゃあ相手のポケモンに毒を与えてマヒさせてねむらせて、さらにこおらせたうえにこんらん状態にしちまえば一気に有利になるんじゃね？」
こうすれば相手のポケモンなにもできなくなるじゃん！オレって天才！これでコウキのやつも少しはオレのかしこさを認めて……。
「なんてことを言うんだ！！君ポケモンを殺す気？！」
「ひっ」
市役所を出てからコウキは初めてオレをまっすぐ見た。それも怒鳴りながら。……そこまで怒ることねーじゃん。オレなんかまちがえたか？
「第一ポケモンの状態異常は重ならない！混乱を除いてね。相手のポケモンを麻痺させたら毒も火傷も眠りも氷も受け付けないよ。ポケモンはぼくたち人間より体が丈夫だから。一度状態異常になったら他の状態異常にならないように体の免疫力が高まるんだ。いわゆる生存本能だね」
「へ、へー」
やべー……。コウキの言ってること半分しかわからねー！めんえきりょく？せいぞんほんのう？なんだそりゃ。
「念のために言っておくけど免疫力は体に悪いものを追い出す力だよ。生存は生きるということ。本能は生まれつき持っている行動パターンと能力のようなもの。つまり生存本能は生きるために無意識に体が反応する力ってこと。言ってることわかる？」
うっ……まるで心を読まれてるみたいだ……。
「そ、そんなこととっくに知ってらあ！」
「そう。ならいいけど」
やっぱりこいつムカつく。強がってみたけどバレてないよな？

「ここらへんでは２０４番道路に生息するスボミーが毒をもっているよ。気をつけてね」
「あ、ああ……」
おっ。注意してくれた。さっきまで生意気だったから調子くるうな。意外とやさしいところあるじゃん。ヒカリにはいつもやさしいけど。
「あと状態異常に似ている症状もあるよ。ゴーストポケモンの使う『のろい』という技はＨＰを徐々に減らしていくよ。メスがオスに、オスがメスに使う『メロメロ』でポケモンをメロメロにされると相手を攻撃したがらないんだ」
そんなのもあるのかよ。やっかいだな……。
「勢いのある技を喰らうとひるんで反撃できなくなることもある。『噛みつく』とか『踏みつけ』とかがそうだね。あと草ポケモンの使う『やどりぎのたね』は相手のＨＰを少しづつ吸い取って自分のＨＰを回復できるよ。君のナエトルもそのうち覚えるんじゃない」
「便利だな」
「これらの効果は状態異常と違って重ねることができるよ」
ポケモンって奥が深いなー……ん？あれ？そういえばコウキのヒコザルはどうやってあの強そうなルクシオをやっつけたんだ？
「おいコウキ！どうしてヒコザルはルクシオに勝てたんだ？ルクシオのほうが強そうだったぞ！」
コウキはオレをちらりと見るとやれやれ、といった感じで腕を動かした。もったいぶってねーでさっさと教えろ！
「確かにルクシオは一度進化したポケモンだからヒコザルより全体的に能力が高いね。特性がなかったら負けてたよ」
「とくせい？」
とくせいって……ヒカリの特製クッキー☆のとくせいか？あいつの手作りお菓子うまいんだよなー。オレも昨日マフィンもらっときゃよかった。
「特性はそれぞれのポケモンに生まれつき備わった性質や体質。人

間でいうとアレルギーや寒がりやのようなものかな。悪い例えしか思いつかなかったけど。同じポケモンでも違う特性を持っていることがあるよ」

イマイチよくわかんねーな。その『とくせい』とやらのおかげでヒコザルはルクシオをやっつけたのか？

「ヒコザルの特製は？」

「『猛火』だよ。ＨＰが3分の1以下になると炎タイプの技が1.5倍強くなるんだ。だからヒコザルの威力の上がった『火の粉』を喰らってルクシオは逃げ出したんだ。火傷も負っていたしね」

そうだったのか！特製ってすごいんだな！ヒカリのクッキーの特製は『おいしい』か！特製の話が終わったところで1つ目の十字路にさしかかった。たしかトレーナーズスクールに行くには2つ目の十字路で曲がるんだよな。横にあるテレビコトブキのニュースが騒がしい。

「ポッチャマの『激流』とナエトルの『新緑』も同じような効果だよ。危なくなったら自分と同じタイプの技が強くなる。ピンチになると馬鹿力を発揮するなんてまさに生きものの生存本能だよ！だから有名な博士はこれらの特性を持つポケモンを研究してるんだ。ポケモンの進化と関係しているからね」

オレは大きく口を開けた。やべ……話がむずかしくなってきたからあくびしちまった。気づかれてねーよな？

「だからナナカマド博士からもらったポケモンの成長過程の観察を頼まれたということは非常に名誉なことであり……」

コウキの話を無視していたらあるものが目に入った。テレビコトブキの横にある一軒のお店。ヒカリの好きなハロースキティの店のとなりにおもちゃ屋さんがあった。そのおもちゃ屋さんのディスプレーに置いてある白いトゲトゲつきの青色バンド。あれはまさか……！

「……そしてどういう運命の巡り合わせか、ぼくはヒカリさんという天使に……」

「やっべー！これマキシマム仮面のマスクじゃねーか！マックス！マックス！マキシマム！まえからほしかったんだよなー」

マキシマム仮面は有名な全勝無敗の最強のプロレスラーだ。おまけに地方で8人しかいないジムリーダーの1人で水ポケモンのエキスパート。対人戦でも強くてポケモンバトルでも強いなんてあこがれるぜ！マキシマム仮面はオレがダディの次に尊敬する男だ。オレはディスプレーの窓に張りついた。ほかの商品なんて目に入らない。オレが今1番ほしいのはマキマム仮面のマスクだ！！当然オレは気になる値段を見た。

「なんだってんだよー！たけーっ！」

お目当ての仮面は８０００円以上はした。肩ががっくり下がる。オレのこづかい現在５０００円以下。足りねー……。オレのテンションはいきなりミニマムになった。さっきまではマキシマムだったのに……。

「コウキ～」

オレはワラにもすがる気持ちでコウキを見た。ここはスーパー金持ちのコウキに頼むしかない。

「駄目。今日弁償金払ったばっかりだよ。あの大騒動のあとなのによくぼくにおねだりできるね」

頭からタライが落ちてきたみたいにオレはうなだれた。今の一撃は効いたぜ……！

「そ、そこをなんとかコウキ様～」

「なに様づけしてるの？きもちわるいよ」

やっぱこいつムカつく……！

「まあいいや。お金貸してあげるよ。今回だけ」

え？マジ！？

「コウキー！サンキュー！！」

「ギャーーー！！」

気がついたらオレはコウキをだきしめていた。つい反射神経でたまにだきしめちゃうんだよな。で、なぜかたいていの相手はいやが

る。ダディにハッグはいいことだと教わったのに。
「おまえは実はいいやつだと心の奥で信じていたぞー！」
「やめろよ！気持ち悪いだろ！……周りから勘違いされるからやめろ！」
コウキがいやがってたから腕をほどいた。言われなくたってもうだきしめねーよ。もうちょっとソフトな言いかたねーのかよ。
「そのかわりそのうちお金返してね。弁償金一千万円も含めて」
「うっ……」
やっぱこいつかわいくねーーー！！金借りるオレもわるいけどさ……。あ～～～でもマキシマム仮面のマスクほしー！
「あ、ああ。いいぜ。なんたってオレはポケモンチャンピオンになる男だからな！」
「利子つけていい？」
りし？
「もちろんだ！」
オレは胸をたたいた。……ところで『りし』ってなんだろ。あとでヒカリに訊いておこう。

＊＊＊

店に入って数分後。オレは口笛をふきながら店を出た。トレーナーズクールに帰るまで待ちきれなかったからさっそくマキマム仮面のマスクをつけてみた。ディスプレイに写る自分の姿に満足しながらオレはコウキにたずねた。
「どうだ？似合うか？」
「似合うんじゃない？髪の毛がはねてなければね」
＞ｉ９２５４―６９９＜
むっ。一言多いな……。オレはもう一度ディスプレイを見た。たしかにはねてるけど……これはこれでありじゃないのか？
「そんなこと言われてもクシなんて持ってないし…」

「貸そうか？」
「いや、いいよ」
オレは指をからめて頭のうしろにそえた。やっぱこいつわるいやつじゃねーな。こいつの２５％はやさしさでできてると思う。一つ目の十字路の信号を待っているあいだにテレビコトブキのニュースが聞こえてきた。

『釣りでポケモンを捕まえるトレーナーたちを紹介するこのコーナー。今回もゲストに釣り達人をお迎えしております』
『ウム！』

男の司会と釣り達人のジジィが話している声がする。でもオレは釣りなんて興味なかったからこのニュースは聞き流すつもりだった。

『さて達人！今回は釣りに初めて挑戦する新人トレーナー、ヒカリさんの釣りについてですが……』
「ヒカリ！？」
「ヒカリさん！？」

コウキと同じタイミングでテレビコトブキのほうへ首を動かした。遠めでもヒカリがスクリーンの中で知らない釣り人と一緒に釣りをしているのが見えた。なんでヒカリがテレビに映ってるんだ？！

『どうやらぼろい釣竿で見事コイキングを釣り上げたようです！』
『ウム！』
『では達人！ヒカリさんの竿さばき！ズバリ何点でしょうか！？』
『ウム！初心者にしてはやりおる。竿を振るなやましい腰つき……文句なしの１００点！』
『出ました！１００点！おめでとう！ヒカリさん！それではまた次回！さようならー！』

オレたちはポカーンとした。おうだん歩道と向き直ったら信号が青から赤へかわった。歩道をわたりそこねたことはあまり気にしていない。ヒカリすげーな。テレビに映るなんて。フタバタウンのみんなが見たらこうふんするぞ。オレもテレビに映りてー……。

「ああ……ヒカリさん！あなたはどこまで素敵なんですか？初めての釣りに一発で成功するなんて！彼女ならヒッポカンポスも釣れそうです！否、彼女なら……彼女だからこそ釣れるのです！ヒカリさんならたとえポセイドンの起こす水害に巻き込まれたとしても彼の守護により助かるでしょう！」

さっきからコウキが話してばかりなのにこんな長ったらしい話を聞かされたらたまんねー！！ヒカリに酔っているこいつをほっといて信号が赤のうちにわたろうとしたら悲鳴が聞こえた。

「！？」

今の声は……！

「おいコウキ！」

「……なぜなら彼女はアフロディーテ、アテネ、ヘラを始めとする古の神々に愛されているのですから！」

ダメだ。暴走していて聞こえてない。オレは悲鳴のした場所へ走った。

「それにしてもなんて美しいヒップでしょう！ああ、愛しのヒカリさんに服をプレゼントするために彼女のスリーサイズが知りたい……！」

うしろからコウキの声が聞こえる。あのヤローまだ暴走してやがる。この役立たず！悲鳴はテレビコトブキの近くから聞こえてきた。たぶんヒカリの声だ。ヒカリじゃなくても助けてやるけど一体なにが起きたんだ？

『こんにちは、シンオウニュースネットです。シンオウニュースネットでは色んな場所に特派員を派遣してニュースを集めてイマス…

…』

テレビコトブキの近くに来たけどいない。どこにいるんだ？ヒカリ…！

「ナエトル！」

ボールを投げてナエトルを出した。１人で探すと時間がかかる。

「ル～」

いつものようにナエトルはのんきに出てきた。だけど説明する時間はない。

「ヒカリを探すのを手伝ってくれ！」

「ルー！」

たれていた目がキリッとなった。たまにはいい目つきするじゃねーか。

「ヒカリー！」

「ルーー！」

手をメガフォンみたいな形にして呼んでも返事がない。周りからは変な目で見られている。でもそんなことどうだっていい。いったいどこにいるんだ？ヒカリ……！

「ルー！」

ナエトルにズボンのすそをひっぱられた。ヒカリを見つけたのか？！ナエトルのあとをついていくとテレビコトブキと本屋の間にある人気のない道があった。ダサいかっこうをしたおっさんのうしろ姿が見える。

「ヒカリじゃねーじゃん！ただのおっさんじゃん！」

「ルー！」

ナエトルは首を横にふった。テレビコトブキの角に隠れながら様子をうかがった。よく見たらおっさんのマタから誰かが座り込んでいるのが見える。

「ぼくは２０１番道路からずぅ～～っとヒカリちゃんを見ていたんだよ～。よ～く映ってたでしょ～？ビデオはテレビコトブキに売っ

たんだ。ヒカリちゃんのことをみんなに知ってもらうために」
　オレは確信した。ヒカリはそこにいる。おっさんの言葉にムカついてオレは歯をくいしばった。こいつすんげームカつく。きっとヒカリのやつこいつがこわくて動けないんだ。
「ポチャ～！」
　ヒカリのバッグから閃光が走り、ナポレオンが出てきた。ナポレオンが警戒するほど危ないおっさんなんだな。でもあんなチビじゃおっさんと戦えない。
「ふふふふふ。ヒカリちゃ～ん♪……愛してるよぉーーーっ？」
「キャーーー！！」
　オレは早口でナエトルに『はっぱカッター』を命じた。３枚のはっぱがおっさんの足元につきささる。おっさんの動きが止まった。５秒後におっさんはみにくい顔でふりかえった。ブサイクに怒った顔はグラサンしてても隠しきれない。
「……ぼくの邪魔をするやつは誰だ？！」
　風の流れが変わった。まえから左へ吹いてきた。
「オレの名は……マキシマム仮面Ｊｒ．（ジュニア）……」
　風が強くなり、オレのスカーフがいい感じに左へ流れた。やべー。今のオレ、最高にカッコイイかも！
「ジュ……」
「マキシマム仮面だと……？ごっこ遊びはよそでやれ！」
　ヒカリがなにか言いかけたけど中断された。おっさんはオレに向かってとっしんしてきた。怒ってるおっさんの動きは単純だ。くわえてオレのスピードもありおっさんの攻撃はカンタンによけられた。
「カポエラーキーーーック！」
　オレは回転しながら足を交互に入れ替えておっさんの横っ腹にキックを三回おみまいしてやった。
「ぐは～～っ」
　地面に倒れたおっさんをオレが見逃すはずがなかった。ナエトルを踏み台にしてオレはジャンプした。

「喰らえーーーッ！必殺！サワムラープレスぅう！！」
「ぐぎゃーーーっ！！」
おっさんの背中に覆いかぶさりプレスを喰らわせた。
「ワン！ツー！スリーッ！！」
カンカンカーン！
頭の中でゴングが鳴った。おっさんは口から泡をふいている。この勝負、オレの勝ちだ！オレは勝利のガッツポーズをした。
「やったー☆このファイト、オレの初勝利に終わったぁーー！」
「ルー♪」
ナエトルにお祝いされた。そういえばヒカリを助けられたのもナエトルのおかげだな。オレはナエトルの背中を高速でなでるとヒカリの元へ駆けよった。
「ヒカリ！大丈夫か？！」
ヒカリとナポレオンはぽけーっと座っていた。おいおい大丈夫かよ？
「大丈夫だけど……ジュン、そのマスクは？」
あれ？オレがマキシマム仮面Ｊｒ．じゃないってことバレてる？
「ああ。これお店で買ったんだ。かっこいいだろ？」
オレはヒカリのまえであぐらをかいて目線を同じにした。
「おまえが無事でよかった！」
歯を見せておもいっきり笑うとヒカリは身震いした。よっぽどストーカーのおっさんがこわかったんだな。
「前回は守れなかったけど、今回はちゃんと守れたぞ！」
ヒカリはふるえながら片目の涙をふいたあと笑った。
「助けてくれてありがとう、ジュン」
背中が軽くなった。バッグは肩にかけたままなのに。よかった。
ヒカリの笑顔を守れてよかった……。
「おい！君たち！なにをやっているんだ？！」
安心していたら茶色いコートを着た気難しい顔をしたおじさんがやってきた。数時間前スカイビルでオレを逮捕しようとしたけいさ

つだ！
「あっ！ハンサムさん」
ヒカリは立ち上がった。説明はヒカリに任せるか。
「なにかあったのかね？」
「はい。さっきストーカーに襲われたんですけど……」
「なに！？ストーカー！怪しいやつだな！」
「はい。ここで倒れているのが……」
「逮捕する！」
けいさつかんのハンサムはコートのポケットから手錠を取り出した。オレが撃退したストーカーをつかまえると思ったらところがどっこい！ハンサムが手錠をかけたのはオレの手首だった。
「なんだってんだよー！」
なんでオレが逮捕されるんだよ！オレわるいやつやっつけたのに！
「さきほど噴水の近くでマスクをつけた怪しいやつがヒカリくんの名前を呼びながらさまよっていたという報告があった。君のことだな？署まで連行する！」
「無実だーーー！」
なんだってんだよー！マキシマム仮面のマスクかっこいいじゃん！あやしくねーだろ！
「違うんです！ハンサムさん。私を襲ったのはあそこで倒れている臭いおじさんです！」
ヒカリはハンサムにオレが倒したおっさんのほうへ目を向けさせた。ふう。助かったぜ！なんかコウキがヒカリを天使って呼ぶ気持ちが少しわかった気がする。どんな状況でもヒカリはオレの味方でいてくれる。今日は2回も無実を証明してくれた。
「おじさん！オレだよ、オレ！」
念のためにマスクを取った。ヒカリはオレだってすぐわかったけどこのおじさんどこか抜けているからな。
「なんだ？オレオレ詐欺には騙されないぞ……って君は？！」
おじさんはコートをひるがえした。なんかおどろいてるけどまさ

か……。
「さっきのお騒がせ少年じゃないか！今回は別の意味で騒がせてくれたな」
オレは鼻から息を出した。わるかったな、お騒がせ少年で。
「ジュンがストーカーをやっつけてくれたんです」
ヒカリがフォローしてくれた。ヒカリはＲＰＧだと絶対白魔導師だな。味方のサポートにまわってくれる大切な存在。それかストーリーのキーキャラクターの巫女かな？
「うむ。よくやったぞ！少年！」
「それはいいんだけどさー……」
オレは右手を挙げた。金属のこすれあう音が聞こえる。
「この手錠、外してくんねーか？」
「あ……」
ヒカリは声をもらした。オレ、こんな変なおじさんとトレーナーズスクールで寝泊りしたくねーぞ。ついでに言うとけいさつしょで寝るのも牢屋で寝るのもごめんだ。

（特別編）　第１９．５話　金髪くせっけ少年　２　（後書き）

ジュン「オレさま大活躍だぜ！本当にオレ主人公じゃねーの？主人公がヒカリってコウキよりマシだけどさ……おいサギ！今からでも遅くない。オレを主人公にしろー！！」

第２０話　思わぬ再会

『４月４日　月曜日

今日は１日の大半をコトブキシティで過ごしたわ。途中２０１番道路と２０２番道路でビッパとムックルをつかまえちゃった。ムックルをつかまえたあとコウキくんにトレーナースクールまで案内してもらったんだけど変なおじさんと会ったの！国際警察のハンサムと名乗ってたけど頼りなさそうだったわ。

トレーナーズスクールにジュンがいたから忘れ物を届けたわ。余ったタウンマップもらちゃった。ラッキー♪お昼はコウキくんと一緒にスカイビルで高級フランス料理ｖでも緊張しすぎて味がわからなかったわ…。告白っぽいことされちゃった。キャッｖどうしよう？＞／／／＜サロンを出たら警察がスカイビルの中を走り回ってた。ハンサムさんとまた会って怪しい人に気をつけるように注意された。

そのあと宝石店で真珠とダイヤモンドを見ていたらジュンが割り込んできた。警察とともに。なんと！スカイビルの騒ぎの原因はジュンだったの！弁償代として一千万円も請求されたんだけど幸いコウキくんが払ってくれた。コウキくんどれだけ金持ちなんだろう？

ジュンとコウキくんは警察とともに行動したから私は２０４番道路でスボミーを仲間にした。だけどその代償としてビッパが毒を受けて瀕死になっちゃった…。私ってトレーナー失格かも。さらに追い討ちをかけるように２０８番道路で迷子になっちゃった！わんわん泣いていたら釣り人に助けてもらった。ぼろい釣竿でコイキングを釣ったら元気が出てきた。

ジュンの誕生日プレゼントを買って帰ろうとしたらストーカーに遭った。こわくて腰がぬけて逃げられなくって、もうダメだと思ったところをジュンが助けてくれたの！…マスクをつけて技名を言いながら戦って子どもっぽっかったけど。でもちょっぴりかっこよかった（笑）。ストーカーを撃退（げきたい）したのはいいけどマスクつけてたせいでジュンはハンサムさんに手錠（てじょう）をかけられちゃった。アハハ。

その日はトレーナーズスクールに泊まった。夕食は私の大好きな甘口カレーだった。でも辛党のジュンは甘すぎるって文句言ってた。いいじゃない、たまには甘くても。あ、ジュンにプレゼント渡し損ねちゃった！明日渡さなきゃ！』

暗い洞窟を歩いていた。かれこれ３０分歩いている。ときおりコウモリポケモンが羽ばたく音が聞こえるけどもう慣れた。大丈夫。私にはポケモンがついているんだから。

「ポチャ！」

ナポレオンが出口をさした。外から光がもれてくる。もうすぐクロガネゲートをぬけられる。

「とうちゃ～く♪」

今まで暗いところにいたぶん、明るく言ってみたけど半時間ぶりの太陽はまぶしすぎた。サンバイザー代わりに手をおでこにそえた。

「ふぅ」

それにしてもクロガネゲートがまっすぐ進む道でよかった。そうじゃないと私の『特性』、方向音痴（ほうこうおんち）が発動するところだったわ。ゲ

ートの入り口で親切な山男さんに道を教えてもらったし『岩砕き』の秘伝マシンまでもらっちゃった。ポケモンバトル以外で『岩砕き』を使うにはクロガネジムのヒョウタさんに勝たなきゃいけないって言ってたけど。

目がだんだん慣れてきた。岩山がくりぬかれたような場所にある炭鉱町、クロガネシティ。上が白くて下が青いマンション。黒くてなめの屋根の家。男の人たちの元気な声と機械の動く音が聞こえる。全体的に地味な町だけど活気のある町だわ。真ん中らへんにある茶色い屋根の建物がポケモンジムかしら？コトブキシティにあったフィットネスジムと形が似ているわね。

「あそこにジムリーダーがいるのね！」

「ポチャポチャァ！」

ポケモンジムはトレーナー育成のための公的機関。一般トレーナーの挑戦をジムリーダーが受けて実力を測るシステムだ。ジム戦で勝てばその証として特別なバッジをもらえる。バッジには秘伝技がバトル以外でも使えるようになったり、他人と交換したポケモンが言うことを聞くようになったりする効果がある。どの地方にも８人のジムリーダーがいて８つのジムを集めればポケモンリーグへの参加権が認められる。ポケモンリーグで優勝すればそのトレーナーはポケモンチャンピオンになれる。そう。つまり、ポケモンジムとはいわばポケモンチャンピオンへの入り口！

「ジム戦のまえにポケモンセンターで休もっか。ナポレオン」

「ポチャ！」

クロガネゲートで野生ポケモンと戦ったからみんなを休ませなきゃ。

＊＊＊

フレンドリィショプで道具もそろえて、ポケモンセンターでポケモンを回復させた。少し迷いつつジムの場所を確認しにきたらジムのまえによく知っている顔を見かけた。昨日も一昨日もそれ以前から毎日顔を合わせている金髪くせっけのせっかちな男の子……。

「おっ。ヒカリか！」

やっぱりーーー！あんなに毎日顔を合わせたんだもん。間違えるはずがない。ジムのまえにいたのは切っても切れない縁をもつ私の幼なじみ、ジュンだった。昨日助けてもらったばかりだからちょっと照れる。目線をわざと外してあいさつした。

「ジュ、ジュンじゃない。おはよう」

「今ごろクロガネに到着か？あいかわらず遅いぞ」

むっ。なによその言い草！大体ジュンが早起きすぎるのよ！プレゼント渡そうとしたのにいつのまにかトレーナーズスクールからいなくなってたんだから。昨日こんなやつをちょっとでもかっこいいと思った私がバカだった。

「それにしてもジムリーダーの強さってハンパないよな！もちろんオレは勝ったけど。ジムリーダーであれだけ強いならそいつの親父ってどれだけ……」

「ここのジムリーダーのお父さんもジムリーダーなの？」

へ～、すごいなぁ。親子でジムリーダーなんてめずらしいわね。

そんなこともあるんだ。

「ああ。そうらしいぜ。ま、オレのダディのほうが強いと思うけどな」
「ふーん」
どんな親子なんだろう。使うポケモンのタイプも似てるのかな？
「それよりもさ、ジムリーダーなら炭鉱に行っちゃったぜ！ポケモン勝負するならまず炭鉱に行かないとな！」
「えー！」
ジュンとバトルしたあと早々炭鉱に行っちゃったの？その人どんだけ元気なのよ！いや、それとも負けてヤケになって単純労働でもしたくなったとか？……あ、炭鉱は重労働か。
「おまえ思ってたより遅かったな。オレずーっとここでおまえのこと待ってたんだぜ」
「え？なんで？」
私なんか待たず次のジムのある町に行けばよかったのに。
「だっておまえが来たときにジムに誰もいなかったら困るだろ？だからジムリーダーがいないことおまえに伝えようと思って待ってたんだ！」
―トクン。
小さいけれどはっきりとした鼓動。ジュンの小さな気遣いに胸が温かくなった。不器用な優しさ。もっといい言葉使いをすれば相手を怒らせることなんてないのに。

「ありがとう。ジュン」

ジュンは太陽みたいな存在。いつもそばにいるからたまにまぶしすぎてうっとおしいくらい。あ、そうだ。プレゼント渡さなきゃ。私はバッグのポケットから小包を取り出した。

「お礼に……というかもともとジュンに渡すつもりだったんだけど……これあげる」

「んあ？なんだこれ？」

ジュンは包みからプレゼントをつまんで目の前にぶらさげた。太陽の光を受けてキーホルダーはまぶしく輝いた。

「キーホルダーよ。昨日誕生日だったでしょ？誕生日おめでとう！」

太陽をかたどったキーホルダーはジュンをイメージしたものだ。ジュンの美的センスはどこか外れている。ジュンの好みそうなドクロの指輪やトゲつきのブレスレットよりこっちのほうが似合うと判断して買ったのがこのコンパスに描かれているような太陽のキーホルダーだ。指輪だと失くしそうだしブレスレットだと汚れそう。でもキーホルダーなら大丈夫。それにいざとなったら道しるべになってくれそう。

「お、おお！そうだった！完全に忘れてたぜ！」

「だと思った！だって昨日色々あったもん」

うんうん。ポケモンをもらった日から色んなことがおきてるもんね。トレーナーズスクールでコウキくんとケンカしたり、レストランを襲撃（しゅうげき）したり、警察（けいさつ）に追われたり、宝石店（ほうせきてん）でまたコウキくんとケ

ンカしたり、逮捕されそうになったり、弁償金要求されたり、マスクつけてたからまた逮捕されそうになったり……ってあれ？ジュンってだんだん犯罪予備軍になってる？

「サンキュー！ヒカリ！大好きだーーっ！！」

「キャーー！！」

幼なじみの将来を心配してたらその幼なじみに抱きしめられた。ジュンったら昔からうれしいと抱きしめるクセがあるけど今回はなんか痛い。１０歳になってからはずかしくなってよけるようになったんだけど不意をつかれちゃった。久しぶりのハグは温かいけど痛い。っていうか変に意識しちゃってドキドキするんだけど？！

「ポチャー！？ポチャチャチャー！！」

ナポレオンが騒いでる。嫉妬してるのかしら？

「ジュ、ジュン。そんなに力いっぱい抱きしめないで……痛いから……」

―ドクンドクンドクン。

やばい。私の心臓ドキドキしまくってる！ジュンには聞こえてないよね？

「あ、わりぃ」

ジュンはあっさり私を放した。力を加減してくれるだけでいいのに。急に肌寒くなっちゃった。抱きしめられるまえはこれが普通だったのに。

「それにしてもこれけっこういいな！真ん中にドクロがあったらかっこいいよな！」
「いや、そのままがいいと思う……」
「そうか？まあいいや。大事にするからな！」
言うが早いがジュンはキーホルダーをバッグにセットした。
「これでカンペキだな！ぜったいに失くさないからな！」
「うん」
プレゼント気に入ってくれたみたい。よかった。軽く息をついて私は考えた。さ～て、これからどうしよっかな？炭鉱に行ってもいいけどジムリーダーのジャマになるかもしれない。どうせならどこかでヒマつぶしをしたい。ポケモンセンターの裏の通りにある美術館っぽい建物が気になるなぁ……。
「じゃあ私こっちにいくね」
炭鉱とは反対方向を指した。私はなんたって女の子。炭鉱より美術館のほうが興味ある。
「なんだってんだよー！そっちは炭鉱博物館だぜ。ジムリーダーのいる炭鉱はあっちだぜ」
ジュンは親指でうしろにある炭鉱を指した。重機の動く音と男性のかけ声が聞こえる。な～んだ。美術館じゃないんだ。でも博物館のほうが炭鉱より居心地よさそうね。
「炭鉱に行くならまず博物館に行って炭鉱のこと学ばなくっちゃ。

いいでしょ?ちょっとくらい」
「あいかわらず勉強熱心だな……まあいいや。好きにすれば?オレは炭鉱へ修行しに行くぜ!」
「いってらっしゃーい」

本当はただ服が汚れるのがイヤだから炭鉱に行きたくないのよね。ナポレオンはジュンの背中をにらみつけていた。さっきジュンに抱きしめられたから妬いたのかしら?ジュンが完全にいなくなったことを確認すると私はナポレオンにきのみをあげた。

「ナポレオン。あなたの強さをたたえてプレゼントよ?」
「ポチャ!?」

ナポレオンはじーーっときのみを見つめた。うっ……もっといいものわたすべきだったかしら?きのみの数を増やそうと思いついたところナポレオンはきのみを素早く取った。

「ポッ、ポポチャ、ポチャチャチャチャ、ポチャ、ポッッチャマ!」
「ぷっ」

私は口をおさえた。はいはい。『べ、べつにこんなの好きじゃないんだからね!』って言ったのね。

「ポチャチャー!」
「笑ってないわよ。気のせいよ、ナポレオン」

私は空を見ながらごまかした。空の色はポッチャマのようにまだ青い。時間もたっぷりあることだし、博物館でゆっくりしながらご飯でも食べよっかな。

＊＊＊

炭鉱博物館に入ったら入り口のすぐ横にでっかい黒いかたまりが展示されていた。これがなにかわからずきょとんとしていたら、子ども連れのおじさんが「これが石炭か！」と感激の声をあげていた。うっわ～……本物は初めて見るわ……。ナポレオンも口を開けたまま石炭を見ていた。展示はあとで見るとして食堂はどこにあるのかしら？

「アキラさま。アキラ・クロサキさま。おあずかりしていた化石が復元できました。カウンターまで取りにきてください」

―ドクン。

「ポチャ？」

カウンターでマイクによる呼び出しがあった。アキラ・クロサキって……3年前ヒコザルと一緒にフタバタウンに来たアキラだよね？ナポレオンも聞き覚えのある名前に反応した。私は辺りを見回し黒い短髪で紅（くれない）の瞳をもつ人がいないか探した。

「っ！？」

―ドクン。

心臓の音が大きく鳴った。……いた。私より頭一つ分高い男の子。青い半そでのYシャツの下に水色のTシャツを着ている。でも黒い髪の毛と真紅の瞳はそのままで大人っぽくなっていた。アキラ……

…昔よりかっこよくなってる……！79点から89点に進化した…！

アキラは私に気づかずに通り過ぎてカウンターに行くと、マイクで呼んだ女の人ではなく白衣を着たメガネのおじさんと話しはじめた。

「遅かったねー！待ってたよー！これがカブトだよー！大事にしてあげてくださいー」

「ありがとうございます」

―ドクン。

アキラがカウンターから離れていく。展示品には見向きもせず博物館を出ようとしている。あ……ダメ……行っちゃう！早く話しかけなきゃ……！

「ポチャ～」

ナポレオンが私の足を引っ張った。「話しかけないの？」と言っている。わ、わかってるわよ。今から話しかけるつもり……！

「ア……」

―ドクン。

やばい。声が上手く出ない。裏返った声になってる…！

―ドクン。

……いい。変な声でもいい。話したい。3年間ずっと会いたかった。私の初恋の人……！

「ア、ア、ア……アキラ！」
「え？」
―ドキン。
こっちを見た。……覚えてるかしら？わかるかしら？私がフタバタウンのヒカリだってこと。
「ヒカリ……？」
―ドキン。
目が水っぽくなった。うれしい……。私がヒカリだってわかってくれた……！
「アキラ……」
―ドクン。
胸の高まりが止まらない。……お願い、私の足。上手く動いて……！
「アキラーーー！！」
私は走った。アキラの胸に向かって。周りの目なんか気にしなかった。だって、やっとアキラと会えるんだもん。他のことなんてどうでもいい。
「ヒカリ！」

アキラは私は受け止めてくれた。背中にアキラの手の感触がする。
ひやっとするけどそれがアキラの手。手は冷たいけど心は温かい証。
まさか旅に出てこんなに早く会えるなんて……！

＞i92551699＜

―トクン、トクン、トクン。

やっと私の心臓が大人しくなってくれた。鳴り響くのは心地よい
リズム。いつもより音が少し大きいけど慣れれば安堵の音になる。

「ヒカリじゃないか！気づかなかったぞ。女らしくなったな！」
「うん！」

髪の毛、伸ばしたの。アキラに言われたように女らしくなるため
に。

「……ポケモントレーナーになったんだな」
「うん」

ナポレオンがめずらしく大人しい。ジュンに抱きしめられたとき
はやかましかったのに今はなにも言わない。あこがれの人だから気
を使ってくれてるのかしら？

ああ、なにもかもがなつかしい。クールな顔に燃えるような瞳。
少し青みがかった黒髪。伸びた背も凛々しくなった顔も愛おしい。
男の子にしては細いけどがっしりした腕、平たいけど柔らかい胸…
……え？ストップ。柔らかい胸？

「ちょっ……ええ？あれ？」

「ん？」

私はアキラの胸から顔を離した。ちょっと待って。なんかおかしくない？

「アアアアキラ、むむむむ胸になんかつめた？」

「なにって……ブラジャーつけてるけど……」

ブ、ブ、ブ、ブラジャー？？え？あ、でも最近男性用のブラジャーも販売してるってニュースになってたし普通かな？オカマじゃないけど。でも……え？

「ア、アキラ……アキラって男の子だよね？」

せいいっぱい笑顔を作ったけど私の口元、ゆがんでないかしら？さっきからいやな汗が出まくってるんだけど。

「ハハハハ。やだなー、ヒカリ。なに言ってるんだ？」

アハハハハ。そうよね。アキラがオカマなわけないよね。れっきとした男の子だもんね！

「……私は女だぞ」

「え？」

時は止まった。いや、正確に言うと崩れた。今までアキラを想っていた気持ちが崩壊していった。そ、そんな……私3年間も女の子に恋してたの！？

「い、い、いやーーーーーーーー！！」

「ヒカリ！？」
「ポチャチャー！」

全身から力が抜けていった。空気をなくした風船のように。アキラとナポレオンが私を呼ぶ声が聞こえる。でもだんだん聞こえなくなった。キューンキュン。キューンキュン。初恋の彼は、女の子でした……。

第２０話　思わぬ再会（後書き）

誰がこの展開を予測できたでしょうか？ｗ妹は最初から知っていたので吹き出しながら読んでいましたｗ
何人かの友達に読ませましたが今のところ事前にアキラの正体に気づいたという報告は０です☆

第２１話　昔と今

今日はやることがないので庭の花に水をやっていた。私はヒマだった。いつもなら日曜日は3人で遊ぶ日だけどあの2人がいないんじゃなにも始まらない。あいつらいつ戻ってくるんだろう。研究所に行ってもう1時間以上経ってるのに。

「よっ」

あいつは私の名前を呼んだ。いつのまに背後にいたんだろう。ムカついたから問いつめてやろうと思ってふりかえった。

「遅かったじゃない！研究所でなにしてたの？」

目の前にいる△△は茶化すように笑った。本当にムカつくやつ。○○はやさしいのに。

「オレ、ポケモンもらったんだ」

「え？」

何の前触れもなく△△の持つなにかが光って緑色の生きものがでてきた。あいつの足元にいるネコより大きな生きものは４本足で背中になにか背負っていた。

「すごい……」

これが、ポケモン。動物図鑑にも載っていない、ふしぎなふしぎな生きもの…。

「オレと○○、おじいちゃんに頼まれて旅に出ることになったんだ」

「っ！？」

胸がズキンとした。なぜだろう。ポケモンをもらった2人がうらやましかったから？それとも2人がいなくなってさみしくなるから？

「ずるい！私もポケモンといっしょに旅に出たい！」

「ムリムリ。ポケモン図鑑を完成させるために危ないところに行くこともあるんだぜ？」

△△は手帳みたいな赤い機械を私に見せてニヤニヤした。

「そんなことないわ！ポケモンがいればだいじょうぶよ！」

「どうだか。ここはポケモンチャンピオンになる男、△△に任せて留守番してろよ」

私は図鑑を取り上げようとしたけど△△は図鑑をズボンの尻ポケットにしまってしまった。

「じゃあ私もチャンピオンを目指すわ！」

「女はチャンピオンになれねーよ。せいぜい大人しくここで花嫁修業でもしてな」

私は顔が熱くなるのを感じた。頭の中は怒りとくやしさでいっぱいだ。私は鼻で笑うとあいつから背を向けた。

「もう知らない！」

私は玄関に向かった。今の私の顔をあいつに見られたくなかったから。

「この記念すべきチャンピオンになるオレのスタートを見送りに来ねーのか？」

「誰が行くもんか！」

わざと乱暴にドアを閉めると私は一直線に私の部屋に向かった。ベッドにダイブしてまくらに顔をうずめると私は泣きはじめた。

「△△のバカ！！」

腹いせにベッドを叩いたけどぜんぜんスッキリしない。△△なんてだいっきらい！

＊

「うっ……」

ほっぺたがくすぐったい。鼻がむずむずする。私……泣いてるの？なんで？

「……」

誰かが無言で私の顔をやわらかい布でふいた。少し荒っぽい。でも優しさを感じる。私の顔をふいてくれたのは誰？

「ん……」

私はそっとまぶたを開けた。丸くて青い生き物が私を見つめている。私、まだ夢を見ているの……？

「ポチャ……」

その生き物は私に寄り添った。この子は……ナポレオン。ポッチャマのナポレオン！

「私はっ！」

「ポチャッ！？」

ナポレオンが驚いてひっくりかえった。私はヒカリ。フタバタウンのヒカリ・ハナゾノ。一昨日ナナカマド博士からポッチャマをもらい、旅に出た……。

「ここは……？」

私はせまい部屋にいた。シングルベッド3つ分の大きさの部屋。部屋にはベッド以外に机とイスがあった。ここは医務室かなにかかしら？

「起きたのか？ヒカリ」

長身の人が話しかけてきた。短い黒髪の持ち主。紅い瞳はまるで炎のよう。

「アキラっ！？」

そうだ。思い出した。私はクロガネ博物館でアキラと再会したんだ。でもアキラが女の子だと知ってショックで気絶して……。

「はぁ……」

ここのところ気絶しぱなっし。ため息もつきたくなる。昨日今日一昨日と3日連続で気絶しちゃった。私ってこんなにかよわかったかしら？

「大丈夫か？いきなり倒れて驚いたぞ」

アキラは私にコップを渡した。近くで見てみると改めてかっこいい。こんなにかっこいいのにアキラは女の子なんだ。ジャ●ーズに入れるくらいなのに……私の初恋は終わった。

「うん。なんとか」

もうこれは笑うしかない。一度会っただけとはいえアキラを3年

間男の子と勘違いして恋してたんだもん。……あ、でもアキラって女の子なんだよね？女の子同士なら恋バナできるわ、恋バナ！買い物も一緒に行けるし2人でおいしいケーキ屋さんにも行けるじゃない！それにコウキくんのこと好きになってもいいんだ。な～んだ。そんなにわるくないじゃない。

「……ごめんね。アキラ。私ずっとアキラのこと男の子だと勘違いしてた」

これから女の子同士友情を深められるのはいいけど、勘違いを謝るのははずかしかった。だってアキラにわるいもん。私は仲良くなりたいけどアキラはどうかなぁ……？

「あ……いや、いいんだ。私のせいでもあるからな。昔は一人称『俺』だったし…」

う～ん……あんな男の子っぽい服着て自分のことを『俺』と言っていればさすがに誰でも男の子と勘違いするかも。

「「……」」

どうしよう。次なんて言えばいいかわからない。なにか話さないと……。ええーっと話題、話題……そうだ！

「アキラって好きな男の子いるの？」

「へっ？」

アキラの目が点になった。いきなりこんなこと訊いて失礼だけど他に話題が思いつかなかったんだもん。アキラの顔がみるみる赤くなっていく。いるんだ！

「誰？誰？」

「ちょっ……い、いきなりそんなこと訊くな！」

アキラはあたふたした。な～んだ。アキラにも女の子らしいところあるじゃない。

「ヒ、ヒカリはどうなんだよ？」

ふふっ。アキラったらごまかしてる。

「まだ好きじゃないけど気になる男の子がいるの。ナナカマド博士の手伝いをしていてコウキくんっていうん　だけど……」

「あー。あいつか」
「知ってるの?!」
私はベッドから身を乗り出した。初めての恋バナでいきなり共通の知り合い発覚かしら!?
「知ってるもなにもあいつは私のいとこだ」
「えーっ!?」
超意外な接点!じゃあアキコちゃんが言ってたいとこのお姉さんってアキラのことだったの?!
「言っておくけどあいつはやめといたほうがいいぞ」
アキラは目を細めた。コウキくんと仲わるいのかしら?
「コウキくんのこときらいなの?」
「あいつのようなヘラヘラしたやつは苦手なんだ」
「ヘラヘラって……」
ジュンと同じこと言ってる。たしかにロマンチストでたまに暴走するけど誠実でいいと思うのに。
「まあ、バカのジュンよりかは……」
私はクスッと笑った。アキラは「それにコウキと結婚すればヒカリは遠縁の妹になるし…」と冷静につぶやいていた。ジュンっていたるころで不評だな。ま、私もあんなせっかちさんお断りだけどv

そんなこんなで3年間の空白の時間を埋めるようにお話した。トレーナーになったきっかけ、誕生日、好きな食べ物、好きなファッション、好きなポケモンのタイプ……そんな当たり前のこと。好きな人のことだけは教えてくれなかったけど。アキラは町を転々としていたので私から手紙を送ることはできなかったもん。フタバタウンから出られない私にとってアキラの手紙は唯一の楽しみだった。半年に1通来るか来ないかの短い手紙だったけど。だからアキラがなにをしたかはなんとなく知ってたけどアキラは私がなにをしていたのかはわからなかった。
「そうか。この2日間でいろいろあったんだな」

「うん」
　最近起きた出来事は全てアキラに伝えた。旅に出てからたびたび起こるようになったデジャヴを除いて。アキラに相談するべきかしら？……ううん。まだ旅に出たばっかりなのよ。一時的なものかもしれないしすぐにおさまるわよ。今はそのときじゃない。
　それにしても変な夢。夢で見たものはなにもかもぼんやりしていてはっきり見えなかった。「女はポケモントレーナーになれねーよ」って言ってた男の子が気になる。草タイプのポケモンを連れていたけどジュンだったのかしら？でもジュンがあんな嫌味ったらしく話すわけないし……。ポケモンもらったばっかりだからあんな夢見たのかな。
「ここのジムリーダーってどんな人？」
「ヒョウタか？いいやつだぞ。戦ったことないからどれくらい強いかはわからないけど。２年前ジムリーダーになったばっかりなんだ」
「へ～」
　かっこいい人だといいな♪ま、かっこよくてもバトルでボコボコにしちゃうけどv
「ヒョウタさんって何タイプの……」
　ヒョウタさんの専門のタイプを訊こうとしたら部屋の外がバタバタしているのに気づいた。
「お客様！いけません！」
「うるせー！きんきゅうじたいなんだ！」
　ドア越しに声が聞こえてきた。どうしたんだろう？足音がどんどん近くなった。この部屋に向かっている。まさか……。
　バン！
　開いたドアが壁にぶつかった。入ってきたのは……。
「ヒカリ！倒れたって本当か？！ってなんだってんだよー！」
　……はぁ。やっぱり。お決まりのパターン。いきなり部屋に入ってきたのは金髪くせっけが特徴のせっかちボーイ、ジュンだった。
「その頭！その血をぬったような目！おまえアキラだろ！」

3年ぶりの再会なのにジュンはアキラをビシッと指差した。しかも全然歓迎してない様子。血の色だなんて失礼ね。もっといい言い方あるでしょ。ルビーとか薔薇とか。

「おまえは3年前から成長してないのか?」

アキラはお茶を飲みながら訊いた。落ち着いてないジュンと違って余裕ね。さすがアキラ。

「失礼だな!3年前よりぐんと背が伸びたぜ!」

「そうか」

アキラはジュンを華麗にスルーした。会話が成り立たないと判断したのね。

「おまえだな!ヒカリを気絶させたのは!」

私はギクリとした。ジュンは間違ってはいない。アキラを女の子だと知ったショックで気絶したから間接的に気絶させたのはアキラだけど……でも私が勝手に勘違いしただけだしアキラは悪くないし……うーん。ジュンになんて説明すればいいのかな?

「おまえがヒカリをおそったんだろ?!」

「いや、それはない」

ジュンったら!私が昨日ストーカーに襲われたばかりだから警戒してるのかしら?

「ちきしょー……女の好みそうな外見になりやがって……」

これってほめてるのかしら?けなしてるのかしら?ジュンの美的センスによるとアキラはかっこよくないけど女の子ならかっこいいと思うってことはわかってるんだ。へ〜。以外。

「あのー、お客様?」

受け付けにいたおねえさんが罰のわるい顔をして呼びかけた。ジュンの存在感がありすぎて忘れてたわ……。

「私の知り合いですから大丈夫です。ベッドを貸していただいてありがとうございます。もうすぐここを出ますね」

「あ……はい!そうですか。わかりました」

納得してくれたかわからないけどおねえさんは部屋を去った。そ

ろそろこの部屋だけでなく博物館自体から出たほうがいいかも。タダで入れたとはいえいつまでも居座っていると失礼だし。

「……で、なんのようだ？」

あ、上手く話題をそらした。

「そうだ！ヒカリ！ジムリーダーがヒカリとバトルしてくれるって！」

「えーっ！？」

そんないきなり！ジムリーダーってヒョウタさんのことよね？まだお昼も食べてないのに。

「今昼休みだけどご飯食べ終わったらバトルしてもいいってよ！よかったな！ヒカリ！」

「ええ？あ、うん……」

ヒョウタさんもよくＯＫしてくれたなぁ……。アキラも「いいやつ」って言ってたしおだやかな人なのかしら？

「なんだよー。もっとよろこべよ！『イェーイ♪』って！」

デキマセン。ジュンのように常にテンションマックスじゃないんだから。

「……」

目の前が青くなってジュンが見えなくなった。アキラの背中だ。アキラは無言で私のまえに立った。

「……なんだよ？」

ジュンの声のトーンが下がった。顔は見えないけど不機嫌そう。

「ヒカリもまだお昼を食べてない。それにジムリーダーと戦うのなら対策を練ったほうがいい」

その通り！さっすがアキラ♪もし本当に男の子だったら胸が「キュンｖ」ってなってたかも。

「そっか……そうだな。オレいきなり挑戦したから苦労したもんな。ヒカリなら大丈夫だと思うけどがんばれよ」

ジュンはあっさり身を引いた。ずっとジュンのそばにいたから大抵のことならわかるけどたまに予測できないのよね。

「またな、ヒカリ。バイバイ、アキラ」
開いたままのドアからジュンは廊下へ出た。もう帰るの!?ちょっと待ってよ!
「待って!ジュン!ご飯一緒に食べようよ」
アキラと再会できたのもなにかの縁。3人同時に集まる機会なんてめったにないしせっかくだから3人でご飯を食べたい。
「んー……えんりょする。久しぶりにアキラに会えたんだろ?2人で楽しめよ。コウキよりかはまともだし。オレまだアキラのこと苦手だけど」
本人の目のまえで言わないでよ。ジュンの正直なところは好きだけど。ひやひやしながらアキラを見た。アキラはどう思ってるのかしら。
「……どこに行くが知らんが無茶するなよ」
「りょーかい!」
さすがアキラ。やっぱりクールだわ。ジュンは右手で敬礼するとさっさと行ってしまった。
「私たちも行くか」
アキラはコップや水筒を片付け始めた。
「……」
ナポレオンの視線を感じた。手にはハンカチを持っている。シンジ湖で私の額(ひたい)にのせられていたハンカチだ。私は静かにハンカチを受け取った。
「このハンカチってジュンの?」
「ポチャ」
ナポレオンは首を横に振った。じゃあこのハンカチは誰のなんだろう。

第２１話　昔と今（後書き）

夢と現実の交差って読んでいても書いていても面白いです。

第２２話　石の意思

お昼ごはんを食べ終え、私は炭鉱へ向かっていた。だってジュンのおせっかいでヒョウタさんに迷惑かけちゃったかもしれないもの。私もヒョウタさんに挨拶しなくちゃ。アキラとは店を出たあと別れた。研究所で受け取ったポケモン、カブトを鍛えると言っていた。

『Ｎｏ．１４０　カブト　甲羅ポケモン
高さ０．５ｍ　重さ１１．５ｋｇ
３億年前の砂浜で暮らしていたと考えられる。硬い殻が身を守る。』

アキラの図鑑にはそう書いてあった。背中は丈夫な茶色の甲羅で覆われていて、４本の爪が正面にあった。黒いボディに爛々（らんらん）と光る赤い目はこわいようなきもかわいいような……。背中にも見えにくいけど目があるのよね。やっぱりポケモンって不思議な生きもの。

アキラがボールからカブトを出したとき、私はそのポケモンがすぐカブトだとわかった。まだアキラはなにも言っていなかったのに。

「よく知っているな」と、ほめるアキラに対し私は即座に答えた。

「レベル４０でカブトプスに進化するのよ！」……そのときはなんとも思わなかったけどよく考えたらおかしい。なんで私カブトのこと知ってるんだろう？

クロガネゲートでもイシツブテ、コダック、ズバットを見たとき一目でそのポケモンたちがどういったポケモンたちかわかり、即座に対応した。あの３匹はアキラからもらったジョウト地方の教科書に載っていた気がする。姿と名前は知っていたけどなんでその３匹の特性と使う技も知ってたんだろう？教科書にカブトのことも書いてあったっけ？なんなのこのデジャヴ……？

「ポチャー！」

「はっ！？」

ナポレオンの一声で現実に引き戻された。気がついたら炭鉱の作業場まで来ていた。すぐ近くで石炭を運ぶブルドーザーやレーンが音を立てていたのに考え事をしていて気づかなかった。小柄な人型の怪力ポケモン、ワンリキーが作業員に混じってせっせと石炭を運んでいる。

「もしかして案内してくれたの？」

「……」

ナポレオンは顔を背けた。もしナポレオンがいなかったら私は特性「方向音痴」を発揮して迷子になっていた。考え事をしていて迷子になったことなんてフタバタウンではいくらでもあった。そのせいで昨日もコトブキシティから外れて迷子になったし。

「ありがとう、ナポレオン」

「……チャッ」

お礼を言ってもナポレオンは不機嫌のままだった。アキラのゴウカザル―進化したヒコザルの姿―と対面してからナポレオンはずっと不機嫌だ。成長したヒコザルと再会できてうれしかった私はアキラにしたようにゴウカザルを抱きしめた。そしたらナポレオンがムキになってゴウカザルに勝負を挑んだ。でも2回も進化したうえにレベルが５０も上のゴウカザルにナポレオンが敵うはずがなく、軽くあしらわれてしまった。ナポレオンが『泡』を吐いてもゴウカザルは平手で簡単にかき消した。怒って『はたく』を繰り出そうとしたナポレオンはゴウカザルのしっぽによって派手に転んでしまった。プライドの高いポケモンとして知られているポッチャマのナポレオンにとってこれは屈辱だった。焼きもちを焼かせてしまった私もわるいけど、ナポレオンも自業自得な気がする。

「機嫌直してよ～ナポレオン。明日はヒョウタさんと戦うのよ。ヒョウタさんは岩タイプのポケモンを使うからナポレオン大活躍するわよ。ね？」

「ポチャ～」

ナポレオンは目を細めたままだった。今ナポレオンに必要なのは八つ当たりだ。この怒りを野生のポケモンとのバトル、あるいは明日のジム戦にぶつければ勝利は確実だ思うけど……。

「おや、お嬢さん。こんなところになんのようだい？」

比較的若い作業員の人に話しかけられた。他の作業員と同じように黄色いヘルメットを被って灰色の作業着を着ている。ひげ面のおじさんに話しかけられなくてラッキー♪

「ジム戦の希望者です！ヒョウタさんに挨拶しにきたのですが……」

「ああ！もしかしてあの金髪の坊やの知り合い？」

「はい」

作業員の人は納得した顔をした。

「ジム戦は明日ですが、迷惑でなければ今から挨拶したいのですが…」

「いいよ。案内してあげる」

作業員のお兄さんはシャベルを担いで手招きした。

「炭鉱の中は野生のポケモンが出てくることがあるから気をつけてね」

「はい！」

「ポチャアッ！」

ナポレオンも勇ましく返事をした。きっと野生のポケモンに八つ当たりする気なのね……。

＊

軽く炭鉱見学も兼ねた案内をしてもらいながら私たちはクロガネ炭鉱に入った。ところどころにドラム缶と木製の箱が置いてあったり壁が木の板で打ちつけられていた。地面は階段のように削り取られている。照明などの設備が整っているとはいえポケモンの住む洞くつとあまり変わらない。

「照明ついてても暗いから足元に気をつけてね」

「はい」
たしかに炭鉱の中は暗かった。照明は申し訳ない程度についているだけだし1番頼れるのは作業員のヘルメットについているライトだ。まだ炭鉱の暗さに慣れてない私は作業員のお兄さんに頼るしかない。それに悲しいけど私、方向音痴なのよね。こんなところでお兄さんとはぐれたら昨日以上に心細くなるわ……。
「それにしてもあの金髪の坊や、せっかちだね～。あの坊やの知り合いが来るというからどんな女の子だと思ったら上品なお嬢さんがきたから驚いたよ～」
「うふふ。ありがとうございます」
ほめられるのは慣れている。むしろ、ほめられるのが当たり前だった。少しナルシストかもしれないけど外見にも知識にも振る舞いにも自信がある。他人から悪口を言われたことなんて一度もなかった。だけど、今朝見た夢は一体……？
「ポチャッ！」
「痛っ！」
ナポレオンに軽くはたかれた。いけない。また考えことに夢中になるところだった。暗いところだし気をつけないと……。顔を上げると2人の男の人が私たちとは反対の方向、つまり出入り口に向かっていた。
「次はいつここに来るんですか？」
「さあ、いつだろうね。気が向いたら」
ドクン。
聞いたことのある声がした。まだ暗さに慣れてなかったからよく見えなかったけど、帽子を被った青年が中年の作業員と話していた。中年の作業員と私を案内している若い作業員は軽くお辞儀をした。私はお辞儀をすると同時に目を凝らした。なぜかあの青年が気になってしかたがない。青年の人はフェルト帽にスーツを着ているようないでたちだった。
ドクン。

「え……？」

自分でも聞き取れないくらいかすかな声が漏れた。つばの先っぽがギザギザになっている特徴のある帽子。あの帽子……あの服装……どこかで見たことがある。足を動かしつつ私はその人を目で追った。顔を見たいけど暗さと帽子のせいで見えない。

ドクン。

「……」

「……」

すれちがいざまに、その人と目が合った気がした。でも真実は闇の中に沈んだ。

「あの……さっきの人は？」

作業員のお兄さんは私を見た。ライトが目に当たってまぶしい。

「さあ～。ぼくはこの炭鉱で働き始めてまだ2年だからね～。先輩と親しそうに話してたしヒョウタさんかトウガンさんの知り合いかな～」

「そうですか…」

なんでこんなにあの青年が気になるんだろう。この胸騒ぎはなに？

「ここ曲がるよ～……ってうわっ！」

お兄さんがしゃべった矢先に曲がり角からポケモンが出てきた。目と口を描いたような大きな石に2本の腕が生えている。岩石ポケモン、イシツブテだ。ナポレオンはすぐさまえへ出た。

「『泡』よ！」

「ポ～チャッ！」

待ってましたと言わんばかりにナポレオンは息を吸って『泡』を吐き出した。泡は素早くイシツブテに当たる。

「イッシ～！！」

図鑑に表示されるイシツブテの体力ゲージが一気に減った。岩・地面タイプであるイシツブテにとって水タイプの攻撃は4倍ダメージだ。それに水タイプのナポレオンが水タイプの技を使ったことでさらに1．5倍のダメージが追加される。それにレベルもこちらの

ほうが若干勝っている。私の予想通り、野生のイシツブテは一発でやられた。

「おお～！すごいね、お譲ちゃん。これならヒョウタさんといい勝負ができそうだね」

「はい！」

私は自信満々に答えた。ナポレオンは戦い足りないのかジャブを繰り出している。こっちもやる気満々ね。

「グオーーーッ！」

「「！？」」

「ポチャ！？」

ゴゴゴゴゴ…。

うめき声とともにイヤな音がした。地響きで天上からパラパラと砂が降ってくる。不安になってお兄さんを見た。お兄さんもナポレオンと同じように険しい顔をしている。

「……なんだか嫌な予感がするね。いったん外に出ようか」

「はい」

ゴゴゴゴゴゴゴ…。

音が大きくなった。お兄さんがUターンしたとたん、私の目のまえで大量のイシツブテとズバットが押し寄せてきた。

「お兄さん！下がって！」

「えっ！？」

「『水遊び』！」

ナポレオンは地面にピタッとくっついて水を吐いた。地面を跳んで移動していたイシツブテたちは苦手な水に触れて転びはじめた。でも蝙蝠（こうもり）ポケモンのズバットは空を飛んでいるから当たらない。私はポケモン入りのボールを4個投げた。光とともにムックルのクルル♪、コリンクのキララ★、スボミーのセニョールが現れる。

「クルル♪！ズバットたちを『翼で打つ』！キララ★は『電気ショック』！セニョールはナポレオンを手伝って！」

「クッルー！」

「コリ～ン！」
「ミー！」
ナポレオンはすでにイシツブテたちと交戦していた。ナポレオンの『泡』がイシツブテにぶつかってはじける音が聞こえる。セニョールはイシツブテたちに近づき『すいとる』をかました。地面タイプのポケモンは水と草タイプに弱い。ナポレオンとセニョールの攻撃は効果バツグンだった。セニョールは体力をすいとって上機嫌だったけどイシツブテたちはヘロヘロになった。クルル♪は命令どおり数匹のズバットに向かい翼をぶつけた。がんばって3匹のズバットに攻撃を喰らわせたけど残りのズバットたちは止められない。私は飛行タイプが苦手とする電気攻撃に望みを託した。キララ★は5匹くらい『電気ショック』でやっつけたけど10匹くらいのズバットが引き続き私たちに向かって飛んでくる。
「うわあ！」
「キャァ！」
とっさに壁際に寄ったけど何匹かのズバットとぶつかってしまった。ズバットたちの鳴き声が遠くなり、私は目を開けた。青い蝙蝠たちは私たちを通り過ぎていった。
「ありがとう、お譲さん。役に立てなくてすまない……」
「いいえ」
どういうこと……？私は残ったイシツブテたちを見た。スボミーとナポレオンの攻撃の射程外にいた数匹のイシツブテが私たちを無視して出入り口に向かった。ズバットとイシツブテは私たちを襲ったわけじゃない。たまたま私たちと鉢合わせただけ……？
「グオーーッ！」
またうめき声が聞こえた。だんだん声が大きくなっている。落ちてくる砂の量が増えていた。
「一体なにが起こっているの…？」
私は無意味と知りつつ自分の両腕をつかんだ。

止まない地響き。どんどん地面に積もる砂。なにが起きているかわからないけどここは危険だ。そんなの幼稚園児でもわかる。私は作業員のお兄さんを見た。

「またポケモンが来るまえに非難しようか」

お兄さんの考えは変わらなかった。一概の作業員に解決できる問題ではないのはわかっていたけどガッカリした。もしここでお兄さんが「君を巻き込むわけにはいかない……僕が原因を突き止めるから君は先に避難してくれ！」と言っていたらドキッとしていたのに。でもさっきもおどろいててポケモンを出さなかったしあまり期待してなかった。

「ぼくはポケモンバトルは得意じゃないしね。他の作業員のことも気になるけど今は君の安全を確保するほうが大事……」

「お兄さんは先に出て報告してください」

「ええっ！？」

私はお兄さんを置いて走り出した。ポケモンたちは私についてくる。このまま逃げてもよかった。でも今の私にはポケモンが……ナポレオンとビッパーとクルル♪とキララ★とセニョールがいる。なにが起こっても対処できる自信があった。それにさっきから聞こえてくるうめき声は苦しそうだわ。もしかして岩ポケモンがケガをしたのかもしれない。

「キーキーキー！」

野性のズバットたちが私たちの横を通り過ぎた。こうもりの鳴き声で耳がきんきんする。落ちてくる砂の量がまた増えた。確実に近づいている。炭鉱が崩れるくらい暴れるポケモン……きっと大きいポケモンに違いない。炭鉱という場所とそのポケモンの大きさを考えるとそんなポケモン１匹しか思いつかない。道は左右に分かれていて勘で左に曲がった。そのまま走っていくと数メートル先の壁に突如穴が開き、団子みたいにくっついた岩のかたまりが突き出てきた。

「キャアッ！」

びっくりして立ち止まった。岩は生きものみたいに小刻みに動くと開いた穴に引っ込んだ。……私の予想はおそらく当たっている。大きくて岩が団子みたいに重なった姿のポケモンはここ数年間1種類しか確認されていない。穴を無視して曲がり道を進むと地響きの原因がわかった。炭鉱で暴れているのは8m以上の岩蛇ポケモン……イワークよ！

「コ、コ、コ、コリ～ン！」

キララ★ががんばって威嚇したけど効果があったかどうかはわからない。そもそもそんな『鳴き声』みたいな威嚇が暴れるイワークに聞こえるわけないわ。けなげなキララ★の努力は買うけど……。

「グオーーーッ！イワーーーッ！」」

3人の作業員がイシツブテを駆使して戦っているけど善戦しているとは言いがたい。1匹のイシツブテはイワークにしめつけられているしもう1匹のイシツブテの『体当たり』は効いていない。残りの1匹にいたっては気絶している。

「戻れ！イシツブテ！」

「仲間を救うんだ！『体当たり』！」

「がんばれ！『ロックカット』！」

作業員たちは口々に指示を出していた。どうやらイワークに捕らえられているイシツブテの持ち主は真ん中にいるお菓子のカー●みたいなひげづらのおじさんみたい。イワークに捕まっていたイシツブテは自分の体を削ってイワークの『しめつける』から逃れた。だけどその直後イワークはしめつけていたイシツブテを尾で弾いた。弾かれたイシツブテは『体当たり』を繰り返していたイシツブテにぶつかり2匹ともノックアウトされてしまった。

「イシツブテ！」

「そんな！」

ひげづらのおじさんとハゲのおじさんがイシツブテをボールに戻した。イワークはぜいぜい息を吐きながらも暴れ続けた。作業員たちはあせって相談しはじめた。

「やばい！どうする？」
「逃げようぜ！」
「いや、俺はヒョウタさんを呼びにいく！ヒョウタさんならなんとかしてくれるはずだ！お前らは先に逃げてくれ……っておい！」
作業員たちはようやく私がいることに気づいた。私はリーダー格のひげづらのおじさんに呼びかけられた。
「君！こんなところでなにをやっているんだ！おい、ハゲ。お嬢さんを出口まで連れて行け！」
「了解！」
ハゲのおじさんが私を抱えようとしたけど私は避けた。
「お断りします！」
ハゲに抱えられるなんて勘弁！私を抱えていいのはイケメン限定よ！できればお姫さま抱っこで！
「クルル♪！『砂かけ』！キララ★！『体当たり』！ナポレオン！『はたく』！」
「クルーッ！」
「リ～ン！」
「チャアッ！」
3匹は意気揚々にまえへ出た。指示を出されてないセニョールも3匹に続いてイワークに立ち向かおうとしたけどそのまえに私はセニョールを掴んだ。
「ミ～？」
「あなたはお留守番。私を守るのが役目よ」
「ミ～♪」
セニョールは地面に降りると私の足元で構えた。イワークはイシツブテと同じく岩タイプと地面タイプを重ねあわせている。セニョールがイワークのＨＰを吸い取ったらダメージが大きすぎる。ナポレオンの水攻撃だとさらにダメージは大きくなる。私の目的はイワークを倒すことではなかった。一刻も早くイワークを捕獲して騒ぎを鎮めたかった。私は戦いに向かわせた3匹のポケモンを見守った。

幸いなことにイワークがさっきから暴れていたので地面は砂であふれていた。クルル♪に目くらましのため『砂かけ』をしたあとキララ★とナポレオンの攻撃がイワークに当たった。

「グオーーーッ！」

図鑑を開いてイワークの状態を調るとＨＰが半分ほど減っていた。岩タイプのポケモンにはノーマルタイプの攻撃は効きにくい。『体当たり』も『はたく』もノーマルタイプだ。作業員たちのイシツブテと私のポケモンたちの攻撃でようやく半分に減らせた。ＨＰが４分の１になったらボールを投げよう……そう判断したとき作業員の１人に肩を掴まれた。

「君！どうして草タイプや水タイプの攻撃を使わせないんだ？」

「捕獲したいんです！クルル♪、『影分身』！キララ、『にらみつける』！ナポレオン、『はたく』のよ！『泡』攻撃は使わないで！」

クルル♪は影分身ができるほど高速に飛び回り、イワークを攪乱（かくらん）した。イワークは本物を見つけようと目を凝らしたところでキララ★が出てきてにらみついた。

「イワッ！？」

「コ～リ～ン……」

キララ★はいつもたれている目をなんとか吊り上げて低い声で眼（がん）をつけた。控えめな性格のキララ★に威嚇させたりにらみつけさせるなんて我ながらひどいかもしれない。でも相手の防御力を下げる『にらみつける』を使えるのはキララ★だけだ。

「イワーッ！」

「コリッ……」

イワークと目の合ったキララ★は頭突きを喰らってしまった。続けてかみつこうとするイワークにナポレオンは攻撃を仕掛けた。

「ポーチャッ！」

防御の下がったイワークにナポレオンはすかさずはたいた。でも効果はいまひとつだ。もうちょっと防御力を下げたほうがいいかも。

「こんなのつかまえられるのか？倒したほうが早いぞ！」

「こんなのが倒れたらジャマですよ！キララ★！そのままにらみつけて！」

野生のポケモンは倒されたら瀕死になってその場で動かなくなる。しばらく時間が経つと少し動けるようになって食事をとって眠る。そうすることで次の日には体力満タンで活動できるようになる。なぜだか知らないけどこんなに怒っているイワークを倒しても次の日に起きてまた暴れる可能性が高い。それに体長約９ｍで２１０ｋｇもあるイワークが炭鉱で倒れたらジャマになる。瀕死のポケモンにボールを投げたらそのポケモンの生死に関わる。だからポケモンを捕獲するときはギリギリまでポケモンの体力を減らしてボールを投げるのがポケモン協会決まりだった。イワークは私が捕獲したい。まえから一度は育てたいと思っていたのよね、イワーク。防御力が桁違いに高いもの。

「ビッパー！加勢して！」

ハゲの作業員を尻目にビッパーを出した。イワークの捕獲ってけっこう難しいわね。

「ビーーップ！」

暗い炭鉱だとボールが放つ光がまぶしい。目をパチパチして調整するとビップに指示を出した。

「『体当たり』、よろしくね！」

「ビーッ！」

ビッパーは３匹の援護をしに行った。図鑑とにらめっこしてたらセニョールが私のブーツをひっぱるのを感じた。

「ミー！ミー！」

セニョールは真面目な性格。きっと４匹が戦うのを見て責任を感じたのね。でもセニョールは赤ちゃんだし……。

「んー……じゃあ『しびれ粉』をイワークに振りかけたあと戻ってきてね」

「ミ～！」

セニョールは小さい足で戦闘に向かった。本当に真面目ね。それ

にしてもなんでイワークが暴れだしたのか気になる。作業員たちに訊ねようと振り返ったら作業員が1人しかいないことに気づいた。たぶんひげづらの人はヒョウタさんを呼びに行ったのね。もう1人の気の弱そうなノッポの人は逃げたのかしら。

「君すごいな……」

「それよりなんでイワークは怒っているんですか？」

私はポケモンたちに目を配りながら訊いた。うっかり目を離すと私のポケモンが瀕死になっちゃう。

「おれがいけないんだ……。硬い岩があったから手持ちのワンリキーにつるはしを振らせたんだ。でもそれは　岩じゃなくてイワークの体の一部だったんだ」

うわっ……格闘タイプのワンリキーにつるはしで攻撃されるなんて最悪だわ。防御の高い岩ポケモンでもさすがにこたえる……。

「それで怒って暴れだしたのね」

「めんぼくない……」

完全に事故ね。

「それでワンリキーは？」

「岩の下敷きになって瀕死に……」

「そうですか」

話が終わったところでセニョールがうれしそうに戻ってきた。上手く『しびれ粉』をイワークに浴びせたのね。図鑑を見るとイワークは見事に麻痺していた。ＨＰは3分の1になっていた。私はセニョールをなでながらつぶやいた。

「もうちょっとかなぁ……」

手持ちのポケモンのＨＰを調べるとクルル♪とセニョールは満タン、ビッパーはほぼ満タン、ナポレオンとキララ★は4分の1減っていた。クルル♪の『砂かけ』のおかげでポケモンたちにイワークの攻撃はあまり当たってないけどポケモンたちの体が心配だ。あんな硬いポケモンに攻撃し続けていると体が痛んでしまう。イワークを捕獲したら温泉に入れてあげよう。

「ちょっと早いけど試してみよっかな」
私はバッグから赤いボールを取り出した。
「いけっ！モンスターボール！」

第２２話　石の意思（後書き）

ついに謎のイケメン登場！予定より早く登場させました。お気に入りのキャラですからｖ
でも顔が見えなかったのでヒカリは彼がイケメンだということすら知りません（笑）。

第２３話　女の子

赤白のボールはイワークの頭に当たった……というより弾かれた。モンスターボールはイワークを吸い込むことなく壁に当たって壊れた。

「ちょっとぉ……！」

もったいない。１個２００円だけど何個も買ったらそれなりにお金がかかるのに！ＨＰをもうちょっと減らしたほうがよかったかも。

「クルル♪！『電光石火』！ビッパー！『体当たり』！」

キララ★とナポレオンのＨＰの減り具合が気になる。それまでイワークの囮（おとり）になっていたクルル♪とあまりダメージを受けてないビッパーに攻撃させた。私が攻撃指令を出すとイワークは体を光らせた。気を引き締めて自分の防御力を上げる技、『硬くなる』を使おうとしているのね。でも……。

「遅いっ！」

ものすごい速さで動くクルル♪相手に『硬くなる』は間に合わずイワークはしっかりダメージを受けた。『電光石火』は必ず相手に先制攻撃をしかけられる技。それに麻痺してるイワークがクルル♪より早く動けるはずないわ。そのあとビッパーの『体当たり』がヒットしたけどこの攻撃はあんまり効かなかった。『硬くなる』の影響を受けたのね。イワークのＨＰゲージはようやく赤色になった。

「キララ★、クルル♪、ビッパー、セニョール、戻って！」

イワークのＨＰが４分の１になったことを確認済み。私は４匹を順番にボールに戻した。この子たちの役目は終わったわ。

「今度こそ！」

私は再び空のボールをイワークに投げた。真ん中の胴体あたりを狙ったけどボールは尾で跳ね返された。まただわ！

「もう１回！」

あきらめずに３個目のボールを投げた。今度は上手く額（ひたい）に当たった。イワークの意思を無視してボールは光とともにイワークを吸い込んでいく。

「イワーーーッ！」

ボールに吸い込まれつつイワークは体をくねらせて反抗した。でもムダよ。一度当たったら吸い込まれる仕組みだもの。中で暴れまくればボールから出られるけど。イワークのシルエットがボールの中に消えた。ここからはガマン比べだ。ボールは大きく右に揺れ、次に反対方向の左に揺れた。もう１度右に揺れると思ったらボールが開いた。

「グオーーーッ！」

うめき声とともにイワークが私と作業員のほうにつっこんできた。人間相手に『体当たり』を喰らわす気！？避けられない！直撃を覚悟したとき岩ではない体で私は突き飛ばされた。

「ナポレオン！！」

私が見上げたときナポレオンは空中へふっとばされていた。私の代わりにイワークの『体当たり』を受けたの？！

「作業員はっ！？」

私は倒れているハゲの作業員の元へ駆け寄った。作業員は無事だったけど口から泡を吹いていた。気絶したのね。作業員のボールの中身を見たらイシツブテもワンリキーも瀕死だった。やっぱりここは自分でなんとかするしかない。私は４個目のボールを構えた。

「お願い！入って！」

頭に当てようとしたけどボールはずれて首に当たった。ギリギリいける……！ボールが開きイワークは吸い込まれた。静かになった炭鉱にボールの音が響く。

―ガタッ。

お願い……。

―ガタッ。

仲間になって……。

―ガタッ。

これ以上誰もキズつけたくないの……！

―カッ。

ダメだった。私の祈りは届かずイワークは再びその姿を現した。

「イワーーーッ！」

「そんな……！」

また失敗した。倒すしかないの？イワークはなにもわるくないのに……！

「ナポレオン！『鳴き声』！」

「ポチャア♪」

時間稼ぎのために補助系の技を使わせた。ナポレオンはぶりっこみたいにまばたきしてかわいく鳴いたけど漫才のツッコミのようにイワークにどつかれた。ごめん……ナポレオン……。心の中で謝罪しつつ私はバッグの中をあさった。傷薬、麻痺治し、毒消し、……今1番必要な赤白のボール見当たらない。さっきので最後だったの？

『そんなポケモンも捕まえられないのか？』

昔からよく知っているあいつの言ったことを思い出した。……バカにしないでよ。私はあんたのような図鑑完成をサボってるやつとは違うんだから……！いらだちと戦いながら手探りでバッグの奥をかきまわしてたら丸いものに触れた。

「これは……！」

手にしたのはモンスターボールよりやさしい色合いのボールだった。ピンク色のボールに黄色い滑らかな模様がさりげなく入ってい

る女の子らしいデザイン。アキラからもらったヒールボールだ。ヒールボールには捕まえたポケモンのＨＰと状態異常を治す効果がある。

私はイワークを観察した。ナポレオンはがんばってイワークの攻撃をよけている。イワークの胴体の中心より下の岩にヒビが入っていた。あれが例のワンリキーから受けたキズね。痛みに我を忘れているイワークを落ち着かせるためにやることは一つ。ヒールボールで捕獲（ほかく）してイワークを回復させる……！

「ポーッチャア……」

ナポレオンの体力も限界だ。よつんばいで起き上がろうとしているナポレオンをかばうように私はイワークのまえに立った。

「イワーク！今まで攻撃してごめんね！」

「イワーーッ！」

イワークの息が吹きかかってきた。髪の毛がうしろに揺れた。土の香りが私とナポレオンを包む。

「私はただみんなを助けたかっただけなの！その痛そうなキズ、私が癒（いや）してあげるわ！」

私はピンク色のボールを掲げた。これが最後のボール。このボールに賭けるしかない。

「イワーク……」

私は両手でボールを握った。

「私の……」

ボールを左脇に寄せた。

「仲間に……」

ボールを左脇から右耳まで移動させた。

「……なって！！」

私は左手を放し、右手に力を込めるとボールを投げた。ボールはイワークの角に当たり、イワークはみるみるボールの中に吸い込まれていった。

やさしい光に包まれながらイワークはヒールボールの中へ吸い込まれた。……ここからが本番ね。これが最後のボール。これでつかまらなかったらイワークを倒さなければならない。そんなことしたくないのに。

―ガタッ。ガタッ。ガタッ。

ボールが揺れはじめた。右、左、右……。気のせいかもしれないけどさっきより抵抗が少ない気がする。

―ガタッ……ピロリロリーン♪

ボールの揺れは短いメロディとともに幕を閉じた。魔法少女が変身するみたいな音だった。

「やったー！捕獲完了☆」

よかった……イワークを仲間にできてよかった……！もしかして私の気持ちがイワークに通じたのかな？本当によかった！イワークの状態が気になって私は図鑑を見た。

『イワーク　岩蛇ポケモン
高さ　８．８ｍ　重さ２１０．０ｋｇ
大きな岩をも喰らいながら地面の中を掘り進む。そのスピードは時速８０ｋｍ。』

私は図鑑の表示するデータをスキップした。データはいいからイワークの状態を確認しなくちゃ！

『イワーク♀
タイプ：岩・地面
特性：石頭
わんぱくな性格。気が強い。』

えっ……このイワーク女の子だったの！？しかもわんぱくで気が強い女の子！？私はイワークをちらりと見た。イワークはニコニコしながらボールの中で揺れた。……うん。体力は全快したわね。ＨＰのゲージ満タンだし。キズも癒えたみたい。念のためポケモンセンターで診てもらうけど。

「はぁ……」

私は息をついた。そうよね。女の子なら体にキズができたら怒るのは当然よね。男の子にアピールする自信なくしちゃうわ。せっかくだから綺麗なニックネームをつけなくっちゃ！

「そうね。女の子だから『ラミア』って名前はどう？」

ラミアはギリシャ神話に出てくる人物。美しいリビアの女王だったけれどゼウスの妻ヘラに嫉妬され、上半身は人間、下半身が蛇の体にされてしまった女の人。不運な女の人の名前だけれど岩蛇ポケモンのイワークにちょうどいいかもしれない。イワークがイヤだったら『イワルー』にするけど。イワークはボールごとピョンピョン飛び跳ねた。気に入ったみたい。私はラミアに笑顔で応えた。

「ナポレオン！あなたのおかげよ。ありがとう！」

「ポ……チャ……」

ナポレオンは弱っていたけど私と手を合わせた。ハイファイブね。傷薬を取り出してナポレオンに吹きかけた。

「おつかれさま、ナポレオン。さ～て、ポケモンセンターに戻……らな……きゃ……」

歩こうとしたら体がフラついた。あっ……今日はがんばりすぎたかも……このままじゃ倒れちゃう……。

「ポチャチャーッ！！」

ごめんね、ナポレオン……私ちょっと眠るね……。地面に倒れるのを覚悟したとき、誰かが私を受け止めた。

「大丈夫かい？」

私は弱々しく声の持ち主のほうを向いた。私が倒れるのを止めてくれたのは赤いヘルメットを被った若い作業員だった。私を案内し

てくれたお兄さんより若い。黒縁メガネをかけた顔は几帳面でしっかりした印象を受ける。肩までかかった赤茶色い髪は外側に跳ねていてオシャレだった。……もし口笛を吹けたら吹いていたかもしれない。ヒュー♪いい男発見？８１点！……ってこんなことしてる場合じゃない！

「は、はははは い！」

びっくりして飛び上がった。こんなかっこいいお兄さん見たら眠気がふっとんじゃった。私は反射的にこのかっこいいお兄さんに背を向けて身づくろいをした。暗いからあまり見えないけどラミアとの戦闘で体があちこち汚れている。軽く土埃（つちぼこり）をはらって髪の毛を手でとかした。クリップで止めていたけどボサボサになってる。いったん外そう……って私の帽子どこにいったの？！

「ポチャ！」

ナポレオンが私に帽子をわたした。わざわざ取りに行ってくれたのね。

「ありがとう、ナポレオン」

私は帽子をかぶった。

「どうしたんだい？」

かっこいいお兄さんが近寄ってきた。改めて見てみると他の作業員と違って作業服は上下に別れているし上着のボタンは開いている。もしかしてこの人がヒョウタさん……？

「な、なんでもありません！帽子を探していただけです！」

別にうそじゃないよね。なくなってたのは事実だし。

「そうかい。見つかってよかったね」

ヒョウタさんらしき人物は私の動揺（どうよう）に気づかずニッコリと笑った。か、かっこいい……。まあ、アキラほどじゃないけど。……アキラ女の子だけど。

「ヒョウタさ～ん、置いてかないでくださいよ～」

イワークと戦闘中のときにいなくなったひげづらのおじさんがやってきた。やっぱりこのお兄さんがヒョウタさんなんだ！

「ああ、すまない。緊急事態だったから急いでいたんだ」

「その緊急事態のときに地下通路で化石を掘るのに夢中で気づかなかった人は誰ですか？！」

「ははははっ。ぼくのことだね」

え～っ！化石掘るのに夢中だったの！？だからなかなか来なかったんだ。

「やあ。ボクはクロガネジムリーダーのヒョウタ。君はヒカリくんかい？暴れるイワークを鎮（しず）めてくれてありがとう。さっきの捕獲、見事だったね」

「いえ、当然のことをしただけです！」

キャッ？ほめられちゃった♪かっこいい人にほめられるとやっぱりちがうなぁ……。ヒョウタさんって炭鉱で働いているのに知的で

かっこいい。思わずヒョウタさんの腕を盗み見した。メガネをかけてるから顔だけ見ると理科系っぽいけどちゃんと鍛えてある。……いい筋肉？筋肉フェチじゃないけどたくましいからドキッとしちゃう。

「それにしてもさっきの戦いのせいであちこちに岩があるね」

「あ……」

本当だ。戦いに集中してたから気づかなかったけど辺りは岩だらけ。ラ、ラミアったらわんぱくなんだから～。アハハハハ～……ってわんぱくの粋を超えてるわよ。

「ちょっと見ててね！ズガイドス！」

ヒョウタさんはボールを投げた。ボールから現れたのは見たことのないポケモンだった。ナポレオンの2倍大きい。皮膚の色は灰色だけど頭と背中は青く、ギザギザ模様で区切られていた。頭のうしろにトゲみたいな角が4つある。その姿はまるで絶滅図鑑に載っている恐竜みたいだった。なんの恐竜かは忘れたけど。

「秘伝の技『岩砕き』を使えばこんな邪魔な岩だって！」

「クエーッ！！」

考えるヒマも止めるヒマもなかった。ズガイドスはいきなり手短にあった適当な岩にむかって走りパンチを繰り出した。

「ポチャアッ！？」

―ガラッ。

「えっ？」

―ガラララッ。

「ええっ！？」

「ポッチャアッ！？」

いきなり岩にパンチして無謀だと思った。でも岩はズガイドスの攻撃で見事に崩れ始めた。ナポレオンも目を丸くしている。

「こうして落ちてきた岩を砕いておかないと邪魔だからね。君もこの町のポケモンジムでジムバッジを手に入れればこれぐらいすぐにできるさ！」

「は、はぁ……」

いくら岩にヒビが入っていたとはいえすごいわ。これがポケモンの力なのね。私たちよりはるかに力のある生きもの……。これだけ様々な種類がいて異なる力を持っているポケモンなら時、空間、あるいは世界さえも操れるポケモンもいるのかしら……？

「最も、ジムリーダーのボクに勝てないと駄目だけどね！」

ヒョウタさんの一言で我にかえった。私なに考えてるんだろう……ってあれ……？また体が……。

「おっと」

再びヒョウタさんに受け止められた。やっぱり私疲れてるんだわ。足に力が入らない。私は立てなくなってヒョウタさんに支えられながらゆっくりと地面に腰を下ろした。

「どうやら先程の戦いで君も体力を消耗したみたいだね」
「す、すみません……」

もう動けない。限界だわ。ヒョウタさんを見て一時的に元気が出たけどもう体がいうことをきかない。

「仕方ないか。それじゃあよいしょっと」
「きゃあっ！」
「ポチャッ！？」

私の足は地面から離れた。これって……これってもしかして全ての乙女が夢見る……お姫さま抱っこーー！？うそ！私ヒョウタさんにお姫さま抱っこされてる！

＞ｉ９２５６―６９９＜

「母さんはこの町で宿を経営しているんだ。そこまで運ぶよ。念のため医者もそこへ呼ぼうか」
「ええっ！？でも……」

キャーー！！キャーー！！このまま宿まで運んでくれるのはうれしいけどはずかしい。だって町中の人に見られちゃうじゃない。人通り少ないといいなぁ……。でもこんなにかっこいい人にお姫さま抱っこされるなんてラッキー！！

「先に宿に行って知らせてきます！」

ひげづらのおじさんはこの場を立ち去った。ってことは私とヒョウタさん２人きりつ！？

「ポチャ！」
「クェー」

あ、ちがったわ。ナポレオンとズガイドスがいるじゃない。2人と2匹ね。

「ははっ。気にしないで。君のおかげで炭鉱が崩れなかったんだ。恩を返したいんだ。これだけじゃ足りないくらいだよ。宿には温泉もあるからゆっくりしてね。タダで泊まれるようにしておくよ」
「は、は、はははははい！」

ヒョウタさんはすでに歩き始めていた。こ、ここはおとなしくもてなされたほうがいいかも。それにタダで宿に泊まれるってことは節約できるわ。旅に1番お金かかるのって食事代と宿代だし。

「今夜の食事は豪華になるね」
「あ……ありがとうございます！」
「ポチャー！」

ナポレオンがヒョウタさんの足をぽかぽか殴っていた。ナポレオンったら！今助けてもらってるのにそんなことしちゃダメよ！

「おや、どうしたんだい？」
「ポチャ！ポチャポチャポチャー！」
「クォー？」

ズガイドスは疑問しつつナポレオンをヒョウタさんの足から離した。

「ポチャチャーッ！」

ナポレオンは意地でもズガイドスの腕から逃れようとした。もしかして……ナポレオン……妬(や)いてる？

「安心して。君のトレーナーに危害を加えるつもりはないよ」

「ポ、ポチャア？」

ナポレオンは「ほ、ほんとうかぁ？」という感じで目を細めた。

「それとも君がヒカリくんを抱えるかい？」

「ポ、ポチャッ！？」

ナポレオンは急によそよそしくなった。ナポレオンの体長は０．４ｍ。私はたぶん１．４ｍくらい。ナポレオンが私を持ち上げるなんてどう見てもムリ。引きずればなんとかなるかもしれないけどスカーフ引っぱっている間に私が窒息死(ちっそくし)しそう。

「ポ、ポ、ポ……ポチャア！」

ナポレオンはぺこりとお辞儀をした。「おねがいします」ってことかしら。

「異論(いろん)はないね。じゃあ行こうか」

私たちは移動を再会した。ナポレオンは私の代わりにバッグを持とうとしたけどズガイドスに先を越されてしまった。せっかくラミアを仲間にしてナポレオンの機嫌(きげん)がよくなったのにまた機嫌がわるくなりそう。腕につけたポケッチを見たら４時半を過ぎていた。

第２３話　女の子（後書き）

イワークを捕獲するのにボールを４、５個くらい費やしたのは実体験です。
最後にヒールボールで捕獲したのはいいのですがそのとき手持ちが一杯だったのでＰＣに転送されてしまいました。
うわーーーん！！（ＴｏＴ）　回復させた意味ないじゃん！くやしかったのでヒカリにはヒールボールを有効活用させました（＾＾；

第２４話　余裕

『４月５日　火曜日

ついに最初のポケモンジムがある町、クロガネシティに着いたわ。クロガネゲートで道を教えてくれた山男さんに感謝しなきゃ！『岩砕き』の秘伝マシンもくれたし今度お礼になにかあげようっと。

ジムの場所を確認しに行ったらジュンに会った。朝一にジムリーダーと戦って勝ったのに、ジムリーダーが留守だってことを私に伝えるためにわざわざ待っててくれたの！普段は空気読めないのにたまに気をきかせるからジュンってわからないな。とにかく昨日わたせなかった誕生日プレゼントを渡せてよかったわ。

ジムリーダーは炭鉱にいるからそこに行けって勧められたけど断った。だって服がよごれるかもしれなもん。かわりに炭鉱博物館に行ったわ。そしたらなんと！そこにアキラがいたの！アキラよ！アキラ！私の初恋の人！もうほっっんとにうれしくてアキラの胸に飛び込んじゃったｖでもなんだか胸がむにゅ～ってして……アキラって女の子だったの！？

ショックで気絶して起きたら私は医務室にいた。こうして私は初恋に破れたけどかえってすっきりしちゃった。これでコウキくん好きになってもＯＫだし（－ｗ－）途中でジュンが医務室に入ってきてアキラといざこざがあったけどジュンはあっさり引いちゃった。だから私はアキラと２人でお昼ご飯を食べた。アキラのヒコザル進化して最終進化形態になってたけどすごかったなぁ……。ナポレオンはどんなポケモンに進化するんだろう？

ジムリーダーに挨拶しようと思って炭鉱に入ったら変わった帽子を被った青年とすれちがった。なぜだかよくわからなかったけどそ

の人が気になってしかたがなかった。でもそのあととんでもないことが起こったの！大量の野生のイシツブテとズバットと出くわしたの！なんとか退けたけど野性のポケモンたちの様子がおかしい。

炭鉱の先を進んだら原因がわかった。野生のイワークが大暴れしていたの！作業員が3人がかりでポケモンバトルしていたけど敵わなかった。このままじゃ炭鉱が崩れる……！私は一か八かイワーク捕獲作戦を実行した。手持ちの5匹を駆使してなんとか捕獲したけどボール5個も使っちゃった……。

そんなときにふらついた私を助けてくれたのはなんとジムリーダーのヒョウタさん！岩ポケモン使いのヒョウタさんは知的で肉体労働も苦としないイケメンだったの！四角いフレームのメガネがポイントね……！炭鉱を救ってくれたお礼として宿までお姫さま抱っこで運ばれちゃったv宿に行く間何人かに見られれて冷やかされちゃったwはずかしいけどうれしーーー！！／／＞▽＜／／

宿に着いたらみんなに歓迎された。アキラはヒョウタさんに抱えられた私を見て驚いてたけど。温泉に入って医者に私とポケモンを診てもらったあと宴会が開かれた。みんなの気持ちはうれしかったけど私とポケモンたちは疲れてたから食べたらすぐ寝ちゃった。アキラが酔った作業員の人たちに囲まれていたけど大丈夫かしら？』

「……ふう」

私は持っていたエンピツを放した。こんなものかな。昨夜はすぐ寝たから日記を書き忘れちゃった。日付はもう6日だけど忘れないうちに昨日の日記を書くことにした。今それがこうして終わったところ。

「ふあ～」

私は体を伸ばした。昨日は運動したから体が痛い。筋肉痛かなぁ……。体の筋肉をほぐすためにストレッチでもしようかな。ちょうど髪の毛一つにまとめてあるし。

「1、2、3、4……」

腰に手を置きながらもう片方の腕を右に伸ばした。今度はその反対。

「……」

同じ動作をもう一度繰り返した。

「1、2、3、4。5、6、7、8……ん？」

「ポチャ」

気がついたらナポレオンもうしろでストレッチをしていた。他のポケモンはまだボールの中で眠っている。短い腕でよくがんばるなぁ……かわいい？

「ポッ、ポポチャ、ポチャチャチャチャチャマポッッチャマ！」

あ、照れた。「べ、別にあんたのマネなんてしてないんだからね！」って言ったのかしら？

「……私何も見てないわよ」

「ポポチャァ！」

私は見なかったフリをした。ナポレオンは素直になれないお年頃なのかしら。

「次は足をストレッチしよっと」

ナポレオンがマネをしていることに気づかないフリをしながら私はストレッチを続けた。ストレッチが終わったらみんなを起こそう。今日の夕方はヒョウタさんとのジム戦がある。せっかくだからアキラに稽古つけてもらおっと。

＊＊＊

「あー……あいつはやめたほうがいい」

私の問いに対する言葉が開口一番それだった。私はただヒョウタさんはどんな人か訊いただけなのに……。なぜかいきなりアキラにダメ押しされた。私は今宿の広間でアキラと一緒に昼ごはんを食べている。昼ごはんって言っても私もアキラも遅く起きたから正確にはブランチになるけど。

「エセ紳士のコウキを選ぶより賢い選択だがヒョウタは化石オタクだからな……」

エセ紳士って……コウキくんって人気者なのにジュンやアキラには不評だなぁ……。

「おまえはすぐ寝たから知らないだろうけど、昨夜ヒョウタは一晩中私にいかに化石ポケモンが素晴らしいか聞かされたんだぞ。あれは地獄だった。おかげで睡眠不足に……」

「そうじゃなくてヒョウタさんが何タイプのポケモンを使うとか、どんな戦略を使ってくるとかそういうことを知りたいの！」

「昨日ヒカリがヒョウタにお姫さまだっこされて浮かれていたよう

に見えたのは私の見間違いか？」

―ギクッ。

ま、まあ、たしかにヒョウタさんについて訊いたときポケモンバトル以外のことも教えてくれたらな～と下心持ってたけど……いやん。バレちゃった☆

「ゴメンナサイ」

「素直でよろしい」

私は天ぷらを箸でつかんだ。そのまま口に運ぼうとしたら悲しいオーラを感じた。このオーラの発信源は私の横にすわっているおちびちゃん……ナポレオンだわ！ナポレオンはまぶたをつりあげながらも困ったような顔で天ぷらを見つめていた。今私が食べようとしているのはエビの天ぷら――通称エビ天。ナポレオンは今か今かといずれ訪れる絶望を覚悟しながら私とエビ天を見ている。

―ゴクリ。

やだ。つばを飲む音まで聞こえる。……はぁ。しかたないわね。

「……私エビ飽きたかも。ナポレオン食べてくれる？」

不自然じゃないよね？自然な流れでエビ天あげないとナポレオンのプライドがキズついちゃう。

「ポチャー♪」

あ、よろこんだわ。

「……チャッ！？」

あ、我にかえった。

「ポチャチャポチャチャチャ～。ポッ、ポポチャ、ポチャチャチャチャ、ポチャ、ポッッチャマ！」

ナポレオンはすました様子でエビ天を手に取ったけど顔がニヤけている。え～っと……「しょうがないわね～。べ、べつにエビ天が好きなわけじゃないんだからね！」で、合ってるかな？ナポレオンはオスだけどどうしても発言を脳内変換するとき女言葉になっちゃうのよね。

「ありがと～、ナポレオン。私少食（しょうしょく）だから食べきれなくって……」

「ポチャチャチャ、ポッチャ！」

……たぶん「また食べきれないときは言ってよね！」って言ってるんだと思う。そんなふうにナポレオンとやりとりしていると今までだまっていたアキラが口を開いた。

「仲いいな」

「まだまだよ」

「ポ、ポチャー！」

ツンデレってお世辞に弱いのね。そう思いながら私はオレンジジュースを飲み干した。

＊＊＊

お昼を食べ終わったあと、私とアキラとナポレオンは宿の裏庭に出た。炭鉱での活躍のおかげで宿の人は私に寛大だった。クロガネシティに来たときはいつでもタダで泊まっていいって言われたし今日は裏庭まで貸してくれた。ご飯を食べるときはクルル♪、キララ★、ビッパー、セニョールだけでなく炭鉱で騒ぎを起こしたラミアさえもきちんと世話してくれたし。「温泉に入るとき背中を流してほしいのなら言ってください」ってそこまでサービスしなくても……。アキラはふぅ、と息を吐くと私に面と向かって言った。

「宿で歓迎されるのはいいが油断するなよ。いくら炭鉱を救ったからといってヒョウタは手加減しない。」

「わかってるって！」

「ポチャー！」

むしろ手加減されたら怒るわ。ナポレオンだってそんなこと望んでないし。

「手持ちのポケモンは？」

アキラは曇った表情で訊ねた。む、信用されてない。

「ムックルのクルル♪と～、コリンクのキララ★と～、ビッパのビッパーと～、スボミーのセニョール。あと　昨日つかまえたばっかりのイワークのラミア！」

「ポチャ！？」

ナポレオンは目を丸くしたと思ったらわざと鼻歌を歌ってアピールしはじめた。目のまえにいるから言う必要はないと思ったけど一応紹介しようかしら？

「そして私の切り札ナポレオン！」
「チャチャッ！？」

自分の名前に反応してナポレオンは私を見た。

「ポチャチャ～」

ナポレオンは頭に手をあてて鳴いた。照れてる照れてる。うふふっ。

「これからもこのメンバーで旅を続けるのか？」
「ううん。これから決めていくつもり。旅を続けるうちに少しづつメンバーを入れ替えるわ」

今のところナポレオンとセニョールとラミアを育てることは確実。キララ★とクルル♪もしばらくは育てるつもり。ビッパーはあくまでも数合わせ。平凡すぎて魅力を感じられない。ビッパーにはわるいけど近いうちに手持ちから外させてもらうわ。

「ヒョウタは岩ポケモンの使い手だ。水タイプのナポレオンと草タイプのスボミーは使えるな」

……やだ。私ひどいこと考えてた。私は賢すぎるぶん歳のわりに不相応な冷たい部分が少しある。でも今はジム戦に集中しなくちゃ！

「えっ……あ、うん！この2匹は最後まで育てるつもり！」
「そうか。好都合だな。とりあえずこの2匹を重点的に鍛えるか」

アキラの言うとおりだわ。多くの岩ポケモンは地面タイプも持っているからキララ★の電気攻撃は全然効かない。ノーマルタイプの

『体当たり』攻撃をしてもは岩タイプにはほとんど効かない。岩タイプの技を使っても効果はいまひとつ。ラミアは岩・地面タイプのポケモンだけど今のところ攻撃技は『体当たり』『しめつける』『岩落とし』しか使えない。地面タイプの攻撃技があれば有利だけど今のところ覚えそうにない。

「クルル♪、キララ★、ビッパー、ラミアは今日のジム戦はお預けね」

「ポッチャ」

ナポレオンも同意した。この４匹に今回の戦いは不利だということは明らかだった。だけどボールの中の４匹は不満そうだった。ボールを揺らして私に不満をもらしている。その中でも特にわんぱくなラミアの入ったボールの揺れが激しかった。きっとつかまえたばかりだから私に戦えるって照明したいのね。

「そんなに悲しい顔しないでよ。ジム戦には出さないけどレベル１０まで鍛えてあげるから」

この一言でボールの揺れは収まった。私はセニョールのボールだけ取り出すと開閉スイッチを押した。

「ミ～♪」

セニョールは元気いっぱいに飛び出すとつぼみのついた右手で敬礼した。

「ミー！」

元気いっぱい、やる気充分！よ～し……。

「ナポレオン！セニョール！あなたたちをレベル15まで鍛えるから覚悟してね！」
「ポッチャアッ！」
「ミーー！」

ナポレオンはガッツポーズを、セニョールは本日二度目になる敬礼をした。そんな私たちをアキラは感心しながら見ていた。

「ヒカリはバランスよく鍛えるタイプなのか」
「うん！やっぱり手持ちのポケモンのレベルはなるべくそろえなくっちゃ！」

私なんでもかんでもきっちりそろってないと落ち着かないのよね～。みんなをバランスよく鍛えてジム戦を余裕で勝てるようにしなくっちゃ！……あ、そうだ！

「アキラ！私、必勝法を思いついちゃった！」
「なにっ！？」

アキラはすばやくまばたきした。少しおどろいたみたい。

「でもそれにはど～してもアキラの助けが必要なの。手伝ってくれる？」

私は人差し指をあごにあててイタズラっぽく笑った。アキラが私に対してけっこう甘いことは昔の経験からなんとなくわかっていた。私の必勝法はちょっとずるいかもしれないけどポケモン協会のルールに一つも反していない。カンニングをするつもりはないし合法だ。
アキラは肩をゆっくり落とした。

「……わかったよ。そのかわり条件がある」
「いいわよ。なに？」
アキラは気難しいけど若干照れが入った声で言った。
「私がおまえに甘いこと、誰にも言うなよ」
「もちろん？」
これで私の勝利は確実！……ヒョウタさん。お姫さまだっこされておいてわるいけどこの勝負、勝たせてもらうわ？

第２４話　余裕（後書き）

ナポレオン成分注入ー♪お客さまの人気に応えるためいつもより２０％増量しました！（笑）

第２５話　油断（前書き）

いよいよジム戦です。

第25話　油断

空が赤く染まる。まるでアキラの瞳の色のように。カラスが沈む太陽に向かって飛んでいった。あのカラスもきっとポケモンなんだ。虫や小動物以外の動物は野生では生きていけない。だって、ポケモンが強すぎるもの。ほとんどの動物はポケモンから守るためにどこかに保護されている。いつからそうなったのかはわからない。ただはっきりしているのはこの世界が人間とポケモンのものになったということ。

「ポケモンジム……ね」

ポケモンバトルは合法。人間もポケモンも同意したうえ行われるルールのある試合だから。ポケモンも自ら戦うことを望んでいる。『戦いたい』。『強くなりたい』。それがほとんどのポケモンの持つ本能。私の手持ちのポケモンもそう。キララ★という例外があるけど……。

「ちゃっちゃっと終わらせてお祝いしよっか♪」

「ポッチャア！」

私が明るい声で言うとナポレオンは拳をぎゅっとして答えた。アキラに稽古をつけてもらったし私たちには必勝法――どっちかっていうと奥の手だけど――がある。負けるはずがない。私たちは自信満々でポケモンジムの中に入った。

クロガネジムの中は岩だらけだった。それもただの岩じゃなく四角くくりぬかれたような形。それらの岩はつり橋や階段でつながっている。まるでジュンが遊んでいたゲームのダンジョンみたい。望遠鏡を使ったらトレーナーが何人か岩の上で待ちかまえているのが見えた。

「……ただでは行かせないってわけね」

ヒョウタさんの姿は見えない。きっとジムリーダーは奥のほうに

いるのね。
「いくわよ！みんな！」
ナポレオンとともに私は階段を勢いよく上った。ザコトレーナーとのバトルで経験地を稼いでやる！
＊
初めてのポケモンジムは岩だらけだった。どこもかしこも灰色でうんざりするくらい。ジムリーダーも途中で出くわしたトレーナーも岩タイプの使い手だった。この場所で岩ポケモンと対戦する感覚……初めてのはずなのにどこかなつかしい。
「やあ。クロガネシティ、ポケモンジムへようこそ！よくここまで来れたね」
数々の岩山を越え、私がジムの奥についたときヒョウタさんは石を磨いていた。……ずいぶん余裕があるわね。まあ、私も何人かトレーナーとバトルしたのに息切れしていないからお互いさまかな。
「と、言ってもイワークをつかまえた君のことだ。必ずボクのところまでたどりつけると信じて待っていたよ」
ドキッ。
私は目をそらした。ほんのわずかだけど胸か熱くなった。線香花火みたいにちっぽけだったけど。う～～……かっこいい人って反則。ちょっと褒められるだけで照れちゃう。
「その石は？」
ヒョウタさんが磨いている石。少し青くてブツブツしているだけの、どこにでもありふれた石。なんのエネルギーも感じないけど逆に惹かれる。
「ああ。これ？『変わらずの石』っていうんだ。ポケモンがこれを持っている間そのポケモンは進化しなくなる不思議な石だよ。地下通路で発掘したんだ。めずらしいでしょ？」

「はい」
これが変わらずの石なんだ。教科書にも載っていた。ちょっとほしいなぁ……。
「よかったらあげるよ」
「本当ですか！？」
これからジム戦をする仲なのに私たちはバトルとは程遠い話をしていた。他の人から見たらきっと今の私たちはジムリーダーと挑戦者には見えないと思う。
「ポチャッ！」
「え？」
ナポレオンは私の足をつかんだ。なに？
「ただし……」
ヒョウタさんはズボンのポケットからボールを3個取り出した。
「ボクに勝てたら……ね」
「っ！？」
私も釣られて構えた。やっぱりそうカンタンにはいかないよね！
「イシツブテ！」
3個のボールのうち1個が開き、中からイシツブテが出てきた。イシツブテは低い声で鳴いた。
「イシッ！」
「改めて自己紹介するよ。ボクはクロガネジム、ジムリーダーのヒョウタ！岩タイプのポケモンとともに歩むことを決めたトレーナーさ」
相手に名乗られたらこっちも名乗るのが礼儀よね。
「私はフタバタウンのヒカリ。新人トレーナーです」
今の私はまだ名無しのトレーナーだ。このまえたまたまテレビに映ったけど、誇れるような肩書きはまだ一つもない。
「ヒカリくん。君のトレーナーとしての実力、そして一緒に戦うポケモンの強さ……見せてもらうよ！」
私はポケモンを選びボールを投げた。私の選んだポケモンは……。

「ビッパー！」
「ビーーップ！」
ボールから出たビッパーは元気よく鳴いた。私の一番手はまるねずみポケモンのビッパ。ヒョウタさんはビッパーを見ると口を開けた。
「岩タイプにノーマルタイプのポケモン……正気かい？」
たしかに岩タイプのイシツブテにノーマルタイプは不利。ビッパーを出した私は無知だと思われるかもしれないけど、ビッパーを出したのには理由がある。
「さあ？やってみなければわかりませんよ」
私はわざとらしく笑った。私がビッパーを出した理由……それは経験地！ポケモンはバトルに参加することで経験地をもらえる。冒頭でちょっとだけ参加したポケモンも戦闘のほとんどを受け持ったポケモンも同じ経験地がもらえる。私はただビッパーとクルル♪とキララ★とラミアにも経験地を与えたいだけ。もちろんビッパーたちが傷つくまえにセニョールかナポレオンと入れ替えるつもり。
「行くんだ！イシツブテ！」
「イッシー！」
ヒョウタさんの声でイシツブテがビッパーに向かってきた。早くビッパーを入れ替えなきゃ。
「戻って！ビッパー！」
イシツブテがビッパーにぶつかるまえにビッパーをボールに戻した。私の二番手は……。
「クルル♪！」
「クルッポー！」
ビッパー以上に陽気な声でクルル♪は鳴いた。岩タイプが弱点の鳥ポケモン。さっきより不利な組み合わせ。でもたぶん大丈夫。今まで戦ったトレーナーは慎重でほとんどの場合最初に使う技は補助系の技だった。きっとイシツブテのことだから防御力を上げる『丸くなる』か素早さを上げる『ロックカット』を……。

「『岩落とし』！」
え？
「イシーッ！」
それは一瞬の出来事だった。イシツブテは近くにあった石をつかみ即座にクルルに投げつけた。
「クルーッ！」
「クルル♪！」
よけてと言うヒマもなかった。重力に逆らって飛んでいたはずのクルル♪はあっけなく地べたに落ちた。飛行タイプのクルルに岩タイプの攻撃。レベルの差と弱点をつかれたのも合わさってクルル♪は一撃で戦闘不能になった。
「くっ……」
苦い思いを噛みしめながらクルル♪を戻した。まさかいきなり攻撃してくるなんて……これじゃあクルル♪が経験地もらえないじゃない！
「セニョール！」
「ミーッ！」
いつもよりキリッとした声を出してセニョールが出てきた。赤ちゃんのセニョールでも仲間を倒されたのはわかるみたい。その証拠にセニョールの顔はいつもより険しく見えた。草タイプのセニョールならこっちが有利。速攻で終わらせる……！
「やっと本気を出してくれたのかい？イシツブテ、『岩落とし』！」
苦手なタイプだから遠距離でしとめようってわけね。させない！
「『すいとる』！」
「ミ～～ッ！」
石をつかもうとするイシツブテにセニョールはつぼみを向けた。セニョールの体が緑色に光り始め、その光はイシツブテに向かって伸びた。
「しまった！」
「イシッ？」

緑色の光はイシツブテまでたどりつくとイシツブテも釣られるように光り始めた。
「イシーーーッ！」
「イシツブテ！」
イシツブテのＨＰはエネルギーとなり光を伝ってセニョールに吸収された。自分の気を相手まで伸ばし、相手のＨＰを奪う『すいとる』。遠距離でも栄養をたくわえるために草ポケモンが編み出した技。近距離のほうが相手に与えるダメージは大きいけど、草タイプが苦手な岩ポケモンならこの距離でも十分だった。イシツブテは目をグルグルにして気絶した。アキラとの特訓で攻撃範囲を広げておいてよかった。
「やったー！よくやったわ、スボミー！」
「ミー！」
スボミーとナポレオンを重点的に鍛えたかいがあったわ！イシツブテを一発でＫＯできたもの。
「あっちゃ～」
ヒョウタさんは頭をかたむけた。
「弱点をつかれたから仕方がないね。戻れ！イシツブテ」
イシツブテはボールに収納された。これでヒョウタさんのポケモンはあと2匹。
「いでよ、イワーク！」
「イワーーーッ！」
ヒョウタさんのイワークが出たとたんジムのコートがせまく感じた。これはまた大きいのが出てきたわね。
「ふふっ。君も昨日イワークをつかまえたばかりだね」
ヒョウタさんはにこやかに笑った。汗で頭がかゆい。相性では勝っている。でもイワークは大きい。この巨体を相手にこのまま小さなセニョールで挑むべきかしら？
「どうだい？せっかくだからここはイワーク同士で戦ってみないかい？」

私は息を飲んだ。

第２５話　油断（後書き）

勉強つまらないです；
小説家になったら一日中小説を書きたいです（笑）。
でも小説だけで生きていくのは難しいので教師も目指します。

第２６話　意地

「お断りします！」
私はラミアではなくキララ★の入っているボールを取り出した。
残念だけどヒョウタさんの挑発には乗らないわ！
「おいで！キララ★！」
「コ、コリ～ン！」
ボールから出たと同時にキララ★は相手にいつもの迫力のない威嚇をした。目をつぶって威嚇したけど、イワークの巨体を見たとたんビクついた。
「リ～ン？」
キララ★は不安そうに私を見た。だからそんな悲しい目で見ないで……。
「大丈夫よ、キララ★」
ただキララ★にも経験地を分けたいだけよ。すぐに戻してあげるからね。
「岩・地面タイプのイワークに電気タイプのポケモン……無謀じゃないか」
「どうでしょうね」
あくまでも私は平静を装った。大丈夫。私の手持ちはあと５匹。クルル♪がやられたけどまだ余裕で勝てるわ。
「そうかい。じゃあイワーク……」
「戻って！キララ★」
ヒョウタさんが指示するまえにキララ★を戻した。大切なキララ★にキズをつけるわけにいかないわ！
「ビッパー、もう一度ＧＯ！」
「ビーーップ！」
ビッパーは前歯を見せた。やる気は健在ね！
「イワーク！『体当たり』！」

早いっ！

「『丸くなる』！」

イワークとビッパーがぶつかった。ビッパーは回転しながら私のまえに着地した。幸い体を丸めて防御力を上げたビッパーはほとんどダメージを受けていない。相手のイワークは間合いを取った。

「ビ～……」

「イワー……」

トレーナーの指示を待ちながらにらみあう2匹。ヒョウタさんはふと肩を下げた。

「相性のわるいポケモンを何匹か出したと思ったら相性のいいポケモンを出す……さっきからどういうつもりだい？」

ヒョウタさんは私をまっすぐ見た。あら、真剣な顔もステキv問いかけるヒョウタさんに私はウインクした。

「内緒ですv」

「そうかい……『いやな音』！」

「『鳴き声』！」

イワークの岩を削る音とビッパーの『鳴き声』で耳が痛くなった。うっ……『鳴き声』で相手の攻撃力を下げたのはいいけど『いやな音』でこっちの防御力が2段階下げられた。相性も能力も不利だしそろそろ入れ替えなきゃ。私はボールをビッパーに向けた。

「ビッパー！戻っ……」

「『しめつける』！」

「なっ！？」

ボールから出た赤い光線はイワークによって遮(さえぎ)られた。ジム内でビッパーの叫びがこだました。まばたきを終えたあと、私の目に入ってきたのはイワークに捕らわれたビッパーの姿だった。

「ビッパー！」

ダメ……逃れられない！硬い石のボディにすっかりしめつけられている。こんな状態じゃ『体当たり』も使えない。せめて前歯を活かせる技を覚えていたら……！

「さっきみたいに交代しないようにしめつけさせてもらったよ」
ヒョウタさんはさわやかに笑った。ビッパーが捕らわれた今となってはその笑顔もチャーミングとは思えない。むしろ憎たらしい。よくもビッパーを……！
「君は強いよ。昨日の戦いで君のポケモンを見たからわかる」
私は歯を噛みしめた。いったいなにを言い出すの？
「でもどうも君はポケモンバトルをなめているね。ジム内のトレーナーたちとの戦いもそうだった。直接バトルを見たわけじゃないけど音が聞こえたからわかるよ」
私がポケモンバトルをなめている……？
「短パン小僧や作業員相手にずいぶん長引いていたね。君の実力ならもっと早くボクのもとへたどりつけたはずなのに」
「うっ……」
その通りだった。ナポレオンとセニョールだけを戦わせておけば短時間でヒョウタさんのところまで行けた。そうしなかったのは今回活躍できないポケモンたちもバトルに参加させたから。クルル♪、キララ★、ラミア、ビッパーに少しでも経験地を与えるため。……別に油断をしていたわけじゃない。ただ勝てる自信があっただけ。
「ポケモンバトルを……ジムリーダーをなめてもらったら困るな」
ヒョウタさんは右腕を上げた。なにかの合図……？それを見たイワークはいきなり頭をビッパーに降ろした。
「ビーッ！」
「ビッパー！」
イワークは何度も頭を上げては下げ、ビッパーに『頭突き』をした。まるで釘を打つカナヅチみたいに。
「やめて！ヒョウタさん！」
ヒョウタさんは何も言わずに攻撃するイワークを見守っていた。
やめて！そんな硬い体で『頭突き』をされたらビッパーがかわいそう！

「『鳴き声』！」
「ビーッ！ビーップ！」
相手から受けるダメージを少しでも減らすため『鳴き声』を指示した。必死すぎていつものかわいさがないけど攻撃力は下げられた。でもそれは時間稼ぎにしかならない。こうして『頭突き』を喰らっている間にも『しめつける』のダメージを受けている。
「いくら強いからって油断したら駄目だよ、ヒカリくん」
ヒョウタさんは余裕のある表情で言った。さっきまで私も余裕を持っていたのに。……本当に余裕を持っているのは、どっちだろう？
「これ以上ポケモンを傷つけたくないなら降参してもいいんだよ」
「くっ……」
私、なめられてる？それとも失望されたのかしら。今降参すればビッパーを助けられる。明日再戦するときナポレオンとセニョールだけ戦わせれば確実に勝てる。でもそれじゃあジュンに遅れを取っちゃう……。
カタタタタッ。
床に置いたボールが小刻みに揺れた。ナポレオンが入っているボールだ。私はそのボールを拾った。
「……」
ナポレオンは何も言わなかった。力強い目で私に訴えている。「あきらめるな」。
「降参しません！私は勝ちます！ビッパー！」
「ビーッ！」
イワークから猛攻撃を受けていながらもビッパーはスキをついてイワークの『しめつける』から逃れた。
「戻って！ビッパー」
「させないよ！『体当たり』！」
私はビッパーのボールをかかげた。図鑑はさっきから不快な音を出している。だけど皮一枚でつながりながらも必死で私のもとへ戻

ろうとするビッパーをイワークは容赦なくしっぽではらった。
「ビッパー！」
図鑑を見た。ダメ。もうＨＰが……！
「ビー……プッ……」
ビッパーは四つん這いに倒れた。またビッパーを瀕死にさせてしまった。もうこれ以上キズついたポケモンを診たくない……！私は目をつぶりながらビッパーをボールに戻した。
「最初から本気で挑んでいれば君のムックルもビッパもやられなかったよ」
「……」
……うん。ヒョウタさんの言う通りだわ。ヒョウタさんのポケモンを経験地として見ていたからクルル♪とビッパがやられたのよ。これはポケモンバトルを甘く見ていた私への罰。でも……罰はもう十分受けたわ！
「あなたを信じている！ナポレオン！」
「ポッチャー！」
気合を入れてボールを投げた。ナポレオンは「待ってました！」とでも言わんばかりに登場した。
「ようやく本気を出し……」
「ポチャーーーッ！」
ヒョウタさんが言葉を言い終えるまえにナポレオンは『泡』を吹き出した。私もまだ指示も出してないのに。大きいシャボン玉のような泡のかたまりはイワークに直撃した。
「イワーーッ！」
「イワーク！」
ヒョウタさんのイワークは石の山が崩れるように倒れた。重たい音がジム内で反響する。数少ない手持ちが2匹もやられたのにヒョウタさんは冷静にイワークを戻した。
「う～ん……岩・地面タイプに水攻撃は反則だな」
あと1匹しかポケモンを持っていないのにヒョウタさんはあい

かわらず余裕そうに振舞っていた。最後のポケモンによっぽど自信があるのね。3匹目のポケモンはもしかして……。

「出番だ！ズガイドス！」

「クエーーッ！」

ボールから現れたのは昨日見た恐竜みたいなポケモンだった。やっぱりズガイドスを出すつもりだったのね！

「次のポケモンも同じように倒せるかい？」

「なんとかっ！」

「ポッチャーー！」

さっきの戦いで勢いがついたのか、ナポレオンはズガイドスに突っ込みに行った。もうっ！慎重に行きたかったのに。これじゃあ補助系の技を指示しても言うことを聞かなさそう。

「『泡』！」

さっきと同じようにナポレオンは口から泡を飛ばした。イワークを一撃で倒した泡攻撃。それをズガイドスは紙一重で避けた。

「ずいぶん攻撃的なポッチャマだね！ズガイドス、『にらみつける』！」

ズガイドスは無言でナポレオンをにらみつけた。……よかった。先制攻撃を仕掛けたのに避けられたからダメージ受けると思ってヒヤヒヤしちゃった……ってナポレオンなににらみかえしてるの？！

「ナポレオン！もう1回『泡』！」

「ポチャーッ！」

ナポレオンの泡が炸裂した。ズガイドスはまた避けようとしたけど泡は左頬にヒットした。かすった！

「『頭突き』！」

ズガイドスは一直線に走った。まずい！あんな見るからに硬そうな頭で攻撃されたらただじゃすまないわ！

「よけて！」

「ポポポポポチャーッ！」

ズガン！

ズガイドスの頭が岩の壁にぶつかった。上から岩のカケラがいくつか落ちてきた。ナポレオンは手をバタつかせながらも横へ避けていた。じょ……。

「冗談じゃないわよ！あんな攻撃受けたらＨＰが半分は削り取られるわ！」

「だから切り札なんだよ。ズガイドス！」

「クエーーッ！！」

「ポチャ～～～！！」

ナポレオンはコート内で駆け回り始めた。それを楽しそうに追いかけるズガイドス。こうして２匹のポケモンの追いかけっこが始まった。

第２６話　意地（後書き）

余談ですがヒョウタさんをなめてかかって手持ちのポケモンを2匹瀕死にさせたのも実話です（苦笑）。

第27話　焼け石に水

コート内を駆けるナポレオン。それを追いかける鬼はズガイドス。鬼ごっこはまだ始まったばかり。2匹ともこのまま走り続けたら体力をムダにしちゃう。

「言っておくけどコートを出たら反則負けだからね」

「さっきズガイドスは壁に頭突きしたじゃないですか！」

コートの右側とヒョウタさんがいる正面は岩の壁で覆われている。左側は壁がないからコートから出たら下へ真っ逆さまに落ちちゃう。私のうしろは入り口だしコートから出るなんて考えられない。

「ああ。あれは足が着いていないからセーフ」

「ええっ！？」

そうゆうもんなの！？

「ポチャ～～！」

ナポレオンは走り続けている。あんなに手をバタバタさせて、今のナポレオンなら空を飛べるかもしれない。……って、なに考えてるのよ、私。とにかくこの状況を突破しなきゃ。ナポレオンはズガイドスの『頭突き』の威力にビビッちゃったしセニョールと入れ替えようかしら。あの子なら赤ちゃんだし恐怖心がなくて真面目だから普通に戦えるかもしれない。『すいとる』で遠距離攻撃できるように特訓したし……。

「とにかく逃がさないよ。ズガイドス、『ステルスロック』！」

「クェッ！」

ズガイドスはヒョウタさんに返事すると壁から落ちた岩のカケラをいくつか蹴り上げた。岩のカケラは次々と私のまえへ並べられていく。まさかこれって……。

「さっきみたいにポケモンをコロコロ変えられるといけないからね。対策を打たせてもらったよ」

目のまえに並べられた無数の岩のカケラ。大きさもそれなりにあ

るから別のポケモンを出したとたんダメージを受けちゃう……！
「……変えませんよ！『鳴き声』！」」
「ポチャア♪」
『鳴き声』ってかわいくする必要あるのかしら。と・に・か・く！さっき一瞬セニョールと入れ替えることを考えたけどやめたわ。セニョールはあんまり防御力高くないし。それに……。
「ナポレオンは私の切り札ですから！」
「ポチャー！ポチャ、ポチャーッ！」
ナポレオンも「ほら見ろ！そうだ、そうだ！」と言っている。この初めてのジム戦、私は最初に仲間になってくれたナポレオンで制してみせる！
「ボクにとってもズガイドスは切り札だよ。ボクたち気が合うね！」
「そうかもしれませんね！」
トレーナー同士で語り合っている間もナポレオンはズガイドスの攻撃をよけている。こうして防戦に回っていられるのも今のうちだけ。こうなったら……こうなったらアレを使う！
「ナポレオン！右によけて！」
ズガン！
ズガイドスの頭がコート内に置かれた岩に当たった。岩は割れて3分割に崩れた。
「今度は左に走って！」
「ポチャッ！」
ナポレオンは指示通りに動いた。ズガイドスはさっき頭を岩にぶつけたばかりなのに平気でナポレオンを追った。
「防戦一方じゃないか。逃がすな、ズガイドス！」
「そこにある岩に隠れて！」
ナポレオンはスライディングをして岩陰に身を寄せた。
「ムダだよ！『岩砕き』！」
「クェェェェッ！」
ズガイドスは叫びながら岩をパンチした。岩もろともコートの左

側に吹き飛ばされるナポレオン。……そんなっ！落ちる……！？コートから出る勢いで転がっていたけどギリギリのところで回転が止まった。

「ナポレオン！しっかり！」

「……ポチャ～」

ナポレオンは辛そうに起き上がった。

「私の近くに来て！」

「ポ……ポチャー！」

ナポレオンは私の元へダッシュした。

「おやおや。焼け石に水じゃないか？なにを考えているか知らないけど『頭突き』！」

「クエーッ！」

「ボチャッ！」

ズガイドスはナポレオンより大きな音を立てながら『頭突き』をした。背中に攻撃を喰らい岩のカケラのまえまで追い詰められるナポレオン。

「ズガイドス、岩を投げるんだ！」

「クェッ！」

岩が次々にナポレオンの周りに落ちてきた。やがて岩はステルスロックに使われた岩と繋がり、ナポレオンを囲む岩の壁となった。

「うっ……」

「さっきみたいにちょこまかと逃げられないように囲ませてもらったよ。チェックメイトだね」

唯一の隙間からズガイドスが勝ち誇った顔で入ってきた。

私は鳴っている図鑑に目をやった。『岩砕き』と『頭突き』のダメージが蓄積（ちくせき）してナポレオンのＨＰはレッドゾーンに入っていた。対する相手のズガイドスのＨＰはほぼ満タン。あんなに硬い岩に何回も頭をぶつけたのに……。

「そろそろ終わらせてもらうよ」

「クェーッ……」

ズガイドスが身を低くした。また『頭突き』をするつもりね。私は下を向いた。
「追い詰められたのは……」
「ん？」
私は顔を上げた。余裕の表情で。
「……あなたのほうです！ナポレオン！」
「ポッチャ～！」
「『波乗り』！」
「なにっ！」

＊＊＊

「ねえ、アキラ。秘伝マシン持ってる？」
時は４時間前まえまでさかのぼる。私はアキラに稽古をつけてもらっている最中だった。
「そりゃあ、もちろん持ってるけど……」
旅に欠かせない秘伝マシン。技マシンと違って何度でも使える便利なマシンだわ。秘伝技は他の技と違って通れない道を切り開くために編み出された特別な技。バトルにも使えるけどその真価は自然の障害を乗り越えることにある。教科書に載っていたのは……。
「たしか『フラッシュ』、『居合い切り』、『岩砕き』、『怪力』、『波乗り』、『滝登り』、『渦潮』だっけ？」
「地方によって若干違うけどな。この地方では『フラッシュ』はあまり使わないのか技マシンとして出ている。シンオウの水辺には渦は発生しないから『渦潮』の秘伝マシンは必要とされてない。この地方では『ロッククライム』と『霧払い』いう秘伝マシンがあるぞ」
色々説明してくれたけど私が知りたいのはそっちじゃない。
「『波乗り』の秘伝マシンも持ってる？」
「当たり前じゃないか……ってヒカリまさか！」
アキラはうろたえた。ふっふっふっふっふ……そのまさかよ！

「使わせて♪」
「だ、駄目だ！それに移動用に使うにはバッジが必要だぞ！」
アキラは私に背を向けた。あ～～～。ケチーーー！
「水上を移動したくて『波乗り』を覚えさせたいわけじゃないわ」
「今のポッチャマじゃ『波乗り』のような大技は1日に1回しか使えないぞ！」
「いいじゃない。奥の手として使えるわ！」
う～ん。もっとすんなり受け入れてくれると思ったけど以外と抵抗するなぁ……。
「う～～～……わかったよ！特別に覚えさせてやる！」
「やったー☆」
私はバンザイをした。ナポレオンも理解してないけど私の真似をして両手を上げた。
「いいか。誰にも言うなよ。特にアキコ！」
「は～い？」

＊＊＊

「ポ～～～～～」
ナポレオンは胸を張って思いっきり息を吸った。
「チャーーーーーーーーーッ！！
かけ声とともに大量の水が吐き出した。岩のアーチはみるみる水で満たされていく。やがて水は岩の上からもこぼれ、いくつかの岩が倒れ始めた。
「まずい！そこから出るんだ！ズガイドス！」
「もう手遅れです！ナポレオン！」
ナポレオンは倒れた岩の1つに乗って華麗に波に乗った。岩板をサーフボート代わりにしたナポレオンはそのままズガイドスに突っ込んだ。
「ポチャァァアアア！」

「チェックメイトです！」
ザバーン。
ナポレオンの『波乗り』によってズガイドスのＨＰのゲージが面白いくらい減っていった。大量の水を浴び、さらに岩にぶつかったショックで立っていられるはずないわ！
＞ｉ９２５８―６９９＜
「クエ～～～～！」
足をフラつかせながらズガイドスは倒れた。それを見たヒョウタさんは目を丸くしながらコートに入った。
「まっ、まさか！鍛えたポケモンたちが！」
ヒョウタさんはズガイドスの容態を確認した。苦手な水を思いっきり浴びたズガイドスは完全にのびていた。
「まいったなあ……。ジムバッジを１つも持っていないトレーナーに負けちゃったか」
ズガイドスはヒョウタさんのボールの中に戻された。試合終了！
「うん。それも仕方ない。君が強くてボクが弱かった……それだけだ」
「ポ……チャア～」
ナポレオンがゼイゼイ言いながら私の元へ来た。そっか。小さい体に大量の水を必要とする『波乗り』はきつかったよね。私はフタバタウン名物の『おいしい水』をナポレオンにてわたした。
「ありがとう、ナポレオン。おつかれさま」
ナポレオンは息が上がってうまくしゃべれない。ナポレオンはあわい笑顔を見せるとおいしい水を一気飲みした。
「さ、ポケモンリーグ公認のコールバッジ。君に渡すよ！」
私はヒョウタさんから宝箱を横から見たような形のバッジをもらった。茶色いバッジで銀色で縁取られている。
「これで秘伝の『岩砕き』を使えるようになるよ。あとこれも持ってきなよ！」
「え？」

ヒョウタさんからわたされたのは技マシンだった。なんの技マシンかしら？

「その技マシン７６の中身は『ステルスロック』！！交代して出てきたポケモンにダメージを与える技だよ！」

ふ～ん。バトルのときも使ってたけど、ポケモン交代しなかったから威力は実際に使ってみないとわからないわね。

「あと約束のこれ」

手を握られるように青い石をわたされた。両手で手を握られてついトキめいちゃった。バトルに熱中していて忘れてたけど、もらったのはジム戦まえにヒョウタさんが磨いていた『変わらずの石』だった。

「きっと役に立つよ。ヒカリくん、クロガネジム制覇おめでとう！」

「お、お……お世話になりました！」

私はペコリとお辞儀をした。今日はヒョウタさんにポケモンバトルについて色々教えられちゃった。私はトレーナーとしても人間としてもまだまだだね。疲れたナポレオンをボールに戻し、バッグを持とうとしたらふと気づいた。

「あーっ！」

「どうしたんだい！？」

私の手も足も砂埃がついていた。昨日ほどじゃないけど今の私はけっこう汚れてる。こうなると予想して汚れの目立たない灰色の服を着てきたけどあとで洗わなきゃ。はぁ……。またヒョウタさんのまえで汚れた姿をさらしちゃった……。

「い、いえ……ただまた汚れちゃったな～って思って……」

男の人はあんまり気にしないけど私は気にする。特にかっこいい人のまえでは。

「ヒカリくん」

「？」

ヒョウタさんに顔を向けたらハンカチで顔を拭かれた。

ドキッ。

「顔に埃がついてるよ」
さりげない優しさ。女の子はこういうのに弱い。ヒョウタさんって無意識に女の子をたらしこんでいるのかしら……？
「あ、ありがとうございます！」
はずかしくてつい離れてしまった。失礼だったかしら？
「化石って発掘したばかりの状態だと汚れているんだ。でも汚れを取り除くととっても神秘的で綺麗なんだよ」
恐竜図鑑で化石の写真を見たことがある。恐竜の骨は茶色っぽくて迫力があってどっちかっていうと怖い気がした。神秘的といえば神秘的だけど……ヒョウタさんは何を言おうとしているのかしら？
「君は化石のように綺麗だよ」
「ヒョウタさん……」
……ごめんなさい。ヒョウタさん。今のセリフ、全然ときめかないです。

第２７話　焼け石に水（後書き）

私にとってヒョウタさんは→こんなイメージがあります（笑）。

（特別編）第２７．５話　黒髪の紳士（前書き）

コウキ「Ｌａｄｉｅｓ　ａｎｄ　Ｇｅｎｔｌｅｍａｎ！世界中の女性のみなさん！はじめまして！ボクの名前は天上院コウキと申します。ナナカマド博士の手伝いをしているヒカリさんの王子さまです。今回だけ一時的にボクが主人公になりました。たった１話限りですがみなさんよろしくおねがいします」

（特別編）第27．5話　黒髪の紳士

―その姿を目にした途端ボクの中の時は止まった。長い黒髪。白いワンピース。彼女は正に『天使』だった。

ボクの名前は天上院コウキ。ナナカマド博士の研究の手伝いをしている研究者の息子。研究者の家系に生まれたボクの夢は父のような立派な研究者になること。そんなボクは最近恋をした。相手は腰まで届く長髪が似合う聡明な美少女、ヒカリさん。サラサラとした黒髪に浮かぶキューティクルはまるで天使の輪のよう。大きな黒い瞳は見つめていると吸い込まれてしまいそう。彼女はどの時代にも通じる古典的なニホン人の美しく整った顔をしている。流行り廃り激しい芸能人で言われるような美人とは大違いだ。

「はぁ……ヒカリさんに会いたい」

彼女と初めて会ったのは3日前。一昨日も会ったけど昨日は会えなかった。たった1日会えないだけで苦しいのにヒカリさんと会えない日が2日目に入ろうとしている。ああ、苦しい。これが恋わずらいか。本では読んだことがあるけど思っていたより心に沁みる。ああ……今ならトリスタンとイゾルデの気持ちがわかる。敵国に嫁ぐイゾルデが幸せになるためイズーの母が持たせた惚れ薬を手違いにより飲んでしまったトリスタンとイゾルデ。王に仕えし国の英雄トリスタンに王の嫁になるたびにやってきたイズー。薬のせいで恋に落ち、愛し合っていながらもお互いの立場のせいで恋愛成就を諦めそれぞれ他の人と結婚したあともなお互いを思い続け苦しんだ2人。戦の怪我で死に瀕したトリスタンは最後にイゾルデと会うことを願うがイズーに嫉妬した彼の妻はイゾルデは間に合わなかったと嘘をつき彼は……（以下省略）。ああ、もしボクがトリスタンだったら王と民を裏切ってでもイゾルデを幸せにするのに！ヒカリさんは例えなにがあろうがボクが幸せにしてみせる！例えポケモンバト

ルが苦手でも、友人を裏切ることになろうとも、世界を敵に回すとしても……！

「一言目がそれかよ」

ボクは後ろを歩く金髪の少年を睨んだ。博士の頼みでクロガネシティに向かっていたら偶然ヒカリさんの幼馴染、ジュンという疫病神と会ってしまった。クロガネシティに忘れ物をしたという彼と仕方なく一緒に歩いているけど彼にはあまり良い印象はない。後先考えずに行動するし慎重さに欠けている。結果ばかり求めてもそこまでに至る過程がしっかりしていないと研究は上手くいかない。焦りの先に待っているものは失敗しかない。自分一人失敗して責任を負うのはいいけど周りに及ぼす被害も考えてほしい。

ジュンを受け付けない理由はそれだけじゃない。彼はボクの思いを寄せるヒカリさんとなんと12年間も同じ町に暮らしていたんだ！羨ましすぎる！ボクなんて彼女と出会ってまだ4日目なのに……。

「君になにがわかるの？！ボクは君と違って使命があるんだ！旅に出られるといっても博士の研究の手伝いが優先なんだから。君のようにジムを回っていればヒカリさんと会える可能性は高くなるけどボクはジムに挑戦する暇なんてないから滅多にヒカリさんと会えないのに……！」

「ヒカリならまだクロガネシティにいると思うぜ」

……Ｑｕｏｉ？今なんて言った？

「ヒカリは体力ねーからたぶんまだクロガネシティで休んでると思うぜ？あいつ慎重だからな。さっさと行動すればいいのにいちいち考え込んで……」

「ヒカリさ～～～～～～～～～～ん！！」

ボクは歓喜の声を上げ走り出した。ああ……ヒカリさん！あなたはボクと同じ几帳面な方だったんですね……！きちんと考えてから行動することで無駄を生まない理論派。やはりヒカリさんはこっち側の人間だったんですね！研究者の家系として生まれたボクの妻にぴったり！きっとボクと結婚したら研究をサポートしつつ温かい家

庭を築く理想の世界を描いてくれるでしょう！
「おーい！コウキのやろーー！待ちやがれーーー！！」
ジュンも走り出した。でもボクは振り返らない。ジュンの様子を見る暇があったら一刻も早くクロガネシティにいるヒカリさんの姿をこの眼に写したい。……はっ！
「さてはヒカリさんと会うのを邪魔するつもりですね！このサタン！」
「誰がサンタだーー！！オレはまだ若いぞ！オレとサンタさんに謝れーー！」
……って聞き間違えてるし。
「君のほうこそサンタに謝りなさい！サタンとサンタを聞き間違えるなんてキリスト教を冒涜していますよ！」
「サンタとサタデーアンダギーがなんだってーーー？！」
ジュンの声が鼓膜を揺らした。もうボクの真横にいる。こんなに早く追いつかるなんて……！せっかちなだけあって足は速い。ボクは走るスピードを上げた。ほんの少しだけどジュンとの距離が開く。
「もう黙っててください！」
「おまえなんでいきなり敬語になったんだよーーー？」
「ヒカリさんを思っているからです！」
「オレのことも思えよーーー！」
「誰があなたのことを！気色悪いじゃないですか！」
「おまえのほうが気持ちわりーぞ！」
「なんですって！」
言い争っていたらクロガネゲートを抜けた。クロガネシティの地図は既に頭に叩き込んである。おそらくヒカリさんがいるのは民宿くろがね。クロガネシティにある宿泊施設といえばそこしかない。たまにテレビのＣＭに出るけどボクの好みじゃない。失礼かもしれないけど宿のレベルはせいぜい良くてＢ級だ。ヒカリさんにもボクにもふさわしくないけど今夜は泊まるしかない。ああ、いつかヒカリさんをシンオウ一と名高いホテルグランドレイクに連れて行きた

い……そんなことを考えながらボクとジュンは民宿クロガネに突入した。

「きゃー！」

「うわっ！」

何人かの客や仲居とぶつかりそうになりながら廊下を走るボクとジュン。気を抜いたら追い抜かれる。悪いけどぶつかりそうになった人達にはあとで謝ろう。現在の時刻は6時。おそらくヒカリさんはまだ食事中だ。ボクが民宿内で向かう場所は一つ、全ての客が集まる広間だ！ボクの愛の力ならたとえ広間に１００人いてもヒカリさんを見つけられるはず。しばらく走っているとやけに賑やかな廊下を見つけた。ここだ！ここにヒカリさんがいる！ボクの心にあるヒカリさんセンサーが反応している！ボクは襖（ふすま）を開けた。

バンッ！

めこっ！

「ヒカリさん！」

「ヒカリーー！！」

ボクたちが入ったと同時に左側の襖が吹っ飛んだ。いや、違う。吹っ飛ばされたんだ。ボクは右側の襖を普通に開けたけど左側の襖はジュンが蹴り破ったんだ！……いや、そんなことはどうでもいい。ボクは目を凝らして広間を見た。彼女の居場所はすぐわかった。なぜなら彼女は天からの光で照らされていたから。広間の調度真ん中に大勢の人に囲まれながら彼女は座っていた。他の客と同じように浴衣を着ている。

……ああ、ヒカリさん。かわいそうに。地上に一時的に水浴び（温泉に入り）に来ただけなのにその美しさ故に周囲の人に引き止められてしまったんですね。天に帰りたいのに羽衣を奪われて普通の浴衣を着せられてしまった天女。安心してください。ヒカリさん。そんな有り触れた浴衣ではなくもっと綺麗な浴衣と空を飛べる羽衣をそのうちボクが用意してあげますからね……！

「ヒカリさ～～～～～～～～ん！！会いたかったです～～～～～～ＶＶ」

「おい！ちょっと待っ……」

ヒカリさんは何も言わずに瞬きをした。ヒカリさん……きっとボクに会えて感動するあまり声が出ないんですね……！ボクが居ても立ってもいられず走り出した。広間にいた人々はまるでモーゼが海を割ったように道を開けてくれた。そう、これはきっと天がヒカリさんと会うことを許している何よりの証拠だ！ヒカリさんにぶつからないようにボクはスピードを落としてスライディングをした。

「ヒ・カ・リ・さ～～～～～～～～～～ん！！」

ポカン！

ヒカリさんを目前にしてボクの後頭部に痛みが走った。あまりの痛みにボクは頭を抑えて蹲った。うう……誰かがボクを殴ったんだ。でもこの拳はジュンじゃない。ジュンはまだ襖の所で喚いている。この痛み……この威力……ボクはこの拳の持ち主を知っている……！

「いたた……アキラ兄さん！？」

「誰が兄さんだ！私は女だ！」

成績優秀でスポーツ万能で未来を約束されているお金持ちのボクにも苦手なものはある。それは馬鹿と悪（今の所該当する人物は知らない）と狼藉者―暴れる人―即ち従姉妹のアキラ兄さん！

「コウキくん！大丈夫っ？！」

ヒカリさんはボクの頭に冷たいものを当てた。ああ、なんて優しいんだろう……！すぐボクを殴るアキラ兄……姉さんとは大違いだ。アキラ姉さんの拳の痛みでさえ引いてきた。やっぱりヒカリさんは女神だ……！

「ヒカリ、そんな奴放っておけ。菌がうつるぞ」

ああ、ひどい。アキラ姉さんはどうしてこんなにボクに冷たいんだろう。同じヒコザルを選んだ者同士なのに……。それになによりボクたちは血が繋がっている。どうしてボクには優しくしてくれな

いんだろう。……ああ、でも幸いヒカリさんには優しいみたいだ。ヒカリさんが傷つかなくてよかっ……た……げふっ。

「コウキくん？コウキくん！しっかり！」

ああ、駄目だ。意識が遠のいていく……。最後にヒカリさんの姿を見れてよかった……！

「なんだ～？ヒカリちゃん。ヒョウタさんと付き合い始めたと思ったら浮気かい？」

「そ、そんなんじゃありません！だいたい私……」

「二股かい？ヒョウタさんかわいそ～」

「いや、あそこの金髪を含めると三股だぞ！最近の若い子はやるねー」

「駄目ですよお客さ～ん。いくら炭鉱を救ったからってそんなことしちゃ～」

む。名にやら聞き捨てならぬことを人々が口にしている。ボクは全身に力を入れた。ヒカリさんを屈辱するのはこのボクが許さな……。

パンパン！

「はいはい。若い子をからかうのはそこまで！」

手を叩いた音のあとに静かだけどはきはきとした声が聞こえた。目を開けるとそこには仲居さんより立派な着物を着た女の人がいた。肩まで伸びた赤茶色の髪は跳ねていて大人なのに茶目っ気があった。ここの女将さんだろうか？

「新しいお客様2名入りまーす！お部屋は別々でよろしいですね？夕食をご用意しましょうか？」

控えめなのに明るくて元気の出る声だ。女将さんらしい人の声の影響で元気が出てきた。

「はい。お願いします。……おねえさん綺麗ですね。ここの女将さんでしょうか？」

「はい！この宿を経営しているシズルと言います」

「一泊泊まらせていただきます」

「はい！かしこまりましたー！」
ボクの母さんと同い年くらいだろうか？母さんも女将さんも歳を３０過ぎているのに若々しい。ヒカリさんもいつかこんな風になるのかな。こんなに綺麗な女将さんがいるならこういう場所に泊まるのも悪くない。もちろん世界で一番綺麗で可愛くて美しいのはヒカリさんですけど。こうしてボクは民宿くろがねに一泊だけ泊まることになった。

＞ｉ４２１１―６９９＜

＊

シズルさんの計らいによりボクとジュンはそれぞれ別の部屋に案内され、特別に食事まで部屋に運んでもらった。きっとさっきの騒ぎで目立ちすぎたからだ。お膳立ての上に乗せられた食事は予想通り和食だった。ボクはどちらかというと洋食派だけどたまにはいいか。
「いいか、コウキ。食べながらでもいい。私の説教を聞け」
「はい」
ボクは小さな声でいただきます、と呟くと箸に手をつけた。アキラ姉さんに言われて足は正座にしている。元々ボクは胡坐（あぐら）をかかないけど。だってあの座り方は美しくないじゃないか。
「なんでジュンを連れて広間に入ってきたんだ？あんな大きな声でヒカリを呼んでどれだけヒカリが恥をかいたのか分からないのか？」
「ジュンは勝手についてきたんです。障子が壊れたのはボクのせいではありません」
いくらアキラ兄さんが男らしくてかっこよくても一応女性だ。それに年上でもある。ボクは彼女の問いに敬語で答えた。
「大声でヒカリを呼んだ理由は？」
「それはただの愛情表現……ぐはっ！」

「お前はバカか！」
頭を叩かれた。なんでアキラ姉さんはすぐボクを殴るんだろう？
「周囲の目を見ろ！周囲を！ヒカリは既に周りから注目されているんだ。これ以上目立ったらヒカリが居心地悪くなるだろ！」
女将のシズルさんから聞いた話だとどうやら昨日ヒカリさんは炭鉱で暴れていたイワークを鎮め、仲間にしたというのだ。おかげで炭鉱は救われ、ヒカリさんはヒーローに。更に今日の夕方ヒカリさんはシズルさんの息子でもあるジムリーダーのヒョウタさんに勝ち、見事バッジを手に入れたというのだからすごい。
「ああ……ヒカリさん……！暴れる岩蛇ポケモンのイワークはまるで上半身が人間で下半身が蛇の元リビアの女王ラミア。ゼウスに見初められ彼の妻ヘラの嫉妬で怪物にされてしまった彼女はヘラに全てを奪われ、眠れぬラミアは夜な夜な彷徨う」
「おい！」
「憎しみに捕らえられたラミアは人―とりわけ子ども―を襲うようになりもはや救いはないと思われていた。ところがそこに現れた一筋の光……」
「おいコウキ！」
「何の力も持たない普通の少女、ヒカリさんは暴れ狂うラミア（イワーク）を止め、許し、仲間として迎えただなんてなんて慈悲深いんで……おぐふっ！」
アキラ姉さんはボクの背中を蹴った。ヒカリさんのことを考えていたボクはどうやら無意識で立ち上がっていたらしくお膳立ての横にボクは倒れた。ああ、なんていうことだ。ヒカリさんのことを考えた途端アキラ姉さんの説教が聞こえなくなり、いつの間にか心の声を口にしていただなんて……。
「だからどうしてお前はこうナヨナヨしてるんだ！いや、ヘラヘラか？とにかく気持ち悪い！ロマンチストだかナルシストだか知らないが前よりひどくなってないか？」
「機嫌を損ねてしまったのはごめんなさい。でもボクにどうしろと

？ボクはヒカリさんに恋をしてしまったんです！ヒカリさんのことを好きになってからボクは変なんです！気がつけばいつもヒカリさんのことを考えている自分がいます。アキラ姉さんにこの気持ちはわからないんですか？アキラ姉さんは誰かに恋をしたことがないんですか？！」

「うっ……そ、それは……」

アキラ姉さんは目を逸らした。まさかとは思うけど思い当たる人がいるのかな……。

「悪い。言い過ぎた。どうもお前のような奴は生理的に受け付けなくて……」

「……」

アキラ姉さんのお父さんとボクの母さんは兄妹だ。ボクとアキラ姉さんの外見もよく見れば共通点がある。……アキラ姉さんのほうがボクよりかっこいいけど。だけどいくら血が繋がっているとはいえボクらの性格は違いすぎる。環境のせいだろうか？なんでアキラ姉さんは気が荒いんだろう。父親を失ったことが原因なのかな？

「とにかくこれからは行動を慎めよ。冷めたかもしれないけど夕食をよく味わえ。私はこれからヒカリと一緒に風呂に入る」

ピクッ。……お風呂？ボクは『風呂』という神秘の言葉に反応した。

「……念のために言っておくが覗くなよ」

「覗きませんよ。紳士としてあるまじき行為です」

アキラ姉さんはボクの顔を凝視した。アキラ姉さんの目は半信半疑だった。

「……本当だよな？」

「絶対覗きません」

「そうか」

アキラ姉さんは部屋を出た。ボクは唇を広げた。ボクが女湯を覗く？覗きませんよ。少なくともアキラ姉さんの裸はね……！

＊

女性の裸にも下着姿にも興味ない。ボクはあくまでも「紳士」ですから。でもそんなボクにも唯一例外があります。それは現在日本１億７千７百７十７人いると言われる……いえ、地球に約６８億人いる人間の中から愛することを選んだボクの思い人――ヒカリさん！たとえ３４億人もの女性の裸は見逃してもヒカリさんの裸だけは見逃せない。

ボクは急いで食事を済ませるとヒコザルのアポロンと共に風呂場に向かった。カメラや望遠鏡など必要ない。ヒカリさんの裸は肉眼で見る……！誰にも邪魔をさせないと思った矢先に障害物が現れた。男湯の脱衣室には先客がいた。

「よー！コウキ。おまえもフロか？」

そこにはボクのライバル、ジュンがいた。濡れた金髪をタオルでゴシゴシ拭いている。足元にはナエトルがブルブルと震えて水気を飛ばしていた。もっと丁寧に乾かせばいいのに。

「まあね。女湯からヒカリさんの声聞こえた？」

素早く食事を済ませたとはいえヒカリさんがまだお風呂に入っているかどうか心配だった。ジュンに回りくどい話をするよりも単刀直入に訊いた。

「いや、誰の声も聞こえなかったぞ」

やった！まだ入ってない。待ち伏せできる。

「そう」

ボクはそっけなく返事をしてジュンに背を向けた。ジュンはもうすぐここから出る。これでボクの覗きを邪魔するものはいなくなった。だけど棚にある籠を取ったとき妙案が浮かんだ。確かにジュンは敵となったら厄介だけど仲間になればこれ以上心強い味方はいないかもしれない。身体能力はボクよりも高いみたいだし一応誘っておこう。

「ジュン。ヒカリさんの裸を見たいと思わない？」

「ああ？」
思わずボクの口はニヤついた。ヒカリさんの裸を想像するだけで鼻血が出そう。
「興味ねーや」
は？な、な、なななんだって！？
「あのヒカリさんの裸ですよ！天女の水浴びですよ！この世のものとは思えない美しい光景をあなたは見たくないと言うのですか？！」
「ふつうにこの世のものだと思うぞ。昔はしょっちゅうヒカリとフロ入ってたし」
……はあ？ボクはヒカリさんの裸を一度も見たことがないのにこの馬鹿は既に何十回、いや何百回と見ているだと……！？
「なんと不埒な！？ボクでさえ一度も見たことないのにあなたは何百回も見てその度にヒカリさんの裸に欲情したいたんですか！？」
「よくじょうってなんだ？」
ヒカリさんの裸に興味ないだと……こいつには邪心というものがないのか！？
「今のヒカリは着替えを見られるのも嫌がるしヒカリが嫌がるようなことはオレしたくねーや」
むむむ……それはつまりジュンを味方に引き入れることは無理ということですね。
「ジュン」
「ん？」
「ふんっ！」
ドスッ。
ボクはジュンの腹部を思いっきり殴った。
「キキッ！？」
「ル～？」
アポロンは目を丸くし、ナエトルは首をかしげた。
「ジュンくんったら眠ってしまったみたいですね。ナエトルさん、ジュンと一緒にサウナに入ったらどうですか？ウトウトするくらい

気持ちいいですよ」
　ボクは普段は女性の前でしか見せない紳士モードになった。持ち主に似て単純なナエトルならコロッと騙されるはず。
「ル～♪」
　予想通りナエトルは騙された。ボクはジュンを抱えながらサウナに入れた。ジュンは体が丈夫だからしばらくサウナに放置しても大丈夫だろう。
「ここで大人しくしていてくださいね」
「ル～！」
　これで邪魔者は消えた。あとはヒカリさんの裸を覗くのみ……！

　障害物を取り除いたボクは腰にタオルを巻き、軽い足取りで風呂場に入った。これで気兼ねなくヒカリさんの裸を覗ける。もしアキラ姉さんにバレたら紳士としてあるまじき行為だと罵られるかもしれませんが仕方ありません。成人したあとヒカリさんと結婚すればいつでもヒカリさんの裸は見られます。でもそれでは意味がありません。ボクが今見たいのは成人する前のヒカリさんの裸です。これぱかりは今見ないと永遠にチャンスを見逃します。
　ボクは岩だらけの風呂場に目などくれず念入りに体を洗い始めました。なにせ神聖なヒカリさんの裸を覗くのです。汚い体で覗いたら彼女に失礼です。
「アポローン、背中よろしくお願いしまーす」
　アポロンはのろのろボクの元へ来ると背中を流してくれた。もしかしてボクがこれからしようということに反対なのだろうか？それでもボクを止める様子はないしボクもやめるつもりはない。例えパートナーのポケモンに見下されようともボクはヒカリさんの裸を見る……！体を洗い終わるとボクは湯船に浸かった。ヒカリさんの声はまだ聞こえない。ボクはヒカリさんの思いを馳せた。
　まだ膨らみきってない胸……伸び盛りの手足……熟す前の果物はまずいと言いますが生きものは違う。もしボクが吸血鬼だったら思

わずヒカリさんの細い首筋に牙を立てていたでしょう。そうすれば極上の味わいのあと彼女はボクと同じ吸血鬼になり永遠に愛し合うことができる。ああ、なんて素敵なラビリンスでしょう……！彼女と一緒なら迷宮に入っても怖くない。想像するだけでよだれが出てきそうです。

ガラララララッ。

隣りの女湯から引き戸を開ける音が聞こえた。ボクは思考を止めて耳を澄ました。

「全く……ヒカリは準備をかけすぎだぞ」

アキラ姉さんの声だ。

「ごめ～ん。ＴＳ●ＢＡＫＩのシャンプーが見つからなくて……」

来たーーーーーーーーーーーー！ヒカリさんです！小鳥のように綺麗で透き通ったヒカリさんの声が聞こえてきました！

「ナポレオン、ビッパー、クルル♪、キララ★、セニョール。ちゃんと体洗うのよー」

「ポチャー！」

「ビーップ！」

「クルーッ！」

「コリ～ン」

「ミー♪」

む、ヒカリさんのポケモンも入るのですか。いつの間にこんなに捕まえたんですね。

「いいな～。ヒカリのポケモンは小柄で」

「アキラのポケモンは最終進化形態だから風呂場に入れるには大きすぎるもんね」

「おまえのイワークも残念だな」

「いや、ラミアは水が苦手だから……」

なんと！イワークにラミアというニックネームを付けたのですね！まさかボクと同じ考え方をしていたとは……やはりボクたちは気が合うんですね！

ボクはそっと湯船から出た。女湯と男湯を遮る柵にこっそり近づくとアポロンを呼んだ。

「アポロン、この柵に覗き穴を作って下さい。『火の粉』です！」

「ウキ～……」

アポロンは明らかに気が乗らないみたいでしたが指先から炎を出した。ボクの指示通りに木製の柵に片目で覗けるくらいの穴を開けた。

「ありがとうございます。あとはゆっくりしていいですよ」

「キ～」

アポロンはササッと離れた。乗り気ではないとはいえボクに協力してくれたアポロンに感謝した。そしてボクはドキドキしながら穴を覗く。湯気で見えにくかったけどこの湯気はヒカリさんの姿を遮ると同時にボクをヒカリさんの視界から隠す効果もある。そんな諸刃の湯気にもどかしさを感じながらボクは目を凝らした。

「カブトはコウキくんに渡しちゃったの？」

「一時的にな。ナナカマド博士の研究のためだ。そのかわりコウキのピッピを人質に取っている」

「人質って……」

見えたーーーーーーーーーー！見えました！ヒカリさんです！ヒカリさんの背中が見えました！体が泡に包まれて裸が見えませんがヒカリさんです！台に座りながら体を洗っています。ああ、体を泡で覆った彼女はまるでアフロディーテ誕生の瞬間……生まれたままの姿を泡で隠しているとはいえ泡は返って彼女の美しさを際立たせていた。

「ヒョウタさんってシズルさんにそっくりだねー」

「母親似だな」

アキラ姉さんとヒカリさんの会話が聞こえる。ああ、ヒカリさん……彼女は美しい……！でも泡の下に潜む彼女の肌も見たい。そう思った矢先にヒカリさんは桶（おけ）を取った。やった！お湯で泡を流すんですね！ついにヒカリさんの裸をこの目に刻める……！

「コリ～ン？」
「え？」
ヒカリさんの裸を見ようとした瞬間黄色いつぶらな瞳と目が合った。初めてヒカリさんと出会ったときに襲ってきたルクシオの進化前のポケモン、コリンクだ。普通のコリンクより気弱そうな瞳は不安そうにボクを見つめていた。
バチッ。
え？
バチバチッ。
げっ……。青いコリンクの体から電気が生じていた。明らかにボクを警戒している。ま、ま、まままさか『電気ショック』を使うつもりですか？
「あ……いえ、初めまして。ボクの名前はコウキと言います。ヒカリさんのポケモンですか？不安にならないでください。何を隠そう、ボクは未来のヒカリさんの夫になる男です。それにしてもヒカリさんもいい趣味をしていますね。あなたのようなかわいらしいポケモンを仲間にするとは。見たところあなたはメスのコリンクみたいですがお名前は……」
バチッ。バチバチッ。
小さな声で早口で挨拶したけどコリンクの警戒心は解けなかった。コリンクの体からです電気の量は増すばかり。や、やばい……この場を離れないと……。あ！でももっ！まだヒカリさんの裸を見ていな……。
「コ、コ、……コリ～～～ン！！」
「グギャァァアアアアアア！！」
ボフンッ！
コリンクの電撃はボクと柵に直撃し、軽い爆発が起きた。
「なに？」
「なんだ！？」
「ポチャア！？」

声が聞こえる。でもボクはコリンクの電撃に感電して動けない。
「なんだってんだよー！」
「キャーーー！！」
「ル～？」
ジュンの声が聞こえた。やばい……今の爆発で目覚めたんだ。目を開けると修羅のような顔でアキラ姉さんがボクを見下ろしていた。体はしっかりタオルを巻いている。
「なんだってんだよー！アキラ！おまえなんで女湯にいるんだ？まさかオカマだったのか！？」
ゴンッ。
アキラ姉さんは怒りの鉄槌をジュンに喰らわせた。
「私は女だ！！」
アキラ姉さんが顔を真っ赤にして怒鳴った。ジュン……アキラ姉さんが女性だということを知らなかったのか。
「と・に・か・く！コウキ……ジュン……これはどういうことだ？」
背筋がゾッとした。アキラ姉さんは怒ると怖い。ボクはアキラ姉さんの怒りの矛先を変え、なおかつヒカリさんに嫌われないためとっさに思いついた言い訳を口にした。
「ごめんなさい！アキラ姉さん！ジュンが女湯を覗こうとしたんです！」
「なんだったてんだよー！」
アキラ姉さんはボクから視線を外しジュンを睨みつけた。アキラ姉さんの迫力に押されたのかジュンの体から汗が噴き出した。
「ボクは止めようとしたんです！でもジュンは聞かなくてそれでコリンクが『電気ショック』を……」
「……本当か？ジュン」
「なんのことだよ？オレはすげー音が聞こえたからここに来ただけだぞ！」
ジュンがアキラ姉さんに問いつめられている隙にボクはヒカリさんを見た。でも残念ながらヒカリさんもアキラ姉さんと同じように

体にタオルを巻いていた。そんな……ヒカリさんの裸が……！
「待って！ジュンはそんなことしない！」
「ヒカリ？」
え？そんな！ヒカリさん！まさかジュンを庇うんですか？
「ジュンは日曜日に私の下着姿を見ても反応しなかったのよ。そんなジュンが女湯を覗くはずがないわ！」
何――――――――――――――！？ジュン！あなたという男は！ボクがヒカリさんと初めて会った日にヒカリさんの着替えているところを見たというのですか！？
「それもそうだな……ジュンはバカだがエロじゃない。ということは……」
アキラ姉さんは再びボクを睨みつけた。うっ……さすがにこれ以上抵抗したら見苦しい。ここは本当のことを言って謝ろう。そうじゃないともっとひどいことがボクを待ち受けている。
「なんでコリンクが『電気ショック』を使ったことを知っているんだ？さてはお前が……」
「ごめんなさい！ボクが覗こうとしました！でも違うんです！ボクはヒカリさんの裸が見たかっただけなんです！アキラ姉さんの裸なんてちっとも見たくありま……」
「なんだとーー！？」
ボクは本当のことを言っただけなのにかえってアキラ姉さんの怒りを仰いでしまった。
「フローロ！」
「フロロー！」
いつの間にか潜んでいたのかオレンジ色のポケモンが湯船から飛び出した。首の周りから腰の辺りに黄色い浮き袋のようなものがついている。あれは海鼬（うみイタチ）ポケモンのフローゼル！
「『アクアジェット』！」
「フローー！」
「ゴフッ……」

フローゼルは水を纏いボクに突進してきた。避ける暇もなかった。そもそも避ける暇があるはずがない。フローゼルは水ポケモンの中でもトップスピードの持ち主だ。それに『アクアジェット』は必ず先制攻撃ができる技だ。人間ごときに避けられるはずがない。

「ポチャー！」

ヒカリさんのポッチャマはフローゼルに便乗してボクに攻撃し始めた。ポッチャマはボクの頬を『往復ビンタ』のようにペチペチとはたきまくった。痛い……でも当然の罪なのかもしれない。フローロが『滝登り』や『波乗り』で攻撃しなかっただけマシかもしれない。気が遠くなっていく中ボクは誰かが走ってくる音が聞こえた。

「国際警察だ！手を上げろ！」

「キャーー！！」

バコーン！

ヒカリさんの悲鳴と共に何かがぶつかる音がした。おそらくヒカリさんが警察に桶を投げたんだろう。そして聞き覚えのある声はおそらくコトブキシティで出会った国際警察のおじさんだ。

「ぐはっ……」

おじさんが倒れる音が聞こえた。きっとあの様子じゃすぐに意識を失っただろう。そして……ボクの意識も……。

＊

「風呂場に入ってからの記憶がないが……本当になにもなかったんだな？」

ボクとジュンとヒカリさんとアキラ姉さんは玄関に立っていた。目の前には旅館を去ろうとしている国際警察のハンサムがいる。

「本当ですよ」

ボクは作り笑いを浮かべる。頬が両方とも脹れているけど風呂上りのせいで赤いと誤魔化した。

「本当になんでもないんです！私がお風呂場で滑って驚いて叫び声

を上げてしまって……それでみんなが駆けつけてきただけなんです」
　ヒカリさんも嘘をついていた。ボクを庇ってくれるんですね。ヒカリさんの裸を覗こうしていたのに。ああ、なんて女神のように優しいんだろう……！
「おっさん忙しいんだろ？さっさと行けば？」
「ジュン。口の訊き方に気をつけろ」
　アキラ姉さんも何事もなかったように振舞っている。やはり大人だ。
「そうか。じゃあ頭が痛いのはなぜだろう……」
「そ、それは！ハンサムさんも転んだからですよ！倒れたときに頭を打ったんです」
「そうか。それは迂闊だったな」
　ハンサムさんは頭を痛そうに擦ると背を向けた。
「わたしはこれから仕事だからここを去るが……君たちはまだ子どもだから早く寝るんだぞ」
「「「はーい」」」
　ボクとジュンとヒカリさんは返事をしたけどアキラ姉さんは返事をしなかった。
「アキラくんと言ったな……君はこの子たちの面倒を頼む」
「はい」
「それじゃあさらばだ！」
「「「「ありがとうございましたー！」」」」
　仲居さんとボクたちに見送られながらハンサムさんは去った。ようやく玄関は静かになった。
「あのう、すみませんが……」
　女将さんのシズルさんが話しかけてきた。一体何のようだろう？
「そこの金髪のお客さま、壺と襖の弁償代を忘れないでくださいね。あと黒髪のお坊ちゃま、お風呂場の柵を弁償していただけませんか？」
「「え……？」」

忘れていた。ボクが女湯を覗いたせいで柵が壊れてしまったんだった。ヒカリさんのコリンクのせいではない。柵を弁償するのはいいとしてジュンはいつ壺を割ったんだろう？広間へ走っているときに壺を持っている仲居さんとぶつかったのかな？

「金髪の方を攻めないでください。全てボクが弁償しますから」

「えっ？」

ヒカリさんの驚く声がした。驚く声もかわいい。

「そうですか。ではこれが請求書になります」

シズルさんは落ち着いたまま請求書を渡した。弁償金額は４７万円。おそらく壺が高かったのだろう。ボクにとっては安いけど思っていたより高い宿代になった。

（特別編）第２７．５話　黒髪の紳士（後書き）

こんばんは。Ｓａｇｉｔｔａｒｉａｓです。ただ今戻りました。
私はどこでコウキのキャラ設定を間違えたのでしょうか？（笑）

第２８話　会合

『４月６日　水曜日

昨夜はぐっすり眠れたわ。昨日の戦いで疲れていたのね。朝の準備体操をしていたらナポレオンが真似していたわ。本当にかわいいんだから＾＾ブランチを食べたあとアキラに稽古をつけてもらった。わざわざボックスから普段使わないポケモンを引き出して私のポケモンのレベルに合わせてくれたの！すっごく感謝したわ！でもキララ★がコイキング相手にビビッていたの。困ったわね。『はねる』は無害なのに……。セニョールはアキラのナゾノクサに遠距離で相手の体力を『すいとる』方法を教えてもらった。ナポレオンにはアキラの秘伝マシンで『波乗り』を覚えさせた。

夕方はクロガネジムで初めてのジム戦に挑んだ。アキラの特訓で私は自信満々だった。短パン小僧と整備員相手に入れ替え制のバトルで順調に勝ち進みヒョウタさんの元へたどりついた。でも私はポケモンバトルをなめていた。経験地を平等に分けるためヒョウタさんとバトルするときもポケモンを入れ替えたらクルル♪はイシツブテに、ビッパーはイワークにやられてしまった。「ポケモンバトルを……ジムリーダーをなめてもらったら困るな。」その一言で目覚めた私は本気を出した。ナポレオンもそれに応えてくれてヒョウタさんの切り札、ズガイドスを見事『波乗り』で撃退！タイプ一致攻撃＆特性『激流』が発動してなんとかズガイドスを倒せた。でもジムでの戦いで昨日のように砂塗れになっちゃった。ヒョウタさんの目の前で二度も汚れた姿をさらしてしまった私にヒョウタさんは優しい言葉をかけてくれた。「君は化石のように綺麗だよ。」……微妙；そんな言葉で喜ぶ女の子っているのかしら？

夜は昨日と同じように私とアキラは作業員さんに囲まれながらご飯を食べた。「暴れイワーク（ラミア）を捕獲しただけでなくヒョウタさんも倒すなんて只者じゃない！」ってほめられた。ヒョウタさんのお母さんでもある女将さんのシズルさんも「ヒョウタさんと結婚して民宿クロガネを継がない？」って勧誘されちゃった（笑）。そんな風に広間で賑やかにご飯を食べていたらジュンとコウキくんが現れたの！コウキくんが感動しながら私の元へ走ってきたけどアキラに殴られちゃった。以外だったわ……。アキラってあんな風に怒ることもあるのね。アキラいわく「ああいう馴れ馴れしいタイプは苦手だ」だって。あとから訊いたらコウキくんはナナカマド博士のためにアキラのカブトを受け取りに来たらしいわ。ジュンは冒険ノートを忘れたんだって。みんな大変ね。

こうしてジュンとコウキくんも民宿クロガネに泊まることになった。シズルさんの計らいで温泉は私たちが入っている間は貸し切り状態にしてくれた。アキラと一緒に女湯に入って体を洗っていたらキララ★が悲鳴を上げた。慌ててタオルを巻いて振り向いたら煙から現れたのはジュンと『電気ショック』に感電したコウキくんと壊れた柵だった。今度は私が悲鳴を上げたわ！しかも以外だったことにコリンクが攻撃したのはコウキくんが女湯を覗いていたからなの！私のことが好きだから裸を見たいって言われても困るわ……。コウキくんにはガッカリ。ナポレオンも怒っていたわ。しかも事件はそれだけじゃないの。このあと国際警察のハンサムさんまで女湯に来て驚いて桶（おけ）投げちゃった。わるいことしたわ……。

ハンサムさんが帰ったあとジュンとコウキくんはシズルさんから修理代を請求されちゃった。壺（つぼ）と襖（ふすま）を壊すだなんてジュンったら本当に破壊魔なんだから……。コウキくんは柵の修理代だけでなく壺と襖の修理代も払ってくれた。今日もメチャクチャだったわ。旅に出てから毎日こんな感じ。フタバタウンにいたときと比べて刺激的

だけど疲れるわ。前途多難ね……。』

私はシズルさんと仲居さんに見送られながら宿をあとにした。私が起きたときにはジュンもコウキくんもいなかった。ジュンは早起きだしコウキくんは博士と待ち合わせをしていた。アキラは鳥ポケモン―おそらくムックルの進化系―で移動してしまった。いいなぁ……私も早くクルル♪に『空を飛ぶ』を覚えさせたい。そうすれば行ったことのある町を自由に移動できるのに。

「ポチャー？」

ナポレオンは私の顔を覗いた。「この道で合っているの？」と言いたそうな顔で。

「ここで間違いないわ」

私はタウンマップを見ながら確認した。ここは２０７番道路。クロガネシティの北にある道。草むらより茶色い土が目立つ荒地と違い崖の向こうには緑が広がっていた。望遠鏡を覗いたらカラフルな木の実と緑色の葉っぱで包まれた木を見かけた。それより右側のほうには黄金色の木が見えた。甘い匂いが風に運ばれて私の鼻をくすぐる。

「いい匂い……」

「ポチャ～……」

ほのかにシナモンみたいな香りがした。これは木の匂いかしら？それとも木の実？うかうかしてられないわ。木の実が他の人に取られるまえに崖を登らなくっちゃ！この崖を唯一登れそうな坂が見えたから私はそこへ向かった。でも坂の下には先客がいた。

「うおおおおおおおお！」

そこには全力で坂の上を走っているけど全く進まないジュンとナエトルがいた。まるで下りのエスカレーターを上がろうとしているみたい。ナエトルにいたっては半分砂に埋もれている。私はナエトルを救出するとジュンに話しかけた。

「なにしてるの？ジュン」

「おお！ヒカリか」
ジュンは走るのをやめてこっちにきた。
「見てのとおり坂を登ろうとしてんだよ！だけどこの坂砂で出来てんだよな……。どんなに走っても進まねーんだ！」
ジュンは説明し終わると地べたに座って靴を脱いだ。靴の中の砂を取り出すとふう、と息をついた。あのフタバタウン一早いジュンが走ってもダメってことは私がチャレンジする意味はないわね。私はクスッと笑った。
「バカね～。こういうときは頭を使うのよ。出ておいで！ラミア！」
私は自信たっぷりにラミアの入ったボールを投げた。
「イワーーッ！」
「うおおっ！でかっ！」
私はわんぱくなラミアの頭にまたがり崖の上を目指した。崖の上の景色がどんどん見えてくる。
「いけーーっ！ラミアー！」
イワークの体調は８．８ｍ。ギリギリいけるかも……！

＞ｉ４２１２―６９９＜

ガクンッ。
「えっ！？」
ラミアの体が揺れた。下を見たらラミアのしっぽが地面に立とうと踏んばっていた。いくら巨体のイワークとはいえ蛇は蛇。体は下に行くにつれ細くなっている。人間と違ってつま先で立つなんて器用なことはできない。あ～ん……あともう少しだったのに！
「届かねーのかー？」
ジュンが大声で訊いた。
「届かなーい！」
「イワ～……」
私は残念そうに下を向くラミアにありがとうと言ったあと地面を

降ろすように頼んだ。ううう……かっこつけておいて登れなかったから私もはずかしい……。

「ここからじゃムリみたいだな」

「そうみたいね」

う～ん……イワークの進化系のハガネールだったら届いたかなぁ……？クルル♪は私を抱えて飛ぶには小さすぎるし……。

「しかたねーや。遠回りになるけどまたクロガネゲートを通るか！」

立ち直りが早いジュンはナエトルをボールに戻すと走っていった。

「ヒカリ！お先！」

レディーズ・ファーストを知らないジュンは私をおいてさっさと行ってしまった。ポケモンは先に選ばせてくれたのにそれ以外の順番はゆずってくれないのね。私はラミアに気にしないでと慰めたあとボールに戻した。

「ポチャポチャ！」

ナポレオンはブーツを引っぱった。ポケモンリーグは先着順。早い者勝ち。私たちも急がなきゃ。

「行こう！ナポレオン！」

「ポチャー！」

私とナポレオンは走り出した。うかうかしてるとジュンにチャンピオンの座を取られちゃう！

＊＊＊

２０７番道路からクロガネシティに戻ろうとしたら誰かが草を踏む音が聞こえた。気になって振り向くと草むらに馬の姿をしたポケモンがいた。クロテッドクリームのように黄色がかった体毛。揺れる炎のたてがみ。今にも王子さまが現れてまたがりそうな火の馬ポケモン。

「ポニータだわ！」

まさかこんな木々の少ない荒地で見かけるなんて……！

「ヒヒ～ン」
　ポニータは私たちの存在を気にせず草を食べ始めた。ナポレオンは黙ってポニータを見つめている。私はポニータの姿にうっとりした。なんてステキなポケモンだろう。こんなポケモンに乗って旅が出来たら最高だわ……！私はラミアの入ったボールをバッグから取り出した。さっそく捕獲して仲間に……。
「はっ！？」
「ポチャ？」
　私はボールを持ったままフリーズした。私……またポケモンを傷つけるつもりなの？博士の研究のためならともかく仲間にするポケモンを傷つけてまで捕獲する意味なんてあるのかしら？キララ★は私に向かって走ってくる姿を攻撃態勢と勘違いしてナポレオンがはたいてしまった。セニョールは自分から対戦を望んだ。ラミアは我を忘れて暴れていたから弱らせて捕獲するしかなかった。これらは正当防衛と言えるかもしれないけどクルル♪を仲間にするとき先に攻撃を仕掛けてきたの私だ。
「ポ～チャ？」
　ナポレオンはポニータを指した。「行っちゃうよ」と言っている。私はあわててボールを入れ替えた。
「わ、わかったわよ！クルル♪」
「クルーッ♪」
　クルル♪は陽気に飛び出してきた。あいかわらずフレンドリーだわ。
「クルル♪！あなたにはお願いがあるの！」
「クル？」
　クルル♪は羽ばたくのをやめて私の腕に止まった。
「あそこにいるポニータをスカウトしてほしいの！」
「クルッ？」
　我ながらバカだと思う。こんな変な指示をするトレーナーなんて聞いたことがない。クルル♪は私の変わった指示に首をかしげた。

「あなたは誰とでも仲良くなれる性格だわ。だからポニータに私の仲間になるように上手く説得してほしいの」

自分でもわけがわからないままクルル♪にお願いした。こんなムチャクチャなお願いでもクルル♪は聞いてくれるかしら？

「クルッ！」

クルル♪は右の翼を曲げた。これって敬礼してるの？クルル♪は低空飛行でなめらかに飛ぶとポニータのそばにある岩の上にちょこんと止まった。

「クルルル！クルーポッ！」

「ヒヒーン」

ポニータは顔を上げた。戦意はないみたい。図鑑で確認したらポニータはメスだった。

「クルーックルックルックククルッポ！」

「ヒヒーンヒヒーン」

何を話しているかはわからない。私は緊張しながら2匹のポケモンの様子をうかがった。

「くルルル、クルックルルルル、クル？」

「ヒヒ～ン？」

「クルークルルックルックールル、ムックル！」

「ヒヒン、ヒヒヒヒ～ン」

ポニータが私のほうを向いた。ナポレオンは誇らしそうにふっと笑った。ちょっと！クルル♪ったら一体ポニータになんて言ったのよ？！2匹の会話はしばらく続き、クルル♪はポニータを連れて飛んできた。

「ヒヒーン」

ポニータは私のまえまで来ると膝(ひざ)を曲げてお辞儀をした。

「仲間になってくれるの？」

「ヒヒ～ン！」

その優しい目に偽りはなかった。私はそっとポニータの顔をなでた。こんなに上品な女性だもの。キレイな名前をつけなくちゃ。

「よろしくね、ランス」
「ヒヒン？」
「あなたの名前よ」
「ヒヒーン♪」
ランスはうれしそうに鳴いた。ポニータは進化するとユニコーンみたいに額（ひたい）に角が生える。その角は槍のように鋭く美しいと言われている。私はランスにボールを差し伸べた。ランスは恥じらうようにボールに口付けをして吸い込まれた。

『Ｎｏ．０９０　ポニータ　火の馬ポケモン
高さ　１．０ｍ　重さ　３０．０ｋｇ
生まれたばかりでは立つのがやっと。だが走るごとに足腰は鍛えられて速度が増していく』

図鑑のボタンを押してランスの詳しいデータを調べた。

『ランス♀
タイプ：炎
特性：貰い火
照れ屋な性格。逃げるのが速い。』

私はランスの入ったボールを見て微笑んだ。
「ありがとう、クルル♪」
「クル～♪」
クルル♪をボールに戻し、私は再びクロガネシティと向き合った。
「今度こそ行きましょうか」
「ポーッチャ！」
遠回りになるけどコトブキシティを経由してハクタイシティへ向かうわ！

＊＊＊

クロガネゲートを難なく抜けて私たちは２０３番道路にいた。歩いて行こうとしたけどポニータのランスが私を乗せたがってたから背中に乗せてもらっちゃった。クロガロゲートで現れた野性のポケモンはナポレオンが相手をした。イシツブテとズバットには『泡』で対応してコダックが現れたら『はたく』で攻撃した。護衛つきで乗馬だなんてなんだか優雅ね。これで王子さまがいたら文句なしなのに……な～んちゃって♪

さすがにクロガネゲートでの戦闘は疲れたのか今ナポレオンは私の前に座っている。済ました顔で自分がランスに乗るのが当たり前のように堂々としていた。……それにしても本当にえらそうだな～。前世は皇帝ナポレオンかしら？だとしたらさらにそのまえはアレクサンドロス三世になるわね……。

「ポチャ？」

ナポレオンの前世を考えていたらナポレオンが鳴いた。ランスも足を止めた。どうしたのかしら？

「ヒヒーン」

ランスは振り返り私に前方を見るように促した。だけど遠すぎてなにが起こっているかわからなかった。目は悪くないけど特別良いわけでもないのよね。ジュンは身体能力も五感も優れてるけど頭を犠牲にしてるから悲劇だわ。しかたなく私はバッグから双眼鏡を取り出した。

「そのまま進んで」

再び歩き始めたランスの上から双眼鏡を目に当てた。ピントのずれた双眼鏡を調整しながらレンズを覗くと誰かがポケモンバトルをしているのが見えた。

「普通にバトルしてるだけじゃない」

道端でバトルするならともかくコトブキシティの東口でバトルするのはマナー違反かしら？それ以外はトレーナー同士のなんの変哲

もないバトルに見えるけど……。近づくにつれ戦っているポケモンと人の姿が見えるようになっていった。ポケモンたちは素早く動き回っていて見えにくいけど鳥ポケモンと人型のポケモンが戦ってるみたい。あの鎌に刃物がついたような翼のシルエットはズバットね。あの小柄の人型のポケモンは……あ、今止まった。ヒコザルだわ！ということはそのトレーナーは……。

「コウキくん！？」

あの赤いベレー帽に黒いベストと青いジーンズ……間違いない。コウキくんだわ！昨日私の裸を覗こうとしていたから複雑な気持ちになった。以前なら姿を見ただけでよろこんでいたけど今はよろこんでいいのかわるいのか……。一旦双眼鏡を外した。目を駆使したから疲れる。ランスは言われた通り前に進んでいる。

気持ちを切り替えてポケモンたちの周りを見たらナナカマド博士がコウキくんの隣りにいた。コウキくんも博士も険しい顔をしていた。只事じゃないみたい。コウキくんたちの反対側には緑色の髪の毛のトレーナーが2人いた。2人とも濃いグレーの箱からの銀色のロボットアームが突き出ているような姿をしている。印刷機を擬人化したような姿だけど一応人間……よね？あまりにもダサい服着てたから一瞬人間じゃないと思ったわ。

「あっ！」

空中のズバットの数が一気に増えた。あれは素早く動くことで自分の分身を作り出し、相手を霍乱（かくらん）させる『影分身』だわ！大量に飛び回るズバットを見てコウキくんのヒコザル―アポロンは焦ったけどすぐに落ち着きを取り戻した。コウキくんが腕を上げるのが見えたからなにか言われたのね。ヒコザルは数秒間ズバットの作り出す影分身を見ていたけどついに動き出した。前方にまっすぐジャンプしてズバットを手の平の『火の粉』で攻撃した。2匹の周囲にいたズバットの影分身が次々と消えていく。本体を仕留めたのね！分身が1匹づつ消えるなかヒコザルの後ろにいる分身だけ消える様子がなかった。まさか……！

「ラミア！アポロンを守って！」
戦闘に参加しているズバットは1匹じゃない。2匹だ！私はラミアの入ったボールをできるだけ遠くへ投げた。体が大きくて胴体の長いイワークなら届くと判断したからだ。お願い……間に合って！
「イワーーー！」
私の不安をかき消すようにラミアは戦闘に乱入した。背後からアポロンを攻撃しようとしたズバットはラミアの硬い体にぶつかり弾かれた。
「コウキくーーん！博士ーー！」
私は走るランスの首につかまりながら大声を上げた。右手はナポレオンが落ちないようにしっかり押さえている。
「ヒカリさん！」
「ヒカリ！」
ここまで来れば声が聞こえる。双眼鏡ももう必要ない。
「ちっ。援軍か」
「まだバトルは終わってないぜ」
＞ｉ９２５９―６９９＜
ズバットは2匹ともまだ飛んでいた。アポロンに攻撃されたズバットはフラフラしているけどまだ瀕死じゃない。擬人化印刷機たちはまだ余裕があった。でも彼らのセリフは何回耳を掃除してもザコのセリフにしか聞こえない。
「足元がお留守ですよ」
「なにっ！？」
コウキくんがスマートに言った直後フラフラのズバットは下からアポロンの『ひっかく』を喰らった。ズバットは叫ぶ暇もなかった。
「背中もね♪」
「なっ！？」
私はウインクした。もう1匹のズバットのトレーナーが声を上げたときには手遅れだった。ラミアが地面に落ちてた石をズバットに向かって思いっきり尻尾で蹴ったから。『岩落とし』は見事ズバッ

トに命中した。ほぼ体力が満タンなズバットでも弱点の岩タイプの攻撃を受けたらひとたまりもない。ズバットはツッコミに使われるタライみたいにすとんと落ちた。

「ちっ」

2人の人型印刷機はズバットをそれぞれのボールに戻した。これで追い出せるわね。

「仕方ない。ここは引き上げてやろう」

「なぜならギンガ団は皆に優しいからな！」

やられたのになぜか上から目線で捨てゼリフを吐いたあと銀色の珍獣はロボット歩きでそそくさと去った。ザコ敵がいなくなったのを確認すると私もラミアとランスをボールにしまった。ふう。あいつらはなんだったのかしら……。

「ヒカリさん！」

コウキくんの声を聞いてビクッとした。非常事態だったからつい昨夜の出来事を忘れて戦闘に参加しちゃったけど……コウキくんとどう接すればいいかわからなかった。

「昨日はほんっっとうにごめんなさい！もう二度とあんなことはしません！ヒカリさんが望まない限りは！」

コウキくんはいつものように情熱的に振舞っていた。……私がコウキくんに自分の入浴している姿を覗いてほしいと望む日なんか来るのかしら？

「あ……うん。あのことは気にしないで」

「ああ……ヒカリさんはフローラのように優しいのですね！愚かなボクを許してくれただけでなく窮地（きゅうち）に救いの手を差し伸べてくれるだなんて！あなたがいなければボクは今ごろ上半身は山羊、下半身は魚の姿になっていたでしょう。まるでパニックの語源となったパーンのように！」

これもギリシャ神話？もっとわかりやすい例えはないかしら。

「もしかしてボクのことが好きだからボクを追ってコトブキシティに来てくれたのですか？あんなことをしたのに……。やっぱりボク

たちが出会うべきして出会ったんですよ！運命です！」
「そ、そうね……」
あのときコウキくんに助けてもらわなかったら死んでたかも。運命と言えば運命ね。
「ああ……ヒカリさんと別れて一夜しか経ってないのにとても恋しい……ヒカリさん。大好きです！一万年と二千年前から愛しています！八千年過ぎた頃からもっと恋しくなりました！！」
どこかで聞いたことがあるようなセリフね……。私が完全に思い出す前にコウキくんの顔に水がかかった。
「ぶはっ」
「ポチャー！！」
自分の存在を忘れられたのが気に入らなかったのかそれともただ単にコウキくんがうざかったのかナポレオンは『水鉄砲』を放った。コウキくんにはわるいけど会話が遮られたのでほっとした。
「ウォッホン！」
今度はナナカマド博士が自己主張をした。やだ……すっかり忘れてたわ。
「助けてくれてありがとう、ヒカリ。おかげで助かった。それにしてもあいつらはなんだったのだろう。そもそもあのおかしな格好はなんなのだ」
「ダサいですよね。あれがかっこいいと思っているのでしょうか？」
「時代遅れですね。８０年代を意識していたんじゃないですか」
「……おまえたちがオシャレなのはわかったから本題に入ろう。あの困った連中はギンガ団とか言っていたが……ポケモンが進化するときに出るエネルギーを使う方法を教えろと抜かしおった」
えー？なにそれ！確かにポケモンが進化するときなんらかのエネルギーが出ているかもしれないけどそれを利用するなんて無茶苦茶よ。自然の力はそのままにしておくべきだわ。
「博士の研究でポケモンの９０％は進化に関係していると判明しました。そのせいか博士の研究成果を力ずくで奪おうとしたんです」

そっか。それで争いになったんだ。
「だがおまえたちのおかげで何も起こらずに済んだ。感謝しているぞ」
「いえ、当然のことをしただけです」
「ポッチャー！」
ナポレオンは胸を張った。でもナポレオンは何もしてないわよ。
ナポレオンから目を放したらコウキくんが目の前にいた。私の手を両手で包むとコウキくんはいつものように熱弁した。
「ヒカリさん！助けてくれたお礼に昼食に招待してもよろしいでしょうか？このまえはフランス料理だったので今回はイタリア料理なんていかがですか？もちろん前回と劣らない高級レストランですよ！そこらにある安いイタリアンレストランと違ってイタリアから直接取り寄せた材料を使った本場のピザを食べられますよ！」
コウキくんはうきうきしながら私を昼食に誘った。確かにもうお昼だしお腹が空いた。それに本格的なピザを食べられるなんて素敵！思っていたことが顔に出たのかコウキくんはますます調子に乗った。
「母が行き着けの高級イタリアンレストランでチケットをもらったんです。よかったら2人っきりで行きま……」
「ウォッホン！」
博士が本日二度目の咳をした。まさか博士もレストランについて行くつもりなのかしら？
「仕事があるだろう、コウキ。その1、わたしの荷物をもつこと。その2、わたしを研究所まで無事に護衛すること。その3、研究所で書類の整理を手伝うこと。君の役目はまだ終わってないぞ」
「そんな～博士～」
コウキくんは手を離し今度は博士の前で両手を合わせた。ナポレオンはその様子を鼻で笑っていた。
「ギンガ団のせいで予定が狂った。早く遅れを取り戻すぞ」
「いいじゃないですか～。あんなことがあったんですからちょっと

くらい休んでも。お昼はどうするんですか？」
「研究所に着いたあと出前を取る」
「今ここで食べたほうが早いですよ～。博士も特別に同席してもいいですからここは3人でイタリアンを……」
「わたしは和食派だ」
「たまにはいいじゃないですか～。ヒカリさんとゆっくり話しませんか？博士はまだヒカリさんとゆっくり話したことないじゃないですか～」
「君はわたしの研究よりヒカリを優先するのか」
コウキくんがあれこれ提案するけど博士の気が変わる様子はない。もともと頑固そうだし。
「さあ、行くぞ」
「ヒカリさ～～ん！」
博士はコウキくんのマフラーを掴んで出発を促した。首が絞まっていてもなおコウキくんは抵抗していた。
「ヒガリざん……これ……」
コウキくんは苦しみながら手を伸ばして私にチケットとハートの箱を渡した。
「せめでヒガリざんだけでも食べに行っでぐださい……ハートのはごはアクセザリーケーズです。あげまず……」
「あ、ありがとう……」
コウキくん自分で自分の首を絞めている……大丈夫かしら？
「ほら。行くぞ」
コウキくんは咳込みながら博士のあとをついていった。ちょっとかわいそう。
「チャッ」
ナポレオンは舌打ちした。もしかしてコウキくんがこのまま窒息死するのを望んでいたのかもしれない。ナポレオン……恐ろしい子……！
「ヒカリさ～～ん！一万年と二千年後も愛してますからね～～！

！ずっと待っていま～～す！」
　コウキくんの愛の叫びが聞こえた。まるで発情期のオスねこみたい。……あ、思い出した。コウキくんのセリフってトバリシティのパチンコのＣＭから来たんだ。『剣聖のア○エリオン』の歌ね。コウキくんに対する印象は若干下がったけど彼氏候補からは外さないでおくわ。この高級イタリアレストランのお食事券に免じて。
「ご飯食べに行こっか、ナポレオン」
「ポチャ～♪」
　ナポレオンはさっきの腹黒い顔とは打って変わってかわいい顔をした。ツンデレだけど食べ物には弱いのね、この子。
「今日の昼ご飯は豪華よ～♪」
　私たちは浮かれながらコトブキスカイビルに向かった。

第２８話　会合（後書き）

久しぶりの更新です！これからは一つの話を数回に分けて更新します。
つまりいったん前編を載せたあと編集して中篇や後編を追加するということです。
なかなか更新されないときはブログを覗いてなにをやっているのか確認してください。
変わり者の帰国子女ハーフの女子大生の生活がわかります（笑）。
パソコン　ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｓａｇｉｔｔａｒｉａｓｃｈｕ

第２８話のおまけ　ムックルのスカウト（前書き）

２８話の中編のクルル♪とランス（ポニータ）の会話です。
初めてポケモン視点で書いてみました。

第２８話のおまけ　ムックルのスカウト

自分の名前はクルル♪ッス。ヒカリお嬢さんのポケモンッス。そんな自分は今日ヒカリお嬢から重要なお仕事をもらったッス。なんと自分に野生のポニータをスカウトしてほしいらしいッス！これからはヒカリお嬢じゃなくてヒカリ監督と改めようかなー？それとも大佐？なーんちゃって！とにかく自分はすぃーっとポニータの元へ飛んだッス。近くに行ったらほのかに花の香りがしたッス。このポニータは女性ッスね！

「そこのお姉さん！こんちはーっす！」

「ごきげんよう」

ややっ！なかなかお上品なお姉さんッスね。

＞ｉ９２５７―６９９＜

「自分はムックルのクルル♪ッス！」

「人はわたくしをポニータと呼びます」

うん。今のところ警戒されてないッス。よかったッス。

「お姉さん、このままただのポニータでいいんスか？」

「どういう意味でしょうか？」

「そこにいる人間のお嬢さんがあんたを仲間にしたいってことッス！」

ポニータお姉さんはヒカリお嬢のほうを向いた。ヒカリお嬢は遠くから自分たちを見守っている。あいかわらずヒカリお嬢は見目麗しいッス。

「まあ、かわいらしい方ですわね」

おっ！好感触ッス♪

「お姉さんどうスか？この容姿端麗、頭脳明晰、高貴で優しい未来のポケモンチャンピオンの仲間にならないッスか？」

ポニータお姉さんはもじもじした。おしとやかだけでなく照れ屋なんスね。

「そうですわね。わたくしなんかでよければぜひお供をさせてください」
「あざーッス！お姉さんが仲間になってうれしいッス！きっとヒカリお嬢がステキな名前をつけてくれるッス！」
「まあ、光栄ですわ」
自分はポニータお姉さんをヒカリお嬢の下へ連れていったッス。
ポニータお姉さんはゆっくりついてきたッス。
「はじめまして」
ポニータお姉さんはお辞儀をした。初対面の挨拶はバッチリッス！
「仲間になってくれるの？」
ヒカリお嬢はおそるおそる訊ねた。だけどポニータお姉さんは即答したッス。
「一生お仕えしますわ！」
おお！最近流行りのメイド属性スか！やっぱりヒカリお嬢はお嬢さまッス。こうしてポニータお姉さんはランスという立派な名前をもらい、ヒカリお嬢がチャンピオンになるのを導いてくれたとさ。
……えっ？まだ早いって？……大丈夫ッスよ！絶対そうなると信じてるッス！たとえ自分がヒカリお嬢がチャンピオンになる瞬間にいなくても、ランス姉さんはナポレオン先輩やラミア姉貴と必ず一緒にいるッス！

アキコのバレンタインズデー（前書き）

本編とあまり関係ありません。一種のパロディです。
バレンタインに間に合わせるため急いで描いたのでとても雑です。
ものすごくカオスな内容なので覚悟してください（笑）。

アキコのバレンタインズデー

＞ｉ９４５８―６９９＜
ごきげんよう。私の名前はアキコ。
大財閥であり学者の家系としても名高いテンジョウイン家の一人娘よ。

＞ｉ９４５９―６９９＜
お父さまとお母さまは2人とも研究者で忙しいからなかなか会えないの。
でもさみしくなんてないわ。

＞ｉ９４６０―６９９＜
だって私にはヒカリというメイドとコウキという執事がいるんだから！
ヒカリはお姉さまみたいに優しいしコウキは有能な執事だわ。

＞ｉ９４６１―６９９＜
庭師のジュンもいるけどあんまり仲良くないのよね。あいつバカだし。

＞ｉ９４６２―６９９＜
そんな裕福でかわいい私にも悩みがあるの。
実は私、家庭教師の先生に恋してるの・・・。

＞ｉ９４６３―６９９＜
今日はバレンタインズデー。
この日のために昨日は手作りチョコレートケーキを作ったわ！

＞ｉ９４６４―６９９＜
やったー！出来たわ！コウキも手伝ってくれたんだもの。完璧ね！

＞ｉ９４６５―６９９＜
でも私見ちゃったの・・・・・・
先生がメイドのヒカリとポッキーゲームをしているところを・・・！

＞ｉ９４６６―６９９＜
キャーー！！コウキが拳銃で自殺しちゃったわ！
ヒカリのことが好きだったからショックだったのね！

＞ｉ９４６７―６９９＜
「しっかりして！コウキ！今お医者さまを呼ぶからね！」
「お嬢さま・・・どうか先立つことをお許しください・・・」
「いや！コウキ！死なないで！」
「最後にお願いがあります・・・どうか・・・・どうかあいつを・・・あいつを首にしてください」
―あいつって・・・・・・もしかして・・・。
「わかったわ・・・必ずあいつを首にするわ」
「お嬢さま・・・ありがとうございます。これで・・・安心して・・・逝け・・・ます・・・」
「いや・・・コウキ・・・・・・コウキーーー！！」

＞ｉ９４６８―６９９＜
「・・・というわけでジュン！あんたクビよっ！」
「なんだってんだよー！？オレなにもしてねーぞ！」
「なにもしてないからクビなのよ！あんた庭の手入れサボりすぎ！」

＞ｉ９４６９―６９９＜

こうして私は邪魔者を追い出し、失恋から立ち直った私はヒカリと先生を祝福しました。
そして3人で家族のように仲良く暮らしましたとさ。めでたしめでたし♪

「なんだってんだよー！」ｂｙジュン

アキコのバレンタインズデー（後書き）

勢いだけで描いたのでバランスがおかしいです＞＜
身長差が間違っていますが目をつぶってください；
ブログでこれを読んだ方々は「ジュンがかわいそう」と言っていました（笑）。

第２９話　悪の組織（前書き）

久しぶりの更新は血が滾（たぎ）るぜ・・・！（笑）

第２９話　悪の組織

私は溜まっていた息を吐いた。私が座っているテーブルの周りはどこを見ても花がある。赤、白、黄色、ピンク、オレンジ、……やっぱり春だわ。こんなに色とりどりの花を見れるのは春だからよ。私にも春が来ないかなぁ……な～んちゃって♪別に悩んでるわけじゃない。リッラクスしてるから思いっきり深呼吸をしただけ。

私は今ソノオタウンのフラワーショップ『色とりどり』にいる。コトブキシティとソノオタウンの間にある『荒れた抜け道』を出てフラワーショップに来店したばかり。『荒れた抜け道』ではナポレオンに引っぱられつつ所々にある岩をラミアの『岩砕き』で破壊しながら進んだ。だって岩が多すぎて道を塞(ふさ)いでいたんだもの。

ナポレオンは優しい。私が道を間違えそうになったときは止めてくれたし、わざわざ1人（1匹？）で泉を泳いでアイテムまで拾ってくれた。さすがナポレオン。自ら先陣を切るだなんてナポレオン皇帝から名付けただけあるわ。方向音痴の私と違ってしっかりしている。……私がトレーナーでいいのかしら？なんだか自信なくなってきちゃった。

「バラのハーブブレンドティーです。よかったらどうぞ」

フルーツサンドを食べていたら店員がトレーでハーブティーを運んできてくれた。あれ？私飲み物は頼んでないのに。今店には私以外のお客さんはいない。他のお客さんと間違えるわけないし……。

「フタバタウンってけっこう離れてるじゃないですか。せっかくだからお茶をサービスしました。ゆっくり見ていってくださいね」

「えっ……は、はい！ありがとうございます」

カップを口に近づけると濃厚なバラの香りがした。色取り取りの花で一杯のこの店は花屋だけでなく喫茶店も兼(か)ねている。お花に囲まれながらティータイムだなんて素敵！サービスされちゃったからここはやっぱりなにか買うべきよね。もともとママになにかおみや

げ買うつもりだったけどなににしようかなぁ……。ナポレオンと私はハーブティーを同時に飲んで同時に安堵の息をもらした。この店は落ち着く。事件でも起こらない限りこの店の平穏は壊れないと思っていたらどこからか泣き声が聞こえてきた。女の子の声だ。

「あーん！あーん！」

小さい女の子が涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔を拭きながら店に入ってきた。アキコちゃんより小さい。歳は5、6歳かしら？それ以上のことを考えるまえに私の体は動き出していた。

「どうしたの？！大丈夫？」

＞ｉ９２６０―６９９＜

私は女の子の背中に手を回してもう片方の手に持ったハンカチで顔を拭いた。涙を一通り拭いたあとティッシュを渡して様子を見た。引き続き涙がぽろぽろ落ちてきたけど女の子は声を上げるのをやめ鼻をかんだ。

「パ……パパが……」

女の子は涙と鼻水を出しながら息をするので精一杯だった。赤くなった顔で女の子はなんとか言葉を出した。

「パパがどうしたの？」

「パパが……パパがう、う、うちゅうじんみたいな人たちにさらわれちゃったの！」

「ええっ！？」

私は店員さんと顔を合わせたあとナポレオンと顔を合わせた。両方とも目が飛び出ていて口がパックリ開いている。たぶん私も同じ顔をしている。パパが宇宙人に攫（さら）われた！？

「はつでんしょにいたら……うちゅうじんがやってきて……あたしはおいだされてパパはおくのへやにつれてかれて……」

店員さんと女の子は知り合いみたい。２人の話をまとめるとこの子のパパは発電所で働いていてる人みたい。で、突然宇宙人みたいな人たちがやってきてこの子を追い出しこの子のパパを奥の部屋に閉じ込めちゃったってわけ。この事件が起こったのは朝。コウキく

んとナナカマド博士が襲われたのとほぼ同時刻。襲ってきた相手は濃いグレーと銀色の服と組み合わせが最低な緑色の髪の集団。人の形をした壊れた印刷機……じゃなくて宇宙人みたいな格好をしていたらしい。同じダサダサファッション……同じ集団？たしかギンガ団だっけ？

「あう……あ、あたし……パパにあいたい！おねがい、トレーナーさん。パパをたすけて！」

見ず知らずの女の子にいきなり大役を頼まれちゃった。困った人を助けるのはかまわないけど……。

「私はいいけど……警察は？」

女の子をなでながら私は店員さんをチラッと見た。店員さんも困った顔をしている。

「この町には警察はほとんどいません。交番にいるのは年老いた警察とデルビルが一匹。四方を花で囲まれたこの町では犯罪する人は皆無ですから……」

うっ……たしかにこんなにキレイな花が咲き誇る町では犯罪なんて起きなさそう。せいぜい子どもの万引きくらいかしら？世界中がソノオタウンのようにお花で一杯になれば犯罪も争いも起きないのに。私は女の子に向き直った。

「わかったわ。悪い奴らなんて私たちが追い出してあげる！」

私の手持ちは現在６匹だ。ナポレオン、ビッパー、クルル♪、キララ★、セニョール、ラミア。頼れる仲間が６匹もいるから大丈夫。私は店員のお姉さんに決意を告げた。

「お姉さんはこの子と一緒に交番に行ってください。わたしは発電所に行ってきます」

「待って！」

敬語を忘れるくらい店員は慌ててたけど私は無視して走り出した。あんな悪趣味なファッションを着てるだけでなく悪事を働くだなんて許さない。ギンガ団は私が木っ端微塵にしてやる！

＊＊＊

私たちは川がある２０５番道路を歩いた。右にはナポレオン、左には依頼主の女の子がいる。本当は女の子は店員さんに預けて発電所に行くつもりだった。だって危険だもの。ポケモンを持っていないのに怪しい集団に戦いを挑むのは無謀だわ。なのにどうしてこんなことになったのかというと私が発電所に向かっていたつもりなのに花畑方面に走り出したから。勢いでフラワーショップを出て右に走り出したものの肝心の発電所は左の道にあった。つまり、私があまりにも方向音痴だから女の子に案内してもらうことになったわけ。う～～……はずかしい！アキラやヒョウタさんがいなくてよかった！

「あ～あ。きょうはひどい日だな～」

女の子が話し出した。たしか名前はライコちゃん。ジョウト地方にいる伝説のポケモン、ライコウから名付けられたんだって。う～ん……変わった名前だけどデンコと名付けられなかっただけマシかも。

「大丈夫よ。私がなんとかするから！」

笑顔で答えたけどライコちゃんがそう思うのも無理もないわ。私がソノオタウンに来たときは晴れていたのにフラワーショップを出たときには空は曇っていた。きっとライコちゃんが発電所から追い出されたときにはもう曇っていたのね。かわいそうに。空まで灰色になってライコちゃんはますます心細くなったのね。

「いいおてんきでパパとはつでんしょにいくときカッコイイお兄さんを見かけたからいい日だとおもったのにひどい」

「ぷっ」

不覚だけど笑っちゃった。子どもって正直だなぁ……。小さい女の子でもかっこいいお兄さんが好きなのね。どんな人かしら？まさかアキラ？仮にアキラだとしてもアキラはかっこいい「お姉さん」だから失礼かもしれない。

「へ～。どんな人だったの？」

「あのね、よぞらみたいな人だったの！」
「夜空？」
青空だったらさわやか系、星空だったらアイドルだけど夜空って何系かしら？クール系？
「よぞらみたいにあおくてくろかったの」
「ふ～ん」
やっぱりアキラかなぁ……。アキラの髪って青と黒の中間の色だしこの前着てた服は青かったわ。もしアキラだったら助太刀を頼むこともできるかも！アキラだったら発電所に突入する前に探そっかな。
「目の色は？」
「あおぞらとおなじいろ！」
残念。ハズレだわ。アキラの目は日に沈む太陽の色だもの。それにしてもライコちゃんって空が好きね。でも曇り空は好きじゃないみたい。
「ナポレオンとおなじいろだね」
「ポチャッ！」
ナポレオンは自分のほうがかっこいいと否定するようにそっぽを向いた。ツンデレは自分に自信があるのね。私たちはそのまま歩いたけど川に沿って生えている木々から出る一歩手前でライコちゃんとナポレオンを止めた。
「……あれが発電所ね」
木々の向こうは草のフィールドが広がりその向こうに半球がついた四角い建物が見えた。あちこちに白い風車が設置され回転している。ここが『谷間の発電所』ね。正式名は店員のお姉さんに教えてもらった。
発電所の前には予想していた通り見張りが2人いた。今朝会ったギンガ団と瓜二つの格好をしていた。……完全に黒ね。服の色のことじゃなくてあいつらに罪があるってこと。どうみても悪役じゃない。

「ライコちゃん。道案内はここまでよ。あなたは交番に行きなさい」
「いや！わたしもいく！」
「ポケモンを持ってないからダメよ！」
……意外とガンコね。普通の女の子ならここで去るはずだけどライコちゃんは一歩も退く様子はない。そもそも道案内を申し出た時点で勇気があるわ。
「せめてここで隠れて待ってて。あなたを危険に巻き込むわけにはいかないわ」
「いーやーだー！」
泣きそうになりながらも訴えるような目でライコちゃんは私を見つめた。ソノオタウンで泣いていたときとは別人だ。ガンコなライコちゃんを見ていたら小さいころのジュンを思い出した。無茶ばっかりするジュンも稀に泣くことがある。でもジュンは泣いてもすぐ立ち上がえう。意地でも無茶に挑むガンコなやつ。
「……わかったわ。そのかわり私から離れないでね」
「うん！」
こういうガンコな子には何を言ってもムダなことはわかっていた。私がポケモンと一緒に守るしかない。私はどのポケモンを出すか選んだ。
「セニョール！出番よ！」
ボールから出る光が目立たないようにしゃがんでセニョールを出した。ライコちゃんは口を開けて目の前の出来事を見守った。
「セニョール、あなたにはこの子の護衛を任せるわ」
「ミ～？」
「ボディーガードよ。かっこいいでしょ？真面目なあなたにぴったり！」
「ミ～♪」
ボディーガードの意味はわかってないけど響きが気に入ったみたい。セニョールは私とナポレオンに敬礼したあとライコちゃんにお辞儀をした。

「よ、よろしく……」
「ミー！」
さっきより引きしまった表情でセニョールは鳴いた。ナポレオンは私の護衛をさせて他のポケモンに戦わせよう。相手は悪の組織。集団だから不意打ちをしてきてもおかしくない。
「さ～て、どうやって発電所に乗り込もうかしら？」
私はイタズラっぽく笑った。発電所に巣くう悪いウイルスを駆除しなきゃ！

＊＊＊

時刻は午後４時。もう夕方だった。でも曇っているせいで夕陽が見えない。さっきまで『色とりどり』で優雅におやつを食べていたのにとんでもない事件に巻き込まれちゃった。あんな悪趣味の服を着て発電所を乗っ取ったうえに私のティータイム（おやつタイム）を邪魔したんだからギンガ団なんて許さない！
発電所に突入するために私はライコちゃんを変装させることにした。私はピンク色のスカーフと白いニット帽と顔の左右に止めていた黄色いバレッタを外した。ライコちゃんの服の上に白いカーディガンを着せまだ温かいスカーフを首に巻いた。そのあと2つのバレッタでライコちゃんの肩までかかったオレンジ色の髪をツインテールにした。髪の毛の色は違うけどおそろいのバレッタを身に付けていれば姉妹に見えるはずだわ。と、いっても私の場合バレッタを髪の頭の後ろで留めてるからわかんないかもしれないけど。さりげなく後姿を見せておそろいのバレッタをしてるってことアピールしなきゃ。
私はボールからクルル♪を静かに出し指示を出した。
「いい？作戦通りに行くわよ」
「うん！」
「ミ～！」

「ポチャ！」
「クルッ！」
みんなは小声で返事をした。私が合図をするとクルル♪は野生のポケモンのように飛んだ。発電所の窓が開いていることを確認するとするりと内部へ侵入した。木の後ろに身を潜めながら私たちは様子を伺った。しばらくすると発電所から人が騒ぐ声が聞こえた。
「なんだなんだ？」
「おい、どうなってんだよ？」
発電所から聞こえるパニックな声に見張りたちは動揺した。私たちは一般人のように発電所のほうへ駆けつけた。
「すみませ～ん！私のムクバードを見かけませんでしたか～？」
「あん？ムクバード？」
「はい」
見張りの1人がしきりに通信機で他の団員と連絡を取るなか私はもう1人の見張りに話しかけた。ずっと走っていたので息が切れているというふりをしながら。
「はぁ……はぁ……。ムクバードがそっちに飛んでいくのを見かけたんです。イタズラっ子だから……他の方に……迷惑を……かけてないか心配で……」
膝をついてさりげなくバレッタを見せたあと私は上目遣いで見張りを見た。周囲にかわいいと認められているからかわいさには自信がある。今の仕草で大抵の男の子を悩殺する自信はあった。……まあ、私の子どもの魅力が大人の悪の手先の男に通用するかどうかはわからないけど。
「……ちっ。仕方がねえな」
少しは効果があったみたい。私が話しかけた見張りは照れていた。やだ～。まさか私胸チラしてないよね？
「おい！誰も入れるなって命令されてるだろ！」
「こいつを見ればムクバードも大人しくなるだろ。ちょうど仲間に渡し忘れた鍵もあるし開けるぞ」

私は心の中でガッツポーズをした。ナポレオンはしらけた顔で扉を開ける見張りを見た。ライコちゃんは不安そうにセニョールを抱きかかえていた。

「妹も連れて行っていいですか？」

「いいだろう」

「早く済ませろよ」

「ありがとうございます」

1人は背中を向け発電所の外を見張り、もう1人の見張りは丁寧なことに扉を押さえ私たちを先に入れてくれた。

「本当にありがとうございます」

「あ？」

横から風が吹いてきた。風が通り過ぎる頃には見張りは倒れていた。

「ありがとう、セニョール」

セニョールは発電所に入る寸前にライコちゃんの腕から離れ、扉の前で『しびれ粉』を放った。私たちは発電所内に入っていたし口を押さえていたから『しびれ粉』を吸い込まずに済んだ。発電所の奥から人とポケモンの声が聞こえてくる。クルル♪は上手く攻撃を交わしながら騒ぎを起こしているみたい。

「キララ★」

私は3匹目の手持ちポケモンを出した。控えめな声でキララ★は小さく鳴いた。

「通信機を壊してくれる？」

「コリ～ン」

キララは必要最低限の電気で通信機を破壊した。私は廊下の大きさを調べた。これくらいの広さなら問題なさそうね。私はキララ★に続いてラミアを出した。

「グォー！」

8m以上大きいイワークのラミアを出すと廊下は一気に狭くなった。あらかじめ作戦を伝えていたライコちゃんもその大きさに驚い

た。
「クルル♪と合流するわよ！」
「ポチャアッ！」
「イワーー！」
「ココココリ～ン！」
キララ★、ナポレオン、私とライコちゃん、セニョールの順番で私たちはラミアに乗った。ラミアは天上にぶつからないように気をつけながら猛スピードで廊下を這った。
＞ｉ９２６１―６９９＜
「ひだり！そのあとみぎ！」
ライコちゃんの指示に従いながらキララ★とナポレオンは進んだ。すごい……私なんて両手を見ないと右と左がわからないのに……！
「なんだ？侵入者か！？」
団員がズバットを繰り出してきたけどキララ★の『スパーク』であっけなく落とされた。
「クルーー♪」
「クルル♪！」
クルル♪はどこからか飛んできて私の肩に止まった。
「先発隊を務めてくれてありがと！」
「クルッ！」
クルル♪はいつものように敬礼した。クルル♪の鳴き声を聞きつけたのか新手の敵がやってきた。
「いたぞー！あっちだー！……ってておわー！？」
他の団員たちが次々にポケモンを出すけど岩・電気・水のコンビネーションを崩せなかった。セニョールが出る幕もない。
「へぇ……ニャルマーにスカンプーか～。こんなポケモンもいるんだ～」
余裕があったから図鑑で敵のポケモンを調べた。ニャルマーは体がほぼ灰色のねこで尻尾がワイヤーみたいにくるくるしている。すましたおめめはピンク色のまぶたのせいか色っぽいけどいじわるそ

う。スカンプーは濃い紫色のポケモンで背中とお腹がベージュ色のスカンクみたいなポケモン。顔も全体的な姿もあんまりかわいくないわね。

「パパだ！」

奥の部屋を目前にしてライコちゃんが声を上げた。ドアについたガラスから白衣を着たおじさんと薄紫の髪のおじいさんが見えた。ライコちゃんのパパの無事を確認した次の瞬間ドアが開き、敵の刃が襲い掛かってきた。

「ズバット！『噛みつく』！」

「！？」

気づいたときには遅かった。イワークはズバットの攻撃を受けて叫んだ。よっぽど痛かったのか体が悶(もだ)え、そのショックで私たちはイワークから振り落とされた。

「リンッ！」

「ボチャ！」

「きゃあっ！」

「わっ！」

「ミッ！」

私たちはバラバラに床に転がった。床に叩きつけられなかったのは宙を飛べるクルル♪だけだった。私は真っ先にライコちゃんに駆け寄った。

「ライコちゃん！みんな！ケガはない？」

「うっ……なんとか……」

ポケモンたちは返事をすると立ち上がり私たちの周りに集まった。最後に集まったのはラミアだった。

「ラミア！？あなた……目が……！」

さっきのズバットはラミアの両目に的確にダメージを与えていた。いくら岩ポケモンでも目や口などの生身の部分が傷つくと痛い。ひどい……ポケモンバトルでこんなことをするのはルール違反なのに……！

「ちょっと～、こんな狭い場所でイワークなんて出さないでくれる？」

私は声の持ち主をにらんだ。赤い髪の女性は腕にズバットを乗せていた。

第２９話　悪の組織（後書き）

ヒカリはオシャレさんなので性格もファッションセンスも悪い人には容赦しません（笑）。

第３０話　集団いじめ

赤い髪の女性は大人というより子どもだった。私より4、5歳上みたい。丸い髪形は左右後に分かれ跳ねている。なぜか前髪の上にある髪も角みたいに跳ねていた。

「あたしはギンガ団3人の幹部……じゃなかった。4人いる幹部の1人。その名もマーズ！今よりも素敵な世界を創り出すため色々とがんばってるのになかなか理解されないのよね」

＞ｉ６７６５―６９９＜

その赤い髪の下から覗かせる顔は笑っていた。ジュンのイタズラッ子な笑みともコウキくんのさわやかなスマイルとは違う。ましてはアキラの見せるふとした笑顔とは似ても似つかない。彼女の笑顔は悪意に満ちていた。いじめっ子の見せる特有の笑顔。トレーナーズスクールでコウキくんにベタベタしていたポニーテールの女の子の笑顔を１０倍歪(ゆが)めたようないじわるな顔。赤い髪の女の子に対する私の第一印象は最悪だった。

「……最悪」

それがきつく閉じていた私の唇から出た最初の言葉だった。初めて会う人に失礼だけど仕方がない。彼女のさっきの行動と容姿から明らかに敵だとわかる。

「最悪ってさっきの攻撃のこと？卑怯だって言いたいの？公式なトレーナー戦じゃないから不意打ちくらい当たり前……」

「あなたの服のセンス最悪！」

「……はあ？」

マーズの余裕のある笑顔はまぬけな表情に変わった。彼女がラミアにしたことも彼女の変な髪形も彼女のいじわるな微笑みも許せない。だけど私が一番気に入らなかったのは彼女の服装だった。ギンガ団の女性の団員はハイネック半そでのワンピースでキャンペーンガールの制服に似ていてまだマシだった。だけどこのマーズという

名のハイティーンの着てるワンピースのスカート部分は傘みたいにふくらんでいる。全体的にピタッとフィットしているのにスカートだけふわっとしているのは変だわ！

「なによその制服！なんでスカートがふくらんでるの？その風船みたいなパーツがついてるから？ダッサい！下っ端の女団員の制服のほうがまだマシよっ！あとそのＴ字型の灰色と銀色の切り替えおかしくない？そのロボートアームを連想させるような長袖とタイツもやめたほうがいいわ！」

「なんですって！私は幹部なのよ！この服はあたしがデザインした特注品なのよ！団員服がダサいのはわかるけどあたしの制服がそれ以下ですって？ありえないわ！」

「ギンガ団の制服は全部ダサいわよ！この人間印刷機！あなたたちそんな格好してるから鼻の穴にお金入れてコピーしたいものを目にグリグリ押し付ければ口からプリントが出てくるんじゃない？コンビニにある印刷機にそっくりよ！」

「に、に、にににに人間印刷機ですって！？」

私とマーズは歯を食いしばってにらみあった。ジュンが見たら犬みたいに威嚇しあうなよと言われるくらい怒っていた。

「ふっふっふっふ……愚かな小娘よ」

ライコちゃんのパパの隣りに立っていたおじいさんが立ち上がった。マーズに気を取られていてなんのために発電所に来たのか忘れていた。ライコちゃんのパパはイスに縛（しば）られている。薄紫色の髪のおじいさんは猫背でもともと背が高くないのにますます背が低く見える。赤い鼻とうつろな目はまるで薄紫色のカツラを被り、白衣をまとって人に変装しようとしているちょうちんアンコウだった。ギンガ団の制服は着ていないけどマーズの制服以上にみにくいと思った。

「そうよ！プルート！あんたも言ってやって！」

マーズは助け舟が来たと確信してよろこんだ。プルートは一歩踏み出して私に反論した。

「甘いな、小娘。わしだったら鼻の穴に小銭、口にお札を入れられるようにして目から立体映像が出て選択画面が表示されるようにする。スキャナは腹に設置して尻からプリントが出るほうが実用性が高い」

「あんたまで印刷機ネタに乗るなっ！！」

プルートという老人があまりにも変なこだわりを見せたのでマーズがつっこんだ。ライコちゃんもギンガ団の下っ端も対応に困っている。ポケモンたちの頭上には「？」が浮く始末だった。

「ちなみにスキャンする際に鳴る音はピ～ギュルルル～だ」

「下痢かよっ！」

さすがにこらえきれなかったのかマーズはついにプルートをどついた。すごい……老人と少女（？）が漫才をしている……。

「キ～～～！！どいつもこいつもバカにして～……あたしの力を見せつけてやる！」

マーズの声に呼応するようにズバットが私たちに向かって飛んできた。私はライコちゃんの前に出てキララ★に指示をした。

「スパーク！」

「リィ～～ンッ！」

キララ★の黄色い閃光が当たるよりズバットの『噛みつく』のほうが早かった。背中に『噛みつく』のダメージを受けたかわりにキララ★は至近距離で放った『スパーク』でズバットを仕留めた。

「ちっ。一撃でやられたわ」

マーズは冷めた目でズバットをボールに戻した。その目にポケモンに対する思いやりは微塵（みじん）もなかった。

「あたしの手持ちは2匹しかいないけどもう1匹は強いわよ」

マーズはニヤリと笑うと自信満々でボールを投げた。中から出てきたのは灰色と白が入り混じった毛並みの太ったねこだった。

＊＊＊

ニャルマーの進化系……？大きくなった耳の先は紫色になりピンク色だったまぶたもアイシャドウの色を変えたように紫色になった。ひげはちぢれて口の形がwからvを逆さにしたものに変わる。体が大きくなったこともありニャルマーのときより偉そうで貫禄がある。おそらくノーマルタイプだわ。だとしたら少しやっかいだわ。ノーマルタイプのポケモンの弱点は格闘タイプだけど格闘タイプのポケモンなんて持ってないもの。目の前にいるポケモンの名前を調べるために図鑑を向けた。

『Ｌｖ．１７　ブニャット♀』

ブニャットは低い声で鳴いた。かわいげのない声だった。

「この子が勝ったらあんたが出てって。そのかわりあんたが勝ったらあたしたちギンガ団が消えるわ」

マーズはハッキリと告げた。よっぽどブニャットの強さに自信があるのね。

「ライコちゃんのパパも解放してよ」

「あんたが勝ったらね」

私はキララ★を見た。『かみつく』でＨＰが3分の1削られたけどまだ戦える。

「キララ★！もう一度『スパーク』！」

「『不意打ち』！」

キララ★が『スパーク』の電気を貯める前にブニャットの爪がキララ★の胴体を切り裂いた。

「リッ……」

倒れる寸前キララ★は私を見た。申し訳ない顔をしていた。

「キララ★！」

図鑑を見なくてもわかった。キララ★は瀕死だ。ズバットの戦いでダメージを受けていたけどまさか一撃でやられるなんて……！

「邪魔だからさっさとどけてくれない？早く次のポケモンを出してよ」

私はマーズをにらんだ。自分のポケモンじゃないからってそんな

言い方はないじゃない！
「ごめんね、キララ★……」
瀕死になったキララ★を直視できずにボールに戻した。キララ★を初めて瀕死にさせてしまった……。
「ビッパー！行くわよ！」
私は次のポケモンを繰り出した。数合わせで連れて来たビッパーだ。またビッパーが瀕死になるかもしれないけど相手は強い。多少の犠牲を覚悟しないと勝てない。せめて少しでも相手にダメージを与えないと！
「ビーップ！」
ビッパーは毛を逆立てた。仲間を倒されて怒っている。
「『転がる』！」
「『不意打ち』！」
早いっ！ビッパーが『転がる』前に『不意打ち』を喰らった。ビッパーのレベルがブニャットより低かったせいか一撃で倒されてしまった。
「さっきの威勢はどうしたの？お譲ちゃん」
「くっ……」
歯を食いしばりながらビッパーを戻した。手持ちは残り４匹。まだ戦える……！
「ランス！」
「ヒッヒーン！」
仲間になったばかりのポニータを戦闘に出した。ソノオタウンへの道のりで既にトレーナー戦は経験している。レベルも１５まで育てた。素早さも高い。そう簡単にはやられないはず。
「『火炎車』！」
「『不意打ち』！」
私が先に指示したのにブニャットの攻撃のほうが早かった。ランスより早いの？！ランスはブニャットにひっかかれたもののたてがみ代わりの炎の火力を上げ回転しながらブニャットに突っ込んだ。

図鑑の警報が鳴り始めた。ランスはなんとか『不意打ち』に耐えた。
「あら、さっきの2匹よりかは使えるじゃない」
「ポケモンをもの扱いしないで！」
反論したけど私の状況は変わらない。なんとかブニャットに一撃喰らわせたけど倒すにはまだ遠い。相手のＨＰは5分の3ほど残っている。
「ランス！もう一回！」
「眠りなさい！」
マーズが横にした手の平をおでこと胸に当て、片足をバレーのように内側に曲げるとブニャットは『催眠術』を繰り出した。ブニャットの目がランスの目を捉え謎の念波を放つ。『催眠術』が効いたのかランスの体はぐらりと傾いた。
「起きて！ランス！『火炎車』よ！」
「ひっかいて！」
私の声に反応してランスは体中に炎を巡らせたけど手遅れだった。『不意打ち』ほどじゃないけどブニャットの爪が確実にランスに留めを指した。
「ざーんねーんでしたー！このままあたしのブニャットでストレート勝ちかなー？」
「そんなことさせない！」
胸の痛みを我慢してランスをボールに戻した。ラミアはズバットに目をやられたからまともに戦えない。セニョールはまだ幼くて弱い。私は額から流れる汗をぬぐった。こうなったら……。
「出番よ！ナポレオン！」
「ポチャーッ！」
待ってましたとばかりナポレオンは張り切って戦場に出た。ナポレオンのレベルは１９。ブニャットより2つ上。相手は一度進化したポケモンだけどこっちのほうがレベルが高いからなんとか倒せるかもしれない。
それにしても手持ちのポケモンが半分もやられるなんて初めて

だわ。ヒョウタさんと戦ったときでさえ瀕死になったのは2匹までだったのに。

「あ、かわいい♪あたしほどじゃないけど」

「人間とポケモンでかわいさを比べてどうするのよ?!」

「ポチャポチャー!」

ナポレオンはマーズを手で指した。たぶん自分のほうがかわいいと主張してるんだと思う。どっちもどっちね……。

「『往復ビンタ』!」

「『はたく』のよ!」

ブニャットは肉球のついた前足でナポレオンをビンタしようとした。ナポレオンはそれを『はたく』で迎え撃つ。ポッチャマは陸ではのろいけどそれは主に足のせい。手の動き自体はそこまで遅くない。高速で動く2匹の手。『往復ビンタ』は『はたく』で相殺された。

「『水鉄砲』!」

「『不意打ち』!」

全体的な速さではブニャットに敵わなかった。ナポレオンはブニャットの斬撃で壁までふっとばされた。

「ボチャッ……!」

「ナポレオン!」

図鑑がまた鳴り始めた。

タランタランタラン……。

自分のポケモンのHPが低いと鳴り出すイヤな警告のベル。

「やーだー。まだ生きてたのぉ?」

冗談なのか本気なのかわからない嫌みったらしい声でマーズはナポレオンをバカにした。

「ブニャッ……ブヒブヒッブッ」

マーズに釣られてブニャットまで笑い出した。ブタとネコが合わさったみたいなかわいくない声。

「ポォ……」

「ん？」
「チャーーーッ！！」
「ブニッ……」
プライドをキズつけられたのかナポレオンはすごい勢いで『水鉄砲』を口から吐き出した。ピンチになったら水タイプの攻撃力が上がる特性『激流』発動した。『波乗り』の半分の威力しかないし相手の弱点ではないけどそれなりにダメージを与えたはず。図鑑に表示されるブニャットのＨＰのゲージは緑からオレンジになった。やっとブニャットのＨＰを半分以上削れた。

＊＊＊

ナポレオンはゼエゼエ息を吐きながらブニャットを見て笑った。しゃべる余裕はないけど「どんなもんだい。ざまあ見ろ！」と言いたげだった。ブニャットは濡れた体を震わせた。水タイプが弱点ではないとはいえねこだから濡れるのは好きじゃないみたい。
「ブニャット」
「ブニャッ」
マーズは自分のポケモンがダメージを受けたのに興味なさそうだった。名前を呼ばれたブニャットは尻尾で体をごそごそすると木の実を出した。
「なっ！？」
青いオレンジみたいな実はオレンの実だ。正直食べてほしくなかった。だってその実を食べるということは回復することだから。ブニャットは木の実を口に放り投げムシャムシャ食べた。
「で、さっきの攻撃がなんだっていうの？」
勝機を掴んだと思った。もしかしたら勝てるかもしれないと。だけどブニャットのＨＰは回復してしまった。図鑑に表示されているＨＰのゲージがオレンジから緑色に戻った。そっちがそうくるならこっちは……。

「『不意打ち』！」
「ナポレオン！」
ブニャットが襲いかかってくる前にペットボトルをナポレオンにパスした。ペットボトルの中身は『おいしい水』。ナポレオンは何時間ものどが渇いていたかのように水をがぶ飲みした。『激流』で『水鉄砲』を打っても大したダメージを与えられないなら『波乗り』に賭けるしかない。
「ブヒッ！？」
ダメージを受ける覚悟で『おいしい水』を渡したけどなぜかブニャットの『不意打ち』は不発だった。
「ちっ」
マーズは舌打ちした。彼女にとっても計算外だったのね。しめた！
「『波乗り』！」
「『不意打ち』！」
「ニャッ！」
「ポチャッ……」
今回の『不意打ち』はナポレオンに当たった。上手くいけばＨＰがギリギリ残って『激流』の『波乗り』で攻撃できると私は踏んだ。祈るようにナポレオンと図鑑を見たけどナポレオンのＨＰゲージは減っていく一方で止まる気配がない。
「耐えて！ナポレオン！」
「無駄よ。倒れなさい！」
ナポレオンは必死で踏みとどまった。耐えた……！……と、思ったけどナポレオンの体がグラついた。
「ナポレオン！」
「ポ……チャ……」
ドサッ。
倒れた。ナポレオンは瀕死になってしまった。そんな……ナポレオン……！なにか言いたいけど声が出ない。なにを言えばいいのかもわからない。

「ナ、ナ、ナ……ナポレオーーーーーン！！」

叫んだら頬が濡れた。邪魔な涙。ナポレオンがよく見えないじゃない。私は倒れるようにナポレオンに触れた。ナポレオンは目を開けない。口は開いているけどしゃべる気配がない。

「ナポレオン！ナポレオン！」

「トレーナーさん……」

「ミ～……」

ナポレオンが倒れてしまった。初めて瀕死になった。キララ★もランスも初めて瀕死になったしビッパーなんて2度目の瀕死を経験した。でも辛い。それ以上に胸が痛い。最初にもらったポケモンだから？一番好きだから？一番信頼していたから？私はナポレオンを抱きしめた。

……バカだった。ナポレオンがレベル16になってから進化の予兆はあった。だけど進化させないほうが技を早く覚えるからわざと進化させなかった。その結果が私の腕の中で倒れているナポレオンだ。全部私のせいだ。トレーナーの私の責任……。

「大袈裟ねー。別に死んだわけじゃないんだから。既に3匹も倒れてんのにそれが1匹増えただけなんだから今さらじゃない？」

殺意を込めてマーズを睨んだ。確かに大袈裟かもしれない。他の3匹よりナポレオンの瀕死を悲しむだなんて……。だけど感情をコントロールできない。悲しくて悔しくてムカついて仕方がない。

「ごめんね……ごめんね、ナポレオン……」

涙と鼻水と格闘しながらナポレオンをボールに戻した。相手と相手のポケモンがムカつく。だけど一番ムカついているのは自分自身に対して。

『ポケモンバトルを……ジムリーダーをなめてもらったら困るな』

ヒョウタさんの言葉が頭に響く。なめてないのに。本気なのに。マーズとブニャットを倒せない……。目と鼻を腕でこすった。私が指名する次のポケモンは……。

「……クルル」

「クルーッ！」
ボールを投げずにクルル♪を開放した。下手に相手に近づかないほうがいい。さっきからブニャットには先手ばかり取られている。ならば先制攻撃で……！
「『電光石火』！」
「『不意打ち』！」
クルル♪は目にも止まらぬ速さで突っ込んだのにブニャットの爪のほうが先にクルル♪に当たった。先制攻撃が効かない！？
「クルッ……！？」
クルル♪はよれよれと私の元へ戻ってきた。翼が傷ついている。……これじゃあ飛べない！『翼で打つ』なんてことやらせたらクルル♪の骨が折れちゃう……。
「あんたのポケモンって遅いわね」
くっ……。
「『砂かけ』！」
「見苦しいわよ！『往復ビンタ』！」
「ニャーー！」
案の定ブニャットのほうが早かった。何回かビンタを喰らう合間にクルル♪はなんとか廊下にあった埃（ほこり）や砂をかけたけどやられてしまった。
「ありがとう……」
震える手でクルル♪を戻した。これで私の手持ちは残り2匹。
「……ラミア」
「グォ～」
今まで後ろでじっとしていたラミアが動き出した。廊下を進む振動が足に伝わってくる。
「目の見えないイワークでどう戦うっていうの？」
「私がラミアの目になる」
「あっそ……やってみなさいよ！」
ブニャットはマーズの指差す方向に向かって一直線に跳んだ。

「『ひっかく』！」
「『丸くなる』！」
岩タイプにノーマルタイプの技は効きにくい。それにラミアは体を丸めて防御力を上げてある。ブニャットはかすり傷程度のダメージしか与えられなかった。
「ちっ。防御力だけは高いのね！」
その通りだった。イワークは防御力が桁外れに高いかわりに攻撃力が低い。それにこんな建物の中じゃ得意の『岩落とし』も使えない。
「『催眠術』！」
「『嫌な音』！」
ラミアは尻尾で胴体を弾き不快な音を出した。私は耳を塞いだ。ライコちゃんも引きつった顔で耳を押さえた。セニョールの耳は見えないけど人間のように顔の真横にあるらしい。そこを2つのつぼみで必死で押さえているから。
「キ～～！う・る・さ～～～い！！」
ブニャットの『催眠術』はラミアの『嫌な音』でかき消された。
「斜め右に『体当たり』！」
「イワッ！」
ラミアは尻尾でブニャットを弾いた。頭から攻撃しなかったのは再び目を攻撃されることを恐れているのね。かわいそうに。図鑑に目をやった。再びブニャットのＨＰを半分まで削れた。
「なめるな！『不意打ち』！」
「『岩砕き』！」
『不意打ち』は避けられないと直感し攻撃を指示した。私のポケモンが唯一覚えている格闘タイプの技、『岩砕き』がブニャットに当たった。ノーマルタイプのブニャットにそれなりに効いたけどラミアが受けたダメージは予想以上に大きかった。ＨＰの3分の1を減らされた。ノーマルタイプの攻撃じゃないの……？
「悪……タイプの技……？」

「ご名答。やっと気がついたのお馬鹿さ～ん？」
マーズは顔を上げて目を私に向けた。明らかに私を見下している。
「あとお気づきかもしれないけど先制攻撃だから！」
片目を細くしたと思ったら大きく開いた。恐くて醜い顔。邪悪に満ちている。一瞬ひるんだけどすぐ我に返ってラミアに指示した。
「背中上半身から『体当たり』！」
「『不意打ち』！」
「フシャーッ！」
「グォオオオ！」
相手の来る方向がわかっても避けられない。『不意打ち』が当たったけどその攻撃のおかげで相手がどこにいるかわかる。『岩砕き』は力を溜めるのに少し時間がかかるから確実に当てるため『体当たり』を指示した。でもあまり効いていない。イワークほどじゃないけどブニャットの防御力は高い。ラミアがあと一撃でやられる。せめてやられるまえに相手に一矢報いらないと……！
「『岩砕き』！」
「だから遅いって」
ブニャットの両前足で切りつける『不意打ち』が決まった。イワークは土砂崩れのような音を立てて倒れた。

＊＊＊

「そ、そんな……ラミアまで……」
体中からどっと汗がふきだした。背中は汗でびっしょり。こんなに熱いのに寒気がする。敵の強さと負けたあと起こることが恐い。負けたら私とライコちゃんが出て行く約束だけどただで帰してくれるとは限らない。私の手持ちはもうセニョールしかいない。相手のブニャットは体力が半分しか残ってないとはいえ勝てるの？あんなに強力な技を使うのに。
「ミ～。ミ～～！」

セニョールが私のブーツを引っぱった。主張している。「ぼくもたたかう」と。こんな小さな子に頼るしかないだなんて……。泣きそうになるのをぐっと堪え、乾いた口から言葉をつむいだ。

「ライコちゃん。私の後ろに隠れて」

「え？」

疑問に思うライコちゃんをよそに彼女を私の背中へと押しやった。

「私から離れないで……ここは任せたわ、セニョール」

「ミー！」

セニョールは勇ましく返事をした。今まで見たどの表情より真剣だった。真面目なセニョールは悪事を働くギンガ団を許せないみたい。そんなセニョールはマーズには滑稽に見えたのか笑い出した。

「アッハハハハ！そんなベイビィポケモンで勝てると思ってんの？」

「やってみなきゃわからないでしょ！」

「ミー！」

「ブヒッ！ブヒッブニャッ！」

ブニャットまで釣られて笑った。レベル17対レベル14のセニョール。レベルも能力も相手のほうが上回っている。勝てる自信がないけどそれでも負けるわけにはいかない！

「遊んでおやり、ブニャット！」

「『しびれ粉』！」

ブニャットはフサフサした尻尾の先で『往復ビンタ』を繰り出してきた。

「ミッ！」

「我慢して！」

セニョールは『往復ビンタ』を食らいつつ隙が出来るのを待った。4、5回ビンタされたあとセニョールはつぼみから『しびれ粉』を憎らしい顔をしたねこに吹き付けてやった。

「ブニャッ！」

顔面に『しびれ粉』を浴びせられたブニャットは咳き込んだ。間違いなく麻痺したわ。くしゃみと咳を交互に繰り返したあとブニャ

ットはセニョールを威嚇した。
「ブシャーー！」
「なにやってんの。さっさと攻撃して。『ひっかく』！」
「セニョール！木の実よっ！」
私は行く先々で拾った木の実のうち青いのを健気に戦うマタドール（闘牛士）に投げた。ブニャットが先程食べたのと同じオレンの実だ。
「ミッ」
セニョールは木の実をつぼみのついた手で器用に受け取ると一瞬で平らげた。皮を残して。ブニャットが跳びかかってきたけどセニョールはそれをひょいと避けブニャットはオレンの実の皮ですべって転んだ。
「ちょっとー！なにやってんのよ。役立たず！」
「『吸い取る』！」
ブニャットがお腹を出して倒れているうちにセニョールは遠距離からＨＰを吸い取った。残念だけど思っていたより威力は低かった。威力が２０しかないのがいけないのかしら。タイプ一致で少しは威力が増しているまずなんだけど……。
「こざかしいわね。今度こそひっかきなさい！」
「ブニィイイ！」
眉間にしわをよせたブニャットの『ひっかく』が当たった。飼い主と同じように怒ってる。
「ミッ」
「セニョール！」
セニョールが私の足元まで転がってきた。ＨＰが半分以上減った。急所に当たったんだ！
「トレーナーさん！セニョールがっ……」
「うっ……」
ライコちゃんが私の足にすがりついた。……わかってる。ただでさえ状況が悪いのにもっとひどくなったって。最後のポケモンは今

や瀕死の一歩手前。図鑑の警告音が私をあせらせる。やばい……やばいやばいやばいヤバイ！ダメ……負けちゃダメ……。

「言っておくけどあんたなんていつでもやっつけられるんだからね。『不意打ち』の威力見たでしょ？でも一発でやられたらつまんないから遊んであげてるの。優しいでしょ？」

「あなたってひどい！さいあく！」

「ポケモンも持ってないおチビちゃんは黙ってなさい」

ライコちゃんの腕の力が強くなった。頼りにしていたトレーナーがやられかけているんだもの。当然よね。

「大丈夫……大丈夫だから……」

不安をやわらげようとライコちゃんの頭をなでた。だけど私の手は震えている。「悪い奴らなんてやっつけてあげる」って言ったのに。

涙をこらえていたらめまいがした。頭がぼうっとする。視界がはっきりしない。フラつくなかギンガ団の下っ端の姿が目に入った。銀色の制服が目の前で黒く染まっていった。やがてぴったりフィットしていた制服は少しダボダボになり胸に赤い「R」が浮き出てきた。ダメ……こんなロケット団みたいな奴らに負けるわけにはいかない……！

「セニョール！」

「ミー！」

ライコちゃんは驚いて手を離した。やられかけているセニョールのどこに大きな声を出す力が残っていたのかわからなかったけどこの際気にしないことにした。しゃがんでセニョールに最後の『おいしい水』を飲ませると私たちは同時に立ち上がった。

「ちっ……諦めの悪い小娘ね。『ひっかく』！」

「これを飲んで！セニョール！」

私はカプセルに入ったいくつかの錠剤を取り出した。ブニャットが至近距離に入る前に水色の錠剤の入ったカプセルを開けてセニョールの口に流し込んだ。

「ミ、ミミミミミ～！」
セニョールは足をバタバタさせるとひっかいてきたブニャットを猛スピードで避けた。
「なにっ！？」
「ブニャッ！？」
セニョールは廊下をがむしゃらに走り回った。まるで走るのを止められないみたいに。
「あんたなにしたの？！」
「さあね。お次はこれよっ！」
私がさっきセニョールに飲ませたのは『スピーダー』という戦闘用アイテム。これを飲めば素早さが上がる。この効果はそのポケモンが入れ替わるか瀕死になるまで続く。次に私が選んだのは青い錠剤だった。
「『往復ビンタ』！」
セニョールが攻撃を喰らう前に私はカプセルを開けセニョールに向かって投げた。セニョールは開いたカプセルを口で受け止め上を向いて一気に飲み干した。
パパパン！
ブニャットの『往復ビンタ』がセニョールに3回ヒットした。でもセニョールはケロリとしている。
「ミ～？」
セニョールは不思議そうな顔をした。「それだけ？」ってブニャットに訊いている。今飲ませたのは『ディフェンダー』。防御力が上がる薬。何人かの男の子のトレーナーと戦ったとき「余ってるからあげる」と言われてもらった戦闘用アイテム。まさかこんなところで役に立つだなんて！
「キ～～～！強気になっちゃって！そんなに『不意打ち』を喰らいたいの？！」
「やれるものならやってみなさいよ。『不意打ち』」
「ぐっ……」

私は確信していた。もうブニャットは『不意打ち』を使えないと。威力が高くて先制攻撃できる『不意打ち』。だけどこの強力な攻撃は2回くらい外れた。きっと発動するには条件がある。相手のポケモンが攻撃しようとしているときにしか当たらない。だってナポレオンのＨＰを回復させてるときは隙だらけだったのに不発だったのよ？強力でトリッキーな技には副作用や条件がある。それにさっきまであんなに『不意打ち』を使っていたのにセニョール相手に使ってくる気配はない。きっとあんなに威力の高い技、そう何発も打てないんだわ！もう１０回くらい使ったからこれ以上『不意打ち』できないのよ！

「そんなハッタリ、もう通用しないわ！」

私は最後のカプセルの中身をぶちまけた。赤い錠剤が宙に舞う。セニョールはそれらを一粒一粒緑色の光で捕らえて自分の口へと運んだ。『吸い取る』は本当に役に立つ技だわ。攻撃力が上がる『プラスパワー』を一粒残らず飲むことができた。

「『居合い切り』！」

セニョールは２つのつぼみに力を込めてブニャットを横から斜めに切った。ラミアの『嫌な音』を聞いたブニャットのことだわ。防御力が低くなったはず。『居合い切り』をもろに喰らったブニャットだけどまだ倒れない。手ごたえはあったけどブニャットを倒すには不十分だった。くっ……まずい……反撃される！

「残念！そんな一時的なドーピングじゃぱわー不足よっ！」

「ブニャーーッ！」

ブニャットはセニョールめがけて爪を立てた。ところがセニョールが目の前にいるにもかかわらず『ひっかく』は大きく空振りした。

「なにっ！？」

セニョールが避けた……いや、ブニャットが外したのね！クルル♪の『砂かけ』のおかげだわ！今までブニャットの攻撃が何回か当たらなかったのも『砂かけ』が効いていたせいだったのね！

「ミーーーッ！」

セニョールは反対側に回り込むとつぼみの生えた腕を頑丈に絡ませた。2回目の『居合い切り』……！

ズシャッ……。

セニョールの渾身の一撃が放たれた。ブニャットはうめき声を上げることさえできずに横に倒れた。うそ……すごい……！

「まさか！負けるだなんて！？」

マーズは座り込んだ。……勝った！本当に私勝ったんだ！

「やったわ！セニョール！ブニャットを倒したわ！」

「ミ～～～♪」

セニョールはぴょんぴょん跳ねた。5匹の仇を討てたんだもの。うれしくてうれしくて仕方ないんだわ！

「ありがとう！セニョール！」

「ミーー♪」

セニョールが胸の中に飛び込んできた。私は小さな英雄をしっかり両腕で抱きとめた。

「さあ。約束通りここから出てってもらうわよ！」

「出てって！」

ライコちゃんも強気になった。敗者は潔く去ってほしいわ！

「おやおや。子どもに負けるとはの」

今まで勝負を観戦していただけの老人がマーズへ歩み寄った。今度はこの老人が挑んでくるんじゃないかと警戒したけど老人の腰にも白衣のポケットにもボールは入っていなかった。

「……まあいいさ。電気はたっぷり頂いた。これだけあれば相当すごいことが出来るはず。ボスに認められるほどの天才プルートにはわかるよ。さあさ、マーズや。ここはひきあげるとしよう」

「ウルサイわね！あたしに命令していいのはこの世界でボスただ1人なの！最近仲間になったくせに偉そうにしないでよね！」

私は2人を見守った。下っ端の団員たちはどうすればいいかわからず幹部の命令に従うしかない。私は一刻も早くこの2人と残りのギンガ団が去ることを願った。

「じゃ、あたしたちはひとまずバイバイしちゃうから……と、そのまえに」

マーズはブニャットのお腹に一蹴り入れた。ブニャットは辛そうにブヒッと鳴いた。なんてことを……！

「役立たずのポケモンはボールに戻して……あたし自身の手であんたを成敗しちゃう！」

私は身構えた。団員たちが私たちの周りを囲みはじめる。私はライコちゃんと後ろへ下がっていったけど背中に壁に当たった。左には窓があるけどここは2階。飛び降りたらケガしちゃう……。セニョールが私たちの前に立って威嚇した。

「ミー！」

「そんな小さいポケモン一匹じゃ大勢の人間に敵わないわよ」

マーズは鼻で笑うと視線を私に向けた。

「それにしてもあんたってムカつくのよね。今はまだあたしのほうがかわいいけど将来あたしのライバルになりそう。今のうちに台無しにしておくわ」

「やめろ！その子たちに触るな！」

奥の部屋から声がした。ライコちゃんのパパだ。だけどイスに縛られたままだからどうすることもできない。

「見せしめにあんたの娘も殴ってやるわ」

「やめろ！ライコーーー！！」

「パパーー！！」

私はライコちゃんを壁際に寄せて抱きしめた。せめてライコちゃんだけでもキズつけないように。もうすぐ襲ってくるであろう痛みを覚悟して目をつぶったその刹那……。

パリーン！

窓が割れた。ガラスの破片が辺りに散らばる。顔を向けてないからわからないけど紺色のエネルギー球体が横を通り過ぎた。エネルギーは壁に当たって弾けるとその場に振動が広がった。反対側の壁に当たったはずなのに肌がピリピリする。振動が体内に伝わるくら

いだった。
『……かっ！……っ……！……る！』
誰かの声が聞こえた気がした。でもよく聞こえない。
「な、なに！？」
マーズの焦った声が聞こえる。ギンガ団の間でどよめきが走る。
「ポピ～」
窓から紫色の風船みたいなポケモンが次々と出てくる。なにこのポケモン？助けてくれるの……？
「あっ！フワンテだ～！」
「フワンテ？」
フワンテと呼ばれたポケモンたちで廊下は次第にいっぱいになっていく。最初はムックル、その次はイワーク、三番目の発電所のパニックはフワンテによって起こされた。
「ちっ。今回は見逃してあげる！覚えてなさいっ！」
マーズが撤退を宣言するとギンガ団は去っていった。フワンテたちにあちこち突っつかれながら。
「ライコっ！そこの君！大丈夫かいっ？」
「パパ～～！」
ライコちゃんとパパは抱き合った。感動の親子の再会ね。どうやらフワンテたちがライコちゃんのパパを縛っていた縄を外してくれたみたい。ライコちゃんは今まで我慢していた涙を解放するように泣きはじめた。

第３０話　集団いじめ　（後書き）

みなさんこれから印刷機を見て笑わないように気をつけましょう（笑）。
原作でブニャットは『辻斬り』を使った気がするのですが攻略サイトでは『猫騙し』でした。はて・・・？
ブニャットは『辻斬り』は覚えませんが『不意打ち』は覚えられるので『不意打ち』を使わせてみました！
私はマーズのブニャットにかなりてこずりました。鍛錬不足だったのでしょうか？（笑）

第３１話　真夜中に鳴く鳥（前書き）

『ハクタイの森』イベント、スタート！

第３１話　真夜中に鳴く鳥

私たちは畳（たたみ）の上に座っていた。お菓子とは違う甘い香りがほのかに匂う。スイセンの匂いだ。あの人はとなりでスイセンを生けている。優しい眼差しでスイセンを丁寧に扱っていた。ときどきどのスイセンを使うか迷っていたけど、彼女の手によって花たちは見事な芸術品へと生まれ変わっていた。綺麗に切りそろえられた髪。落ち着いた色合いの袴（はかま）。彼女の仕草の一つ一つが上品でまるで真夜中に揺れる桜のようだった。

「いいなぁ……□□さんは女らしくって……」

□□さんは手を止めた。どうしたの、と訊きたそうに小首をかしげた。やっぱり綺麗だ。４、５歳違うだけでこんなに大人っぽくなるのかな。大人っぽさの間にも小さな女の子のような愛らしさがある。まるでお人形さんみたい。がさつな私とは全然違う。

「△△に女らしくないって言われたんです。私も□□さんみたいにおしとやかになれればいいのに」

顔は中の中。身長は平均。胸のサイズも……まあ、普通かな。性格は明るくて負けず嫌い。正直男の子の目から見たらかわいくないかも。私も□□さんみたいに綺麗でおしとやかだったら△△も私を好きになってくれるかな。

少し泣きそうになって顔をそらした。言いたいことだけ言ってそっぽを向くだなんて私は子どもだ。

「●●さんは十分かわいいと思いますよ」

後ろから優しい声が聞こえてきた。そんなことない。私は自分勝手で、負けず嫌いで、素直じゃなくて、全然かわいくない……。

＊＊＊

霧が晴れるように夢から覚めた。目を開けたら真っ白な天上が目に入った。ここは私の部屋じゃない。トレーナーズスクールでもない。民宿くろがねでもない。ここは……どこ？たしか私は発電所を出たはずじゃ……？

「ポチャチャ！」

「トレーナーさん！」

両耳から異なる声が入ってきた。右側にはまくらのとなりにナポレオンが、左側にはライコちゃんとフワンテがベッドの横から私を見ていた。

「ライコちゃん……？」

「よかった！気がついたのね！はつでんしょを出たらトレーナーさんがたおれていたの！だからパパとおまわりさんがトレーナーさんをびょういんまではこんでくれたの。あのときおまわりさんと花やのおねえさんがかけつけてくれてほんとうによかった！」

私はまばたきした。そっか。私、気絶（きぜつ）しちゃったんだ。親子の再会に水をさしたくなくてこっそり発電所を出たのに倒れて迷惑（めいわく）かけちゃうだなんて本末転倒（ほんまつてんとう）だわ。

寝返りを打ったらナポレオンと目が合った。ナポレオンは心配そうな目で私を見ている。……安心させなきゃ。もう大丈夫だよ

って。

「おはよう。ナポレオン」

私が言ったのはそれだけだった。そのたった一言でナポレオンの表情が９０度変わった。

「ポッ、ポポチャポチャポチャ！ポチャチャチャマポッチャ、ポッチャマ！」

笑いがこぼれた。はいはい。「し、心配させないでよね！これでもあんたは私のご主人様なんだから！」とでも言ったのかな。あいかわらず脳内ではなぜか女言葉に変換しちゃうけど。

「あら？お目覚めですか？」

知らない人が病室に入ってきた。薄桃色（うすももいろ）のポケモンとともに。

＞ｉ９２６２―６９９＜

まず一番最初に目に入ってきたのは緑だった。白い白衣から見える長めのニットワンピース。生まれたての若葉のように緑色の長髪。生まれたての若葉のように緑色の長髪は三つ編みされていて右肩から垂れ下がっていた。背が高くて大人っぽい。とても優しそうな顔をしている。夢の中で出てきた少女に似ているけどどちらかと言うと私のママに似ている。目元がママにそっくりだもの。

「初めまして。あたしの名前はモミ。ここの診療所でお手伝いをしているの」

モミさんはにっこり笑って私の手を取った。脈を図ってるんだ。

「モミさんのパパとママはおいしゃさんなの。モミさんはマッサージし。アロマセラピーをつかったマッサージがとくいなの」

モミさんからハーブの香りがした。やっぱりママと同じ癒し系だ。ママは百合の香りだけど。

「ラッキー」

モミさんと一緒に入ってきたポケモンはスイセンの入った花瓶に水を足した。名前はラッキー。薄桃色の丸い体に三つに分かれた細い耳がついている。その姿はまるでヒラヒラした飾りをつけたピンク色のタマゴみたいだった。お腹にはポケットがあって中にタマゴが入ってる。めずらしい……。野生のラッキーはなかなか見つからないのに……。シンオウ地方にも生息しているのね。

「……って寝てる場合じゃないわ！早く次の町に行かなくちゃ！」

「ポチャッ！？」

私はナポレオンを抱えてベッドを飛び出した。窓際に置いてあるバッグを開いて中身を確認した。ビッパー、クルル♪、キララ★、セニョール、ラミア……全員いる！

「勝手に倒れてすみません。ご迷惑をおかけしました！もうちょっとゆっくりしたいところですが私にはやらなければいけないことがあるんです。だから行かなければいけません。治療費はいくらでしょうか？」

興奮して早口で話しちゃった。モミさんとライコちゃんとラッキ

ーはきょとんとしていた。

「治療費はけっこうです。あなたはギンガ団から発電所を救ってくれた恩人ですから。それくらい元気ならもう退院しても大丈夫ですね」

ラッキーは頷いた。

「ラッキー♪」

私はふう、とため息をついた。よかった。ダメ押しされると思った。意外とあっさり退院許可出してくれたし治療費がいらないなんてラッキーの言うとおりラッキーだわ。……まあ、ラッキーの場合鳴き声が「ラッキー」だから「ラッキー」って言っただけだけど。

「ヒカリさんでしたっけ？あなたが倒れたのは疲労が原因のようです。フタバタウンから来たと聞きましたがもしかして旅のペースが速すぎたのでは？」

「うっ」

図星だった。ほとんど運動したことがないのに旅に出たから急に体を動かすことになった。まだ体が完全に慣れてない。コトブキシティに泊まった日は大丈夫だったけどラミアと戦った日は疲労がすごかった。ヒョウタさんと戦った次の日も筋肉痛がひどかった。今はどこも痛くないけど……。発電所のときは無茶をしちゃった。『クロガネゲート』を通ったあとコトブキシティでギンガ団と戦ってさらに『荒れた抜け道』を抜けた。フラワーショップ『色とりどり』で少し休んだとはいえそのあとすぐ『谷間の発電所』に特攻してぶっ倒れたってわけ。よく考えたら最悪。

でもそれくらいがんばって進まないとジュンに置いてかれちゃう。ジュンにだけは負けたくない。誰にも負けたくないけどジュンに一番負けたくない。ジュンに負けたら他のどのトレーナーに負けたときよりくやしくなる。それくらいジュンの存在は大きい。私は知識によく頼るけどジュンは本能で戦っている。そんな気がしてならない。もしかして私よりジュンのほうがポケモンに才能があるかもしれない。……負けたくない。ジュンに自分より下だと思われたら捨てられるかもしれないもの……。

「トレーナーさん。『ハクタイのもり』に行くにはもうおそいと思うよ」

「えっ？」

私は窓から見える空を見た。空はまだ水色だった。壁に掛かっている時計を見たら3時だった。まだ大丈夫だと思うけど……。

「ライコちゃんの言うとおりです。『ハクタイの森』は云わば天然の迷路です。木立が立ち並ぶ複雑な道は長く地元の人でないと1日では抜けられません。明日の早朝に出ることをお勧めします」

モミさんは真剣な顔で言った。ドラマで医者が患者にドクタースストップをかけるときの顔と同じ顔をしていた。

「は、はい……」

うう……私……方向音痴だからどんなに早くハクタイの森に行っても3日はかかるかも……。

「今晩もここに泊まってもらっても構いません。それよりお腹空い

ていませんか?今から食事を運びますね。ライコちゃんの分も持ってきますね」
「わ～い♪」

モミさんとラッキーはおじぎをして部屋を出て行った。ライコちゃんはニコニコしながら私に言った。

「モミさんのクルミパンおいしいんだよ!さっきやさいスープ作ってたからそれももってくるかも」
「じゃあ期待してもいいわね」
「うん!」

食べ物の話をして元気が出たけど問題は残ったままだった。私…どうすればハクタイの森を抜けられるかしら……?

『4月7日　木曜日

3日間お世話になった民宿くろがねを出て私はハクタイシティに向かった……はずなんだけど207番道路からハクタイシティに向かうのは無理だった。砂の坂は急で足場が不安定だから村一番足が速いジュンでも登れなかった。イワークのラミアでも崖のてっぺんまで届かなかった。ジュンは坂の道をさっさと諦めて遠回りする道を選んだ。

いったんコトブキシティに戻ろうとしたら野性のポニータを見かけた。ポケモンバトルで弱らせて捕まえようとしたけど良心が痛んだからクルル♪にスカウトさせちゃったwそれで仲間にするのに成功しちゃったからビックリ!クルル♪のスカウト方法がよかったのかしら?仲間にしたポニータはメスだった。立派な角を持つギャロップに育ってほしいという思いから「槍(やり)」を意味する「ランス」と

名付けた。素早さと攻撃力が高いランスは戦力になると思うわ。

ランスに乗ってクロガネゲートを抜けたらコトブキシティ付近で趣味の悪い服装の人たちと戦っているコウキくんとナナカマド博士を見かけた。苦戦しているようだったから助太刀したわ。コウキくんのアポロン（ヒコザル）とラミアのチームワークで見事謎の集団を撃破！ギンガ団と名乗った敵は意味不明の捨てゼリフを吐いて撤収した。……なにがギンガ団よ。あんな白黒灰色の服を着た奴らなんて印刷機で十分よ！

名残惜しそうなコウキくんと真面目な博士と別れて私は『荒れた抜け道』を抜けてソノオタウンについた。そのときは既に夕方だった。フラワーショップ『色とりどり』でくつろいでいたら女の子、ライコちゃんが泣きながら店に入ってきた。ライコちゃんからギンガ団が発電所を乗っ取り、彼女のパパが捕らわれの身になっていると聞いた私はすぐさま発電所に向かった。

ライコちゃんを変装させ、姉妹のふりをした私たちは事故を装って発電所に侵入した。ラミアに乗って疾走する私たちは突如ズバットに道を阻まれてしまう。私たちを止めたのはギンガ団幹部のマーズという少女だった。私より年上で性格の悪いマーズのブニャットに私は苦戦。キララ★、ビッパー、ランス、ナポレオン、クルル♪、ラミア……全員倒されてしまった。最後に残ったのはライコちゃんに預けていたセニョールのみ。ブニャットの『不意打ち』に追い詰められたけど私は戦闘用アイテム『スピーダー』『ディフェンダー』『プラスパワー』を駆使してなんとか倒した。

マーズとのポケモンバトルに勝ったけどギンガ団は腹いせに私を殴ろうとした。マーズと団員たちに囲まれ絶対絶命！大ピンチ！殴られることを覚悟してライコちゃんをかばったら窓が突然割れた。

窓から出てきたのは野性のフワンテの大群！ライコちゃんの友だちのフワンテたちが助けにきてくれたの！フワンテはゴースト・飛行のタイプを持つポケモンだからきっとゴーストタイプ最強の技『シャドーボール』で窓を割ったのね。再会を喜ぶ発電所の親子。私は2人の邪魔をしないようにそっと発電所を出たけど外に出たとたん意識が遠くなった……。』

日付が変わって土曜日の9日になった。昨日はリハビリ代わりにモミさんと一緒にハクタイの森の入り口付近でポケモンを捕獲した。運動して疲れたおかげで昨夜はぐっすり眠ることができた。ライコちゃんからあとで聞いたけど昨日起きたとき筋肉痛がなかったのはモミさんがマッサージしてくれたおかげらしいの。なにからなにまでお世話になってはずかしいな。

それにしても一昨日ライコちゃんが言ってた「あおくてくろいひと」が気になるわ……。助けてくれたお礼としてクレヨンで書かれた「あおくてくろいひと」の絵をもらったけど服装がクロガネ炭鉱ですれ違った男の人とそっくりだった。あの男の人……どこかで会ったことがするんだけど誰だろう？なんだかなつかしい感じがする。

「ギンガ団ってひどいわね。ライコちゃんのお父さんを監禁したり発電所の電気を奪ったり……。発電所の内部がところどころ壊れているのもギンガ団のせいなんでしょ？いったいなにが目的なのかしら」

モミさんに話題を振られてドキッとした。発電所を占拠したのはギンガ団だけど内部がところどころ壊れたのは私のせいだわ。廊下をギリギリ走れる大きさのイワークに乗って暴れながら進めばあちこち壊れて当然だった。電灯は割れてるし壁は砕けていて廊下は擦

り切れて傷だらけ。しかも私のイワーク（ラミア）の性格はわんぱく。クロガネ炭鉱でラミアの暴れっぷりは実証済みだった。警察に事情聴取されたときはライコちゃんと口裏を合わせて全部ギンガ団のせいにしちゃった。罰金を払うとしたら１００万円で足りるかしら？

「さ、さあ……」

私の顔、ひきつってないよね？後ろを歩いているナポレオンまでそわそわしてる。幸いなことにモミさんもラッキーも私たちの動揺に気づかなかった。

「まあ……悪人が考えることなんてわからないわよね」

モミさんは１人で勝手に納得した。短い間とはいえ考え事をしながら歩いていたのに道に迷う様子は全くなかった。よっぽどハクタイの森を歩き慣れているんだわ。ゆったりしたワンピースにカーディガンという格好をしているけどモミさんはきっとアウトドア派。野菜と花を自家栽培（じかさいばい）しているから仕事をしているとき以外はほとんど外で過ごしていると思う。その証拠にモミさんが履いているのはきれいなハイヒールではなく使い古したブーツ。私も見習わなきゃ……。

「そろそろお昼だし休憩（きゅうけい）する？」

モミさんは普通の話し言葉で話しかけてきた。初めて会ったときは敬語（けいご）で話しかけてきたけどモミさんに敬語なしで話すように頼んだからだ。私は引き続き敬語を使ってるけど。だって私のほうが年下だもん。退院したし医者のお手伝いと患者という関係はなくなったから代わりに友人関係を結んだわ。

「そうですね。モミさんの作ったサンドイッチ食べたいですし」

ナポレオンはバスケットをちらちら見ていた。ナポレオンもおなかが空いたのね。私たちの会話を聞いたラッキーはポケットからシートを取り出した。2人と2匹でシートの角を取って地面に広げた。今か今かとバスケットを見ながら待つナポレオンをよそにモミさんと私はゆっくりブーツを脱いでおしぼりで手を拭いた。

「まるで遠足みたいですね！」

「本当だね」

ハクタイの森を歩いて4時間。ハクタイシティへの道はまだ半分以上もある。いつなにが起こるかわからないし休息は大切よね！

＊＊＊

ハクタイの森に入って7時間くらい経った。ところどころ休憩を取りながら私たちはようやく森の奥までたどりついた。普通の人なら森の中で14時間以上彷徨うことになるけどモミさんは8時間で抜けられると言うからすごいわ。もっとも、ソノオタウンとハクタイシティに住んでいる人たちなら誰でも8時間以内で森を抜けられるらしいけど。

「あと1時間だからがんばりましょうね」

モミさんはシートを畳(たた)みながら言った。これが森の中で取る最後の休憩だった。あとはひたすら出口を目指して歩くだけだわ。たまに襲い掛かってくる野生ポケモンを退けなきゃいけないけど。

「はい！」

もうすぐハクタイシティに着くと考えると自然と声が明るくなった。緑が多いのはいいことだけど辺り一面の緑には飽きてきた。そろそろ人間の築いた文明の世界に戻りたい。ナポレオンも最初は道草をするくらい森の道を楽しんでいたけど今じゃ周りの植物に見向きもしない。再び歩き出そうとしたらやかましい鳴き声が私たちの鼓膜を刺激した。

「カーーッ！カアアアッカアアーカアアアアーッ！！」

耳が痛い。鳴き声に対する反応はそれぞれ違ったけど同じタイミングで声が出た。

「えっ！？」
「うっ」
「ポチャッ！？」
「ラキッ……？」

これに似た鳴き声をテレビで聞いたことがある。カラスの声だ。普通のカラスより声がでかくて力強いのはポケモンだからだ。だけどその声は切羽詰っていて絶望していた。昔アキラから聞いたことがある。ジョウト地方に多く生息するカラス型のポケモンのことを。

「ヤミカラスが助けを求めている……」
「えっ？」
「……行かなきゃ！」
「ポチャポチャッ！」
「ラキーッ！」

モミさんが話についていけないけど説明してるヒマはない。ヤミカラスは今も叫んでいる。私は走りながらモミさんに説明することにした。

「待って……！ヤミカラスって何ポケモン？どうして助けを求めてるってわかったの？」

さっきおやつを食べたばかりだから走るのが辛い。ドロドロになったクッキーが私たちの胃の中でひっくり返っていた。それでも走り続けなければならない。

「ヤミカラスは暗闇ポケモン！もうすぐ夕方だけど夜行性のヤミカラスが鳴くには早すぎます！なにかあったに違いありません！」

ラッキーとナポレオンはだまって先頭を走り続けた。ヤミカラスの言葉がわかるからなにがおこったか知ってるんだ。くわしいことはわからないけど助けを求めていることは一発でわかった。自分でもよくわからないけどわかった。あとはただの推測（すいそく）だった。

「カーッ！カーッ！」

幸（さいわ）い野生のポケモンは出てこなかった。それとも出てこないということ自体がおかしいのかしら？イヤな予感がする。

「カアアアアアアアアアッ！」

ヤミカラスは今まで聞いた鳴き声の中で一番大きな声を出したと思ったら不気味なくらい静かになった。まさかやられた……？！

「ここが近道よっ！」

モミさんとラッキーが木々の間を通り私とナポレオンはそれに続いた。獣道を抜けると見たくないものが目に入った。樹の根元に倒れているヤミカラスと目つきの悪いポケモンを従えたギンガ団がいた。

＊＊＊

樹の根元に横たわるボロボロのヤミカラス。空中で飛び続ける2匹のズバット。男たちの抱える2つの大きめの黒い模様入りのタマゴ。そして樹の上にある空っぽの巣。それらを見て瞬時になにが起こったのか理解した。コンビニで必ず見かける黒・灰色・銀色の機械を彷彿させる服を着た男たち……間違いない。この2人はコトブキシティと発電所に現れた……。

「印刷団！」

「えっ？」

「「違う！」」

ボケ担当の私とモミさんに印刷団の2人は見事なツッコミを入れた。

「ギンガ団だギ・ン・ガ・団！」

「コトブキシティでは世話になったな」

ギンガ団の2人は歯を剥き出しにして笑った。あいかわらず醜いわね。ありとあらゆる面で。

「同じ服着て同じカツラなんて被ったら他の団員と区別がつかないわよ。そこの童顔で背が低めの下っ端さん！」

「はいっ？！」

他の団員より背が低くて幼い顔をしている人は反応した。自分が背が低くて童顔だってことは自覚はしてはいるのね。

「あなたのことは『イン』って呼ぶわ」

「は、はあ？」

「そしてもう1人の目尻が濃いけどその他の顔のパーツが地味な人！」

「なんだとっ！」

こちらもすぐ応答したってことは自分の容姿がその程度だってことは認めてるわね。

「あなたのことは『サツ』って呼ぶわ」

「……は？」

そのとき倒れていたヤミカラスが鳴いた。

「カー……カー……」

静寂が森を包む。しばらくなにか考えていたギンガ団は口をそろえて文句を言った。

「『イン』と『サツ』って印刷から来てるじゃねーか！」

顔をしかめて怒る2人の顔はもはや悪のしたっぱではなく売れない漫才芸人だった。顔もちょうどインがボケでサツがツッコミ担当という感じに分かれていた。今は2人ともツッコミする側に回ってるけど。モミさんは私とイン&サツのノリについていけずたじたじ

していた。

「モミさん」

「んっ？」

私はヤミカラスとイン&サツが持っているタマゴを横目で見た。

「ヤミカラスをお願いします」

「……っ！？ええ！」

私はナポレオンに合図した。

「ナポレオン、ＧＯ！」

「ポチャーーッ！」

さっきから戦いたくてうずうずしていたナポレオンは勢いよく『水鉄砲』をズバットたちに向かって放った。１匹のズバットに『水鉄砲』は直撃し、もう１匹のズバットは間一髪で避けた。インは慌てたけどサツには余裕があった。攻撃が当たったのはインのズバットのほうね！

「いきなりかよっ。『噛みつく』！」

「『タマゴ爆弾』！」

ヤミカラスを手当てしていたモミさんはラッキーに命令した。ラッキーが投げたタマゴは無傷のズバットに当たり爆発した。

「モミさん！私のことは気にしないでください！」

「でも……」

「『超音波』！」

「ナポレオン！『鳴き声』！」
「ポッチャア♪」

ズバットが口から奇怪な音波を出したけどナポレオンのかわいい鳴き声で相殺された。

「ヤミカラスのことを第一に考えてください！」
「……はい！」

私はモミさんに私の意図が伝わったことを祈りながらインとサツと向き合った。

「2対1とは舐められたものだな！」
「あなたたちごとき私1人で十分ってことよ！」

ズバットたちは交互に攻撃してきた。1匹が攻撃してる間もう1匹は待機してもう1匹が攻撃するとさっき攻撃した1匹は下がる。これを延々と繰り返す2匹のズバットの攻防は優れてる。

「『吸血』！」
「『はたく』で応戦！」

血を吸おうとしたズバットをナポレオンははたいた。今の私の仕事はひたすら耐えること。ヤミカラスのために時間さえ稼げればそれでいい。

「行きますか、サツ先輩？」
「おうよ、イン！」

私がつけたあだ名は短時間で定着していた。インとサツは目配せ

するとズバットたちはナポレオンを中心に真逆の方向へ飛んだ。

「「ダブル『翼で打つ』！！」」

よけられない……！

「『水遊び』！」

ナポレオンは前後からズバットたちの片翼の翼で打たれた。ナポレオンは打たれる寸前に回転しながら水を噴出したけどズバットたちは濡れただけだった。

「ボチャッ……」

ナポレオンはせきこんだ。背中とお腹を翼で打たれてしまった。水攻撃はもうできない。

「フハハハハ！馬鹿かお前は？この場で炎タイプの技を弱める『水遊び』を使うとは！」

「毒・飛行タイプのズバットが炎タイプの技なんて覚えるわけねーだろ！よっぽどあせったのか？」

図鑑を確認した。どちらのズバットもＨＰは半分くらい残っていた。ナポレオンのＨＰは半分以下だったけど図鑑は鳴らなかった。ナポレオンはまだ戦えるけど……。

「戻って！ナポレオン！」

赤い光線が息の上がったナポレオンを吸い込んだ。ナポレオンをボールにしまうと2番手のポケモンを出した。

「キララ★！」
「コ、コリ～ン！」

控えめなキララ★はいつもの頼りない威嚇（いかく）をした。キララ★の下手な威嚇を見てインとサツは吹きだした。

「ブハハハハ！なんだその弱っちい威嚇は？」
「お前頭イカれたのか？」
「イカてるのはそんな格好したあなたたちのほうよ！」

私は右手でスナップをした。インドア派の私でも指をスナップして音を出すことはできる。ジュンにいざというときのための合図として叩き込まれたから。

「コ～～……リィイインッ！！」

キララ★の体から電気が放出された。さっきのスナップは『電気ショック』の合図だった。電気タイプが弱点でさらに体がぬれたズバットたちにはきつい一撃かも。笑いながら地面を転がっていたインとサツは命令するタイミングを完全に見失っていた。

「「ギィーー！」」

ズバットたちは見事感電し通常の『電気ショック』よりしびれた。焼き鳥店で出されても食べたくない肉、2丁（ちょう）あがりぃ♪
「ぐぬわあああ！なんてことだ！」

サツは髪をぐしゃぐしゃにした。インはサツをなぐさめるように言った。

「でもタマゴは我々の手に……ってあれ？」

地面に置いてあった2つの黒いもよう入りのタマゴは無地のタマゴと入れ替わっていた。1つのタマゴはモミさんの手に。もう1つのタマゴはコソコソ走るラッキーのポケットの中に入っていた。

「ラッキー。ラッキー」

そう。私の目的はギンガ団と戦いながらモミさんがヤミカラスのタマゴを奪還する時間を稼ぐことだった。思っていたより追い詰められた私は選手交代をしたわけだけどそのせいで戦いが早く終わってしまった。静まり返ったフィールドでみんなの目はただ1匹動くラッキーに向けられた。それに気づいてピタッと止まるラッキー。

「……ラキッ？」

ラッキーとモミさんと私はギクッとした。大きく口を開けてラッキーを見つめることしかできないイン。そんなインとは対照的にサツのこめかみと拳は震えていた。

「クッ……クフッ」

「せ、先輩……？」

私はキララ★に目配せした。

「そのラッキーを捕まえろおおおお！」

＊＊＊

サツは真っ赤な顔によせられるだけのしわをよせてラッキーを追いかけてきた。一応目力はあるほうだから余計恐い。キララ★はラッキーの前に出てサツをにらみつけた。

「コリ～ン……！」

目を吊り上げて低い声でうなるキララ★。でも怒りでぶち切れたサツの顔のほうがよほど恐く、キララ★は走るサツに吹っ飛ばされた。

「コリーーーン！」
「キララーーーーー★！」

キララ★は名前の通り空に輝く星になった。ほとんど沈みかけている太陽にキララ★の涙が星のようにきれいに反射した。

「ラッキー！走って！」
「クルル♪！キララを探して！」

急いでクルル♪をボールから出すとキララ★の捜索を頼んだ。ラッキーはモミさんのもとへ急いだ。私は赤白のボールを取り出すとサツの顔面目がけて投げた。

「喰らえ！モンスターボール！」
「そんなもの効くかあああああ！」

―めこっ。

ボールは当たった。……サツではなくインの顔に。運動音痴が災いして肝心のターゲットを外してしまった。

「スッボミ～♪」

発電所で活躍したセニョールがのん気にボールから出てきた。本当はランスやラミアを出したかったけど人間相手に火の馬や岩蛇を戦わす気にはなれなかった。

「『宿り木の種』！」

「ミー！」

気絶したインを踏んだままセニョールは種を投げた。『宿り木の種』は相手のポケモンに成長の早い蔓の種をからませ相手のＨＰを奪う技。種はサツの足に絡みついてサツの体力を吸い取った。これで少しは疲れて動きがにぶるわ。

「くそっ……こんなものっ！」

サツは伸びる蔓をやけになってちぎり、元凶の種をラッキーに投げた。

「かわすのよ！」

ラッキーは右にそれて回避した。だけど蔓の成長は思ってたよりが早い。『宿り木の種』はセニョールの体から作られたもの。動かせるのも止められるのも母体のセニョールだけ。

「セニョール！種を止めて！」

指示したけど手遅れだった。セニョールが慌てて『宿り木の種』の成長を止めたけどラッキーの足が蔓にひっかかってしまった。

「ラッキィイイ！」
「ラッキー！」

ラッキーのポケットからタマゴが飛んだ。モミさんは既にタマゴを持っているからキャッチできない。私は前へ出た。セニョールも駆け出した。全てがスローモーションで動くなかタマゴはゆっくりと落ちていった。あと数秒で私の手の中に収まる。そう確信したときサツがラッキーを踏み台にしてタマゴの落下を止めた。

「よっしゃーー！」
「ああっ！」
「ミーッ！」
「そんなっ！」

ヤミカラスのタマゴは再びギンガ団の手にに渡ってしまった。私はタマゴを奪い返そうとサツの腕を引っぱった。

「返してっ！」
「うるせーっ！」

―ガッ。

「うっ……」

地面に倒れた。頭を殴られたんだ。頭が痛い……肘（ひじ）で突かれたにしては痛すぎる。思考が上手く働かない。

「ちっ。お前のせいでヒビが入っちまったじゃねーか」

私の頭に当たったのはサツの持っていたタマゴだった。私を振りほどくときにぶつけたんだ。

「傷物はいらねーよ。そっちの女のタマゴをもらおうか！」

放り出されたタマゴを間一髪で私は受け止めた。サツはポケットから小さな機械を取り出した。あれはなに？見たことがないわ。なにかの機械のパーツみたいなものにアンテナとボタンがついている……そんな形だった。

「カチッとな！」

―ボムッ。

小さな機械は爆発すると同時に嫌な音を発した。それは音というより電波だった。煙で視界が遮られたら聴力に頼るしかない。

「モミさん！セニョール！ラッキー！」

「きゃーーー！」

「モミさん！」

煙をボウシではらった。煙が消えたときにはサツの姿も倒れているインもいなくなっていた。そしてモミさんが持っていたタマゴも……。

「私は大丈夫。でもタマゴがっ！」

くっ……！

「ランス！ラミア！」

私は未開封のボールを2個投げた。だけどボールは開かず地面に落ちた。えっ……？

「ボールが……開かない……」

モミさんの足元にサツが持っていた機械が落ちていた。機械はもう煙も電波も出していない。……やられた！あの機械は煙幕の効果だけでなくボールの機能を止める電波も発していたんだ！

「うあああああっ！」

―バキッ。

私は機械を思いっきり踏み潰した。だけどランスとラミアが入ったボールは無反応のままだった。

第３１話　真夜中に鳴く鳥（後書き）

←ブログにシェイミ型のケーキの作り方を載せました☆
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｓａｇｉｔａｒｉａｓｃｈｕ／１１５００５３５．ｈｔｍｌ
「Ｉ　？　ＳＨＥＩＭＩ」と書かれたケーキも作りました＾＾←
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｓａｇｉｔａｒｉａｓｃｈｕ／１２０６５５４７．ｈｔｍｌ
見たい方はどうぞ♪

（特別編）　第３１．５話　おかっぱの少女（前書き）

ナタネ「ジュンが出るからと言ってジュン視点で繰り広げられるとは限らないわよ！」

（特別編）　第３１．５話　おかっぱの少女

―アタシはお化けが大嫌いだ。

ポケモン　プラチナ　『長髪の美少女』　特別編　「おかっぱの少女」

　ホホホホホ！アタシはハクタイジムリーダーのナタネ！弱冠１６歳にしてシンオウ地方の草ポケモンのエキスパートよ。ポケモントレーナーの中でも特別な立場にいるアタシだけど悩みがある。　今アタシはハクタイの森の出口の近くにいる。木の壁の向こう側をちらりと見るとアタシは本日何度目になるかわからないため息をついた。

　ハクタイの森には苔で覆われた不思議な岩以外に名物スポットがある。その名も『森の洋館』。ハクタイの森一番のドッキリスポットで苔の岩より有名だった。ゴーストポケモンが出没する森の洋館は肝試しに最適だけど地元の人ですら近づかない。アタシだってそんな恐いところに用がなければ行きたくない。だけど夜な夜な聞こえてくる騒音、怪しい人影、果てには幽霊が出るとハクタイシティの人たちから苦情がきた。最近怪しい集団が各地で現れているということもありポケモン理事会はジムリーダーであるアタシに任務を与えた。

『森の洋館の騒ぎの原因を調査せよ』

　ハクタイの森はハクタイシティに隣接しており、ハクタイシティジムリーダーであるアタシの管轄だった。ハクタイシティで生まれ育ち、ここの地理に詳しいアタシが適任とされた。最もな話だけど……なんでアタシなのよーーー！！アタシお化けが苦手なのに！大体お化け関連ならゴーストポケモン使いであるメリッサさんが適任じゃない！同じジムリーダーでアタシより強いしお化けなんて

恐くないし霊感あるしアタシより適任よ！そりゃヨスガシティからここに来るにはテンガン山を潜らなきゃいけないけどさ……。

「……ロズレイド、良いこと思いついたわ」

「ロズ？」

アタシはお気に入りのポケモン、ロズレイドに話しかけた。両手に薔薇のブーケが生えた薔薇の戦士は一番アタシと付き合いの長いポケモンだった。

「洋館には入らず帰りましょ」

「ロズッ！？」

ロズレイドの目が一瞬大きくなった。こうなることはわかっていた。アタシは話を続けた。

「森の洋館に行ったことにすればいいのよ。報告書を提出して何もありませんでしたって言えばどうかしら？もしくはとんでもないポケモンが出たとか……。そうすれば理事会はアタシの手には負えないって判断してメリッサさんを向かわせると思うの」

ロズレイドは青い薔薇が咲いているほうの手を頭を押さえて考えた。しばらくすると両手を下ろして首を素早く横に振った。

「え～！？いいじゃない！それにロズレイドも本当は恐いんでしょ？」

「ロッ……！」

ロズレイドは肩を上げた。図星ね。ロズレイドはアタシに似てうっかりやだもの。何を考えているかアタシには筒抜けだった。

「さ～て、帰ろっか」

アタシはハクタイシティへ戻ろうとしたけどロズレイドがアタシのマントを引っぱった。その目は必死で逃げちゃ駄目だと訴えていた。

「いいから……アタシを……帰らせて……！」

ロズレイドはアタシのマントを放さない。しまいにはアタシたちはマントを綱引きのように引っ張り合っていた。

「あ～ん、もう！行きたければ1匹で行けばいいじゃない！」

マントを脱いで逃げようかと思った。だけど横から男の子の声が聞こえてきた。
「おい！」
「ミギャーー！！」
＞ｉ６１７１―６９９＜
で、出たーー！！お化けーーー！！ロズレイドの手が離れた隙に逃げようとしたけど再びマントを引っぱられた。足が進まなーーい！
「おまえがハクタイシティのジムリーダーか？」
お化けじゃない……？恐る恐る振り返ったらアタシのマントを掴んでいたのはアタシより背が低い金髪の少年だった。くせっけが強くて髪の毛をとかしているのか訊きたくなるような変な髪形だった。オレンジと黄色の横じまの服はどことなく水兵を連想させた。
「そ、そうだけど……」
よかった。お化けじゃなかった。少し落ち着きを取り戻したアタシはほっと息をついた。もっとジムリーダーらしくビシッと決めなきゃ！
「オレ、フタバタウンのジュン！さっきジム戦しに行ったらジムリーダーは任務で森の洋館に向かったって言ったから来たんだけど」
ジム挑戦者……！？しめた！これで町に戻る理由が出来た！ジムリーダーとしてジム挑戦者を待たせるわけにはいかない。緊急事態でもない限りジム戦を優先させるべきよね！
「ええ、そうよ。でもあなたがどうしてもジム戦したいなら仕方ないわよね。さっそく町に戻ってジム戦を……」
「でもおまえ任務があんだろ？そっちを優先しろよ。なんだったらオレが手伝ってやるよ！」
「へ？」
違う違うちがーう！！そんな親切いらないって！アタシは森の洋館には行きたくないの！
「この木が一番斬りやすそうだな。ナエトル！」
「ルー！」

影が薄かったのかそのポケモンの存在に気がつかなかった。ジュンという少年の足元には若葉ポケモンのナエトルがいた。茶色い甲羅を背負った陸亀の頭には立派な双葉がついている。アタシの持っているナエトルと同じ。

「『はっぱカッター』！」

シュッ。

ジュンのナエトルは頭についている双葉を放った。はっぱは森の洋館への道を塞ぐ木に当たったけどびくともしなかった。

「なんだってんだよー！」

あっけにとられるジュンを見てアタシはやれやれと思った。

「これだから初心者は……。いい？この細くて長い木はジャマギって言うの。それなりに硬くて普通に斬ってもすぐ再生しちゃう厄介な木なの。確実に斬るには秘伝技の『居合い斬り』を使わないと無理よ」

アタシは鼻をふふんと鳴らした。これでジムリーダーらしく振舞えたわね。

「おまえは斬れるのか？」

「当然よ。ロズレイド！」

「ロズ！」

ロズレイドは軽い身のこなしで青いブーケを振った。

スパッ。

沈黙を遮るようにジャマギが倒れた。さすが木を斬ることに特化した技だわ。こんなにきれいに斬れるだなんて。

「へえ～。すげーな。んじゃさっそく行くか！」

「ル～♪」

「え？」

し、しまった……。かっこつけたくてついジャマギを斬っちゃったわ！

「いやーーー！洋館には行きたくなーーい！！」

嫌がるアタシをジュンは引っぱった。後ろはロズレイドに押され

ている。
「ロズレイドーーー！あんたアタシを裏切ったわねーー！」
ロズレイドは口笛を吹いていた。アタシは迷惑なお人好しと裏切り者のロズレイドによって泣く泣く洋館の中へと引きずり込まれた。
＊＊＊
ああ、どうしてこんなことになったんだろう。アタシはただコンテストに出場するほど暇なメリッサさんに仕事をあげようとしただけなのに。洋館は昔からある古い建物で外も中もクラシックだった。由緒ある屋敷は暗くて汚れていたので返ってホラー度を増していた。やめてよ……洋式の建物も和式の建物も古くて幽霊が出そうで苦手なのに！
「お～い。階段上がるぞ～」
私を屋敷へと引きずり込んだ張本人はナエトルと一緒にのん気に進んでいる。ロズレイドは私を洋館へと押したくせに今はアタシの脚にくっついている。ああん、もう！やっぱり建物もインテリアもモダンが一番よ！幽霊が最も似合わない様式だもん。日本人形とフランス人形はきれいだけど不気味で嫌い！
「わ、わかったわよ！」
アタシはしぶしぶ階段を上がった。ロズレイドが脚にしがみついているせいで歩きにくい。もう……なんでジュンは平気なのかしら。階段を上りきったら大きな影が動いた。驚いて離れようとしたら影はアタシの動きに呼応するように動いた。
「ロズーーー！！」
「キャアアア！！お化けーーー！！」
アタシはとっさにジュンに飛びついた。影はバタバタ動いている。
「守って！アタシを守ってよーー！！」
「落ちつけ！それお前の影だぞ！」
ジュンくんはアタシを無理矢理振り払った。近くにいる人がジュ

ンだけだったのでつい飛びついてしまった。ロズレイドはアタシと同じくらいビビッてたしアタシより小さいから頼る気がしなかった。

「さっさと先行こうぜ。探検はまだ始まったばかりだー！」

アタシとは１８０度も違うテンションでジュンは意気揚々と進んだ。温度差の激しいアタシの苦労もまだ始まったばかりだった。

ベランダみたいな廊下を抜けるといくつものドアが並んでいた。正方形の木を並べて作られた床は何箇所か剥げている。ジュンは一番近くにあったドアを開けた。

「ここは物置だな」

部屋にはイスが積み重なり本棚や箱が置いてあった。ポケモンも人もいないことを確認するとアタシたちは部屋を出た。あっさりドアを開けてあっさり閉めるジュン。恐いもの知らずなジュンくんがうらやましい。アタシがドアを開けるとしたらすんごく時間がかかるだろうし閉めるときは大きな音を立ててしまうだろう。

たぶんこの廊下には個室が集まっている。ホテルみたいに廊下にドアがたくさん並んでいるから間違いない。次の部屋に向かおうとしたら何の前触れもなくアタシのうなじがひんやりした。アタシはダッシュでジュン目掛けてダイブした。

「ひいいいいい！お化けに触られたーーー！」

「ロズーーー！？」

「ただの水だろ！」

「ルー」

ナエトルはロズレイドに優しく話しかけた。「大丈夫だよ」と言っているのだろうか。それに引き換えジュンは不機嫌だった。

「オレにくっつくな！」

「そんなこと言われても……」

アタシだって本来こんな好みじゃない少年にくっつきたくない。でも恐いから仕方ないじゃない。

「まったく。本当におまえジムリーダーか？」

ジュンくんは横を向いていた顔を正面に戻し、思い息を一気に吐いた。うう……あきれられてる……。

「そのロズレイドもなんだか頼りないし……」

そう言ってアタシの足元にいるロズレイドを見ようとした彼の顔を見て絶句した。彼の顔があるべき所には紫色のガスに覆われた黒い球体があった。異常に白い部分が大きすぎる半円の眼と大きな口から覗く白い牙。彼の金色の髪もオレンジ色の瞳も見えない。彼の面影は0だった。

「お化けーーーー!!」

「へ?」

アタシは顔がまるっきり変わったジュンを平手打ちして胴体を蹴った。眼をつぶっていたけど手応えがあった。

「なんだってんだよー!」

変わった叫び声を聞いてアタシは我に返った。ジュンの顔は元に戻っていた。あ、あれ……?よく考えたらさっきの顔はガス状ポケモンのゴース。ゴーストタイプのポケモンはほとんどの物体をすり抜けるからそれを利用してジュンの顔に……しまった!

「ご、ごめん!ゴーストポケモンのイタズラだったみたい……」

「なんだってんだよー!ポケモンのくせにオレを盾にしたのか?許さねー!」

そう言い終わったと同時にどこからかピアノの音が聞こえてきた。廊下の奥から聞こえてくる。ピアノの音だけでなく歌声まで聞こえてきた。

ラ〜……ラ・ラ〜ララ〜♪

「ひいいいいい!」

「今度はピアノで恐がらせようっていうのか?冗談じゃないぜ!行くぞ!ナエトル!」

「ルー!」

だからどうしてこの人たちは平気なのーー?!さっき歩いた道に引き返そうとしたら手首を掴まれた。アタシも直行するのーーー!?

「うおおおおおおおおお！！」
「いやあああああああああ！！」
全く異なる意味合いで叫びながらアタシたちは床を疾走した。
ラ……ラ・ラ～ララ～♪ラ～ラ……ララ～♪
ピアノと歌声は奥の部屋から聞こえてくる。
「ここだ！」
バンッ。
ジュンは勢いよくドアを開けた。ピアノと歌声のコラボレーションは止まらない。
「やい！おまえか！？さっきオレたちにイタズラしたのは？！」
「ムウ？」
怪しく光っていたピアノはその輝きを失った。わかめのようにヒラヒラした濃藍の頭部に眠そうな赤色の瞳。首には半透明の赤紫色のビーダマのようなものがネックレスみたいにくっついていた。首から下には何もない。濃藍の生首と言ってもいい。
「ムウ。ムウムム～ム。ムムムムウマ。ム～ムム～ムム？」
「ミギャーーーーーーーー！！」
「ロズーーーー！！」
夜泣きポケモンのムウマだ！メリッサさんがムウマの進化系のムウマージを持っているから知ってる。ムウマージは三角帽子にローブを羽織っているような姿だから恐くないけどムウマは苦手！だって胴体がないじゃない！
アタシは逃げようとしたけどマントを掴まれた。
「おい！待てよナタネ！オレにイタズラをしたのはこいつか？」
「違うわよーーー！」
首を絞めないように首下にあるマントをひっぱりひたすら脚を動かしたけどジュンから逃れられない。年下なのに力が強い。
「そうか。わりぃ。ポケモン違いだった」
「ムウ～」
「ル～」

そう言うと丁寧にドアを閉めた。

＊＊＊

「礼儀正しいゴーストポケモンもいるんだな」

「イタズラ好きだろうが礼儀正しいだろうがゴーストポケモンはゴーストポケモンよ！」

「まあな」

アタシはため息をつくとジュンの服の裾を掴んだ。腕を組んだら怒るだろうし好きじゃない男の子の腕を組むのはもうやめようと思った。

「オレにくっつくなよ！ヒカリ以外の女にくっつかれてもうれしくないっつーの！つーかさっきからヒカリみたいにギャーギャー騒ぐなよ！迷惑なんだよ！」

ついにジュンが我慢できなくなって手を振りほどかれた。いきなりキレられても困る。しかも話の内容が見えない。

「わ、わかったわよ。ごめんってば！……でもヒカリって誰よ？あなたの友だち？」

アタシの問いにジュンは腕を組んだ。さっきまではあんなに怒っていたのに。

「ヒカリはオレの自慢の友だちであり幼馴染であり妹でもあり家族でもある！頭いいし顔も……かわいい部類に入るのか？そういえばヒカリよりかわいい女って見たことないな」

ジュンは得意げに答えた。よくわからないけどジュンにとってヒカリはよっぽど大切な人なんだ……。

「でもあいつ方向音痴でお化けが苦手なんだよな～」

「その子のことがとっても好きなのね」

「もちろんだ！オレの母ちゃんと同じくらい……ん？母ちゃんよりも好きか？」

アタシの口から笑いが漏れた。正直だな。それでいてどこまでも

真っ直ぐ。うらやましい。
「まあ、いいや。母ちゃんはダディが守ってくれるはずだからな。ヒカリはオレが守る！誰よりも強くなってヒカリを守るんだ！」
「ふ～ん……」
だからジュンは何も恐くないのかな？ヒカリという女の子を守りたいから。
「おまえは好きなやついないのか？」
「いるわよ。アタシが好きなのは……」
同性の親友のモミを思い浮かべようとしてアタシははっとした。モミの名前を言おうとしたのに頭に浮かんだのは赤茶色の頭にヘルメットを被ったあの人だった。な、なんであの人のことを思い浮かべるのよ？アタシと彼はただのジムリーダー仲間なのに！
「ひ……秘密！」
「なんだよ？オレの知ってるやつか？」
口が勝手に開いたけど何も言わなかった。知ってるどころかついこの前ジュンも戦ったばかりのはずだ。
「い、いいから秘密なの！」
「そうか」
ここの廊下を出て階段へと通じる廊下に出た。
「まっさきに2階に上がったけどそういえば下の階にまだ行ってない場所があったな。そっち行こうぜ」
ジュンとナエトルは先に歩いた。アタシとロズレイドもジュンに続いた。不思議と恐くなかった。さっき怒られたりジュンの好きな人の話を聞いたりしたせいだろうか。さっきより落ち着いて洋館を歩くことができるようになった。

＊＊＊

アタシはまだ開けていないドアを開けた。今まで見た部屋と比べて広い部屋だった。真ん中にはどうやってここまで運んだのかと思

うくらい大きなセミダブルのベッドが二つ並んでいた。たぶんこの館の主人と奥さんが使っていた部屋だ。部屋の隅には本棚が2個づつ置いてある。ゴミ箱に化粧台やタンスが置いてあるけどどれも埃を被っている。ドアがついている壁の隅の床はかなり剥げている。この洋館ってどれくらい放って置かれてるのかしら?

「こっちの部屋にはテレビとゴミ箱しかないぞー」

ジュンが隣りの部屋の様子を伝えてくれた。アタシもお返しに見たばかりの部屋の内部を教えた。

「こっちは大きなベッドと家具があるだけよ」

「じゃあ下の階に戻るか」

今まで行った道を戻りながらアタシは考えた。この洋館に入ってからゴースが脅かしたりムウマがピアノを弾いたりしていたけど彼らが騒音の原因かしら?でもゴースの脅かしは脅かす人がいなければ叫び声を聞くことができない。いくら洋館が森の出口の近くにあるからってムウマのピアノと歌声が町に届くとは思えない。

「なにだまりこんでいるんだ?」

「考え事よ。森の洋館の騒ぎの原因を突き止めにきたんだから」

「さっきのポケモンたちは違うよな。オレたち以外の人間もいなかったし」

洋館に入ってから人っ子一人見当たらない。ゴーストポケモンはいても人間の幽霊はいないみたい。……ふう。最近噂になっている怪しい集団とは無関係みたいね。

「着いたぜ」

個室が並んだ廊下を出て階段を下った所には玄関があった。両脇にある2つの階段を無視して玄関から真正面に進めばドアがある。ドアの左前には銀のポケモンの銅像がある。

「この先にはなにがあんだろうな」

「ダイニングルームじゃない?」

ジュンがドアを開くとビンゴ!そこには長いテーブルと大量の椅子が置いてあった。こんなに長いテーブルを囲って食事をしていた

だなんてセレブね。
「……？」
だけどおかしい。なぜこの部屋はこんなに明るいんだろう。まるでこの部屋だけ電気が通っているようだった。テーブルの上にはいくつものろうそく立てが置いてあるけどどのろうそくも火はついていない。
ウィーン。
「「！？」」
機械的な音がした。アタシとジュンが音のするほうを見たときにはロズレイドとナエトルは身構えていた。なにか得体の知れないものが来る。そんな予感がした。ダイニングルームの横にある壁の向こう側から出てきたのは赤い芝刈り機だった。
「な、なんで芝刈り機が勝手に……」
「知らねーよ」
ブルルンッ。
「「！？」」
ブルルルルルルッ！
芝刈り機はスイッチがオンになったように音を立てアタシたちに向かって爆走してきた。
「キャーーーー！！」
「おわーーーっ！！」
アタシたちは慌てて逃げた。戦闘体勢に入っていたロズレイドとナエトルまで逃げ出した。だって芝刈り機よ芝刈り機！あんなのに体当たりされたら草ポケモンたちはバラバラにされるしアタシとジュンも傷だらけに……てキャーーー！！想像するだけで恐ろしいわ！アタシたち人間も五体満足でいられるかどうかもわからない。バラバラ死体は免れても指の2、3本失いかねないわ！
「なんだよあれ！？ポケモンか？」
「知らないわよーー！」
せっかく洋館が恐くなくなったのに恐怖が戻ってきた。恐い……

逃げたい……！アタシはダイニングルームのドアノブに手をかけた。
右へ左へとノブを回したけど開かない……！
「駄目！開かないわ！」
「なんだってんだよー！」
ブルルルルッ。
芝刈り機はアタシたちを追いかけるのをやめない。アタシたちはテーブルの周りを何回も何回も周った。
「ちきしょー！ポケモンチャンピオンになる男をなめるな！『はっぱカッター』！」
「ルーー！」
ナエトルは頭を振ってはっぱを飛ばした。頭の上についた枝からははっぱが生えては飛ばされた。こうしちゃいられない。アタシも頑張らなくちゃ！
「ロズレイド！『マジカルリーフ』！」
「ロズレイッ！」
ロズレイドは両手を構えてカラフルなはっぱを何枚も発射した。『マジカルリーフ』は『はっぱカッター』より少し威力が高い技。『はっぱカッター』が威力５５で急所に当たりやすい技なら『マジカルリーフ』は威力６０で必ず命中する技。相手を仕留めるときや確実にダメージを与えるときに役に立つ技だ。芝刈り機に『はっぱカッター』と『マジカルリーフ』が届く寸前芝刈り機に異変が起きた。赤かった芝刈り機がオレンジ色に染まり黄緑色の光を纏った。車輪の間にある装甲に黄緑色の目とギザギザの歯が現れた。ええっ!?
「キヒヒ♪」
「ミギャーー！！」
＞ｉ６１７３―６９９＜
芝刈り機が笑った次の瞬間、芝刈り機の刃のついている部分から大量のはっぱが出てきた。ナエトルとロズレイドが放ったはっぱより１０倍……いや２０倍の量のはっぱがじゃんじゃんじゃん吹き荒

れた。この技はまさか……！
「テーブルの下に隠れて！」
「えっ？」
「ロズッ！」
「ルー！？」
アタシはジュンを引っぱりロズレイドはナエトルをテーブルの下へ押し込めた。テーブルクロスの敷かれたテーブルの下だと様子は見えないけど音でわかる。大量のはっぱがダイニングルーム内を舞いなにかにぶつかったり刺さったりする音が聞こえた。倒れるろうそく立て。割れる食器。傷つく椅子。刺される壁。こんなに大量のはっぱを一度に噴出して攻撃する技なんて一つしかない。
草タイプの技で2番目に強い技……『リーフストーム』！その威力は１４０。命中率は９０％。周りを椅子で覆われたテーブルの下に隠れていてもはっぱが隙間をくぐりテーブルクロスを引き裂いて何十枚と舞い込んでくる。テーブルの表面を貫いてとがったはっぱが食い込むのを見てゾッとした。体中に痛みが走った気がするけどどこを切られたのかわからない。
「……おさまったのか？」
音が静まりはっぱの嵐が止んだことを確認するようにジュンが話しかけてきた。だけどアタシはジュンの問いに答えず代わりにジュンを反対側に蹴飛ばした。
「おわっ！」
バキャーーン！！
アタシの直感が当たった。さっきまでジュンがいた場所に芝刈り機が突っ込んできた。アタシは椅子をどけてテーブルの下を出た。
「そこから出て！」
テーブルの下に隠れている間冷静さを取り戻した。アタシは距離を取り芝刈り機をどうやっつけるか対策を練った。おそらくこの芝刈り機はポケモンだ。その外見からタイプはおそらく鋼・草。もし鋼と草の両方の属性を持つとしたらこいつの弱点は炎と地面。水タ

イプの技も効くかもしれない。
「最悪……」
アタシは草タイプ専門のトレーナーだ。草タイプの天敵の炎タイプも草タイプの格好の獲物となる地面ポケモンや水ポケモンを持っているはずがない。
「ジュン！そいつはおそらく鋼・草タイプのポケモンよ！炎か地面タイプの技を使えるポケモンは持っている？」
「ポニータなら！」
言うが早いがジュンの前に火の馬ポケモン、ポニータが現れた。しめた！鋼タイプと草タイプの共通の弱点である炎タイプなら相手に４倍のダメージを与えることができる。
「『火の粉』！」
「ヒヒーン！」
ポニータは燃えるたてがみを揺らしながら口から炎を吐いた。贅沢を言うともっと威力の高い『火炎放射』や『大文字』で攻めたいところだけどレベルが低いから仕方がない。おそらくジュンのポケモンはレベル２０未満だわ。アタシのロズレイドはレベル２２。残りの２匹のポケモンはレベル２０。相手のレベルはわからない。たとえ同レベルでも強力な技を使うから油断できない。
ポニータが履いた火の玉が当たり芝刈り機は動きを止めた。えっ？そんなあっさり……。オレンジ色だった装甲は赤に戻り緑色の光も失われていた。
「やったー！オレたちの勝ちだー！」
「ブッヒヒーン！」
「ルー♪」
ジュンとポニータとナエトルは勝利の雄叫びを上げた。……おかしい。おかしすぎる。あんなにアタシたちをしつこく追い回した芝刈り機がそんな簡単にやられるはずがない。アタシたちの状況を把握しようと頭を回転させたらジュンがポケモンもろとも壁に押しやられた。彼らを襲ったのは大量の水。

「なんだってんだよー！……ってポニータ！？」
残念なことにポニータはびしょ濡れでぐったりしていた。自慢の炎のたてがみもコンロの弱火なみに頼りない。そのポニータは戦闘不能だわ。
アタシは水が飛んできた方向を見た。そこにはオレンジ色の洗濯機があった。コインランドリーで見かける丸い窓のついた洗濯機の上には角が生えている。虚ろに笑っている顔には見覚えがあった。
「さっきの芝刈り機……？」
芝刈り機をチラッと見たけど動く気配がない。アタシたちの前に新手の敵が現れた。

なにもかもメチャクチャだった。芝刈り機が襲ってきたと思ったら今度は洗濯機が動き出した。青く光る冷蔵庫の両脇からアルファベットの「A」の形をした光が手のように伸びている。片方の手に掴まれているのは本体と繋がっているホース。ホースからは水が音を立て床に落ちていた。
ピチョン。ピチョン。
目の前で起きた光景を頭が受け付けない。さっきの技は水の量と威力から推測すると『ハイドロポンプ』。数年前新たな技が発見されるまで水タイプの技で最強と言われていた技。
「水タイプには草タイプ！ナエトル、『宿り木の種』！」
「ルー！」
ジュンはポニータをボールに戻すと再び戦闘モードに入った。切り替えが早い。アタシも見習わなくちゃ！おそらく鋼・水と思われるポケモンに草タイプの技が通じるかどうかわからないけど試してみなくちゃわからない。
「ロズレイド！『蔓の鞭』で拘束して！」
「ローッ！」
『宿り木の種』は急速に成長して洗濯機に絡みついた。それに続いてロズレイドの手から伸びた2本の蔓が洗濯機をぐるぐる巻きに

した。洗濯機は手を動かしたり窓のついた扉を開けようとしたけど何重もの蔓に縛られているから動けない。やがて洗濯機は動くのをやめて白くなった。

「えっ？」

「なにっ！？」

芝刈り機と同じ。動きが止まると同時にオレンジ色から違う色に変わった。……おかしい。何かが変だ。何か大事なことを見逃している気がする。

ゴォッ。

灼熱の光線がアタシの横を通った。アタシには当たらなかったけど熱光線は洗濯機を拘束し続けていたロズレイドに直撃した。

「ロズレイドオオオオオオ！！」

ロズレイドは黒焦げになりながらも立っていた。蔓が焼けて己の体を支えるものがなくなったロズレイドは倒れた。音もほとんど立てなかった。

「よくもロズレイドをっ！」

熱い液体が頬を伝った。ロズレイドはアタシと一番仲がよく一番頼りになるポケモンだった。それがあっさり一撃でやられたのだ。悲しさより怒りと悔しさが強かった。アタシは熱光線……『オーバーヒート』を放ったポケモンを睨みつけた。

攻撃してきたのはオーブントースター……もしくは電子レンジ。角が生えた電子レンジは赤く光りカニのようなハサミが2本飛び出ていた。電子レンジは挑発するようにハサミを鳴らした。でも次のポケモンを出してもさっきのように燃やされるかもしれない。ロズレイドを戻してはみたけど残りのボールに手を付けられなかった。

「火には水！出番だ、キャモメ！」

「キュエーッ！」

アタシが迷っている間にジュンは新たなポケモンを出した。ポニータが戦闘不能になったのにその顔には笑みを浮かべていた。

「芝刈り機に洗濯機に電子レンジか……おもしれー！おまえを捕獲して母ちゃんにプレゼントしてやるぜ！」

先程の怒りも悲しみも失せてアタシはツッコミを入れた。

「いや、お母さんに迷惑だから」

電子レンジは先程にも増して赤くなった。また『オーバーヒート』が来る……！

「避けて！」

「おう！」

電子レンジは扉を開けた。フルパワーで放たれる『オーバーヒート』は反動で特殊攻撃が下がるけど最初の2発は並みの技を一蹴する。キャモメはアタシたちの期待に応え体を回転させて『オーバーヒート』を避けた。

「『水鉄砲』！」

洗濯機が放った『ハイドロポンプ』と比べて弱々しいけど仕方がない。『水鉄砲』は電子レンジの顔に命中した。水を浴びて壊れたのか電子レンジから小さな火花が出た。

「やったか！？」

「いえ……まだよ！チェリンボ！」

「チェリー！」

不揃いの実がついた通常のさくらんぼより１００倍大きいさくらんぼポケモン―チェリンボが高い声で鳴いた。

あのポケモンの行動が大体わかってきた。電気製品が次々に動いてくるところを見るとまだ別の電気製品が動き出すに違いない。他にどんな電化製品があるかわからないけどどの家にもある電気製品といえば冷蔵庫だ。アタシは電子レンジが現れた場所へチェリンボと一緒に走った。壁で区切られた部屋はキッチンだった。そしてそこに必ずある電気製品といえば……。

「チェリンボ！あの冷蔵庫に『種マシンガン』！」

「リーーッ！」

地についた大きな赤い実の口から黄色い種がいくつも飛んだ。高

速でいくつもの種を飛ばす様子はまさにマシンガン。灰色の冷蔵庫はオレンジ色に変わった瞬間『種マシンガン』が炸裂した。

「ビビビビッ！？」

冷蔵庫は一瞬怯んだ。攻撃される前に仕掛けたけど仕留めるには弱い攻撃だった。案の定オレンジ色の冷蔵庫は扉を開き辺りの熱を奪い取った。

「チェリンボ避けて！」

急に部屋が冷え込んだ。大技が来る。アタシには当たるかもしれないけどチェリンボなら避けきれる。そう信じてチェリンボに避けるように指示した。だけどチェリンボはその場を動かず微かに光った。特殊防御を上げる『成長』だ。いくら特殊防御力を上げたって氷タイプの特殊攻撃技を耐えられるわけないのに！

「リイイイッ！」

ピキキッ。

腕で顔を保護した。目をつぶったアタシに聞こえたのはチェリンボの叫び声と何かが氷る音。

「チェリンボ……！」

チェリンボは氷付けになっていた。チェリンボの後ろ以外の場所はカチンコチンに凍っていた。チェリンボ……アタシを庇うためにわざと避けなかったんだ……！

「いやあああああああ！！チェリンボオオオ！！」

＊＊＊

オレンジ色の3段重ねの冷蔵庫。上と下は引き出しで真ん中は2つのドアがついている。頭には今まで襲ってきた電気製品と同じように角がある。紫色に光る冷蔵庫には大きな鉄板のような手が2本生えていた。

「ビービビビビビビ！キヒヒ♪」

アタシは凍ったチェリンボを抱きしめた。冷蔵庫は笑ってる。ア

タシたちが困っているのを見て楽しんでいるんだ。最低なポケモン。
「どうした！ナタネ！」
「ピーーッ」
ジュンとキャモメが来る。駄目……！
「来ちゃ駄目！」
冷蔵庫は待ってくれずジュンたちに向かって吹雪が放たれた。
「おっと」
「ピーッ」
間一髪。キャモメとジュンはそれぞれ反対方向に避けた。ヒヤヒヤさせるわね。でも無事で良かった。
「ノーマル・飛行なら氷に弱いけど水・飛行なら氷タイプは弱点にならないぜ！『翼で打つ』！」
キャモメは右翼で冷蔵庫を打った。冷蔵庫もそこまで接近されるとは思わなかったみたいであたふたしてるうちにダメージを受けた。
「ビビッ……」
冷蔵庫は横に倒れて動かなくなった。光るのをやめ色も灰色に戻った。油断は禁物だ。アタシはチェリンボをボールに戻し気を引き締めた。
「気をつけて……まだやられていない。どこかに潜んでいるはず」
「ああ……」
「キュエー」
「ルー」
アタシたちは一箇所に集まり背中を合わせた。全方向を監視していたらどこからか電撃が来た。
「キュエエエエッ！？」
「キャモメ！？」
「なっ！？」
水・飛行は草タイプも氷タイプも弱点じゃないけど電気タイプには4倍弱かった。次はどの電気製品が動いたの？それを確かめにキッチンを出た。電気製品を見る前に宙に浮く不思議な物体が目に入

った。
「何あれ……？」
テーブルの真ん中にオレンジ色の2段重ねの球体が浮いていた。鏡餅を逆さにして角をつけた体は水色の光に包まれている。光から稲妻の形の腕が2本形成されていた。大きい円にはお馴染みの虚ろだけどはっきりした目があった。違う……このポケモンを包んでいる光はただの光じゃない。
アタシは洋館に入ってから起きた出来事を思い出した。ジュンの顔をすり抜けておどかしたゴース。念力でピアノを動かしていたムウマ。順番に動き出す電気製品。電気タイプの攻撃でやられたジュンのキャモメ。これらの辻褄（つじつま）を合わせてアタシは一つの結論に辿（たど）り着いた。
「わかった！こいつの正体はプラズマよ！」
「ええっ！？」
「ルー？」
たぶんこのポケモンのタイプは電気・ゴースト。電気製品に入っていたから鋼タイプと思い込んでしまった。迂闊（うかつ）だった。複数のポケモンが襲い掛かってきたと思ったけど全部この1匹のポケモンの仕業だったのね！
「キヒヒヒ♪」
ポケモンは笑うと扇風機まで一直線に飛んだ。まずい……！
「また大技が来る！」
「えっ！？」
アタシはジュンを引っぱって芝刈り機が出てきた部屋に入った。最後にナエトルが部屋に入ったときには風を切る音が聞こえた。
「なんだってんだよー！」
アタシはそっとダイニングルームを覗いた。風の斬撃波が部屋の中心からあちこちに放たれていた。
「エアスラッシュよ。これまでの技より威力は劣るけどそれでも十分危険な技だわ」

飛行タイプ特殊技で2番目に強い技、『エアスラッシュ』。威力75・命中率95。おまけに3割の確立で相手を怯ませる効果つき。

「あなた、残りのポケモンは？」

「ナエトルだけだ」

「ルー」

「アタシもナエトルしか残ってないわ」

アタシは重い息を吐いた。手負いのナエトルと無傷のナエトル。だけどあのポケモンに挑むのは無茶だ。草・水・炎・氷・飛行タイプの技を使えるポケモンに草タイプで挑むだなんて自殺しにいくようなものだ。

「どうすればいいんだよ……」

どうすればいいかわからず部屋を見渡した。床には箱が3個、ガーデニングや庭を整備する道具が入った棚が2つ。そして棚の向こうにドアがあった。ドア……。洋館に入ってからずいぶん外に出てない。お化けだらけの建物より虫ポケモンが出てくる外が急に恋しくなった。

「ジュン。あそこにあるドアが見える？」

「ん？……ああ」

ジュンはアタシに指摘されて初めてドアの存在に気づいた。言うことを聞いてくれればいいけど……。

「あそこのドアは裏庭に通じていると思うの。アタシたちのポケモンじゃあのデタラメなポケモンに敵わない。ここは一時撤退しましょ」

「逃げるのかよ！」

「いったん町へ戻るだけよ！」

声を荒げてしまった。反対するとは思ったけどここは説得しなければならない。

「町へ戻って応援を呼ぶわ。ポケモン理事会に報告すればアタシより強いジムリーダーが来てくれるはず。アタシは責任を持って彼女をここまで案内する。それでいいじゃない！」

「ふざけんな！オレたちやられっぱなしじゃねーか！」
ああん、もう！ここまで聞き分けの悪い子だとは思わなかったわ！早くここから出ないとまたあのポケモンが襲ってくる。風の音はまだ続いてるけどそれが止むのも時間の問題だ。この子を置いてアタシだけ逃げるなんてことできるわけないのに！
「どれくらい時間がかかるんだよ！」
「今夜はもう無理ね。報告すれば明日か明後日にはメリッサさんが……」
「そうやって逃げるのかよ！しっかりしろ！おまえはジムリーダーなんだろ？ハクタイシティで一番強いトレーナーだろ？みんながおまえを頼りにしているのに逃げてどうするんだよ！」
「アタシは逃げるつもりなんか……」
冷静に今の状況を判断して撤退を決めたつもりだった。アタシは目の前の状況から逃げようとしているだけなの……？
「なんでおまえジムリーダーになったんだよ？森の洋館に入るのもいやがってたじゃん。洋館に入るのがいやなら最初からジムリーダーになるな！」
胸が痛んだ。心に電撃を喰らったみたいだった。胸を押さえて両目を閉じた。アタシは……アタシは……草ポケモンが大好きで……草ポケモンを馬鹿にする人が許せなくて……草ポケモンが強いことを証明したくてジムリーダーになったんだ。親友のモミだけ味方でいてくれて……2人で特訓して……ようやく2年前ジムリーダーになれたんだ。最初は頼りないって周りから心配されたけど段々実力が認められて……アタシと草ポケモンを馬鹿にする人はいつの間にかいなくなっていった。ジムリーダーになってアタシと草ポケモンを周囲に認めさせるという夢を叶えて……今度は新しい目標が出来て……。……駄目だ。こんなかっこわるい姿、モミにもヒョウタさんにも見せたくない。2人とも優しいから慰めてくれるかもしれないけどその優しさが逆に辛い。慰められる日はもう終わったの。これからは前を向くんだ。アタシは重い瞼（まぶた）を一気

に開いた。
「……ごめん！弱音吐いて！アタシは逃げないわ……戦う！」
「そうこなくっちゃ！」
「ルー！」
ジュンはガッツポーズをした。アタシは笑うと道具が入っている棚を見た。棚から剥きだしになったガーデニング用の土が目に入る。アタシは腰につけていたポーチを開けた。右手にはアーミーナイフ、左手には技マシンを持った。
「あそこの袋に入っている土をこっちに持ってきて！」
「りょーかい！」
「ルー！」
ジュンとナエトルが土を引きずっている間アタシは自分のナエトルを出した。
「これ、あなたにあげる」
「へ？」
アタシは技マシン32をケースから出してジュンに渡した。
「あなたのナエトルに覚えさせて。中身は……」
アタシはジュンと2匹のナエトルに作戦を説明した。作戦を説明し終わった時ちょうど風の音が止んだ。それを合図にアタシは自分のナエトルを戻しジュンとジュンのナエトルが飛び出した。反撃開始よ！

＊＊＊

「オレはこっちだこのヤロー！」
「ルー！」
壁の向こうからジュンとナエトルの威勢の良い声が聞こえた。作戦が始まった。もう逃げることはできない。
「キヒ？……ビビーッ！」
「『からにこもる』！」

電気が弾ける音がした。ナエトルとプラズマポケモンの戦いが始まったんだ。

「『すいとる』んだ！」

「ルー！」

「ビイイイィッ！」

壁から顔を半分だけ出した。ジュンが戦っている。上手くプラズマポケモンの気をひいてるみたい。運が良いことにプラズマポケモンはまだ電気製品に入っていない。アタシたちを追い詰めたからきっと油断しているんだ。

アタシは部屋からこっそり出た。土入りの袋を引きずりながら。袋が床にこすれてズズズと音を立てた。体から出る汗の量が増えていく。プラズマポケモンがいつアタシに気づくか気が気でなかった。ジュンは作戦通り上手くプラズマポケモンをテーブルの向こうに誘導していた。アタシがいる方向には背を向けているしジュンとナエトルと対峙しているからしばらくバレないとは思うけど……。アタシはバトルの様子をチラ見した。プラズマポケモンはナエトルにHPを吸い取られて苦しんでいる。

「……」

ジュンと目が合った。その目はアタシに「頼むぞ」と言っている気がした。アタシはコクンと頷くとシャベルで土をすくった。植物関係の科学には疎(うと)いけどプラズマは電気が中性になっている状態というのは覚えている。プラスだろうがマイナスだろうが中性だろうが電気は電気。もしかしたら電気製品を土まみれにすればいくらプラズマポケモンでも電気製品に入りにくくなるかもしれない。

そこでアタシは作戦を思いついた。どちらかがプラズマポケモンと戦っている間にもう片方が電気製品を使えないようにする。戦う役はジュンが買って出た。本来はアタシが戦ってもよかったけどあえてジュンに譲った。ジュンのナエトルはダメージを受けていたから相手が油断すると踏んだからだ。アタシは一番近くにあった電気製品にありったけの土を被(かぶ)せた。まずは洗濯機から……。

「ビビーッン♪」
「わっ！？」
「ルッ！？」
ジュンとナエトルが驚く声が聞こえた。たぶんプラズマポケモンが『驚かす』を使ったんだ。『驚かす』はイタズラ好きが多いゴーストポケモンがよく使うゴーストタイプの技。威力は『体当たり』より低いけどたまに相手を怯ませることがある。
「ちいっ……！」
ジュンは舌打ちした。ナエトルが怯んだみたい。ナエトルは動きが遅いから大抵の場合先手を取られてしまう。２匹の戦闘が気になるけどアタシはジュンを信じている。少しだけ軽くなった袋を持って芝刈り機のほうへ移動した。
「ビビーッ！」
芝刈り機に適当に土を被せ終わったら再び電気の音が聞こえた。プラズマポケモンの『電気ショック』がナエトルに直撃したんだ。だけどナエトルはまだやられない。草ポケモンが電気を通しにくいのが幸いした。
「がんばれナエトル！」
「ル～……」
ジュン……ナエトル……がんばって……！アタシは体を屈んでテーブルに近づいた。テーブルとイスが死角になってアタシを隠してくれる。テーブルの上に置いてあった扇風機に土を被せた。
「キヒヒ……キーヒヒ、キヒーヒ♪」
プラズマポケモンが笑った。その笑い方に思わず歯を食いしばる。この笑い方には聞き覚えがある。アタシと草ポケモンを馬鹿にしていたころと同じ笑い方だ。くやしい……でも耐えなければいけない。電気製品はまだ３個残っている。アタシは笑い声に紛れて扇風機に土をかけた。これで残り２個……。
「こうなったら……『影分身』！！」
「ルルー！」

出た！アタシたちの切り札、『影分身』！ナエトルは遅いから相手の攻撃を避けるのが基本苦手だ。それをカバーするために使った技マシンの中身が『影分身』。単調な動きを素早く繰り返すことで分身を作り、相手を惑わせ回避率を上げる技だ。素早さが低いナエトルでも狭い範囲なら短く簡単な動きを早く繰り返すことくらいできる。

「ビ……ビビ？」

今まで優位に立っていたプラズマポケモンは戸惑った。なにせ分身とはいえナエトルがたくさんいるんだから。こんなにたくさんナエトルがいればアタシのナエトルを出してもバレない。最後の手持ちポケモンが入っているボールを開けた。アタシのナエトルは鳴き声を出すかわりに頷き、そそくさと『宿り木の種』を発射した。種は扇風機に絡みつき扇風機は蔓でやがて見えなくなった。あらかじめみんなに作戦を説明するときにアタシのナエトルに指示は出していた。ナエトルは芝刈り機と洗濯機にも種を跳ばした。電気製品に土を被せて更に蔓でグルグル巻きにしちゃえばいくらプラズマポケモンといえども入れないはずだ。

「『はっぱカッター』！」

「ルーッ！」

ナエトルとあちこちにいるナエトルの分身が一斉にはっぱをクナイのように投げた。どれが本物の『はっぱカッター』かわからず戸惑うプラズマポケモン。今までの憂さ晴らしも兼ねているのかジュンと彼のナエトルはノリノリだった。アタシも今までのお返しとしてアタシのナエトルにも『はっぱカッター』を打たせた。

「ビ～？ビビ～ッ！」

プラズマポケモンの叫び声が聞こえる。ざまあ見なさい。アタシたちを苦しませた罰よ。アタシは声を出さずに笑いながら四つん這いになって前へ進んだ。床に横たわる電子レンジまであと１０歩……８歩……６歩……。あと４歩というところで事態は発生した。プラズマポケモンがテーブルを飛び越えてきたのだ。

＊＊＊

やばい……やばいやばいやばいっ！アタシは命がけで慣れない４本足で走った。恐怖で体が熱い。テーブルを抜けると左手と右足を使って強引に体を右にねじりこんだ。プラズマポケモンに見られてないかしら？

「ビ？」

プラズマポケモンの声がアタシのいる方向へ発せられた気がした。その声を聞いて肩が勝手に上がった。震える手でシャベルを握り、襲ってきたらどうしようと泣きたくなった。

「よそ見すんな！『はっぱカッター』はまだ続いてるんだぞ！」

「ルー！」

「ビッ……！」

ジュンの言っていたことは正しかった。『リーフストーム』ほどではないとはいえ無数のはっぱはブーメランのように部屋中を飛び回りプラズマポケモンを狙っていた。

ふう。よかった。アタシの体は安心して再び呼吸を始めた。アタシのナエトルがマントをひっぱった。分身に紛れて来てくれたんだ。

アタシはテーブルの角に隠れたまま電子レンジを封印した。今までしてきたことと同じだ。機械に土を被せて『宿り木の種』で拘束する。テーブルの横から土が飛んでくるなんて変な光景かもしれないけど幸いプラズマポケモンには後ろを振り向く余裕はなかった。だいぶ軽くなった土入りの袋を両手で抱えて自分のナエトルと顔を合わせた。あとは冷蔵庫を使えなくするだけだ。プラズマポケモンがジュンとジュンのナエトルしか見ていないことを確認してキッチンへ思い切って走った。

「ビ～……ビビ！」

走っている最中にプラズマポケモンが唸（うな）った。異常に気づいたのかもしれないけどアタシにとってキッチンに行くことが先決だった。

振り向いていられない。キッチンに入った直後プラズマポケモンの悲痛な叫びが聞こえた。

「ビーーーーー！？ビビビッ！！」

「かかったな！」

「ルー！」

ジュンたちの姿が見えないけどアタシにはわかった。プラズマポケモンは電気製品の中に入って散々アタシたちを苦しめてきた。芝刈り機の『リーフストーム』、洗濯機の『ハイドロポンプ』、電子レンジの『オーバーヒート』、冷蔵庫の『吹雪』、扇風機の『エアスラッシュ』、そして元々使える『電気ショック』……6つのタイプを使い分けてアタシたちを追い詰めたプラズマポケモンは調子に乗っていた。アタシたちは取るに取らない相手だと。やられかけているアタシたちをやっつけるのに電気製品に入り込む必要はないと思っていたけど形勢逆転！アタシたちの作戦によって今度はプラズマポケモンのほうが追い詰められた。慌てて電気製品に入ろうとしたけど周りにある電気製品は蔓に覆われていた。パニックになっても仕方がないと思う。もっとも、自業自得だけどね。

「ビーー！ビビビーッ！」

「しまった！ナタネー！！」

いよいろ袋の中身を冷蔵庫にぶちまけようとしていたときにプラズマポケモンが血相を変えてキッチンに入ってきた。だけどアタシは自分でも驚くほどこの状況を冷静に対応した。袋の矛先を冷蔵庫からプラズマポケモンに変え土をかけた。

「喰らいなさいっ！」

「ビーーーッ！？」

プラズマポケモンは攻撃の命中率が下がる『砂かけ』ならぬ『土かけ』を喰らい怯んだ。袋にまだ土が残っていることを重さで実感して残りの土を冷蔵庫目掛けて投げた。

「『宿り木の種』！」

「るう！」

アタシのナエトルはその指示を待っていたかのように返事をした。
宿り木は急速成長を遂げ冷蔵庫はミイラのように蔓で覆われた。
「ビイイイイイイッ！！」
今まで上げた声の中で一番大きかった。だけど同情の余地はなかった。それにプラズマポケモンは怒ってアタシのナエトルに電撃を放ってきた。電撃を浴びながらもナエトルは踏んばった。アタシを信頼してくれる証拠。その信頼にアタシも応えなければいけない。
「『しびれ粉』！」
「るっ！」
ナエトルは深呼吸すると黄色い粉を息に乗せて吐いた。プラズマポケモンは冷静さを失っていたのか命中率があまり高くない『しびれ粉』を避けられなかった。
「ビ～～！……ビッ、ビッ」
状態異常を起こす粉を吸い込みプラズマポケモンは咳き込んだ。
時は満ちた……！
「ジュン！今よ！」
「行けー！モンスターボール！」
「ルーー！」
＞ｉ６１７４―６９９＜
「ビーーッ！？」
コンッ……カッ。
赤白のボールはその口を開き無慈悲にもイタズラ好きなプラズマ生命体を吸い込んだ。ボールは揺れて、揺れて、揺れては揺れ、ついに動かなくなった。
フォン。
ボールがポケモンを完全に捕らえたことを知りアタシは安堵の息をもらした。やった……捕獲成功……。
「……いよっしゃあああ！ヒャッハー！ヒュー♪オレすげー！」
「ルー！ルー！」
肩がとても軽くなった。無性に笑いたくなった。うれしかった。

森の洋館に入ってから起きた出来事とアタシの反応を思い出したら我ながら馬鹿馬鹿しく思えて気づけば声に出して笑っていた。

「アハッ。アハハハハッ！」

「るう。るるるるるっ！」

「なんだよ？急に笑って」

自分でもわからない。安心してなんだか笑いたくなった。

「いやっ……アハハハ！なんか……アハハッ！変な気分」

「るっるるっるっ！」

プラズマポケモンにはかなり手こずった。大事な仲間のロズレイドとチェリンボがやられたし大変だった。だけど全てが終わった今思い返してむるとこのバトルはけっこう楽しかった。ジュンのポニータとキャモメもやられたのに。

「なんだよ……まあ、いいや。事件も解決したし、ハクタイシティに戻ろうぜ」

ジュンはナエトルに労い（ねぎら）の言葉を掛けるとボールに戻した。アタシもナエトルをボールに戻そうとしたけどナエトルが麻痺してることに気づいた。おそらく『しびれ粉』を使う前に喰らった電撃にやられたのね。『電気ショック』か『電磁波』かしら。

「おつかれ、ナエトル」

「るう……」

ナエトルを戻してからふと思った。ナエトルにニックネームをつけようかな？そうじゃないとジュンのナエトルと被っちゃう。新入りにしてはナエトルはよく頑張ったもの。

「おーい。おいてくぞー！」

「今行くー！」

キッチンを出ようとしたらプラスチックのカバーで包装された羊羹（ようかん）を見つけた。なんでこんなところに置いてあるんだろう？疑問に思ったけどアタシは羊羹をポケットに入れた。理由？特にないわ。ただ記念に持って帰ろうかなって思っただけ。あとでナエトルにあげようかな。

「くう～……オレ超めずらしいポケモンをゲットしちまったぜ！ヒカリに自慢しよっと♪」
「アハハ。きっと褒めてくれるわよ」
「だろ？へへっ！」
出入り口まで歩きながらアタシたちは笑った。アタシもモミやヒョウタさんに森の洋館で起こったことを話そう。きっと2人とも褒めてくれる。「成長したね」って。ジュンと二手に分かれて重いドアを開けた。空は暗かったけど心はとても明るかった。

（特別編）　第３１．５話　おかっぱの少女（後書き）

ブログを見た方は知っているかもしれませんが実生活で重大な問題が起きたせいで完結させるのに時間がかかりました；

余談ですがムウマは「あら?はじめまして。わたしはムウマです。なにか御用ですか?」と言いました（笑）。
小説は予定より長くなることはよくありますが予定より短くなることは滅多にないと思います（苦笑）。

第３２話　新顔（前書き）

ギンガ団を追うヒカリとモミ。
ハクタイシティで２人の少女を待ち構えているものは・・・？

第３２話　新顔

「はぁ……はぁ……はぁ……」

駆ける。駆ける。森を駆ける。モミさんについていきながら私はできるかぎり足を早く動かした。ヤミカラスのタマゴを落とさないように気をつけながら……。モミさんはすごい。ローヒールのブーツを履いているとはいえ私より早く走っている。ランニングブーツの加速機能を使っている私より早く走れるのはすごい。ギンガ団を追っているのにそんなことを考えているのは既に手遅れだとわかっていたからかしら。

ギンガ団のインとサツが姿をくらましてからどれくらい時間が経ったんだろう。サツが押した謎の装置の発した煙と電波のせいでだいぶ遅れを取ってしまった。ラミアとランスとナポレオンが入ったボールは開かずクルル♪とキララ★は森のどこかにいる。唯一私の手元にいるポケモンのセニョールはモミさんのラッキーに抱えられていた。もし今ポケモンバトルを挑まれたら勝てる自信がない。

「!?あれは……!」

前方を歩いている人影を見てモミさんが声を出した。緑色の服を着た茶髪のおかっぱの人が目に入る。後姿からじゃ男か女かわからない。だけど私はおかっぱの人よりその隣りを歩くオレンジと白のしましまシャツを着た金髪くせっけ少年のほうが気になった。

「ナタネちゃん!」

「ジュン!」

「「え?」」

おかっぱの人とくせっけの少年が振り返った。

「おっ……ヒカリーー!!」

「モミ!!」

ナタネさんは確かモミさんが話していたジムリーダーね。どういう経緯でジュンと一緒にハクタイの森にいるかは知らないけどお互

いの友だちの再会を前に私たちは安心した。２人に近づくにつれ見えてくる生傷に気づくまでは。
「ジュン……！その傷……」
傷だらけのジュンを見て体がぶるっと震えた。ジュンもナタネさんもあちこち切られていた。肌だけでなく服まで切られていた。どの切り傷も小さいけど数が多いから見ているだけで私まで痛くなった。まさか……！質問をしようとしたけど声が出ない。訊きたいけど恐くて訊けない。私の代わりに質問をしたのはモミさんだった。
「ギンガ団にやられたの？！」
「え？」
一瞬息を呑んだけどナタネさんの反応を見て安心した。驚いてはいるけど表情はあまり変わらない。
「いや、ポケモンをゲットするときケガしちゃっただけさ。聞いてくれよヒカリ！オレちょーめずらしいポケモンゲットしたんだぜ！」
私は胸をなでおろした。よかった……ギンガ団にやられたわけじゃないんだ……。
「ナタネちゃんギンガ団見なかった？」
モミさんの質問で私ははっとした。腕の中にあるタマゴの存在感が再び強くなった。
「ううん。森の洋館から出たばかりだけど見かけなかったわ」
「そう……」
はぁ……。一度明るくなった心は再び暗くなった。ジュンとナタネさんがギンガ団にやられなかったのはよかったけど問題は何一つ解決していない。ヤミカラスのもう１つのタマゴはギンガ団に奪われたままだった。
「スッボミ～」
私を元気付けようとセニョールが鳴いた。ナポレオン……クルル♪……キララ★……ラミア……ランス……。
「ギャアアアッ！」
「「「「！？」」」」

上空から聞こえた声に私たちは身構えた。空を見ると黄土色の大きな鳥ポケモンが私たちのいる方向へ飛んでいた。

「オニドリル！？」

うそ……なんでこんなところにオニドリルが……！反射的に図鑑を取り出し空を飛ぶ怪鳥に向けた。

『オニドリル♂　Ｌｖ．３７』

……Ｌｖ．３７ですって！？

「強いっ！！」

体が緊張して熱くなった。まずい……。モミさんも私も戦える手持ちポケモンは１匹しかいない。ジュンとナタネさんも野生ポケモンの捕獲でかなりやられているみたい。ここで戦うのは辛すぎる……。この場は逃げようと思ったけどその考えは別のポケモンの鳴き声で打ち消された。

「クルーーッ♪」

「コリ～～ン！」

「カー！カー！」

「クルル♪！キララ★！ヤミカラス！」

オニドリルよりやや遅れて現れたのはヤミカラスとクルル♪だった。鳥ポケモンではないキララ★はオニドリルの背中に乗っていた。よかった……このオニドリルは敵じゃない。味方なんだ。

「おかえり。クルル♪。キララ★」

「クルッポー！」

「コリ～ン……」

「ミ～♪」

セニョールは敬礼するクルル♪と泣きそうなキララ★を温かく迎えた。キララ★は地面に降りるなり私に飛びついてきた。ヤミカラスのタマゴを抱えているから足にくっつくだけでとどまったけど。

「よしよし。恐かったんだね」

しゃがんだ足と片手でタマゴを支えおびえるキララ★の頭をなでた。キララ★には恐い思いをさせてしまった。ポケモンより弱い人間でもポケモンを怒ればポケモンを圧倒することができるのね。今度から気をつけなくちゃ。

「カーー」

「ギャー」

オニドリルとヤミカラスは私を見つめていた。ジュンとナタネさんは何が起こっているかわからずおろおろした。

「なんだってんだよー！」

「一体何があったの？」

「話せば長くなるんだけど……」

モミさんがジュンとナタネさんに話しかけている間私は2匹の鳥ポケモンを観察した。メスのヤミカラスにオスのオニドリル。そして巣にあった2つのタマゴ。それらのことから推測すると一つの結論にたどりついた。このヤミカラスとオニドリルは夫婦なんだ！

「ごめんなさい。ヤミカラス。オニドリル。あなたたちのタマゴ……1つしか取り戻せなかったの」

「カー……」

「ギャー……」

首をうなだれる2匹を見てあわてて話を続けた。

「大丈夫よ！もう1つのタマゴも必ず取り戻して見せるわ！約束する」

私は今までしっかり抱いていたタマゴを胸から離した。ヤミカラスのタマゴを返そうと前へ腕を伸ばした。

「だからそれまでこのタマゴを育てて……」

ピキッ。

「え？」

ピキキッ。

「ええっ！？」

元々ヒビが入っていたタマゴにさらにヒビが入り隙間から光が漏

れた。ええっ!?ここで生まれちゃうの?!
パカッ。
「えっ」
「まあ」
「うわっ」
「おおっ」
「カーーッ!」
その瞬間はあっという間に訪れた。タマゴの上半分の殻は光とともにふっとび小さなヤミカラスが私の腕の中で誕生した。
＞i63316―699＜
「う、生まれちゃった……」
私たちトレーナーだけでなくポケモンたちも固まった。生まれたばかりのヤミカラスの呼吸が聞こえてくる。私はこの子を抱えたまま困った。ここはヤミカラスのタマゴが無事に孵ったことに喜ぶべきかしら……?ヤミカラスの子どもを親に返そうと残ったタマゴの殻ごと動かしたらその子の目が開いた。
「カーー♪」
「えっ……」
「カー♪カー♪」
「えっ……ええっ!?」
私を見てうれしそうに羽を動かすヤミカラスの子どもにあわてて説明した。
「ち、違うわよ!私はあなたのママじゃないわ!そっちにいるヤミカラスがあなたのママよ!」
「カー?」
ヤミカラスの子どもは背後にいたヤミカラスとオニドリルを見た。2匹の鳥ポケモンを見ると本能で彼らが両親とわかったのかヤミカラスの子どもは2匹に飛びついた。
「カーー!カカー!」
「カー!」

「ギャー！」
寄り添う3匹を見てホッとした。よかった……勘違いが解けて……。感動すべき親子の対面を見て心が温かくなったけど奪われたタマゴが脳裏を横切った。
「……」
本来は3匹じゃなくて4匹で対面するはずだったのに……。うれしさと悲しさが同時に込み上がってきて泣きたくなった。ギンガ団……！
「カー？」
親子の対面を喜んでいたはずのヤミカラスの子どもが静かになった。ママとパパから離れぎこちない足取りで辺りをちょこちょこ歩き回った。
「カー？カー？」
誰かを探すように、誰かに語りかけるように森に、木々に、茂みに向かって鳴いた。もしかして……。
「いなくなった兄弟を探しているのかしら……？」
モミさんは歩き回るヤミカラスの子どもを拾い上げた。
「ごめんね……あなたの兄弟は今ここにいないの。あたしたちが必ず探し出してみせるからそれまでお父さんとお母さんと一緒に待っていてね」
「カー！」
ヤミカラスの子どもは翼を広げ、飛び始めた。生まれたばかりだから飛び方は下手だったけど上がったり下がったりしながらも私の肩まで飛んできた。
「私と一緒に……探したいの？」
「カー！」
あなたの兄弟を救えなかったのに……あなたの兄弟も救えなかった弱い私でいいの？
私は困ったように親のヤミカラスとオニドリルを見た。2匹は怒るわけでもなくよろこぶわけでもなくただ鳴いた。

「カー」
「ギャー」
その鳴き声は「行きなさい」と言っているように聞こえた。私が旅立つときにママが言った「行ってらっしゃい」を思い出した。
「……行きましょう。ノワール」
ノワール。アルファベットで書くとＮＯＩＲ。フランス語で「黒」を意味する言葉を名前にした。ノワールはヤミカラスとオニドリルの元でひとしきり甘えると私の元へ戻ってきた。ノワールの兄弟……弟か妹かわからないけど、ヤミカラスのタマゴは必ず取り戻す。
「必ず帰って来ます」
ヤミカラスとオニドリルに約束をすると私は歩き出した。モミさんとナタネさんもとまどいつつ歩き始めた。ジュンは私と歩くペースを合わせながらささやいた。
「無理するなよ」

＊＊＊

ジュンとナタネさんと合流した私たちはボロボロになりながらもハクタイシティにたどりついた。真っ先に向かったのはもちろんポケモンセンター。外はもう暗くポケモンセンターに入るまで人の気配は全くなかった。受付の女医さんはナタネさんを見るなり微笑んだけどケガをしていることに気づくと真っ青になった。
「ナタネさん！その傷は……？！」
「大丈夫。任務は成功したわ。ただちょっと切っただけ。早く理事会に報告しないと……」
「どこがちょっとですか！そんなことより治療です。そこの坊やも！」
「えー。オレ平気なのにー」
ジュンとナタネさんは嫌がっていたけど傷の治療を受けるため奥の

部屋へ連れて行かれた。残された私とモミさんは受付にいた別の女医さんにボールに起こった異変について話した。

「ボールに入ったポケモンを出せないだけでなく出したポケモンをボールに戻せないだなんて前代未聞だわ……。とりあえずボールの整備士がいますから修理を頼みますね」

「お願いします！」

こうして私はクルル♪とキララ★とセニョールとノワール、モミさんとラッキーの2人と5匹で待機室で待つことになった。ポケモンをボールに戻せないから回復装置は使えず代わりに女医さんに回復アイテムで回復させてもらった。

「いつまでかかるんだろう……」

ぽつりとこぼれた言葉。ポケモンセンターに入ってからもう2時間以上経つ。その間にシャワーを浴びたしご飯も食べた。ポケモンたちも女医さんに洗ってもらったからいい匂いがする。やることもなくなってソファに座ってみたけど思い出すのは嫌なことばかり。奪われたタマゴ。弱ったままボールに閉じ込められたナポレオン。事情を知らずにボールで待機するランスとラミア。不安のオンパレードだった。

「今までになかった例だから修理に時間がかかるのよ。ポケモンたちの命に別状はないはずだから大丈夫よ」

「うん……」

うなづいたあとこっそり小さなため息をついた。モミさんが励ましてくれたけど私の心はブルーのままだった。今の私にできることが何1つないだなんて……。ますます自己嫌悪に陥ろうとしたら待機室に明るい声が乱入してきた。

「ヤッホー！オレさまふっかつだぜー！」

「モミー！調子どう？」

顔を上げたらそこには包帯だらけのくせっけの少年とバンドエイドだらけのおかっぱの少女がいた。服装から2人がジュンとナタネさんってことはわかるけどなんていうか……えーっと……。

「「妖怪？」」
「違うわよ！！」
「なんだってんだよー！」
クルル♪やセニョールたちポケモンが笑い始めた。私はジュンとナタネさんを交互に見比べて考えた。傷が多いからバンドエイドだらけのナタネさんはわかるけど……なんでジュンは包帯なの？
「ジュン。なんでバンドエイドじゃなくて包帯なの？まるでミイラみたいよ」
「えー。バンドエイドより包帯のほうがかっこいいじゃーん！バンドエイドは目玉に見えるからお断りだぜ！」
私は呆れて目を細めた。ジュンったらそんな理由で……。さっきより楽なため息をつき顔の向きを変えたらナタネさんが私をまじまじと見つめていることに気づいた。
「ふ～ん。へえ～。この子がヒカリね～……」
「えっ」
なになに？どうして私の顔をめずらしそうに見るの？
「どうしたの？ナタネちゃん」
「ああ、いや……さっきは暗かったし急いでたからよく見てなかったけど……ジュンの言ってたとおりかわいい子じゃない」
「ええっ！？」
心臓が跳ね上がった。うそ！ジュンそんなこと言ってたの？……私の容姿を一度もほめたことないのに……！
「モミのほうが綺麗だけどね～」
「ふふふっ。そんなことないわよ」
ナタネさんの発言に動揺してジュンを見た。当の本人は私たちの話を聞かずにセニョールを高い高いしていた。
「そういえば報告は終わったの？」
「ええ。ギンガ団のことも報告しておいたわ」
「！」
ギンガ団……！その言葉を聞いて私は我に返った。そうだ。バカ

な幼馴染相手にトキめいている場合じゃない。悪の組織、ギンガ団。コトブキシティで博士を襲い、谷間の発電所を乗っ取り、ハクタイの森でヤミカラスのタマゴを奪ったひどい人たち。私はこれからも彼らと戦うことになるかもしれない。のんびりしてられないわ……。こぶしを握り、どうやってタマゴを取り戻そうか考えたら誰かに手首をつかまれた。

「そういえばボールもうすぐ直りそうだってよ！せいびしつに行こうぜ！」

「あ。うん……」

「そんじゃ行くぜ！ナタネ！モミ！競争しようぜ！」

えー！？そんないきなり？！この人数で走ったら整備室で修理してる人に迷惑がかかるわよ！

「オレはヒカリと組むからナタネはモミと組めよ。チームで競争だー！負けたら罰金１００万円！！」

「高っ！ちょっと……」

「よーい……どん！」

ナタネさんが文句を言い終える前にジュンは駆け出した。ジュンに引っぱられて私も足を動かさなきゃ引きずられることになる。

「うおおお！」

「きゃあああ！」

ときどき角や壁にぶつかりそうになりながら走った。直線の廊下を走るとき振り返ったらキララ★も走っていた。クルル♪は背中にセニョールを乗せて飛んでいる。ノワールはまだ上手く飛べないのか私の肩にしがみついていた。

「もうすぐせいびしつだぜ！ヒカリ！」

「うわああん！」

ジュンといると落ち込んでいるヒマもない。その代わり私は寿命が縮む思いをした。

＊＊＊

理科の教室みたいな整備室に着いてから2，3分経った。私たちが整備室に入ったとき整備士さんにはあと10分かかると言われた。30代前の整備士さんは作業用デスクの前で黙々と作業をしている。そんなわけで私は壁に寄りかかってるジュンのそばにいるんだけど……なんだか落ち着かない。さっきナタネさんが私に言った言葉が頭の中をグルグル回っている。

『さっきは暗かったし急いでたからよく見てなかったけど……ジュンの言ってたとおりかわいい子じゃない』

私をこんな気持ちにさせたナタネさんは何も置いていないテーブルの上に座っていた。モミさんと話して気を紛らわせたいけどモミさんは今ナタネさんと思い出話に花を咲かせている。2人のジャマをしちゃわるいしジュンを省くのもなんだかいやだし……。気になってもしかたがない。私は深呼吸すると勇気を出した。

「ね、ねえ……さっきナタネさんが言ってたんだけど……」

「んあ？」

ジュンは大きく口を開けてあくびをしていた。人がそわそわしているというのにジュンったら……。

「ジュンが私のことかわいいって言ったの本当？」

「ああ！おまえかわいいな」

「ええーっ！？」

そ、そんないきなり！？思わず半歩引いちゃったじゃない！

「い、今までそんなこと言ったことないじゃない！」

「わりぃ。オレいつもヒカリのそばにいたからヒカリのこと普通だと思ってたんだ。でもよく考えたらコトブキシティみたいな都会に行ってもヒカリよりかわいい子いなかったじゃん？それで初めて気づいたんだ」

ボフンッ！

私は顔が火山のように噴火したように感じた。ま、まさかジュンの口から「かわいい」という褒め言葉が出るだなんて……今ま

でジュンに容姿を全く褒められることがなかったぶん恥ずかしい。
「ヒカリ、おまえ昔からかわいかったんだな。気づかなくてごめんな」
「え……あ……いや……あ、ありがとう……」
頭が真っ白……それとも真っ赤っか？とにかくなんて言えばいいかわからなかったからお礼だけ言っておいた。私ったらなに心臓バクバクさせてるんだろう。ジュンにはもう恋愛的要素は期待しないって決めていたのに。
「はいはいはーい！そこでイチャついてるお2人さん！ボール直ったわよー」
ナタネさんがからかってきた。私はジュン相手に照れてることを認めたくなくて反論した。
「イ、イチャついてなんかいません！」
「おっ。直ったのか。よかったな、ヒカリ！」
ジュンは壁から離れるとキャスターつきのイスに後ろ向きで座り、ナタネさんが座っているテーブルの向かい側まで滑って行った。整備士さんがテーブルにボールを置いたのでみんな同じテーブルに集まってきた。
「どのボールから開くかい？」
「このボールから開きます！」
私は迷わずナポレオンが入ったボールを手に取った。ボールの裏側にしずくの形をしたシールを貼っていたからナポレオンのボールだとすぐわかった。私は人差し指で解放ボタンをしばらく押し、ゆっくり放した。
カッ。
ボールは赤く光ると文字では表せないような音を出した。2段重ねの赤いシルエットはみるみる本来のペンギンポケモンの色へと変わった。
「～ッ……～ッ……」
「ん？」

「「「「？」」」」
「クル？」
「コリ～？」
「スボ？」
「カー？」
「ラキ？」
この部屋にいる生き物は全て「？」を頭上に浮かべた。だって…
…ナポレオンったら顔を手で覆いながらうつむき、謎の鳴き声をもらしているんだもん。
「ナ、ナポレオン……？」
恐る恐る話しかけてみたけど反応がない。聞こえなかったのかしら？
「ポチャ……ポチャボチャー？」
「え？」
ど、どうしたのかしら？ナポレオン。
「ポチャアアア！」
「え？」
「なに？」
「なんだなんだ？」
ナポレオンはうつむいていたと思ったらいきなり顔を上げて泣き出した。
「ポチャチャポャチャポチャ、ポポチャポチャ～～！」
？？？なにを言っているのか全くわかんない。あんなにプライドの高いナポレオンがめそめそしているのを見るのは初めてだわ。
「ポチャッボチャ……ポ～チャポチャ・ポチャポチャチャポチャポポチャ……ポチャチャチャポチャ・ポッチャマ・チャポッチャ、ポチャポポポチャ……」
「なに言ってんだこいつ？」
「ボールから出たことに気づいてないんじゃない？」
「まあ」

「ええーっ！？」

ボールから解放されたのに気づいてないってどれくらい落ち込んでいるの？よっぽどショックだったのかしら？

「ポ～ポポポポチャ？ポチャチャッチャマ・ポチャチャチャッポ・ポ～ポポポチャマ？ポチャ～……ポーポポポポッチャマーー！」

ナポレオンは背中の青と水色の毛の間からハンカチを取り出して鼻をかんだ。鼻から息を出すにしては大きすぎる音が響いた。このまま放っておくとかわいそう……。ナポレオンが自由になったことを気づかせようと私は名前を呼んだ。

「ナポレオン！」

「ポ？ポチャチャ……？」

ナポレオンは私の声に反応した。涙はこぼれつづけているけど私が見えるはず。よかった。これでナポレオンもここがボールの外だって気づいてくれるはず……。

「……ボチャアアア！ボボチャポチャボチャアア！」

「あれ？」

ナポレオンはあいかわらず嘆（なげ）いていた。気づいてない……？そんなことないはずよ！だって目の前にいるのよ！

「ポッ……ポッ……ポポポ・チャ～マ・チャチャ……」

ゴムベラで溶けたチョコをすくうように涙をふきとるナポレオンはとてもみじめだった。まさか私を幻（まぼろし）かなにかと勘違いしているの？

「ポチャチャーーー！ポ～チャポチャーーー！」

普段のいじっぱりな性格はどこにいったのかナポレオンは私の胸に飛び込んできた。灰色のミニワンピがナポレオンの涙と鼻水で汚れて行く。気にならないといえばうそになるけど泣きじゃくるナポレオンのほうが心配だった。

「よしよし、ナポレオン。もう大丈夫よ」

優しく背中をなでてあげた。お母さんが赤ちゃんをあやすように。良い子、良い子、ナポレオン。もう大丈夫よ。１匹でさみしかったんだね……。

「ポチャ？」

ナポレオンは私の顔を間近で見た。全体的にしぼんでいたナポレオンの表情はだんだん目と口を開けていった。

「ポチャーーッ！？」

ナポレオンはようやく私が本物のヒカリだと気づいたのかテーブルへ戻った。失っていたプライドを今ごろ取り戻したのかも。

「ポ、ポッチャア！ポポチャ・ポッチャマ・ポチャポチャ……ポッ……チャ……マ……」

最初は強気に発言していたナポレオンだけど後半から声が小さくなっていった。「な、なによ！べつにわたしはさみしくなんかなかったんだから！」と言いたかったのかもしれない。ぬいぐるみみたいなかわいいペンギンは目をうるうるさせると再び大声で泣き出した。

「ポチャアアアア！チャ！チャッマッ！チャマチャマチャ・ポッチャマー！ポチャチャ……ポーポポチャーー！」

顔をひとしきり左右に振ったあとナポレオンは私にしがみついた。シンジ湖以来初めて感情を爆発させたナポレオンを私は静かに受け入れた。もう……ナポレオンったら……。いくらツンデレだからっていつも張り詰めていると疲れちゃうわよ……。

整備士さんはしばらく目をつぶったあと事情を説明し始めた。

「ボールを直しているとき気づいたんだけど……どうやらボールの中のポケモンは外の様子が全くわからなかったみたいなんだ。ポケモンから見てボールの上半身は透明になっていて音は聞こえなくても外は見える作りになっているんだけど……ボールの中身は真っ暗で外から完全に遮断（しゃだん）されていたみたいだ」

「そうだったんですか……」

私は泣き病まないナポレオンを抱っこしながらつぶやいた。両手は完全にふさがっている。整備士さんの言っていることが本当ならラミアとランスもなにがおこったかわからず不安になっているはずだ。

「ジュン……残り2つのボールを開けてくれない？あ、ピンク色のボールは外で開けてね。イワークが入ってるから」
「おう！」
ナポレオンをあやしながら私は次にどうするか考えた。とりあえずナポレオンとラミアとランスのご飯用意してもらわなくちゃ……。

＊＊＊

『4月9日　土曜日

昨日はゆっくり休めたけど今日は散々な目に合った。モミさんのおかげでハクタイの森を順調に進んでいたら事件が起きた。ヤミカラスの叫び声が聞こえてきて急いで向かったらギンガ団がいたの！コトブキシティでも戦った2人の団員はインとサツ……と、勝手に名付けたわ。印刷機みたいな格好をしていたからインとサツ。……ってそんなことどうでもよかったわね。とにかくインとサツが野生のヤミカラスのタマゴを奪おうとしていたの！モミさんとタッグバトルでなんとか戦闘中の隙をついて2つのタマゴを取り戻したけど1つ奪い返されてしまった。おまけにサツのせいでキララ★は星になるしボールは壊れるし最悪だったわ！サツの使った変な機械を壊してもボールは直らなかったからとてもくやしかった。

インとサツを追いかけていたらジュンとナタネさんと会った。傷だらけの2人を見てゾッとしたけど野性ポケモンにやられたと聞いてホッとした。だってギンガ団にやられたと思ったんだもん……。でも安心したのもつかの間。今度はオニドリルが出てきたの！クルル♪はキララ★を探しに行ってたしボールは壊れてたから手持ちのポケモンはセニョールのみ。モミさんもラッキーしかいないしジュンとナタネさんのポケモンも戦えそうになかった。オニドリルのレベルは37。絶体絶命大ピンチ！……と、思ったらヤミカラス

とキララ★とクルル♪がオニドリルと一緒にやってきた。どうやらオニドリルはヤミカラスの旦那さんでクルル♪がキララ★を見つけるのを手伝ってくれたみたい。タマゴは1つしか取り戻せなかったことを謝るとタマゴを返そうとした。でもタマゴを返すどころか孵(かえ)しちゃったの！生まれてきたのはメスのヤミカラス。生まれたばかりのヤミカラスの子どもはいなくなった兄弟を探すため私についていくことを決めた。漆黒の翼を持つ彼女に私はノワールという名前を与え、ハクタイの森を出た。

ポケモンセンターで壊れたボールを預けると私とモミさんは休息を取った。ジュンとナタネさんはケガの手当てをしてもらった。ボールを修理している間にナタネさんに意外なことを言われた。ジュンが私のこと「かわいい」って言ったんだって！うそ！信じられる？あの鈍感なジュンよ！今まで一度も「かわいい」って褒めてもらったことなかったのに……。ジュンにそのことを訊いたらあっさり認めた。今まで私が普通だと思ってたからかわいいって思わなかったんだって。「気づかなくてごめんな」って謝られた。そ、そんなこと言われたらどうすればいいかわからなくなっちゃう。ナタネさんにからかわれちゃった。

整備士さんは1時間以上かけてボールを直してくれた。ナポレオンが一番心配だったから真っ先に解放したんだけどすごく落ち込んでた。まるでこの世の終わりが来たみたいに。ボールから出たあともしばらく自由になったことに気づかなかったくらい。ポチャポチャ泣いているのを見られて意地になったけど結局素直になって私に甘えてきた。ツンデレだからって意地の張りすぎは禁物ね。今夜は特別にポケモンセンターに泊まらせてもらった。』

「ふう……」

私は鉛筆を放した。昨夜は疲れていたしナポレオンたちが心配で

日記を書く余裕がなかった。日記代わりに使っている冒険ノートを閉じたらドアが勢いよく開いた。

「おはよう！ヒカリ！おまえハクタイシティまだ見て回ってないだろ？オレが案内してやるよ！ポケモン像見に行こうぜ！」

「え？」

ジュンは私の返事を待たずに手を掴(つか)むと走り出した。バッグを取るヒマもなかったけどナポレオンが私の代わりに持ってきてくれた。もう……ジュンってばせっかち！あの早口言葉みたいなしゃべりかたっていつ息継ぎしてるの？よく噛まないわね。

ポケモンセンターの裏を回り、天辺にトゲがついた建物や瓦(かわら)の屋根を通り過ぎると丘についた。像は早歩きしているときから見えていたけど近づくにつれその存在に圧倒された。石像だか銅像だかわからなかったけどそのとてつもなく大きな像は何百年も前からあったみたいだった。兜(かぶと)の両脇と額に角(つの)が生えたような頭。宝石のようなプレートが胸を覆い、円形の盾の形をした肩から手っ甲で覆われた腕が伸びていた。背中には横に大きく広がった直線の翼があり太い尻尾の上にも翼のような突起物がついていた。尖った爪は柱のようにその巨体を支える大きな足をぐるりと囲っていた。

＞ｉ９２６３―６９９＜

「……っ！？」

体が悪寒で震えた。……なんなのこのポケモン像は？まるで２匹のポケモンが合体したみたい。体の所々についている装飾は鎧じゃないの？

「ポチャポチャ？」

生きていないはずなのにものすごい威圧感がある。蛇やライオンに睨まれるなんてものじゃない。もっと恐ろしい。全世界を敵に回したみたいなプレッシャーを感じる。……このポケモンたちに逆らってはいけない。体中の細胞が震えた。

『我々ハコノ世界ヲ守ラナケレバイケナイ』

頭がズキッとした。……なに？今の声？

「くう〜〜……すげーよなー。かっちょいー♪かっこいい人間といえばダディとマキシマム仮面だけどポケモンの中で一番かっこいいのはこいつかもな！」

ジュンは像を見て目を輝かせていた。さっきの声は気のせい……？

「横からも見てみようぜ！」

「ポチャ」

私は我に返った。ナポレオンが心配そうに私を見上げている。私の不安に気づかずジュンは私を像の横につれていった。私のほうを向いて歩いていたせいでジュンは何かにぶつかってしまった。

「なんだ……？」

像の側面には先客がいた。水色の逆立った髪。黒い服に灰色のベスト。歳は３０代くらいかしら？がたいが大きい男性は手帳でメモを取りながらぶつぶつ呟いていた。

「……これがハクタイのポケモン像。この世界を形作るのは時間と空間の二重螺旋。そしてシンオウ地方に祀られるのは時間と空間のポケモンシンオウの神話……その真実を調べるべきか」

ひとり言を終えたおじさんは私たちに気がついた。私をじいっと見るとジュンに話しかけてきた。

「あのときの子どもか……。具合は良くなったのか？」

「ああ！おっさん、あのときはありがとな！」

「礼には及ばん。……失礼」

おじさんはジュンをよけると階段を下りて行った。ジュンの知り合いなのかしら？おじさんが丘を下りきったのを確認してからジュンに訊ねた。

「さっきの人は誰？」

「知らね。シンジ湖でヒカリが倒れたとき助けてくれたんだ！おまえのおでこにハンカチを乗せてくれたのもあのおっさんだぜ」

「うそ！」

私はあわててバッグのポケットからハンカチを取り出した。ナポレオンが昨日までずっと持っていた水色と灰色のチェックのハンカ

チ。このハンカチはあの人のなんだ！
「やだ！返さなきゃ！行ってくるわ！」
「え？あ、おい！」
「ポチャポチャー！」
手すりにつかまりながら急いで階段を下りた。私が下り始めていたときにはおじさんはポケモンセンターを曲がって見えなくなっていた。さっき通った道を逆戻りしてポケモンセンター前まで着いた。左は行き止まり。右はハクタイの森の入り口。横の道にはおじさんの後姿は見えない。目を凝らしたら前方に水色の髪の毛が見えた。
「あっちだわ！」
このままじゃおいつけないと判断してランニングブーツの加速スイッチを押した。近代的な建物が並ぶ道をまっすぐ走っていたら今度はおじさんは左に曲がった。十字路でいったんブレーキをかけて前・左・右を向いた。間違いない……左だ！一気に走ろうとしたけど右の道にいた別の見覚えのある後姿を思い出して踏みとどまった。
「え……」
藍色のスーツに茶色いズボンを穿いた青年が歩いていた。後ろがギザギザした特徴的な帽子の下から紺色の髪が見えた。
『よぞらみたいにあおくてくろかったの』
ソノオタウンでライコちゃんにもらった絵が頭を横切った。
ドクン。
ポケモン像を見たときと似たような感覚に包まれた。私はあの男性を知っている。クロガネ炭鉱ですれちがった人だ。だけどそれ以前に会っている気がする。……追いかけたい。話しかけたい。あの人に私は誰か、私を知っているか問いつめたい。だけど今はおじさんにハンカチを返さなきゃいけない。でも……！……どれくらい迷っていたかわからない。
「ポチャー！」
ほっぺを両手で叩くとおじさんが歩いていた方向へ走り出したナポレオンを追いかけた。だけど違う分かれ道についたときにはもう

見失っていた。
「あ〜ん、もう!私のバカ〜〜〜!!」
髪をひっかけまわした。全てはあとの祭りだった。「あおくてくろい人」とおじさんのどっちを追いかけるか迷ったあげく、おじさんにハンカチを返し損ねた。私が迷っていたせいだ。走って疲れた私は地面にしゃがみこんだ。
「ポチャポチャ〜」
ナポレオンがひざをぽんぽんと叩いた。なぐさめてくれたのね。ボールに閉じ込められてから態度が少し丸くなったわね。
「ありがとう、ナポレオン。私は大丈夫よ」
苦笑しながらナポレオンをなでるとため息をついた。次におじさんと会えるのはいつかな?ぼーっとしてたら後ろからジュンの声が聞こえてきた。
「おーい!ヒカリー!」
そういえばジュンを置いてきちゃったんだった。ジュンの姿が大きくなるにつれ私はなんて言い訳をしようか考えた。

第３２話　新顔（後書き）

人気投票始めました！（２０１０／０４／２４～２０１０／０６／２４）
匿名で投票＆コメントできます。みなさんぜひ参加してください☆
パソコン　ｈｔｔｐ：／／ｖｏｔｅ３．ｚｉｙｕ．ｎｅｔ／ｈｔｍｌ／ｓａｇｉ．ｈｔｍｌ
ケータイ　ｈｔｔｐ：／／ｖｏｔｅ３．ｚｉｙｕ．ｎｅｔ／ｍ．ｐｈｐ？ｓａｇｉ
この機会にぜひ好きなキャラに対する愛を思う存分叫んでください
＾皿＾

32話のおまけ　ポッチャマの悲痛な叫び（前書き）

ナポレオン「みなちゃま！ツンデレのボクちゃまに清き1票を！」

32話のおまけ　ポッチャマの悲痛な叫び

うう……うっ、うっ、うっ……。ボクちゃま、ポチャッマのナポレオン。未来のポケモンチャンピオン、ヒカリのパートナーポケモンさ。せっかくかわいくて優しくて賢くて強いポケモントレーナーのポケモンになったのに大変なことが起きたんだ。ヒカリが森で車のタイヤのような格好をしたトレーナーと戦っていたら突然ボールの中が真っ暗になったんだ。

ボクちゃまは天井を見た。いつもは上半分から外が見えるのになにも見えない。今までこんなことなかったぞ……。目が慣れてきたあと跳ねたり蹴ったりしたけどボールは開かない。何時間も経ったけど光が回復する様子はない。こうなったら空を飛ぶしかないと両手を動かしたけど数秒間しか飛べない。最初は平気だったけどついに涙がぽろぽろこぼれてきた。

「～ッ……～ッ……」

恐くない。ボクちゃまは強いんだから。泣かない。ボクちゃまは偉いんだから。うっとおしい涙を手で払ったけど涙は止まらない。ボクちゃまはついに自分が恐くて泣いていることを認めた。真っ暗な世界がいやで顔を覆ったけど明るい世界は戻ってこない。

「～ッ……～ッ……」

ここはどこ？本当にボールの中？まるで別世界だ……。

「ううう……なんでこんなことになったんだろう？」

話し相手がいないのがこんなに寂しいことだとは思わなかった。

「うわあああん！」

「え？」

どうせ誰もいないんだ。大声で泣いたって大丈夫なはずだ。ボクちゃまは頭を上げて思いっきり声を上げた。

「こんなことならもっとヒカリに甘えておけばよかった～！」

＞ｉ６６１６―６９９＜

ボクちゃまは思ったこと全てを吐き出した。
「ボクちゃまったら……はずかしいからヒカリの前ではつい素直になれなくって……ヒカリは初めてボクちゃまと会ったときからやさしくしてくれたのに……」
背中の毛をゴソゴソあさってボクちゃまはハンカチを取り出した。湖であったおじちゃまからもらったハンカチだ。おじちゃまに返してやってもいいけどいつどこでまた会えるかわからないからボクちゃまが使わせてもらう！
「もう二度と会えないのかな？他のポケモンと一緒にポケモンチャンピオン目指しちゃうのかな？うう～……そんなのいやだよーー！」
「ナポレオン！」
「ん？ヒカリ……？」
ヒカリの声が聞こえた気がした。振り向いたらヒカリが心配そうにボクちゃまを見つめていた。
「……うわあああん！ついにまぼろしまで見えてきたああ！」
「あれ？」
目からあふれる涙の量が増えた。ボクちゃまはヒカリのまぼろしを見るくらい寂しかったのか！
「うっ……うっ……でもこのさいまぼろしでもいいや……」
現実逃避なのはわかっている。それでもヒカリに会えてうれしいと思っているボクちゃまはバカだと思う。
「ヒカリーーー会いたかったよーーー！」
ボクちゃまはプライドを捨ててヒカリのまぼろしに抱きついた。やわらかくて、あたたかくて、心地の良い音が聞こえる。ボクちゃまの体は細い腕と甘い香りに包まれた。ボクちゃまはいつのまにか眠ってしまったんだろう？まぼろしならとっくに消えているはずなのに。なんて良い夢なんだろう……。
「よしよし、ナポレオン。もう大丈夫よ」
「え？」
ボクちゃまは目と鼻の先にあるヒカリの顔をまじまじと見た。よ

く見たらヒカリの背後は白かった。ボクちゃまボールの外に出てたの？

「ええーーーっ！？」

ボクちゃまはヒカリの腕から逃れると慌てて辺りに散らばっていたプライドをかき集めた。

「な、なんだよ！べつにボクちゃまはさみしくなんかなかっ……た……ぞ……」

強気で攻めようとしたのに途中から声がかすれていった。たしかにヒカリやみなちゃまに泣いていたところを見られたのは恥ずかしい。でもそんなことどうでもよくなるくらい安心した。ボクはもう閉じ込められていない。ヒカリと同じ世界にいるんだ。陽気なクルル♪も弱虫キララ★もいる。ボクちゃまはもう１匹じゃないんだ……！

「うわあああああん！うそ！うそだよ！ほんとはさみしかったよー！ヒカリ……大好きだぞーー！」

顔をぶるぶる横に振るとヒカリにしがみついた。もうボールなんかに入らないぞ！死ぬまでヒカリのそばにいてやる！

32話のおまけ　ポッチャマの悲痛な叫び（後書き）

第32話＜中編2＞はおまけのナポレオンのセリフを書いたあとポッチャマ語に直しました。
ポッチャマ語に変換するのめんどうくさかったです（笑）。

登場人物紹介（前書き）

今さらですが登場人物リストを作ってみました。
人気投票の参考にしてください。

登場人物紹介

＞ｉ６７５３―６９９＜
ヒカリ・ハナゾノ
フタバタウン出身　１２歳　７月生まれ
一人称：私
黒髪ロングのかわいい女の子。けっこうモテる。おしゃれで頭がよくて優しいのでみんなの人気者。そのかわり運動音痴＆方向音痴。なぜか水恐怖症。暗闇とおばけが苦手。ジュンとは幼なじみで腐れ縁で、なんだかんだ言って心配している。最近コウキのことが気になっている。たびたび起こるデジャヴ（既視感）に悩んでいるが……。初恋の人アキラにあこがれてポケモントレーナーになった。ポケモンチャンピオンを目指し、ポケモン図鑑のデータを埋め、素敵な恋をするために旅に出る。パートナーはポッチャマのナポレオン。
　手持ち：ポッチャマ、ムックル、コリンク、スボミー、イワーク、ポニータ。

＞ｉ６７５４―６９９＜
ジュン・ハヤミ
フタバタウン出身　１２歳　４月生まれ
一人称：オレ
　金髪くせっけのとてもせっかちな男の子。頭はわるいけど運動神経は抜群。足が速い。父親のことを「ダディ」と呼ぶ。ダディのような凄腕のポケモントレーナーになるのが夢らしい。目下の目標はポケモンチャンピオンになること。ジュンにとってヒカリは幼なじみであり妹でもあり守るべき存在。ヒカリに好意を寄せる男の子を目の敵にしている。コウキとはあまり仲がよくない。いつも無茶ばっかりしていて勢いだけで生きている。パートナーはナエトル。顔はヒカリいわく５８点。

手持ち：ナエトル、ポニータ、キャモメ、ロトム

＞ｉ６７５６―６９９＜
コウキ・テンジョウイン
コトブキシティ出身　１２歳　６月生まれ
一人称：ぼく
　黒髪短髪のまじめな男の子。ナナカマド博士の研究の手伝いをしている。研究者の家系で頭脳派だがロマンチスト。ギリシャ神話にくわしい。美しいものを見るとたまに暴走する。英国紳士みたいに丁寧なので女の子にモテる。父親のような研究者になるのが夢。ポケモン図鑑を完成させるため旅に出る。ポケモンバトルはあまり得意ではないらしい。ポケモンコンテストを見るのが好き。ヒカリに一目惚れした。ジュンとは仲が悪い。実はお金持ち……？ファッションセンスがいい。パートナーはヒコザルのアポロン。顔はヒカリいわく６７点。
　手持ち：ヒコザル、ピッピ

＞ｉ６７５５―６９９＜
アキラ・クロサキ
ジョウト地方出身　１５歳　１２月生まれ
一人称：私
　黒髪ショートのクールなヒカリの初恋の人。３年前ナナカマド博士から旧式のシンオウのポケモン図鑑とヒコザルをもらい旅に出た。ヒカリと別れたあともしばらく交流を続けていた。ポケモンチャンピオンを目指していたがそのあとどうなったのか不明。パートナーのヒコザルはゴウカザルに進化した。ゴウカザルの名前はアマツキ。顔はヒカリいわく８９点。かっこいいためよく都会でスカウトされるらしい。
　手持ち：ゴウカザル、フローゼル

＞ｉ１２７４３―６９９＜
ナナカマド博士
マサゴタウン出身　６３歳
一人称：ワタシ
丸顔のこわい顔をしたおじいさん。シンオウ地方で一番えらい博士。最近カントー地方からシンオウ地方に戻ってきた。シンオウ地方のポケモンの分布を知るためヒカリとコウキにポケモン図鑑を託した。昔アキラをシンオウ地方に派遣したこともある。見かけによらず甘党で以外と優しい。ヒカリいわく顔は３０点。

＞ｉ６７５７―６９９＜
アキコ・テンジョウイン
コトブキシティ出身　７歳
一人称：わたし
　コウキの妹。こげ茶色の髪にパーマがかかっている。おませな女の子でおうちでお姫さまライフを満喫している。悩みは白馬の王子さまがまだ向かえにこないこと。コウキを英国紳士にしたてた張本人。ヒカリが大好きで彼女を姉にするためコウキとくっつかせようとしている。ポケモンはまだ持っていない。ポケモンコンテストに出たがっているらしい。

＞ｉ６７５８―６９９＜
アカリ・ハナゾノ
フタバタウン出身　３０歳？
一人称：ママ
　ヒカリのお母さん。丸みを帯びたショートヘアーの美人。ヒカリという娘がいるのになぜかいまだに『ミス・フタバ』の異名を持つ。天然でおっとりしている。ジュンママと仲良し。よく家でポケモンコンテスト関連の番組を見ている。趣味は料理とガーデニング。お

花が大好き。夫は仕事で家を出ているらしいが……。

＞ｉ１２７４２―６９９＜
ジュンママ
フタバタウン出身　３６歳
一人称：うち
　ぼーっとしているジュンのお母さん。どこにでもいる近所のおばさん。のんびりやな性格でせっかちなジュンとは大違い。いつも急いでいるジュンの世話に手を焼いている。ジュンが将来結婚できるか心配でジュンがヒカリと結婚することを望んでいる。夫はポケモンバトルに夢中でめったに帰ってこない。でもジュンママは気にしない。

＞ｉ１２７４１―６９９＜
ハンサム
？出身　３０代
　茶色いコートを着た国際警察。黒髪で前髪が眉上。口が「へ」の字でいつも気難しそうな顔をしている。事件があるたびに駆けつけてくるが今の所役に立ったことがない。ギンガ団の動きを追っている。

＞ｉ６７５９―６９９＜
ヒョウタ
クロガネシティ出身　１７歳
一人称：ボク
　岩ポケモンのエキスパート。ジムリーダーを勤めながら炭鉱で働いているヒカリたちより年上の真面目な青年。いつも作業服を着ている。知的な顔とほどよくついた筋肉が素敵な８１点である一方地下めぐりが大好きな化石オタク。母は民宿くろがねの女将シズルさ

ん。父はミオシティジムリーダーのトウガン。パートナーはズガイドス。
　手持ち：イシツブテ、イワーク、ズガイドス

＞ｉ６７６６―６９９＜
イン＆サツ

イン
トバリシティ出身　２０代
一人称：おれ
　ギンガ団の下っ端の１人。童顔で男性にしては背が低い（１６０ｃｍくらい）。先輩のサツとよくコンビを組まされている。漫才で例えるとボケ担当。コトブキシティでナナカマド博士の研究成果を盗もうとしたりハクタイシティでヤミカラスのタマゴを奪ったりした。彼女ができないからギンガ団に入ったらしい。
　手持ち：ズバット

サツ
コトブキシティ出身　２０代
一人称：おれ
　ギンガ団の下っ端の１人。目尻が濃いがその他の顔のパーツは地味。後輩のインとよく組まされている。漫才で例えるとツッコミ担当。インにコトブキシティを案内してやると言いながらヒカリとコウキにボコられたり、ハクタイの森でヒカリにニックネームを付けられたりと何かと不運。彼女にフラれたからギンガ団に入ったらしい。
　手持ち：ズバット

＞ｉ６７６０―６９９＜

ライコ
ソノオタウン出身　５歳
　発電所の研究者の娘。ヒカリに父親の救出を依頼した。ヒカリいわく肩までかかったオレンジ色の髪がきれい。変装するときヒカリにツインテールにしてもらったら気に入ったらしい。助けてもらったお礼にヒカリに「あおくてくろい人」の絵をプレゼントした。パートナーはフワンテ。
　手持ち：フワンテ

＞ｉ６７６５―６９９＜
マーズ
トバリシティ出身　１６歳
　発電所に現れたギンガ団の幹部の１人。赤毛のボブが特徴的。服装のことでヒカリとケンカした。自分が世界で一番かわいいと思っているがヒカリと会ってから危機感を抱いている。下っ端たちの間でも「マーズさまよりかわいい美少女がギンガ団の邪魔をしている」と噂されヒカリをやっつけることに躍起になっている。実は元ネットアイドルで多くの中傷を浴びた結果世界を変えようと決めた。ボスのアカギが好き。
　手持ち：ズバット、ブニャット

＞ｉ１２７４４―６９９＜
プルート
？出身　５０代
　最近ギンガ団に入ったばかりの幹部。研究専門で自ら先陣に出向くことはない。紫色の髪で鼻が赤い。服装は白衣を纏っていること以外は普通。アカギに信用されていることをいいことに下っ端に対して態度がでかい。だが本人が思っているほどカリスマはない。

＞ｉ６７６１―６９９＜

モミ
ソノオタウン出身　１８歳
一人称：私
　両親が医者の見習いマッサージ師。大人っぽくおっとりしているけど意外とアウトドア派。ワンピースにブーツという出で立ち。趣味はガーデニングで花だけなくハーブや野菜も育てている。ナタネとは幼馴染でよくハーブを届けにハクタイシティまで行く。ヒカリとは両親の診療所で知り合いハクタイの森を案内することに。パートナーはラッキー。
　手持ち：ラッキー

＞ｉ６７６２―６９９＜
ナタネ
ハクタイシティ出身　１６歳
一人称：アタシ
　草ポケモンのエキスパート。自然が大好きな元気っ子だけどうっかりやでお化けが苦手。冒険家のような服を着ている。茶色い髪にところどころ混じる黒髪が特徴のおかっぱヘアー。無農薬と成分無調整の食べ物にこだわっている。お風呂にハーブを入れるのが好き。モミとは幼馴染。現在ヒョウタさんに片思い中。パートナーはロズレイド。
　手持ち：ナエトル、チェリンボ、ロズレイド

＞ｉ６７６３―６９９＜
あおくてくろい人
？出身　？歳
　ヒカリの行く先々に現れる謎の青年。ギザギザのつばつき帽子にスーツを着ている。ヒカリは彼の姿に見覚えがあるらしい。最初はクロガネ炭鉱で、その次に２０５番道路。ハクタイシティにも現れ

たらしい。パートナーは不明。彼が現れるたびになにかしらの事件が起きているが……。

＞ｉ６７６４―６９９＜
おじさん
？出身　３０代
　水色の逆立った髪のおじさん。ヒカリとジュンがハクタイシティのポケモン像の前で会った。どうやらシンオウ地方の神話を調べているらしい。シンジ湖で気絶したヒカリの額（ひたい）にハンカチを乗せた。ハクタイシティで再会したときジュンにお礼を言われた。ヒカリがハンカチを返そうとするも見失う。

登場人物紹介（後書き）

のちのち追加されるかもしれません。

第３３話　変化　＜前編＞

ジュンにハンカチの持ち主を見失ったことを言うと「また会えるだろ。ドンマイ！」となぐさめてくれた。私はハクタイの森で特訓するため、ジュンはナタネさんとジム戦をするため別れた。特訓を終えてポケモンセンターの前でジュンと再び会った。

「ヒカリ！待ってたぜ！聞いてくれよ。いいニュースがあるんだ！」

ナタネさんに勝ったのかしら？ジュンは余裕の笑みを見せていた。

「あら。私もよ。ムックルとコリンクが進化したの」

現在このまま手持ちに入れるか検討中のクルル♪とキララ★。進化した姿を見たかったし図鑑のデータを埋めたかったから思い切って進化させちゃった。ナポレオンはあんまり良い顔しなかったけど。ナポレオンはまだ進化させたくないのよね。少なくとも、あの技を覚えさせるまでは。それに今のままのほうがかわいいし、持ち運びするの楽だもん。

「マジで！見せてくれよ」

「おいで、クルル♪！キララ★！」

私は得意げに２匹をボールから出した。初めて進化させた２匹のポケモン。かわいかった２匹のポケモンは以前よりたくましくなった。まんまるシルエットだったクルル♪はシルエットがより鳥らしくなった。天辺がくるんとなった茶色っぽい黒色の頭巾。顔を星型に、胸元を丸く覆う白い毛。灰色が残りの体を包み、額にある丸い模様も灰色を主張した。３本の尾は黒・白・黒と分かれピンと立っていた。白い毛の生え具合のせいか目がキリッとしているように見える。

「ムクホーーック！」

「ぎゃ、ぎゃう～！」

「おー！２匹ともかっこいいな！……ん？」

ギクッ。

肩に力が入った。ジュンは目を細めてキララ★を注意深く見た。クルル♪はたくましくなった。それは誰が見てもわかる。でも問題なのはキララ★だった。水色が目立っていた上半身に黒が増え、私の体の半分くらい大きくなった。黒いたてがみは上と左右に跳ねて勇ましく見えた。伸びたしっぽ。2重の黄色い線が入った前足。だけど鋭くなるはずだった目はたれたままだった。ひかえめな性格のせいか進化してもたれ目だけは治らなかった。

「う～ん……オレたちを襲ったルクシオはもっと恐かったような……」

＞ｉ９２６４―６９９＜

「ぎゃうっ!?」

キララ★はそわそわした。目をしばらく泳がせたあと覚悟を決めたのか、ジュンを恐がらせようと威嚇をした。

「ぎゃううう!ぐるるるる……ぎゃう!ぎゃうぎゃう～!」

構えを取ってのどを鳴らし、ジャンプするとひっかくような仕草をした。目を一生懸命釣り上げていたけど声を弱気な鳴き声のせいで台無しになっていた。ジュンは腕を組んでキララ★を見ていたけどやがて頭をかいた。

「わりぃ。あんまり恐くねぇや」

「きゃう～ん」

キララ★は犬のように鳴いた。キララ★の努力は水の泡となり、目も耳もしっぽもたれてしまった。さすがに哀れに思ったのかナポレオンがキララ★をぽんぽんと叩きなぐさめていた。

「ポッチャ。ポチャポチャ」

「ぎゅう～」

「こいつ戦わせないほうがいいんじゃねえか?かわいさコンテストなら優勝できると思うぞ」

「う、うん……」

たしかにキララ★なら勝てるかも。同情で票を取れそう……。私はキララ★とクルル♪をなでるとボールの中に仕舞った。

「で、ジュンのニュースは？」
「よくぞ聞いてくれた！じゃじゃーん！」
ジュンは私の顔に四角い木が３つ並んだようなバッジをずいっと見せつけた。バッジをゲットしたってことは……。
「ナタネさんに勝ったの！？」
「いや、戦ってないけどもらった。森の洋館で手伝ってくれたお礼だってさ」
「ふ～ん」
不戦勝かぁ……。すごいな。試合以外でもバッジをくれることってあるんだ。
「おめでとう、ジュン」
「おめでたいことはまだあるぜ！見ろ！オレの新たな仲間を！」
いつのまにか手にしていたのか、ジュンはモンスターボールを前へ突き出した。バッジを持っていた手を横から顔へスライドさせるとボールを引っ込め、上へ投げた。かっこつけてる……。ボールから出た光は串にさしたおでんみたいな形へと変化した。
「キヒヒヒヒ」
「きゃっ！」
私はつい昔のくせでジュンの背中に隠れた。なにこれっ！？三角形型のコンニャクに大根の輪切りとちくわがついた平面的なおでんが立体的になったみたい。逆さになったコーンに大小の球体がくっついたオレンジ色のボディは水色のなにかに包まれ稲妻型の腕をヒラヒラさせながら浮いている。青い目を囲む輪郭は白く横に線が入っていた。私は図鑑を取り出した。
『ロトム　Ｌｖ．２０』
「ロトム……？」
「ビビッ」
ジュンはうしろを振り返り図鑑を覗きこんだ。
「へえ～。こいつロトムって言うのか。よろしくな！ロトム！」
「キヒッ♪」

「名前知らなかったの……？」
私は少しあきれたけど仕方ないと思った。だってジュンは図鑑を持ってないもん。それにジムリーダーも知らないポケモンだからめずらしいポケモンなのね。
「ゴースト・電気タイプなんだぜ！それにしてもその機械便利だな」
「博士に頼めばもらえるんじゃない？ロトムのことも訊こうよ」
「そうだな。そのあと母ちゃんに連絡しよっと」
こうして私たちはポケモンセンターにあるテレビ電話を使うことになった。

第３３話　変化　＜中編＞

テレビ電話の使い方も博士の電話番号も知らないジュンに代わって私はテレビ電話を操作した。博士の電話番号はポケモン図鑑に登録されていた。ポケモン図鑑をパソコンに繋げればポケモンの論文や資料も自由に見れるから本当に便利。盗まれたら本当に大変ね。指紋認証と声音認証で持ち主と博士以外使えないようになってるけど。

「博士に連絡するわよ」

「おう！」

ジュンは返事はしたもののロトムの能力を試すのに夢中だった。芝刈り機に入ればはっぱの嵐を巻き起こし洗濯機に入れば滝のごとく水をホースから出す。電子レンジに入ったら熱光線を浴びせてくるし冷蔵庫に入り込めば小さな冬が来る。扇風機に取り付けば鎌いたちを呼び起こし、あげくには機械に入り込まなくても電撃を放ってくる。ムチャクチャなポケモンね。ジュンったらナタネさんと組んだとはいえよく捕まえられたわね。室内バトルではほぼ無敵だわ。電気製品がなかったら普通に対処できるけど……。

ナポレオンとノワールがロトムに追いかけられるのを見て私はため息をついた。気がつけばポケモンセンターの待機室はロトムのイタズラでぐちゃぐちゃになっていた。私がテレビ電話を使う準備をしている短時間でこんなに荒れるなんて……。あとでジョーイさんに謝らなくちゃ。私も部屋の掃除を手伝うわ。

私は博士の番号を入力した。着信音はなかなか止まない。やっぱり博士の研究所は忙しいのね。またあとでかけようかなと思ったら七回目のベルでようやく電話は繋がった。

「はい。ナナカマド博士の研究所です。現在ナナカマド博士は手を離せないので助手のぼくが……ってヒカリさあああああん！！」

コウキくんの真面目な返答は私への熱烈なラブコールへと変わった。

「ヒカリさん！お元気ですか？……わかっています。ぼくに会えなくて寂しいから研究所に連絡したんですね！ああ、ぼくとしたことか！愛しいヒカリさんにぼくの電話番号を教え忘れるなんて……！あ、でもぼくあんまり家にはいないんですよね。ポケギアを買いましょうか？よかったらおそろいで！！これでぼくたちいつでも話せますね♪ヒカリさあああん愛してますううううう！」

まだ一言も言ってないのにコウキくんは暴走していた。寂しかったのは私じゃなくてコウキくんのほうじゃ……。

「ビビッ？」

コウキくんの音楽のようなセリフを不思議に思ったのかロトムが近づいてきた。ジュンは自分のしでかしたことに気づいたのか雑巾で床を拭いていた。ナポレオンも何気に手伝ってる。えらい！ノワールはまだ赤ちゃんのせいか疲れ果ててボールに戻ったみたい。

「コウキくんこんにちは。電話越しとはいえ会えてうれしいわ。ねえ、このポケモンのこと知らない？」

「キヒッ♪」

カメラの前で笑う子どものようにロトムは歯を見せて笑った。イタズラしないといいけど。

「ああ！ロトムですか！めずらしいですね。体がプラズマで出来ているので電気製品に入り込むことができるんですよね。冷蔵庫や電子レンジに入ることでフォルムチェンジできるんです」

「フォルムチェンジ？」

初めて聞く言葉だ。独学とはいえ今までちゃんと勉強した私が知らないだなんて……使う教科書が古すぎたかしら？フォルムチェンジって最近できた専門用語かな。

「フォルムチェンジは天気やアイテムなどの状況変化によってそのポケモンの姿やステータス、特性が変わることを言います。ロトムの場合冷蔵庫に入ったらフロストフォルム、電子レンジに入ったら

ヒートフォルム、洗濯機に入ったらウォッシュフォルム、扇風機に入ったらスピンフォルム、芝刈り機に入ったらカットフォルムになります。電気製品に入った状態だと防御・特攻・特防が上がります。あとで資料を送るので印刷してください」

「ありがとう」

フロスト、ヒート、ウォッシュ……覚え切れないわ。あとで資料を読んで頭に叩き込もう。ジュンに教えるまえにまず私が理解しなくちゃ。

「それにしてもすごいですね！ロトムは伝説のポケモン並みにレアで捕まえにくいポケモンなんですよ。ロトムを捕獲するだなんて海神ポセイドンが持つ三叉槍トライデントを奪うのと等しいくらい難しいのに……よく手に入れられましたね！一体どんな手を使ってポセイドンを騙したのですか！？知恵？誠実さ？それとも魅力？ああ……さすがヒカリさん！あなたならゼウスに惚れられてもヘラの嫉妬から逃れられるに違いありません！！」

「つかまえたのオレだぞ」

ジュンがふいにひょこっと顔を出した。なんとか床を拭き終わったみたい。

「……」

コウキくんは賛美のポーズを取ったままフリーズしていた。い、いきなりブチ切れたりしないわよね……？

「……それは失礼。ジュン、よくぞロトムを捕獲しました。ナナカマド博士もさぞかし喜ぶことでしょう。感謝します」

さっきまで浮かれた感情はどこに行ったのと訊きたくなるくらいコウキくんは真面目になった。コウキくんって感情的なのか理性的なのかときどきわからなくなるわ……。

「いきなり委員長モードになるなよ。気持ちわりいな。……おまえにほめられるとなんか変な気分だな」

「同じ女性を愛するライバル同士とはいえ恋愛とポケモン研究は別のものです。ジュン。あなたの功績は賞賛に値します」

「宝石は小3に値する？」
「……今度3人で一緒にお勉強会でもしましょうか。とにかくありがとうございます。それではぼくは博士のお手伝いがあるので失礼します。ヒカリさん、また今度一緒にデートしましょうね♪」
キュンｖ
「え、え～と……」
「させるか！」
プツン。
通信が途切れた。ジュンとナポレオンの不機嫌そうな声が聞こえたけど私はぼーっとしていた。私が我に返ったのは図鑑の着信音が鳴ったときだった。コウキくんからロトムの情報が届いたんだ。印刷ボタンを押すときなぜかインサツ団……じゃなかった。ギンガ団のことを思い出した。プリントアウトした紙をまとめていたら女性の悲鳴が聞こえた。ジョーイさんに部屋を傷つけたことがバレたんだ！私はあわててジュンの失敗をフォローしに行った。

第３３話　変化　＜中編＞（後書き）

週一更新は守ります。守れなかったら次の週に2本アップします。
この小説を読むことによって救われる人がいるかもしれない。
だから私は書き続けます。自分のために。他人のために。
生きるのは大変ですが・・・生きましょう。生まれてしまった以上
人生をとことん楽しみましょう！
あなたの人生を楽しむ手助けが少しでも出来れば幸いです＾＾

第３３話　変化　＜後編＞　ヒカリの日記　４月１０日（日）（前書き）

人生を自己流に楽しみたいです。

第３３話　変化　＜後編＞　ヒカリの日記　４月１０日（日）

ジョーイさんに何回も頭を下げて謝ったあと私たちはポケモンセンターの待機室を片付けた。焼け焦げた壁や傷つけられたイスは弁償することになった。ジュンは私にこっそり耳打ちした。

「なあ、コウキの電話番号教えてくれね？金借りてーんだけど……」

「え？い、いいけど……お世話になりすぎじゃない？」

コウキくんからロトムの資料とともに送られてきた無駄に長いラブレターに電話番号が書いてあった。

「サンキュー♪」

ジュンは電話番号をメモした紙を取ろうとしたけど私はとっさにガードした。

「ジュンがロトムのデータを暗記したらわたすわ」

「ちぇっ。まあいいや。オレもロトムのこと知りたかったし」

「ビビッ♪」

ジュンはロトムにイタズラを叱ったあとボールに戻した。

『４月１０日　日曜日

昨夜はあわただかったけど今日は平和な朝を迎えられた……と、思ったらジュンに無理矢理外に連れ出された。ジュンに引っぱられるままたどりついたのはハクタイシティの記念物ポケモン像。その像を見たとき頭がズキッとして空耳が聞こえた。……もうなんなのよ？この奇妙な感覚。もうやんなっちゃう。あとでこの町の人に聞いたんだけど解説プレートが２つあってそれぞれ別のことが書かれてたらしいの。だけどプレートは両方とも最近盗まれたんだって！ひどいことするわね……貴重な文化財なのに。いったい誰の仕業かしら。

話をいったん戻すけどポケモン像であるおじさんと会ったの。水色の逆立った髪の毛と力強い目が印象的だった。時間と空間がどうのこうのとひとり言を言っていたおじさんは実は湖で私を助けてくれた人だったの！気絶した私を運んでいるジュンに会って私の具合を見てくれた上にハンカチをくれたんだって。ようするにナポレオンが持っていたハンカチの持ち主だったの！そのことに気づいたときにはおじさんはかなり離れていたから急いであとを追ったわ。だけど私……見ちゃったの。おじさんがいる反対方向の道を歩く「あおくてくろい人」の後姿を！クロガネ炭鉱ですれ違い、ライコちゃんが発電所の近くで見かけた「あおくてくろい人」……あの後ろがギザギザした帽子を見間違えるはずがないわ。なぜか見覚えのあるあの人の後姿に胸が苦しくなって……追いかけたいけど足が動かなかった。おじさんを追いかけるか「あおくてくろい人」を追いかけるか迷ったけど恩人のおじさんを追いかけるほうを優先した。だけど結局見失っちゃったの！もう～。私のバカバカバカーー！！

気を取り直してハクタイの森でポケモンのレベル上げに励んだ。手持ちポケモンを進化させることに戸惑ったけど思い切ってクルル♪とキララ★を進化させた。２匹とも大きく強くなったわ！ジュンに自慢したらキララ★はルクシオに進化しても控えめだった。控えめなキララ★はルクシオに進化しても控えめだった。鳴き声が「ぎゃ、ぎゃう～」じゃしかたないよね……。コリンクのときの鳴き声だった「コ、コリ～ン！」と大差ないものね。アハハハハハ。……でも大好きよ！

ジュンは戦わずしてバッジを手に入れたこととめずらしいポケモンを仲間にしたことを自慢した。コウキくんの話によるとこの電気・ゴーストポケモンの名前はロトム。でもこのロトムが曲者で扇風機や電子レンジに入って姿を変えては遠慮せず攻撃してきた。おかげで待機室はボロボロ。壁には焦げ跡が出来たしイスやテーブルは傷

だらけでソファはびしょ濡れ。凍った床はポニータのランスに砕いて溶かしてもらった。ジュンがコウキくんと通信している間に一回拭いたのにまた別の箇所を拭くことになった。ランスとラミア以外のポケモンに手伝ってもらったけど時間がかかったわ。おまけにジュン相手に「初心者でもわかるポケモン講座～ロトム編～」を教えたらジュンの頭の要領が悪かったから長引いちゃった。

だけど待機室を片付け終わったらポケモンセンターを追い出されちゃったの。「もうモンスターボールの修理は終わったので他の場所で泊まってください。ポケモンを回復するのはいつでも歓迎です」だって。いつも笑顔のジョーイさんだけど今回ばかりは顔が若干ひきつっていたわ……。ロトムったらやりすぎ！で、どこで私が「ポケモン講座」をやったと思う？……ナタネさんの家よ！ナタネさんといえばジムリーダーよ、ジムリーダー！モミさんも泊まっていたのに私とジュンまで泊めてくれるだなんて優しいわ！おまけに明日の朝一番にジム戦の相手してくれるって約束してくれたの。もう感謝しきれないわ！明日全力でナタネさんに挑むわ。全力で戦うことが私にできるせめてものお礼だわ。私ったらお世話になってばっかりだなぁ……。コウキくん、ナナカマド博士、ポケモンスクール、民宿くろがね、モミさん、ポケモンセンター、そしてナタネさん。今までお世話になった人にも、これからお世話になる人にもいつかきちんと恩返しできるようになりたいな。』

ピピピピピピピピッ。カチッ。

目覚まし時計のアラームを消してぼんやりした頭で辺りを見回した。まず最初に目に入ったのは葉っぱで覆われた空。上半身を起こして横を見るとトロピカルな花や葉っぱがあった。

「私……いつのまにジャングルに来ちゃったの……？」

一瞬ジャングルにいるかと錯覚したけどよく見たら花も葉も壁と天井にペイントされたものだった。迷彩模様のシーツが敷かれた空

っぽの木製ベッド。手作りっぽいけどよく出来ている木製の家具があちこちに置いてあった。窓際には小さな植木鉢が、部屋の角には観葉植物が飾ってある。木製の床に敷かれたパステルグリーンの布団に私は横たわっていた。

「あ、そっか。ここナタネさんの部屋だったわ」

今日は待ちに待ったジム戦。本当は昨夜のうちにナタネさんに挑もうと思ったけど木曜日に発電所の前で倒れたことを思い出してやめた。無理は禁物よね。着替えを済ませ、ふとんを畳むとナタネさんの部屋を出た。

＊＊＊

「ホホホホホ！待ってたわよ！知っているかと思うけどあたしがハクタイシティのジムリーダー！草タイプの使い手、ナタネ！」

「ロズッ！」

ナタネさんに続いてロズレイドはポーズを決めた。それに対抗するようにナポレオンもポーズを取ってかっこつけた。

「ポチャー！」

ジムの仕掛けを抜けて奥にたどりついた私をナタネさんは歓迎した。緑のフィールドの中央にある花壇は時計になっていて人が乗れる大きさの針が7時25分で止まっていた。まだベイビィポケモンのセニョールに草ポケモンの戦い方を参考するためにボールから出したら花壇に広がるお花畑を見て喜んでいた。私もお花は大好きだし踏むなんてことできないから私は素直に針の上を通ってその先にいるトレーナーと戦った。一人倒すたびに時計の時間は変わり、3人目を倒したら針は12時半を指した。その先で待っていたのが満足そうな顔を浮かべたナタネさんだった。

「ジュンの友だちのあなたのことだもの。絶対ここまで来る。そう思ったんだけどズバリだったよ！なんていうかそんな雰囲気出してる」

「ありがとうございます」
「で、ポケモン勝負の前にこんなこと訊くのもなんなんだけど……」
ナタネさんは少しそわそわした。傍らにいるロズレイドは「ロズッ！ロズッ！」と小声でナタネさんを応援（？）していた。
「あなたこの前ヒョウタさんと戦ったんでしょ？私のことについて……なんか言ってなかった？」
「はい？」
予想外の質問に声が裏返ってしまった。なんでそんなこと今訊くんだろう。ヒョウタさん他のジムリーダーについてなにか言ってたっけ？
「え～っと……民宿くろがねを出る際に『このシンオウ地方にはあと7人のジムリーダーがいる。みんなボクより手強いポケモントレーナーばかりだよ！』とは言っていましたが……」
「……そっか。そんなものよね……」
「ロズー！ロズー！」
なぜかナタネさんを励ましているロズレイド。ナポレオンとセニョールは顔を見合わせて「なんのことだろう？」と話していた。
「じゃ、じゃああなたはヒョウタさんのことどう思う？なにかされなかった？」
ナタネさんは真剣な顔で訊いて来た。目がなんだかギラついていて恐い。後半の質問はよくわからないけどうそをついたら失礼だし正直に答えることにした。
「かっこいいと思います。ジムリーダーとしてだけでなく炭鉱でも働いていてしっかりしているな～と思いました」
それを聞くとナタネさんの顔が豆電球のようにぱあっと明るくなった。
「でしょ？でしょ！やっぱりヒョウタさんってかっこいいよね～。今流行りの細マッチョ？だっけ？やさしくてたくましくて頭も良いってもう反則よね！」
「はい。マッチョは苦手ですけどやっぱり男の人はある程度鍛えて

あったほうがいいですよね。動けなくなったときお姫さま抱っこで民宿まで運んでくれたし少しドキッとしちゃいました！」

「お姫さまだっこ……？」

楽しいおしゃべりは一気に冷めた。私は自分の言ったことを後悔した。なにが理由で怒らせたのかはわからない。ナタネさんは下を向いていて顔は見えなかったけど目をギラつかせていたとき以上に暗いオーラが出ていた。

「他に……他になにかあったの？」

ゾクッ。

背筋が凍った。ナポレオンとセニョールも不穏な空気を感じて互いの体を寄せ合った。ナポレオンは『すいとる』を使うセニョールが苦手でいつも距離を置いていたのに。

「い、いえ……特になにも……」

「じゃあなにか言われなかった……？」

ナタネさんは未だに顔を上げない。表情を読めないことがかえって恐かった。

「そんなことよりポケモンバトルしません？せっかくここまで着たんですし……」

「はぐらかさないで……ヒョウタさんになにか言われなかった？」

「え、え～っと……」

私は困った。私の答え次第でいや～な展開になるかもしれない。だけどうそをついても見破られそうだしうそをつくのはきらいだった。

「ヒョウタさんに『君は化石のように綺麗だよ』って言われました」

パシーッン！

「ポチャーッ！？」

「スボミーッ！？」

私の前で寄り添っていたナポレオンとセニョールが離れた。２匹がさっきまでいた場所には棘のついた蔓（つる）が刺さっていた。え……？

「……『蔓（つる）の鞭』」

「!?」
呆然としていた私はナタネさんの声で我に返る。ナタネさんがロズレイドに『蔓の鞭』を命令したからナポレオンとセニョールは避けたんだ。
「許さない……」
「え?」
「ヒョウタさんに特別扱いされたあなたを許さなあああああああああい!!」
＞i７４２７―６９９＜

第３３話　変化　＜後編＞　ヒカリの日記　４月１０日（日）（後書き）

フィリピン人のいとこにチャットで話しかけられたのと小説が予想以上に長くなったので遅れました（笑）。

第３４話　花の乙女　＜前編＞（前書き）

ＶＳナタネ戦ついに開始！

第３４話　花の乙女　＜前編＞

ナポレオンとセニョールが悲鳴を上げて離れた。さっきまで2匹が立っていた地面には棘のついた蔓(つる)が刺さっていた。

「許さない……」

「え？」

「ヒョウタさんに特別扱いされたあなたが許さなあああああああい！！」

「ロズーーーッ！」

ロズレイドはナタネさんの声に呼応した。ロズレイドが青いブーケから放った蔓を回収し今度は赤いブーケから蔓を出した。ナポレオンとセニョールは2回目の攻撃もよけた。

「待って！ナポレオンとセニョールは戦闘に参加しないわ！見学しに来ただけよ！」

「そんなの知らないわよーーーー！」

ロズレイドは両手から『蔓の鞭』を交互に出し、しばらくしないうちにハクタイジムのフィールドは蔓の嵐へと変化した。まずい……！今のところ『蔓の鞭』は一撃も当たってないけど鞭を打つスピードがどんどん速くなっていく。草・毒タイプのセニョールはともかく水タイプのナポレオンが攻撃を受けたら即死(そくし)だわ！

「ナポレオン！セニョール！下がって！」

2匹とも大人しくボールに戻らないと判断した私は2匹を場外から出させた。

「お姫さま抱っこですって……？私だってお姫さま抱っこされたいわよーーーー！！」

ごもっともです！！……と言いたかったけど黙っていた。ヒョウタさんにお姫さま抱っこされた私が同意したところで説得力なんてない。

「『羽のように軽いね』って言われたいわよーーーー！！」

羽のように軽いとは言われてないって！！これらのナタネさんのセリフとさっきの振舞いからはっきりわかった。ナタネさんはヒョウタさんが好きなんだ！それでヒョウタさんに優しくしてもらった私に焼きもちを焼いているんだ。なんとかして誤解を解かなきゃ！

「ランス！」
「ヒヒーッン！」

私は迷わず火の馬ポケモンのランスを選んだ。もうヒョウタさんのときのように油断はしない。全力で倒す……！

「『マジカルリーフ』！！」
「ヒヒン？」
「よけて！ランス！」
「ブッヒヒーン！」

同じ女の子として不穏な空気に気づいたのかランスはとまどった。だけどすぐ気を取り直して気合の入った鳴き声を出すと緑のフィールドを駆け回った。ロズレイドは両手から2丁拳銃のごとくカラフルなはっぱを次々と飛ばした。ランスは軽々と避けたけど絶えず発

光する不思議なはっぱはランスをどこまでも追いかけてくる。

「無駄よ！『マジカルリーフ』は必中の技。避けられないわ！」

「ロズ！」

ロズレイドは更にはっぱを追加した。はっぱの大群はもはやきれいというよりグロテスクに見えた。こうなったらおとなしく攻撃を受けるか焼きはらって抵抗するしかない。

「ランス！『火の……！」

―ズシャッ。

「えっ？」

ランスは口から『火の粉』を出しかけていたのに突然転び、『マジカルリーフ』をもろに喰らってしまった。

「かかったわね！『草結び』！お次は『毒針』よ！」

「ローッズ！」

先端が紫色になった蔓がランスの胴体をようしゃなく刺した。

「ヒーーーン！！」

「ランス！」

今さらだけど私はバッグを漁った。関係ないポケットやポーチを開けてようやく図鑑を見つけると状況を確認した。ランスのＨＰゲージは黄色になっていた。おまけに毒にかかっている。そんな……！手加減もしてない。相性も有利。スピードだって勝ってる。相手

と同じレベルなのに私……負けてる……？これが嫉妬の力なの！？

「『君は化石のように綺麗だよ』ですって……？あたしだって……あたしだって『化石のように綺麗だね』って言われたいわよーーー！！」

「えええええええっ！？」

いたーーーーー！！いた！いたわ！『化石のように綺麗だね』って言われて喜ぶ女の子なんていないと思ってたけど……いたーーーーー！っていうかいる！今！まさに！目の前に！現在進行形で……いる！

「ヒヒ～ン」

「！？」

倒れたランスを見て私は冷静を取り戻した。クリームみたいに綺麗な体は毒に置かされて紫がかっていた。私は両手で顔を叩いた。トレーナーの私がしっかりしないでどうするのよ！

「ランス！がんばって！『火炎車』！」

「ブッヒヒーン！」

たてがみ、しっぽ、足の付け根……ランスはありとあらゆる炎が出ている箇所の火力を上げた。ランスの足を縛っていた『草結び』は燃え解放されたランスはそのまま勢いに乗ってロズレイドに体当たりした。

「ロズッ……！」

ランスの忠誠心（ちゅうせいしん）とタイプ一致、そして草ポケモンの弱点が炎だっ

たおかげでロズレイドは一発で倒れた。黒焦げになったロズレイドを見てもともとご機嫌ナナメだったナタネさんはますます顔をしかめた。

「そうやって草ポケモンをバカにして……！」
「さきに仕掛けてきたのはそっちでしょう！それにこれはポケモンバトルです！」
「ポチャポチャー！」
「スッボミ～！」

場外に非難したナポレオンとセニョールは野次を入れた。ナタネさんにひとにらみされただけで「あれ～？ぼくたちなにも言ってませんよ～」という顔で口笛吹いたけど。

「チェリンボ！」
「チェリーッ！」

赤いボールから飛び出したのはボールより薄い赤色の顔のついたさくらんぼだった。さくらんぼなのに実が不揃いで大きい実には足がついていて小さい実は横でだらんとぶらさがっている。顔が二つついているってところはマタドガスと似てるけどチェリンボのほうがだんぜんかわいい。大きい実はつぶらな瞳をしているし小さい実は眠そうに目をつぶっていて癒される。

「よくやったわ！ランス。交代よ！」

ロズレイドを倒したものの毒でランスのＨＰが減ったのを私は見逃さなかった。このまま放っておいたらＨＰがレッドゾーンに突入しちゃう。毒消しを使ってもいいけどナタネさんが私に道具を使う暇を与えてくれるとは思えない。

「出番よ！クルル♪！先輩風吹かせちゃって！」
「クルーーーッ！」

ムクホークになったクルル♪は回転しながら現れた。進化して大きくたくましくなった姿はムックルのときより頼もしくなった。クルル♪はヤミカラスの入っているボールにウインクするとチェリンボを威嚇した。鳥ポケモンの後輩ができたからやる気まんまんね。

「あたしだってヒョウタさんと2人きりで炭鉱で働きたいわよーー！『成長』！」
「炭鉱で働いてないし働きたくありません！クルル♪、『ついばむ』のよ！」
「クルッ！」

クルル♪は目を光らせてチェリンボ目掛けて飛んだ。クルル♪はチェリンボの頭上を通り過ぎてチェリンボがほっとしたの束の間、大きな実は異変に気づき悲鳴を上げた。クルル♪は小さな実のチェリンボをおいしそうに平らげていたからだ。

「ギャーーー！！あたしのチェリンボがーーー！！」
「ごちそうさまでした！」

ちょっとひどいかもしれないけど勝つためにはしかたがない。残った大きい実のチェリンボは相棒を取られたことで物理的なダメージを、相棒を食べられたことで精神的なダメージを受けていた。モミさんにチェリンボの小さい実は栄養がつまっていておいしいからよくムックルについばまれるって言ってたけど本当のことだったのね。……実を取られてもまた生えてくるって言ってたから大丈夫よね？たぶん。

「『マジカルリーフ』！」
「チェリリリリッ！」
「……クルッ！」

魔法のはっぱが空中にいるクルル♪を容赦なく迎撃した。直撃したけどダメージはたいっしたことない。

「ちょっとー！進化するの遅れちゃうじゃないのー！」
「ごめんなさい！……『翼で打つ』！」
「反省してないじゃない！『宿り木の種』！」

クルル♪は片翼で叩こうと再びチェリンボに接近した。チェリンボは怒った顔で『宿り木の種』を飛ばすも既に手遅れで翼で打たれた。

「きいいいいいいいっ！ロズレイドだけでなくチェリンボまで…まだ終わりじゃないわ！なーちゃん！」
「る～！」

最後のポケモンはなんだろう？その答えはすぐわかった。ボールから大人しく出てきたのは茶色い甲羅を背負った黄緑の陸亀だったからだ。

第３４話　花の乙女　＜前編＞（後書き）

文章にいつものキレがないぜ！（笑）
私にとって小説を書くということは呼吸をするのと等しいことなのでどんなに忙しくなっても書くのはやめません。

第３４話　花の乙女　＜後編＞（前書き）

負けられない女の戦い……！

第３４話　花の乙女　＜後編＞

「っ！？ナエトル！」
「る～」
ナタネさんは戦闘不能のチェリンボをボールに戻した。私もクルル♪をこれ以上戦わせるのは不利だと思ったからクルル♪を戦場から引っ込めた。
「どうしたの？ナエトルを持っているのはあなたのボーイフレンドだけだと思った？」
「ジュンは私の彼氏じゃありません！ノワール！」
「カアーー！」
ヤミカラスのノワールは少し羽ばたいたあと地面に足をつけた。ひょこひょこと歩いていたかと思えばいきなり翼を広げナタネさんのナエトルを威嚇した。もっとも、ヤミカラスの特性は『威嚇』じゃないからクルル♪と違って相手の攻撃力を下げることはできないんだけど……。
「『日本晴れ』！」
「なあ～」
ナーちゃんと呼ばれたナエトルは大自然に呼びかけた。壁に設置されている窓はおろか天井の窓からも差す光が増した。雲一つない空。ジリジリ照らす太陽。『日本晴れ』……たしかしばらくの間炎タイプの威力を上げ、草ポケモンの行動も有利になる技って教科書に書いてあった。暑い……。体は体温を下げようと汗を分泌した。
「あたしだって……あたしだって……」
ナタネさんが唇をきゅっと結んだ。なーちゃんの口から光から光の粒子が漏れている。大技が来る……！
「ヒョウタさんとお花畑で追いかけっこしたいわよーーーーーーーー！！」
「よけて！」

なーちゃんの口からまばゆい光線が発射された。出た！草ポケモンの十八番（おはこ）『ソーラービーム』！普段なら光を吸収するのに時間がかかるのに『日本晴れ』のおかげで溜めずに攻撃できた。いくら鳥ポケモンに草タイプの技が効かないからってこんな威力の高い技を受けたらひとたまりもない。『ソーラービーム』は一直線に飛び花壇の真上を通り過ぎ扉に当たった。ノワールは間一髪で避け即座に反撃に出た。

「『騙まし討ち』！」

「なっ……！」

ノワールは大技で隙が出来たなーちゃんの背後に回り一瞬で打撃を加えた。

「『つつく』！」

「『リフレクター』！」

ガッキーン。

光の壁がノワールのくちばしをさえぎる。物理技の威力が半減した。そんな！ヤミカラスは物理攻撃しか覚えてないのに！

「『おどろかす』！」

「『マジカルリーフ』！」

ノワールは目と口を思いっきり開けバカみたいに鳴いた。

「グギャーー！」

「るー！？」

なーちゃんはびっくりして腰が抜けた。ひるんだ！

「もう一度『つつく』！」

「カーー！」

甲羅で覆われてない箇所をつついたけど再び光の壁が攻撃を阻む。図鑑をチラ見した。ダメージが少ない。『リフレクター』のせいだわ。

「私だってアキラと一緒にお花畑で追いかけっこしたいわよ！」

「カー！カー！」

ノワールは距離を取るために離れた。「そうだ！そうだ！」と同

意している。……ん？ちょっと待って。アキラって女の子じゃなかったっけ？

「だったらそうしなさいよ！『種マシンガン』！」

植物の種がノワールに向かって次々と飛ばされる。何発かよけたけど少し当たってしまった。

「ごめん！間違えた！アキラ女の子だった！」

「あんなにかっこいい人が女の子なわけないでしょーーー！！」

「それが女の子なんですよ！」

敬語やタメ口が混ざりながら私たちの会話は続く。もうラチが開かない。次で終わりにする！

「ノワール！気合入れて！」

「カーー！！」

ノワールは漆黒の翼をたたみ地面に降りた。

「なにをするつもり？泥棒ねこちゃん」

「ハロー・スキティは好きですけど泥棒でもねこでもありません」

ノワールは千鳥足で走り始めた。最初は遅かったけどそのスピードは増ししまいには翼を広げ地面を蹴り、回転し始めた。体全体を動かしているけどくちばしだけは敵を捉えている。母はヤミカラス。父はオニドリル。父から受け継いだ鳥ポケモン上位物理攻撃技……！

「まさかこの技……！」

「『ドリルくちばし』！！」

「やばい！『眠り粉』！」

「るー！」

バフンッ。

白い粉が撒き散らされる。眠気を誘う雲に突っ込んでもノワールの攻撃は止まらない。

「カアアアアアアアッ！」

ギュルルルルルッ。

ノワールのくちばしがなーちゃんの前足の間をすり抜けてお腹に直撃する。攻撃の勢いは留まることを知らずなーちゃんが木にぶつ

かるまで『ドリルくちばし』は続いた。
「なあああっ！」
急所に当たったと表示する図鑑。ぐんぐん減っていくなーちゃんのＨＰ。お腹にくちばしが当たり、背中を木にぶつけたなーちゃんは白目を出して気絶した。勝った！
「私の勝ちです。ナタネさん」
「カー♪」
ノワールはほめてほめてと言いたげに私のほっぺたにくちばしを押し付けてくる。このくちばしでナエトルを仕留めたと思うとちょっと恐い。だけどノワールが私のためにがんばってくれたことはなによりうれしかった。
「ど、どうして『眠り粉』が効かなかったの？」
「ヤミカラスの特性って知ってます？」
「ううん」
ナタネさんは首を横に振る。私は図鑑を操作して画面を見せた。
『ヤミカラス♀　Ｌｖ．２０
がんばりやな性格。我慢強い。
特性：不眠』
「不眠……？」
「戦闘中は眠りません。この特性なら夜の見張りもバッチリです！」
「カー！」
ナタネさんは目をパチクリさせた。だけどすぐに気を取り直してふっと笑った。
「アハハッ。負けちゃった」
ナタネさんは空気が抜けた風船のようにしゃがみこんだ。怒りはあまり感じられない。ポケモンバトルで吹っ切れたのかしら？
「あ～あ。ロトムを捕まえられるくらいガッツがある子だったのに……残念」
口元は笑いつつも目元は困惑していた。ナタネさんはなーちゃんをねぎらいながらボールに戻した。ズボンについた汚れを払いなが

ら彼女は立ち上がった。
「すごい！あなたとっても強いんだ！」
嫉妬で狂ったナタネさんはもういない。軽い足取りで私に近づき祝福の言葉を送ってきた。
「改めて言うけどあなた強いんだ！それだけポケモン育てるの大変だったってことでしょ？でもそれがあなたのポケモンへの愛情ってやつだよね」
肩を掴まれナタネさんに褒められる私。ナタネさんのギャップが強すぎてどう反応すればいいかわからない。ナポレオンとセニョールが心配して私の元へやってきた。
「ポチャポチャ。ポチャー？」
「スッボミ～？」
ナタネさんはセニョールを抱き上げて優しく語った。
「こんにちは。スボミー。それともセニョールだっけ？あたしたちのバトルは草ポケモンの戦い方の参考になった？あなたもきっと立派なロズレイドになるわ。あとで『光の石』をあげるからね。ロゼリアに進化したあと心の準備が出来たら使うのよ」
「ミー♪」
「あ、あの……」
色んな考えが交差した。今夜の宿どうしようかな？引き続きナタネさんの家でいいかな？それともセニョールだっけ？あたしたちのバトルは草ポケモンの戦い方の参考になった？あなたもきっと立派なロズレイドになるわ。あとで『光の石』をあげるからね。ロゼリアに進化したあと心の準備が出来たら使うのよ」
「ああ、さっきは逆ギレしてごめんね。かわいくて女の子らしくてポケモンバトルに強い……そんなあなたをヒョウタさんが好きになってもしかたないよね。わかったわ。ここはいさぎよくあたしが身を引く。今は辛いけど私にもいつか運命の人が……」
ええっ！？ちょっと！ナタネさん勘違いしてる！目にうっすら涙を浮かべてるし！
「待ってください！私ヒョウタさんのこと好きじゃありません！ヒ

ョウタさんも私のこと好きじゃないと思います！」
「え？」
私は脳内の彼氏候補リストからヒョウタさんの名前に線を引いた。
グットバイ、ヒョウタさん。あなたはかっこいいし気になってたけどナタネさんにお譲りするわ。だってナタネさんのほうがあなたにお熱だもの。
「ほ、本当？」
「はい！ヒョウタさんは今好きな人いないと思います。私に優しくしてくれたのは炭鉱で暴れるイワークを沈めてくれたからですよ」
ナタネさんは納得してないけどうれしそうだった。ヒョウタさんがまだフリーだってことがわかったから希望を取り戻したのね。
「でもあなたのこと綺麗って……」
「私が汚れちゃったから元気付けようとしてくれただけですよ。ナタネさんにまだチャンスはあります！」
「そ、そっかな？」
平静を装うとするけど口元が緩んでる。やっぱりヒョウタさんのこと好きなんだ。
「私が協力します！『花の乙女同盟』を作りませんか！恋する乙女の恋を応援する同盟です。メンバー同士の好きな人が被ってなかったらお互いの恋をサポートしましょう！恋してない乙女も入会ＯＫ！よかったらモミさんも一緒に！」
ヒョウタさんと付き合える可能性が見えてきてナタネさんは有頂天になった。拳を握って目を輝かせると首を何度も縦にふった。
「いい！それ。いい！いいアイディア！作りましょう！『花の乙女同盟』！ヒョウタさんと付き合えるならあたし、なんでもする！」
私は手を胸に当て誠意を持って答えた。
「はい！全力でサポートします。フタバタウンで何人もカップルを作った私を信じてください！」
「まあっ！頼もしい！」
「そ・の・か・わ・り！私の恋も手伝ってくださいね♪」

「もちろん！」
「ポチャ？」
「ミ～」
ポケモンたちはもはや蚊帳の外。こうして最初反発していた私たちは意気投合し、女の子の恋を応援する『花の乙女同盟』を組んじゃいました！テヘッ♪

第３４話　花の乙女　＜後編＞（後書き）

やった！第３４話を前編＆後編だけで終わらせられた！（笑）
それにしても私の文章って堅苦しいですね。

ちなみにナエトルは『しびれごな』も『ねむりごな』も覚えられません。
ナタネのナエトルは特別ってことでよろしくお願いします！
あと今さらですがこの小説はポケモンが技を４つ以上使えます。

第３５話　騒動　＜前編＞（前書き）

華やかなスタート。しかし……？

第35話　騒動　＜前編＞

「ジュンと付き合いなよ～。ヒカリとお似合いだと思うよ？モミもそう思わない？」
「う～ん……ちょっと彼元気すぎじゃない？恋人というか弟みたい」
「ですよね！私もうちょっと大人っぽくて空気読める男と付き合いたいんです。あとできればイケメン希望で！」
「なにそれ～？」
私たちは3人で笑った。ナタネさん、モミさん、そして私―ヒカリ―は数時間前『花の乙女同盟』を作りました！ナタネさんとのジム戦も終わってちょうどお昼の時間になったからこうしてランチを楽しんでいる。
「知ってる？ナタネちゃんってヒョウタさんに一目惚れしたのよ」
「こ、こら！モミ！」
「えーっ！？本当ですか！？ナタネさんかわいいー♪」
ここはハクタイシティで人気のフルーツパーラー。ここで出されるメニューは全てフルーツが主役。クリームやチョコで飾られ、パンやアイスクリームコーンに盛られたフルーツたちは可愛くて華奢でまるで女の子みたいだった。自然の甘い香りに包まれた私たちはフルーツパフェを食べながら話に花を咲かせていた。
「ま、まあね……。その年に採用された新人ジムリーダーがあたしとヒョウタさんだったの」
ナタネさんは赤面しながら答えた。私とモミさんは顔を見合わせてクスッと笑った。普段はボーイッシュで自信満々なのにヒョウタさんのこととなるとあたふたしちゃう。やっぱりナタネさんも乙女なんだな。かわいい！『花の乙女同盟』作って本当によかった。恋バナが楽しすぎるもん！
「と、とにかく！あたしジムリーダーになってよかった！ジムリーダーになってから草ポケモンとアタシをいじめる人はいなくなった

し今では町中の人たちがアタシを頼ってくれる。それにヒョウタさんとも出会えたもの。これも全部エリカさんのおかげね！」

「エリカさん……？」

ふと夢で見た袴（はかま）の少女が思い浮かんだ。痛みとともに彼女の笑顔が途切れ途切れに見える。まるで電波が悪くて映らないテレビみたいに。

「ええ。エリカさんはカントー地方のジムリーダーなの」

「テレビで大和撫子特集をやっていてそのとき紹介されたの！その番組見たときちょうど草ポケモン関連のことでいじめられたあとだったからすっごく勇気が出た。あたしはエリカさんと違って女らしくないけど彼女のように立派な草ポケモンのジムリーダーになるって決めたんだ！」

「……」

頭が痛い。何も言えない。いつもなら感動して「おめでとう」と言うはずなのに頭が痛くてそれどころじゃない。

「っ！？どうしたの？ヒカリ！苦しいの？！」

ナタネさんの言葉で私はいつのまにか呼吸が荒くなっていることに気づいた。苦しんでいることを気づかれたくなかったのに。

ガタッ。

モミさんが立ち上がった。手にはおサイフを持っている。

「きっと食べすぎて苦しくなったのよ。ここは私がまとめて払うから先に行ってて。あとで自分が食べた分をちょうだいね」

「！そっか。そうだよね。それに離れた場所でタバコ吸ってる人いるし。行こ！ヒカリ」

「はい……」

私はナタネさんに肩を支えられながら歩いた。２人の気遣いに感謝しながら私は店を出た。

第35話　騒動　＜前編＞（後書き）

このシーンいらなかったかなぁ・・・。
どうもどのシーンが重要か重要でないかわかりません＞＜
今後のためにもアンケートに協力してくれると助かります；

1．この小説の更新スピードは？
A）遅い　B）速い　C）調度良い

2．物語の進行は？
A）遅い　B）速い　C）調度良い

3．好きなキャラは誰ですか？ポケモンでも可能です。

4．人気投票に参加しましたか？

5．このキャラにこれをやってほしい、もしくはこのキャラのこんなところを見たいというのはありますか？

6．他のサイトでリクエストされた小説があります。主要キャラの小さいころの話を書いてほしいとのことです。過去編を読みたいですか？
A）すごく読みたい　B）少し読みたい　C）読みたい　D）あまり読みたくない　E）全然読みたくない

7．どんな過去編を読みたいですか？
A）アキラとヒコザルに出会う前のヒカリとジュン（ポケモンが一切出てこない）
B）アキラとヒコザルと出会うヒカリとジュン（コウキとアキコも

序盤に出る）
C）その他

8．いつ書いてほしいですか？
A）来週の週末　B）再来週の週末　C）来月中　D）夏休み（8～9月）

9．この小説で直してほしいところがあったら言ってください。
A）誤字・脱字、読めない漢字がある　B）文章が堅い・読みにくい　C）描写が長すぎ　D）バトルに懲りすぎ　E）好きなキャラの出番が少ない　F）ポケモンの出番が少ない　G）挿絵がいるorいらない　H）筆者の執筆終了予定時刻が当てにならない（笑）
I）その他

10．最後にコメントをもらいたいキャラを指名してください♪

第３５話　騒動　＜中編＞（前書き）

アンケートは今月中受け付けています。まだ答えていないかたはどうぞ！

第35話　騒動　＜中編＞

＞i8248―699＜

ランチを食べて買い物を楽しんだあと私はナタネさんとモミさんと別れた。記念すべき第一回『花の乙女同盟』活動は昼食と買い物で終わった。ナタネさんはデニムのオーバーオールと花柄のトップを、私は黄色い肩出しTシャツを買ってウキウキ気分だった。ナタネさんはとっくに過ぎている休憩時間を理由にジムに戻り、モミさんは夕食の買出しに出かけた。ハクタイシティでの目的を果たし、明日町を発つ予定の私は軽く町を探索していた。方向音痴はあいかわらずだけどナポレオンがいるから大丈夫。

当てもなく歩いていたらサイクルショップが見えた。へぇ～。自転車屋さんなんてあるんだ。なぜか昔乗った三輪車のことを思い出し笑ってしまった。もしナポレオンが三輪車に乗ったらかわいいかも。

「は～い！いらっしゃいらっしゃ～い！新商品、『森の羊羹』はいかがですか～？」

おみやげ屋さんからおじさんの声が聞こえた。羊羹……ナナカマド博士が好きそうね。

「ナタネさんが森の洋館事件を解決した記念に作ったこの商品。なんと！どんな状態異常も回復できます！麻痺、眠り、毒、なんでもござれ！この森の羊羹を食べれば治りますよ～」

えっ？本当？その魅力的な言葉に首が勝手に動いた。そしたらおじさんと目が合った。

「どうだい？嬢ちゃん。味見する？」

「はい！ぜひ！」

「ポチャ～♪」

意外なことに私より味見に食いついたのはナポレオンだった。私よりも早く売店まで行き一足先に羊羹を受け取っていた。私もつま

ようじが刺さった羊羹を受け取り口を開けた。だけど羊羹を口に入れたと同時に大声が聞こえた。
「なんだってんだよーーー！！」
「え？」
ドッカーーーン！！
振り返るとポケモンセンターの背後にあった建物の一部が爆発した。まるでジュンが爆破スイッチを押すためにかけ声を上げ、私の声がボタンを押す効果音でそれを引き金に爆発したみたいだった。
「え？」
私は羊羹を噛むヒマもなかった。のんびり羊羹を味わう余裕もない。ジュンの口癖のあとに爆発がした。頭にコトブキスカイビルで起きたことが浮かび上がった。……ジュンったら！またなにかしでかしたのね！
「ごめんなさい！あとで買います！」
「あ、ああ……」
「行くわよ、ナポレオン！」
「ポチャ？」
走りながら適当に羊羹を噛んで飲み込んだ。甘い。こんなときでも味覚はちゃんと機能するんだなと我ながら呆れちゃった。爆破された箇所の煙が晴れ、建物の一角がむき出しになった。爆破されたのは左右にトゲがついているビルだった。変わったデザインね。現代アートかしら？ジュンが壊した箇所の修理費出すとしたらいくらになるかしら？建物の前には行く手を阻むようにジャマギが生えていた。
「セニョール！『居合い切り』！」
「ミー！」
セニョールはボールから出るなり『居合い切り』を繰り出した。秘伝技『居合い切り』。アキラに頼んでナポレオンに『波乗り』を覚えさせたついでにセニョールに覚えさせた技だ。セニョールの攻撃技って威力が低いものばかりだもの。『居合い切り』もそんなに

高くないけど『すいとる』よりかは強い。
「ありがとう！」
役目を終えたセニョールをボールに戻し私はビルに入った。自動ドアをくぐり抜けた先の光景に私はギョッとした。だって……インサツ団がいたんだもの！
「おい、なんだ今の衝撃は？！」
「3階で爆発が起きたもようです！」
「こちら5班！至急3階に応援をお願いします！」
うそ！このビル印刷工場だったの！？変な形の服、ロボットアームみたいな袖、そして緑色のおかっぱカツラ。1階のロビーは爆発のせいかバタバタしていた。団員たちはあちこち走り回っている。どうすればいいかわからず突っ立っていると機械的な話しかたで声をかけられた。
「おい！そこのガキ！何をしている？！」
「きゃあっ！」
男の団員に腕を掴まれた。一体何が起こっているの？ここはインサツ団のビルでジュンが爆破騒ぎを起こして私が事情聴取されそうになっている。
「悪いけど今は緊急事態なんだ。見学はお引取り願いたい」
「えっ……でも……」
ジュンがまだこのビルの中に……！
「ここは私にお任せください！」
別の男の団員が申し出た。他の団員と比べるとやや老け顔だった。
「ではお任せします。4班！3階へ応援に行け！」
「「「ハイ！」」」
男女のペアが2組いなくなった。私は老け顔の団員に入り口に連れてかれると思った。だけど彼は私を正反対の方向にある階段の下にあるスペースまで引っぱった。
「離してっ！」
腕を振り回すと相手はあっけなく手を離した。ナポレオンは文句

を言いたげだった。
「ポチャポチャー！」
「落ち着け！私だ！」
そう言って団員はカツラを脱いだ。趣味の悪い制服の上にある顔は角刈り頭に太い眉毛、そして忘れなれない「へ」の字の口。……あれ？なんでこんなところに……？
「ハンサムさん！」
「久しぶりだな。君と会うのは民宿くろがね以来だな」
「ポチャー！？」
＞ｉ８２４９―６９９＜
目の前にいたのは国際警察のハンサムさんだった。コトブキシティで出会い、クロガネシティでたんこぶを作ってしまったハンサムさんで間違いない。そして残念ながらインサツ団の制服は少しも似合ってない。……いや、似合ってなくてよかったのよね？
「ハハハ。驚いたか？私は国際警察だからね。変装が得意なんだよ。任務のためにギンガハクタイビルに潜入して……」
「ジュンを見かけませんでしたか？！」
再会を喜んでいる時間はない。挨拶抜きで率直に訊ねた。
「うむ。見かけたぞ。止めようとしたが言うことを聞いてくれなかった。それでこんな騒ぎに……」
「私、ジュンを助けに行ってきます！」
「待て！」
ハンサムさんにストップをかけられた。急がなきゃいけないのに……！
「君まで焦ってどうする！ジュンと会ったあとはどうするつもりだ？」
「うっ……」
会ったあとまで考えてなかった。私らしくない。いつもはもっと冷静なのに……。
「ジュンは自転車屋の主人を助けにきたみたいだ。どうやら４階に

閉じ込められているらしい。ジュンと合流したら自転車屋を救出して外に出るんだ。余裕がなかったら2人だけで脱出してもいい」

「はい！」

「おっと、アドバイスだ。このビルの階段は2つある。張り紙があるほうの階段が本物だ。この階段がそうだ。……張り紙のない階段を上がると行き止まりだ。気をつけろよ！」

「はい！ありがとうございます！」

私は階段を上り始めた。ナポレオンもついてくる。

「健闘を祈る！」

「ポチャ！」

ナポレオンは鳴いた。「お前もな」と言ったんだと思う。ジュン……待ってて！今助けに行くからね！

第３５話　騒動　＜中編＞（後書き）

漫画を読みすぎちゃいけない。読者が待っているから。
小説を書きすぎちゃいけない。未来が待っているから。
勉強も大切だけど、たまには息抜きが必要ですね＾＾

第３５話　騒動　＜後編＞（前書き）

ヒカリはジュンと再会できるか・・・！？

第３５話　騒動　＜後編＞

２階には誰もいなかった。ところどころに箱が積み重なっているだけで人気はない。２階の警備がこんなに手薄だなんてギンガ団はよっぽどジュンに手こずっているのね。右の廊下は積荷でふさがっていた。左の廊下には部屋が２つあった。２つともパソコンと階段があった。

「ポチャー！」

ナポレオンは最初に開けた部屋のほうを指した。階段のそばに張り紙が貼ってある。パソコンの中身が気になるけどジュンを助けることを優先した。ハンサムさんのアドバイス通り張り紙がある階段を上った。

３階は小奇麗だった。なにかの測定器らしき機械があちらこちらに置いてある。２階は倉庫みたいだったのに……。規則的に音を立てる機械の横を歩きながら私はジュンと会ったらどうしようか考えた。そのときだった。

「なんだってんだよー！」

ガタガタガタッ。

階段からなにかが落ちてくるような音が聞こえた。ジュン？！私は足音が出るのも気にせず走った。そしたら廊下にオレンジ色のスクーターに乗ったジュンが現れた。

「おお！ヒカリ！乗れー！」

「え？……キャーー！？」

ジュンはスクーターを止めずに無理矢理私を引きずり込んだ。スクーターはものすごいスピードで走っていく。私は振り落とされないようにジュンの背中にしがみついた。ナポレオンは私の脚をつかんでいる。私たちはもう１つの階段を上ったけど行き止まりだった。ジュンはしかたなくもう一度下へ戻った。そしたらジュンが現れた階段から団員たちが下りてきた。

「待てーー！」
「このクソガキー！」
「追えーー！」
「キャーーーーーー！！」
団員たちがニャルマーやスカンプー、ズバットとともに私たちを追いかけてくる。なんだかとんでもないことになってるーーー！
「キヒヒ♪」
え？なんでロトムの声が？私は首を動かしてロトムの姿を探した。自分の髪の毛がジャマで視界がせまい。ま、まさか……。私はおそるおそる自分が乗っているスクーターを見た。スクーターはよく見たらカットロトムだった。……やだ！私たち芝刈り機に乗ってるの！？
＞ｉ８２５０―６９９＜
「ポチャーー！？」
「ロ、ロトム！？ギンガ団に追いかけられるだなんてなにしたのよ？！」
「いや。なんかビルに入ったらロトムがボールから出てきて隠れ部屋見つけてさ……。ギンガ団が怒ったらロトムが部屋ん中にあった扇風機や芝刈り機に入ってギンガ団を攻撃して今こうして逃げ回ってるとこ」
「はあ？」
じゃあロトムのせいなの？！
「まあ、ビルに入ってすぐ『自転車屋はどこだーー？！』って叫んだオレもわるいけどさ」
「あんたたちなにやってるのよ！」
ロトムがロトムならジュンもジュンだ。ロトムもジュンもトラブルを起こすのが得意みたい。もっと文句を言いたかったけど階段を下りる衝撃でそれどころじゃなかった。
ガタガタガタッ。
うっ……気持ちわるい……。箱とパソコンがある部屋についた。

ここは2階ね。
「ジュ、ジュン……あっちにある階段を下りれば1階よ。いったん脱出しましょう」
「わかった！」
ジュンの返事にほっとしたのもつかの間、下りようとした階段から大量の印刷機……もとい、ギンガ団が出てきた。げっ。
「やっべえ！Uターン！」
「ビッ！」
ロトムは急ブレーキすると方向を変えた。さっき出た部屋を無視して隣りの部屋に押しかけた。
「待って！その階段は……」
行き止まり。そう言いかけたけどどこへ逃げてもあまり変わらない気がした。1階への階段から団員たちが出てきたしさっき下りたばかりの階段からも団員たちが来てるに違いなかった。1番奥にある階段は積荷で塞がっているし私たちはこの階段を上るしかなかった。たとえその先が行き止まりだと知っていても。
「行き止まり！？」
「ビーッ！？」
ロトムは止まった。分厚い鉄の壁が私たちの行く手を塞いだ。本当は壁じゃなくてさっき見た測定器の裏面かもしれないけど今の私たちのポケモンのレベルじゃ壊せそうにない。壊せるけど倒してどけられなければ意味がない。あ～んもうっ！こんなことならイワークのラミアを連れて来るべきだったわ！ノワールを連れて行くために一時的にパソコンに預けちゃったじゃない！岩・地面タイプじゃ草タイプを使うナタネさんに不利だったから……。
「逃がさないぞ小僧！」
「そこの小娘もな！」
聞いたことがある声がした。振り返ると男が2人いた。目尻が濃い団員と童顔の団員。インとサツ……！
「カチっとな！」

サツが手に持ったボタンを押すと天井から壁が出て階段をさえぎった。
「他の団員たちには悪いがお前はオレたちが直々手を下してやろうと思ってな」
「お前のせいでオレたちは仲間の間でもイン&サツって呼ばれるようになったんだぞ！」
インが口をとがらせた。今は強気だけどサツとポケモンがいないとなにもできなさそう。
「いいじゃない。アイデンティティを獲得できて。みんなと一緒じゃつまらないでしょ？」
「黙れーーー！」
サツがボールを投げた。出てきたのは鋭い牙を持つズバット。インはビッパを出した。うっ。フタバタウンに預けたビッパーのこと思い出しちゃったじゃない。なんだか後ろめたい。
「お前たちをやっつけて汚名返上してやる！」
サツのズバットが私目掛けて飛んできた。トレーナーを攻撃！？叫ぶことも出来ずに立ち尽くしていたら横から電撃が飛んできた。
「ビビーッ！」
「グッジョブ！ロトム！」
いつのまにか芝刈り機から出てきたのか、ロトムはジュンの前でフワフワ浮いていた。気をひきしめなくちゃ……！
「ナポレオン！ビッパに『水鉄砲』！」
「ポチャーー！」
ナポレオンは短く深呼吸すると勢いよく水を発射した。本当は『波乗り』を使って一気に片をつけたかったけどこんなせまい部屋で使うには危険すぎる。敵だけでなく私たちも巻きこまれるし測定器やロトムに当たったら感電するかもしれない。ビッパはお腹に『水鉄砲』を喰らい壁に押し付けられた。
「ああっ！急所に当たった！」
インは頭を押さえた。サツのズバットもさっきやられたばかりだ。

ラッキー♪最初の一撃で相手のポケモンをやっつけられるだなんて！
「落ち着け、イン！お互いあと1匹残ってるだろ！」
「サツ先輩……。わかりました。おれ諦めません！」
あんたたちもお互いにイン・サツって呼び合ってるじゃない。それじゃあギンガ団の間でも広まるわよ。
「行け！ズバット！」
「行くぞとっておき！」
インはズバットを、サツは球体のポケモンを繰り出した。黒い球を紫色のガスが覆い、半円の目と牙の見える口が浮かび上がった。
「ゴース！ナポレオン下がって！」
「ポチャ」
私は即座にナポレオンを下がらせノワールが入ったボールを投げた。ゴーストタイプには悪タイプが有利。悪・飛行タイプのヤミカラスなら戦闘を有利に進められる。ゴースが『催眠術』を使ってきてもノワールの特性『不眠』なら無効化できる。
「カアアアッ！」
ノワールはナタネさんと戦ったときより敵意を剥き出しにした。インとサツが兄弟のタマゴを奪ったことを覚えているのね……！
「ん？この前会ったヤミカラスより小さいな。あの割れたタマゴから生まれたのか？」
「ヤミカラスのタマゴを返して！」
「カーーッ！」
サツの発言を無視してノワールが威嚇した。サツは吐き出すようにため息をつくと声を荒げた。
「もう持ってねーよヴア～～カ！『催眠術』！」
「効かないわ！」
目から不気味な波長を出すゴースを間近で見ても眠らずノワールはその翼でゴースを打った。
「『怪しい光』！」
「ヒカリは怪しくねーよ！」

トレーナーが変な勘違いをしながらもロトムは独断で『電気ショック』を放ち、インのズバットは地に落ちた。ジュンの戦いは終わったのね。横目で確認するとサツとゴースと再び向き合った。

「『ナイトヘッド』！」

「そんな技！」

ゴーストタイプの技を悪タイプのポケモンが受けても大したダメージは受けない。ノワールは自信満々で『ナイトヘッド』を受け止めようとしたけどゴースの攻撃は当たらなかった。外した！怨霊の群はノワールの頭上を過ぎ私のほうへ……え？

「きゃあああああっ！！」

「ヒカリっ！！」

目と口をえぐり取られたような虚ろな顔の幽霊に囲まれてありとあらゆる感覚がおかしくなった。空間が歪み、方向感覚が失われ立っていられなくなった。視覚がどんどん暗くなっていく。色が……失われていく……！

「ポチャ～～！ポチャチャ～～！」

「はははははっ！バカめ！ポケモンが手強いならトレーナーを攻撃すりゃいいんだよ！」

「このヤロオオオッ！」

「ギンガ団にたて突くからだ少年！」

ナポレオン・サツ・ジュン・インの声が聞こえてくる。だけど聴覚も段々おかしくなってきた。ナポレオンが私に触れているはずなのにそれすらも感じられなくなっていく。

「ゴース、トラウマを掘り起こしてやれ」

「やめろ！……かす』！」

「『不……打……」

ジュンがなんとかしようとしてるみたいだけどもうダメ。言っていることが聞き取れない。話しているのか誰かもすらもわからない。

ゴポッ。

息を吐き出したら細かい泡がたくさん出てきた。私は思わず口を

閉じた。暗い。寒い。体が重い。辺りは真っ暗だった。体を自由に動かせない。足が地についていない。そもそも地面もない。ここはどこ？さっきまで建物の中にいたんじゃ？ここは……宇宙？

見えない力が押し寄せ私は流された。押された勢いで体が回る。回る。回る。体が色んな角度で回転する。何度も何度も３６０度回る私。まるで洗濯機の中で洗われているみたいだった。

ゴポポポポッ。

息を止めていたのに我慢できず吐き出した。手放したくない空気が私の意思とは裏腹に上へ行ってしまう。しょっぱい味が口の中に広がる。これは……塩水？……だとしたらこのしょっぱい味も体にまとわりつく感触も納得できる。私、海の中にいるんだ。

死ニタクナイ。

「いやあああああああああああああああっ！！助けて！△△！」

私は悲鳴を上げた。目の前が真っ暗になった。

第３５話　騒動　＜後編＞（後書き）

ヒカリ、戦闘不能。

☆第1回　人気投票　結果発表☆（前書き）

1位になったキャラはヒカリからほっぺにキスされます。
ヒカリが1位になったら2位のキャラからほっぺにキスされます。
勝利の女神は誰に微笑むのでしょうか？
そして気になるヒカリのキッスの相手は・・・！？

☆第1回　人気投票　結果発表☆

ポケットモンスター　プラチナ～長髪の美少女～
第1回人気投票　結果発表！

こんにちは！見習い小説家のＳａｇｉｔｔａｒｉａｓです♪
４月２４日から6月２４日にかけて人気投票を行いました☆
本日は２ヶ月間開催された『長髪の美少女』の人気投票の結果発表を行いたいと思います＾＾
思っていたより票が集まらずすこ～しだけがっかりしましたがそんなの関係ねぇ！＜古っ！
それでははりきっていきま～す！！

＞ｉ８４８１―６９９＜
６位　モミ　（１票）

６位になったのはこのソノオタウン出身の癒し系のお姉さん、モミさんだーーー！！
脇役（？）にしてはけっこうよく描いています。ギンガ団と戦ったり、ナタネと絡んだりするので原作より出番多いですね。
モミさんを描くときは前髪と目に気をつけています。いかにも癒し系って感じを出したいので＾＾

＜読者のコメント＞
・モミは僕の姉♪マッサージ師等よく考えた設定でちゃんと癒し系要素もありますね？

＜作者のコメント＞
モミさんがアロマセラピーをやっていたら素敵だなと思いマッサー

ジ師っていう設定にしちゃいました♪
まだ見習いですけどね。癒し系要素メチャクチャありまくりですよ☆

モミ「Ｓａｇｉｔｔａｒｉａｓさんのブログ仲間のギソガ団さんのコメントかしら?絵に「ギソガ団さんへ。投票してくれてありがとうございます」って書くべきだったかも。一人娘だから弟は歓迎よ＾＾」

＞ｉ８４８０―６９９＜
６位　アキラ　（１票）

かっこいいお兄さんは好きですか?残念でした。実はお姉さんです！（笑）
モミさんと同票でアキラも６位にランクイン！
よく考えればアキラよりモミさんのほうが出番あるような・・・（汗）。
ヨ、ヨスガシティで再び出てきますからね!
私の更新速度じゃまだまだかかりそうだけど・・・。

＜読者のコメント＞
・男に見える女の人って魅力があって良いと思います！（ｍｕｓｉｃ）

＜作者のコメント＞
同感です！（笑）アキラは序盤では貴重なイケメン成分（?）を提供してくれました。
ヒョウタさんもかっこいいですけどアキラには敵いませんよね。果たして『あおくてくろい人』はアキラのかっこよさを超えられるのだろうか・・・？（笑）

アキラ「6位か。悪くない・・・って1票だけかー!?コウキのほうが私より上だと・・・?く、くやしい!あとで八つ当たりしよう・・・ブツブツ。ｍｕｓｉｃさん投票してくれてありがとう!今度飲み物をおごってやろうか?ちなみに私はブラックコーヒーが好きだ」

＞ｉ８４７９―６９９＜
5位　あおくてくろい人　（2票）

謎のイケメン出たーーーーー!!アキラとモミより票が多い（笑）。コメントもらえたモミとアキラのほうがある意味恵まれているかもしれませんが。
私この人好きです。ゲームや漫画でこの人を見るたびに顔がニヤけて困ります。いやん!（笑）だから小説でもちょくちょく出てきます。けっこう重要キャラですね。
ヒカリとジュンとコウキの三角関係にもそのうち参戦するんじゃないですか?＾＾

??「なんだ?ワタシにも票が入っていたのか。投票してくれた人たちに感謝しよう。さっそくプレゼントを渡したいが誰が投票してくれたかわからないな・・・。ところで最近妙になつかしい波動を感じるんだが誰の波動か思い出せないんだ。このチョコは代わりにそのなつかしい波動の持ち主に渡そうかな」

・・・・・だそうです!というかそのチョコむしろ私にくだ（強制終了。

＞ｉ８４７８―６９９＜
4位　ナポレオン　（4票）

ツンデレポッチャマ、ナポレオン様の登場☆

・・・ってあれ？思っていたより票が伸びませんでしたね。私てっきりナポレオンが１位になると思っていました。人気投票の序盤ではナポレオンが１位でしたが段々他のキャラに投票が入っていってナポレオンは置き去りにされてしまいました。残念です；

＜読者のコメント＞

・ナポレオンですね～。あのツンデレがなんともいえません。（笑）

・ナポレオン良い！（、・ω・´＋）

＜作者のコメント＞

いいですよね。ナポレオン。ツンデレってかわいいから許されるんですよね＾＾

ナポレオン「ボクちゃまに投票してくれたのか。・・・べつに照れてなんかないからな！ところでツンデレってな～に？・・・ん？ボクちゃまが１位じゃないとはどういうことだ！・・・べ、べつにくやしくなんかないからな！人気投票だなんてただの遊びじゃないか！・・・・・うっ・・・ヒック・・・グスッ・・・。な、泣いてなんかいないからな！」

＞ｉ８４７７―６９９＜

３位　コウキ　（８票）

王子？紳士？騎士？いえ、全部です。

『長髪の美少女』のロマンチスト、コウキです！

絵では『星の王子さま』っぽい格好をしています。いや～。

人気投票の結果発表の絵とはいえ普段の格好ではつまらなかったので＾＾

私服姿を描きたかったのですがコウキだけ私服ではありませんね。

ぶっちゃけコスプレの粋に近いです（笑）

＜読者のコメント＞
・天然があるから純粋だから　（平凡）
・いつも見てると天然ぽさがあって可愛いから

＜作者のコメント＞
て、天然?う～ん・・・言われてみればそうですね。
一部では腹黒いと言われているので天然のほうが褒め言葉ですね（^^；
先輩の好きなキャラだったりします。悲壮感があるから好きだそうです。
幸薄いかも（笑）。

コウキ「ボクに投票してくれたのはレディーたちでしょうか?乙女の清き1票、ありがとうございます。お礼にボクのピッピと一緒にプラネタリウムにでも行きませんか?・・・ヒカリさんには内緒ですよ?」

＞i84766－699＜
2位　ヒカリ　（13票）

ついに現れました、主人公!けっこう人気ですね。
物語が彼女の視点で語られているからでしょうか?
彼女の乙女的思考は書いていて楽しいです^^
まさに女の子になるために生まれてきた子ですよねv
作中でしょっちゅうトキメいていますがよく心臓発作を起こしませんね（笑）。

＜読者のコメント＞

・非の打ち所がないですね！完璧です！
・私と違ってとても女の子らしいのが素敵です。まさにパーフェクトガールです！
・　女の子らしさ爆発の主人公。カワイイです

＜作者のコメント＞
確かにヒカリってすごいですよね。
かわいくて、賢くて、努力家で、優しい。ポケモンバトルも強い。
お菓子作りも料理も出来る。ミシンは使ったことないので手縫いで小物を作ったりします。
髪の手入れもオシャレも一切手を抜いていない。
ちょっとずるいけど誰からも好かれる不思議な女の子。
ほぼ完璧な女の子ですが運動能力はありません。あと方向音痴！
さらに実は歌うのも苦手だったりします。ヒカリは3重音痴です（笑）。
でもがんばって読者やポケモン、周囲の人たちに支えられながら生きています。
生きるって素晴らしいことですよね！やりたいものはやったもの勝ちです。
これはジュンにも言えることですが今やりたいこと、できることを１００％楽しんでいる彼女がうらやましいです！

ヒカリ「読者のみなさん、私に投票してくれてありがとうございます。『長髪の美少女』を楽しんでいますか？この小説は私の物語だけど私だけの物語じゃないのよね。いろんな人の物語が混じってつむがれた物語・・・・・そしてそんな私の物語を読んでくれるあなたたち。それってとっても素晴らしいことよね！こんなに大勢の人に見守られているからこれからもがんばらなくっちゃ！みんなも・・・いえ、みなさんも誇れるような立派な物語を作ってください！生きるとはそういうことだと思うんです」

＞ｉ８４７５―６９９＜
１位　ジュン　（３３票）

お騒がせボーイ、まさかの１位。
毎回ジュン視点の話を書くたびに好評ですがまさか彼が１位になるとは・・・。
しかもヒカリの２倍近くの票を集めて・・・。
今こそ言いましょう。なんだってんだよー！
コメントの数もダントツ１位です。

＜読者のコメント＞
・あの性格がツボ（（笑
・友達に似てるから（笑）
・その性格にキュンとくるんだよね～！　あのキャラ好きｗ　ｂｙルナ
・行動が活発で粋で可愛いです！
・彼のジュン粋さと可愛さは正義です。

＜作者の返信＞
え～っと・・・ジュンの性格ってせっかち、無鉄砲、やんちゃ、純粋、正直、バカ、楽天家ってところでしょうか？彼の行動は見ていて気持ちいいですよね。・・・ん？ジュンに似ている友達がいるのですか？・・・・・ちょっと取材したいから私に紹介して！（笑）
ジュン視点の話って書いていて面白いですが毎回彼の視点で書くのは辛いかもしれません。私までバカになったりして♪・・・ってもうすでにバカでした（笑）。思考パターン的な意味で。じゃなきゃポケモンのラブコメ小説なんて思いつきません。アハハ＾＾

ジュン「え？なに？まさかのオレ優勝っ！？ヒャッホー☆オレに投

票してくれたみんな！超サンキューな！ナポレオンやコウキを抜いて1位とかオレマジすげーじゃん！もう小説のタイトル『金髪くせっけ少年』でいいんじゃね？投票数は全部で67票か・・・。毎日1票投票できるわりには少なくねえか？『小説家になろう』では読者が100人くらいいるのに。日本人は恥ずかしがりやだからしかたねえな～。もっとオレを見習いやがれ☆次回はマキシマム仮面Ｊｒ．にも投票してくれよ！」

たくさんの投票ありがとうございました！！≧≦

★第1回人気投票所
パソコン　ｈｔｔｐ：／／ｖｏｔｅ３．ｚｉｙｕ．ｎｅｔ／ｈｔｍｌ／ｓａｇｉ．ｈｔｍｌ
ケータイ　ｈｔｔｐ：／／ｖｏｔｅ３．ｚｉｙｕ．ｎｅｔ／ｍ．ｐｈｐ？ｓａｇｉ
（もう投票できません）

＊補足＊
お客さまが「くそっ！」という項目を追加して2票入れましたがカウントしませんでした。
「あおくてくろい人」と同じ5位だったのでモミとアキラが7位になってしまいました。
絵でも7位と書いてしまったので修正してあります。

「コウキ以外全員」という項目に1票入っていましたがカウントしませんでした。
あの項目見たとき吹きだしました（笑）。そんなにコウキ嫌いなんですか？（笑）
最初その項目通り「コウキ以外全員」に1票入れようとしましたが

全員分の絵を描くのは面倒なのでやめました。確かにコウキのセリフ書くのもコウキの絵を描くのも大変ですか嫌っては駄目ですよ～

＾＾

ヒカリと会うまでは普通の紳士だったんですよ?ヒカリとさえ会わなければ・・・・（笑）。

☆第1回　人気投票　結果発表☆（後書き）

・・・・・ん？1位になった人をヒカリがキスする絵はどうなったかって？

・・・・・・残念ですが来週までお待ちください。

人気投票の結果を載せるために1日の大半を費やしてしまったので；

（番外編）　ヒカリとかくれんぼ（前書き）

ジュン×ヒカリ派の方に朗報（ろうほう）！お待たせしました！
みなさんが待ち望んだ過去編スタートです☆

（番外編）　ヒカリとかくれんぼ

―どこにいても、必ずオレが見つけてやる。

４月１０日。日曜日。ポケモンセンターのとある部屋で少年はベッドの上で寝転んでいた。どうすればそんなふうに跳ねるかと訊きたくなる金髪。無邪気な橙色（だいだいいろ）の瞳。体にところどころ巻かれた包帯。オレンジと白の横縞（よこじま）のシャツに茶色いズボンに身を包んだ少年は天井を見ながらぼーっとしていた。

「ヒマだ～」

この金髪でくせっ毛の少年―ジュン―はいつもはこんなに大人しくない。それどころが前日の夜に未知なる野生ポケモンと激しいバトルを繰り広げたのだ。ジムリーダー・ナタネの協力で電気・ゴーストタイプのめずらしいポケモンを捕獲することに成功したジュン。だが今日は昨日とは真逆の１日を過ごしていた。幼なじみのヒカリにハクタイシティを案内した。ナタネにジム戦を申し込むもその必要はないとバッジを渡された。昨日のバトルで破れた服は捨て母親から新たな服を送ってもらった。ヒカリはハクタイの森でナタネと戦うために特訓中だ。今の彼にはとにかくやることがない。じっとしているのは彼の性分に合わなかったがハクタイシティを探索済みの彼は町を歩く理由もない。話し相手のヒカリが帰ってくるまで大人しく待つしかないのだ。ジュンは昨日のバトルを思い出しながらヒカリを待った。

「それにしてもおばけか～」

「ル～？」

ベッドの下からのんきな声が聞こえた。若葉ポケモンのナエトルだ。ジュンの視界からは見えないが頭についている枝から2つのはっぱを生やし、茶色い甲羅を背負った黄緑色の陸亀がジュンを見上げていた。

「いやさ、昔ヒカリが迷子になったこと思い出してさ」

＊＊＊

それは8年前の出来事だった。アキラと初めて出会ったときや湖でおまじないをしたときよりも昔の話だった。それはヒカリとジュンが4回目の夏を迎えたときのこと。その日生来大人しい性格のヒカリは家で絵本を読んでいた。横ではジュンが車のオモチャを手に取りながらヒカリに話しかけていた。

「きょうこそそとであそぼうぜ」

「いやだ」

くりくりした目。肩まで伸びた黒い髪。ネコの耳のように左右に付けられた黄色いバレッタ。服はジュンとおそろいのセーラーを着ている。一見妖精と見間違えるほどかわいらしい少女は絵本のページをめくった。表情が曇り、目は絵本に向けられていたが絵本の内容は全く頭に入っていなかった。

＞ｉ８７３９―６９９＜

「だってわたしあしおそいもん。みんなにめいわくかけちゃう」

ヒカリは運動神経がとても悪かった。ヒカリは女神たちから美しさと知性、そして―まだ自覚していなかったが―ポケモンバトルの

才能を与えられていた。だが運動神経だけはうっかりもらい忘れてしまったようだ。それともいずれ現れる王子さまの出番を損なわないためわざと与えなかったのだろうか。

「だいじょうぶだぞ！きょうはかくれんぼだから」
「かくれんぼぉ？」

ヒカリは顔を上げた。今まで何度か鬼ごっこをしたことがあるが足の遅いヒカリはその度に辛い思いをしていた。別にいじめられていたわけではない。むしろ逆だった。ヒカリは優しくて賢くてかわいかったからみんなの人気者だった。鬼ごっこをしているのにわざとヒカリを見逃したり、ヒカリが鬼になってもわざとつかまってあげたりとみんな気をつかっていた。ヒカリはみんなの心づかいに感謝していたがかえって肩身がせまくなった。みんなと肩を並べられないヒカリはもともと大人しい性格も手伝ってあまり外に出なくなっていた。だがかくれんぼなら足の速さは関係ない。これならヒカリもみんなも楽しめる。

「わかった。やる」
「よっしゃー！さっそくシンジこにいくぞ！」
「うん！」

こうしてジュンとヒカリは仲良く手を繋いでシンジ湖へ向かった。湖へ行く途中何人かと合流し、シンジ湖に１０人くらいの子どもが集まった。子どもたちはヒカリが来ているのを見て喜んだ。ここ最近めったにヒカリを外で見かけなかったからだ。

「よ～し、ぜんいんそろったな！ジャンケンでおにをきめるぞ！」

ヒカリが町で１番人気者の女の子ならジュンは町で１番人気者の

男の子だ。もはやフタバタウンのガキ大将と言ってもいいくらい元気なジュンはみんなのリーダー的存在だった。ジュンのかけ声でみんなは輪になりジャンケンを始めた。

「「「「「「「「「「さ～いしょはグ～。ジャ～ンケ～ンポン！」」」」」」」」」」

ジャンケンに出遅れたり、あいこが続いたりしたのでジャンケンは繰り返し行われた。ようやく鬼が決まるとカウントダウンが始まった。鬼が目をつぶり３０秒まで数えている間に子どもたちは散り散りに逃げた。ヒカリもジュンも幸い鬼にならず、思い思いの場所に隠れた。最初のかくれんぼはヒカリがすぐ見つかってしまった。２回目のかくれんぼはヒカリが鬼となりみんなを探し、知恵を駆使して子どもたちの隠れている場所を次々に当てていった。ジュンはバカなので誰も思いつかない場所に隠れていることもあれば隠れ方があまりにも大胆すぎてすぐ見つかるかのどちらかだった。ヒカリがジュンを早く見つけられたのは木の上にチューリップが生えていたからだ。チューリップが木に咲くはずはない。赤・白・黄色のチューリップがはっぱの間に生えていたのはジュンがチューリップを両手に持っていたからだ。ヒカリはチューリップを引っこ抜いたジュンを叱った。

かくれんぼを3回、４回と繰り返しているとヒカリも持ち前の賢さで段々隠れるのが上手くなっていった。最初は近くの岩の影に隠れるだけだったが離れた場所に隠れるようになり、見つかりにくくなっていた。最後のかくれんぼは鬼が特別に１００秒数えることになったのでヒカリは隠れる範囲のギリギリまで行ってしまった。全力で走ったとしてもとても子どもが１００秒でたどり着く場所ではなかったが（足自慢のジュンなら別だが）鬼が他の子を探している間にこっそり移動してたどり着いたのだ。湖の周りは崖で覆われて

いる。森のはしっこまでがかくれんぼの範囲だった。ヒカリは苦労して木によじ登ると木の空洞の中に入った。ここなら誰にも見つからない。

「こんどこそわたしがいちばんになるんだから！」

ヒカリは頬をふくらませた。ヒカリはたいていのことでは1位だったが苦手な運動だけはいつも最下位だった。これは負けず嫌いなヒカリにとって屈辱的だった。鬼ごっこもけんけんも縄跳びも駄目だがかくれんぼなら体力も運動神経も関係ない。ヒカリは自信満々に座った。

誰にも見つからないことにケラケラ笑っていたヒカリだが、友だちの声や足音が近づくとビクビクしていた。音が遠ざかるとヒカリはほっとし、優越感に浸りながら母親にどう自慢するか考えていた。

―最後のかくれんぼが始まってから1時間。子どもたちは湖の看板の前で首をかしげていた。

「これでぜんいんそろった？」

「いや。ヒカリがまだだぞ」

ジュンは子どもたちの顔を確認した。見知った顔がそろっていたがヒカリだけ見当たらない。

「ヒカリちゃんどこにいったんだろうね」

「みんなでさがそうか？」

男の子も女の子もヒカリの身を案じたが、そのときちょうど5時の鐘が鳴った。

「しまった！もう5じだ！」
「おなかすいたな～」
「ママにしかられる！かえらなきゃ」
「5じはんから『仮面ファイター・マキシマム』がはじまる！」
「やっべ～。みのがせないじゃん」

『仮面ファイター・マキシマム』は男の子向けの特撮番組だ。『仮面ファイター』は仮面をつけた正義の味方がバイクに乗り悪の組織と戦う物語で毎年違うシリーズが出ている。ジュンもその番組の大ファンだ。

「『仮面ファイター』どころじゃないでしょ！ヒカリちゃんをさがそうよ。ママもゆるしてくれるって」

女の子が最もな意見を言った。テレビよりも友だちのほうが大切だ。

「でも6じから『美少女戦士ブレザームーン』がはじまるよ」
「うっ……」

男の子向けの番組には興味がないがさすがに女の子向けの番組は放っておけないようだ。『美少女戦士ブレザームーン』は10年前放送された女の子向けアニメだ。今は『プリティア』シリーズが女の子たちの間では人気だが子どもたちの母親の世代は『ブレザームーン』で育った。その『ブレザームーン』の再放送されているのだが古いけどこれがなかなか面白い。女の子たちは『プリティア』と『ブレザームーン』という2大娯楽を毎週楽しみにしているわけだ。

「もしかしてヒカリちゃんもうさきにかえったのかな？」

１人の男の子の言葉で子どもたちは静かになった。男の子はただ単に推測しただけだがそれを聞いたほとんどのこどもたちにとってその言葉は願望になった。ヒカリは先に帰った。そうであってほしい。そうすれば自分たちはヒカリを探す手間が省ける。親に叱られることもなくおいしいご飯を食べて好きな番組を見れる。空はとっくにオレンジ色になっており太陽も帰り始めていた。

「さきにかえってなくてもきっとかくれんぼがおわったことにきづいてひとりでかえるはずだよ」

テレビが見たくてうずうずしていた女の子が結論を出した。これでヒカリがまだ隠れていようがいまいが帰れる。

「くらくなったからかえろう」

別の男の子が言った。子どもたちはそのあと二言三言言葉を交わし、ついに湖を出ていった。

―３０分後。

ヤミカラスが鳴いていた。太陽も沈み、ヒカリはビクビクしながら森の中を歩いた。風で揺れる植物の影に驚いたり、自分の立てた音に怯えながらもヒカリは友だちの名前を呼んだ。

「みんなどこぉ？」

いつまで経っても誰も探しに来ないのでヒカリはついに木の上を下り子どもたちと合流しようと試みた。すでに子どもたちが帰ったことも知らずに。

「だいじょうぶ。みんなわたしをさがしにきてくれる」

最初はそう信じて歩き続けたが２０分経ったあとついに気づいてしまった。今日が日曜日で『仮面ファイター・マキシマム』と『美少女戦士ブレザームーン』が放送されることを。テレビのことを思い出しヒカリの顔は真っ青になった。

（どうして『ブレザームーン』のことをわすれてたんだろう。あさはあんなにたのしみにしてたのに……）

ヒカリは涙目になった。かくれんぼでみんなに取り残された上に好きな番組まで見逃すことになったのだ。今頃男の子たちはゲームをやり、女の子たちは『ブレザームーン』を観るのに夢中になっているのだと考えるとみじめな気持ちになった。

（こんなことならかくれんぼなんてしなければよかった）

さっきまでのかくれんぼでの高揚感（こうようかん）はなくなりヒカリの胸には後悔しか残らなかった。あのときいつものように大人しく家にいればお腹を空かせることも好きな番組を見逃すこともなかった。そう考えると悔しくて悲しくてたまらなかった。

「ママーー！」

ヒカリはシンジ湖にいるはずのない母親を呼んだ。彼女の声はやまびこのようにはね返ることはなく草の揺れる音が響いた。どこからかわからないが木琴（もっきん）のような音も流れてきた。それはこおろぎポケモンのコロボーシの鳴き声だったがポケモンを見たことがないヒカリが知るはずがない。綺麗な音色だったがヒカリには不気味な音

にしか聞こえなかった。

「ママーー！おじいちゃーーん！」

ヒカリは2人しかいない身内を呼んだ。こういうとき兄弟がいたら探しにきてくれたかもしれないがあいにくヒカリは一人っ子だ。父親は家にいないし新しい家族ができる望みも薄い。

「ジューーーン！」

ヒカリは自分をかくれんぼに誘った幼馴染の名を呼んだ。兄弟同然に育ったジュンなら自分を探しにきてくれるに違いない。そう信じてヒカリはジュンの名前を呼び続けた。

「ジューン！ジューン！」

湖に向かいながらヒカリはジュンを呼んだ。何度も何度も。だが現実は残酷なことにジュンどころか人っ子一人現れる気配がない。ヒカリはぺたりと地べたに座り込んだ。唇を曲げ視界がぼやけるのを我慢し歩いていたが限界だった。ついに大声を上げ溜め込んだ感情を爆発させた。

「うわあああああん！！あーーーーーん！おなかすいたーー！あしいたいー！くらーいー！こわーーい！ママーーー！」

泣いてもどうにもならない。ヒカリがいかに聡明とはいえまだ4歳。たとえ泣いても無駄だということを知っていても泣いていただろう。彼女の心は負の感情でいっぱいだった。

「ジュンのバカーー！どうしてかくれんぼなんかにさそったの？…

…どうしてさきにかえっちゃったの？わたしより『仮面ファイター』がすきなの……？ジュンのバカバカバカーーー！！」

どう考えても八つ当たりだがヒカリは思ったことを全て吐き出した。負の感情が次から次へと出て来るのでそうでもしないとヒカリの心はパンクしそうだった。

「やだーーー！わたししんじゃう！おなかがすいてさみしくてしんじゃうーーーーー！」

ピーピー泣くヒカリに誰かが同情したのか慰めの言葉をかけた。

『大丈夫ヨ。ココハ海ジャナイ。チャント呼吸デキルカラ死ナナイワ』

「うわあああん！わーーーん！」

女の人の声がしたがヒカリの耳には入らなかった。仮に聞こえたとしても誰もいないのに声が聞こえるなんて幽霊以外にありえない。幽霊がいると知ったらますますパニックになっていただろう。

「おばけがでちゃうよーーー！」

かわいい顔は色々な感情が一気に押し寄せてきたためしわくちゃになっていた。彼女の混乱がピークに達したとき、湖の小島から光るなにかが現れた。

「きゃううーん？」

ヤミカラスとコロボーシの鳴き声が聞こえなくなった。辺りが明

るくなったことに気づきヒカリは目を開けた。……が、すぐに目を開けたことを後悔した。ついに恐るべきことが起きてしまった。

「お……おばけだーーー！」

足が疲れたことも忘れヒカリは必死で走った。瞬きする暇すらない。ヒカリは元来たところを戻って走っていた。

「はぁ……はぁ……！」

呼吸が荒い。ときどき咳き込みながら走った。先程泣き叫んだのが仇になった。助けを呼ぶことすらできない。仮に声が出せたとしてもその声を聞く人間がいるかどうか疑問だったが。

「きゃううーん！」

幽霊は宙を浮きながらヒカリを追っていた。それを見たヒカリは体を震わせた。

（わたししんじゃう……！おばけにのろわれてしんじゃうんだ……。わたしおばけになんかなりたくないよ……！）

後先考えずに走っていたせいかさっきまで隠れていた場所まで来てしまった。ヒカリには崖の上を登るか道を無視して木々に潜り込むかの2択しか残されていなかった。だがそれも体力が残っていればの話だ。体力がもともと少ないヒカリはもう歩く力もなかった。

「い……いやあああ！！たべないでーーー！ジューーン！！」

光に包まれたなにかはゆっくりとヒカリに近づいていった。ヒカ

リは生きることを諦め目を閉じた。

―コンッ。

小さい音がした。光る生き物は前へ進むのをやめ、振り向いた。
そこには木の棒と石を持った金髪の少年がいた。

「あああああっちにいけバケモノ！ヒカリからはなれろ！」

―コンッ。

ジュンは再び石を投げた。バケモノと呼ばれた生き物はこれはどうしたものかとヒカリとジュンを交互に見比べた。やがてバケモノは何事のなかったかのように空を飛び、どこかへ消えていった。

「ジュ……ジュン？」

内心ビビッていたジュンは一息つき、呼吸を整えるとヒカリと向き合った。

「み～つけた！わりぃ。またせた」

ヒカリは喜びと困惑が混ざった。ジュンは『仮面ファイター』の大ファンだ。ジュンは先に帰ったのでなかったのか。

「な、なんでここにいるの？」

「なにって……おまえをさがしにきたからにきまってるじゃないか」

―約1時間前。

子どもたちがヒカリを探すか探さないかもめていたときジュンの一言が物事を穏便にした。

「オレがヒカリをさがすからみんなさきにかえれよ！」

ヒカリとずっと一緒にいたジュンのことだ。ジュンならきっとヒカリを見つけてくれる。ジュンはヒカリが大好きだから。ジュンを信じた子どもたちはすっかり安心しジュンにヒカリを任せることにした。子どもたちは次々に感謝を述べ先に帰っていった。だがシンジ湖はなにしろ広い。湖にいないことは確かだったから森中を探し回っていたら時間がかかってしまったのだ。

「おまえのこえがきこえたんだ。だけどかぜにはこばれたこえだったからすっごくはなれてたんだ。だからおまえのとこにいくのにじかんがかかっちまった。ごめんな」

「ジュン……ジューン！」

ヒカリはジュンが自分を見捨てずに探し回っていたことが嬉しくてジュンに抱きついた。

「うあああん！ジューン！ジューン！」

すでに十分泣いたのにヒカリの目から再び涙が流れた。ヒカリの母が見たら脱水症状になっちゃうわよと笑いながら水の入ったコップを渡していただろう。

「おいおい。オレのなまえはジューンじゃないぞ。ジュンだぞ」

「ジュン〜〜〜！」

ジュンはヒカリの背中をポンポンたたいた。それに安心してヒカ

リは泣き止み顔を素手でゴシゴシと拭いた。

「ジュン。ありがと」

＞ｉ８７４０―６９９＜

ヒカリはジュンの頬にキスをした。ジュンを逆恨みした罪滅ぼしと自分を助けてくれた感謝の気持ちを込めて。

「『仮面ファイター』も『ブレザームーン』もろくがするようにたのんだからたぶんだいじょうぶだぞ。おうちにかえろうぜ。オレもうおなかペコペコだよ」

「うん」

ジュンはヒカリをおんぶして帰った。こうしてかくれんぼ事件は無事解決した。

＊＊＊

ジュンはハッと目を覚ました。いつのまにか寝てしまったようだ。昨日あんなに激しいバトルを繰り広げたのに早起きしたから疲れが取れてなかったのだろう。

「昔の夢見ちまったぜ……」

「ル～？」

ナエトルは口を大きく開けた。どうやらナエトルも昼寝していたようだ。

「ヒカリのやつ。昔はオレを頼ってくれたのにな～」

小さい頃のヒカリはなにかある度にジュンを呼んだ。花瓶を割ってしまったとき、毛虫を見たとき、夜怖くてトイレに行けないとき、勉強がわからないとき。母親がいないときや母親に知られたくないことがあると「ジューン。ジューン」とよく泣きついたものだ。

「いつからだっけな。ヒカリがしっかりしはじめたの」

記憶を辿ってみると黒い短髪に紅い瞳の美少年……もとい、美少女（？）を思い出した。

「アキラと出会ってからか……」

女の癖に自分よりかっこいいアキラのことを考えるとジュンの表情は苦くなった。

「アキラはともかくコウキまで出てくるし……なんだってんだよ」

上半身を起こし時計を確認した。もう3時を過ぎていた。ヒカリもそろそろハクタイの森から帰ってくるはずだ。

「ヒカリを守るのはオレだ！」

ジュンは鼻息を荒くした。ヒカリを守る役目だけは誰にも譲りたくなかったのだ。

「どこにいても、なにがあっても、必ずオレが見つけ出してやる」

ポケモンセンターの廊下を歩きながらジュンは決意を固めた。

（番外編）　ヒカリとかくれんぼ（後書き）

予想以上に時間がかかりました。人気投票の記念イラストは番外編に使っちゃいました（笑）。
本当はもっと漫画的なものを描こうとしましたが時間がないのでこれで勘弁してください＞＜
それにしてもこの頃の2人はラブラブですね～。ヒカリが別人です。
ジュンはあいかわらずですね。

番外編のおまけ　～ジュンにおまかせ！～（前書き）

ブログ見てない人が多いのでここでも載せます。
このぶんだとバレンタイン漫画を読んだ人も少ないのでしょうか？

番外編のおまけ　～ジュンにおまかせ！～

＞i89118―699＜
ジュンとヒカリの幼少期。おそろいの服？

ヒカリの母親とジュンの母親は仲良しだったのでジュンとヒカリはよく互いの家に遊びに行きました。
2人の母親は互いの子どもを預かったり、おそろいの服を着せたり、お泊り会をしたり・・・。

ヒカリは昔母親がいないときや母親に知られたくないことで困ったときはジュンを頼っていました。
・・・が！おバカなジュンのことなので根本的解決に至らないことが多かったです（笑）。

ヒカリ「ジューン！ジューン！」
ジュン「ん？どうしたんだ？ヒカリ」

＜花瓶＞
ヒカリ「かびんわっちゃったよぉ・・・」
ジュン「じゃあオレもわる！」
⇒2人とも怒られました。特にジュンが。

＜毛虫＞
ヒカリ「キャー！けむしー！」
ジュン「むしはむし！」
⇒その場を離れた。もしくは追い出した。問題無事に解決？

＜トイレ＞

ヒカリ「よるはこわくてトイレにいけないよぉ・・・」
ジュン「オレもいっしょにいってやるよ！」
⇒安心しました。問題無事に解決。

＜勉強＞
ヒカリ「うわ～ん！このもんだいわかんないよ～！」
ジュン「オレもわかんないからだいじょうぶだ！」
⇒遊びに行きました。解けなかった問題は放置。あとで母親に訊きました。

＜宿題＞
ヒカリ「しゅくだいがおわらないよ～！」
ジュン「オレなんてさいしょからやってないぜ！」
⇒ヒカリは（母親の手を借りて）なんとか終わらせますがやってないジュンは先生に怒られました。

＜おねしょ＞
ヒカリ「おねしょしちゃったよぉ・・・」
ジュン「オレがやったことにするよ！」
⇒ヒカリがおねしょしたことはバレませんでした。問題無事に解決？

＜逆立ち＞
ヒカリ「さかだちできないよぉ・・・」
ジュン「オレがおまえのぶんまでさかだちしてやるから！」
⇒あいかわらずヒカリは運動音痴のままです。

＜食べ物＞
ヒカリ「もうたべられない・・・」
ジュン「じゃあオレがたべる！」
⇒ジュンはよく動くのでたくさん食べても太りません。問題無事に

解決。

＜腹痛＞　その１
ヒカリ「おなかがいたいよぉ・・・」
ジュン「かわりにオレがおやつたべてやるよ！」
⇒ヒカリが泣いて母親が駆けつけました。

＜腹痛＞　その２
ヒカリ「おなかがいたいよぉ・・・」
ジュン「のどあめやるよ！」
⇒のど飴を舐めるも腹痛は治まらず。ジュンが近所の人を呼びに行きました。

＜悪夢＞
ヒカリ「こわいゆめみたの！」
ジュン「じゃあいっしょにねよう！」
⇒安眠しました。コウキが聞いたらうらやましがりますね（笑）。
問題無事に解決。

ヒカリは４歳のときはジュンを心から信頼していました。
ヒカリがジュンの行動に初めて疑問を持ったのは５歳のときです（おまじないするころ）。
アキラと出会ったあとはジュンのストッパーになり叱れるようになりました（そのときヒカリ９歳）。

番外編のおまけ　～ジュンにおまかせ！～（後書き）

次回は『金髪くせっけ少年3』ですね。

イラストギャラリー1　男女逆転！？（前書き）

ブログを見に行かない方が多いのでここでもイラストを載せることにしました。
今回は『小説ストーリーテラー』でリクエストされた絵を載せます。

イラストギャラリー1　男女逆転！？

アキラ「み、見るな……！」
＞i8738―699＜
リクエスト1「ひらひらの乙女チックな恰好をしたアキラ」

アキラだけでは寂しかったのでヒカリも描きました。
めちゃくちゃ恥ずかしがるアキラとすました顔のヒカリが対照的です。
もしアキラがこのワンピース姿を好きな人に見られたら彼はぶっ飛ばされます。
照れ隠しのため。かわいそう・・・。

←上の絵をペン入れして色を塗りました。
＞i27629―699＜
画材はジェルインクペンとコピックとシールと折り紙と透き紙です。
アキラファンとヒカリファンにはたまらないイラストですね＾＾

ヒカリ「おはようございます。お嬢さま」
コウキ「ごきげんよう」
＞i9020―699＜
リクエスト2「コウキの女装とヒカリの男装」

コウキはおしとやかなお嬢さま、ヒカリは少年執事に。
ヒカリが男装したときの服って正装しか思いつきません。
もっとカジュアルな服を着せたいのですが・・・。

コウキ「ジュン。ちゃんと女装でき……」
ジュン「ん？」
＞ｉ９０２１―６９９＜
リクエスト３「ジュンとコウキの女装」

圧化粧でジュンが化け物に……！
ちなみにメイクを担当したのはルージュラです（笑）。

ジュン「なんだよ？この服……」
＞ｉ９０２２―６９９＜
リクエスト４「ジュンの女装」

前の絵が完全にギャグだったので描き直しました。
何着せればいいかわからなかったので妹に服装を決めてもらいました。
これを描いている途中ジュンのあまりの変身振りに「こいつ誰だよ！？」と訊いたら「ジュンだよっ！」と妹につっこまれました（笑）。

ヒカリ♂「ジュンはオレが守る…！」
＞ｉ９３５４―６９９＜
リクエスト５「勇ましくて男らしいヒカリ」

ヒカリをどう勇ましく男らしくすればいいかわからないので男装させました（笑）。
前回描いたヒカリの男装姿の服装が気に入らなかったのでリベンジです！なぜか流血しています（笑）。

ヒカリが男装しているときの服装ってどうも想像しにくいです；
ジュンの女装よりも難しいです。
この絵を妹に見せたら「まるでどこかの忍者がお姫さまを守るために雇われたみたいだね」と言われました（笑）。

イラストギャラリー1　男女逆転！？（後書き）

まだまだ増えるかも。

（特別編）　第３５．５話　金髪くせっけ少年　３　＜前編＞（前書き）

ジュン「久々のオレ視点の話だけど……オレさまピンチだぜ……！」

（特別編）　第３５．５話　金髪くせっけ少年　３　＜前編＞

＞ｉ８２５１―６９９＜

ロトムの『おどろかす』でゴースを妨害しようとしたけど逆にゴースの『不意打ち』で返り討ちにあった。ゴーストタイプのロトムが一発でやられたってことはゴーストタイプか悪タイプの技なのか……？『ナイトヘッド』を受けたヒカリはやがて大声で叫ぶとくずれるようにたおれた。オレはヒカリが完全にたおれるまえに受け止めた。

「おい！ヒカリ！ヒカリ！」

返事がない。オレはすがるようにヒカリの手を握った。

―トクン。トクン。トクン……。

ヒカリは生きている。だげど顔は青ざめているしぐったりしている。

「ポチャチャ！ポチャチャ！」

ナポレオンはパニックってただただヒカリの名を呼ぶ。ヒカリのヤミカラスもおろおろしていた。オレは戦闘不能のロトムをボールに戻した。

「フハハハハハ！ギンガ団に逆らうからだー！」

「リベンジ達成ですね！サツ先輩！」

オレはインとサツをにらみつけた。よくもヒカリを……！ヒカリを傷つけたやつは許さねぇ……！

「おっとそんな怖い目で見るなよ。お前もじきに同じ目に合うんだから。ゴース！『催眠術（さいみんじゅつ）』！」

「ポニータ！『火の粉』！」

オレはとっさにポニータを選んだ。ポニータとゴースの攻撃が激突する瞬間、背後で爆発が起きた。

―バッキャーーーン！！

オレたちの逃げ道をふさいでいた機械がこわれた。機械はショートしてジジジジと鳴り煙を出した。がっ……のどが……！

「ゲホッ。ゲホッ……なんだってんだよー！？」

―カツン。

人影が足音を立てた。煙でよく見えねーけど背が高い。横にもう1つ影がある。人か？それともポケモン？オレと同じくらいの背丈だ……。

「ポニータ！ナポレオン！ヤミカラス！オレのそばから離れるな！」

オレは腕の中にいるヒカリをぎゅっとだきしめた。……頼む。敵じゃないと言ってくれ。そうじゃないと自転車屋どころかヒカリも助けられねぇ……！

―カツン。

「懐かしい波動を感じてここまで来たが……知っている顔はないな」

―カツン。

「さて。どっちが悪者かな？……まあ、一目瞭然だけどね」

煙が晴れた。閉じ込められていたオレたちの前に現れたのは暗い青のスーツっぽい服を着た男だった。後ろがギザギザになっている帽子が旅人……つーかゲームに出てくる勇者みたいだ。髪の毛は黒くてツンツンしているけどアキラの髪よりも青い。

「そこにいるのは誰だっ！？」

サツが怒鳴った。青くて黒い男は帽子を上げた。

「通りすがりの仮面ファイターさ」

＞ｉ９０１９―６９９＜

青くて黒い男の顔を見たとたんオレの脳内スカウターが機動した。７０、７１、７３、７６、８０、８２、８５、８７、８９、９０、９１、……ボフン！スカウターがぶっ壊れた。……なんだってんだよー。この世にアキラよりかっこいい男がいたのか……！？

「なにが仮面ファイターだ！テレビの観すぎだろ！……ってかお前仮面つけてないだろ！」

「変身前なんだ」

「だったらさっさとつけろやーー！」

「サ、サツ先輩……落ち着いて……」

謎のイケメンは冷静だった。もう1つの影の正体はポケモンだった。色は謎のイケメンとおそろいだ。全体的に青くて胴体は黄色がかった毛がフサフサと生えている。耳はとんがっていて頭の後ろにチューブみたいなものが4つくっついている。胸と手の甲には白い角(つの)が生えていた。当たると痛そうだな……。顔にはマキシマム仮面のマスクみたいに黒い線が横と縦から入っている。黒い毛におおわれた赤い目がキリッと相手を見つめる。うっ……。アキラがポケモンになるとこんな感じかも……。……つーかポケモンもトレーナーもイケメンすぎるだろ！反則だ！

「おや」

謎のイケメンがオレたちのほうを向いた。な、なんだってんだよー！敵か味方かはっきりしてくれよ！

「ポチャ！？ポチャポチャー？」

ナポレオンはかまえた。「なんだ！？やるのかー？」って言ってんのか？

「どうやらそこのお嬢さんが懐かしい波動の持ち主のようだが……黒髪ロングの知り合いはいないな。人違いだったかな」

ヒカリの顔は髪に隠れて見えない。だけど黒髪の知り合いはいないから顔を見るまでもないってか。

「認めないぞ……あんなかっこいい男がこの世に存在してたまるか……」

サツはわなわなふるえながら謎のイケメンを見た。

「ゴース！『ナイトヘッド』だ！」
「ルカリオ！『見破る』！『発勁（はっけい）』！」

サツはヒカリにやったようにゴースに謎のイケメンに攻撃させたがイケメンはあっさりよけた。スキができたゴースにルカリオの突きが炸裂した。

「ゴッ……」

ゴースはピンボールのように跳んであちこちぶつかり、サツの足元で動かなくなった。目をグルグル回してベロが出ている。強い…！格闘タイプの技はゴーストタイプのポケモンにほとんど効かないのに倒した。それも一撃でだ。ルカリオもトレーナーも強い。オレたちよりレベルが高い。

「サツ先輩！手持ちが！」
「わかっている！カチッとな！」

サツは階段をふさいでいた壁の開閉スイッチを押した。壁は本来あるべき場所に戻りギンガ団のしたっぱが流れ込んできた。

「おい！イン！サツ！どういうことだ！」
「なにがあったの？」
「なんだあのイケメンは？！新手の敵か？」
「いいから侵入者を捕らえろ！」

げっ。敵が増えた。何人っていうと……ぶっちゃけ２０人くらい？人で部屋の半分が埋まっちまった。オレどうすりゃいいんだよ？

いつもならヒカリが教えてくれるけどヒカリは気絶したままだ。やっぱヒカリが言っていたように逃げたほうがいいのか？オレはナポレオンとヤミカラスとポニータを見た。３匹ともどうすればいいかわからずオレの指示を待っていた。

「君。立てるかい？」

謎のイケメンが話しかけてきた。ルカリオはギンガ団のしたっぱたちとにらみ合っている。

「あ、ああ」

オレはヒカリを両手でかかえたまま立った。逃げるにもヒカリが気絶したままじゃ身動き取れねー。

「君はポニータに乗って逃げてくれたまえ」

「え？」

オレの答えも聞かずに謎のイケメンはヒカリをオレの手から離しポニータにまたがるように乗せた。

「お、おい……」

「時間がない。ここはワタシに任せてくれたまえ」

謎のイケメンはヒカリに続いてオレをヒカリの後ろに乗せた。

「逃げたいのなら逃げるんだ。まだギンガ団と戦うというのなら４階にいる自転車屋を助けてくれるとありがたい」

ここはオレに任せて先に行け、か。そんなかっこいいセリフ、オ

レもいつか言ってみてー！イケメンが言うとかっこよさ倍増だな…。

「わかった！にーちゃんありがとな！」

謎のイケメンはナポレオンも乗せようとしたがナポレオンは首をふった。ヤミカラスにポチャポチャ言うとヤミカラスはうなづき、ナポレオンの両肩を足でつかんだ。ヤミカラスをつばさを広げ、空を飛ぶ体勢に入った。

「飛びながら戦うのか。かっこいいね」

「ポチャー！」

ヤミカラスにつかまれたナポレオンはかっこよかった。まるでガン●ムが変形したみたいだ。戦隊物のメカの合体っつー例えもありだな！

「行くぞ、ポニータ！」

「ヒッヒーン！」

ヒカリが落ちないようにオレの腕とポニータの首の間ではさんだ。オレの合図でポニータは走り出した。

「気をつけろよ！にーちゃん！」

「それはこっちのセリフだ」

オレは4階へ向かった。こんな悪趣味のビル、自転車屋を助けたらさっさとぬけてやる！

（特別編）　第３５．５話　金髪くせっけ少年　３　＜前編＞（後書き）

キャーー！！▲▲さまーー！！≧≦▽≦≧

あ。スカウターって知ってますよね？『ドラゴン●ール』に出てくる敵の強さを数値で測るアレです。ここではイケメン度を測っていますけど（笑）。

イラストギャラリー2（前書き）

絵は古い順で載せていきます。下に行くほど新しいです。
絵は普通の人よりちょっと上手い程度です。
ところどころおかしいところがありますが目をつむってください（
＾＾；

イラストギャラリー2

「女性キャラ集合図」
＞ｉ９２３３―６９９＜
左からアキラ、ヒカリ、ミル（本編未登場）、マイ（本編未登場）、モミです。
女性キャラが全員ゴスロリを着ています。

２００９年の１０月に描いた気がします。いつか仕上げたいですね。
私は自由帳を４つに分けて描いていますがこの絵は珍しくフルページで描きました。
うしろのハロウィンの絵の線画がうっすら写っています。

「吸血鬼と修道女」
＞ｉ９２２９―６９９＜
コウキ「もてなしてさしあげます？」
ジュン「だまされるなーー！！」

２００９年のハロウィンに描きました。１日遅れで出来上がりました。
吸血鬼のコウキが修道女（シスター）のヒカリを誘惑しています。
うしろで狼男になったジュンが怒っています。

「姫とキョンシー」
＞ｉ９２３０―６９９＜

▲▲「ハッピーハロウィン！！」
ジュン「オレの姫を返せーー！！」

これも２００９年のハロウィンに描きました。「吸血鬼と修道女」と同時に描いた絵です。
キョンシーの▲▲さまがヒカリを誘拐（？）しています。
うしろではジュンがわめいています。ジュンは基本ギャグキャラですね～（笑）。
▲▲さまが初描きなので顔の形がおかしかったり今とは描き方が違ってたりします＞＜

当時『小説カキコ』で連載していましたがまだ本編未登場なのにイラストには出ていました。
『長髪の美少女』は２００９年の４月に書き始めたものです。
▲▲さまが本編に本格的に登場するのに１年以上かかりました（苦笑）。

「吸血鬼コウキ」
＞ｉ９２２６―６９９＜
ハロウィンが終わった１１月に描きました。
初めて描いたコウキの正面図です。
コウキってけっこう鼻が高いです。
初描きで高く描いてしまったのでそういう設定になりました（笑）。

この頃コウキの髪型が決まっておらず真ん中の前髪だけ残して残りはオールバックにしていました。
１４話でヒカリと再会したときはオールバックでしたが３６話で再び髪型が変わります。

これからはキャラ紹介や人気投票結果発表の絵の髪型で統一します。
それでもたま～に髪型を変えると思いますが。コンテストとか女装するときとか（笑）。

「キョンシー▲▲」
＞ｉ９２２７―６９９＜
▲▲さまの全体図です。▲▲さまイケていますわ！
▲▲さまは最初は原作に近い髪型でしたが不自然な髪型だったので後に少し変えました。
▲▲さまはかっこいいけど髪の毛がややボサボサだったので・・・。
チャイナ服大好きですｖ昔ミシンでチャイナ服を１０着ぐらい作ったことがあります（笑）。

「巫女のヒカリ」
＞ｉ９２２５―６９９＜
本当は巫女というより中国のお姫さまです。
巫女とチャイナ服を組み合わせたものの配色に困りました（苦笑）。
色が被らないようにしたかったので・・・。

「不思議の国のヒカリ」
＞ｉ９２２８―６９９＜
イカレ帽子屋と白うさぎとチシャ猫とアリスを合体させたらこうなりました（笑）。
うさギター素敵ですよね。こんなおかしなギター、どうやって弾く

のかわかりませんが（笑）。
さりげなくハートの女王も混ざっています。ミニハットについているハート・・・。
目立たないですがスペードの形のピックを持っています。１１月末に描きました。

「少女漫画なトリオ」
＞ｉ４０５９―６９９＜
１２月２日に描いて１３日にペン入れ。２２日にお絵かき掲示板で色を塗りました。
『乙男（オトメン）』第１巻を参考にしました。
ヒカリ以外のキャラが気持ち悪いです（笑）。
ヒカリの髪型と帽子が微妙に間違っています。いやん！（笑）

「クリスマス」
＞ｉ９２３６―６９９＜
２００９年のクリスマスに描いた絵です。１日遅れで出来上がりました。
ハロウィンの絵もクリスマスの絵も当日には間に合いませんでした（涙）。
コウキが初めて前髪をそのままにした絵です。
妹に見せたとき「こいつ誰だよ！」とつっこまれました（笑）。
背景があいかわらず残念です。

「ライコウ1」
＞i92220―699＜
2009年12月末に描いた絵です。
ライコウとヒカリとアキラです。ヒカリとアキラは下手ですが・・・。
ハガキがインクジェットだったせいかエンピツとペンが思い通りに動きませんでした。
おかげで残念なクアリティに・・・。エンピツで下書き描いたら紙が傷つきました。
ライコウはかっこよく描けましたが間違えて顔の真下の部分を黄色く塗ってしまいました;

「ライコウ2」
＞i92221―699＜
これも2009年12月末にインクジェットのハガキに描いたものです。
前回上手く描けなかったので今度こそ!
・・・と思いましたがヒカリの等身がおかしくなりました（泣）。
直筆で描いたのが敗因でした。

「ライコウ3」
＞i92222―699＜
3度目の挑戦。2010年1月の半ばに描きました。
普通のハガキに描いたのでこの通り!綺麗に描けました☆
素人の私には色鉛筆がお似合いかもしれません。

「夢の結婚式」
＞ｉ９２３７―６９９＜
２０１０年２月に描きました。
『小説ストーリーテラー』で参照回数が１０００を超えた記念に描いたものです。
１３話のヒカリが見た夢の内容にそっています。

「スーツ」
＞ｉ９２３４―６９９＜
２０１０年５月の半ばに描きました。
就職活動で悩んでいたのでスーツ姿のジュンとヒカリとコウキを描きました。
ジュンだけなぜかスーツではなくブレザーに見えます。
イメージは会社の出勤途中ですがジュンは通学途中にしか見えません（笑）。

「ヒカリとコウキ　ＩＮ　制服！」
＞ｉ９２２４―６９９＜
今日描きました（２０１０年７月１５日現在）。
大学の教職過程の授業のポスターの余白に描きました。
ありあわせのマーカーで描いたのでコスプレ衣装みたいな色になってしまいました。

イラストギャラリー2（後書き）

これでイラストギャラリー2は終了です。
またある程度イラストがたまったらイラストギャラリー3に載せます。

目のサイズがあってなかったり、指がおかしかったり、腕が長すぎたり、顔がでかすぎたり、左右逆だったりしますが見てくれてありがとうございます＾＾

（特別編）　第３５．５話　金髪くせっけ少年３　＜中編＞

＞ｉ９３８０―６９９＜

　オレはヒカリがポニータから落ちないように気をつけながら進んだ。ギンガ団や白衣の人が何人か現れたけど前の敵はポニータがけちらし、後ろの敵はナポレオン＆ヤミカラスが相手をした。まだ本気を出し切れてないポニータの前にズバットが現れたけどナポレオン＆ノワールのコンビがやっつけてくれた。そっか。ヒカリのヤミカラスはノワールっていう名前だったな。オレもヒカリみたいにポケモンに名前をつけたかったけど名前が長すぎたのとポケモンがいやがっていたからやめた。……なんだってんだよー！ポニータにグレートファイアーライダーってかっこいいじゃん！正しい階段を上がり、ついにオレたちは４階へたどりついた。ろうかの前方には外へむきだしになった壁がある。……実はオレ、４階で爆発起こしたからほんかくてきに追われることになったんだよな。ないしょにしてもヒカリにはバレるからかくごしておこう。

「助けてくれ～！」

　オヤジっぽい声が聞こえた。聞いたことのない声だ。自転車屋か！？

「ポニータ！」
「ヒヒーン！」

　オレが言うまでもなくポニータは声が聞こえた場所に向かった。ドアをけやぶるとそこはガソリンタンクみたいなキカイがいくつもあるうす暗い部屋だった。ポニータの炎のおかげでそのキカイがオ

レンジ色で白っぽい台の上にあるということがわかる。

「誰だ？」

女の声と同時にパッと明かりがついた。オレはケイカイしながらボヤ～とする目をムリヤリ明かりになれさせた。そこにはギンガ団のしったぱの女よりさらに変なかっこうをした女がいた。しばられたオヤジがピンク色のポケモンといっしょにキカイの横に隠れるようにしゃがんでいる。

「こ、子ども！？」

「ピッピ？」

オヤジは『サイクルショップじんりき』とプリントされたエプロンを着ていた。やっぱり自転車屋だ！

「と、通りすがりの仮面ファイターだ」

助けてくれたイケメンのマネをしてみた。今のオレじゃかっこつかないのはわかっている。だってマキシマム仮面のマスクつけてないし気絶したヒカリをかかえてるんだもん。

「仮面ファイター？……ごっこ遊びはよそでやってくれないかしら？」

その女は体にぴったりフィットした水着みたいな服を着ていた。水着と言っても腕と右ひざもカバーしていて両足にはしたっぱと同じ白いブーツをはいていた。だけど左のひざはむき出しで黒いバンドをつけていてひざしたまである黒いくつしたをはいている。腕とあし以外は白。右ひざとむねの下に銀色のバンドが2本ある。白黒

の服を着たその女で色がある部分といえばアカムラサキのかみだけだった。そのかみも上と右がおだんごになっていておかしかった。

「どちらかというとわたしにはお姫さまを救出中の白馬に乗った王子さまに見えるけど？」

「ヒカリはオレの家族幼なじみ親友妹だっ！」

「……よくわからないけど妹の姫君を助けにきたのね。ふうん」

オレはポニータから下りるとヒカリも下ろした。かべにもたれかかるように座らせるとオレは相手をにらみつけた。相手はどんなポケモンを出してくるかわからない。オレの手持ちの中で１番大きいポニータで戦うことにした。

「何か用かしら？……と訊くまでもないわね。自転車屋を助けにきたのね」

女はモンスターボールを開けた。大きなしっぽが目立つフサフサした暗いムラサキ色のポケモンを出した。

「スカターンク！」

相手ポケモンは低いごわごわした声で鳴いた。オレとポニータは構えた……けどその女の後ろでナポレオンとノワールがコソコソしているのが見えた。まさか自転車屋とピンク色のポケモンをなわをほどきに行ったのか？……さすがヒカリのポケモン！頭いいな～。

「いいわ。このギンガ団幹部、ジュピターが相手してあげましょう」

＞ｉ９３５５－６９９＜

オレはつばを飲んだ。このジュピターという女、強そうだ。謎のイケメンとどっちが強いかわからないけどなんかオーラを感じる。ここは自転車屋を助けてさっさとトンズラしたほうがいいかもしれねー……。

「それにしてもおばさん変な髪型だな」

「おばさんですって！」

こうなったら時間稼ぎだ。上手いこと食いついてきたし。

「わたしはまだ26よ！そりゃマーズほどじゃないけど若いのよ！」

マーズって誰だよ？ほかにもギンガ団コンブっているのか。オレは自転車屋のほうを盗み見した。ナポレオンとノワールはなわをほどくのにてまどっている。なれてないのか。早くしてくれよ……いつまでひきつけられるかわかんねー……！

「そっか。わりぃ。それにてもジュピターのかみってきれいなアカムラサキだな。まるでヤキイモを2こ頭に乗っけてるみたいだ！」

「誰が焼き芋よっ！しかも呼び捨てしたわね！」

「ヒッ……ブッヒヒーン。ヒン。ヒヒン！」

ポニータもオレにならってジュピターのポケモンに話しかけた。

「わ、わ、わ！わりぃ！でもきれいだと思ったのはホントだぜ？ただジュピターさんちょっとにおうな～。香水のつけすぎじゃね？それともポケモンのにおいか？」

「余計なお世話よ！」

やっべ……オレって人をほめるセンスないのかも。くやしいけど

コウキのほうがほめ上手だ。ナポレオンとノワールはなにモタモタしてんだ？ポケモンの手じゃダメなのか？こんなときあのエセ紳士のコウキがいたら……！

「『きりさく』！」
「ポチャッ！？」
「カーーッ！？」

ジュピターのポケモンがナポレオンとノワールを攻撃した。やっべえ……バレた！

「やけにしゃべると思ったら時間稼ぎだったのか。……残念だな。散々コケにした罰だ。コテンパンにやっつけてやる！」

ちぇっ。けっきょくバトルかよ！

「ポニータ！『ふみつけ』！」
「ヒ～ヒヒヒ～～ン！」

ポニータは全体重をかけてスカタンクをふみつけた。ミカンがつぶれるような音がもれる。

「プギャッ」
「ひるむな！『嫌な音』！」

ネコだかリスだかわからないポケモンはとがったつめでゆかをひっかいた。あまりにもひどい音だったからオレは耳をふさいだ。

「なんだってんだよー！」
「スカタンク！『辻斬り』！」

かわいくない顔をしたポケモンはゆかをひっかいていたつめをポニータに向けた。３本の太いつめはポニータをようしゃなく斬りつけた。

「ポニータ！」
「ヒンッ……」

ポニータはギリギリたえた。よかった……。これ以上戦わせるのはつらいからキャモメと入れかえよう。そう思ったとたんポニータがかたむいた。

「え？」

ポニータはそのままたおれた。なにっ！？予想以上に『つじぎり』のダメージは強かったのか？！

「ふみつけられたときに『毒ガス』を放っておいた。それにやられたのね」
「ちっ」

ＨＰ０のポニータを戻しキャモメを出した。

「ピー！」
「スカンク対ウマの次はスカンク対カモメか。『乱れ引っ掻き（みだれひっかき）』！」
「『でんこうせっか』！」

キャモメは細長い体をいかし、スカタンクのひっかき攻撃をよけてクチバシで攻撃した。だけど攻撃したスキをねらわれけっきょく『みだれひっかき』を受けてしまった。ちいっ……。

「くせーんだよお前！『水の波動』！」
「『辻斬り』！」

―ズシャッ。

スカタンクはキャモメの放った『水の波動』ごと斬った。

「ピーーーッ！」
「キャモメ！！」

キャモメはヒカリがいるかべまで飛ばされそのままかべからずり落ちた。動く気配はない。ロトム、ポニータ、キャモメ……！これで戦闘不能のポケモンは3匹。残っているのは……。

「威勢が良いのは最初だけだったわね。坊や」
「き、君ーー！頑張ってくれーー！」
「ピピーッ！ピー！」

自転車屋とポケモンがあせっている。……チッキショー。ヒカリのためにも、自転車屋のためにも負けられねー！

「くっ」

オレは最後の手持ちが入ったボールを見た。やっぱ最後に頼れるのはお前だけだ！

「キャモメ、よくやった。いっけー！ナエトル！」

（特別編）　第３５．５話　金髪くせっけ少年３　＜後編＞

初めてもらったモンスターボールから初めてもらったポケモンが飛び出した。茶色いこうらにピンとはった２つのはっぱ。見ていて気持ちいい黄緑色の体のポケモンはナエトル。いつもはぼーっとしているけどいざというときはたよりになるオレの最高のパートナーだ。

「ルーーッ！！」

リコーダーでふく２番目の「ド」のような声でナエトルは鳴いた。……おこっている。仲間をやられておこっているんだ。ロトムとたたかったときのように。

「いくぜ！『はっぱカッター』！」

「ルルーッ！」

ナエトルは頭を２回ふるとはっぱを４枚飛ばした。頭に生えているのは２枚だけだけどはっぱはなくなっても何度でも生えてくる。

「効かん」

スカタンクはフンッと鼻で笑うと高速で飛んでくるはっぱをしっぽでなぎはらった。ホントに効いてねえ……。

「毒・悪タイプに草タイプの技なんて効かないわ」

「『体当たり』だ！」

「ルーッ！」

ナエトルは４本足をトコトコ走らせゆうかんにスカタンクへ向かった。

「『スモッグ』」
「スカッ！」

ジュピターの命令でスカタンクは口からムラサキ色のガスを出した。ガスのせいでナエトルはせきこみ足を止めてしまった。

「ナエトル！」
「ル～～」

ナエトルはつらそうなのに「だいじょうぶだよ」という目をした。……どこが大丈夫だよ。おまえ苦しそうじゃん……！

「草タイプは毒タイプに弱い。……自然って弱いわね。毒タイプで１番威力が低い『スモッグ』でさえ簡単に汚染されてしまうもの」

なに言ってるかわかんねえ。毒タイプと温泉にどんな関係があるんだよ？

「『のろい』！」
「ル～！」

ナエトルはムラサキ色に光り、すばやさと引きかえに攻撃と防御を上げた。だがそんなオレたちの努力をバカにするようにスカタンクはナエトルをきりさいた。

「ルーッ！」
「ナエトル！」

「ただでさえ鈍いのに素早さを下げてどうするのよ」
「くっ……」

ナエトルはまだ戦える。ジュピターの言ったとおり『スモッグ』は弱い攻撃だ。ナエトルには効果バツグンの攻撃でもＨＰはあまり減っていない。だけどスカタンクに勝てる気がしない。できればポニータでしとめたかった。せめてロトムがひんしじゃなければ……。

「『辻斬り』！」
「ふんばれ！ナエトル！」

―ガッキーン！

よけることができないとわかったナエトルはこうらで『つじぎり』を受け止めた。直撃も急所もさけたがこうらにヒビが入った。……すまねえ、ナエトル！ナエトルのこうらは土でできている。そう何度も相手の攻撃を受けられない。

「諦めなさい。あなたもナエトルも後ろで気を失っている女の子も自転車屋も一撃で終わらせてあげるわ。命までは奪わない。大人しくやられてくれればもう手を出さないわ。……そこにいるピッピはもらっていくけどね」
「ふざけるなっ！！」

歯ぎしりしながらジュピターをにらんだ。誰がおとなしく攻撃なんて受けるもんか！オレもヒカリもナエトルも自転車屋も攻撃されるすじあいなんてない！！

「やめろー！ピッピだけはーー！」

自転車屋のオヤジもさけんでいる。もしかしてオヤジにとってピッピは最初に仲間になったポケモンなのかもしれない。大切な人を……大切なポケモンをキズつけたりうばわれりなんかさせない！

「ヒカリもナエトルも自転車屋もピッピもキズつけさせねーーー！！」

「ルーーーッ！！」

ナエトルの全身が光った。よくわかんねーけどいける気がする！ナエトルは体が見えなくなるほどまぶしい光につつまれ大きくなった。しっぽが生え、体が長くなり、背中にしげみが生えてきた。足は以前より太く強くツメも生えてきた。

「ガーーーッ！！」

声はリコーダーからドラムへ。タマゴ型の目は６つに切られたゆでタマゴへ。今までよりも強くたのもしくなったあいつはオレを乗せられるくらい成長した。

「バカなっ！土壇場で進化しただと！？」

「すっげー！まるで恐竜みたいだ！」

ナエトル……いや、進化したからちがう名前か？わかんねーからナエトルでいいや。ナエトルの頭からしっぽの先までやまぶき色のかたそうなコウラがおおっていた。前足と後足の間には緑ゆたかなしげみが左右に１こづつ生えていた。あごの横にはトゲがある。進化する前より４倍大きい。強そう！今なら勝てる！

＞ｉ９４１３―６９９＜

「いっけー！スーパー『はっぱカッター』！！」
「ガメーーッ！！」

進化したナエトルはしげみから次々とはっぱを放った。ナエトルだったときよりはっぱの枚数も飛ばすスピードも速い。スカタンクはよけきれずに『はっぱカッター』を全て喰らった。

「ちっ。少しきつい……。『切り裂く』！」
「『からにこもる』！」

―ガキン！

さっきよりじょうぶになったこうらがスカタンクのつめをはねかえす。ナエトルは負けない！ヒカリも守る！

「『ヘドロ攻撃』！」
「『影分身』！」

ナエトルは分身を４つ作り出した。ヘドロは分身の１つをすりぬけゆかに落ちた。

「小賢しい……！ズバット！」
「キキー！」

ポケモンが２匹だと！？なにをする気だ？

「ズバット！自転車屋を人質に取れ！」
「なっ！」

やばい！なんてひきょうやつだ！コウフンしていた体は一気に冷

めた。オレは自転車屋を見た。だがキカイの横にあるのはなわだけだった。

「馬鹿なっ！？いつの間に……！？」

ナポレオンとノワールもいない。ズバットは自転車屋がしばられていた場所まで飛ぶがそこには誰もいない。

「そうはいかんぞ」

「「！？」」

左を見たら茶色いコートを着たおっさんと赤い虫ポケモンがいた。足元にはナポレオンとヤミカラスがいる。おっさんの後ろでは自転車屋とピッピがだきあっていた。それにしてもおっさん……なんでこんなところに……！？

「国際警察のハンサムだ！自転車屋は救出した。お前たちギンガ団の悪事もここまでだ！」

「国際警察だと！？」

ジュピターは顔をゆがませた。なんでこのタイミングでおっさんが出てきたかわかんないけどラッキー♪今のうちにスカタンクにロックオンだ！

「『体当たり』！」

「しまった！」

「ガメーーッ！」

スカタンクは自分とほぼ同じ大きさになったナエトルの『体当たり』を受けた。スカタンクは最後に「プギャーー！」と鳴くと目を

×にした。

「よっしゃーー！これであんたの切り札は戦闘不能だ！どうする？まだ戦う？」

「大人しく投降するんだ！」

「おのれ～～～！」

ジュピターはスカタンクをボールに戻す間も表情はゆがんだままだった。

「坊や、あなただけは許さない！『吸血』！」

「おわっ！？」

「ガメッ！」

ナエトルはオレをかばうように前へ出た。ズバットはオレとナエトルをさけ、後ろのほうへ飛んだ。……しまった！

「ヒカリーーーーー！」

「キ～～～！」

「いかん！ハッサム！」

ズバットがヒカリにキバをむく。おっさんのポケモンがズバットを追うが間に合わない。目と足のない青いコウモリはようしゃなくヒカリの首元にかぶりつこうとした。

「やめろおおおおおおおおお！！」

オレを攻撃してもいい。だけど……ヒカリは……ヒカリだけはっ……！！

「ラスターカノン！」

―ドカンッ！

銀色の光線がズバットをおしのけた。ズバットは叫ぶこともできずにリンゴのように落ちた。ズバットをやっつけたのは2本足で歩く紺色のケモノだった。……たしかルカリオって名前だっけ？

「この子には指一本触れさせないよ」

イケメンにふさわしい声で謎のイケメンはしゃべった。……くそっ。オレもそんなキザなセリフ言ってみてー！

「次から次へと……何者だ?!」

「通りすがりの仮面ファイターさ」

げっ……キャラかぶった。……マネしたのはオレのほうだけどさ。ジュピターはハンサムと自転車屋とオレと青黒男を順番に見た。くやしそうな顔でオレたちを見ていたけどやがてあきらめるようにため息をついた。

「……それ、流行ってるの？」

「少年たちの間で流行っているよ」

「私も『仮面ファイター』を見たから国際警察になったんだ！」

……マジかよ。イケメンセリフを真似ているだけだけどハンサムのおっさんは『仮面ファイター』にあこがれて国際ケーサツになったのか……。

「少年は何歳になっても少年ね」

そう言い終えるとジュピターは黒いものをなげた。

「また会いましょう。少年たち」

黒い煙がまたたくまに部屋に広がりなにも見えなくなった。

「しまった！『霧祓(きりばら)い』！」

ハンサムのポケモンがなにかしたのか煙が晴れた。４階はオレたちしかいなかった。ハンサムはあわててあたりを見回すがジュピターはどこにもいない。オレはヒカリのもとへ走った。

「ヒカリ！」
「ポチャチャ！」
「カアア！」

ヒカリの顔色はよくなったけどまぶたは固く閉じたままだった。そこまでひどい攻撃だったのか……？

―ババババババババッ。

上から変な音が聞こえてくる。早くこの建物から出たほうがよさそうだ。

「こんな所に隠し階段が！それに上から聞こえてくる音……ヘリコプターで逃げるつもりか！……君たちは非難してくれたまえ！」

ハンサムはそう言い残すと隠し階段を上っていった。イケメンがこれからどうするか気になって見てみたらナエトルの回復をしてい

た。

「お。サ、サンキュ……」

イケメンはいいキズ薬をスプレーしたあとさわやかに笑った。

「自転車屋を助けに行ってくれてありがとう。君のナエトルはハヤシガメに進化したんだね。おめでとう」

「あ……いや……その……」

オレ、なんか言うべきなのかな。お礼はさっき言ったからまた言うのはおかしいかな？自転車屋を助けられたのはハンサムのおかげだってことは言わなくても見ればわかるし……。

「……悪いがワタシもこれからギンガ団を追う。残りのポケモンはポケモンセンターで回復してくれたまえ」

「あ、ああ……」

イケメンは目を閉じたままのヒカリをチラッと見た。

「彼女は眠ったままだね。まるで眠り姫だ。……王子さまのキスよりカゴの実のほうが効くよ」

オレは貝がらみたいな形をしたアオムラサキの実をてわたされた。イケメンの言うとおりだ。今はヒカリと手持ちのポケモンを回復させることに集中するべきだ。

「君たちとはまた会いそうだね。特に黒髪ロングの女の子には何か縁を感じるよ。不思議な波動を感じる」

イケメンはオレが破壊したかべからとびおりたと思ったらポケモンに乗って飛んでいった。水色の体に赤いつばさ……シンオウ地方には似合わないドラゴンポケモンだった。

（特別編）　第３５．５話　金髪くせっけ少年３　＜後編＞（後書き）

本当はギンガハクタイビルを爆発させようと思いましたが長くなるのでやめました（苦笑）。

第３６話　迷い　＜前編＞（前書き）

意識不明のヒカリ。夢の世界で彼女が見たものは・・・？

第３６話　迷い　＜前編＞

私はついに遭遇した。黄緑色のボディに対になっている大きな鎌と羽。シャープな体にふさわしい鋭い目付き。ずっと探していたカマキリポケモン、ストライクだ。５日間草原をさまよったかいがあった。実はすでに何回かストライクと遭遇したけれどいずれも逃げられてしまった。私を見て身構えないところを見ると今まで会ったストライクとは別固体みたい。私はチャンスとばかりに円形のものを投げた。

「！」

私の投げたものはストライクの３０ｃｍ手前に落ちた。ストライクはそれに興味津々で近づく。エサだ。それも市販されていないコロッケ型のポケモンフード。ストライクはかがんで匂いを嗅いだ。しばらく鎌でつついていたけどやがてエサを上機嫌で食べ始めた。今だ！

―ヒュッ。

私は迷彩柄のボールを投げた。ボールはストライクの頭に当たった。ストライクは光に包まれながら吸い込まれていったけど１秒と経たないうちにボールから出てきた。しくじった！

「ストーーーッ！！」

ストライクは怒った。私は身の危険を感じエサをばらまいた。だけどストライクは宙を舞う大量のエサを難なく切り裂いた。逃げなきゃ……！もっと早く逃げ出していたとしても人間の足で虫ポケモ

ン一早いストライクから逃れられるわけがない。ここではポケモンは秘伝技を使う場所でしか取り出せないようになっている。水辺だったらあの子を出せるのに……！

―コンッ。

「！？」

ストライクの右肩に石が当たった。ストライクの注意が私からそらされたすきに私はもう一度ボールを投げた。

―カッ。

ボールはストライクの胸に当たりみるみる吸い込んでいった。私は息を止めて揺れるボールを見守った。

―ガタッ。ガタッ。ガタッ……フォン。

ボールの揺れが収まった。ふう……捕獲完了！

―パチパチパチ。

後ろから手を叩く音が聞こえた。私は半ば呆れながら振り向いた。

「お見事」

赤を基調にした服装の男の子がニコニコ笑っていた。帽子にTシャツにジーパンを履いた彼はどこにでもいるトレーナーに見える。顔も並だし。だけど油断しちゃいけない。このトレーナーは全く普通じゃない。

「助けてくれてありがとう。〇〇」

黒髪の男の子は小首をかしげた。

「ううん。ボクこそ遅くなってごめんね。トイレに行っている間にストライクが出るとは思わなかったよ」

ストライクはめずらしいポケモンだ。出現する場所も限られている。しかも遭遇できたとしても逃げられることが多い。攻撃力と素早さが高くて見た目もかっこいいからストライクを持っていることは一種のステータスだ。だけど〇〇はストライクに興味を持たずにこう言った。

「これで博士も喜ぶね」

「〇〇もなにか捕まえたら？せっかく入場料を払ったのに」

「●●と一緒にいたかっただけだからいいよ」

「なにそれ」

〇〇は見た目は普通だけど中身は変だ。ポケモンバトル以外のことは並。学校の成績も少々悪い。ポケモンバトル以外の趣味と言えば自然と一体化すること。空を眺めたり、木にもたれかかったり、虫と触れ合ったりしている。

「ストライクって△△に似てるね」

「なっ……！？ど、どこらへんが？」

私はストライクの入ったボールを見つめた。ストライクはボール越しに私をにらみつけている。

「目付きが悪い・生意気・黄緑色なところとか」
「んー……言われてみればそうね」

△△は目付きが鋭くて高飛車なくせに緑色が好きだ。もっとも、安らぎの効果がある緑色が自分に似合わないことはわかっているので緑色のものはあまり身に付けていない。

「そのストライク△△にあげれば？」
「△△にあげるくらいなら○○にあげる」

私は○○に背中を見せた。ストライク入りのボールをバッグにしまったけど△△のことが頭から離れない。△△なんか大ッ嫌いだ。お坊ちゃまだし、偉そうで、自信満々で、エリート教育を鼻にかけている。私に会うたびに私のことをバカにするからいつも喧嘩になる。そんな私たちの間に割って入ってなだめるのが○○だ。そりゃあ△△はかっこいいけどキザでムカつく。町に行くと女の子に囲まれるし何様よ。でも……そんな△△が好きな自分が悔しい。私は涙をこらえた。私、なんであんな奴が好きなんだろう……。

「やめときなよ」
「え？」

振り返りざまに○○に涙を拭かれた。ハンカチではなく素手だったけど。

「△△じゃ●●を幸せにできない。ボクと付き合いなよ。前から●●のこと好きだったんだ」
「えっ……！？」

私は目を丸くした。それと同時に胸の動悸がどんどん高くなって

いった。

―ドクンドクンドクン。

う……うそ！○○が私のこと好き？なんでっ？！私なにかした？
○○が私のことをそういう目で見ていたことに全く気づかなかった。
出会ってから１２年間同じ町で育ったのに。

「答えは今じゃなくてもいいよ。ボクと付き合うかどうか考えて」
「えっ……？あ、うん」

突然の告白のせいで口も頭も回らない。私これからどんな顔して
○○のこと見ればいいのーーー？？

「出口まで送るよ。また野生のポケモンに襲われるといけないから
ね」

○○は私の手を取った。手を繋ぐのは小１以来だ。あのときから
○○は私のことが好きだったのかと思うと気が気でなかった。

「待っているよ。ずっと」

やさしい眼差し。△△と真逆だ。優しくて、地味で、勉強は不得
意だけど物事の真理を捉えるのが得意。ポケモンバトル以外のとき
は詩人みたいな○○。

「でも待ちきれなくなったらさらうよ。△△には絶対渡さない。取
られたとしても奪うから」

○○は純粋だ。純粋だからこそ、強くて怖いのかもしれない……。

＊＊＊

私はまぶたを開くのをためらった。一度開いて、また閉じて……今度こそとまぶたを完全に開いた。そこに写ったのは自分の部屋でもトレーナーズスクールでもモミさんがいた診療所でもない。ポケモンセンターでもなくナタネさんの部屋の天井でもない。私の顔の前にあったのは肌色の天井だった。天井には黒い染みや影、赤いライトがついている。目がぼやけているせいか天井が私に迫(せま)っているように見えた。……ん？

目のピントがようやく直った。私の目の前にあるのは天井なんかじゃない。誰かの顔だ。赤いベレー帽。黒い短髪。高い鼻。見覚えのある顔。もしかして……コウキくん？なんでコウキくんがいるの？……ここどこ？まだ夢の中？

＞ｉ９５１６―６９９＜

―バンッ。

「ポチャーー！！」

乱暴にドアが開いた。ナポレオンだ！

「げっ！？ナポレオン！もう戻ってきたのですか？ご、ご機嫌うるわ……わーーーっ！！」

コウキくんが挨拶を言い終わらないうちにナポレオンはコウキくんの顔に水を噴射(ふんしゃ)した。

「ポチャ！ポチャッポチャーー！！」

ナポレオンは足踏みした。今度は私に向かって怒鳴っている。私、なにか悪いことしたっけ？なにか思い当たることはないかと考えようとしたらふとんの中でなにかがもぞもぞした。

「ぎゃ、ぎゃう～」
「キララ★！？」

やだ！キララ★！いつのまに！？……ていうか私いつベッドの中に入ったの？

「ポポチャ！ポチャポチャー！」
「ぎゃう。ぎゃう」

キララ★はナポレオンにペコペコ謝るとボールの中へ入っていった。ナポレオンよりも大きくて強くてタイプの相性が有利なルクシオがポッチャマに頭を下げるなんて変な光景だけど。

「ポーチャ！ポーチャポチャポチャー？」

ナポレオンは次にコウキくんをにらんだ。『コウキ！おまえなにをしようとした？』と訊いている。

「ボ、ボクはただヒカリさんが眠っていたので王子さま的なキスでヒカリさんを目覚めさせようかと……。前回はあなたに邪魔されたけど今回はいけるかなと……わーーーっ！」

ナポレオンはベッドに飛び乗った。ベッドのバネの勢いを利用し

てコウキくん目掛けて飛ぶと『往復ビンタ』を浴びせた。

―パンパンパン！パンパンパン！パンパンパン！パンパンパン！

４回当たった。コウキくんには悪いけど『往復ビンタ』の音を聞いていたらパンが食べたくなった。

「痛！痛たた！ごめんなさい！」

「ナポレオン！やめて！」

そう言った直後黒い翼がナポレオンをコウキくんから引き離した。ヤミカラスのノワールだわ！

「ポチャ～……」

「カア～」

ノワールはナポレオンをなだめた。２匹が話し合うのを見てギンガハクタイビルでも出来事が頭の中でよみがえった。私は確か……ゴースの『ナイトヘッド』を受けて意識を失って……！

「なにがあったの！？ここはどこ？ジュンは？ギンガ団は？」

「ヒカリさん。落ち着いてください。今から全てお話します」

そう言ったコウキくんのほっぺは真っ赤に脹れていた。

第３６話　迷い　＜前編＞（後書き）

展開が遅いな～。どうすれば早くなるのでしょうか？
誰か教えてください！！（＜＿＞）

第３６話　迷い　＜中編＞（前書き）

ギンガハクタイビルで倒れたヒカリはホテルで目覚める。辛くても知りたい現実を知りヒカリが取った行動とは・・・？

第３６話　迷い　＜中編＞

空にある海は青々しさを失って赤みがかってきた。青色に染まった水にオレンジの絵の具がついた筆を入れたように。人混みというほどではないけど通りでは人々がまばらに歩いていた。遊び疲れた子どもたち、仕事を終えて帰る人たち、そして買い物袋をさげて帰る親子……。

「今日の夕ご飯はハンバーグよ」
「ほんとう!?ミルうれしいー♪」

母と娘の会話が聞こえる。今日のハクタイシティは平和だった。３日前はジュンがギンガ団のビルで暴れて騒いでいたのに。コウキくんは今まで起きたことを説明したあと泣きそうな目で言った。

「３日間……３日間も目を覚まさなかったんですよ?２度と目を覚まさないと考えたら怖くなって……眠れる森の美女や白雪姫のようにキスをしたらもしかしたら目覚めるのかもしれない。今考えたら馬鹿馬鹿(ばかばか)しい考えでしたがワラにすがる思いだったんです」

コウキくんから話は聞いたあと私は町に出た。コウキくんは「ボクも行きます」と言ったけど１人でいたい気分だと伝えた。モミさんとナタネさんが見舞いに来たがっていると言われたけど今はそんな気分じゃなかった。ずっと眠っていたから運動したい、考え事をしたいと理由を述べたらコウキくんはしぶしぶ認めた。

「じゃあせめてこれを着ていってください」

そういってわたされたのはキレイにラッピングされた袋。中身は

背中が開いたミニのワンピースだった。腰から下は3段フリルに切り替わっていてかわいい。色は白。

「アキコと2人でデザインを考えてオーダーメイドしたんですよ。カジュアルですが一級品です。1人で散歩したいとき、ボクのことを考えるとき、ボクとデートするとき、ボクと追いかけっこするときなどに着てください」

こうして私は白いワンピースを着て外出した。考えることはたくさんある。私が気絶したあと『あおくてくろい人』が現れたこと。彼がめずらしい青いポケモンとギンガ団のしたっぱを足止めしている間にジュンはギンガ団の幹部と戦ったこと。ハンサムさんとハッサムのおかげで自転車屋を救出できたこと。幹部は逃げ、それを追ってハンサムさんとあおくてくろい人はいなくなったこと。私が意識を失っている間にいろいろなことが起きた。

あおくてくろい人のことを聞いたときは驚(おどろ)いたと同時に悔しかった。あのとき『ナイトヘッド』さえ受けなければ彼と話すことができたかもしれない。彼についてコウキくんに問いつめたけどジュンによると彼は名前も告げずに去ったみたい。……なにそれ？かっこよすぎ！ますます気になっちゃうじゃない。

それにしても変な夢。意識を失う直前ゴースに海でおぼれる幻影を見せられた。そのあと気づけば私は夢の世界の草原でストライクを捕獲(ほかく)していた。ストライクってハッサムの進化前のポケモンよね。しかもコウキ君似の男の子に口説かれる始末。私、そんなに男の子に飢えていたかしら？たしかに彼氏はほしいけど……。現実での出来事が夢にまで影響を与えただなんて。

『△△じゃ●●を幸せにできないよ。ボクと付き合いなよ。前から

●●のこと好きだったんだ』

名前を思い出せない。はっきり聞こえたはずなのに。自分でも口にしたはずなのに。あの夢はなに？あれはコウキくん？黒髪で赤い帽子を被っていたけど別人？でもコウキくんは頭が良い。自然と一体化するなんて変わった趣味は持ってない。それにコウキくんは私の一幼馴染じゃない。今回の夢には出てこなかったもう1人の男の子は誰？ジュンとは少しも似ていない。ジュンはエリート教育なんて受けてないしトゲのある言葉は言わない。なんなの？あの夢は。夢は無意識が出てくるってなにかの本で読んだことある。それじゃあ私はコウキくんかジュンと付き合うか迷ってるってこと？……なにそれ。だとしたらアホらしいわね……。

「……」

ナポレオンはなにも言わずに私のあとをついてくる。手には森の羊羹（ようかん）が入った袋を持っている。おみやげ屋さんからもらったものだ。

「お嬢ちゃん大変だったね！新聞で読んだよ。ギンガハクタイビルでの事件。国際警察が金髪の少年と黒髪の少女の協力を借りて自転車屋を救出した……。黒髪の少女って君のことだよね？爆発が起きたあと真っ先にあのビルに向かったもんな。お譲ちゃん若いのに偉いね～。がんばった君に特別に『森の羊羹』を1箱あげよう！」

おみやげ屋のおじさんはほとんど1人でしゃべっていた。私は「はい」としか答えられなかった。本当は気絶して役に立たなかったのに。

「もう1人の英雄はどうしているんだい？彼にもサービスしたいんだが」

「彼は……今、町にはいません」

＊＊＊

事件のあらましを聞かされて私は黙っていた。ナポレオンは私の腕の中で大人しくしている。頭の中でものごとを順番に整理していたら大事なことに気づいた。

「ジュンは!?」

私は足手まといだ。ジュンを助けに行ったのに逆に私が助けられてしまった。しかも大人たちが駆けつけてくれなかったら私たちになにが起きていたかわからない。ギンガ団幹部のマーズの顔が思い浮かび背筋がゾクッとした。彼女は……私の顔をぐちゃぐちゃにしようとした……。

「……」

コウキくんの表情が読み取れない。ナポレオンを見たらうつむいていた。私の顔を見ずにナポレオンは小さく鳴いた。

「……ポチャ」

「ジュンなら『迷いの洞窟（どうくつ）』へ修行に出かけました。理由は教えてくれませんでしたがあなたを守れなかったことに責任を感じているようです。ナポレオンも同じです」

ナポレオンは顔を上げるなりコウキくんをにらんだ。コウキくんは目を閉じてため息をついた。

「もっとも、それはボクにも言えることです。あなたのそばにいな

かったからあなたを守れなかった。同罪です。これでは騎士（ナイト）失格です。これからはボクもジム戦に挑戦しようと思います。あなたを守る力をつけるために」

「ポチャ～」

ナポレオンは私をギュッと抱きしめた。私を守りたいのかな。

「よく考えたらポケモン図鑑完成のためには秘伝マシンが必要ですしね。ジムバッジを集めていればヒカリさんと会う機会も増えます。あなたを守れてナナカマド博士のためにもなる。まさに一石二鳥です」

「そう……」

疲れているせいか、それとも自信をなくしたせいか、私は笑う気分じゃなかった。私はただうなずいていた。

第３６話　迷い　＜後編＞（前書き）

黒と白が交じり合う・・・。

第３６話　迷い　＜後編＞

黄昏た空を見て憂鬱になった。気がつけば私はポケモン像の近くに来ていた。ポケモン像は夕陽に照らされ昼間とは違う顔を見せていた。ナポレオンもオレンジ色が混じった青いペンギンになっている。……はぁ。この力強い立派な像もいつか衰えて朽ちていくのかな。成長するにつれ美しくなっていく花も最後に枯れるように。

―カツン。

階段に足音が響く。誰かが下りている。大した好奇心はなかったけどどんな人か気になりずっと下げていた顔を上げた。

「……！？」

き……きれい。女の私でも見惚れてしまうほどきれいな女の人だった。金色の髪は風のつむぐ旋律に合わせて踊っていた。ジュンと同じ金髪でくせっけなのにジュンと違って女の人の髪の毛は自然なウェーブがかかっている。服は髪飾りから靴まで真っ黒。全身を覆う黒いロングコート。コートの切れ目から覗いている黒いズボン。首と袖には黒いファーまでついている。いくら４月とはいえ暑くないのかしら？髪飾りと靴に入った１本の黄色いラインが月を連想させる。

それに対して私が着ているのは下ろし立ての白いミニのワンピース。開いている背中はリボンが通され編み上げになっている。腕と脚は布地による制限を受けていなかった。多機能腕時計のポケッチはホテルに置いてきたし靴下も履いていない。履きものはぐるぐるリボンで固定されたサンダルのみ。女の人とは髪の毛の色も、服の

色も、体の大きさも、露出度(ろしゅつど)もなにもかも対照的だった。

＞ｉ９９２６―６９９＜

「あら？」

―ドキン。

心臓が跳ね上がりそうになった。女の人が私に気づいた。だ……誰？この人……。背が高いしスタイルもいいからモデル？それとも派手な服を着ているから女優？素材はよくわからないけどあの服高そう……。なんで女優がハクタイシティなんかにいるの！？フタバタウンよりかは都会だけど。

「こんにちは。それともこんばんはかしら？」

女の人が私に近寄った。他の人が私たちを見たら天使と堕天使の会合に見えたかもしれない。黒い羽が宙を舞ってもおかしくないくらいだった。赤く染まる空。黒く染まった天使。もし私のワンピースがじわじわと黒に染まったら新たな堕天使(だてんし)の誕生になる。そう思わせるくらい絵になる光景だった。だけど女の人はビジュアルバンドのような格好をしていながらとても優しそうな顔をしていた。長いまつげに囲まれた灰色の目。くっきりした深い二重の下と高い鼻はピンク色の唇とあいまって外国人みたいだった。それともハーフ？全体的に色っぽい顔だけど優しさがにじみ出ている。この女の人は悪い人じゃない……そう確信できる顔だった。

「あなたが町で噂になっている長髪の美少女？自転車屋救出作戦はお見事だったわね！」

女の人はイタズラっぽく笑った。見た目よりずいぶん子どもっぽい人だな。でも声はいかにも大人のお姉さんらしい色っぽさがある。

「は……はい！ありがとうございます！」

胸がドキドキする。こんなにきれいなお姉さんに話しかけられると緊張する。この人絶対モデルか女優よ！

「名前は？」

「ヒ、ヒ、ヒカリです！」

「ふふっ。照れちゃってかわいいー♪」

「ほえええっ！？」

ほっぺをつんとされた。出会ったばかりのお姉さん（それもきれいな！）に触れられてドギマギした。

「あたしはシロナ。ポケモンの神話を調べている物好きなポケモントレーナーよ。この町に大昔のポケモンをかたどったポケモンの像があるから見にきたの。君はもう見たかしら？」

「は、はい！」

「なんでもすごい力を秘めたポケモンだったって文献には残されている。君もポケモンを探していればそんなポケモンに出会うかもね。ところであなたポケモン図鑑持ってる？」

えっ……どうしてポケモン図鑑のことを……。ポケモン図鑑は権威ある博士によって選ばれたトレーナーしか持っていない。ポケモン図鑑の存在は一般的に認知されているけど本物を見た人は少ない。どうして私が持ってると思ったんだろう。

「ナナカマド博士から聞いたの。最新のポケモン図鑑を3つ作った

って。1人は黒髪ショートの男の子でもう1人は黒髪ロングの女の子。あともう1人、金髪の男の子に渡したかったけどせっかちな子だから渡せなかったって。新聞でギンガ団との戦いで少年と少女が活躍したと聞いてピンと来たわ！もしかして図鑑所有者ではないかって。ポケモン図鑑をもらったトレーナーは実力が高く正義感が強いからね。事件に巻き込まれやすいのよ」

「はい……。でもホテルに置いてきてしまいました」

散歩するだけだったからポケッチもバッグもサイフも図鑑も置いてきてしまった。無用心と言われるかもしれないけどクルル♪が守ってくれるから大丈夫よ。今私はナポレオン、キララ★、ノワール、ラミア、ランス、セニョールの6匹を手持ちに入れている。

「そうなの。残念。見たかったな。そうそう、いいものがあるんだけど受け取ってくれないかしら？」

「いいもの？」

「ポチャ？」

私はナポレオンと顔を見合わせた。シロナさんの存在に圧倒されてナポレオンがいることを忘れていた。

「これよ。これ！」

そういってシロナさんが取り出したのはポケモンのタマゴだった。……どこから取り出したかは知らないけど。白いタマゴには赤と青の四角い模様がところどころにあった。あれ？これって……。

「トゲチックのタマゴですか？トゲピーが生まれるんですよね」

シロナさんは目をぱあっと輝かせた。

「よく知ってるわね！さすが図鑑所有者！そうなのよ。このタマゴからはトゲピーが生まれるの。私のトゲキッスが産んだタマゴよ。トゲチックの進化系よ」
「トゲチックに新たな進化形が発見されたんですか！？」

トゲピー。針玉ポケモン。スボミー（セニョール）と同じベイビイポケモンとも呼ばれトレーナーへのなつき度が一定の高さに達すると幸せポケモンのトゲキッスに進化する。進化するとノーマルタイプに飛行が追加される。幸運を呼ぶと言われているからラッキーと同じくらいめずらしい。

「ええ。そうよ。すごいでしょう？９年前までトゲピーなんて発見されなかったのにね」

私はタマゴを受け取った。タマゴはポケモンが生まれていないから手持ちとして認識されない。そのかわり生まれたらポケモンとして認識されるから手持ちのどれか１匹をボックスに送らなければならない。

「ありがとうございます。でも私、今のメンバーを変えるつもりはないんです。このタマゴは他の人に渡したほうが……」
「そう？君がポケモン図鑑のページを埋めるのに役に立つと思ったんだけど……。じゃあ他の図鑑所有者に渡して。あるいは図鑑所有予定の子！」

シロナさんは私が差し伸べたタマゴをぐいっと押し返した。そこまで言われたらＮＯと言えない。

「わかりました。ありがとうございます」

「それにしても真っ黒な私に真っ白な君……まるでゼクロムとレシラムね」
「ゼクロムと……レシラム？」

聞き覚えのない名前。ポケモンなのかしら？初めて聞くポケモンの名前にキョトンとしながらもデジャヴを感じないことにホッとした。

「イッシュ地方の神話に登場するポケモンよ。シンオウ地方のポケモン図鑑のうちには入らないから安心して」
「は、はあ……」
「じゃあ頑張ってね。あとナナカマド博士によろしくね、かわいいトレーナーさん！」

シロナさんは少しかがむと私のおでこにキスをした……ってええーっ！？キスうう？

「きゃあっ！」
「ははっ。またね♪」

シロナさんは鼻歌を歌いながら去っていった。美人なのに変わった人。しかも化粧してないのにあの美人さ。ママや私とは違う魅力の持ち主だわ……。

「ポッ……ポチャチャチャ・チャマチャチャチャ……。チャ、チャマ・チャママママ・ポッチャマ？」

ナポレオンはそわそわしていた。ぶつぶつひとり言を言っている。キスされたけど女の人だから嫉妬の対象になるかどうか微妙なのかもしれない。

「帰ろっか。ナポレオン」
「チャ、チャア……」
ナポレオンは腕を組みながら歩いた。まだ考えて込んでいる。シロナさんと会って元気が出た私はスキップしながらホテルを目指した。

第３６話　迷い　＜後編＞（後書き）

挿絵の背景の階段のおかしさはスルーしてください。お願いします（汗）。

（番外編）　博士とお坊ちゃま　＜前編＞（前書き）

この小説を、エースさんに捧(ささ)ぐ・・・。

（番外編）　博士とお坊ちゃま　＜前編＞

―同じポッチャマでも色々なポッチャマがいるものだな。

ポケットモンスター　プラチナ　～長髪の美少女～　特別編　『博士とお坊ちゃま』

ウォッホン！む、失礼。ワタシの名前はナナカマド博士！シンオウ地方でポケモンの研究――主に進化について研究をしている。そのために大学時代後輩だったユキナリ……じゃなかった。オーキド博士の助けを借りてポケモン図鑑の試作機を今まで2個作った。なんたって最初にポケモン図鑑を開発したのはオーキド博士だからな。最初の試作機をシロナに託した数年後、2番目の試作機をアキラに託した。

最初の試作機は研究所で集めたポケモンのデータに現地の情報を加え、分析し完成させるものだった。研究所にないデータのポケモンは現地の人から話を聞いて実際に捕獲（ほかく）するまでそのポケモンのデータは不明だった。最初の図鑑は情報を集めることを重視した。

2番目の試作機には最初のトレーナーが集めてくれたポケモン図鑑のデータと当時の最新データと技術を詰め込んだ。そのとき重視したのは図鑑の正確性と適合性だ。ポケモンを捕獲することで図鑑に入れたそのポケモンのデータと正しくリンクするか確かめた。図鑑はほとんどの場合正しく機能したがたまに違うポケモンのデータをリンクしたり、データを提供しないというミスが起きた。シンオウ地方以外のポケモンのデータが表示されないのはしかたないことだったがアキラに文句を言われてしまった。ワタシはユキ……オーキド博士ほど機械の扱いに長けていない。研究者としては十分機械の知識と使い方について心得ているがポケモン図鑑ほどのものとなるとやや専門外だ。

「ぶえっくしゅん！」
　クシャミとともに白い息が口から漏れる。防寒服を着てもまだ冷える。ワタシは今クルーザーに乗っている。クルーズ客船ではなく部屋は２つしかない小型のクルーザーだ。冬にデッキで考え事をするものではないな。それもこんな氷が浮かぶ海の上で。部屋の中で暖かいココアでもいただくか。
「博士～！こちらへどうぞ～！」
「うむ」
　テンジョウイン君がワタシを呼んでいる。目的地に着くまで中にいよう。
＞ｉ１０４８１―６９９＜

＊＊＊

　アキラにポケモン図鑑を渡してから約３年、正確に言うと２年と１０カ月経った。シンオウ地方のポケモンの生態系を改めて調べるためワタシはカントーからシンオウへ戻ることにした。そのために最新のポケモン図鑑を３人分用意した。この３代目の図鑑も最終調整に入る。あとは図鑑を託す新人トレーナー３人のためにポケモンを用意すれば準備は整う。カントーではフシギダネ・ヒトカゲ・ゼニガメを研究しているようにシンオウではナエトル・ヒコザル・ポッチャマを研究している。アキラのときはヒコザルが選ばれた。残されたナエトルは新人ジムリーダーへ、ポッチャマは研究のスポンサーとなっている会社の社長の息子へ譲った。だからこうしてワタシは遠路はるばる新たなポッチャマを捕獲しようと極寒の地にある保護区へ向かっているのだ。ハードマウンテンの秘境に住むヒコザルと人知れず森に住むナエトルはもう捕獲した。あとはポッチャマだけだ。
　ヒコザルはワタシの助手のテンジョウイン君の息子、コウキがもらうことになっている。ナエトルやこれから捕まえるポッチャマは

どんなトレーナーのポケモンになるのだろうか。実を言うとコウキ以外のポケモン図鑑所有者は決まっていない。コウキの妹のアキコはトレーナーになるには幼すぎるし悪いがトレーナーとしての見所がない。彼女の乙女チックな趣味を考えるとポケモンコンテストには向いてそうだが……。ポケモン図鑑所有者はマサゴタウンに住んでいる子どもやコトブキシティのトレーナーズスクールの子どもを見て決めよう。アキラはなぜかやたらフタバタウンにいる子どもを見ることを推奨していたが……念のためそこの子どもも候補に入れよう。カントーでもジョウトでも田舎町からとんでもない実力を持ったトレーナーを輩出したことがあったからな。油断できん。ちょうどシンジ湖もフタバタウンの近くにあるしコウキを連れて今度見に行こう。

「博士。着きました」

「そうか」

ワタシはコップを置いて席を立った。ヒコザルとナエトルのときと同じように群れのボスと話をつけなければならん。ポッチャマの場合最終進化系のエンペルトだな。ワタシは持ち物を確認した。アキラから借りたポケモンとオダマキ博士が開発したポケリンガル、そして空のモンスターボールをいくつか。ボイスレコーダーや傷薬、なんでも治しも念のため持っていうことにした。ポッチャマもその進化形態のポッタイシも最終進化形態のエンペルトもプライドの高いポケモンだ。3年前のポッチャマは図太い性格でついていく代わりにあれこれと条件を出した。今回も一筋縄ではいかないだろう。窓からポッチャマの群れが見えた。親のエンペルトやポッタイシはそばにいないようだ。ワタシはポッチャマたちを刺激しないようにそっと船を降りた。

（番外編）　博士とお坊ちゃま　＜中編１＞

青い毛玉に白いハートを貼ったような顔。クチバシの上には水色のギザギザ王冠模様がある。体はお腹の２つの白い模様以外は水色の毛で覆われている。首の周りと背中にはマントのような青い毛皮が生えていた。指のない手……いや、ペンギンふだから翼か？黄色いクチバシと同じ色の小判のような足でポッチャマたちは広い氷のフィールドを歩き回っていた。少なくとも３０匹はいる。そこにいるポッチャマたちに全てのエンペルト・ポッタイシ・ポッチャマを統べる群れのボスがどこにいるか訊ねてみよう。

ワタシはポケリンガルのスイッチをオンにした。ホウエン地方のオダマキ博士が開発したポケモン翻訳機Ｐｏｋｅｌｉｎｇｕａｌ、通称：ポケリンガル。ポケモンの言葉を訳してくれる機械だがまだ開発途中だ。１つのポケリンガルで全てのポケモンの言葉を訳すなど今の段階では不可能だ。今ワタシが持っているのはポッチャマとその進化系の言葉を訳すものだ。それ以外のポケモンの言葉は訳せない。オダマキ博士はせめて同じタイプのポケモンの言葉を翻訳できるポケリンガルを開発しようとしているが完成するのはかなり先の話になりそうだ。オダマキ博士も大変だな。だがジョウト地方のウツギ博士ほどではないがワタシやオーキド博士より若いから大丈夫だろう。若いというのはいいものだな。ワタシの歳ではもう無茶はできん。元気にフィールドワークをするオダマキ博士がうらやましい。

「博士」

テンジョウイン君に催促された。

「うむ。わかっている」

ワタシは数歩進み、１番近くにいたポッチャマに話しかけた。

「やあ。すまないが訊きたいことがあるんだが……」

「ポチャーー！？」

そのポッチャマの叫び声でその場にいた全てのポッチャマの目がワタシたちに向いた。

『キャーー！？』

ポケリンガルは機械的な声でポッチャマの叫び声を訳した。合成音で男とも女ともとれるがどちらかというと女性の声に近い。このポケリンガルで訳すとオスメス関係なくこの声で訳される。

「チャー！ポーポーチャー！」

「ポチャマーー！」

「ポチャ～～！」

ポッチャマたちは次々と逃げていった。ポケリンガルは拾える声だけ拾い訳した。

『ワー！？人間ダー！』

『逃ゲローー！』

『怖イ～～！』

ううむ。困ったな。これではボスの場所を訊けん。自力で探すしかないのか。

「アッハハハハハ。博士～。怖がらせちゃ駄目じゃないですか～」

テンジョウイン君は苦笑していた。そこまで笑うことなのか？ポッチャマたちはあいかわらず逃げている。

「それだから僕の娘に『ナナカマドはかせってリングマにてるわね』って言われるんですよ」

「なにっ！？」

アキコめ……。普段は「ごきげんよう」とすました顔をしながら裏ではそんなことを言っていたのか！アキラといいアキコといい最近の子は生意気だな。……やれやれ。まともなのはコウキだけか……。

「む？」

逃げまどうポッチャマたちの間で奇妙なものが見えた。ポッチャマたちは一直線に氷の大地を下り、海を泳いでいったが1匹だけ威勢のいいやつがいた。そのポッチャマは周りのポッチャマたちが避(よ)

けている岩の上に立ち、余裕の表情でワタシを見据えていた。おそらくポッチャマたちのリーダー格だろう。腕を組み、大股を開いて偉そうに座っている様子から見るとガキ大将といったところか。別のポッチャマがそのリーダー格のポッチャマに駆け寄った。ワタシはポケリンガルを2匹に向けた。

＞ｉ１０４８２―６９９＜

「ポポチャアポチャポポチャ。ポポチャポチャポチャチャチャポッチャマ」

「ポ、ポーチャー！」

『逃ゲタイヤツハ逃ゲナ。逃ゲルノハ小者ノスルコトダ』

『リ、リーダー！』

……なんだこの会話は？これがあの愛くるしいポッチャマの会話なのか？

「ポッチャマチャポチャポチャポチャ。チャマポーチャーチャマ？ポッチャママチャマチャマポチャポチャポチャ」

「ポ、ポチャマ～！」

『ボクチャマニ構ワズ行ケ。副リーダーダロ？アイツラヲ導クノガオマエノ役目ダ』

『オ、オヤビ～ン』

そう言って副リーダー（？）のポッチャマは走去った。このエリアにはワタシとテンジョウイン君とリーダー格のポッチャマしかいない。ワタシは顔をしかめた。どこのギャングの会話だ？あまりの妙な会話にワタシはしばらくの間寒さを忘れていた。

「最近のポッチャマは統率が取れていますね～」

「あれじゃただの不良だ。言葉遣いが悪い」

「ポケリンガルの翻訳機能が不完全なんじゃないんですか？」

その可能性は否定できないが……本当にポケリンガルのせいだろうか？このポッチャマが異常なだけではないか？

「……」

ポッチャマは無言で立つとジャンプした。

「チャア、ポチャポチャチャチャチャ。ポッチャママママポチャアポチャチャ・チャチャチャチャチャマポチャポチャマアポチャ」
　ポケリンガルは即座に光り訳した。
『ヤア、老イボレジジイ。アマリニモ怖イ顔ヲシテイタカラ新種ノポケモンカト思ッタヨ』
「なんだとっ！？」
　オーキド博士より先輩であるワタシがこんな愛くるしいポケモンに馬鹿にされるとは……！斜め後ろではテンジョウイン君が笑っている。頭に血が上ったがワタシは怒りを抑えた。いかんいかん。相手はまだ進化もしていないレベル５以下のポケモンだ。子ども（それもポケモン）の言うことにいちいち腹を立ててはいけない。
「ウォッホン！失礼。君に訊きたいことがあるんだが群れのボスはどこにいるか教えてくれないか？大事な話があるんだ」
「ポッチャマチョ・ポポチャマチャ・ポチャチャチャチャ。チャマポチョチャマ・チャマチャチャマポチャチャチョ・ポッチャマチャチョポッチャチャマチョチャマポチャ」
『ボクチャマノパパ上ガ群ノボスダ。後ロノ海ノ東側ニアル島ニ他ノエンペルトトポッタイシト一緒ニイル』
　群れのボスの子だったのか。だからこんなに偉そうなのだな。普通のポッチャマより強そうだ。『ドラゴン●ール』みたいにスカウターがあれば便利なのだが……。ポケモン図鑑だと捕まえたあとでしかポケモンの強さを測れない。今度スカウターの開発企画でも立てるか。
「そうか。ありがとう。恩に着る」
「クルーザーで移動しますか？」
「うむ」
　群れのボスの居場所はわかった。あとは交渉しにいくだけだ。外の世界を旅したいポッチャマを募集していることを伝えなければならん。ゴウカザルのときは真面目なヒコザルがついてきた。ドダイトスのときは全てのナエトルが首を横に振る中１匹だけ首どころが

体も動かさずひたすらボケーッとしていた呑気なやつを連れてきた（もちろん母親のドダイトスから許可をもらった。母親もまた呑気なポケモンだった）。ここではどんなポッチャマが仲間になるのだろうか。ワタシを見て驚いて逃げていたから募集はテンジョウイン君に任せたほうがいいかもしれない。ワタシとテンジョウイン君は歩き出した。

「チャッ。ポチャチャチャマ？チャチャア」

『ハッ。逃ゲルノカ？ジジイ』

ピキッ。

ワタシは額の血管が浮くのを感じた。こんなお子ちゃまにワタシが2度も虚仮にされるとは……。

「は、博士！子どもの言うことです。気にしなくても……」

「チャア……。チャマチャチャアチャマ。チャマチャッマポッチャマ、チャマポチャチャアチャマポチャ。チャマポッチャマチャマチャ・ポチャポチャチャマチャマチャッ・ポッチャマチャチャ～」

『ハァ……。仕方ナイヨネ。ナンタッテボクチャマ、次期ボスニナル予定ダモン。マダオ子チャマナノニ強サガニジミ出チャッテゴッメンナサ～イ！』

ブチッ。

普段は穏便なワタシでもこれは許せん。このポッチャマにはお仕置きが必要だ！

「小僧！お坊ちゃまだかお子ちゃまだか群れのボスの息子だか知らんが少しは年寄りを労わらんかあああああああっ！！」

（番外編）　博士とお坊ちゃま　＜中編２＞

ワタシは勢いよくハイパーボールを投げた。黄色に黒く「Ｈ」とプリントされたボールから飛び出したのはスラリとした鳥ポケモンだ。こげ茶をかなり薄めた色の羽毛に肌色の胸。額にある黒い「Ｖ」マークと手（いや、羽か？）に持っている長葱（ながねぎ）が侍（サムライ）を彷彿（ほうふつ）させる。カルガモポケモンのカモネギだ。鴨（カモ）が葱（ねぎ）を背負ってくるということわざをそのままポケモンにしたような出で立ちだ。

「カモッ！」

『参ル！』

＞ｉ１０４８３―６９９＜

ポケリンガルはあいかわらず翻訳（ほんやく）を続ける。カモネギは羽を広げて出てきたがすぐ葱を刀のように構えた。その姿は正に侍だ。アキラが捕獲用に育てたポケモンだけあってかなり頼れそうだ。カモネギのレベルは４６。対してこの生意気なポッチャマは……？ワタシはコウキにあげる予定の図鑑を持っているテンジョウイン君に目を向けた。

「博士！レベル５のポッチャマ相手にレベル４６のカモネギを出すなんて大人げないですよ！」

「……そうか。レベル５か」

ワタシはテンジョウイン君の警告を無視しいかにこのポッチャマのプライドをへし折るか考えた。短時間に捕獲されればさすがにこのポッチャマも落ち込むだろう。

「一撃で決めるぞ！カモネギ、『剣の舞（つるぎのまい）』だ！」

「カーーーーッ！」

『ハーーーーッ！』

カモネギは戦う前の準備運動として長葱を激しく振り回した。口から出る荒（あら）い息は気合いが高まった証拠（しょうこ）だ。『剣の舞』によってカモネギの攻撃力はぐーんと上がった。次に出す技はもう決まってい

る。必ず体力が1残るように手加減して攻撃する技『峰打ち』だ。
とはいえ『峰打ち』は攻撃力自体が低いので念のため『剣の舞』で攻撃力を高めておいた。この生意気なポッチャマを確実に素早く捕まえるために……！
「続けて『峰打ち』だ！」
＞ｉ１０４８４―６９９＜
「カモオオオッ！」
『切リ捨テゴ免！』
カモネギはナポレオンが立っている場所へ突進し葱を振る……が、葱は空を切っただけだった。
「チャポポチャチャアポチャチャ」
『真上ガガラ空キダ』
なにっ……！？カモネギとワタシが顔を上げたときには手遅れだった。カモネギはポッチャマの『はたく』攻撃を頭からもろに受けた。カモネギは死角からの攻撃に目から星が出てきそうだった。
「カモッ……！」
『不覚……！』
「カモネギ！しっかりしろ！大丈夫か？」
カモネギの返事の代わりにポッチャマの『はたく』音が響いた。カモネギがフラついたのをいいことにポッチャマは『往復ビンタ』のように『はたく』のを続けた。くっ……！
「博士！落ち着いてください！カモネギはまだ１０しかダメージを受けていません。この程度のダメージはかすり傷です。」
テンジョウイン君の言葉で平静を取り戻した。そうだ。彼の言う通りだ。カモネギとポッチャマの間には４１レベルも差があるのだ。こちらが有利なことには変わらない。それにしてもポッチャマめ。ちょこまかと動きおって……。
「『高速移動』！」
「カモッ！」
『御意！』

カモネギは肩に入った力を抜いて高速で氷のフィールドを走った。カモネギのスピードは明らかに増した。ポッチャマの攻撃も当たらなくなる。

「チャッ」

『チッ』

ナポレオンは高速で走るカモネギを睨(にら)んだ。そんなことしてもカモネギは止まりはしない。

「今度こそ当てるぞ！『峰打ち』！」

「カーモーッ！」

『止(とど)メダ！』

カモネギは『高速移動』から『峰打ち』に切り替えるべく跳び長葱を上から振り下ろした。

「ポッチャア♪」

『オ手柔ラカニ♪』

ポッチャマは『峰打ち』が当たる寸前に相手の攻撃力を下げる『鳴き声』を出したがそんなことをしても『峰打ち』の威力は大して変わらない。今度はポッチャマがカモネギの攻撃を頭に喰らいポッチャマは仰向(あおむ)けに倒れた。

「良い夢でも見てろ。カモネギ、『草笛』」

「カモッ」

『ハハッ』

ワタシの指示通りカモネギは長葱を横笛のように持ち、心地よい自然の音色を聴かせた。『草笛』を聞かされたポッチャマは優しい眠りの世界へと誘われる。最初は両手をつき、抗(あらが)おうとしたがやがて規則正しいいびきが聞こえてきた。眠り状態になったようだ。草タイプの状態変化技、『草笛』。本来草ポケモン以外は覚えられない技だがアキラのスパルタ教育によってカモネギが身に付けた技だ。

「お前なぞこれで十分だ」

そう言いながらワタシはボールの中で1番性能が低い赤白のモンスターボールをポッチャマの頭上に落とした。ポッチャマは抵抗ら

しい抵抗も出来ずあっさり捕まった。

（番外編）　博士とお坊ちゃま　＜中編2＞（後書き）

すみません・・・。私、今日（8月7日）2時から2時半の間に新宿駅でポケウォーカーを落としてしまったのですが誰か心当たりはありませんか？オオタチが入っていたのですが・・・。警察と駅に忘れ物届けを出したものの不安です。

（番外編）　博士とお坊ちゃま　＜後編＞（前書き）

今回も挿絵はなしです。スキャナが回復するまで挿絵はもうしばらくお待ちください。

（番外編）　博士とお坊ちゃま　＜後編＞

成り行きとはいえ群れのボスの許可もなしにポッチャマを捕獲してしまった。ワタシがポッチャマの挑発を無視していたとしても背後から攻撃されどっちみち戦闘に入っていただろう。ワタシはテンジョウイン君にクルーザーに残りポッチャマを監視するように指示した。こうしてワタシはカモネギと共にこのエリアの全てのポッチャマ・ポッタイシ、エンペルトを束ねる群れのボスに会いにいったのだった……。

「待たせたな」

「遅いですよ～～！博士～～！」

テンジョウイン君が待ってましたと泣きそうな声でクルーザーに戻ったワタシを迎えた。

「時間的にはまだ２０分も経っていないが……」

「ええっ！？そうなんですか？……それにしても聞いてくださいよ～。このポッチャマは暴れん坊将軍です！弱っていたので傷薬で体力を回復させたんですけど起きたとたんクルーザーの中を暴れまわったんですよ！散々走り回ったあげく海に飛び込んで逃げましたがボールが手元にあったのでなんとか戻すことができました。だけどボールに入れたあともボールごとピョンピョン飛び跳ねて所狭しと転がったんですよ！疲れたところをなんとか取り押さえましたがとんでもないポッチャマですよ！今すぐ群れに返しましょう！」

いつも落ち着いているテンジョウイン君らしくない話し方だった。散弾銃が弾丸をぶちまけるように捲し立てるとはよっぽどあのポッチャマに手こずったようだ。

「そのことについてだが残念な知らせがある」

「え？」

「ポッチャマをボールから出してくれたまえ。双方に言わなければならないことがある」

テンジョウイン君は顔を曇らせたが渋々ポッチャマをボールから出した。

「ポッチャ？」

『ナンダ？』

ポッチャマは強がっていたが……なるほど。テンジョウイン君が言った通りだ。疲れているのでゼェゼェ息をしている。

「チャッチャマ・ポッチャマチョ・ポチャチャマチャマ……。ポッチャマチャ・ポチャチャチョ・チャチャチャチャマ……。チャーチャマ・ポポチャマチョ・チポチャポチャチャマチョ……。チャチャマチャ・ポッチャマチョ・ポチャポチャチャマチャ……。チャマッチャマ・チャッチャチャマ・ポッチャマチョ・ポチャポチャポチャ……」

ポッチャマは腕を組んだり肩をすくめたりと身振り手振りで話した。ずいぶん長いセリフだな。これはポケリンガルの翻訳に時間が掛かるぞ。

『サッサトボクチャマヲ解放シロ……。ボクチャマハ群レノボスノ息子……。将来パパ上ノヨウナ群レノボスにナルンダゾ……。ママ上モボクチャマノコトヲ心配シテイルニ違イナイ……。ワカッタラサッサトボクチャマを群レに返セ』

言いたいことはそれだけか。ワタシは両手に持ったポケリンガルとボイスレコーダーを握りしめた。

「相変わらず偉そうですね～。……で、博士。僕たちに伝えなければならないこととは？」

「うむ。テンジョウイン君とポッチャマに伝えたいことがある。ボスのエンペルトと話した結果そのポッチャマはワタシの研究所で預かることになった」

「ええーーーっ！？」

「ボヂャーーー！？」

『なんだってーーー！？』

1人と1匹がこういうリアクションを取ることは予想していた。

ワタシはこれ以上双方を刺激しないように慎重に言葉を選んだ。
「ボスのエンペルトはワタシがポッチャマを捕まえたことを知ると喜んで『ぜひ息子を博士の研究に役立ててください』と言った。親の許可をもらったのだ。目的は果たした。さっそく運転手に帰ることを伝えよう」
「ま、待ってください博士！こんなポッチャマでいいんですか！？」
「ポチャーー！チャマチャーー！」
『嫌ダーー！帰ラセローー！』
手足をバタバタさせながら講義するポッチャマをしばし見てから答えた。
「うむ。このポッチャマの父親も母親もぜひ、と言っていたのだ。連れていかないほうが失礼だろう」
「ポチャチャー！ポポチャマチョ・チャチャマチャチョ・チャーチャマチョポッチャマ！」
『嘘ダー！パパ上モママ上モソンナコト言ワナイ！』
「証拠ならあるぞ」
ワタシは左手を上げた。ボイスレコーダーを持っている手だ。
「これにワタシとお前の両親との会話を録音した。自分の耳で確かめろ」
ワタシはボイスレコーダーをＯＮにする代わりにポケリンガルをＯＦＦにした。録音したときポケリンガルの翻訳も入っていたからだ。

＊＊＊

「……久しぶりだな、エンペルト。今日ここへ来た目的は３年前と同じだ。研究のためポッチャマを１匹募集しに来たのだ。前回のポッチャマは旅に出ず金持ちの息子に引き取られて幸せに暮らしている。今回の募集は確実に冒険に出るのだが……すまない。手違いであなたの息子さんを捕獲してしまった。今はワタシの助手とク

ルーザーにいるんだが迎えに来てくれないか？」
「クェッ？」
『ナニッ？』
「クア、クェークェ。クエー？」
『マア、アナタ。聞イタ？』
「クエークエクエ・クェックエクエクェ・クエークエクエクエ？…クエックエクエクエ！クエー・クェクエクエクエ・クエックエクエクエ！クエークェエクア・クエークェクエクエークエークエ・クァックエクエクエ……。クアークゥククエ・クアークアークゥ。クェクエ・クエクエクーエ・クェックエクエクオ・クエークエクアー！」
『今回募集スルポッチャマハ旅ニ出ルノカ？……ソレハ名誉ナコトダ！ゼヒ私ノ息子ヲ連レテイッテ下サイ！私ノ息子は私ニ似テ才能ハアリスギテ生意気ナ子ニ育ッテシマイマシテ……。カワイイ子ニハ旅ヲサセロト言ウ。私ハ喜ンデ息子ノポッチャマヲ推薦（すいせん）シマス！』
「クアクエー。クエックエ・クエークエクエ・クエエエクエクア・クエエークエックアクオ・クエエークククックエ・クアークエクエカ。クアクオクークークエ・クアクークエッ！」
『アラ素敵。キット私達ノ息子ナラポケモンチャンピオンノポケモンニナッテモ可笑シクナイワ。アノ子ノ成長ガ楽シミネ！』
「クザ、クークークェ・クェークエクエクエ・クークエクオ・クエエエークエクオオークエクゥ」
『ト、イウ訳デ私達ノ息子ヲヨロシクオ願イシマス』

＊＊＊

「……と、いう訳だ」
ボイスレコーダーを再生したあとすぐポケリンガルをＯＮにした。
「ポオォォッ！ポチャポチャー！」
『ウオオオッ！！認メネー！』

ポッチャマは悔しそうに足踏みし片腕を上下に振りまわした。
「ポポチャマチェ！ポッチャポチャポチャ！チャチャチャマチャマチャ……！」
「パパ上メ！ヨクモ裏切ッタナ！ママ上マデ……！」
「……悪いようにはしない。ポケモン実験などしないから安心してくれたまえ」
言うが早いがワタシはポッチャマをボールに戻した。これ以上暴れまわっても困るからな。
「ポチャーッ！」
『待テーッ！』
「待たん」
ボールに入ったのを確認するとすぐボールを巾着袋に入れた。巾着袋に入れてもボールは自由になろうともがいた。あとで柱にでも括りつけるか……。
「は、博士……」
動く巾着袋に圧倒されながらテンジョウイン君が話かけてきた。
「いいんだ。これで。性格に癖があるが強いポッチャマが手に入った」
「ですが……この意地っ張りなポッチャマを手懐けられるトレーナーなんているのでしょうか？コウキが引き取ったらコウキが召使いにされそうです。アキラぐらいのトレーナーじゃないと無理なのでは……？」
……あ。しまった。そこまで考えてなかった。かといって今さら群れに帰すわけにはいかないが……。
「ウォッホン！ワタシの目に狂いはない。素質のあるトレーナーに託せば大丈夫だ」
そう誤魔化したもののワタシは不安だった。もしかしてワタシは図鑑所有者となる子どもにとんでもないものを押し付けようとしているのでは……？
「でも博士……」

「なんとかなるだろう。そのときはそのときだ」
ワタシはテンジョウイン君に背を向けた。どうしても駄目なときは別のポッチャマを取り寄せよう。苦い顔をやめられない。砂糖がたっぷり入ったココアでも頂(いただ)こう。ワタシは未だに暴れる巾着袋を抑えながら室内に入った。

（番外編）　博士とお坊ちゃま　＜後編＞（後書き）

以上、エースさんがアンケートでリクエストした『博士とポッチャマの出会い』でしたー☆みなさんお楽しみいただけましたか？リクエストしてくれたエースさん、ありがとうございます！

ヒカリの日記　4月11日（月）～15日（金）

『4月　11日　月曜日

今日は朝一番でハクタイジムに挑みに行った。対戦相手は当然ナタネさん。だけど大戦前になぜかヒョウタさんのことを訊かれた。私がヒョウタさんにお姫様だっこされたことと「化石のように綺麗だね」と言われたことを知る彼女の態度が激変。戦闘に不参加のナポレオンとセニョールがロズレイドに攻撃され戦闘が始まった。私のポケモンは相性では勝っていたのにナタネさんの戦略的な戦いに苦戦。手持ちポケモンの相性で力押ししてなんとか勝った。

ジム戦のあとはナタネさんと仲直り。ナタネさんの態度からヒョウタさんのことが好きだとわかった私は『花の乙女同盟』を立ち上げた！恋する乙女を応援する会、『花の乙女同盟』……。恋する乙女と恋する乙女を応援したい女の子は誰でも歓迎。主な活動は情報交換と作戦会議。買い物やお茶会も含まれます（笑）。私とナタネさんとモミさんはこの美しい同盟の初期メンバーとなった。記念すべき最初の活動は3人で買い物をしてとランチを食べることでした♪

モミさんとナタネさんと別れたあとある建物で爆発が起きた。爆発の直前にジュンの口ぐせ「なんだってんだよー！」が聞こえたから私は爆発したビルに直行。でもなんと！そこはインサツ……ギンガ団のビルだったの！変装してギンガ団に潜入していたハンサムさんに助言をもらって3階に上がったらカットロトムに乗ったジュンと遭遇。したっぱの団員と追いかけっこした末にでこぼこコンビ、イン&サツによって倉庫に閉じ込められた。人数の関係で必然的にダブルバトルを開始。戦闘はジュンと私が有利だったけどサツのゴースは私に『ナイトヘッド』で攻撃してきた。私は海で溺れる幻影を見て意識を失った……。』

『4月　14日　木曜日

不思議な夢を見た。私はコウキくんと思わしき人物とどこかの草原にいた。なぜかポケモンを使えない場所でエサとボールを両手にストライクを捕獲しようと奮闘していた。ストライクを捕まえたあと男の子に告白され動揺した。目が覚めたらコウキくんが私にキスをしようとしていた。私の唇はナポレオンによって守られコウキくんはバツを受けた。

コウキくんの話によると私は3日間眠っていたらしい。ギンガハクタイビルで私が気絶している間ジュンは『あおくてくろい人』に助けられ私を連れて４階へ進んだ。４階でジュピターというギンガ団幹部と遭遇。自転車屋を助けるため戦闘開始。苦戦しながらもジュピターを追い詰めた。ハンサムさんと『あおくてくろい人』が助太刀に来たことによってジュピアーは戦意消失。逃げたジュピターを追い大人2人はいなくなった。『あおくてくろい人』は名も名乗らずに去ってしまった。私も彼と会って話をしたかったな。

頭の中を整理するためコウキくんからもらったワンピースを着て外へ出た。散歩していたらおみやげ屋さんにハクタイ新名物『森の洋館』をもらった。フラフラ歩いていたらポケモン像の近くできれいな女の人と会った。金髪の女の人で黒い服を着ていた。ギンガハクタイビルでの活躍を褒められた。私は途中で気絶してなにもできなかったのに。新聞で名前も写真も伏せられたけど私とジュンがギンガハクタイビルに乗り込んだことは人々の間で広まっていた。女の人は私にトゲピーのタマゴをくれた。タマゴはコウキくんにあげた。コウキくんに女の人のことを訊ねたけど知らなかった。博士に連絡したけど留守だった。』

『４月　１５日　金曜日

ホテルでコウキくんと朝食を取っていたらナタネさんとモミさんが押しかけてきた。ナタネさんはコウキくんを見て「二股(ふたまた)？」と訊いてきた。もちろん否定したわよ！そもそもジュンを恋愛対象にした覚えなんてないわ。昔ジュンにベッタリしていたけどそれはジュ

ンをお兄ちゃんとしても友達としても信用してたからよ！そのことは言わなかったけどね。だってからかわれちゃうじゃない。モミさんはコウキくんを「悪くないわね」と評価したけど「なにかが足りない」とも言った。……コウキくんに足りないものってなんだろうね。大人っぽさかな？ジュンは知能指数とデリカシーが足りないのはわかるけど。

　ヨスガシティを目指そうとしたけどサイクリングロードの受付で止められた。自転車に乗らなきゃ通れないんだって。「ポニータじゃダメですか？」って聞いたけど無理だった。自転車屋さんから救出しれくれたお礼に自転車をもらったから自転車に乗る練習をした。……はずかしいけど私、今日まで自転車に乗ったことなかったのよね。１２歳で補助輪つきだと恥ずかしいからコウキくんに教えてもらった。だけどコウキくんのさりげないボディタッチや優しい言葉にドキドキして集中できなかった。しまいには離れて見ていたナタネさんに「エロい」と注意される始末。けっきょくナタネさんがコウキくんと交代して教えてくれた。運動音痴だったからなかなか自転車を乗りこなせずしょっちゅう倒れちゃった。体のあちこちをすりむいたけど夜になる直前になんとか乗れるようになった。』

第37話　憧れ　＜前編＞

予定が狂ってハクタイシティに6日も滞在することになってしまった。私はいつもの服―旅立ちの日と同じ黒のタンクトップにピンクのミニスカート―に着替えた。今回スカーフはひかえた。自転車に乗るなら動きやすい服じゃないといけないもの。ヒョウタさんと戦ったときのようにビラビラ長いカーディガンを羽織るわけにはいかない。あれかっこいいけど実用性に欠けるのよね。カーディガンなのに袖（そで）がないしほぼ飾り……。

ナタネさんとモミさんとサイクリングロードの入り口まで送りに来てくれた。

「ヒカリーー！もう行っちゃうの～？さみしー！」

ナタネさんが抱きついてきた。ジム戦のときは私を恋敵としか見てなかったのに今じゃ親友の1人だ。

「駄目よ。ヒカリさんにはチャンピオンになるという夢があるんだから。それに今日はあたしもソノオタウンに帰るわよ」

「うわ～ん！モミはもう少しいたっていいじゃな～い」

「そろそろアロマセラピーの修行を再開したいから駄目」

「ケチ～。いっそのこと2人ともここで暮らしなよ～」

ナタネさんはあーだこーだと口にしてモミさんと私を引きとめようとした。

「ポチャ～」

ナポレオンは目を細めていた。ナタネさんのことはどうでもいいのか私に早く出発するように催促した。私はサイクリングロードを見て深呼吸をした。あせらない。あせらない。坂道でも大丈夫。きっと気持ちいいはずよ。コウキくんは私より一足先にクロガネシティに向かった。サイクリングロードを抜けた先にある砂の坂を下ればクロガネシティにつくらしい。2週間前ジュンが挑戦した砂の坂の先はサイクリングロードへ続いていたのね。私のアドバイスでナ

タネさんはコウキくんにヒョウタさん充ての小包を持たせたけど上手くいくかなぁ……って他人の恋愛を心配してる場合じゃなかった。モミさんが私に目配せをした。彼女がナタネさんを食い止めている間に行こうとしたら目立つ髪型をした男の子を見かけた。

「ジュン！」

「ヒカリ！」

ジュンは一瞬私を見て笑い自転車を引いて駆け寄ったけど3歩目でハッとしたように足を止めた。私から視線を外して斜め下を見た。

ズキッ。

私は胸に痛みを覚えた。ジュンは今まであんな風に視線をそらしたことはない。昔私のおやつを食べてとぼけたときに目をそらしたけどあのときとわけが違う。悲しくて怒ったような顔。……もしかして、私がハクタイビルで役に立てなかったことを怒っているの？

「ジュ……ン？」

「……」

ジュンはその場から動かなかった。ナタネさんとモミさんの会話が止まる。ジュンの雰囲気に気がついたのかもしれない。ジュンはずっと下を向いていたけどしばらくすると迷いを捨てるように首を振った。慎重に一歩一歩進みジュンは私の前まで来た。ジュンらしくない。いつも走ってくるくせに。

「……わりぃ」

「えっ？」

不意打ちだった。私じゃなくてジュンが謝るだなんて……。

「おまえを守れなくてごめんな。あのときオレがしっかりしていればヒカリは気絶せずにすんだのに……。ハンサムとイケメンが来たから助かったけどもし助けが来なかったら……」

「ジュン……」

沈んだ目。太陽はまだ大地を照らしているのにジュンの心の太陽は沈んでいた。ギンガハクタイビルでの出来事、気にしてたんだ…

…。私が気絶したのはジュンのせいじゃない。謝るのは私のほうなのに。

「ジュンのせいじゃないわ。不注意だった私がわるいのよ。気絶したせいで足手まといになっちゃたね。私のほうこそごめ……」

「ちがう！オレがわるいんだ！ヒカリを2度も危険な目に合わせた……。オレがあのビルにさえ入らなければヒカリがポケモンに攻撃されることなかったのに！オレが……オレが……！」

ジュンは泣きそうな顔で怒鳴った。ジュンは怒っている。誰に？私に？……ううん。それはおそらく、自分自身に。ジュンは歯を食いしばめ泣かないように目をつぶっていた。ああ、こういうとき私はなんて言えばいいんだろう。ママは男の子には男としてのプライドがあるから下手になぐさめないほうがいいと言っていた。じゃあどうすればいいの？苦しんでいる幼馴染を前に私はどうすればいいかわからなくて……。

目の前にいる金髪の男の子は腕で目をゴシゴシした。気を取り直してバッグを乱暴にあさると私にくしゃくしゃになった紙を渡した。

「……これ」

私は黙って紙を受け取った。Ｂ４の紙には荒い線でアリの巣みたいなものが描かれていた。

「『迷いの洞窟』の地図。お前トレーナーズスクールで方向オンチだから洞窟の地図もほしいって言ったじゃん。描いといた」

心が温かくなった。ジュン……私が言ったこと、覚えていてくれたんだ。私は忘れていたのに。

「あ……ありがとう！」

私は手描きの地図を丁寧に折りたたんだ。『迷いの洞窟』に行く気はなかったけどジュンの気持ちがうれしかった。

「オレ、広すぎて洞窟で野宿しちまった。気をつけろよ」

「うん」

ジュンは自転車に乗ってハクタイシティに行ってしまった。今日はそこで泊るのかな？

「ああっ!?ちょっと!あの子どこ行くの?宿泊先決まってないでしょ!」

ナタネさんとモミさんはジュンを追いかけた。モミさんも手を合わせて「ごめんね?」と伝えると行ってしまった。残されたのは私一人。お別れ会だか歓迎会だかわからなくなってしまった。ナポレオンはため息をついた。私は肩をすくめてサイクリングロードへ進もうとすると受付から大きな声が聞こえた。

「本当に戻らなかったのですか?!」

「昨日行ったきり戻ってきていませんね」

「そんなっ……!?どこへ行ったの?!ミル……ミルーーー!!」

２０代後半の女の人が誰かの名前を叫んだ。子どもの名前を呼んだのかもしれない。受け付けの男性は深刻な顔をしていた。イヤな予感がする。私はいてもたってもいられなくなった。

「どうしたんですか!?」

桃色の髪をした女の人が振り返った。どこかで見かけた気がする。それも比較的最近。いつどこでこの人と会ったんだっけ?

「娘がいなくなったの!ミルっていうんだけど……あなた見かけなかった?こんな子よ」

女の人は私に写真を見せた。白い枠つきの写真に写っていたのは桃色の髪の毛を2つの輪っかにした女の子だった。キツネのような念力ポケモン、ケーシィを抱いて笑っている。写真の女の子を見て思い出した。この女の子と女の人は私が一昨日(おととい)寝起きに散歩しているときに見かけた親子だ!あの日は多大な情報にボーっとしていたけどあの親子の様子は微笑ましかったから覚えていた。

＞ｉ１０６８４―６９９＜

「一昨日は見かけましたが今日はまだ……」

「ああ!昨日まではいたのに!ギンガ団がいなくなったからって油断するべきじゃなかったわ!あのとき『迷いの洞窟』に行かさなければよかった……ミルーー!」

「奥さん!落ち着いて!」

受け付けの男性はカウンターから出て奥さんを抑えた。奥さんはパニックのあまり泣き出してしまった。心が痛む。私のママはこんなふうに泣いたことはない。だって、私にはジュンがいたから。ジュンがいたからママは安心して私の帰りを待てた。たぶんジュンママも私がいたからジュンの帰りが遅くなっても心配しなかったんだ。

「私が探しに行きます！」

「「えっ」」

受け付けの人と奥さんは同時に私を見た。私はバッグからバッジケースを取りだし2人に見せた。

「それは……ジムバッジ！」

「ナタネさんのフォレストバッジまで……！」

ヒョウタさんとナタネさんのジムバッジは効果があった。奥さんの周囲の空気が変わる。

「ギンガハクタイビルで戦った女の子は私のことです！私に任せてください！必ず娘さんを見つけだしてみせます！」

「ポチャー！」

ナポレオンは両手をぐっとしていた。ナポレオンが私と同じポーズをしていることに気付くのに時間がかかった。

「あなた……名前は？」

「フタバタウンのヒカリ・ハナゾノ」

奥さんは私の目をまっすぐ見た。やがて彼女は崩れるように私の手を握った。

「お願い……ミルを見つけて！」

「はい！」

私はスカートがひるがえるのも気にせずに自転車に飛び乗った。パンチラなんか気にしてる場合じゃない。ナポレオンが私の背中に捕まったのを感じると私はペダルを漕いだ。

第37話　憧れ　＜前編＞（後書き）

先週は更新が少なくてすみません。『サマーウォーズ』を見たり『マリアさまが見てる』を読んだり『借りぐらしのアリエッティ』の展示会に行っていたら更新が遅れました。新宿駅で落としたポケウォーカーはあいかわらず行方不明のままです。

第３７話　憧れ　＜後編＞（前書き）

最近の趣味は喫茶店でミルクティーを飲みながら読書することです。愛読書は『マリア様が見ている』シリーズです。漫画は『ヴァンパイア騎士（ナイト）』が気になっていますＶ

第37話　憧れ　＜後編＞

青銅（せいどう）の鏡（かがみ）のようなポケモンがとうぜんおそいかかってきた。ナポレオンに指示を出すと水圧で鏡は壁に押しつけられた。六角形の形につけられた玉がついた丸い鏡の目は×になった。

「チャッ！」

ナポレオンは青銅ポケモン、ドーミラーをやっつけて「どんなもんだい！」と自慢した。

「ぎゃう～」

キララ★はコクコクうなづきながら「すごいです」と褒めた。それを聞いて上機嫌になったナポレオンに変化が訪れた。体全身が光った。

「ダメ！」
「ぎゃう？」

私はあわててポケモン図鑑のＢボタンを押した。図鑑から緑色の光線が発射された。光線が当たりおどろいたナポレオンはショックで進化が止まった。そのかわりナポレオンの機嫌は１８０度変わってしまった。

「ポチャー！ポチャポチャー！」

地団駄（じたんだ）が洞窟に響く。コウキくんのヒコザルもジュンのハヤシガメも進化したからうらやましがっているんだ。表面上では「べ、別

に私は進化しなくても強いんだからね！」と装っていたけど。進化させたいのはやまやまだけどまだ進化させるわけにはいかない。だってポッチャマは『ハイドロポンプ』をレベル４３で覚えるのよ？進化系のポッタイシだとレベル５１、さらに次の進化系のエンペルトだと５９までかかる。そろそろヒョウタさんからもらった『変わらずの石』をつけるときかもしれない。

「ごめんね、ナポレオン。必ずあなたをチャンピオンのポケモンにしてみせるから」

今まで『変わらずの石』を持たせなかったのはバトルで役に立つ木の実を持たせていたからだ。レベルが上がるたびに進化のときはおとずれる。レベルが上がるたびに進化キャンセルボタンを押していたけどこれじゃあラチがあかない。レベルが上がる直前に変わらずの石をつけるのもめんどうくさい。私はヒモで『変わらずの石』を網のように結んだ首輪をナポレオンの首につけた。ナポレオンは顔をそらしていたけれど。

ここは迷いの洞窟。２０６番道路、別名『サイクリングロード』を自転車で下り、道路の下にある草むらをかきわけた場所にある洞窟だ。位置的にはサイクリングロードの入り口のほうが近いけどそこから降りる通路はない。サイクリングロードを途中で抜けることもできない。しかたなく私はサイクリングロードを下ったけどほとんどハクタイシティに戻るような行き方をすることになった。サイクリングロードで何人かにバトルを申し込まれたけど無視した。時間がおしい。ミルちゃんは何歳なんだろう？アキコちゃんよりかは上？私より年下の女の子が洞窟で今も迷子になっている。のんきにポケモンバトルをやっている場合じゃない。

私は今キララ★のしっぽの明かりを頼りに迷いの洞窟の中を歩い

ている。ミルちゃんのお母さんからもらった技マシン７０『フラッシュ』をキララ★に覚えさせてよかった。だって洞窟の中は真っ暗だもの。裸眼（らがん）で進むには限界がある。ジュンからもらった地図に色鉛筆で線を引きながら進んでいるけどミルちゃんはまだ見つからない。途中で会ったトレーナーたちに彼女の特徴を述べて見かけたか訊くけど返ってくる答えはだいたい同じ。

「バトルして勝ったら教えてあげる！」

こうしてバトルで相手をフルボッコにしてミルちゃんの居場所を吐かせようとしたけど無駄足だった。だって、ポケモンコレクターもピクニックガールもキャンプボーイもミニスカートの女の子も誰も彼女を見かけなかったんだもの。中には親切に見かけてないって教えてくれた人もいたけど「せっかくだからバトルしない？」と誘われけっきょくバトルするハメになる。あ～んもう！

誰もミルちゃんを見かけてないのはみんな今日洞窟に入ったからかもしれない。洞窟に住んでいるという変わり者の山男さんでさえ見かけてないと言われたから困る。

とりあえず勘を頼りに地図上の右上を進んでいる。右の道にいる気がすると言ったときナポレオンは疑いの目を向けていた。だって、私、方向音痴だもん。目を細めるナポレオンに私を信じてと説得して右へ右へと進んでいるけどミルちゃんどころかミルちゃんの情報すらない。いつまでも続く道と『変わらずの石』のせいでナポレオンがイライラしてきた。でもミルちゃんは絶対東北にいる！……あれ？東だっけ？西だっけ？西だったら西北……？……と、とにかく地図の右上にいることは確かなの！だって感じるもの。気配を。よくわからないけどあっち方面にいる気がする。

地図を見たらもうすぐ行き止まりだった。ナポレオンは腕を組んでトントン音を叩きながら歩いている。もし私が間違っていたら土下座して謝ろう。そう思ったとき、キララ★の『フラッシュ』が人影を写した。

「だれっ？！」

おびえた女の子の声がした。フラッシュの先にいたのは2足で立つしっぽの大きい黄土色のキツネに寄り添う１０歳くらいの女の子。黄色い髪飾りに桜色の髪。白いパフスリーブの服と白いタイツ。そして髪と同じ色の短パンと靴とタイ。ケーシィの進化系、ユンゲラーは女の子をかばうように抱き空いた手でスプーンを私たちに向け警戒していた。間違いない。写真で見たミルちゃんとケーシィだ！

＞ｉ１０８１３―６９９＜

「あなたもギンガ団の仲間なの？技マシンはあげるからミルたちをほうっておいて！」

「ギンガ団……！？」

印刷機みたいな色の服を着た悪の組織、ギンガ団。なんの因果か私はギンガ団と４回も戦っている。旅を続ける限りギンガ団との戦いは避けられない気がする。

「いいえ。違うわ。むしろギンガ団は敵よ。もう４回も戦ったもの」

「４回も！？」

ミルちゃんとユンゲラーは目を丸くした。まだ名乗っていないのにギンガ団と戦ったと言っただけでミルちゃんの警戒心は消えた。ユンゲラーの胸から離れたミルちゃんは何歩か進んだ。

「もしかしてギンガハクタイビルで戦った女の子ってお姉ちゃんのこと？」
「そうよ」

ギンガ団がハクタイシティからいなくなってから４日が経つ。町ではいまだあの事件の話題が絶えない。

「お姉ちゃん。名前は？」
「フタバタウンのヒカリ・ハナゾノ。ポケモンチャンピオンを目指して修行中よ！」

私はイタズラっぽくウインクした。私らしくないけどミルちゃんを元気づけようとした結果こうなっちゃった。もしかしてシロナさんの茶目っけが少し写ったのかも。

「ヒカリ……さん？」
「うん」

ミルちゃんは両手を組んでうっとりした様子で聞いてきた。

「ヒカリお姉ちゃんって呼んでいい？」

目を輝かせて私を見るミルちゃん。彼女を見て真っ先にアキコちゃんのことが浮かび上がった。もしアキコちゃんとミルちゃんが会ったら、私をうばい合ってケンカしちゃうかも。

「ええ。いいわよ」
「わーい♪」

ミルちゃんの腕が腰に巻きついてきた。ミルちゃんは私と同じように一人っ子。お姉ちゃんに憧れて当然かも。……と、そんなことを考えていたらふと違和感に気がついた。一昨日見たミルちゃんも写真のミルちゃんも髪の毛を2つに分けて結んで輪っかのようにしていた。だけど今のミルちゃんの髪の毛は片方だけ輪っかでもう片方はポニーテールのように揺れていた。

「ミルちゃん。髪の毛片方ほどけてない？」

「あっ！」

両手を当ててミルちゃんは頭の異変に気がついた。

「せっかく結んだのに～。直さなきゃ」

左はリングで右はポニー。左右非対称だったけど奇妙なバランスがミルちゃんの服装と雰囲気に合っているように感じた。

「私はそのままでいいと思うけど」

「そう？」

ミルちゃんは首をかしげた。鏡がないから良いか悪いかわからないんだ。

「女の子らしいけどアクティブでかわいい」

「じゃあミルこのままにする！」

さっきまでおびえていたのがウソのようだった。元気になったミルちゃんは私の腕にからみついて出発をうながした。

「それじゃあ出発進行―♪」

カヤの外にいたポケモンたちも釣られてゾロゾロと歩き出す。ユンゲラーとキララ★の2匹の『フラッシュ』のおかげで行きのときより明るくなった。ナポレオンは堂々としんがりを務めた。

「ギンガ団って変なかっこうしてるよね。ミル初めて見たときディスコに行く服だと思った。ギンガ団をやっつけただなんてすごいね。ヒカリお姉ちゃんはポケモンといつもいっしょだからそんなに強くなったの？洞窟出たらミルの家に泊ってね！」

まだ歩き始めたばかりなのにこの調子。野生のポケモンが現れてもナポレオンとキララ★とユンゲラーが相手をしてくれるからたぶん会話は止まらない。途中にいたトレーナーたちは私がやっつけたしミルちゃんがこうひっきりなしにしゃべっていたら話しかけられない。私はポケッチを見れやれやれと思った。今日もヨスガシティには行けそうになかった。

第３７話　憧れ　＜後編＞（後書き）

次の話はテンガン山ですね。

ヒカリの日記　4月16日（土）（前書き）

日記は今までのあらすじと迷いの洞窟のあとに起こったことが書かれています。書き忘れたことはここに書けばいいのでけっこう便利です。

ヒカリの日記　4月16日（土）

＞ｉ１０８１５―６９９＜
『４月１６日　土曜日

今日はハクタイシティを出る日。ナタネさんとモミさんの見送りに来てくれた……けど予定が狂っちゃった。ジュンが現れたから私の見送りはジュンの出迎えになっちゃったし私は私で迷子の子を探すことになった。昨日の午後出かけたのに翌日の午後になっても帰ってこない娘を心配した奥さんを放っておけないもの。自転車を漕ぎだした直後奥さんに技マシンをパスされた。ナポレオンがキャッチしてくれたからいいものの外したらどうなっていたのかしら？

『迷いの洞窟』はキララ★とナポレオンが活躍してくれた。ナポレオンが進化しかけたから変わらずの石を持たせることにした。サイクリングロードでのジュンとの再会はきまずかったけどそのときもらった『迷いの洞窟』の地図のおかげで私は迷わずにすんだ。私にしてはめずらしく勘が当たって東北方向にいたミルちゃんを無事に保護できた。ギンガ団を戦ったことを告げたらミルちゃんになつかれてヒカリお姉ちゃんって呼ばれちゃった。

帰りにミルちゃんから聞いたけどミルちゃんギンガ団に襲われたんだって！なんでも隠されたもう１つの『迷いの洞窟』の入り口を見つけたらしくそこで技マシン２６を見つけたんだって。技マシンの中身は『地震』。地面タイプの攻撃で最大の威力を誇る技。ギンガ団はその技マシンを狙っていて問答無用で戦うことになったんだって。だけど多勢に無勢。ミルちゃんのポケモンはユンゲラーだけだったから４、５人のギンガ団員に敵わなかった。テレポートを使いながら戦ったけど負けるとわかったミルちゃんは最後のテレポー

トで脱出を図った。だけどケーシィからユンゲラーに進化したてだったせいかみんなの知っている『迷いの洞窟』のほうへ移動しちゃったの！

いつも行っている場所だけど急に『迷いの洞窟』のどこかに飛ばされたから現在地がわからず出入り口も見つからない（だから誰もミルちゃんを見かけなかったのね）。ポケモンを回復させる道具や木の実はいっぱい持っていたから倒れる心配はなかったけど心細くなっていたんだって。そんなときに私が現れたから安心したの。洞窟でもピタ～ッとくっついちゃって自転車に乗るまで離れなかった。話がそれるけどアイテムボールって便利ね。モンスターボールみたいに道具を圧縮して収納できるもの。これがなかったら折りたたみ自転車とはいえ持ち運びが大変になるところだったわ。一部の道具しか入れられないところが残念だけど。

どうやらミルちゃんは『鳴き声』とか『小さくなる』とかポケモンを助けてくれる技がお気に入りみたい。ユンゲラーは『スプーン曲げ』や『フラッシュ』を使う一方『電撃波』や『念力』で敵を攻めていたから特殊攻撃も好きみたい。私がアキラに憧れるように、アキコちゃんが私を姉と慕うように、ミルちゃんも私に憧れてヒカリお姉ちゃんと呼ばれた。でもミルちゃんアキコちゃんと会ったらケンカしそうだから心配。２人を会わせないように気をつけなくちゃ……。

サイクリングロードの知らせを聞いて駆けつけたミルちゃんのお母さんは泣きながらミルちゃんに抱きついた。何度も何度もお礼を言われた末ミルちゃんの願い通り私はミルちゃんの家に泊ることになった。メールでナタネさんとモミさんに知らせたら明日こそ見送りするって。ジュンはちょっと休んだあとヨスガシティに行ったんだって。せっかちだけど……止められないな。私もジュンを心

配させないくらい強くならなくっちゃ！』

ヒカリの日記　4月16日（土）（後書き）

ジュンとコウキの三角関係とはまた別の三角関係が生まれる予感・・・。

第３８話　自然の神秘　＜前編＞

「いってらっしゃ～い！」
「また来てねーー！」
　モミさんとナタネさんの声を背に私は自転車を走らせた。風が気持ちいい。ハンドルの前にある籠に乗ったナポレオンも心地よく感じていた。ロードバイクに籠がついてるなんておかしいのは私もよくわかっている。でもナポレオンが座る場所がないと戦えないと文句を言うから自転車屋さんに頼んでつけてもらった。ついでにサドルの後ろに台座もつけてもらった。バッグとキャリーケースを置く場所が必要だったから。バンドで固定してあるからそう簡単に落ちないはず。
　私はサイクリングロードを走りながらトレーナーたちに昨日バトルの誘いを無視したことを謝った。今日はちゃんと１人と１人と戦った。サイクリングロードを抜けると私はすぐ自転車をしまった。ナタネさんによるとここから先はテンガン山を通らなければいけない。自転車だと動きにくいと判断した。
「ボチャ～？」
　自転車がアイテムボールの中に入るのを見てナポレオンはガッカリした。さては楽(らく)しようとしたわね……。
「まあまあ。今まで歩いてきたんだし。それにゆっくり歩けばいいものが見つかるかもよ」
　以前２０７番道路で嗅(か)いだ匂いを思い出して辺りをキョロキョロした。そこにはラズベリーをオレンジ色にしてサイズを５倍にしたような木の実があった。ビンゴ！
「ほら。さっそく木の実発見♪」
　私たちは木の実を回収しはじめた。食べごろなのは２個しかなかったけどアイテムボールに入れた。そのうち増やしてポケモンたちにあげよう。そんなことを考えていたら砂利がぶつかり、自転車の

ブレーキの音が聞こえた。誰か２０７番道路から来たのかしら？
「おお……蝶よ、花よ。舞い踊りたまえ。祝福しておくれ。フローラの化身、アフロディーテの継承者、アテナの愛弟子……我が勝利の女神と出会えたことを！」
「あ。コウキくんまた会ったね」
芝居かかった足取りで歩く彼を見てクスッと笑った。思っていたより早い再会だった。昨日別れたばっかりなのにもう会えた。その様子じゃヒョウタさんに勝ったのかな？
「はい！なんとかヒョウタさんに勝ちました！アルテミスはやられてしまいましたが……。アポロンを進化させておいてよかったです。炎タイプに格闘タイプが追加されたので苦手な岩タイプに勝てました」
「おめでとう！」
一昨日の話によるとコウキくんはまだポケモンを２匹しか持っていない。モウカザルとピッピ。そしてシロナさんからもらったタマゴ。モウカザル１匹で戦っただなんて苦労したはずだわ。
「ありがとうございます！ヒカリさんと出会えたおかげです。もういっそのことぼくと一緒に旅しましょう！愛という名の逃避行です！」
それって駆け落ちってこと？いきなりすぎるなぁ……。
「え～っと……誰から逃げるの？」
アキコちゃんとコウキくんのお父さんはフレンドリーだったしナナカマド博士とか？
「アキラ兄さんです！あとはジュンでしょうか」
いとこなのに……。ジュンはついでっぽいわね。相手にしてないみたい。
「アキラは女の子よ？」
「あっ……！？しまった！また間違えました」
「またって……」
しょっちゅう間違えているのね。

「もう癖なんですよね。昔アキラ姉さんって呼んだらアキラ兄さんと呼べと怒られたんですよ?」

えっ!?そうなの?どういうこと??

「なのに今じゃアキラ兄さんって呼んだら殴られるし訳がわかりません。一体なにがあったんでしょうね」

「さあ……」

いとこのコウキくんがわからないんじゃあ他人の私はもっとわからない。

「3年前旅を始めたときもぼくに手紙を1通もよこさないですし……」

コウキくんはガックリ肩を落とした。……ごめん。私はアキラから何通か受け取ったわ。血が繋がってないのにいいのかしら?

「おっと。グチをこぼしてしまってすみません。ナナカマド博士からいいものをもらったのでおすそわけしますね」

コウキくんはリュックのポケットからパソコンのマウスみたいなものを出した。

「バトルサーチャーです。すでに戦ったトレーナーに再戦する意思があるかどうか確認できます。一度戦った相手に再戦は申し込みにくいでしょう?相手の戦意に反応するので再戦したいトレーナーが誰だかわかりますよ」

「ありがとう」

ようするにバトル専用の空気読み機ね。機械でさえ空気(雰囲気)を読み取れるのにジュンときたら……。

「あとポケッチの新機能です。なつきチェッカーとダウンジングマシン。SDカードに入っているのでポケッチに差し込んでください」

「こんなにもらっていいの?!」

コウキくんには尽くされてばかりだ。少しは恩返ししたいのに返せそうにない。

「いえ。これらは博士からのプレゼントです。ボクからのプレゼントは次に会ったときに渡しますね」

「え？」
　博士の依頼で旅に出たので役に立つ道具をもらうのは当たり前なのかもしれない。でもコウキくんのプレゼントって？このまえワンピースをもらったばっかりなのに。
「ジョウト地方の店でポケギアを予約したんですよ。それもシンオウではまだ発売されていない最新モデル！これでいつでも連絡が取れますね♪それではハクタイシティでナタネさんに挑戦しにいきますね。ヨスガシティで会いましょう！」
　コウキくんは風のように自転車に乗って行ってしまった。ジュンほどではなかったけどけっこう速かったと思う。でもここから行くとサイクリングロードは上がりだからいつまでその勢いが続くかわからない。
「私たちも早く行こっか」
「ポッチャ！」
　ナポレオンは時間をムダにしたと言わんばかりにさっさと歩きだした。左にあるのはテンガン山への道。右は木々の壁。前にあるのはクロガネシティへ通じる坂。
「いったんクロガネシティで休まない？」
　ピタッ。
　サイクリングロードで体力を消耗しすぎた。まだ１１時だしちょっとくらい休んだって問題ないはず。
「……」
　ナポレオンはＵターンして砂の坂を下りた。まるで滑り台のように。

第３８話　自然の神秘　＜前編＞（後書き）

なかなか進みませんね。次回はテンガン山を越えさせます。

第３８話　自然の神秘　＜後編＞（前書き）

これが今週最後の更新です。次回更新は９月１日以降です。
番外編で博士とポッチャマの出会いをリクエストしたエースさん、
番外編の感想お願いしまーす！

第３８話　自然の神秘　＜後編＞

ポケモンセンターでポケモンたちの体力を回復し、お昼ごはんを食べたあとテンガン山を目指した。流れる砂の坂を上り左へ曲がるとテンガン山の一部が見えた。シンオウ地方を西と東に分ける絶壁の山、テンガン山。今まで遠巻きに見ていたけど近くまで来た今はふもとしか見えなかった。山だけど樹はほとんど生えてなくて岩ばかりの山はまるで炭鉱だった。ナタネさんの情報によれば出口は色んな場所にある。クロガネシティ側の２０７番道路とヨスガシティ側の２０８番道路がそう。『波乗り』を使えば上の階へ上がれるけどバッジを持っていないから私を乗せて水上移動はできない。もっとも、ポッチャマが私を乗せて泳ぐには小さすぎるけど。岩で覆われただけの山なのになぜか見ているとエネルギーを感じた。

「行くわよ。ナポレオン」

私はつばを飲んだ。ナポレオンも山の力を感じたのか少し緊張していた。ただの山なのに、どうして圧倒されるんだろう……？

山の中は洞窟になっていた。あちこちに水脈があって私の道を阻む。まるで山が他の場所へ行かせたくないみたい。洞窟の中では外にいたとき以上にエネルギーを感じた。まるで山全体からなにかのエネルギーが吹き出ているような……。空気まで違う。新鮮な空気だけどどこか重苦しい。不思議な場所……。

水を苦手とするイシツブテ・ノズパス相手にはナポレオン、格闘タイプとエスパータイプに強いノワールにはアサナン・ワンリキー・リーシャンの相手させた。それに暗いところでも目が利くヤミカラスは役に立つ。目に見えない道具だって見つけてくれる。コウキくんからもらったポケッチのダウンジングマシンの機能はいらなかったかも。そんなこんなでポケモンと戦ったり捕獲していたら前方で歩いている人を見かけた。

「ポチャチャ！」
テンガン山に入ったのは私だけかと思ったら先客がいた。ナポレオンは彼を指して私に早く追いかけるようにうながした。灰色の服、水色の逆立った髪の毛。どこかで見たことがあると思ったらハクタイシティで見かけたおじさんだった。私がシンジ湖で気絶している間ジュンにハンカチを貸してくれた人……。
「待ってください！」
「……？」
おじさんは振り向いた。三白眼と無表情の顔が一瞬ドクロに見えてゾクッとした。怖い……そう思った直後私は自分を責めた。恩人相手にそんなこと思うなんて失礼だ。今度こそ見失わないように私は走った。おじさんは親切に待っていてくれた。基礎体力があまりないせいかおじさんの前に来たとたんひざに手をつけた。息切れだ。私はハァハァ言っているのに遅れてついてきたナポレオンとノワールは呼吸が乱れてない。自分がなさけないと思いつつおじさんに話しかけた。
「あの……シンジ湖で助けてくれてありがとうございます！」
私は頭を下げた。……ハンカチはたしかバッグのポケットに入れたんだっけ？
「……」
おじさんはなにも言わない。うう、気まずいな。こんなときジュンかコウキくんがいればいいのに。
「ハンカチありがとうございます。お返ししますね」
私はバッグに手をつけた。どのポケットに入っているかわからなくて手間がかかってしまった。
「……気にしないでくれたまえ。ハンカチは君にあげよう」
「そんなっ！？でも……！」
私になにができるんだろう。新しいハンカチを買ってわたす？森の洋館とセットでハンカチを返せば立派なお礼になるかな？
「……君は世界の始まりを知っているか？」

「え……？」

＞ｉ１０８１６―６９９＜

全く関係のない話が始まった。世間話かしら？

「このテンガン山はシンオウ地方の始まりの場所。そういう説もあるそうだ」

「そうなんですか？」

通信教育で小学校と中学校レベルの教養を備えているとはいえたまに昔覚えた知識を引っ張り出すのに苦労する。同い年の子より知識があるものだから頭の引き出しが多すぎる。それに地理は苦手だった。テンガン山がシンオウ地方の始まりという説なんてあったっけ？

「……出来たばかりの世界では争い事などなかったはず。だがどうだ？人々の心という物は不完全であるため皆争い、世界は駄目になっている……愚かな話だ……」

おじさんは私にかまわず話を続けた。なにかを悟ったような顔をしていた。

「……話がまた変わるが君は自分の居場所を持っているか？」

「え……」

私の……居場所……。……持っていると言えば嘘になる。昔から違和感を感じていた。フタバタウンでの生活に満足している住民たち。外の世界に出たがった私。小学校へは先生の手伝いのボランティアとして行ったけど私の居場所じゃなかった。私はテストを受ける側どころかテストの答案を丸付けする側だった。同い年の子とは違う。それに私はフタバタウンを故郷だと思うことができなかった。本当は私は別の場所で別の両親の元で生まれて……なんらかの事情でフタバタウンに一時的にいる……そんな気が昔からしていた。自分でもバカげた考えだと思った。そんなことあるわけないのに。だって私はママにそっくりだもん。数週間前まで生まれてから一度もフタバタウンを出たことなかったのに。ポケモンがいないと隣町のマサゴタウンにも行けやしない。

「……持っていないのか」
低い声で我に返った。答えを言わなくてもおじさんはわかったみたい。
「は、はい！私……昔から故郷で違和感を覚えていて……旅に出たらどこかに自分の居場所が見つかる。そんな気がして旅に出たんです……」
言葉が勝手にスラスラ出てくる。……ああ、そうか。私が本当の旅に出たかった理由。彼氏がほしいのも本当だけど自分の居場所がほしかったんだ……。
「……そうか。わたしと同じだな。……見たところ君にはトレーナーとしての才能がある。素晴らしい才能は見捨てられない。もし君にその気があるならわたしの会社まで来てくれたまえ。君の力量に合った仕事を与えよう」
そう言っておじさんは私に名刺を渡した。
『宇宙開発事業団
社長　アカギ・チョウジョウ』
「アカギ……さん？」
「そうだ。トバリに本社がある。一度来てくれたまえ」
へえ～。すごいな。社長だったんだ。
「……出口まで送ろう」
こうして私はアカギさんにエスコートされながら出口を目指した。アカギさんは野生のポケモンを手持ちのズバットで追い払ってくれた。テンガン山を出たあとアカギさんと別れたけどノワールの様子がおかしい。ノワールはなぜかアカギさんのボールを見ていた。
「カーカーカー！」
なにか言いたげだけどなにを言っているかわからない。ノワール自身もなにを言いたいのかわからないみたいだった。

第３８話　自然の神秘　＜後編＞（後書き）

みなさんのおかげでポケモン小説の週間ユニークアクセス数で1位になりました。ありがとうございます！最近コメントがもらえなくて寂しいですが頑張りますね＾＾

第３９話　招かざる客　＜前編＞（前書き）

ヨスガシティに向かうヒカリたちだが・・・。

第３９話　招かざる客　＜前編＞

もし自分と他人の友情を測れる機械があったらどうしよう。もしあったらおもしろいかもしれないけどできまずい状況になるかもしれない。親友だと思っていた子にとって自分が１番じゃないと知ってショックになるかもしれない。逆にあまり話さない子が自分を慕っているのがわかったりしてビックリするかもしれない。

「ポチャ～～～！！」

「スッボミ～♪」

ナポレオンは『すいとる』を使おうとしているセニョールから必死に逃げている。そんな２匹を見守りながら私はポケッチを操作した。なつきチェッカーの画面になると手持ちのポケモンのアイコンが表示された。ナポレオン（ポッチャマ）、キララ★（ルクシオ）、セニョール（スボミー）、ラミア（イワーク）、ランス（ヤミカラス）、ノワール（ポニータ）……せまい画面の中でみんなフワフワ動きまわっている。クルル♪は一時的にパソコンでお留守番をしていたから表示されない。セニョールのなつき度が知りたくてスボイミーのアイコンをタッチペンでつついてみた。５回つついてようやくハートが表示された。まだ少ししかなついていない。あのツンデレナポレオンでさえ２回に１回はハートを出してくれるのに。

「ハァ……」

なつきチェッカーを使えば自分のポケモンがどれくらいなついているかおおまかにわかる。私の気がかりはセニョールがいつまでたっても進化してくれないことだった。つぼみポケモン、スボミーはトレーナーに十分なつくと茨（いばら）ポケモン、ロゼリアに進化する。さらにロゼリアに光の石を使えばロズレイドに進化できる。だけどセニョールはレベル２０になっても進化してくれない。レベルアップするたびに期待したけどなにも起こらなかった。そのたびに私はガッカリした。本当はレベル１６で進化してほしかったのに……。

私はスボミーとロゼリアの資料とにらめっこした。スボミーはレ

ベル１６になったら『悩みの種』を覚えるけどそれ以降はロゼリアに進化しないかぎり全く技を覚えない。『マジカルリーフ』を覚えさせたかったんだけどレベル１９になっても進化せずとうとうレベル２０になってしまった。セニョールの性格と覚える技のせいだ。セニョールは真面目すぎて回復アイテムを使おうとしても拒否した。おまけに他のポケモンの体力を奪う『すいとる』・『メガドレイン』・『宿り木の種』を使えるからアイテムを使う必要があまりなかった。そのかわりナポレオンとラミアはたびたびセニョールの餌食となり、傷薬のお世話になった。

「セニョール、やめなさい。行きましょう、ナポレオン」

うじうじ悩んでいても仕方がない。ヨスガシティに行けばポケモンがなつく方法が見つかるかもしれない。そう期待して２０８番道路のゲートを抜けたときだった。

ヒュアッ。

私の真横でなにかが飛んだ。後ろから風でも飛んできたのかしら？

「ナポレオン！セニョール！大丈夫？」

足元を見たらそこにはポケモンが１匹しかいなかった。残されたポケモンと私は目を合わせた。お互いなにがおこったかわからない。

「ムーーーーック！」

上から鳴き声が聞こえた。空を飛んでいるのはモノクロの鳥ポケモン。私のクルル♪と同じムクバードだ。おそらく野生のポケモン。そしてその足につかまれているのは……。

「ミ～～♪」

「セニョーールルーー！？」

「ボチャーーー！？」

なんで……なんでセニョールが捕まってるのーーー？！いやあああああああああっ！！セニョールがムクバード一家の夕ご飯にされるううう！！

＞ｉ１０８１７―６９９＜

「ノ、ノノノノワールう！」

「カーー！」
ノワールは背を向けて出てきた。飛びながら振り返って私を見る。テンガン山を抜けたあとボールに戻したばかりなのにまた出すハメになった。
「セニョールを取り戻して！」
「カー？」
ノワールは一瞬ムクバードを見て驚いた。クルル♪と見間違えたのかもしれない。けどすぐ首を振った。野生のムクバードを敵と認識するとみかん色の空へ向かった。ムクバードは右へ飛んでいく。まっすぐ進めばレンガで造られた道があるのに。レンガの道を3分歩いて左へ曲がればすぐそこはヨスガシティだったのに。ムクバードはヨスガシティとは正反対の方向へ飛んでいく。
「失礼します！」
「おわっ！？」
212番道路のゲートを通りぬけて走った。頭上では一足先に212番道路に出たノワールがムクバードと空中戦を繰り広げていた。
「クバーー！」
ムクバードは威嚇に近い『鳴き声』を出してノワールを翼で打った。特性『威嚇』で攻撃力を下げられたのにさらに下げられたら困る。こうなったら……！
「ノワール！『黒い霧』！」
「カアアアッ！」
漆黒の鳥はくちばしを開け自分の体と同じくらい黒い霧を出した。『黒い霧』には相手と自分のポケモンの能力変化を元に戻す効果がある。使い方によっては目くらましにもなる。
「続けて『騙し討ち』！」
ガッ。
「ムッ……！？」
背後を爪で攻撃されたムクバードの足がゆるむ。セニョールはムクバードから解放され落ちていった。

「ノワール！ムクバードにかまわないで！」
逃げようとするムクバードに『追い打ち』をかけようとしていたノワール。注意したときには手遅れでノワールはムクバードに痛恨の一撃を浴びせた。そのあいだにセニョールはどんどん落下して……。
ガサガサガサッ。
塀の向こうにある樹につっこんでしまった。倒されたムクバードも塀の向こうのどこかに落ちていった。
「キャーーー！！セニョーーーールーーー！！」
叫んでもセニョールは戻らない。塀の向こうには樹で囲まれた丘と大きなお屋敷が見えた。誰かの敷地に入り込んじゃった！
「ノワール！セニョールを探して！ナポレオンは私と一緒に走って！」
「ポポポポチャーー！」
私たちはあわてて走った。塀はどこまでも続いて入り口が見えない。あちこちに生えている樹と池に阻まれていたら邪魔者が現れた。
「君！君！夜の散歩は危ないぞ！」
「どいてください！」
私はスピードを落とさなかったから男の人はよけるしかなかった。青い制服を着てたからたぶんおまわりさんだ。
「こらーー！」
おまわりさんの怒った声が聞こえるけど無視した。塀からは賑やかな声が聞こえてくる。パーティでも行われているのかしら？そのまま走り続けていたら前方にまたおまわりさんが現れた。
「きょろきょろ？この辺りに怪しいやつはいないかな？」
なによあれ……。超ヒマそうなおまわりさん。また無視しようと思ったら存在を気づかれた。
「ややっ！怪しいやつ発見！君！ここは招待客以外立ち入り禁止だぞ！」
「緊急事態なんです！」

道をふさぐように鳥ポケモンと人型ポケモンが現れた。ふくろうポケモンのホーホーと怪力ポケモンのワンリキーだ。もう！急いでるのに！！私はキララ★入りのボールのスイッチを押した。

「キララ★！ホーホーに『スパーク』！ナポレオン！ワンリキーに『つつく』！」

「ぎゃうー！」

「ポッ！」

中距離から放たれた電撃がホーホーに命中した。電気タイプに弱いホーホーは当然瀕死。遅れたタイミングでナポレオンにつつかれたワンリキーは即死。本当に死んだわけじゃないけど。

「ごめんなさい！急いでいるんです！」

膝をついたおまわりさんを通り過ぎた。終わらないと思っていた塀が途切れているのが見えた。ようやく道らしい場所に出た。よく見てみると塀は曲がっていたけど入り口が見えた。ハァ……ハァ……やっと塀の中に入れる……！

「し……侵入者だーーー！」

さっき倒したおまわりさんが叫んだ。もしかして私、とんでもないことしちゃった？でも今さら引き下がるわけにはいかない。私たちは深呼吸を何回か繰り返すと入り口をくぐった。

第３９話　招かざる客　＜前編＞（後書き）

合宿に行っている間に３つもコメントがもらえてうれしかったです。
海桜さん！重樹さん！ｋさん！コメントありがとうございまーす！

第３９話　招かざる客　＜中編＞（前書き）

塀（へぃ）の向こうでヒカリが目にしたものとは・・・！？

第39話　招かざる客　＜中編＞

塀の向こうは、不思議の世界でした。なにも考えずに門をくぐったらギョッとした。庭にいたのは華やかな衣装に身を包んだ人たち。規則正しく並べられた丸いテーブル。長方形のテーブルにはたくさんの料理が置いてあった。歳を問わず男の人たちは全員スーツ着用で女の人たちはみ～んなドレス。どの衣装も例外なく高そうだった。

「ポチャ！？」

「ぎゃう～？」

ナポレオンもキララ★も足を止めた。色とりどりのドレスを見て私は今日グレイの服を着たことを後悔した。灰色のミニワンピにチャコールグレイのロングベスト。髪型はポニーテールを灰色のリボンで結んでいる。うっ……。あきらかに私、場違いだわ。まるでカラフルなインコの群れに紛れ込んだねずみ……いや、ハト？あ～ん、こんなことならもっとかわいい服を着るべきだった！……じゃなくって！

「あの～……お客さま。招待状はお持ちですか？」

「え？」

おまわりさんだか警備員だかわからないけれど引きとめられた。私はここへいてはならないような気がした。だけどセニョールを置いていくわけにはいかない。

「ごめんなさい！持ってません！でも屋敷に入れてくれませんか？私のスボミーが裏庭に落っこちちゃったんです！」

「はあ？」

わかってもらえないと思うけど一応説明した。谷間の発電所でギンガ団を騙したときがなつかしい。でも今回は本当に私のポケモンが事故で誰かの敷地にまぎれこんじゃった。

「スボミーを見つけたらすぐ帰りますから！失礼します！」

「君！待ちなさい！」

待ってなんかいられない。セニョールが地面に叩きつけられてダメージを追ったかもしれないのよ！瀕死だかHPギリギリ残っているかわからないけど心配よ！

「おい！そいつは怪しいぞ！侵入者だ！」

さっき私が塀の外でやっつけたおまわりさんの声がした。善は急げ！長居は無用！セニョールを見つけたらさっさとトンズラするわ！

「待てーーー！」

「待てません！ランス！」

炎の馬は異世界から飛び出してきたように着地した。私はランスの背中に飛び乗った。

「あの屋敷を目指してまっすぐ！」

「ブッヒヒーン！」

ランスは準備体操をするように前足を上げたかと思うと次の瞬間には走りだした。ギャラリーはケガをするまいとモーゼの滝のように道を開けた。途中でお嬢さまやジェントルマンにぶつかりそうになって何度も謝った。突然の飛び入りゲストにギャラリーは困惑していた。

「彼女は何者ですの？」

「もしやこれが噂の道場やぶりでは？」

「まさかテロか！？」

人が必死に走っているのにギャラリーは私をネタに話に花を咲かせていた。お嬢さまとお坊ちゃまは物珍しい目で私を見ている。もう！これだから金持ちは！……あ。コウキくんとアキコちゃんは別よ！

「強盗？」

「いえ、泥棒では？」

「誘拐犯じゃないのか？」

「まさか」

「まだ少女だぞ？」

マダムとジェントルマンたちはもう少し真面目だった。でも悪者

扱いされていい気がしない。追ってくる警備員から逃げながら私はひたすら屋敷を目指した。屋敷なら裏庭に出るドアがあるかもしれない。

「ワンリキー！『空手チョップ』！ホーホー！『念力』！」

後ろから殺気がした。いつのまにポケモンを……！

「よけて！」

「ぎゃう！」

キララ★はワンリキーのチョップをかわした。でもナポレオンはホーホーの攻撃をよきれなかった。紫色の光がナポレオンの正面に直撃する。

「ボチャッ！」

「ナポレオン！」

私はランスを制止してキララ★とナポレオンに指示を出した。

「……キララ★！2匹に『電磁波（でんじは）』！」

「ぎゃーうー！」

『電磁波』はまずワンリキーを仕留め、ホーホーまで飛び移った。2匹とも麻痺（まひ）した。これで簡単に動き回れない。

「ごめんなさい！」

最初に倒した警備員とは違う人のポケモンだった。同じポケモンだけど微妙にレベルが違う。

「問題あり！君のその強さ！強すぎて問題だよ！」

倒されたばかりの警備員は褒めているともけなしているとも取れることを言った。どうでもよかったけど。

「だ、誰か彼女を止めろーー！」

警備員たちがモタモタしているうちに私は屋敷の前へ着いた。いざ入ろうとしたけど入り口は塞がれた。左右から女の人たちが現れたからだ。服や髪の色はバラバラだったけど白いフリフリカチューシャとフリフリエプロンは共通していた。

「知性の青き泉、メイドブルー！」

「安らぎの緑の狩人、メイドグリーン！」

「弾ける電気の香り、メイドイエロー！」
「大いなる乙女の力、メイドピンク！」
「情熱の赤い炎、メイドレッド！」
「……は？」
５人のメイドたちはポーズを決めて名乗った。な、なにこのメイドたち？どこかで聞いたことのあるセリフを言ってるけど……。
「５人合わせて……」
「「「「「護衛戦隊（ごえいせんたい）！メイドレンジャー、参上！！」」」」」
キュッピーン☆
メイドレッドを中心に最後に決めポーズ。なぜかバックが爆発した錯覚を見た。自称メイドレンジャーたちはド派手に登場した。

第３９話　招かざる客　＜中編＞（後書き）

ポケウォーカー、結局見つかりませんでした。自分でも思っていた以上気にしていたようです。ポケウォーカーをもらう夢を何度か見たんです。それもなぜか新品の限定モデルを（笑）。ポケウォーカーはＨＧ／ＳＳに同封されているものですから限定版なんてないですけどね。……あ～あ。どこへ行ってしまったんでしょうね。

オオタチ……。

第３９話　招かざる客　＜後編＞（前書き）

あらすじ：変なメイドが５人現れました。

第39話　招かざる客　＜後編＞

「空間の力と時間の光。華麗に羽ばたく5つの心。Ｙｅｓ！メイドレンジャー5！」

最後の掛け声で私は思い出した。彼女たちの自己紹介のセリフ、『Ｙｅｓ！プリティア5』を真似したんだわ！……っていうか混ざってる！戦隊物と混ざってる！まぎらわしいじゃない。できればレンジャーかプリティアかどっちかにしてほしかった……ってそんなこと考えてる場合じゃなーい！

「どいてください！私は自分のポケモンを探しにきただけです！」

「嘘よ！」

「怪しいわ！」

青いメイドと緑色のメイドが口をそろえた。水色のポニーテールと黄緑色のお下げが揺れる。

「きっとサヤカお嬢さまを誘拐しにきたんだわ！」

金髪のツインテールのメイドがビシッと私を指差した。ちょっと！人を指差すのは失礼じゃない！

「もしくはアキヒコお坊ちゃまを！」

ピンクの髪をツーサイドアップにしたメイドが拳を握る。思いっきり誤解されているわ。

「4人とも、落ち着きなさい」

「「「「リーダー！？」」」」

緋色のおかっぱの女性が1歩前へ出た。彼女は静かに、だけど力強く私をにらんだ。他の4人と雰囲気が違う。最後に自己紹介したのもこの人だった。きっとメイドたちの中で1番強くて偉いんだ。

「誰だか知らないけど不法侵入の罪で拘束させてもらうわ」

メイドレンジャーはいっせいにボールを開放した。現れたのは青いネズミと歩く食虫直物、耳の長い黄色いネズミにピンク色の風船。そしてしっぽに火がついたトカゲ。マリル、マダツボミ、ピカチュ

ウ、プリン、ヒトカゲだ。それぞれメイドたちの色に合ったポケモンだった。

＞ｉ１１４４８―６９９＜

「ポ～チャポチャッ！」

「ぎゃう……ぎゃうーー！」

ナポレオンとキララ★とランスは身構えた。私も対抗するべくバッグに手をかけた。だけど敵はボールに触れる時間を与えてくれなかった。

「オール・レンジャーズ！アターーック！！」

メイドレッドのかけ声で戦闘が始まった。

「ヒトカゲ！『メイド・ルージュ・バーニング』！」

「ポチャーッ！」

ヒトカゲが牙に炎を灯して噛みつこうとしたけどナポレオンの『水鉄砲』で不発に終わった。なんとか引っ張り出した図鑑は今の技が『炎の牙』と教えてくれた。最初の一撃は防いだけど気が抜けない。

「ピカチュウ、『メイド・レモネード・フラッシュ』よ！」

「きゃあっ！？」

小さい体が豆電球のように光る。まぶしい。これは『フラッシュ』？次の攻撃を予想できない……！

「マダツボミ！『メイド・エメラルド・ソーサー』！」

「ぎゃうっ！」

「キララ★！？」

何枚ものはっぱがキララ★に刺さった。『はっぱカッター』だわ！

「『メイド・アクア・ストーム』よ！マリル！」

「ランス！『踏み付け』！」

水タイプの技が来ると直感しランスは跳んだ。私を乗せたまま。予想通りさっきまで私たちがいた所に『バブル光線』が放たれた。ランスは跳んだ勢いを利用してマリルを踏みつけた。メイドレンジャーにやっと一撃をお見舞いした。

強い……。相手のポケモンのレベルはまちまちだった。どのポケモンが何レベルかだなんていちいち覚えてないけど一番低いのが25。あとは27、29、31、33と団子のように並んでいる。くっ……3対5じゃ不利すぎる。ノワールはセニョールを探しに行ったまま帰ってこないしラミアを出す時間もない。以前204番道路で野生のスボミーたちと3対3で戦ったときよりも分が悪い。しかも変な名前の技で指示するから相手がどう来るか判断しづらい。

「プリン！『メイド・クリスタル・シュート』！」

「プリーンッ！」

プリンの指先から無数の星が発射された。『スピードスター』だ！必中の技だからよけられない！

「鳴く！にらむ！鳴く！」

どうせ攻撃を受けるなら少しでもダメージを減らしたい。相手のわけのわからない攻撃名に対抗して暗号のような指示を出した。ナポレオンとランスは相手の攻撃力を下げる『鳴き声』を出した。キララ★は『にらみつける』にした。キララ★だけ防御力を下げる『にらみつける』にした。キララ★は『鳴き声』を使えないから。3匹はサポート技を出した直後に星のビームに当たった。衝撃で砂埃が宙を舞う。『鳴き声』も『にらみつける』も『スピードスター』も相手側の複数のポケモンに影響が及ぶ技。私も相手もお互いにやっかいな技だと思ったに違いない。

「ゲホッゲホッ。あの娘はどこ？」

「わかりません！」

「みんな落ち着いて！不意打ちに合うかもしれないわ！」

さすがメイドたちのリーダー。冷静だわ。その通りよ。でももう手遅れ。私はランスに乗って屋敷の屋根に避難していた。ナポレオンとキララ★はボールの中にいる。ボール嫌いのナポレオンもスキをついて引っ込めたから抵抗するヒマもなかった。そのかわり地上に置いてきたのは……。

「ラミア！『地震』！！」

「「「「！？」」」」

「なにっ！？」
リーダーのあせった声が聞こえた。でももう遅い。砂埃から現れた岩のヘビはその巨体を揺すり、大地を震動させた。
「キャーーー！！」
「ギャーーー！！」
「うわ～～～！！」
「ひえ～～～！！」
招待客の叫び声が聞こえる。お皿は料理を乗せたままボトボト落ちた。積み重なれたお皿はジェンガのように崩れ落ち割れた。ナイフやフォークなどの銀食器が落ちる音がけたたましい。敷地内を駆け巡る闇のオーケストラを奏でさせたのは他ならぬ私自身だった。めちゃくちゃになっていく庭を見ながら私は我に返った。
「や、やりすぎちゃったかも……」
屋敷が壊れることはなかったけど庭は大惨事だった。テーブルの上は空っぽで地面には割れたお皿と食べられなくなった料理がゴミのように並んでいた。テーブルクロスはぐしょぐしょ。招待客たちは唖然としていた。恐怖より驚きが大きすぎて動けないようだった。
「うっ……」
これじゃあギンガ団がやっていることとあまり変わらない。ついカッとなって暴走してしまった。谷間の発電所のときよりひどい。こんなに大きな騒ぎを起こしてしまったらもう後に引けない。一刻も早くノワールとセニョールと合流して逃げなきゃ……！
「ヒッヒーン」
ランスが地上に降りた。私はなにも命じていないのに。メイドレンジャーのポケモンはヒトカゲとピカチュウが瀕死になっていたけ。残りのポケモンは弱っているけどまだＨＰが残っていた。ポカーンとした表情を浮かべる人たちの前で私は頭を下げた。
「ごめんなさい！やりすぎました！」
それだけ言うと屋敷の入り口へ向かった。セニョールを救出したらノワールに乗って逃げよう。まだ小さいから私を乗せたら短時間

しか飛べないけど塀くらいは越えられるはず。いざ扉を開けようとしたら向こうから勝手に開いた。玄関にいた人物は顔見知りだった。
「おお。ヒカリか」
「アキラ!?」
黒髪を飾る紅い瞳の美青年が現れた。肩にはノワール、腕にはセニョールを抱えて。私の初恋の人はいつもと違って黒いスーツをきっちり着こなしていた。ぶっちゃけ敷地にいるどの男の人よりかっこいい。……残念ながらアキラは女の子だけど。
「このスボミーとヤミカラスはお前のか?」
「え……あ、うん」
「おかしいと思ったよ。スボミーは木の上にひっかかっていたんだ。私を見たとたんうれしそうにミーミー鳴いて……。ヒョウタと戦うための特訓で一度会ったから私のことを覚えていたんだな」
「ミー♪」
今までの心配をよそにセニョールはピンピンしていた。ムクバードにさらわれたときもうれしそうに足をバタバタさせていた。もしかして空が飛べてうれしかったのかもしれない。セニョールはアキラの腕から離れると私の元へダッシュした。
「ミ~♪」
「お、お~。よしよし。いい子ね~」
とりあえず無事帰ってきたセニョールをなでた。ノワールはアキラの肩から私の肩に移った。静かだったバックはメイドレンジャーの1人によって変えられた。
「キャーー!!タキシードKAMENさまーー?」
「誰がタキシードKAMENだ!古っ!」
黄色い悲鳴を上げたのはメイドイエローだった。黄色なだけに。確かに『ブレザームーン』は古すぎる。今の時代は『プリティア』だもの。
「エミリ。忘れているかもしれないが私は女だ。ハンナ、ソフィ、エミリ、ヘレン、クレア。あいかわらずレンジャーを気取っている

のか？２０代でレンジャーごっこはさすがにはずかしくないか？」
「うっ……」
メイドたちが赤くなった。少しははずかしいって自覚したのかしら？メイドたちが黙る一方招待客たちは騒がしくなった。耳をすまさなくても「あの少女の言っていたことは本当だった」とか「あの少女はアキラくんと知り合いなのか」とささやいているのが聞こえる。私は攻撃する意思がないことを示すためにラミアをボールに戻した。
「アキラはここで何しているの？」
スーツを着ているからアキラも招待客なのかしら？そんなことを考えていたら答えが返ってきた。
「ああ。私はここで働いているんだ。ボディガードのようなものだな。言ってなかったか？」
私は首をブンブン横に振った。いえ。初耳です。ポケモンを捕獲したり用心棒として働いたりしているとは聞いたことがあるかもしれない。だけどヨスガシティの近くに住んでいるお金持ちの屋敷で働いているとは聞いてない。
誰一人状況を理解していないなか新たな人物が屋敷の扉から出てきた。
「まあ。まあ。なんですの？さっきの地震は」
その女の子は私とアキラの間の歳だった。スミレ色の長いふわふわしたロングヘアーが白いワンピースとマッチしていた。いかにもお嬢さまって感じ。地震を起こした張本人として責任を感じた私は返事をした。
「は、はじめまして！え～っと……この屋敷の裏庭に私のスボミーが落ちちゃって……。あわてて敷地内に入ったらメイドたちとバトルすることになってこうなっちゃったの」
スボミーを取り戻した今なら誰も私の言葉を疑わない。だけど結果的に私がパーティをめちゃくちゃにしちゃったから居心地が悪い。
「まあ。それは大変でしたわね。……もしかしてあなたはヒカ

リ・ハナゾノさまでいらっしゃいますか？」
「えっ？」
なんで私の名前を知っているの？アキラが教えたの？招待客たちは次々と口を開いた。
「おお。本当だ。フタバタウンのヒカリだ！」
「あのテレビによく出るトレーナーじゃないか」
「髪型と服装が違うから気づかなかったわ」
私はお嬢さまとお坊ちゃまに囲まれた。みんなあれこれ私に質問してくる。「ポケモン図鑑の調子はどうですか？」とか「次はヨスガジムに挑戦するのですか？」とか。私、自分が思っていた以上に有名人なのかも……。人だかりの中でも屋敷から出てきたお嬢さまは誰よりも目を輝かせていた。私の手を両手で包むと彼女は興奮した声で言った。
「わたくし、あなたの大ファンですの。今夜はここで泊っていただけませんか？」
「えっ？」
い、いいのかしら？不法侵入者のうえに器物破損の罪で裁かれてもおかしくないのに。
「サ、サヤカお嬢さま……」
人だかりから離れた場所でメイドレッド、ことクレアが訴えるような目でサヤカお嬢さまを見た。
「クレア。ヒカリさまの部屋を用意してちょうだい。ヘレンはパジャマやタオルなどお泊まりセットを用意してね。最高級のものを使うのよ。全部新品で未使用品！なんなら昨日買ったばかりの私のネグリジェをヒカリさまに着てもらってもいいわ。エミリはハウスメイドと一緒にテーブルから落ちたものを片づけて。ソフィはコックに新しい料理を作るように言ってちょうだい。キッチンメイドと一緒に料理を手伝ってね。ハンナはお風呂の用意をお願い。……いいこと？みなさん。ヒカリさまに最高級のおもてなしをするのよ。くれぐれも失礼のないように！」

「か、かしこまりました……」

失礼もなにも失礼をしたのは私のほうなのに……。クレアは納得していないとばかりに顔をしかめた。だけどお嬢さまの命令には逆らえない。メイド長らしくすぐ仕事に取り掛かった。サヤカお嬢さまの命令を実行するためメイドたちはちりぢりになった。私はどうしたものかと立ち尽くしていたらサヤカお嬢さまに腕をひっぱられた。

第３９話　招かざる客　＜後編＞（後書き）

お屋敷編完結！アキラと会わせるためにこの事件を書きました＾＾
次回からはヨスガシティ編に入ります。
メイドレンジャーの挿絵、マリルとマダツボミの位置が逆でした・・
・（泣）。

イラストギャラリー3（前書き）

イラストが少ないと思ったらけっこう貯まっていました（笑）。
久しぶりのイラストギャラリー、お楽しみください☆

イラストギャラリー3

「アキコ16歳」
>i11814—699<
アキコの9年後の姿です。少女漫画風に描きました。失敗作ですね；以前描いた少女漫画風のトリオと同時期に描いたものなので古いです。

「中華な2人」
>i11810—699<
もともとはアキラの人気投票の結果発表に使おうとしたボツ絵です。せっかくなのでヒカリも描いてチャイナ服を着せました。

「女神と乙女」
>i11813—699<
ボツ絵。シロナとヒカリです。おそろいの白いワンピースを着せたかったんです。
でもポーズと体の大きさが不自然だったのでボツ。
いつか大きな紙で再チャレンジしたいです！

「天使と堕天使と悪魔」
>i11812—699<
ボツ絵。天使なヒカリと堕天使なアキコと悪魔のアキラの対比を描きたかったんです。
服装とポーズが気に入らないのでボツ。
この絵もいつか大きな紙で再チャレンジしたいです。

「落ち葉の上で」（下絵）

＞ｉ１１８０９―６９９＜
ここ数日ずっと取りかかっていた絵の下絵です。
久しぶりにジュンとヒカリとコウキのトリオを描きました。

「落ち葉の上で」（完成）
＞ｉ１１８０８―６９９＜
秋の空の下で落ち葉の上で寝ころぶ主人公トリオです。ブログのトップ絵にしました。
今日やっと完成しました（２０１０／０９／２０現在）。製作期間は４日。
折り紙と厚紙を使った貼り絵です。力作です。ほめて！（笑）

「モデル」
＞ｉ１１８１１―６９９＜
次に製作予定の貼り絵です。
「落ち葉の上で」のラフ絵と同時期に描きました。
具体的に言うと９月の始めごろですね。

「似た者同士」
＞ｉ１２４９８―６９９＜
異なる環境で育った優等生の２人。はたして２人は結ばれるのでしょうか？
男と女。大人と子供。白と黒。対照的な２人を描くのは好きです。
横顔を描くのは難しいですね。鼻が高くなってしまいました。

「女の友情」
＞ｉ１２４９７―６９９＜
アキラの私服を考えるのは大変です。ヒカリの服はすぐ思いつくのですが・・・。
ポケモンを描くスペースがありませんでした。

・・・というか最初から描くつもりがなかったです。
ぶっちゃけヒカリばっかり描いてます。ダメだこりゃ・・・。

「マイとヒカリ」
＞ｉ１２４９９―６９９＜
本編見登場のマイとウインディ。右側にはヒカリとポニータがいます。
ゴスロリ服の色を反転させてヒカリに着せてみましたがけっこう似合いますね。
ウインディ描くの難しかったです。模様がわかりません・・・；

「冬服トリオ」
＞ｉ１４０２７―６９９＜
＊ｓｎｏｗ　ｗｈｉｔｅ＊さんのリクエストでジュン・ヒカリ・コウキを描きました。
最近寒いので冬服を着せました。本編では後半まで夏服を着る予定です。
クイズに正解して白黒で絵を描くつもりが気づけば本気を出していました（笑）。
私、手加減できない人間なんです。ポケモンでも、恋愛でも（＾＾；

ヒカリの日記　4月17日（日）

『4月16日　日曜日

今度こそ私はハクタイシティを出た。ナタネさんとモミさんとミルちゃんとミルちゃんのお母さんに見守られながら。サイクリングロードの先はクロガネシティへと通じる207番道路だった。ヒョウタさんを倒したばっかりのコウキくんと会ったけどナタネさんのプレゼントのことを聞き忘れた。ちゃんとヒョウタさんにわたしたのかな?どんな反応したか気になるなぁ。プレゼントのことは聞き忘れたけどアキラの過去を少し知ったの。昔一人称が「オレ」だったアキラ。アキラは「オレ」と言うだけでなくコウキくんに「アキラ兄さん」って呼ばせたんだって。「アキラ姉さん」ではなく「アキラ兄さん」。でも今のアキラは「私」で話すし「アキラ兄さん」と呼ばれたら殴る。どうしてだろう?昔なにかあったのかな?

コウキくんと別れてテンガン山に入ったらあのおじさんとあった。ハクタイシティで追いかけて見失った水色の逆立った髪のおじさん。ハンカチを返そうとしたけど遠慮された。いつかなんらかの形で恩返ししたいな。テンガン山を出るまでお話したけど内容が難しくてよくわからなかった。世界の始まりや争いがどうのこうのって言ってたけど……。居場所を持っているかという質問には答えられた。答えはノー。私はフタバタウンで生まれてフタバタウンで育ったのにそこを私の居場所とは思えなかった。今になってやっと気づいた。なんで今まで気づかなかったんだろう?なにか物足りない気はしていたけど……。おじさんの名前はアカギ・チョウジョウ。今さらチョウジョウさんって呼ぶのは変だけどアカギさんだとなれなれしいかな?宇宙関連の会社の社長なんだって。すごいなぁ。ノワール（ヤミカラス）がそわそわしていたけどなんだったのかしら?

アカギさんと別れて（日記と心の中ではアカギさんと言うことにした）ヨスガシティを目指した。だけど２０８番道路を出たところで事件は起きた。セニョール（スボミー）が野性のムクバードにつかまっちゃったの！！ムクバードはノワールがなんとか倒したけどセニョールは大きな屋敷の裏庭に落ちて大ピンチ！塀は高すぎて登れなかったからノワールを先に行かせた。私はセニョールを救出しようとナポレオンと一緒に屋敷へ向かった。すっごくあせってたから警備員に止まれって言われたけど止まれなくてバトルでやっつけちゃった。塀を越えた先はパーティーが行われていたの。ここでも警備員とバトルすることに。

だけどそれはまだ始まりだった。私は屋敷の前で大勢のギャラリーに囲まれながらメイドレンジャーと戦うことになったの！プリティアだか何レンジャーだかメチャクチャだけど違う色の制服を着たメイドが５人もいたのよ！いい歳してはずかしいったらないわ。しかもムカつくことに意外と強かったの！メイドレンジャー５。５人のトレーナーに５匹のポケモン対トレーナー１人に３匹のポケモンじゃ勝てるわけない。相手のほうが人数もポケモンの数もレベルも上なんだから。ついカッとなってラミア（イワーク）の『地震』で蹴散らしちゃった。ミルちゃんからもらった技マシンがまさかこんな形で役に立つだなんて……。

おかげでパーティはメチャクチャ。パーティ会場があまりにも悲惨だったから逃げようとしたの。そこへスーツ姿のアキラがセニョールとノワールとともに登場！アキラ、この屋敷でボディーガードやってるんだって。す、すごいわ……。アキラの次に現れたのはこの屋敷のお嬢さまのサヤカさん。サヤカさんは私の大ファンでこんな騒ぎを起こした私を温かく迎えてくれた。おかげで助かったわ。でもメイドレンジャーのリーダー（クレアさんだっけ？）は私のこ

とを許せないみたい。私を複雑な目で見ていたわ。明日ちゃんと謝らなきゃ。』

ヒカリの日記　4月17日（日）（後書き）

第38～39話のまとめですみません。これからは日記は話の前編ではなく「ヒカリの日記」として載せます。

第４０話　有名人　＜前編＞（前書き）

お屋敷で朝を迎えるヒカリだが・・・？

第４０話　有名人　＜前編＞

―ブロロロ……。

車のエンジンが止まる音がした。私の朝は1台の車によって始まってしまった。

「う～ん……」

いや。もうちょっと眠りたい。私はナポレオンを抱いたまま空いた手でふとんをかぶった。昨夜バタバタしてたからもうちょっと寝たっていいじゃない。だけど静寂（せいじゃく）は戻らず誰かが玄関へ続く階段を上る音が聞こえた。

―ピンポーン。

屋敷の呼び鈴（りん）まで鳴っちゃった。ますます眠りにつけないじゃない。

―ガチャッ。

ドアが開いた。誰か来たのかしら？声は聞こえるけど話の内容まではわからない。まあいいわ。あとで訊こう。静かになって再びウトウトしていたら今度はドスンドスンという音が聞こえてきた。

「……もう。な～に～？」

こう立て続けに音が聞こえてきたらもう眠れない。二度寝はあきらめたけどしばらくふとんの温もりを感じることにした。ふとんも

ナポレオンも温かい。

「……ポ～チャ～？」

ぬいぐるみサイズのポケモンは私の腕の中で寝返りを打った。ナポレオンも部屋の外がうるさいと感じたのかもしれない。

―バタン。

男の人がなにか言ったあとドアが閉められた。エンジンがかかり車は遠ざかっていく。やっと静かになった……と思ったら今度は足音がした。誰かが私の部屋に向かっているのかもしれない。

―コンコン。

「失礼します」

女の人の声だった。たぶんメイドレンジャーの1人。きつい口調じゃないからメイドレッドのクレアさんではない。私はナポレオンを置いてベッドから出た。

「……ン～～。ポチャチャ～？」

ごめんね。ナポレオン。そろそろ起きなくちゃいけないみたい。心の中でナポレオンに謝りながら私はドアを開けた。

「はい！起きてます！おはようございます！」

「おはようございます。ヒカリさま」

私を迎えに来たのは水色のポニーテールのメイドさんだった。メ

イドレンジャーでマリルで戦ってた人だ！えっ～と名前は確か……。

「あなたの世話役を仰せ使ったハンナと申します。メイドレンジャーの中では1番未熟ですが精一杯ご奉仕させていただきます。よろしくお願いします」

やわらかい物腰の人だった。メイドレンジャーの中では1番優しそう。今日は青いメイド服を着ていなかった。

「は、はい！よろしくお願いします！」

なんだか変な気分だった。一夜で普通の女の子からお姫さまになったみたい。まるでアラビアンナイトだわ。

「お召し物をお持ちしました。……もっとも、すぐまた別の服に着替えることになるのであまり意味がないと思いますが」

「は？」

ハンナさんが言っていることがわからずまばたきした。どういう意味だろう？私の気持ちを察したのかハンナさんはぎこちない笑顔で答えた。

「すぐわかりますよ。まずは顔を洗って歯を磨きましょう。着替えはそのあとです」

とりあえず言われた通りにすることにした。この部屋はホテルみたいに個室にお手洗いとお風呂がついている。バスルームに行く前に私は改めて自分が泊った部屋を見た。白い壁。白い天井。白いカーテン。白い家具。白い天蓋つきベッド。白以外の色もちゃんとある。床は茶色いしベッドシーツも枕カバーも白だけどベッド自体は

黒色だもの。アキコちゃんの部屋はピンクだけどサヤカお嬢さまが用意したこの部屋は白。病院ほどじゃないけどこの部屋は白でいっぱいだった。

着替えを終えてハンナさんにダイニングルームまで案内された。ハンナさんが離れてダイニングが目に入るはずだったけど私の目に飛び込んできたのはサヤカお嬢さまの姿だった。

「ヒカリさま！おはようございます！」

「ポチャッ！？」

「お、おはようございます」

前触れもなく出てきたから軽く驚いた。サヤカお嬢さまは朝からテンションが高い。今日はなにをするつもりなんだろう？昨夜は一晩中質問責めにあった。私の好きなもの・嫌いなもの・誕生日・生い立ち・好みのタイプ・旅であった出来事などなど。昨日散々話したから旅を再開しない限り新しい話はできないと思うけど……。

「さっき注文した品が届きましたの！クレア！見せてあげてちょうだい！」

「……はい」

どうやらクレアさんは最初からダイニングにいたみたい。クレアさんは渋い顔をしながらなにかに被せられていたシーツを取った。そこに現れたものを見て私はあっけにとられた。

「……えっ？」

シーツの下にあったのは大量の服、服、服。白を基調とした服がハンガーラックにかかっていた。ざっと見て１０着はある。それだ

けでもすごいのにクレアさんは次々と他のシーツを取った。新たに現れた2台のハンガーラック。1台にはピンク色の服が、もう1台には白とピンク以外の色の服がかけられていた。よく見たら近くに段ボール箱が5、6個置いてあった。おまけにいくつか未開封なのもある。

「昨夜ヒカリさまがお休みになられたあとすぐ注文しましたのvヒカリさまに似合いそうな服をそろえましたわ！わたくしとしては白が1番似合うと思うのですけれどヒカリさまが好きなピンクの服もありますわよ。朝食のあとさっそく試着しましょうね♪」

「は、はあ……」

驚きすぎて声が出ない。ナポレオンは口をパクパクしている。

「サヤカお嬢さまー。ナポレオンさまの服が入った服もラックにかけますかー？」

「ポチャッ！？」

「ヒカリさまの靴やバッグなどを優先したほうがよろしいでしょうかー？」

金髪のメイドとピンク色の髪のメイドが別々のラックの後ろから出てきた。メイドイエローとメイドピンクだ。……って ナポレオンの服まであるの！？ポケモンが服を着てどうするのよ？？

「同時進行に決まっていますわ。同じ数の人員を当ててちょうだい」

「「はーい」」

メイドレンジャーの中で幼い部類に入る2人は普通のメイドさん（ようするにメイドレンジャー以外のまともなメイドさん）を呼びに行った。クレアさんがあとから来たソフィさんに指示を出してい

る間もサヤカお嬢さまはニコニコしていた。

「さあさあ朝食が冷めてしまいますわ。今朝の朝食はフレンチトーストですわよ。フルーツサラダもありますわ？」

「は、はい！」

私はハンナさんが引いたイスに、サヤカお嬢さまはクレアさんが引いたイスに座った。サヤカお嬢さまは昨夜と同じくらい興奮していた。ちゃんと眠れたのかしら？フルーツサラダを噛んでいる最中にハンガーラックと箱は隣の部屋へ移動された。ラックがなくなっても私は大量の服を思い出してうんざりした。私……このあとあの大量の服を全部着るの？服って靴やバッグ、ヘアアクセサリーによって雰囲気が変わるのよね。まさかこの屋敷にいる人たちが考えられる全てのコーディネートを思いつく限り試すつもり？

「ヒカリさま。お味がお気に召しませんの？」

「……え？い、いえ！朝だからぼーっとしてただけです！」

「そうですか。もし気に入らなかったらコックに作り直させますから遠慮せずに言ってくださいね」

フレンチトーストをほおばっていたのでうなづいた。……冗談じゃないわ。オシャレは好きだけどせいぜい楽しいのは最初の5着だけ。そのあとの試着は地獄だわ。ヨスガシティに行く時間がなくなっちゃう。早くジム戦に挑みたいのに。どうすればいいんだろう？いろいろ思索した末にナポレオンに頼(たよ)ることにした。もしナポレオンが不機嫌(ふきげん)だったらそれを理由に断(ことわ)れるかもしれない。私はナポレオンをチラ見した。

「～♪～～♪～～～♪」

私の期待は見事外れた。ナポレオンは上機嫌だった。おまけに鼻歌まで歌っている。きっと自分の服が用意されたことがうれしいんだわ。私は肩の力が抜けるのを感じた。

＞ｉ１２０５０―６９９＜

＊＊＊

「……散々だったわ」

私はアキラに愚痴をこぼした。今、私たちはヨスガシティを歩いている。午前中はサヤカお嬢さまの着せ替え人形にされて大変だった。サヤカお嬢さまの指示でメイドレンジャーたちにあれよあれよと着替えさせられた。イエローのエミリさんとピンクのヘレンさんはノリノリで、グリーンのソフィさんは真面目に、ブルーのハンナさんは控えめに仕事をした。レッドのクレアさんはサヤカさんの横でコーディネートのパターンが描かれた紙の束をめくっていた。コーディネートは１００パターンくらい試した気がする。１３パターン目から自分がなにを着たのか覚えていない。

「止められなくてすまない。アキヒコお坊ちゃまの護衛をしていたんだ」

着せ替えされる間にサヤカお嬢さまも話していたけどサヤカお嬢さまにはお兄さんがいる。私より2歳年上でぜひ結婚を前提に付き合うといいですわ、と言っていた。兄との婚姻を利用して家族に引き入れようとする思考がアキコちゃんと同じだわ……。

「ハンナのおかげでこうして2人きりで出かけられたからいいじゃな

いか」
「うん」

服を着て撮影、そのあとバッグや靴を変えて撮影。同じ服でも持ち物履き物を変えて何回も写真を撮られた。ナポレオンも右に同じ。サヤカお嬢さまはご丁寧に撮影用のカメラと照明と背景まで用意していた。モデル並みのハードスケジュールに疲れた私。それを見かねたハンナさんが新人メイドながらメイド長のクレアさんに休憩することを恐る恐る提案した。もともと私を気に入ってなかったクレアさんはその提案を採用。そのときアキラがナイスタイミングで現れてヨスガシティに行かないかと誘ってくれた。サヤカお嬢さまもついていくと言ったけどクレアさんがそれを制止。お勉強の時間ですということで着せ替え&撮影会はおしまいになった。

「あちこちにキレイなお洋服屋さんやアクセサリー屋さんがあるけど入る気がしないわ」
「あははっ。あれだけたくさん試着したもんな」

ナポレオンは船の船長みたいな帽子を被って満足していた。私たちの後ろでスキップしている。私と違って全く疲れてない。モデル気分でうれしかったのね。私はというとサヤカお嬢さまが外出用に選んだ服を着ていた。白いパフスリーブのワンピース。ところどころにあしらわれた薄紫のリボンがポイント。アキラはスーツからカジュアルな服に着替えていた。紺色のジャケットにVネックの服が清潔感を演出している。ズボンはシンプルに茶色。ピッタリしていしルーズでもないからちょうどいい。

ヨスガシティはファッションの町。人も店もみ〜んなオシャレ。ポケモンまでさりげなくオシャレしている。ここには最新のファッションがそろっているだけでなくヨスガでしか買えない限定商品も

販売している。アキラが昔くれたペンちゃん（ペンギンのぬいぐるみ）もここで買ったもの。私が1番行きたかった町と言っても過言じゃない。でもサヤカお嬢さまのせいで楽しみが減っちゃった。悪気がないのはわかるんだけど……。

笑いが一段落したらなんとなく黙ってしまった。話す内容が思いつかない。サヤカお嬢さまの相手で疲れたってこともあるんだけど。なにか話そうとしたら女の子たちの会話が聞こえてきた。

「ねーねー見てあそこの2人！ナイスカップル！」
「どこ～？」
「白いワンピースの女の子と紺色のジャケット着てる男の人！」
「ホントだ。美男美女―！」

私はショーウィンドウを見た。ウィンドウには女子高生のグループの姿が反射していた。

「あの人超カッコイイ～。好み～～ｖ」
「ダメダメ！彼女いるんだから」
「妹かもよ？」
「2人ともモデルかな？」
「女の子の着てる服かわいいな～」
「あのポケモンも帽子被っててかわいいー♪」

私たちに聞こえていることにも気づかず女子高生たちはキャーキャー騒いでいた。よく見たら通りすがる人たちはほぼ全員私とアキラを見ている。……私たち、そんなに目立つ？ますます気を良くしたナポレオンはめずらしくニコニコ笑っていた。普段はすました顔をしているのに。今朝からご機嫌なナポレオンはいい。でも男と間違われたアキラが気がかりだった。気を悪くしてないかしら？

内心ヒヤヒヤする。

「ア、　アキラ……」

案の定アキラの顔はひきつっていた。なにか考えていたみたいだけどあきらめたようにため息をついた。

「……気にするな。よくあることだ」

「ド……ドンマイ！」

私は親指を上げた。なぐさめになったかどうかはわからない。KYな女子高生たちはまだキャーキャー騒いでいた。

「……ん？」

なるべくヨスガを楽しもうとお店を見たら思いがけないものを見た。高級ブティックのガラスに飾られた何枚ものポスター。そこに写っているのは高そうなファッションに身を包んだ金髪の女性――――シロナさんだった。

「ええーーーっ！？シロナさん？！」

周囲の音が止んだ。声も、足音も。そのかわり私に集まる視線。でもそんなの気にならないくらい私は動揺していた。なんでシロナさんが高級ブティックのポスターに？！

「ああ。ヒカリも会ったことあるのか？」

「し、知ってるの？」

アキラも会ったことあるんだ！まさか知り合い？

「知ってるもなにもシロナは……」
「ヤッホーー♪ヒカリ～！アキラ～！」

アキラの会話は第3者によって中断された。遠くから聞こえる私たちの名前を呼ぶ声。噂の金髪の美女が藍色の肉食恐竜を従えて歩いていた。……大量の荷物とともに。

「シ、シ、シ、シロナさん！」

シロナさんはブティックのポスターに負けないくらい高そうな服を着ていた。胸元が空いた黒いドレスにピンクのスカーフ。大人なドレスはウエスト部分でピンクに切り替わりその下で再び黒に戻りシロナさんの動きに合わせてヒラヒラ踊っている。両腕にはショッパー（店のロゴが入ったシックな紙袋）がぶらさがっていた。恐竜みたいなサメみたいなポケモンはラッピングされた箱を重ねて持っていた。かっこいいポケモンなのに荷物持ちにされてる。すごい大人買い……。やっぱりシロナさんって女優かモデル！？

＞ｉ１２０５１―６９９＜

「覚えていてくれたのね。ヨスガでも会えてうれしい！」

シロナさんは初めて会ったときと同じようにイタズラっぽい笑顔を浮かべた。……忘れるわけないって。こんなに綺麗な人、一度会ったら絶対忘れられない！

「今日も白いワンピースなのね。薄紫のリボンがチャーミング！」

そういうシロナさんも服こそ違うけど前回と同じ色の服を着てい

る。

「アキラとも会えてうれしいわ。どう?私と一緒にモデルやる気になった?」

「お断りだ。どうせ男役として撮影(さつえい)するつもりなんだろう」

「アハッ♪バレちゃった☆」

シロナさん……ポスター……アキラ……モデル……。やっぱりシロナさんはモデルなんだ!

「あ、あの!シロナさんは女優ですか!?モデルですか!?」

思い切って訊いてみた。次いつシロナさんと会えるかわからない。今のうちにハッキリさせておいたほうがスッキリする。

「ん~~……どちらかといえばモデルだけどバイトに近いかな」

「ええ~~!?」

モデルはバイト!?……じゃあ本業はなに?女優じゃなければ歌手?デザイン会社の女社長?神話が好きだから大学教授?それとも考古学者!?

「ええ~っと……よくわからないけどサインください!」

とにかくシロナさんがすごいことはわかった。少なくともポスターに出るくらい有名だということを。

「いいわよ。そのかわりヒカリのサインをちょうだいね」

「は、はい!私のでよければ!」

周囲の人たちがざわついた。さっきの女子高生たちなんか私とアキラはやっぱりモデルだったんだと騒いでいる。

シロナさんは私にペンと四角い枠や文章が描かれた用紙をわたした。

「まずここにヒカリの名前を書いてね」
「はい！」
「読み仮名を書くのを忘れずにね。カタカナよ」
「はい！」

私は言われるがままに名前を書く。なんの紙か知らないけどシロナさんのサインがもらえることは光栄だった。

「ここにサインするのよ。判子はここに押してね」
「はい……えっ？」

……判子？判子なんて持ってたっけ？……っていうかなんで判子が必要なの？

「シロナアアアアアッ！！」

アキラが紙を取り上げた。私はわけがわからずオロオロした。アキラが怒ったわけはすぐわかった。

「なにヒカリに婚姻届を書かせているんだ！？」
「えええええええええっ！？婚姻届えええ？？」

婚姻届って戸籍を入れて結婚しましたって証明するアレ？なんで私がそんなもの書かされてるの！？

「テヘッ♪バレちゃった☆」

シロナさーーーん！なに考えてるんデスカーーーーー！？

「ヒカリが結婚できるわけないだろ！女は満１６歳以上じゃないと駄目なんだぞ！……つーか女同士で結婚できるかーーー！！」

「ボヂャヂャアアアアア！」

ごもっともです！！アキラの言う通り。ニホンでは同性婚は認められてない。……っていうか私シロナさんと結婚するつもりないんですけど！ナポレオンまで動揺してるんですけど！

「アハハッ♪冗談よ。じゃあアキラが代わりにサインする？」

「私は女だあああああっ！！」

その直後女子高生たちが「えーーー！？うそーーー！？」と叫んだ。確かにあの外見と声で女の子ってある意味反則だわ。

「……あら？目立ちすぎちゃった」

気づけば私たちは若い人たちに囲まれていた。歩くスペースもない。

「ねえ。あれって最近テレビに出ているヒカリじゃない？」

「あそこにいるシロナってｓｃａｎｄｅｌのモデルじゃなかったっけ？」

「あのアキラって人俳優？それとも女優？」

……どうしよう。このままじゃ質問責めにあっちゃう。

「また会おうね。ヒカリ。アキラ」

シロナさんはなにかを投げた。黒い煙が周囲に広がる。野生ポケモンから逃げるときに使う煙玉だ！

「ヒカリ！捕まれ！」

「きゃっ！」

アキラにしがみついて目をつぶった。ナポレオンの手の感触を足に感じる。やがて私は自分の体がナポレオンとアキラもろとも持ち上がるのを感じた。鳥ポケモンに捕まって飛んだのかもしれない。目を開けるのが怖くてアキラをぎゅっと抱きしめた。アキラも私が落ちないように腕に力を入れた。アキラのポケモンが足場を見つけるまで私たちは無言だった。

「……ムークホオオオッック！」

クルル♪（ムクバード）に似ている鳴き声だった。アキラの鳥ポケモンはムクバードの進化系かもしれない。……地に足がついた。目を開けたらマンションの屋上にいた。

「手荒ですまない。大丈夫か？」

「……うん」

前方には白いドームが見えた。後ろへ振り向いたら白いポケモンが飛んでいるのが見えた。黒い服を着た金髪の女性が乗っているのが見えたからたぶんシロナさんだ。

「シロナのやつ……。この借りは高くつくぞ」

アキラは顔をしかめた。コウキくんに対する態度と違うけどシロナさんが苦手なことは確かだった。

「シロナさんって何者？」

ずっと思っていた疑問を口にした。さっきの女優かモデルかという質問に似ている。シロナさんが現れなければ聞けた答え。それを聞くためもう一度アキラに訊ねた。

「シロナは現ポケモンチャンピオンだ」

えっ……？驚きすぎて声が出なかった。最後に見たシロナさんの色っぽい表情が浮かび上がる。とてもチャンピオンには見えない。だけどそのあとアキラが言った言葉に私はもっと驚いた。

「そして私は……元チャンピオンだ」

第４０話　有名人　＜前編＞（後書き）

超・展・開！

余談ですが巨乳のシロナさんを描くのは楽しかったです。

ペッタンコのヒカリとアキラばっかり描いてましたから（笑）。

第４０話　有名人　＜中編＞（前書き）

妹がブラックをクリアする瞬間に立ち会ってから新作の妄想が止まりません（笑）。
そのうち短編でやるかもしれません。ブラックホワイトの恋愛小説（爆）。

第４０話　有名人　＜中編＞

息が詰まった。瞳孔が開いた。足が勝手に下がった。ナポレオンは声を上げて驚いていた。だけど表面上静かとはいえ私のほうが内面ショックだった。

「アキラが……元チャンピオン……？」

クロガネシティでもそれとなくアキラにポケモンチャンピオンになれたか訊ねた。あのときは「まあな」とはぐらかされた。アキラの雰囲気からその話題は避けたほうがいいと思った。だからそれ以上はなにも言わなかった。アキラはチャンピオンになれたか否か。３年間の空白の一部が、今、明かされようとしていた。

「ポケモンチャンピオンになる方法が２つあるのを知っているか？」

「え、ええ……。１つはスズラン大会で優勝すること。もう１つはポケモンリーグに勝つことでしょう？」

スズラン大会は５年に一度開かれる大会。スズラン大会ではジムバッジを８個持っているトレーナーなら誰でも参加できるトーナメント式の大会だわ。挑戦者は毎年２００人以上。戦う相手がランダムに決まって勝つたびにあみだくじ方式で進む。その大会で優勝した人はチャンピオンの称号を与えられ、チャンピオンの次に強かった４人が四天王となる。チャンピオンと四天王の任期は５年。次のスズラン大会までチャンピオンと四天王は５人で５年間ポケモンリーグを運営することになる。

……で、ポケモンリーグというのはスズラン大会で選ばれたＴＯＰ５と戦う大会。１年以内にバッジを８個集められた人が挑戦できる。バッジを８個そろえた時点でチャンピオンロードへ進む権利をもらえる。高レベルの野生ポケモンが住むチャンピオンロード（ダンジョン）を抜ければそこはポケモンリーグ本部。本部にはポケモンセンターもフレンドリィショップも入っている。一度本部にたど

りつけば秘伝技「空を飛ぶ」でいつでも来れる。だからトレーナーはその年以内は好きなときに挑戦できる。そのかわりポケモンリーグに挑戦できるのは1人ずつ。うかうかしていたらライバルに先を越されちゃう。
スズラン大会と違ってポケモンリーグは四天王とチャンピオンを倒すだけでいい。でもその5人が全員強者だからやっかいなのよね。

アキラは優しく微笑んだ。
「さすがヒカリ。よく勉強してるな」
私はアキラから目をそらすようにしゃがんだ。そして足をぎゅーっと抱いているナポレオンを撫でた。
「……ポ～チャ～」
いつもより低い声で鳴かれた。表には出していない不安もナポレオンにはバレバレだった。
ポケモンリーグのことを知っているのは当然だった。だって私……アキラのことが好きだったんだもん。ポケモンのことを勉強したのも、ポケモンチャンピオンを目指したのもアキラの影響だった。……今は普通に女友達として見ているけど。私はしゃがんだままアキラの話に耳を傾けた。
「私は3年前ポケモンリーグに挑み、見事チャンピオンに勝った。だけどチャンピオンの座は辞退し、称号だけをもらった」
「えっ！？」
「ポチャッ！？」
ナポレオンと顔を見合わせた。も……もったいない！任期期間が短い仕事とはいえポケモンリーグは……四天王とチャンピオンは全トレーナーの憧れの職業。チャンピオンと四天王の中には任期が切れてもその地位を保つため自ら次のスズラン大会に参加する人もいるくらいなのに！
「私はただ自分の実力を試したかっただけなんだ。チャンピオンになってポケモン協会の命令を聞きながらポケモンリーグを運営した

かったわけじゃない。そのあとは当てもなくのらりくらりと1人旅。シンオウとジョウトを行き来したんだ。でもこのままじゃ駄目だと思ってウラヤマ家の護衛として働くことにした。ときどきナナカマド博士の手伝いもしている。大学に行くかどうかはわからないけどとりあえず貯金することにしたんだ」

アキラは照れるように頭をかいた。めったに見せない照れ顔よりも話の内容自体に動揺した。だからテレビでスズラン大会が放送されたときアキラは映ってなかったんだ。だって参加してなかったもの。挑戦者（トレーナー）だけでなく客席まで凝視したけどアキラの姿は全くなかった。新聞やニュースを見ても同じ。ポケモンリーグの様子は挑戦者が許可しなければ放送されない。それにチャンピオンの座を辞退してたんじゃマスコミにも情報は流れない。

「ふ、ふ～ん……」

ああ……私の顔、絶対ひきつってる。チャンピオンになる実力があったのに辞退するだなんてかっこよすぎる。名門大学に受かったけどミュージシャンとして生きていくと決意したのと同じようなことだった。……ん？ちょっと待って！私は立ち上がった。

「じゃあシロナさんとなんの関係もないじゃない！」

「チャーーーッ！？」

私の発言でナポレオンも我に返った。現チャンピオンのシロナさんが苦手な元チャンピオンのアキラ。アキラがシロナさんが好きじゃないって言っていたから……てっきりシロナさんにチャンピオンの座を奪われたと思ったじゃない！

ところが私の勘違いをよそにアキラはケラケラと笑った。

「私がチャンピオンを辞退した翌年、スズラン大会が開かれシロナが優勝してチャンピオンになった。私よりあとにポケモンリーグを制覇した人はいなかったから元チャンピオンと現チャンピオンとして直接交流がある。練習試合で何度か手合わせしたよ。あいつは強い。何回か勝ったけど同じくらい負けた。引き分けも多い」

「じゃ、じゃあシロナさんはライバルだから苦手だってこと？」

自分と同じくらい強い人がいたら対立しちゃうとか……？
「いや。ポケモンバトルは関係ない」
ええ～～～っ！？
「じゃあなんで！？」
「ポッチャア！？」
さきほどから異常に高いナポレオンと私のシンクロ率。話のオチを聞くまでシンクロは解けない。
「それは……あいつがいいやつだからだ」
……は？それはあいつがいいやつだからだ？……はい？？
「ポッチャア～？？」
ナポレオンの頭にもクエスチョンマークが飛んでいた。アキラの言っていることがわからない。
「それってどういう意味？！」
「だから……その……あいつには心の闇がないんだ！『私は素直で～す♪私には心の闇なんてありませ～ん♪穢れてませ～ん♪遺跡大好きで～す♪自分の欲望に忠実で～す♪この世界は美しい世界で～す♪恐いものなんてありませ～ん♪』って感じのシロナが苦手なんだ！」
「そ、そう……」
たしかにシロナさんは大人だけど無邪気で恐いもの知らずっていうイメージがあるけど……そんな理由でシロナさんが苦手なの？
アキラはがっくりと肩を落とした。
「悪気はないんだろうけど人の心に土足で踏み込んで『ヤッホー♪どうしたの～？』……。その人の気持ちを理解できなくても元気づけようとあれこれ世話を焼いてくれる。なんか苦手だ……。私は自分の力で自分の問題を解決したいのに……」
「ふ～ん」
そんなものなのかな？自分のことは自分でっていう気持ちはわかるけど。……アキラってどっちかといえば暗い性格に入るし明るすぎるシロナさんが苦手なのかな。

「ポ～チャ。ポチャポチャ～」
ナポレオンは両手を上げて『な～んだ。そんなことか～』とつぶやいた。知りたいことがわかったのであくびなんかしてる。
クールだけど苦労人なアキラは壁に寄りかかった。
「頼むからこのことは誰にも言うな。特にシロナとアキコ」
「うん」
「まったく……」
アキラは壁から離れて私の頭をなでた。
「……こんなこと言えるのヒカリだけだ」
私はただ笑った。もしアキラが男の子だったらそのセリフにドキッとしていた。

第４０話　有名人　＜中編＞（後書き）

意外な答えでした。みなさんの予想は当たりましたか？＾＾

第４０話　有名人　＜後編＞

話が一段落したところでアキラの鳥ポケモンがアキラをつっついた。私は図鑑を向けた。ムクバードの進化系はムクホークという名前だった。

「しまった……！あいつとの約束を忘れていた」

「あいつ？」

あいつって……どいつ？アキラってあいつって呼ぶ人が多いからどの人だかわからないわ。

アキラは腕時計（ポケッチじゃなかった）を見たあと私を手招きした。

「ヒカリ！ナポレオン！ルーンに乗ってくれ。コンテスト会場に行くぞ！」

人だかりに囲まれたときより時間と空間に余裕があるのか無理して捕まる必要がなかった。ルーンと呼ばれたムクホークはアキラと私とナポレオンを乗せるとマンションから降りていった。コンテスト会場の前でうろうろしている男の子が見えた。

「ひどいですよ～！アキラ姉さ～ん」

ピンク色のＹシャツをスマートに着こなしている男の子は言った。茶色いベレー帽とピーチ色のスカーフのおかげでさわやかに見える。

「もうコンテスト終わっちゃったじゃないですか～。ほら～。もう観客が会場を出ていますよ」

コウキくんの言ったとおりだった。会場からは続々と人が出てきた。どうやらコウキくんは私とアキラのためにチケットを３人分用意してくれたけど待ちぼうけを食ったみたい。

「すまない。色々あったんだ……。それよりなんだその格好は！男がピンクなんて着るな！女々しいぞ！どうせお前もオシャレに時間かけて遅刻寸前だったんだろう！」

アキラはあいかわらず身内に厳しい。血のつながったいとこなのにコウキくんはロクな扱いを受けていない。

「そんなことありません！たしかにヒカリさんと会えると聞いて服選びに時間がかかりました。でも約束の1時間前にはここへ来ていましたよ」

「デート前の乙女かっ！」

遅刻したアキラが悪いのになぜかコウキくんが怒られている。それともこれが2人の挨拶なのかな。

「ごめんね。コウキくん。待たせちゃって……」

「ああっ！ヒカリさん！ごきげんうるわしゅう。あいかわらずお美しいですね！ぼくが指し上げたワンピースでないのは残念ですがそのワンピースも似合います。かわいらしい……！ハデスがペルセポネをさらったように今すぐあなたをさらいたいです。ああ、ぼくの住む世界は暗い……暗いんです！ヒカリさん……ぼくの冥界を照らしてください！ゼウスも許可してくれました。いっそのことアキラ姉さんを置いて抜け駆け……」

ゴーン！

ボクシングのゴングのような音が出た。アキラの拳はコウキくんの後頭部にヒットしていた。

「いいからさっさとコンテスト会場を案内しろ。コンテストが終わっても会場自体はまだ開いてるだろう」

「……はい」

コウキくんは頭を押さえながら歩き始めた。ナポレオンは『ほ～ら。ざまあみろ！』といった顔で地面につばを吐いていた。

コウキくんのあとをつけながらアキラは思い出したように口にした。

「ペルセポネは豊穣の女神デメーテルの娘だ。さらわれたペルセポネを探すためにデメーテルがオリンポスを離れたら地上の作物が不作になったらしい。さらうのはやめておいたほうがいいぞ」

愛する娘がいなくなったら母親は心配して探すわよね、普通。

＊＊＊

自動ドアが開いた瞬間アキラが発した最初の言葉は「うっわ……」だった。今にも吐きそうな顔で。ポケモンコンテスト会場は外側は闘技場に青いドームがついていたのに中はピンクだった。受付に広がっていたのはリボン模様がステキなピンク色の絨毯。それ以外はまともな色。カウンターは青いしテーブルは黄色。けっこうカラフルね。まだ来たばかりなのにアキラは帰りたそうだった。

「あっ。あそこに人が集まっています！今日見るはずだったかわいさコンテストの優勝者かもしれません。見に行きませんか？」

「うん！」

「私はいい……」

遠慮するアキラを追いて私たちは人だかりへ向かった。応接間に人が集まっていた。カメラマンとインタビュアー以外に野次馬やファンがいるようだった。フラッシュの音と光がまぶしい。

「いやはや……あなたのコンテストの演技、とても素晴らしかったです！あなたを見るべきかエネコロロを見るべきか迷ってしまいました～」

「うふふ。わたしとしてはエネコロロを見てくれたほうがうれしいです。ポケモンの魅力を引き出すために参加しているのですから」

「これは失礼！今後は控えます」

ざわざわしてるけど男のインタビュアーと女の人の声が聞きとれる。優勝した女性は気取らずに自分の意見をはっきり述べた。天然だけど芯はしっかりしている。この声って……？この女の人がここにいるはずがない。でも姿が見えないから確信できない。それに同じような人が2人いても困る。だってあの人は……！

「……どこかで聞いたことがある声ですね」

「ポチャー」

しまいにはコウキとナポレオンまでそんなことを言う。気づけば

私は人ごみをかきわけてインタビューに割り込んでいた。
「マ……ママ?!」
「「「「!?」」」」
その場にいた全員が「あっち向いてホイ!」と言われたように私のほうへ向いた。今日は注目を浴びるのが多い。ママは光沢のあるシンプルな薄むらさきのドレスを着てカウチに座っていた。
「あら、ヒカリ。元気だった?旅に出てから無茶ばかりするから心配したわよ」
私は驚いているのにママは憎たらしいほど落ち着いていた。だけど周りの人の驚きは私以上だった。文句を言おうとしたらインタビュアーの叫びに遮られた。
「マ、ママ〜〜〜〜?!」
インタビュアーは口をパクパクした。首を動かして私とママを見比べている。残念だけど正真正銘親子だからそっくり。この人ママのこと好きなのかしら?さっきもママを口説いていたし。でもこんな人がパパになったらヤダなぁ……。30代なのに落ち着きがないし顔も普通だもの。
「えーーー!?ア、アカリさん!こちらのお嬢さんは妹さんですよね?」
インタビュアーはすがるように訊いた。諦めが悪いわね。ママは優しいウソもひどいウソもつかないから真実を述べた。
「いいえ。私の愛娘です。ヒカリっていうの。かわいいでしょう?」
「ガビーーン!!」
インタビュアーはムンクの叫びのような格好で気絶した。周囲の人はいつでも勝手だ。さっそくサプライズというエサに食い付いた。
「ミス・フタバに娘がいたのか!?」
「結婚していたのですね」
「かわいらしい娘さんだこと!」
「この子もコーディネーターになるのかしら?」
「新たなコンテストの時代の幕上げね」

仕事を放棄したインタビュアーの代わりに派手な髪型をした外国人が横から現れた。

「アラなんですか？オー！アカリの娘ね！かわいいー。強そー。コンテストすごいかもー？アナタもコンテストに出るのですカー？」

むらさき色の髪を４つの団子に分けた外国人は興奮気味だった。髪の毛とおそろいの色のドレスはドレープが多くて下にいくにつれ広がっている。おまけにラインストーンがつけられているのか光に反射して絶えず輝いている。ママのドレスより派手だ。シンデレラを助けてくれた魔女が若かったころはこんな姿だったのかもしれない。

＞ｉ１２４９５―６９９＜

カシャッ。カシャッ。カシャッ。

カメラのフラッシュがうっとおしい。私の姿をビデオで撮るだけでは飽き足らずカメラでも撮っている。周囲の人もカメラマンに乗っかってデジカメやケータイのカメラを私に向けていた。

「コンテストに興味あるんですかー？」

「こっち向いてくださーい」

「あなたもかわいさコンテストを極めるのですかー？」

「それとも美しさコンテストですかー？」

「あなたはもしかして最近バトルで話題になっているフタバシティのヒカリさんじゃありませんかー？」

「アカリさんにコンテストの技術を教わったのですかー？」

気絶したインタビュアーの代わりにカメラマンと野次馬が質問を投げかける。……なにもかも気に入らなかった。ママが私に内緒でポケモンを持っていたことも、実はコーディネーターだったことも、ヨスガシティにいたことも、今ここで群衆の注目を浴びているのも。ママったらなにもかも黙っていたんだ。私がポケモンほしい、フタバタウンを出たいって言ってたのにいつか行けるわよ、とニコニコ笑って……。本当はいつでも行けたじゃない。ママが一緒についていれば……ママがポケモンを貸してくれれば……！

「やめてください！嫌がっているじゃありませんか！あなたがたはそれでも紳士なのですか！？」
「ポチャポチャー！」
コウキくんとナポレオンがかばうように前へ出た。だけど事態は悪化するばかりだった。
「あなたはヒカリさんのなんなんですかー？」
「ヒカリさんの彼氏ですかー？」
「そこのポケモンはあなたのですか？それともヒカリさんのですかー？」
イライラする。私は見世物じゃない。ただのアカリの娘じゃない。私は私よ……！
コウキくんが私の手をつかんだ。
「ヒカリさん！早くここを出ましょう！」
「……ます」
「えっ」
「……ごめん」
私はコウキくんの手をふりはらった。気絶したインタビュアーを避けてマイクを拾うとビデオカメラの前で声高々に一宣言した。
「私、コンテストに出ます！母を倒してみせます！」
その場の勢いで言った。全てはもう、後の祭り……。

第４０話　有名人　＜後編＞（後書き）

では問題です。ヒカリがどの部門でどのポケモンでコンテストに出場するでしょうか？答えを当てられた方には絵をリクエストする権利を与えます☆

（２０１０年１０月２７日にクイズの答えの募集は閉め切りました。）

ジュンの冒険ノート1（前書き）

旅に出るときあったら役に立つ冒険ノート。
そこにはトレーナーの思い出がつまっている。
ヒカリは冒険ノートを日記として使っている。
ジュンは冒険ノートにどんなことを書いているのだろうか？
今回はジュンの今までの冒険をのぞいてみよう。

ジュンの冒険ノート1

『4／3　日

ナナカマドはかせがテレビに出てたマサゴタウンに会い行くことにした！
さっそくヒカリをよびに行ったらヒカリは着がえていた。
ヒカリのお母さんに水着と下着のちがいを教えてもらった。

201番道路に行ったらルクシオにおそわれた。
ヒコザルがあらわれてルクシオを追いはらった。
ヒコザルのトレーナーはコウキというムカつくやつだった。
ナナカマドはかせに怒られたけどナエトルをもらった。
ヒカリと初めて¥ポケモンバトルをした。楽しかった！

はかせにお礼をするためヒカリと伝説のポケモンをつかまえにいった。
でもヒカリがきぜつした！水色の逆立った髪をしたおっちゃんに助けてもらった。
目がさめたヒカリと話していたらシンジ湖から光るなにかが出てきた。
つかまえようと思ったらモンスターボールがないことに気づいた。
オレはあわててはかせにボールをもらいにいった。

なんだってんだよー！「はかせ！モンスターボール30こくれ！！」と言ったら怒られた。
スーパーボールやハイパーボールじゃないんだから少しくらいくれたっていーじゃん。
しかたないからフレンドリィショップでボールを5こ買った。

気分てんかんに２１９番道路に行った。生まれて初めて海を見た。
せっかくだからダディからもらったボロのつりざおでつりをした。
魚がつれたと思ったらカモメみたいなポケモンにとられた。
ムカついたから追いかけてゲットした。
それにしても人間ってやればできるんだな～。
カモメを追いかけてたらいつのまにか海の上を走っていた。
誰だよ。人間が水の上走れないって言ったの。フツーに走れるじゃん。
ナエトルはすなはまで昼寝をしていた。

ナエトルといっしょにいるのがうれしくてコトブキシティまで来ちまったぜ！
トレーナーのナオトに勝負をいどんだ。
勝ったらトレーナーズスクールまで案内してくれた。
カモメのポケモンの名前はキャモメだと知った。
ここでポケモンのきそをおそわった。今夜はここでとまるか！』

『４／４　月

テストで４０点取った。なんだってんだよー！
ナオトたちと話していたらヒカリとコウキが来た。
ヒカリとマグゴナルゴで昼飯を食おうとしたらコウキにとられた。

なんだってんだよー！やっぱあいつムカつく！男と女の前じゃたいどちがうじゃん！
勉強していたら昨日バトルしたナオトに話しかけられた。
ヒカリがコウキのガールフレンドかどうか聞かれた。あいつらが付き合うわけねーだろ！
コウキの悪口を言ったらチサとケンカになった。

まわりのやつらにコウキとヒカリがおにあいカップルと言われて不安になった。
オレはあわててトレーナーズスクールを出た。

ナオトに教えられたとおりコトブキスカイビルの３８階に行った。
ヒカリを見つけられなかったからかたっぱしから店に『はっぱカッター』で攻撃した。
いろんな人が怒ってオレを追いかけた。なんだってんだよー！
３階まで下りたらやっとヒカリとコウキを見つけた。
ヒカリににあうのはダイヤモンドかパールか言い争っていたらケーサツに見つかった。
たいほされそうになったけどヒカリとコウキがかばってくれた。
罰金１０００万円はコウキにはらってもらった。カリを作っちまったぜ……。

コウキといっしょに交番でハンサムという国さいケーサツにジジョーチャーシューされた。
そのあと市役所でトレーナーカードをもらった。
コウキにポケモンのジョータイイジョーと特製について教えてもらった。
コウキから借りた金でマキシマム仮面のマスクを買った！ヤッター！

町の大きいテレビでなぜかヒカリが出ていた。
叫び声が聞こえたからテレビコトブキのまわりを探した。
ヒカリがヘンタイにおそわれていた。
オレはマキシマム仮面に変身した。
サワムラープレスでヘンタイをやっつけた。
今日はヒカリを守れたぜ！
でもハンサムにヘンタイとまちがわれてタイホされそうになった。
なんだってんだよー！』

『4／5　火

朝一にトレーナーズスクールを出た。
クロガネゲートを通った。クロガネシティに着いた。
ジムリーダーのヒョウタと戦った！
ナエトルとキャモメのおかげでなんとか勝った！
ヒョウタがたんこうに出かけたことを教えるためにヒカリを待った。
ヒカリにたん生日プレゼントをもらった。キーホルダーだった。
ヤッター！オレ一生大切にするぜ！なくさないようにバッグにつけた。

たんこうへヒカリとジム戦をしてくれるようにヒョウタにたのんだ。
はくぶつかんに行ったらヒカリがきぜつしたと聞いた。
医む室に行ったらヒカリとアキラがいた。
アキラは3年前よりかっこよくなっていた。ちっきしょー！

民宿くろがねでとまった。夜はなぜかさわがしかった。』

『4／6　水

いつものように6時に起きた。
どこに行けばわからなかったけどコトブキシティに行った。
赤いMが目印のマグゴナルゴで昼飯を食べることにした。
だけどきずぐすりやモンスターボールを買ったせいでお金が足りなかった。
オレはハンバーガーとフライドポテトとコーラを持って逃げた。
ヤッベー……。オレ食い逃げ（万引き?）しちまったぜ！
あとでコウキにマグゴナルゴへ１０００円きふさせよう。

冒険ノートを忘れたからクロガネシティに戻った。
クロガネゲートでコウキと会った。
いきなり走りだしたから民宿くろがねまで競争した。
競争のせいでつぼとふすまを壊しちまった。
今夜は遅いからまた民宿くろがねにとまることになった。

ナエトルといっしょに温泉に入った。
温泉から出たらコウキと会った。
起きたらなぜかサウナにいた。
ヒカリのさけび声が聞こえたから温泉に行った。
男湯と女湯のさくがこわれていた。
コウキが倒れていた。
女湯のほうにアキラとヒカリがいた。
２人はタオルをまいていた。アキラは女だった！！
なんだってんだよー！オカマだと思ったぜ！
コウキがオレに罪をきせた。なんだってんだよー！
アキラのフローゼルとヒカリのポッチャマがコウキにおしおきをした。
ハンサムまであらわれた。ヒカリが投げたおけで気ぜつした。
つぼとふすまとさくはコウキがべんしょうした。』

『４／７　木

早起きしたけど民宿の人たちのほうが早かった。
何時に起きてんだろ？オレも負けられねーぜ！
２０７番道路でポニータが出るというからゲットした！
砂の坂を登ろうとしたけど登れなかった。
おっかしいな～。このまえは水の上を走れたのに……。
ヒカリと会ったけどすぐ別れた。

２０４番道路を通った。
ソノオタウンにはジムがなかった。
うちゅう人みたいなかっこうをしているやつらを見かけた。
最近はああいうかっこうがはやってんのか？
２０５番道路に行った。
川があったから水の上を走れるかどうかためした。
ずぶぬれになった。おっかしいな～。
このまえは走れたのに。怒らないとダメなのか？

ハクタイの森の前にある家にとまらせてもらった。
とめてくれた女の人は親切だった。』

『４／８　金

ハクタイの森へ行った。いろんなポケモンが出てきてコーフンした。
何匹かゲットしたけどいっしょに旅したくなるようなポケモンはいなかった。
１日中歩いたけど出口が見えない。暗くなったから野宿した。
寝袋を木につるしていも虫ごっこをした。野宿もわるくないな！
ヒカリは大丈夫かな？あいつ方向オンチだからな……。』

ジュンの冒険ノート2（前書き）

更新が遅れてすみません。大学で『ガラスの仮面』を読んでいました。
１８巻まで読み終わりました。『ガラスの仮面』熱いです・・・！
読んでいて思いましたが恋愛小説って恋しないと書けませんね。

ジュンの冒険ノート2

『4／9　土

昼にハクタイシティに着いた。長い道のりだった。
ポケモン像がすごかった。自転車屋は閉まっていた。
ジムに行ったけどジムリーダーがいなかった。
ハクタイの森に行ったらジムリーダーのナタネがいた。
困ってたみたいだから手伝うことにした。

森のようかんはオンボロだった。
2階でゴーストポケモンにイタズラされた。
ダイニングルームでしばかりき、せんたくき、電子レンジ、れいぞうこ、せんぷうきにおそわれた。
全て1ぴきのポケモンのせいだった。
ナタネとオレにはナエトルしか残っていなかった。ピーンチ！
でもナタネのおかげでそのポケモンをつかまえられた。
おもしろいからそのポケモンを手持ちにくわえることにした。

ようかんを出たらヒカリとナタネの友だちに会った。
ヒカリとモミはギンガ団を探していた。
オニドリルとムックルとコリンクとヤミカラスが現れた。
ヒカリの持っていたタマゴからヤミカラスが生まれた。
ヒカリは生まれたばかりのヤミカラスと旅をすることにした。

ポケモンセンターでケガの手当てをしてもらった。
ほうたいでグルグルまきにしてもらった。
ミイラやとうめい人間みたいでかっこいいぜ！
ヒカリのポッチャマがめずらしく泣いていた。
あいつにもかわいいとこあんだな。

かわいいといえばヒカリがかわいいことに気づいた。
今までそう思ったことなかったな。妹のようなもんだし。
今日はとくべつにポケモンセンターにとめてもらった。』

『４／１０　日

ヒカリにポケモン像を見せた！
シンジ湖で助けてくれたおっちゃんに会った！
ヒカリが追いかけたけど見失った。ドンマイ！

ヒカリはしゅぎょうしにいった。
オレはジム戦をしにいった。
ナタネは戦ってないのにバッジをくれた。
昨夜オレの実力を見たからいいだって。
ラッキー！これでダディにまた一歩近づいたぜ！

ポケモンセンターでかーちゃんにほうこくした。
オレの服を送ってもらった。
同じ服を１０着持っていてよかったぜ！
かーちゃんは休学とどけを出したと言っていた。
旅が終わったら小６から始まると言っていた。
なんだってんだよー！聞いてねーよ！
トレーナーは学校行かなくてもよかったんじゃないのか！？

センターから出たらまたヒカリと会った。
ムックルとコリンクが進化していた。
ムクバードは強そうだったけどルクシオが弱そうだった。
でもルクシオかわいかったぜ！
ヒカリといっしょにまたセンターに入った。

昨日つかまえたポケモンはロトムという名前だった。
ヒカリにロトムのすごさをじまんした。
コウキにロトムのじょうほうを送ってもらった。
ロトムがへやをメチャクチャにしたからセンターを追い出された。
なんだってんだよー！ちゃんとそうじしたじゃん！
ナタネの家にとめてもらうことにした。
ヒカリにロトムのじょうほうとコウキの電話番号を教えてもらった。
またコウキから金をかりることにした。』

『４／１１　月
ヒマだったから町をブラブラした。
今日も自転車屋は閉まっていた。
近くにいた人が店長がギンガ団にゆうかいされたと言った。
自転車屋を助けにギンガハクタイビルへのりこんだ！
「自転車屋はどこだーー？！」と叫んだ。
そしたらギンガ団にとらまれた。
ロトムがとつぜんボールから出てきた。
左ななめに飛んで隠しとびらを見つけた。
電子レンジとせんぷうきとれいぞうことせんたくきとしばかりきが置いてあった。
ロトムはしばかりきのモーターの中に入った。
ギンガ団が追ってきた。ロトムカットフォルムに乗って逃げた。

ビルの中を逃げ回っていたらヒカリと会った。
インとサツというしたっぱとバトルした。
ヒカリが『ナイトヘッド』をくらって気ぜつした。
ゴースをやっつけようとしたけどロトムもやられた。
よくもヒカリを！よくもロトムを！今度会ったらボコボコにしてやる！
謎の男があらわれて助けてくれた。オレよりイケメンだった。

アキラよりもかっこいいだなんて反そくだぜ……！

ポニータに乗って4階に行った。
ギンガ団コンブのジュピターとバトルした。
ポニータとキャモメがやられた。
やばいじょうきょうだったけどナエトルが進化した！
ジュピターのスカタンクをやっつけた！
ジュピターははらいせにズバットにヒカリをおそわせた。
でもさっきのイケメンのポケモンのおかげで助かった。
ジュピターがけむり玉をつかって逃げた。
ハンサムとイケメンはジュピターを追っていなくなった。
オレはヒカリをかかえて病いんに行った。
ヒカリが目ざめない。今もベッドでねむったままだ。
オレのせいだ……。』

『4／12　火

いつのまにかねむっていた。
手をにぎったまま寝ちまった。
オレのかたにもうふがかかっていた。
ヒカリはまだねむっている。
ヒカリのうでにチューブがつけられた。

病いんの人に家ぞくにれんらくしたほうがいいと言われた。
おこられるのがこわくて電話番号を知らないふりをした。
そのかわりコウキに電話した。
はかせに電話したかったけど番号を知らなかったから。

オレが気をつけていればヒカリは攻撃されなかったのに。
もっと強ければヒカリを守れたのに。

なにも食べる気になれない。
ずっとヒカリのそばにいたらかんごふさんに怒られた。
ポケモンたちがおなかをすかせていたことに気づかなかった。
ポケモンフードを買いに行った。ヒカリのポケモンにもあげた。
かんごふさんにパンと水をもらった。
おこられたくなかったから食べた。

夕方にコウキが来た。なぐられた。
なんだってんだよ……。
しっかりしろと言われた。
コウキにポケモンバトルを申し込まれた。
公園でダブルバトルをした。
オレはハヤシガメ（ナエトル）とキャモメでたたかった。
コウキはピッピとモウカザルでたたかった。
手こずったけどギリギリ勝った。

コウキはオレがコウキをこえたと言っていた。
追いこされたけどすぐ追いつくからもっと強くなれと言われた。
コウキはバトルが苦手らしい。
強くなるためコウキもジムを回ることにした。
あとくさいから歯をみがいてフロに入れと言われた。
くさいはよけいだ。くやしいけどコウキの言われたとおりにした。
コウキの予約したホテルでとまった。』

『４／１３　水

今日もヒカリは目ざめなかった。
なにもしないで待っているのは時間のムダだ。
オレは今回だけコウキにヒカリをまかせた。
自転車屋に助けてもらったお礼に自転車をもらった。

２０６番道ろでサイクリングしてるやつらと戦った。
サイクリンロードの下にある草むらで野生ポケモンと戦った。
待っていろよ、ヒカリ。オレは強くなって見せる……！』

『４／１４　木

『迷いのどうくつ』でしゅぎょうすることにした。
ここはかがみと石とコウモリと石ヘビしか出てこない。
地図を書きながら進んでるけどどうくつはどこまでも続く。
今夜は野宿だな。出られそうにねー。
ナエトルは進化したけどキャモメとポニータも進化するのかな？
コウキはロトムは進化しないって言ってた。ちぇっ。』

『４／１５　金

『迷いのどうくつ』は広い。
こりゃ今日も野宿だな。』

『４／１６　土

今日は出口にたどりついた。
ヒカリのために作った『迷いのどうくつ』の地図も完成した。
サイクリングロードの入り口でヒカリに会った。
ヒカリが元気になってうれしかった。
ギンガハクタイビルのことを思い出した。
ヒカリを助けられなかった自分がなさけなかった。
泣きそうになった。
ヒカリに地図をわたして別れた。

モミとナタネが追いかけてきた。

ナタネに「とまりにこない？」とさそわれたけどことわった。
ポケモンセンターで休んだあとハクタイシティを出た。
テンガン山のどうくつを通った。ふしぎな場所だった。
２０８番どうろの木の実じいさんの家にとまった。』

『４／１７　日

木の実じいさんの家を出た。
じいさんから木の実をなんこかもらった。
たびに出てわかったけどよのなか親切な人が多いな。
ヨスガシティに行こうとしたらいいにおいがした。
おうど色の木にハチミツがぬられていた。
おいしそうだったからハヤシガメといっしょになめた。

ハチミツをなめていたら大きなカブトムシがあらわれた。
かっこいいからなかまにすることにした。
カブトムシは強い。ハヤシガメがひさしぶりにやられた。
キャモメとロトムのおかげでゲットできた。

ヨスガシティに着いた。オシャレな町だった。
店とマンションがたくさんある。
あちこち見て回った。コンテスト会場や大せいどうがあった。
ふれあい広場でハヤシガメとさんぽをした。
ポケモン大好きクラブにとめてもらった。』

『４／１８　月

２０８番どうろでポケモンのレベルを上げた。
午後にヨスガジムに行った。
ジムリーダーはるすだった。

しかたなくまた２０８番どうろで野生ポケモンと戦った。

ヨスガシティにもどったらテレビでヒカリが出ていた。
ヒカリのかーちゃんってコーディネーターだったのか！？
しかもヒカリがコンテストに出る？？なんだってんだよー！

町の人もその話ばっかりしていた。
ヒカリもすっかりユーメイ人だな。
こうしちゃいられねー。ヒカリが出るコンテストを見に行くぞ！』

ジュンの冒険ノート2（後書き）

少年の旅は続く・・・！

ヒカリの日記　4月　18日　（月）

『4月　18日　月曜日

今朝は1台のトラックによって起こされた。トラックが運んできたのはサヤカお嬢さまが注文した大量の服と備品。おかげで午前中私とナポレオンはサヤカお嬢さまの着せ替え人形にされちゃった。色んな服装・髪型・バッグ・アクセサリーのコーディネイトを試されて写真を撮られたわ。う～ん……。私当分お洋服もアクセサリーも買いたくない……。お店にも行きたくないわ……。ハンナさん（メイドブルー）のおかげで着せ替えタイムは終わった。ありがとう、ハンナさん……！

午後はアキラにヨスガシティを案内してもらった。通りすがりの女子高生たちにアキラは男の子と勘違いされちゃった。だってアキラかっこよすぎるもん（笑）。何気なく高級ブティックを見たらシロナさんのポスターが貼ってあった。びっくり仰天してたら本人が現れてさらにびっくり！！しかも両腕にショッパーをいくつもぶらさげてポケモンにまで荷物を持たせていたの！！なにそれーー！？心臓が止まると思ったわ！アキラも私もシロナさんにからかわれちゃった。完全にシロナさんのペース。ただでさえアキラがかっこよくて目立つのにモデル（バイトだけど）のシロナさんまで来たからギャラリーに囲まれちゃった。シロナさんが煙玉を投げてその場は逃れたけどアキラは不機嫌になった。

どこかのマンションの屋上まで避難して話を聞いたら私の心臓はまた止まりそうになった。シロナさんは元チャンピオン。そしてアキラは元チャンピオン。アキラはポケモンリーグで、シロナさんはスズラン大会で優勝してチャンピオンになったの。2人がチャンピ

オンの座をめぐって直接対決したわけじゃないけど微妙な仲みたい。でもよかった。3年前アキラはチャンピオンになるため旅に出てちゃんと夢を叶えたのね！しかもチャンピオンの座を辞退して称号だけもらったんだって。かっこいいー！≧∀≦

　告白タイムが終わったところでコウキくんと合流した。サヤカお嬢さまにシロナさんと振り回されていたからアキラったらコウキくんと約束したこと忘れてたんだって。かわいさコンテストは見逃しちゃったけどコウキくんにコンテスト会場を案内してもらった。アキラを置いてコウキくんと2人で人だかりを見に行った。そしたら人だかりの中心に誰がいたと思う？……私のママよ！！ママはかわいさコンテストの優勝者としてテレビのインタビューを受けていたの！最初は驚いたけどだんだん怒りのほうが強くなってきた。ママはポケモンを持っていたのに私に内緒にしていた。数々のコンテストに優勝したコーディネーターだったのに私には言わなかった。ポケモンを持っているからいつでもフタバタウンを出れたのに外の世界にあこがれる私を連れていかなかった。あまりにも頭にきたからカメラの前でコンテストに出るって宣言しちゃった。……もう！こうなったらなにがなんでもコンテストに出てママに勝ってみせるわ！！』

ヒカリの日記　4月　18日　（月）（後書き）

ヒカリの日記を書くのめんどうくさくなってきました（笑）。
でもまとめとして最適なので引き続き書きます。
読者にとっても作者にとっても思い出すのに役に立ちますしね＾＾

第41話　挑戦　＜前編＞

「クックルー……クックルー……」

野生のムックルの声が聞こえる。太陽の優しい光が地上に降り注ぐ。空は適度に雲があってきれい。花は風に誘われ踊っている。だけど……私の心は真夏の太陽のごとくギラギラしていた。

ここはソノオタウン。咲き誇る花の香りに包まれた花を愛する人々の町。このまえギンガ団が現れたけど今はすっかり平穏を取り戻している。だけどこの平穏な春の昼下がりを私は一瞬とはいえぶち壊してしまった。

私はアキラのルーン（ムクホーク）を借りてソノオタウンまでひとっ飛びした。目的は明確。フラワーショップ『色とりどり』で木の実とコンテストのアクセサリーを交換するため……！

チリーン。

「あら。あなたは……」

「あ！ヒカリさんだー！」

店には店員が2人と客が2人いた。レジにいた店員は以前私にハーブティーをくれた女の人だった。客はライコちゃんとそのお父さん。以前谷間の発電所で私が助けた親子。

ドタドタドタッ。

ドアを開けるなり私はレジまで走り早口で店員にまくしたてた。

「お久しぶりです！いきなりですがすみません！ゴージャスメガネと甘いキャンディと紙吹雪とカラフルパラソルとカラカサとスポットライトとマントとスタンドマイクとサーフボードとカーペットと懐かし土管とふわふわベッドとミラーボールと顔出し看板ください！！」

「……は？」

店員はキョトンとした。私は店員に買い物メモを渡した。続いてテーブルまで行きいくつものアイテムボールの中身を開放した。ズ

リの実とブリーの実とナナの実とセシナの実とパイルの実を１０個づつ。
「まあ！」
モコシの実とゴスの実とラブタの実とノメルの実を５０個づつ。
「えっ」
アイテムボールを１個開けるたびに店員は目を丸くした。しまいには悲鳴まであげた。シーヤの実とカイズの実とドリの実とノワキの実とベリブの実を１００個づつ出したから。いくつかのテーブルに分けて出したけど木の実が多すぎて落ちちゃった。
「きゃあっ！……よ、よくこんなにたくさん集められましたね……」
私はのんびり話をする気分じゃなかった。ただ要件だけを短く伝えた。
「……お願いします」
「は、はい！」

＊＊＊

時は数時間前までさかのぼる。
プルルルル……。プルルルル……。
電話の着信音がうるさい。メイドたちの足音もあちこち聞こえる。私はドタバタしているサヤカお嬢さまのお屋敷で朝ご飯を食べていた。ダイニングルームにいるのに別の場所にある電話の音がよく聞こえる。
ガチャッ。
「もしもし。ごきげんよう。ウラヤマ家のサヤカですわ」
サヤカお嬢さまが電話を取る。これで何件目の電話なんだろう。６時から電話が鳴りっぱなしでうるさいったらありゃしない。
ジリリリリッ！ジリリリリッ！
また別の電話が鳴った。サヤカお嬢さまのかわりにメイド長のクレアさんが取った。

「はい。ウラヤマ家でございます」
この家には何個電話があるんだろう？部屋専用のラインもあるみたいだし……。
リンガディンドン♪リンガディンディンドン♪
有名歌手の着メロが聞こえた。たぶんサヤカお嬢さまのポケギア（トレーナー用のケータイ）だと思う。サヤカお嬢さまは別の電話の相手をしている。メイドピンクのヘレンさんが代わりに出た。
「もしもーし？ウラヤマ家のメイドのヘレンでーす！サヤカお嬢さまの代理で取りましたー♪どちらさまでしょうかー？」
アキラとコウキくんと私はテーブルでのんびりスコーンと紅茶をいただいていた。サヤカお嬢さまにそうしてくださいと言われたから。手伝いたいけどどっちかっていうと私が手伝われている側なのよね。
「……はい。……はい！よろこんできらきらストーンと切り株と綺麗な雫とごつごつストーンをいただきますわ。ありがとうございます！」
「……いえ。キラキラパウダーとピカピカパウダーとパチパチ火花はもう十分ございます。白いアクセサリーはお持ちでございますか？白い花や白い羽がほしいのですが……」
「はーい！モコシの実とゴスの実とラブタの実を５０個以上お願いしまーす♪」
離れた部屋からサヤカお嬢さまとクレアさんとヘレンさんの声が聞こえる。３人とも電話の受け答えで忙しそう。まるでどこかの事務所だわ。彼女たちは私のためにコンテストに必要なアクセサリーと木の実を集めていた。テレビの報道とサヤカお嬢さまの人脈のおかげで道具と材料は集まりつつある。
アキラは紅茶をぐいっと飲んだ。ため息に近い息をふう、と吐くと言葉を口にした。
「悪いが先に失礼する。万が一のためトバリシティヘポフィンを買いに行ってくる。ヒカリを頼んだぞ、コウキ」

そう言ってアキラはお屋敷を出てしまった。コウキくんはスコーンを食べていたので返事をしそこねてしまった。アキラと同じように紅茶を飲むと、コウキくんはメモ帳を取りだした。

「いいですか？コンテストには５つの部門があります。かっこよさ・かわいさ・うつくしさ・かしこさ・たくましさ。さらにコンテストにはランクがあります。ノーマルランク、グレートランク、ウルトラランク、マスターランクです。ノーマルランクはコンテスト経験がないポケモンでも参加できます。グレートランク以降はその前段階のランクで優勝したポケモンしか参加できません」

「うん」

私は意味もなく紅茶をスプーンで混ぜた。朝起きたときからブルーだった。今さらだけどコンテストに出ると言い出したことを後悔していたから。

「ヒカリさんのお母さまはプロなので全ての部門のマスターランク参加できます。お母さまの最も得意な部門はかわいさ。昨日の外国人はメリッサさんと言って美しさ部門では随一の強さを誇ります。たくましさコンテストはミカンさんという方がナンバー１で……。どの部門にしろマスターランクでは強敵が待ち構えています。今回のコンテストで各部門の優勝候補と当たらなければいいのですが……」

コウキくんはページをめくった。私はため息をついた。気を利かせたメイドブルーのハンナさんがオレンジジュースを持ってきてくれた。

「とにかくまずお母さまと同じ土俵に立つ必要があります。部門を１つにしぼってそれでマスターランクまで伸し上がりましょう。ヒカリさんのポケモンを見てどの部門に出るか決めましょうか」

コウキくんのさわやかスマイルが決まった。いつもならドキンとするけどコンテストでそれどころじゃない。私はストローを通してオレンジジュースに息を送った。オレンジ色の液体がブクブク泡立つ。

「ヒ、ヒカリさん……」
心配そうな声で名前を呼ばれた。私はふらりと立ち上がるとそのままコウキくんの胸に飛び込んだ。
「えええええええええええっ！？ヒ、ヒカリさん？どうなさったんですか？……こんなことされたらぼく、ヒカリさんの彼氏として正式に認められたと勘違いしちゃいますよ！？」
「……怖いの」
「え？」
コウキくんが聞き返した。ボソッとつぶやいたから聞こえなかったみたい。
「コンテストで恥かくかも……」
「ヒカリさん……」
コウキくんはゆっくり背中に腕を回した。
「大丈夫ですよ。ぼくが……ぼくたちがついています。コンテストの対策はぼくが立てます。ヒカリさんはバトルと同じように全力で戦えばいいんです」
「うん……」
「あなたを信じているポケモンを信じてください。そしてヒカリさんも自分を信じてください！」
ああ、なんてバカだったんだろう。コウキくんも、アキラも、サヤカお嬢さまも、メイドレンジャーたちも私のためにがんばっている。その私が弱気じゃダメじゃない……！
「うん……！」
「ヒカリさん……！」
至近距離で見つめられた。必ず勝つと決意したばかりなのに頭がクラッとした。だけど良い雰囲気になったところで私たちの元へ向かう足音が聞こえた。
「ヒカリさまーー！ファンの方々から大量の応援の手紙とプレゼントが届きましたわ♪スキャンしましたが危険物はなかったので安心して開けてください。コンテストに役に立つものも入っていると思

うので確認してくださいね！」

部屋に入ってきたのはサヤカお嬢さまだった。メイドグリーンが手紙とプレゼントを乗せた台車を押して来た。サヤカお嬢さまはまた電話が鳴ったので事務室と化した部屋に戻っていった。メイドグリーンも礼をして行ってしまった。メイドグリーンと入れ替わるようにメイドイエローがやってきた。ツインテールと釣り目がきつい印象の女の子だ。メイドレンジャーの中で1番幼く背が低い。メイドイエローは私たちに近づくとにんまり笑った。

「サヤカお嬢さまはヒカリさまのファンクラブを作ったの！会長はもちろんサヤカお嬢さま。コウキは名誉会員にしてあげるだってさ」

メイドイエローはタメ口で話しかけてきた。サヤカお嬢さまやメイドたちがいなかったから誰も彼女を注意しなかった。

「え？……あ、はい。それは光栄です。ありがとうございます」

コウキくんは一瞬あっけに取られたけどすぐ平静さを取り戻した。それにしてもいつのまにファンクラブを……。

イエローは私を抱いたままのコウキくんを観察した。

「ふう～ん……まあまあお似合いのカップルじゃない？でも気をつけたほうがいいわよ、コウキ。今のところサヤカお嬢さまと？ヒカリさまが好きな者同士”仲良くやってるみたいだけど、いつ同盟が崩れるかわからないわ。サヤカお嬢さまはヒカリさまとアキヒコお坊ちゃまがくっつくことを望んでるから。せいぜいがんばることね☆」

イエローはふふん、と笑うとスキップしていなくなった。コウキくんの名前に「さま」をつけ忘れたとわざとらしく言いながら。

第４１話　挑戦　＜中編＞（前書き）

１２月にポケモンＢＷの連載を開始予定！新作の名前は『ブラックホワイト』。ストーリーはポケモン版「ロミオとジュリエット」☆ブログで少しづつイラストと設定をアップします。『長髪の美少女』に負けず劣らず面白い話ですから楽しみにしててくださいね♪

第４１話　挑戦　＜中編＞

……こうしてやる気の出た私はアキラのムクホークに乗ってソノオタウンへ直行した。『色とりどり』で店員がアクセサリーを運ぶ間私はライコちゃんとお話した。

「へえ～。ヒカリさんコンテストに出るんだ～。すご～い！」

私の話を聞いたライコちゃんは目を輝かせていた。ついカッとなってコンテスト出現宣言をしたなんて口が裂けても言えない。

「コンテストはいつなの？きまったらおしえてね！パパと見にいくから！モミさんにもおしえておくね！」

「うん。ありがとう！」

私はライコちゃんに手を振り笑顔で店を出た。再びムクホークに乗った私の次の行き先は２１２番道路のお屋敷。私は進まなければいけない。全てはママに勝つために……！

＊＊＊

私がウラヤマ家のお屋敷に帰ったときアキラはまだ帰ってなかった。ポフィンを買いに行ったにしては遅い。トバリシティではよく男性モデルや男性タレントとしてスカウトされるって言っていたからそれで遅れているのかもしれない。アキラ……女の子なのに……。

「え～……コホン！」

コウキくんの咳でハッとした。庭では私のポケモンがおのおのの場所で待機していた。……今はアキラに同情している場合じゃない。コウキくんは真面目に私の手持ちポケモンのデータを確認している。どのポケモンでコンテストに出るか決めなきゃ！

「それではどのポケモンでどの部門のコンテストに出るか決めまし

ょう！どの部門に出るかはこだわらなくていいと思います。ヒカリさんのポケモンの性格と技を見てどの部門に向いているか判断しましょう」

「うん！」

私たちは手始めに近くにいるポケモンから見ていくことにした。

私は初めてゲットした鳥ポケモンの姿を探して呼んでみた。

「クルルー♪おいでー！」

「クルッ！」

ムクバードのクルル♪は適当な樹の枝にとまっていた。……ヤミカラスのノワールとともに。オスのムクバードにメスのヤミカラス。同じ鳥ポケモン同士惹かれあってもおかしくはない。ただクルル♪が過保護でたまにノワールの戦闘中にボールから出てきて困っている。だから最近はボックスに預けているんだけど……。それにしてもクルル♪、私より先に恋人作るだなんていい根性してるじゃないの。

「カー」

「クルー」

クルル♪はノワールに一礼すると飛んできた。クルル♪がうらやましい半面ざまあみろと思った私はまだまだ子どもかもしれない。

「クルー？」

「クルル♪には私とコウキくんと一緒に審査員になってほしいの。どのポケモンがコンテストに向いてるか決めるのよ！」

「クルッ！」

クルル♪は右翼で敬礼した。あいかわらずノリがいいわ。クルルの敬礼を見てコウキくんが笑った。

「まるで体育会系ですね」

庭ではポケモンたちがバラバラに行動していた。ラミアはなぜか塀のそばで走っていて（這っていて）地面が揺れている。ナポレオン（ポッチャマ）はさっきからやたら私の近くで「ここにいるよ」

アピールをしている。いつのまにか庭に張ってある小さなテントが気になるわ……。

2匹とは対照的にキララ★（ルクシオ）はテーブルの影から私をチラチラ見ている。ランス（ポニータ）は私と目が合うとニッコリ笑い、目をそらした。たぶんキララ★はコンテストに出たいわけじゃない。ただ単に甘えたいだけだと思う。でも迷惑になるかもしれないと遠慮している。たぶん。ランスも照れやだからコンテストには出たがってないみたい。

私の手持ちで幼い2匹はどうしているかというとお昼寝をしていた。ノワールは樹の上で、セニョールは日当たりのいい芝生の上で。ノワールは夜行性だから今眠くてもしかたがない。特性『不眠』で戦闘中は眠らないし今寝たってバチは当たらない。セニョールは……成長期（？）だし。でもいい加減そろそろ進化してくれないかなぁ……。

「ノワールとセニョールは最後にしよっか」

「そうですね」

私とコウキくんはまずやる気まんまんのナポレオンとラミアから審査することにした。

コウキくんはクリップボードにまとめられたデータをめくった。ナポレオンは自分のページを開かれるのを見るとニヤリと笑った。自信満々ね。コウキくんは落ち着いた声で審査を始めた。

「これより、オーディションを始めます。合格するのは1匹のみです。各自、おのおののベストを尽くすこと。張り切りすぎて失敗しないように気をつけてくださいね。それでは第1回、ポケモンコンテストオーディションを始めます！」

「ポチャアアアアアッ！」

「グオオオオオオオオオッ！」

ナポレオンとラミアが吠えた。キララ★とランスは寄り添いあった。ノワールとセニョールは一瞬起きたけどすぐまた寝てしまった。

リアクションが見事にグループごとに分かれたわね。……ってオーディション!?しかも第1回ってことは2回目もあるの?!

「それではまずナポレオンさんから審査します!」

「ポォオッチャアアッ!!」

いきなり「いよっしゃああっ!!」だなんて気合い入ってるわね。威勢のある鳴き声でナポレオンは前へ進……まずにテントの中に潜りこんだ。

「え?」

「あれ?」

私はコウキくんと目を合わせた。テントから鍋とフライパンが崩れ落ちるような音が漏れてくる。しばらくするとナポレオンが甲冑姿で現れた。……キララ★の上に乗って。

「ポッチャ!」

「ぎゃう〜……」

いやあああっ!ナポレオオオオオオオオン!痛い……痛いわ!その格好痛いわーーー!恥ずかしいいいいい!……ってそれよりキララーーーーーーーーーーー★!!やめてええええ!控えめなキララ★を馬替わりにしないでーー!

「え〜……コホン!ナポレオンさん。気合いが入っているのはわかりましたからキララ★さんから降りてください。でないと失格ですよ」

「チャッ」

ナポレオンは舌打ちしてキララ★から降りた。

「あっ。甲冑は脱がなくていいです」

なにそのフォロー?キララ★は泣きながら私の膝の上に乗っかってきた。そのことについてはコウキくんはなにも指摘しなかった。

……ナポレオンがキララ★をにらみつけていたけど。

いつのまにか私たちのうしろにイスが3人分置いてあった。たぶんメイドさんが気をきかせて置いてくれたんだと思う。メイドレンジャーか普通のメイドか知らないけど。コウキくんはイスが最初か

らそこにあって、そこに座るのが当然なように座った。さ、さすが上流階級……。クルル♪と私もコウキくんに続いた。

「いじっぱりなナポレオンさんのこと。コンテストではかっこよさ部門を希望しているんですよね？」

「ポッチャ！ポチャポチャー！」

ナポレオンは生意気に答えた。「そんなの当たり前だろー！」って言ったんだと思う。……あ。初めてナポレオンのセリフが脳内で男口調で変換されたわ！ツンデレだからついいつも女口調で変換しちゃうのよね。

「ナポレオンさん。あなたは見たところレベル25のようですが……」

「ポチャ？」

「現時点で覚えているかっこよさの技が少ないです」

「ポチャッ！？」

ポケモン図鑑の出番が来た。図鑑を開いてナポレオンが覚えている技リストを見るとコウキくんの言う通りだった。

『はたく―たくましさ。

鳴き声―かわいさ。

泡―かわいさ。

水遊び―かわいさ。

つつく―かっこよさ。

バブル光線―美しさ。

乱れ突き―かっこよさ。

波乗り―美しさ。』

技の種類がバラけている。たくましさが1個、かわいさが3個、かっこよさが2個、美しさが2個。かっこよさコンテストで挑むにしてはかっこよさの技が2個しか使えないのは不利だわ。せめて3個は覚えてないと……。

「う～～ん……難しいですね。美しさの技は3個覚えていますが向いていませんね。ナポレオンさんの性格は攻撃的すぎてエレガンス

に欠けています」
「クルッポー」
「ぎゃう～」
クルル♪とキララ★までうなづいた。２匹とも後輩なのに容赦ないわね。
「ボヂャアア？」
ナポレオンが不良みたいに「ああん？」とガンをつけた。たしかに優雅さに欠けてる……。
ポケモンがどの部門のコンテストに向いているかは性格でわかる。性格によって好きな味が決まっていて好きな味ほど能力が上がりやすいから。その反面嫌いな味（別の部門向きのポフィン）だと上がりにくい。ナポレオンはいじっぱりだから辛い味が好きでかっこよさのコンディションが上がりやすい。そのかわりしぶい味が嫌いだから美しさのコンディションが上がりにくい……ってコウキくんが言ってた。念のため私はコウキくんのコンテストのメモを再読した。
一方もう１人の審査員であるコウキくんは頭をかいた。
「ナポレオンさん。申し訳ありません。はっきり言って今のあなたではコンテストに出られません。……本当のことを言うと書類審査の時点で不合格です」
「ポチャーー！？」
ナポレオンは目を丸くして顔をおさえたまま倒れた。自信満々でオーディションに挑んだのにプライドがズタズタだわ！
だけどコウキくんはナポレオンに止めを刺してしまった。
「せめてポッタイシに進化してかっこよさの技『メタルクロー』を覚えていればよかったのですが……」
「ボヂュアアアアアアアアッ！！」
ナポレオンが泡を吹いて倒れた。そんなにショックだったの！？
コウキくんは私と向き合った。
「なんなら今からでも進化させます？……あ。『メタルクロー』を覚えるのはレベル１６でした。手遅れでしたね」

「ボヂュエ～……」
　ナポレオンが奇声を上げた。雨で濡れて汚れて巣から落ちたひな鳥のようになったナポレオンを見て私まで発狂しそうになった。私は半ば土下座のような形でコウキくんにしがみついた。
「やめて！ナポレオンのＰＰ（プライドポイント）はもう０よ！これ以上ナポレオンをキズつけないで！！」
「プライドポイントって……パワーポイントの間違いじゃないですか？」
　このあと精神的に戦闘不能になったナポレオンはメイドピンクの手によってベッドに運ばれた。ナポレオンの面倒はサヤカお嬢さまのポケモン（ハピナス）が見ることになった。オーディションはナポレオンが退場したと同時に再開された。

第４１話　挑戦　＜後編＞

「次！ラミアさん！」
「イワ～～ッ！」
巨大な岩ヘビが体を伸ばして前へ出た。私のイワーク、ラミア。クロガネ炭鉱で暴れていたわんぱくな女の子。いじっぱりのナポレオンとそりが合わないのかたまにケンカをしている。こちらもまた強気でオーディションに挑んできた。ナポレオンの二の舞にならなければいいけど……。
「メスのイワークですか。わんぱくなあなたはたくましさコンテストに向いています。たくましさ部門で行くつもりですか？」
「イワッ！」
ラミアはうなづいた。私はラミアに図鑑を当てた。

『体当たり―たくましさ
泥遊び―かわいさ
硬くなる―たくましさ
しめつける―たくましさ
嫌な音―賢さ
岩落とし―たくましさ
怒り―かっこよさ
岩石封じ―賢さ
地震―たくましさ』

確かにラミアにピッタリだった。外見も性格も覚える技もたくましさにピッタリ。文句なし！たくましさコンテストかぁ……。う～ん……私にあんまり似合わないかも……。
コウキくんをチラリと見た。ラミアとクリップボードを見るコウキくんの表情は真剣そのものだった。いつものさわやかなコウキく

んとは違う。コウキくんは話しかけづらかったからクルル♪に意見を聞いた。
「クルル♪、どう思う？」
「ムクッ！」
正直なクルル♪は翼で親指を立てるようなポーズをした。「ばっちり！」、かぁ……。キララ★（ルクシオ）は私やラミア、クルル♪の顔を交互に見るだけでノーコメントだった。
ところがコウキくんはラミアにあっさりこう告げてしまった。
「能力的に申し分ないですが……ヒカリさんのイメージダウンになるので×（バッ）！」
「ムクバッ！？」
「ぎゃう？」
「グオオオッ！？」
「えええええっ！？」
そ、そんなあっさり！たしかに私もたくましさコンテストは乗り気じゃなかったけど……なにもバッサリ切り捨てなくても！ラミアは最初あっけにとられていた。そうしてだんだん……涙がぽろぽろ、ぽろろろ！
「イワアアアッ！」
「ラ、ラミアーーー！」
ラミアは泣きながら走っていた。だって……だってあのコ！女のコなんだもーん！
気づいたときには手遅れだった。ラミアはすでに塀の外へ出てしまった。これじゃあヒールボールで回収できない。それにキララ★が膝（ひざ）に乗っているから私は動けなかった。
「ク、クルル♪！ラミアを連れ戻して！」
「ク……クルッポー！」
ムクバードはわたわたした。羽ばたいてようやく飛んだときには動きがぎこちなかった。
「カーー！」

黒き翼がムク鳥の起こした風に便乗した。……あっ！ノワールまで行っちゃった！

「もう……。2匹ともフォローよろしくーー！」

クルル♪についてっちゃうだなんてほんと仲良しカップルなんだから。でもノワールのほうが上手くラミアをなぐさめられるかも。なんたって女の子なんだし。陽気なクルル♪に調子を合わせてくれると思う。

「はい。次ー！」

コウキくん……人間の女の子には優しいのに……。ま、まさか私のコンテストのために心を鬼にしているんじゃ……？コウキくんは表情を変えずに次のポケモンを呼んだ。

次と言われても誰も出なかった。もともとキララ★とランスはコンテストに乗り気じゃなかったし、ノワールはさっきいなくなったばかり。セニョールはまだ寝ている。

「え～……ではキララ★さん」

「ぎゃっ！？」

情けない声を出してキララ★は飛び上がった。そのひょうしでキララ★は私の膝から落っこちちゃった。

コウキくんはキララ★を見ないでつぶやいた。

「性格は控(ひか)えめ……ですか。美しさコンテスト向きですね。でも美しさの技は覚えていませんね。技はかっこよさが2個、たくましさが2個、賢さが1個。『吠(ほ)える』を覚えればかっこよさで十分通用しますが性格が不向き……」

ナポレオンより条件が悪い。キララ★は小刻みに震えながら汗をダラダラ流していた。ちょっ……！キララ★！なんて生気(せいき)のない目をしているの？もしかして気絶寸前(きぜつすんぜん)！？

コウキくんは顔を上げるとふと笑った。ナポレオンとラミアのときより優しい目をしている。

「でもまあ技マシンでどうにかなるかもしれませんし……。ヒカリ

さんから聞いたところあなた本当は戦うの好きじゃないんでしょう？……どうですか？ここはバトルではなくコンテスト専門のポケモンになるのは？もしかしてそっちのほうが向いているかもしれませんよ」

私は横からコウキくんのクリップボードを覗いた。ルクシオのレベルアップで覚える技と技マシンで覚える技がリストアップされていた。ルクシオはどっちかっていうとかっこよさコンテスト向けのポケモンだった。覚える美しさの技が少ない。でも『放電』、『フラッシュ』、『誘惑』を覚えれば美しさコンテストで活躍できるかも。

コウキくんは私の考えを読むように続けた。

「別に美しさコンテストじゃなくたっていいんですよ？かわいさでも賢さでもたくましさでもいいです。あなたの外見ならたくましさコンテストに出てもヒカリさんのイメージダウンになりません」

ポケモンを外見で判断してる……。それじゃあラミアがかわいそうじゃない。そうツッコみたかったけどやめた。ポケモンコンテストの起源はもともとポケモンの見栄えをみんなで集まって楽しむものだったから。

「想像してみてください。たくさんの人にあなたの良さを見てもらえるんですよ。悪くないでしょう？」

次々に浴びせられる優しい言葉。だけど肝心のキララ★は……。

「……ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃうっ！」

震えていた。地震の強さを測る震度計より早く激しく震えていた。

「コッ……ココココココリンッ！」

焦ってる……。たくさんの人の前でステージに立った自分を想像して焦ってる……！

コウキくんはようやくキララ★の異変に気づいた。そしてすぐさま的確なアドバイスをした。

「……落ち着いてください。鳴き声がコリンクの頃に戻っています。深呼吸をしてください」

「ぎゃ……ぎゃう！」

青い子ライオンは息を吸っては吐いた。吸って・吐いて・吸って・吐いて。スーハースーハー。そしてキララ★の呼吸の回数はドンドン増えていって……。

「ハァ……ハァ……ハァハァ……！」

「しまった！過呼吸を起こしてしまいました！」

「ええーーっ！？」

過呼吸ってたしか緊張や恐怖で呼吸が荒くなるってやつ？……死にはしないけどこのままじゃキララ★の手足が痺れて目まいがひどくなって気絶しちゃう！

コウキくんはメイドさんに叫んだ。

「誰か！誰か紙袋を持ってきてくださーーい！」

「キララ★ーーーーーー！！」

けっきょくキララ★はハピナスが持ってきた紙袋によって救われ、ナポレオンの隣でおねんねすることになった。……ごめんね、キララ★。オーディションの時点で止めておくべきだったわ……。コウキくんも反省して何度もキララ★に謝った。

＊＊＊

私とコウキくんは途方にくれていた。私たちは庭でイスに座っていた。さっきからずっとうつむいたまま。コンテストに出場するポケモンが決まらないだけでなくポケモンたちを落ち込ませてしまった。残るポケモンはあと2匹。ポニータのランスとスボミーのセニョール。ノワールはまだ帰ってこない。クルル♪と一緒に今もラミアをなぐさめているのかしら？

「あとでナポレオンとラミアに謝ります。ぼくとしたことか、ポケモンを冷静に見るあまり思いやりを忘れていました」

「うん……」

私はランスとアポロンと追いかけっこするセニョールを見た。庭

には私たちしかいなかった。メイドさんもいない。コウキくんはなんとなく寂しいという理由でモウカザルのアポロンをボールから出した。コウキくんのピッピ、アルテミスはハピナスの手伝いをしにいった。

「……」

ランスは照れやだ。得意な部門がないかわりに不得意な部門もない。真面目なセニョールも同じ。頑張りやのノワールもそうだ。なんでも食べるから特定のコンディションが上がりやすくなることはない。上がりにくいコンディションもない。だからどの味のポフィンをあげてもそのコンディションは公平に上がる。辛いのをあげればかっこよさが、甘いのをあげればかわいさが、苦いのをあげれば賢さが、酸っぱいのをあげればたくましさのコンディションが、そのポフィンのレベルだけ上がる。

ランスに美しさコンテストに出てもらおうかと考えたけどやめた。照れやだからキララ★みたいに気絶したら困るもの。ノワールは奪われたタマゴのことで不安定だし……。コウキくんがモウカザルかピッピを貸しましょうかと提案してくれたけど断った。自分のポケモンで出ないと意味がないと思ったから。

「……」

「ヒカリさん……？」

私は立ち上がった。こうなったらダメ元でセニョールに頼むわ。セニョールがダメだったらナポレオンかラミアでコンテストに出よう。サヤカお嬢さまもアキラもコウキくんもこんなに私のために色々してくれたんだもの。コンテストを楽しみにしているファンのためにもあきらめるわけにはいかない。

「セニョール」

「ミー？」

おにぎりみたいな形をした蕾（つぼみ）ポケモンは止まった。ランスを追いかけるのをやめて私のところへ来てくれた。他の手持ちポケモンに比べて幼かったから事情を説明することにした。

「あのね……私のママが私に内緒でポケモンを持っていたの。私は小さいときから外の世界にあこがれていてずっと町の外にでることを夢見ていたのよ」
「スボ？」
いきなりこんな話をしたからセニョールはきょとんとした。でも最初から話さないとわからないもの。
「ポケモンを持っていない人間は外の世界に出られない。ママはポケモンを持っていたから外の世界に行けたのにわたしをつれていってくれなかったの。だから怒ってポケモンコンテストでママに勝つって言っちゃった」
私はセニョールをなでた。セニョールは黙って私の話を聞いていた。細めだからイマイチ表情を読み取れない。
「セニョール……私と一緒にコンテストに出てくれる？」
静かだった。風も吹いていなかった。コウキくんとアポロンの緊張が私に伝わる。ランスは落ち着いて私とセニョールを見守っていた。
「スッボミー！」
めずらしくセニョールの顔がキリッとなった。予想外だった。いつもはしゃいでいるセニョールとは違う。
「いいの！？」
「ミー！」
空気が変わったのを見越してコウキくんがやってきた。
「草ポケモンは賢さの技を多く覚えます。賢さコンテストでエントリーしましょう」
「コウキくん！」
「ウキッ！」
「ヒヒーン！」
私は図鑑を手に取った。『吸い取る』『痺れ粉』『メガドレイン』『宿り木の種』……まさに賢さのオンパレード。やる気が出てきた。
「セニョール！絶対に勝つわよ！」

「ミーーー！」

門からラミアとクルル♪とノワールが帰ってくるのを見えた。よ
うやくスタートラインに立てたわ！

第４１話　挑戦　＜後編＞（後書き）

ホワイトをプレイする時間は全くありませんが『ブラックホワイト』の妄想は順調です。昨日女主人公がＮの服をひっぺはがすところまで進みました！（爆）

登場ポケモン紹介（前書き）

今日は色々あったので小説の更新はなしです。すみません＞＜

登場ポケモン紹介

＜ヒカリのポケモン＞

―ポチャチャポチャ、ポッチャマ！（ヒカリはボクちゃまの女だ！）ナポレオン（ポッチャマ♂）

　ヒカリの最初のポケモンになったペンギンポケモン。プライドが高くいじっぱり。血の気が多くヒカリが命令するまえに攻撃することもしばしば。ヒカリのことが好きで好きでしかたがないけど素直に甘えられないツンデレ。ヒカリが大好きなのでヒカリに近づく男（ジュン、コウキなど）は大嫌い。ポケモンなのに自分も立派なヒカリの彼氏候補だと思い込んでいる。ヒカリの名前を呼ぶときは呼び捨て。一人称は「ボクちゃま」。

―コリィ～～～ン……（優しそうなトレーナーだなぁ……）。キララ★（コリンク♀→ルクシオ）

　２０１番道路からヒカリについてきていた控えめの閃光ポケモン。物音に敏感で些細な音でびっくりする。ヒカリにすりすりしたくて勢いよく走ったら『体当たり』をしようとしていると勘違いされナポレオンの『はたく』を喰らった。甘えるのが下手でバトルも好きじゃないけどヒカリのためにがんばる。自分に自信ないためたれ目になっている。ヒカリを呼び捨てにしている。一人称は「わたし」。

―ミーーー！（がんばるですー！）セニョール（スボミー♂）

　小さいけれどとっても真面目なつぼみポケモン。食べるのが大好き。人助けが好きで誰かの役に立つことが好き。でも無意識に迷惑をかけていることも……。本人に悪気はないがナポレオン（ポッチャマ）のＨＰを吸ったことがあるためナポレオンに警戒されている。

ラミア（イワーク）もセニョールが苦手らしい。ヒカリを「ヒカリさん」と呼ぶ。一人称は「セニョール」。

―グオオオオオオオオ！（あたいがクロガネ炭鉱のラミアだよ！）

ラミア（イワーク♀）

わんぱくな岩蛇ポケモン。気が強い。元クロガネ炭鉱の女番長。姉御肌で場を仕切りたがるためナポレオンと衝突することもしばしば。でもナポレオンとタイプの相性が悪いのでいつも負ける。クルル♪（ムックル→ムクバード）から「ラミア姉貴」と呼ばれている。ヒカリのことを「姐（あね）さん」と呼ぶ。

―ヒヒヒヒン、ヒッヒーン（あなたとなら、どこまでも）。

ランス（ポニータ♀）

ヒカリに見初められ、クルル♪（ムックル）によってスカウトされた火の馬ポケモン。照れ屋で辛抱強い。大人っぽく落ち着いているけど褒められるとすぐ照れるかわいいところもある。基本おとなしいけど自分の意見をはっきり主張する。ヒカリを背中に乗せるのが好き。ヒカリに仕えることを誇りに思っているメイドさん。ヒカリのことを「お嬢さま」と呼ぶ。一人称は「わたくし」。

―カーカーカーッ！（アタシだって負けないんだから！）

ノワール（ヤミカラス♀）

まだ幼い暗闇ポケモン。ハクタイの森で助けたヤミカラスのタマゴから生まれた。頑張りやで粘り強い。よく食べる。ギンガ団に奪われたタマゴ（弟か妹か不明）を取り返すためヒカリについてきた。新入りだけど活躍が多い。同じ鳥ポケモンのクルル♪（ムクバード）のお世話になっている。クルル♪と仲が良すぎて最近戦闘に支障が出てきた。一人称は「アタシ」。

＜控えメンバー＞

―クルルックルッ、クルッポー！（さすがナポレオン先輩ッス！）
クルル♪（ムックル↓ムクバード♂）
　ヒカリが3番目に手に入れたむく鳥ポケモン。誰とでも仲良くなれる陽気な性格で少しお調子者。体育会系みたいに半分真面目で半分軽い性格。普通にヒカリになついている。ナポレオンを大先輩と敬い尊敬している。ヒカリの他の手持ちと仲が良い。ランス（ポニータ）をスカウトしたのも彼。ノワール（ヤミカラス）に対して過保護。ヒカリを「ヒカリお嬢さん」と呼んでいる。一人称は「自分」。言葉の語尾に「ッス」がつく。

―ビーーーップ！（がんばるでやんす！）
ビッパー（ビッパ♂）
　ヒカリが2番目にゲットした頑張りやな丸ねずみポケモン。数合わせのため発電所まで手持ちに入れていた。全体的に能力が低く戦闘向けではない。3度瀕死にさせたことでヒカリが罪悪感を覚え母の元へ預けられた。現在他のポケモンと一緒にフタバタウンの子どもたちに面倒を見られながら元気に暮らしている。

＜ジュンのポケモン＞

ナエトル♂
ポニータ♂
ロトム
キャモメ♂
ヘラクロス♂

＜コウキのポケモン＞

アポロン（ヒコザル♂）
アルテミス（ピッピ♀）
タマゴ（トゲピー）

＜アキラのポケモン＞

アマツキ（ヒコザル♂）
フローロ（フローゼル♀）
ルーン（ムクホーク♀）

登場ポケモン紹介（後書き）

絵や他のポケモンのプロフィールは少しづつ公開します。

（特別編）　４１．５話　黒髪の紳士２（前書き）

みなさまごきげんよう。コウキ・テンジョウインです。久しぶりにボク視点の話になります。ジュン視点が多いのにボク視点のが少ないのは不公平ですからね。

（特別編）　41．5話　黒髪の紳士2

―彼女のためならボクはなんでもする。

ヒカリさんの出場するコンテストの部門とポケモンが決まった。賢さコンテストにスボミーで参加。部門とポケモンを決めれば対策を立てるのは早い。ボクは買ったばかりのポケギアで彼女に電話をかけた。

２０分後。ヒカリさんを庭に連れて来るべき人を待った。ボクが呼んだ人物は母親とともにヘリコプターに乗ってやってきた。

「ヒカリさんこんにちは！お兄ちゃんもひさしぶり」

「アキコちゃん！？」

「ポチャッ！？」

ヒカリさんとナポレオン（ポッチャマ）は目を丸くした。ボクに似ていない茶髪の妹はヒカリさんに抱きついた。兄らしくにこやかに見守ったけど正直うらやましい。ボクは妹のように無邪気にヒカリさんに抱きつけないから。母さんは口を手で押さえながら笑った。左右に分かれた巻き毛がチャーミングだ。

「久しぶり、コウキ。そして初めまして、ヒカリちゃん。あなたのことはコウキとアキコから聞いたわ」

「えっ！コウキくんのお母さま！？……な、なぜここに？」

「お兄ちゃんからコンテストの助っ人たのまれたのー♪」

「す、助っ人？」

ボクはコホンと咳払い（せきばら）をした。

「ポケモンスーパーコンテストは３つの審査で決まります。まず１次審査のビジュアル。２次審査のダンス。そして３次審査の演技。アキコにはダンスの指導を頼もうかと……」

アキコはコンテストが好きだ。テレビでしょっちゅうコンテスト

を見ている。自分もいつかコーディネーターになってコンテストに出ると息巻いているくらいだ。アキコの知識はきっとヒカリさんの役に立つだろう。

アキコはうっとりしながらヒカリさんを見た。

「それにしても知らなかったわ。ヒカリさんがアカリさんの娘だっただなんて！フタバタウン出身ってとこで気づくべきだったわ」

アキコはようやくヒカリさんから離れた。次の瞬間見せたのはボクも見たことのないような飛びっきりの笑顔。

「ヒカリさん安心して！アキコがぜ～ったい勝たせてあげる♪」

「う、うん。ありがとう」

ヒカリさんは少し戸惑っていた。アカリさんの名前が出てきたからかもしれない。

門を見たらアキラ姉さんがなにかを抱えて来るのが見えた。

「それではボクはアキラ姉さんたちとポフィンハウスに行ってきます。１次審査のビジュアルに必要ですからね」

＊＊＊

こうしてボクはアキコさんにヒカリさんを託し、リムジンに乗った。出かける前にアキラ姉さんがめずらしくヒカリさんと揉めていた。気になったけど訊かなかった。そのかわり元気づけようと「行ってきます」のキスを（ほっぺに）したらアキラ姉さんに殴られた。いいじゃないですか。ちょっとくらい。だけどアキラ姉さん以外にボクの求愛行動を―批判している人物がいた。

「ＹＯＵ～、抜け駆けはやめてくれないかい？」

ただでさえ細い目をさらに細めて文句を言ったのはアキヒコさんだ。サヤカさんの兄、つまりウラヤマ家の長男。高そうな服にジェルで決めた髪型は見るからにお坊ちゃんだ。サヤカさんとおそろいの紫の髪をなでながらアキヒコはボクを睨みつけた。

「ヒカリさんにまだ挨拶すらしていないあなたがなにを言うんです

か？」

……正直この男は気に入らない。これからポフィンを作るというのに白いスーツを着るだなんてなにを考えているんだろう。

「Ｍ－ＭＥはただどの服を着るか迷っていただけだ！」

「それって2日も迷うことですか？」

ボクもヒカリさんをコンテスト会場に案内する日はどの服を着るか迷った。だけど2日も迷うだなんて馬鹿げている。どうせいつも部屋に引き籠もっているからどんな服着ればいいかわからなかったんだろう。

「だいたいあなたいつも自室に引き籠もってなにをしているんですか？エロ本でも読んでるんじゃないですか？」

「はあっ！？ＥＸＣＵＳＥ　ＭＥ！エロ本じゃない！ヌードデッサンの本だ！僕の趣味が絵を描くことだって君もわかっているだろう！ＤＯ　ＹＯＵ　ＵＮＤＥＲＳＴＡＮＤ？」

ボクはため息を抑えられなかった。そう。この話し方。まるで自分が英語を話せることを自慢しているようなエセ英語も気に入らない。ハリウッド映画が好きで好きな文学もアメリカ文学ときた。フランスの芸術と文学を愛するボクとはそりが合わない。

「ＹＯＵこそエロ本でも読んでいるんじゃないか？フランスかぶれの英国紳士くん。なんたってフランス人はＰＥＲＶＥＲＴ（ヘンタイ）だからな」

「はあ？黙ってくれませんかこの成金アメリカン。数年前に金持ちになったからって調子に乗らないでください」

豪華な車内に似合わない険悪なムードになった。ああ、気に入らない。なんでボクはこんな奴に敬語なんて使わなければならないんだろう？たかが2、3歳年上という理由だけで。女性ならともかくこんな男性に敬語で話さなければならないんだなんて面倒だ。

「キキ～……」

「ピ～……」

アポロン（モウカザル）とアルテミス（ピッピ）がボクたちから

遠ざかった。いくら普通の車より大きいとはいえリムジンは狭いのに。関わりたくないんだ。別に関わらなくてもいい。ポケモンには関係ない話なんですから。

パコン！パコン！

頭になにかヒットした。顔を上げたらアキヒコさんがボクと同じように痛そうに頭を押さえていた。アキラ姉さんは紙束をポンポン、と手に打ちつけていた。

「これからポフィンを作るのにケンカなんてするんじゃない」

……仕方ない。ここは一時休戦としますか……。

＞ｉ１３８１２―６９９＜

＊＊＊

パティスリーみたいなかわいいポフィンハウスは今日は貸し切り。ここにいるのはボクとアキラ姉さんとサヤカさんとアキヒコさんだけ。ボクたちはポッドみたいな鍋が置いてあるテーブルを囲むように座った。４人がそろったのを見るとアキラ姉さんは立ち上がった。

「いいか？これから私たちが作るのはポケモンのコンディションと毛づやを上げるポフィンだ。ヒカリのスボミーがビジュアル審査で高い評価を得るためにがんばるぞ！」

アキラ姉さんが見せたのは苦い味が濃いポフィンのレシピだ。使う木の実はドリの実とザロクの実とパンジの実とナナの実。レシピは１人づつ配られた。

ポフィンを作るのは難しい。まず最初は潰した木の実を鍋に入れてこぼさないようにゆっくり混ぜる。木の実がドロドロになったら強火にしてこがさないように素早く混ぜる必要がある。木の実の状態によって時計回りに混ぜたり逆回りにしなければいけないから大変だ。どっちの方向へ混ぜるかは機械が教えてくれる。１人では作れないのでチームワークが求められる。

「それでは健闘を祈る！」
　ボクたちはそれぞれ持っていた木の実をブレンダーに入れた。アキラ姉さんは辛さと甘さと苦さを合わせ持つ赤いザロクの実を。アキヒコは緑色に黄色い線が入ったパンジの実を。サヤカさんはバナナの形をした甘くて苦いナナの実を。ボクは見るからに苦そうな緑色のゴツゴツしたドリの実を入れた。
　４個の木の実は潰（つぶ）されさらさらの液体になった。アキラ姉さんは液体をそのまま鍋に移した。コンロのスイッチの横の液晶画面がついた。コンロにはタイマー機能がついているだけでなく混ぜる方向も教えてくれる。タイマーがカウントダウンを始めた。３、２、１、スタート！
「最初は時計周りだ！」
　ボクは左側から円を描くようにして延べ棒で混ぜた。３本の延べ棒がポッドの中を泳ぐ。
「次、逆回り！そのまま逆！」
　アキラ姉さんは的確な指示を出した。このグループのリーダーを務めているアキラ姉さんとして責任は重大だ。だけどボクはやけにアキヒコさんとぶつかる。腕と腕、延べ棒と延べ棒、延べ棒と腕……。最初は気にならなかったけど回数を重ねるたびにイラッとした。
「どこ見て混ぜてるんですか？気をつけてくださいよ」
「りょ、料理はｆｉｒｓｔ（ファースト）　ｔｉｍｅ（タイム）なんだ。大目に見てくれ」
「そんなんじゃヒカリさんに紅茶を入れることもできませんよ」
　そう話している間にまたアキヒコさんとぶつかった。また文句を言おうとしたらアキラ姉さんの指示が割ってきた。
「おまえら混ぜるのが早すぎる！こぼれたぞ！」
　ボクたちは指示に従って混ぜるスピードを落とした。それでもときどきボクたちはぶつかった。ふいにアキヒコさんはなにか思いついたように鼻で笑った。
「Ｍａｉｄ（メイド）たちが入れてくれるからいいさ。テンジョウイン家と違ってウラヤマ家はメイドを雇う金をケチらないからね。君の家がボ

クの家より小さいのも節約のためだろう？守銭奴だね～」
「はあ？ボクたちはただ無駄遣いしないだけですよ。あなたのようになんでもメイドに任せてなにもできない人間になんてなりたくありませんし」
「年上に向かってそのｍｏｕｔｈ（口）はなんだ？このむっつりスケベ」
「引き籠もりなんですから少しは態度をわきまえたらどうです？」
「ケンカはやめろ！木の実がドロドロになったぞ！こげないようにちゃんと混ぜろ！」
　ボクはアキヒコさんと睨み合ったまま同じ方向に腕を回し続けた。ああ言えばこう言う。どうすれば相手を奮起不能なほどに言い負かすことができるか？言葉にできない怒りが胸の中で作りかけのポフィンのように煮え立っていた。
「おい！今は時計回りだぞ！左から混ぜろ！……サヤカお嬢さまも早く！」
「あの～……延べ棒はフォークを持つ手で握るのでしょうか？それともナイフを持つ手ですか？」
「サヤカお嬢さまあああああああああああああああっ！！」

　調理を初めて1分後……。
　出来上がったのはＬｖ．１の真っ黒ポフィンだった。アキラ姉さんは頭痛薬と胃薬を取りだして飲んだ。なにも知らないサヤカさんは嬉しそうに手を叩いた。
「まあ！わたくし黒いポフィンなんて初めて見ますわ♪アキラが買ったポフィンの中にこんな色のポフィンはなかったのだけれどこれはめずらしいものなのでしょうか？」
　無邪気な言葉がグサッと刺さった。ああ、なんて幸せな世間知らずのお嬢さま……。こげくさい匂いをものともせずそんなことを言うだなんて……。
「え～、あの……これはですね、残念ながら完全に失敗作です。従

来のポフィンより小さいですしこげた匂いしかしません。食べても苦いだけでだからといって賢さのコンディションが上がるわけでもありません」

生まれたての黒いポフィンはかわいそうだけどゴミ箱に行くしかない。生まれたときからそう運命づけられていたのだから。

「YOU（ユー）が僕にケンカを売ってきたからだろう？」

失敗したのは自分のせいでもあるのにアキヒコさんはさも全てボクのせいかのように話した。

「もとはといえばあなたがボクにぶつかってきたからでしょう？」

「MY（マイ）延べ棒の先に君の腕や延べ棒があったのが悪い」

「そこは年上らしく手加減してくださいよ。……この真っ黒ポフィン、責任とってあなたが食べたらどうですか？」

「とんでもない。むしろ君のモウカザルにあげたほうがいい。どうせケチな君のことだ。普段からロクなものを食べさせていないんだろう？」

ボクはポフィンハウスのすみっこにいたアポロンを見た。アポロンは両手と首を振って拒否していた。隣りにいるアルテミスもとんでもないとばかりに顔をしかめていた。

「なんてことを言うんです？むしろあなたのハピナスに食べさせたらどうですか？」

「あの～……」

ここで前へ出たのは以外にもサヤカさんだった。

「お兄さまのハピナスはわたくしのハピナスでもあるんですけれど……できればお兄さまのポッタイシに差し上げてください」

「おいっ！」

アキヒコは思わずサヤカさんにツッコミを入れた。こんな金持ち漫才、めったに見られない。

「おまえらいい加減にしろーーーーーーーーっ！！」

ついにアキラ姉さんの堪忍袋（かんにんぶくろ）の緒が切れた。気がつけばアキラ姉さんの手はボクの後頭部に回され、ボクのおでこはアキヒコさんの

おでこと激突した。
「「〜〜〜っ！」」
舌を噛みそうなスピードでおでこをぶつけられたボクたちは床に膝をついた。……痛い。いっそのことお腹を殴ってもらったほうがマシだった。ボクが人工的な頭痛に苦しんでいる間にアキラ姉さんはポケギア（旧式）をダイヤルした。
「もしもし？……私だ。至急ヨスガシティのポフィンハウスまで来てくれ！」

＊＊＊

「好きな色はブルー！ハンナです！」
「イメージカラーはグリーン！ソフィですわ」
「ラッキーカラーはイエロー！カレーが好きなエミリでーす☆」
「ピンクが好きで好きでたまらない！あたしが４人目でございます！」
「シンボルカラーはレッド！クレアだ！」
「「「「「護衛戦隊！メイドレンジャー、参上！！」」」」」
キュッピーン☆
赤毛のメイドを中心に最後に決めポーズ。変なメイド５人衆がドアを突き破りそうな勢いでポフィンハウスに現れた。
「えっ？」
マヌケな声が出てしまった。相手を知っているだけにどう反応すればいいかわからない。赤の他人なら無視できたのに……。ボクは驚きを共有すべくアキラ姉さんたちを見たがボク以外の人間はごく当然のようにメイドレンジャーを受け入れていた。ボクと同じ感想を抱いてくれたのはアポロンとアルテミスだけだったようだ。
アキラ姉さんはメイドレンジャー相手にレシピ片手に説明しだした。
「ここに苦い味のまろやかポフィンの作り方が書いてある。ドリの

実とザロクの実とバンジの実とナナの実を使って作ってくれ！」
「「「「「ラジャー！」」」」」
メイドレンジャーたちの行動は早い。あらかじめ席が決まっていたかのように着席しポフィン作りを始めてしまった。アキラ姉さんは立ったままメイドレンジャーたちに指示を出していた。
サヤカさんとアキヒコさんは空いたテーブルに座り談笑した。やることがなくなってしまったボクはどうしたものかと立ち尽くした。3次審査の演技の対策でも考えようと荷物を取りに行ったらメイドイエローのエミリが待ち伏せしていた。
「ハァイ♪元気ぃ？」
歯を見せてに～っと笑うエミリ。まるでなにかをたくらむ子どものようだ。
「どう？あれから進展あった？」
「いいえ」
エミリを素通りしてボクはスボミーのデータを取り上げた。知り合いを無視するほどボクは冷たくない。
「ええ～？つまんな～い。……っていうかダンスの指導チャンスだったじゃん？妹に任せなければ2人っきりになれたのに」
「コンテストは遊びじゃないんですよ。本気じゃないと勝てないんです。ヒカリさんを口説くのは別の機会にします」
「真面目ね～」
エミリは腕を組んで背中を向けた。……と思ったら振り向いてボクに耳打ちした。
「無理やりチューしてファーストキッス奪っちゃえば？」
甘い悪魔のささやき。彼女の顔は小悪魔そのものだった。
「……そんなことしたらヒカリさんがコンテストに集中できなくなります。それに雰囲気作りは大事です。それがファーストキスだったらなおさらです」
金髪の小悪魔はさっと離れた。
「ちょっとしたアドバイスよ。うかうかしてるとライバルに取られ

ちゃうわよ」
「慎重に行くのも大事です」
ボクはアポロンをなでた。これ以上話が続かないと判断したエミリは包装されたポロックに手をつけた。アキラ姉さんが失敗したときようにトバリデパートで買ったＬｖ．３２のポフィンだ。エミリは１個６４００円するポフィンでお手玉を始めてしまった。
ポフィンを作るテーブルからアキラ姉さんの弾んだ声が聞こえてきた。
「よし！まろやかポフィンＬｖ．７１ができたぞ！よくやった！この調子だ！」
「「「はい！」」」
ポフィン作りは順調なようだ。ボクは演技の対策を考えたがエミリの言った言葉が頭から離れない。
『うかうかしてるとライバルに取られちゃうわよ』
アキヒコさんは敵じゃない。ボクにとって１番脅威（きょうい）なライバルはジュンだった。ヒカリさんと同じ町で１１年も育った幸運な少年……。
「これは一筋縄（ひとすじなわ）ではいきませんね」
幼馴染である彼が恋愛で凶と出るか吉と出るかわからない。ただ怖ろしいのはヒカリさんの心の中を占めるジュンのスペースが大きいこと。
「先に屋敷に戻ります」
彼も今ヨスガシティにいるのだろうか？会わないことを願おう。
もう少しヒカリさんのそばにいたいから。

（特別編）　４１．５話　黒髪の紳士２（後書き）

メイドレンジャー、その場限りの登場の予定でしたが意外と出番多いです（笑）。けっこう使い勝手良いですね＾＾

ヒカリの日記　4月19日（月）～20日（金）

『4月19日　火曜日

朝起きたあと私は自分が昨日したことの重大さに気づいた。コンテストへの参加宣言。プロのコーディネーターのママに素人の私が勝てるはずがない。負けたことを想像したら怖くなった。

「アカリさんの娘なのに弱い」

「バトルは得意だけどコンテストは下手だった」

「期待してたのに残念」

そんなこと言われたらどうしよう。悪いことばっかり考えていた。サヤカお嬢さまたちはコンテストの準備を進めていた。今さら取り消すことなんてできない。落ち込んでいたらコウキくんがはげましてくれた。コンテストの対策はコウキくんが立ててくれる。私はただバトルと同じように全力を出せばいいって。テレビの前でママを倒すって言ったことを後悔しても遅い。自分の言ったことを取り消せないなら全力でコンテストに挑むわ！

やる気を出した私はアキラのムクホークに乗ってソノオタウンへ飛んだ。フラワーショップ『色とりどり』でコンテストのアクセサリーを買い占めた……というか木の実と交換した。ライコちゃんにコンテストのことを伝えておいた。モミさんにも教えるって言ってたけど私からも電話で連絡しようかな。ナタネさんにもコンテスト出ること言いたいし。

午後はコンテストのオーディション。コウキくんと2人でコンテストにふさわしいポケモンを審査した。でもコウキくんの辛口発言でポケモンたちは次々にダウン。ナポレオンはプライドを砕かれるし、ラミアは乙女心を傷つけられるし、キララ★は緊張のあまり過剰（かじょう）

呼吸に。おかげでオーディションはいったん中止。コンテストの部門もポケモンも決められず途方にくれた。

ランスは照れやだからダメ。ノワールは兄弟のタマゴを取り戻すことでコンテストまで頭が回りそうにない。ダメ元でセニョールに頼んだら以外にもOKを出してくれた。私はコウキくんのアドバイスに従って賢さコンテストに出ることにした。

今日の残りの時間は2次審査の練習に使った。ダンスを指導してくれたのはコウキくんの妹、アキコちゃん！ヘリコプターでキレイなお母さまと華麗に登場。アキコちゃんは母親似、コウキくんは父親似なのね。アキラの亡くなったお父さんと兄妹なんだって。

アキラといえばコウキくんたちがポフィンハウスに行く前にちょっとケンカしちゃった。アキラがたまたまヨスガシティに行ったらママと会ったの。ママから私のドレスを預かってきたけど「いらない」って言ったら怒られた。ドレスに罪はないって。ママがコーディネーターだったことを黙っていたのはなにか理由があるはずだって。私がコンテストでなにを着るかは自由だから自分で決めろと言われた。私、アキラと初めてケンカしちゃった……。ママはどうしてポケモンを持っていることを……ママがコーディーネーターであることを黙っていたんだろう？

私とアキコちゃんがダンスの練習をしている間アキコちゃんのお母さまはウラヤマ夫妻とおしゃべりをしていた。メイドレンジャーが突然デコレートされたオープンカーに乗って出ていったけどあれはなんだったのかしら……？しばらくしたらコウキくんだけポフィンハウスから帰ってきた。コウキくんは私たちのすぐ横でノートパソコンを使っていた。たぶん3次審査の演技の対策をしてたんだと思う。アキラがウラヤマ兄妹とメイドレンジャーたちと帰ってきた

ときゲッソリしていた。アキラに謝るタイミングを見逃しちゃった。』

『４月２０日　水曜日

朝食の前にアキラに謝った。ママの連絡先を知っていたから朝食後に電話した。私はコンテストにエントリーするためコンテスト会場へ向かった。アキラとコウキくんを連れて。ママは私が言った通り会場に来ていた。私は深呼吸をしてママに宣戦布告（せんせんふこく）をした。

「ママ！私、賢さコンテストに出るわ。４日後の賢さコンテストのマスターランクにエントリーして！」

ママはニッコリ笑った。

「わかったわ。待ってるわね」

帰ったあとはコンテストの特訓。昨日メイドレンジャーたちが作ったポフィンをセニョールに食べさせた。ポフィンの出来はバッチリ！セニョールがいつもより輝いてみえたわ！ダンスが苦手だから今日もトレーニングをした。３時におやつを食べたあとは演技のためコウキくんと技の練習をした。

コンテストは４日連続で出場することとした。明日はノーマルランク。明後日はグレートランク。明々後日はウルトラランク。そしてその翌日にママの出るマスターランク。本来はグレートランク以降はまだエントリーできないけど特別にエントリーさせてもらった。マスコミも注目してるからがんばってくださいと受け付けのお姉さんに言われた。のしかかるプレッシャー……上等じゃない。負けてたまるもんか！』

ヒカリの日記　4月19日（月）～20日（金）（後書き）

第４２話＜前編＞は・・・来週でしょうか？明日はポケモンセンターに行くので；；

第４２話　女の戦い　＜前編＞（前書き）

賢さコンテスト、ついに開幕！

第４２話　女の戦い　＜前編＞

赤いリボンはイチゴ。白いレースは生クリーム。ピンク色のドレスはラズベリーのゼリー。切り口から見えるのは黄色いスポンジ、じゃなくて私の肌の色。リボンとレースで飾り付けられたドレスを着た私はまるでベリーケーキ。頭についた大きなピンク色のリボンはイチゴチョコ？気分はお菓子の国のお姫さま。

でも私がいるのはキッチンじゃない。ここは広くて豪華な化粧室。私が着ているのはママが買ってくれたドレス。ピンクが女の子ということを強調してひたすらかわいらしい。いかにもママらしいセンス。いつまでたっても子ども扱い。でもくやしいけど似合ってる。しかもけっこう私の好み。

「これで完璧ですわ！」

正面には私の唇に口紅を塗り終えたサヤカお嬢さまがいる。メイクはメイドピンクが担当してくれた。でも最後の仕上げ―口紅を塗る作業―はサヤカお嬢さまがやると言って聞かなかった。

「ヒカリ。かわいいぞ」

優しいアキラの声が横から聞こえた。私は小さくお礼を言うと鏡を見た。ほっぺたが赤く見えるのは、きっとチークのせいだけじゃない。私……緊張している。時間が経つほど胸のドキドキが強くなる。ジム戦のバトルとも、恋のトキメキとも違う緊張感。これがコンテスト……！

「あなたもこれでバッチリよ、ナポレオン！」

「ポチャ！」

ナポレオンのおめかしも終わった。ナポレオンのおめかしはアキコちゃんが担当してくれた。青いペンギンポケモンは黒いタキシードを着ている。ズボンは動きにくいから履いていない。その姿はまさにポケモンお坊ちゃま。

「ナポレオンたちはコウキが預かるからな。観客席で見守っている

ぞ」

コンテスト中はコンテストに出場するポケモン以外は連れていけない。

「ミー♪」

お肌つやつやのセニョールが膝に乗っかってきた。メイドブルーのハンナさんに水拭きされてご機嫌だ。ナポレオンはくやしそうにセニョールを見ていたけどプイッと横を向いた。素直じゃないんだから。

私はステージにいる間ずっとセニョール（スボミー）と一緒にいることになる。ナポレオンとキララ★（ルクシオ）とラミア（イワーク）はコウキくんが預かることになっている。クルル♪とノワール（ヤミカラス）はサヤカお嬢さまが預かってくれる。あの2匹を引き離すとクルル♪に文句を言われるから。

コンコン。

ノックが聞こえた。私に勇気をくれた男の子がドアを開けた。

「失礼。お嬢さまがた、準備はできましたか？」

私は深くうなずいた。そしてリボンを結ぶようにコウキくんの差し伸べる手を取った。

「行きましょう。お姫さま。舞踏会へ」

夢の世界のはじまりはじまり。

＊＊＊

ラッパとドラムが交互に音楽を奏でる。なめらかなフルートの音（ね）がコスモスのように咲いた。木琴もときおりその存在を主張する。まるでアサガオとユリとドングリの妖精が鳥と歌っているみたい。ドラムの焦らすような叩き方は正直やめてほしい。私の胸までつられてドキドキしちゃうから。

揺れていたスポットライトが審査員で止まった。始まるわ……！

「みなさ～～ん！こ～んに～ちは～！！」

ウェーブがかかった髪のキレイなお姉さんがしゃべった。まるでアイドルみたい。

「お待たせしました～！ポケモンスーパーコンテスト、賢さ部門！ノーマルランクで開幕で～～す！今日の司会はこのわたし、ミミィが務めさせてもらいま～す♪」

会場が盛り上がった。このミミィっていう人、ママやサヤカお嬢さまとは違う天然さを持っている。ぶりっこみたいだけどたぶんこれがミミィさんの素。演技じゃない。

「出場される方はこの４名！最近噂のアカリさんの娘、ヒカリさんも出場していま～す！」

スポットライトで私と他の出場者が照らされた。だけど観客の目は私に注目していた。ただでさえテレビの放送で注目が浴びせられたのにミミィさんの発言でますます目立っちゃった。

＞ｉ１４３４９―６９９＜

「ミー！ミー！」

足元にいたセニョールが私に飛びついてきた。なに言ってるかわからないけどはげましている。私は目をつぶってセニョールをぎゅ～～っと抱いた。セニョールの安定した心臓の音が聞こえてくる。

トクントクントクン。

……ああ、生きてる。私も。セニョールも。人間も、ポケモンも、生きてる。緊張の中それを実感する。生きてるから怖がったり喜んだりできるんだ。

『感ジル？』

そのとき不思議なことが起きた。暗闇の中、光が次々と灯った。数多くある光の中私は知っている光をいくつか見つけた。いくつかのグループに分かれて固まっている光。目を開けていないのにその光が誰であるかわかった。

「コウキくん……？」

真ん中の前の席にコウキくん、アキラ、サヤカお嬢さま、アキヒコさん、メイドレンジャー。
右の席にナタネさんとモミさん。その2人からそう離れてない場所にライコちゃんとそのお父さん。
そして1人だけ左の後ろのはじっこのほうにある光。
「ジュン……」
来てくれたんだ。忙しくて、どこにいるかわからなくて、連絡する手段がなかったのに、来てくれた。うれしい……！
夢見心地だった私を起こしたのはミミィさんの声だった。
「ちなみにわたしはアカリさんの親友で～す♪……あ、だからといって贔屓(ひいき)はしませんのでみなさん安心してくださ～い！」
言わなくてもいいこと言ったわ！……ちょっと！さっき一瞬出場者と一部の観客から殺意を感じたんだけど！
「ではまずは一次審査から。ポケモンをオシャレにドレスアップ！ビジュアル審査です！４名の出場者はこれからテーマに合ったアクセサリーをこの場でつけていただきます！」
私は受け付けで説明された通りドレスアップルームに入った。ドアを閉めてもスピーカーからミミィさんの声が聞こえてくる。
「今回のテーマは『色つきのもの』！！制限時間は６０秒です！それでは競技スタート♪」

第４２話　女の戦い　＜前編＞（後書き）

大学を卒業するため本気で勉強を始めます。小説の更新が少なくなりますがみなさん覚悟してください。

第４２話　女の戦い　＜中編＞（前書き）

なるべく更新するよう努力します。コンテスト編が終わったらしばらく休載します。

第４２話　女の戦い　＜中編＞

おどけたピエロのような音楽が流れた。ノーマルランクでつけられるアクセサリーは5個まで。さ～て、どれにしようかしら?私はコウキくんからもらったハート型のアクセサリーケースを開いた。中にはアクセサリーが入ったカプセルがギッシリ入っている。

「自然のもの」「作られたもの」「形のないもの」などテーマ別に分けてあるから選ぶのはカンタン。でも大事なのは見た目のバランス。どんなにステキなアクセサリーでもふさわしくない場所につけたら美しくないもの。

私はテキパキとアクセサリーを選んだ。ファッションセンスには自信がある。ただいつも選ぶのに時間がかかった。でも大丈夫。アクセサリーのつけかたはサヤカお嬢さまから習った。ほら。残り時間があと２０秒もある!

「ミー♪」

セニョールも喜んでいる。早くステージに出たくてウズウズしてる。私は最後に見た目をチェックしたあと終了のボタンを押した。準備完了!セニョールのお色直しは制限時間の１５秒前に終わった。

終了の音楽が鳴り終わり、ミミィさんの声が会場に広がった。アクセサリーをつけている間審査員たちがなにか話していたけどよく聞こえなかった。

「制限時間終了ーーー!!それでは賢く「色つきのもの」で着飾ったポケモンたちの姿を見せてもらいましょう!」

最初に現れたのは山男のズバットだった。黄色い貝の欠けらや赤いパチパチ火花で着飾ったズバットはまるで洞窟を照らしているみたいだった。客席で軽く会場が盛り上がる。

「続いてエントリーＮｏ．２。ポケモンファンクラブ会員Ｎｏ．２５のピカチュウさん!」

色とりどりの花をつけたピカチュウが会場に咲いた。青・赤・オレンジ・黄色・ピンクの花は個別に見ればキレイだけど全体から見ると変だった。まばらな拍手が客席で起こった。

3番目に出たのはパラソルお姉さんのメノクラゲ。不思議な炎やメラメラ炎などメノクラゲと同じ青色と赤色が目立つ。だけど緑のうろこなどほかの色もちゃんとさりげなく身につけさせている。ズバットとピカチュウより拍手と歓声が聞こえた。手強そう……！

「最後にお楽しみのエントリーＮｏ．４。期待の新人トレーナー、ヒカリさんのスボミーです！」

わざわざ私を持ちあげなくてもいいのに……。私はため息をこらえた。

セニョールにスポットライトが当たる。そこには甘いキャンディとフラッグを左右に持ち、サーフボードに乗ったセニョールがいた。紙吹雪をまとい、たなびくハチマキを頭に巻いたセニョールは運動会に挑む幼稚園児そのもの。カラフルに仕上げたけどみんなの評価はどうかしら？ハデすぎだったかなぁ……？

＞ｉ１４６５８―６９９＜

「ヒューヒュー♪いいぞいいぞ！」

口笛と拍手に混じって賛美の言葉が飛び交った。

「キャーー！！センセーショナル！」

「かわいい～！」

「ヒカリさん！やはりあなたは素敵です！」

私はそっと汗をぬぐった。……よかった。好評みたい。コウキくんもうっとりしていた。前の出場者以上に客席が盛り上がっている。審査員のミミィさんとビッグさんとサスケさんも感心した様子だった。

カーテンが閉まるなか、ミミィさんは拳を振り上げた。

「みなさ～～ん！ビジュアル審査、いかがでしたか～～？今審査員による採点が行われていますが、得点数は最後にまとめて発表します！」

司会のミミィさんはそう言ったけど私が1番なのは明らか。他の出場者は苦々しそうに私を見た。……正直そんな目で見ないでほしい。私にはどうしても勝たなければならない理由があるんだから。

私たちはスタッフに言われたとおりの配置についた。次は2次審査のダンス。私が最も苦手とするジャンル……。出場者たちに動揺を悟られないよう、控えめに深呼吸をした。

＊＊＊

「それでは2次審査のダンスを始めます！出場する4匹のポケモンのうち1匹がメインダンサーとなり、残りの3匹にはバックダンサーを務めてもらいます。バックダンサーのポケモンはメインダンサーの踊りを上手く真似してくださいね♪メインダンサーは真似されにくいステップで踊ってください！全てのポケモンが必ず1回メインダンサーを務めます！それではエントリーＮｏ．1のズバットからメインダンサーになってもらいます！」

ズバットがステージの中心へ進んだ。エントリーＮｏ．2～4の私たちは後ろでスタンバイ。ポケモンたちはアクセサリーをつけたままダンスと技を披露することになっている。アクセサリーはコンテストが終わるまで外せない。

短い前奏のあと、おちゃらけた感じの曲が流れ出た。山男はカスタネットをかまえた。2次審査ではポケモンが曲に合わせてステップを3回踏んでダンスすることを求められる。ステップは前・後ろ・右・左の4種類。同じステップを踏んでもＯＫ。どのステップをどのタイミングで踏むかはトレーナーがカスタネットで指示をする。

人によってカスタネットの使い方は違う。上手い人は出す音を使い分けてステップの方向まで伝えちゃう。私はそんな器用なことできないからステップのタイミングを教えるだけ。あとはセニョールにアドリブで踊ってもらうことになっている。だって私、はずかし

いけど音痴なのよ。もし音楽で成績をつけるとしたら1だと思う。良くても2かしら……？

「……っ！？」

余計なことを考えていたら最初のステップの合図を出し損ねた。しまった……！私は気を引き締めた。2番目と3番目のステップのタイミングをカスタネットで伝える。ステージでタッタッタッ、タカタカタカとカスタネットが鳴る。人によってカスタネットの音は微妙に違う。

幸いセニョールは私の合図なしでも上手く踊っていた。私にしか聞こえないくらいの声で鼻歌まで歌っている。3番目のポケモンが踊るころにはフラッグを振り回していた。ズバット、ピカチュウ、メノクラゲが踊り終わった。ついにセニョールの番が来た。

セニョールはサーフボードを蹴って前へ躍り出た。観客からおおっとどよめきが聞こえたけど私は内心ヒヤヒヤ。私はそのあともセニョールの予想外の行動に冷や汗をかくことになる。

……カッ……。……。……カカッ！

私は慎重にカスタネットで合図をした。ダンスはポケモン1匹につき5拍子3回セットで終わる。1、2、3で左へスライド！1、2、3、4、5。1、2、3、4は前へ！5は右にジャンプ！なるべく踏みにくいタイミングでステップを指示した。

「ミッ・ミッミッ・ミー♪」

……だけどセニョールったら！真面目なのか天然なのか客席にいる人たちを楽しませようとサービス精神旺盛だった。常に体でリズムを取りながら揺れているしステップを踏むたびに表情を変えた。甘いキャンディを振り回すわ、フラッグを上げ下げするわ、しまいには最後のステップでは回転ジャンプまでした。私はセニョールが指示以外のことをするたびに気が気でなかった。

でもセニョールのアドリブはプラスに働いた。あわててステップを間違えたり、セニョールのように持っているアクセサリーを動かしたらステップを踏み忘れたり、回転ジャンプを真似しようとして

つまづいたりした。
「おお～っと！ヒカリさんのスボミー！ダンスに見事なアレンジを加えて高評価！観客も盛り上がっています！」
今までダンスでここまで盛り上がったことあるのかしら？参考に見たビデオではこんなことなかった。セニョールは望み通りお客さまを楽しませられてピョンピョン飛んでいた。
「ミー！ミー！」
突如セニョールが光った。最初は『フラッシュ』の技を放ったのかと思ったけど違った。セニョールの体がぐんと伸び、頭の上にあった赤と青のツボミが左右に伸び花開いた。一頭身から二投身へ。ツボミから花へ。頭に3本の刺を生やし、美しい2色の薔薇を両手にすました顔でたたずんでいたのは……！？
「茨（イバラ）ポケモンのロゼリア！」
コウキくんのおどろいた声がセニョールの新しい姿の名前を教えてくれた。これがコトブキシティでコウキくんが話していたロゼリア……！
「まあ！みなさんご覧になられましたか？たった今、美しい薔薇が咲く瞬間を私たちはこの目で捉えることができました！なんて幸運なんでしょう！みなさん！改めてヒカリさんのスボミー……いえ。ロゼリアに盛大な拍手を！」
客席が拍手に呑まれた。これまで客席を眺める機会がなかったからみんなの反応をじっくり見てみた。
コウキくんは感動のあまり涙を流していた。ハンカチで顔を拭きながらなにか叫んでいるけど拍手と歓声で聞こえない。アキコちゃんはキララ★と手を取っていた。ナポレオンは「ふ、ふん！やるじゃないの……」という顔をしていた。サヤカお嬢さまは興奮してアキラの肩を揺さぶっている。ナタネさんとモミさんは抱き合って喜んでいた。ジュンはゴリラのように踊っていた。
気になって振り向いたら他の出場者とポケモンたちも拍手をしていた。皮肉とかじゃなくて本心から祝福しているようだった。私は

進化したセニョールと向き合った。
「……この調子なら勝てるかも」
「ロゼー！」
甘い香りが私を包んだ。癒しの効果を持つ『アロマテラピー』だ。
私はコンテストにも自信がつくのを感じた。

第４２話　女の戦い　＜中編＞（後書き）

大学を卒業したらＫａｒｙｕさんの『ポケットモンスター　メディスター』と重樹さんの『ポケットモンスター　ミュウ　ａ　ｃｏｍｐｌｅｔｅｌｙ　ａｄｖｅｎｔｕｒｅ』を読みたいです。実はまだ読んでないんです……（Ｔ＿Ｔ）

ヒカリの日記　4月21日（木）～23日（土）

―知性の花、開く。
＞i14959―699＜

『4月　21日　木曜日

今日は初めてのコンテスト。ママがくれたピンクのドレスを着て賢さ部門のノーマルランクに挑んだ。周囲の視線とプレッシャーに耐えていざ挑戦！けっこう精神的に辛かったわ……。

一次審査はビジュアル。セニョールのコンディションと毛並み（？）はメイドレンジャーのポロックのおかげですでにMAX。あとは私のファッションセンスにかかっている。『色つきのもの』だったから甘いキャンディ・フラッグ・サーフボード・紙吹雪・たなびくハチマキで着飾った。

二次審査はダンス。私のカスタネットの合図はイマイチだったけどセニョールのおかげでノーミス。私たちが踊る番になったときセニョールのアドリブでヒヤヒヤしちゃった。でもセニョールのサービス精神のおかげでお客さんの心をつかめたわ！しかもそれだけでなくダンスを終えたあとロゼリアに進化したの！私すっごくうれしかった！

三次審査は演技。3人いる審査員の中から1人を選んでその人のために演技をする種目。他の参加者と審査員が被ったらもらえるポイントは減点。演技回数は計4回。1ターン目の演技する順番はダンスが高かった人が最初になる。1ターン目は私がトップバッターだった。2ターン目以降は演技のアピールとポイントによって変わ

る。私は『吸い取る』『痺れ粉』『宿り木の種』『草結び』のコンボで勝ったわ！その夜は軽くお祝いしたあと明日のコンテストの練習をした。』

『４月　２２日　金曜日

今日はグレートランクに挑戦！上はアイボリーの姫袖トップ。下は後ろが赤い白レースつきの黒のスカート。赤いリボンを頭につけ、網タイツを履いてステージに立った。

ビジュアルのテーマは『形のないもの』だった。つけられるアクセサリーは１０個。青い羽を２枚さした絹のベールを頭につけてモコモコ煙を３つくっつけて神秘さを演出。巫女っぽくするために大きいウロコを扇っぽく持たせた。キラキラパウダーとピカピカパウダーをふりかけて仕上げをした。

ダンスの音楽は前と違うものだった。前回同様明るい系だったけど。セニョールはステップを３回間違えた。私の合図が遅れることもあった。やっぱりダンスは苦手だわ……。

技は前回と被るといけないので『メガドレイン』『草笛』『宿り木の種』『草結び』を使った。今夜はお祝いをしなかった。明日もやらないつもり。特訓で忙しいから。今夜はダンスを重点的に鍛えた。』

『４月　２３日　土曜日

３番目の関門はウルトラランク！ビジュアルのテーマは『自然のもの』。アクセサリーは１５個までＯＫ。でも正直６０秒でそんなに多くつけられない。小さい葉っぱを口にくわえて左手に大きい葉

っぱ。右手に細い葉っぱや羽を2、3枚くっつけた。切り株は台にしてきのこやお花、綿毛を散りばめた。バックには大きな木を置いて……ってなにがなんだかわからなくなってきたわ！ビジュアルも難しくなった！一瞬でアクセサリーを選んで素早くつけなきゃいけないんだもの！＞＜

ダンスの音楽はドラマチックでどこかメラコニーを感じた。ステップを5回間違えた。だんだん音楽のテンポについていけなくなってきた。……私の力不足だわ。ちゃんと練習したのに……。もっと練習しなきゃ！

演技は『メガドレイン』『毒毒』『秘密の力』『身代り』のコンボで勝った。ビジュアルの審査で点数を稼いだおかげでなんとか勝てた。今夜は全ての審査をおさらいした。』

ヒカリの日記　4月21日（木）～23日（土）（後書き）

『ブラックホワイト』で『長髪の美少女』のメインキャラが名前だけですが登場しました。3年後ヒカリたちがどうなったか知りたい人は要チェック！

（番外編）　ヒカリ争奪戦（前書き）

この話ではキャラがたくさん出てくるので人気投票の参考にしてください（笑）。

（番外編）　ヒカリ争奪戦

＞ｉ２７４３６―６９９＜

２人の少女がにらみ合っていた。両方とも不機嫌で歯をむき出しにしている。

「む～～～～！」

「ん～～～～！」

たまりにたまった怒りをおさえきれずついに２人は爆発した。

「「ヒカリお姉ちゃんはわたさない！！」」

＊＊＊

これはヒカリの最初のコンテストのあとに起こった出来事だった。ヨスガシティで出会ってはいけない２人が出会ってしまった。中央通りで向かい合う２つのグループ。片方はミル、ナタネ、モミのグループ。もう片方はアキコ、アキラ、コウキ、のグループ。アキコのグループは大聖堂を出たあとポケモンセンターに向かう途中ミルのグループとばったり会ったのだ。

もともと２つのグループの仲が悪かったわけではない。２つのグループで知り合いだったのはナタネとアキラだけだったのだから。ナタネとアキラのあいさつをきっかけに２つのグループは会話を始めた。

「アキラじゃない！ひさしぶり！」

「ナタネか。ひさしぶりだな」
「ヒカリから聞いたんだけど女の子って本当？」
「おまえも男だと勘違いしていたのか！？」

アキラをよく知らないモミとミルはおどろいて口を開けた。初対面のモミとミルの反応をよそにクスクス笑うアキコとコウキ。アキラは後ろにいる従兄妹（いとこ）をにらんだ。従兄妹は笑うのをやめたがアキラが前を向くと再び笑ってしまった。

「だって1、2回しか会ってないんだもの。初めて会ったのはあたしとヒョウタさんのジムリーダー認定試験のときだっけ？……ってまさかアキラ！あなたもヒョウタさん狙いなの？！」
「おまえはヒョウタのことしか頭にないのかーーー！？」

知らない人の話だが漫才のような会話にモミ・ミル・アキコ・コウキは笑っていた。

「なによ？じゃあ誰が好きなのよ？ヒョウタさんじゃなければ『花の乙女同盟』に入れてあげてもいいけど……。ハッ！？まさかジムリーダー！？」
「ちちちち違……くはないっ！っていうか『花の乙女同盟』ってなんだ？！」

ナタネがアキラの好きな人のことを問い詰めているなか、モミはアキコとコウキに話しかけた。

「あなたたちもヒカリちゃんのコンテストを観にきたの？」
「はい！……というかむしろ手伝っています」
「ええー！？すっご～い！いいな～」

うらやましそうな声をあげたのはミルだった。ヒカリとは暗闇の洞窟で知りあって間もないがヒカリにとてもあこがれていた。ミルと同年代のアキコは仲間を見つけてうれしかったのかにっこり笑った。

「はじめまして。わたしアキコっていうの。あなたは？」
「ミル！」
「ミルちゃんヒカリさんのこと好き？」
「大好きー？」
「アキコも大好きー？」

2人の少女は手を合わせてきゃっきゃっとはしゃいだ。いつの時代でもどんな場所でもよくある光景。モミとアキラとコウキは優しく少女たちを見守っていた。

「ヒカリさんのロゼリアの演技すごかったでしょ？」
「うん！『痺れ粉』がまるでホタルの光みたいだった！」
「あれ教えたのアキコなんだよ～♪」
「ええー！？ホントー？」

2人はコンテストの感想やヒカリとの出会いを話して盛り上がった。このように最初アキコとミルは敵対していなかった。むしろ仲がよかった。だが問題はミルのヒカリの呼び方だった。

「やっぱりヒカリお姉ちゃんって強くて優しくてかわいくて頭がよくてすごいよね！」

そう。この呼び方がいけなかったのだ。ミルが言った「ヒカリお姉ちゃん」という呼び方。アキコもまたヒカリを姉にしたいと願っている少女だった。コウキとヒカリを結婚させることでヒカリを姉

にしようと本気で考えるくらいだ。自分のほうが先にヒカリと出会っていたのに自分より後に出会った少女がヒカリを「お姉ちゃん」と呼んでいる。上昇していた親密度はいっきに下がった。

「……はあ？」

顔をゆがませたアキコにモミとミルは一瞬寒気を感じた。アキコの兄であるコウキも見たことのないアキコの顔にとまどう。

「アキコ……？どうしたのですか……？」

兄の質問を無視してアキコはミルを責めた。

「なんであなたがヒカリさんをヒカリお姉ちゃんって呼んでるわけ……？」

「え……？なんでって……ヒカリお姉ちゃんに『ヒカリお姉ちゃんって呼んでいい？』ってきいたら『いいわよ』って言われたから……」

「ダメ！！」

アキラとナタネ以外の肩が震えた。１番ビクッとしたのはミルだ。アキコはうつむいたままつぶやいた。

「ヒカリさんは……ヒカリさんは……わたしのお姉ちゃんになるのーーーー！！」

＊＊＊

そんなわけでミルとアキコはケンカを始めてしまった。ヒカリが好きな者同士争っている。コウキとジュンはよくヒカリをめぐって

言い争いをする。だが女子の言い争いも男子に負けていなかった。

「ミルちゃんヒカリお姉ちゃんって呼ぶのやめてよ！ヒカリさんをお姉ちゃんって呼んでいいのはアキコだけなの！」

「そんなことないよ！なんでそんなこと言うの？！」

ミルの目が少しうるむ。せっかく新しい友だちができそうだったのに嫌われてしまったからだ。

「ヒカリお姉ちゃんはコウキお兄ちゃんと結婚してアキコのお姉ちゃんになるんだもん！ミルちゃんのお姉ちゃんには絶対ならないもん！」

「そ、そんな……！」

その言葉を聞いてミルは落ち込んでしまった。とても現実的な話だったからかもしれない。そこへ第3者が割って入ってきた。

「あら？でもミルちゃんのお母さんがヒカリちゃんを養子にすればミルちゃんのお姉ちゃんになるんじゃない？」

余計なことを言ったのは両グループで最年長のモミだった。彼女はミルをなぐさめたかっただけだが火に油をそそいでしまった。

「そ、そうだよ！ミルのママがヒカリお姉ちゃんをようしにすればミルのお姉ちゃんになるもん！」

「そんなことさせないわ！お兄ちゃんもなにか言ってよ！」

「ぼ、ぼくがですか～？」

妹の目つきにコウキはたじたじした。本当はコウキはケンカを止めたかったのだが……。

「ヒカリお姉ちゃんを取られてもいいの！」
「よ、よくありません！」

別にヒカリがミルの母の養子になってもコウキと結婚すれば問題はない。ヒカリがミルとアキコの姉となってめでたしめでたしになるだけだ。だがコウキは妹のわけのわからない言葉に言いくるめられてしまった。

「ミルさん申し訳ありません。ヒカリさんはぼくの妻となり、アキコの義理（ぎり）の姉になる人です。残念ながらミルさんにはお渡しできません」
「ヒカリお姉ちゃんがあんたのようなへなちょこ男（おとこ）と結婚するわけないじゃない！！」
「へ、へなちょこ男～～？」

これにはさすがにコウキも面食らった。自分の妹と同じ年頃の少女にへなちょこ男と呼ばれてしまった。それも初対面でだ。

「お兄ちゃんをバカにしないでよ！たしかにたまにタ～リラリラ～♪なこと言うけどこれでも頭いいのよ！顔だって今は６９点だけど３年後には８２点になってるはずなんだから！」

コウキは褒（ほ）められているのかけなされているのかわからず妙（みょう）な気分だった。

「う……うるさい！このパーマ！」

ミルはアキコに飛びかかり髪をひっぱった。アキコは「きゃあっ！？」と叫んだもののすぐ反撃した。２人は髪を引っぱり合いなが

ら悪口を言った。

「パーマのなにがわるいのよ！そういうあなただって変なかみがたじゃない！ツインテールのくせになんで片方がわっかでもう片方はたれさがってんの？だっさい！」

「ださくないもん！このかみがたはヒカリお姉ちゃんがにあうって言ってくれたかみがただもん！」

声を荒げた2人の少女にアキラとナタネはようやく異変に気づいた。おろおろするモミとコウキをよそにアキラとナタネは少女たちを引き離した。

「アキコ！」

「ミル！？」

アキコとミルはもがくが腕の強いアキラとナタネの腕からは逃れられない。腕は塞がれたものの口は開いている。アキコは口論を続けた。

「だいたいなんで同じパフスリーブのシャツ着てるわけ？マネしないでくれる？」

「そっちこそ話し方変えてよ！同い年でパフスリーブ着ててヒカリお姉ちゃんが好きで話し方まで似てるだなんてキャラかぶるじゃない！」

「はあ？なに言ってるのよ？そんなことないでありんすーーー！あなたのような庶民といっしょにしないでくださる？ヒカリお姉さまはわたくしのものですーーー！！」

興奮でアキコの話し方はめちゃくちゃになっていた。キャラ崩壊もここまで短時間でおこるとひどい。

「2人とも！そこまでだ！」

凛々しい声にミルとアキコは黙る。口を開いたのはアキラだった。

「ケンカはやめろ……。やめないとヒカリは私がもらうぞ！」

2人の少女の会話のレベルに合わせているのだろうか。冷静なアキラにしては幼稚な言葉だった。ミルとアキコはあっけに取られたがすぐさま感想を叫んだ。

「ダメ！取らないで！」

悲痛な叫び声を出したのはミルだった。反対にアキコは余裕の笑顔でしゃべった。

「別にかまいませんわ！アキラお姉さまはわたくしのいとこ。アキラお姉さまのお母さまがヒカリお姉さまを養子にしてもなんの問題もありませんもの！」

「おまえはどこか勘違いをしているな……」

アキラはアキコを押さえながら冷たいまなざしでアキコを見下ろしていた。

「確かに私の母とおまえの母は姉妹だが……おまえらテンジョウイン家にはうんざりしていたんだ……」

「「え？」」

コウキとアキコは同時に声を上げた。

「ちょうどいい。これからクロサキ家はテンジョウイン家とは縁を切る。ヒカリは私が姉として一生守ってやろう。おまえらには金輪際会わせん」
「「ええーっ!?」」

コウキとアキコはあせった。まさかここまでアキラに言われるとは思わなかったのだ。ナタネとモミとミルも声に出さなかったもののおどろいていた。

「な、なによそれ!そんなの不公平だわ!」
「そんな～～!アキラ姉さんやめてくださいよ～～!」
「ミルとアキコが仲直りしたら気が変わるかもしれないぞ?それとあとコウキその気持ち悪い性格を直せ」

そこでナタネとモミはようやく気づいた。アキラはミルとアキコを仲直りさせようとしているのだ。だからアキラはさっきからアキラらしくないことばっかり言っていたのだ。コウキの件に関しては……おそらくただの嫌がらせだろう。アキラのような男装の麗人はコウキのようなエセ紳士を生理的に受け付けないようだ。

「え～～?でも～～～!」
「ぼくは気持悪くありません!」

アキコは口をとがらせる。とばっちりを受けたコウキは困っていた。ナタネ・モミ・ミル・アキコ・コウキ・アキラの周りをかこむように野次馬が何人か集まっていたのだが6人とも気づいていなかった。そしてその野次馬たちに近づいてくる人物のことも。

全身黒の美女は野次馬の1人に話しかけ事情を知ると中心へ入り込んできた。

「ヤッホー♪アキラ～！ナタネ～！な～にしてるの～？」

陽気な声が中央通りに響き渡る。第７の人物が中心に加わった。チャンピオンのシロナだ。ヒカリと初めて会ったときと同じファー付きの服を着ている。ジムリーダーが１人いるだけですごいのにチャンピオンまで現れてしまった。野次馬もざわついている。ミルはシロナがチャンピオンとは知らず事情を説明した。

「ア、アキラさんがミルとアキコが仲直りしないとヒカリさんをもらうって言ってるの！」

「ふ～ん……」

シロナはそっけなく返事をして腕を組んだ。しばらくなにか考えていたが名案が浮かんだのか顔がぱっと明るくなった。

「なに言ってるのよあなたたち～。ヒカリは誰のものにもならないわよ～」

ナタネは胸をなでおろした。チャンピオンでありモミより年上のシロナなら大人らしくこの問題を解決できると思ったのだ。モミは大人しい性格なのでなぐさめるのは得意でもケンカを止めるのは苦手だった。

「そうですよね……」

モミは初対面で年上と思われるシロナに敬語で話した。ジムリーダーのナタネと親しいモミのことだ。シロナがチャンピオンだとすぐ見抜いた。雑誌やテレビで見たことがあるからだ。

シロナさんは大人の魅力があふれるけど無邪気な笑顔で言い放った。

「だってヒカリはあたしのものだもの？」

その場の空気が固まった。その言葉を聞いたものは全員頭が真っ白になった。だが6人のトレーナーの持ち直しは早くそれぞれ動いた。

「えっ？」
「あっ！？」
「……う？」
「い……？」
「……お？」
「なっ……」
「「「「「はあ？？」」」」」

順番に出されたリアクション。だが無理もない。誰がヒカリを姉にするか揉めていたのにいつのまにか議題はヒカリは誰のものになってしまったのだから。

「ヒカリちゃんはあたしと同性結婚を認めてくれる国へ言って結婚するの？……でも安心して。式にはみんな呼んであげるから♪」

満面の笑みで言われても困る。冗談だか本気だかわからない。だがアキラは直感した。シロナが半分冗談で半分本気だということを……！

「ふっざけんなあああああああああああ！！誰がおまえのようなレズにヒカリをわたすかあああああああああああ！！」

アキラはボールを投げた。現れたのは黒いたてがみを持つ青い獅子だった。眼光(がんこう)ポケモンのレントラーだ。

「や～ね～。レズじゃないわよ。あえて言うなら……両刀(りょうとう)？男も女もイケるかも☆」

シロナはごく自然な動作でボールからガブリアスを解放した。電気タイプのレントラーに対して有利な土・ドラゴンタイプのポケモンを出した。本気でバトルするつもりだ。

「ヒ、ヒカリさんはぼくの嫁でーーーす！」

コウキはモウカザルを出した。最終進化形態を持つ元チャンピオンと現チャンピオンと比べると頼りない。アキコはコウキの手から別のボールを奪(うば)い取り投げた。出てきたのはピッピだった。

「アキラお姉さま！ここはいったんわたくしたちと組んであの魔女を倒しましょう！」

「うるさい！邪魔(じゃま)だ！……というかおまえらもろとも倒す！！」

「「ええーーっ！？」」

本日何回目の「ええーーっ！？」だろう。ナタネとモミは顔を見合わせた。ジムリーダーとバッジを集めていないトレーナーが元・現チャンピオンたちの戦いを止められるわけない。ミルはアキコの前でユンゲラーを出した。

「アキコの相手はミルよ！」

「上等ですわ！負けませんわよ！」

アキコの話し方はお嬢さま口調のままだった。キャラが被るのをふせぐためだろう。だが今度はサヤカお嬢さまと被ることを忘れているようだ。

「なんだってんだよーーー！？」

「「「「「「「！？」」」」」」」

緊迫した空気に新たな人物が現れた。また金髪だ。

「おっ？なんだなんだバトルか？コウキ！オレとバトルしようぜ！」

ヒカリの幼馴染のジュンだった。膨れ上がる野次馬を不思議に思い首をつっこんだらしい。

「いいですよ。勝った人がヒカリさんと結婚することができます」

「なんだってんだよー！いったいぜんたいなんの話だ？オレのヒカリをうばいあうなーーー！！」

「ビビーッ！」

ジュンのボールから勝手にロトムが現れた。理由は知らないがやる気まんまんだ。シロナは手を上げた。

「それじゃあ～……スタート！！」

―ドドーン！

爆発がおこった。……いや、地面が揺れたのだ。ガブリアスの『地震』が炸裂し、それを避けたゴウカザルは『インファイト』でガブリアスを連打した。ピッピとユンゲラーはテレポートでトレーナーごと移動しふれあい広場でバトルをした。モウカザルはロト

ム追いかけポケモンセンターの上で戦闘を始めてしまった。野次馬はバトルに巻き込まれそうになりながらも騒いでいた。

「いいぞーねえちゃん！」
「にーちゃんもがんばれよ！」
「私は女だ！！」

バトルしながらもアキラは野次馬に文句を言った。ナタネとモミはそそくさと去った。1時間後、ヨスガシティで行われていたバトルはナタネとモミが呼んだポケモンリーグ協会の人たちによって止められた。野次馬によると赤いアフロの男もいたらしい。アフロの男は厳重注意を受けているシロナとアキラを見ると口笛を吹いてこう言ったという。

「ヒュ～～♪これはデンジに知らせなきゃな！」

＊＊＊

一方、ウラヤマ家の屋敷ではお見合いのようなことが行われていた。裏庭でパラソルつきのテーブルに3人の男女が座っていた。ウラヤマ家のサヤカとアキヒコ、そして客のヒカリだ。テーブルにはキッシュと紅茶が並べられていた。メイドレンジャーに囲まれたテーブルでサヤカは上品に笑った。

「ヒカリさま！ご紹介いたしますわ。わたくしの兄のアキヒコですわ♪」
「やあ！ＹＯＵとＭＥはＤＥＳＴＩＮＹの糸で結ばれている気がするよ！僕とＭＡＲＲＹしないか？」

ヒカリは引きつった笑顔で答えた。

「ノ、ノーサンキュー……」
「ポチャーーッ！」

ポッチャマの腕はＮＯ（ノー）を表わす×（バッ）の形になっていた。ウラヤマ家にいた人たちはヒカリ争奪戦のことなど知らず平和なひとときを過ごしていた。おもちゃ屋さんにいたライコと父親も争いに巻き込まれず幸運だったのかもしれない。

（番外編）　ヒカリのバレンタイン（前書き）

久しぶりの『長髪の美少女』の更新です。物語の日付と合っていませんが現時点でバレンタインがあると仮定して書きました。

（番外編）　ヒカリのバレンタイン

―バレンタインズデーはハロウィンの次に好き？
Ｓａｇｉｔｔａｒｉａｓ

『ヒカリのバレンタイン』

＞ｉ１７６６６―６９９＜

「うん！これでバッチリね？」

ヒカリは最後のクッキーをラッピングし終えたあと言った。今日は恋する乙女のハートがキュンキュンするバレンタインズデー。久しぶりに家に帰ったヒカリは早起きして母親からキッチンを借りてクッキーを作ったのだ。昨夜作ってもよかったのだが疲れていたので早寝したのだ。

作ったのはシンプルなアイスボックスクッキー。プレーン生地とココア生地をハートの型と長方形の型でくりぬいて作ったものだ。ハートのトランプみたいなクッキーは味も形も完璧だ。味にうるさいヒカリのポッチャマ――ナポレオンでさえ納得したおいしさはお墨付き《すみつき》だ。

「ママ！私みんなにクッキー渡しに行ってくるね！」
「いってらっしゃい。５時までには帰ってきてね。ママ結果を知りたいから？」
「は～い！」

こうしてヒカリはアキラに借りたムクホークのルーンに乗って行

ってしまった。

＊＊＊

＊ターゲット１：ジュン＊

ヨスガシティの手前にある人気のない２０８番道路。そこはこっそりチョコを渡すのにうってつけだった。

「ジュ～ン！お待たせ～！」

「おっそーーーーい！！」

ヒカリは約束より１０分前に来たというのにジュンに叱られてしまった。

「罰金１００万円ーーー！……って言いたいとこだけどチョコくれるからいっか」

普通の女の子なら腹が立つところだがここは長年の付き合い。ヒカリは笑いながら謝った。

「ごめんごめん。はい。バレンタインチョコ」

ジュンは袋を受け取るなり中身を開いた。

「おお！すげーな！かわいーじゃん！サンキュー！ヒカリ！」

次の瞬間予想外のことがおこった。ヒカリは前触れもなくジュン

に抱きしめられ頬にキスされたのだ。

「キャーーー！！」

少女の頭に一気に血がのぼった。ヒカリは反射的にジュンを突き飛ばしてしまった。

「なんだってんだよーーー！？」

「いきなり抱きつかないでよ！」

バクバクする心臓を覆うように腕を組んだ。そうでもしないと心臓が爆発しそうだったからだ。

「昔はオレにチューしてくれたのに……」

「昔と今は違うのよ！！」

「ポチャーー！！」

ナポレオンはジュンに『水鉄砲』を発射した。その隙にヒカリとナポレオンはルーンに乗り逃げてしまった。

「なんだってんだよーー！」

ナポレオンは念入りにヒカリのほっぺをハンカチで拭いた。

＊ターゲット2：コウキ＊

ファッションの町、ヨスガシティ。いつも賑やかな町だが今日はバレンタインズデーなのでどこもかしこもカップルだらけだった。

「コウキく～ん！」
「おや。ヒカリさん」
さわやかな好青年……ではなく好少年（？）が本から目を離した。
「ごめん。待った？」
「いえ。ヒカリさんのことを考えていたらあっという間に時間が過ぎてしまいました」
「コウキくん……」
「ヒカリさん……うっ！」
良い雰囲気になりかけたところでコウキは足に痛みを感じた。ナポレオンがコウキの右足を踏んだのだ。調子に乗るなと言わんばかりに睨んでいる。ヒカリは足元で起こっていることに気づかず笑顔でコウキに包みを渡した。少年の手に包みが届くと同時に少女の頬（ほお）になにかが触れた。ジュンにキスされたのと逆の頬だ。
「キャッ！？」
ロマンチストの少年はイタズラっぽく笑った。
「すみません。ちょうどいいほっぺが合ったのでキスしてしまいました」
「コ、コウキくん……」
「ポヂャーー！！」
怒りの一撃がコウキの左足を襲う。コウキの顔は痛みで歪んだが恥ずかしくて顔をそむけたヒカリは気づかなかった。
「手作りのクッキーなの。コウキくんいつも高級なものばかり食べ

てるから気に入るかどうかわかんないけど……」
「いえ！そんなことありません！ヒカリさんが作ったものなら例え泥団子だろうが毒が入っていようが食べます！」
「え……そ、そう？」
「……チャッ」

ナポレオンはつばを吐いた。「じゃあヒカリの毒入り泥団子食って死ねよ」と言いたそうだ。

「ところでヒカリさん。せっかくバレンタインズデーですしどうです？これからボクとお茶でも……」
「ごめん！他にもクッキー渡したい人がいるの！」
「クホーック！」

ルーンが急ぐように催促（さいそく）した。アキラ、アキコ、ナナカマド博士、ヒョウタ、モミ、ライコ、ナタネ、ミル、アカギ……チョコを渡したい相手が多すぎる。早くしないと日が暮れてしまう。空を飛びながらヒカリは手を振った。

「また今度ゆっくりお茶しようね～。またね～、コウキく～ん！」
「ボーヂャー♪」

ナポレオンはヒカリに見えないようにアッカンベーをした。コウキはヒカリと四六時中いられるナポレオンを心底うらやましがった。ナポレオンは念入りにヒカリのほっぺをハンカチで拭いた。

＊ターゲット３：ヒョウタ＊

「ごめんくださ～い」

ヒカリはおそるおそる扉をノックする。彼女はザ・ロックと言われる青年がいるクロガネジムにいた。

「やあ。待ってたよ」

あらかじめ約束をしていたのでヒカリはすんなりジムを通された。ジムにはヒョウタ以外誰もいなかった。おそらく空気を読んだのだろう。ナタネを一発で仕留めた笑顔を見てヒカリは少しドキッとしてしまう。

(平常心……平常心……。ヒョウタさんはナタネさんとくっつく運命(?)なんだから)

変な自己暗示をしながらヒカリはヒョウタにクッキーを渡した。

「友チョコです。受け取ってください」

「ああ。ありがとう」

ところがヒョウタがクッキーを受け取る前にクッキーは床に落ちてしまった。ヒョウタのある行為のせいで。

「え、えええーーー!?」

「ポチャーー!?」

ヒカリは困ってしまった。ヒョウタに頬をキスされてしまったのだ。コウキは予想の範囲内だった。ジュンはもともと予想不可能だ。だがヒョウタからキスされるのは完全に計算外だった。ナポレオンまで驚(おどろ)いている。肝心のヒョウタはキョトンとしていた。

「あれ？母さんがこうすれば君が喜ぶって聞いたんだけど……」

（シズルさあああああああああんっ！！）

ヒカリはちゃっかりした女将さんの名前を叫びたくなったがグッとこらえた。

「そういうことはナタネさんにやってください！！」

ナタネはヒカリのあとに来ることになっている。ほっぺにキスされたことを話したらこの前のようにナタネに嫌われてしまう。

「あと私にキスしたこと誰にも言わないでください！」

「え？母さんにも？」

「え～～っと……シ、シズルさん以外の人には言わないでください！！」

「あ、ああ……」

そう言ってヒカリはジムをあとにした。ナタネのチョコの受け渡しの成功を祈りながら。ナポレオンは念入りにヒカリのほっぺをハンカチで拭いた。

＊＊＊

「ふう～。やっと終わった～～」

チョコの配達が終わり、ヒカリはナポレオンとルーンと一緒に休んでいた。ヒカリはマサゴタウンのベンチに座っていた。自動販売機で買ったホットココアを飲んでいる。アキコに引きとめられそう

になったが丁重に断った。コウキとアキコの家は居心地が良すぎる。ナナカマド博士にチョコを渡すという口実で謝りその目的も果たした。あとは家に帰るだけだ。

（ナタネさん上手くいったかなぁ……？）

ココアをすすりながらヒカリは友だちを案じたそのときだった。コウキからもらったポケギアがけたたましく鳴った。

「もしもし？ヒカリくん？」

「ヒョウタさん！？」

電話をしてきたのはヒョウタだった。その声はどこか慌てている。なにか悪いことでも起ったのだろうか。

「どうしたんですか？」

「ヒカリくんの言う通りナタネくんの頬に口付けしたら気絶してしまったんだ！ボクはどうすればいいんだろう？！」

「あ～……」

ヒカリは言葉につまった。これは間接的に自分のせいだろうか？責任を感じながらある意味これはナタネの望んだことだと彼女は悟った。

「とりあえずモミさんを呼んでナタネさんと一緒に民宿くろがねに泊めてあげてください」

第４２話　女の戦い　＜中編２＞（前書き）

挿絵なしで失礼。現在カナダにいてスキャンが使えません。

第４２話　女の戦い　＜中編２＞

今日はいよいよマスターランク。目覚ましが鳴ると私はベッドから飛び起きた。顔を洗ってドレスに着替えて鏡の前にスタンバイ。メイクはメイドレンジャーが担当してくれるから髪だけ梳(と)かした。

「ふ～んふふんふふ～ん♪」

目をつむりながら鼻歌を歌った。サラサラの髪が櫛(くし)を通る。ふと目を開けたらありえないものが鏡に映っていた。

「キャアッ！？」

私は鏡から後ずさった。鏡の中にいるのは同じ背丈の長い髪の少女。でも顔も髪の色も違う。服はいつも着ている服と似ているけど違う。

『いきたい……』

「え……？」

鏡の少女が私に話しかけてきた。でも何を言っているかわからない。彼女は泣きそうな顔で訴えた。

『いきたいの！』

＊＊＊

ピピピピピピピピ！

私は息を吸うように目が覚めた。目覚まし時計がけたたましい。
私の体は水の中から出てきたように激しく呼吸をした。

「はぁ……はぁ……」
「ポチャッ！？」

異常に気づいたナポレオンは飛び上がった。

「ポチャ～。ポチャポチャ？」

ナポレオンが話しかけてきた。でも気分はちっともよくならない。

「なに……？なんなの……？」

彼女は『いきたい』と言っていた。それは「生きたい」？それとも「行きたい」？行くとしたらどこへ？涙がこぼれてきた。これは私の涙……？それともあの子の涙……？

ピピピピピピピピピ！

私は目覚まし時計を止めることもできず泣き続けた。

ドタドタドタ……。

誰かが廊下を走る音が聞こえた。世界を気にせず泣いているとドアがいきなり吹っ飛んだ。

「おい！どうしたんだ！？ヒカリ！！」

部屋に入ってきたのはアキラだった。ドアを破ったのはゴウカザルだ。私は涙を隠そうともしないで顔を上げた。

「アキラ……」

「ヒカリ！無事だったのか！良かった……！」

アキラは私を抱きしめた。悲しみが少し軽くなった。でも涙は止まらない。どうすればいいかわからずそのままでいたらアキラに質問された。

「一体何があったんだ？なんで叫んだんだ？」

「なんでもないの……。ただ恐い夢を見たの……。私じゃない誰かが鏡に映っていたの……」

「ヒカリ……」

頭をなでられた。悲しみが半分になった。アキラの心臓の鼓動は子守唄みたいで落ち着いた。

「きっとコンテストで緊張してたんだ。大丈夫だ……。ヒカリなら勝てる……！たとえ母親が相手でも……！」

「うん……」

……本当にそうなのかしら？本当にあの夢はコンテストのせい？……違う。違う気がする……。

アキラが体を離した。そのかわり両手をポンと私の肩に置いた。

「それにしてもよかったよ。てっきりコウキが着替えを覗きに来たのかと……」

「え？」

私は温泉事件を思い出した。

「コンテスト当日にさすがにそれはないと思う……」

3秒後、コウキくんが私の無事を確かめに部屋に入ったらアキラにぶっとばされた。私のネグリジェ姿をコウキくんにさらしたくなかったんだって。ドアを壊したりコウキくんを殴ったりとアキラはいろいろやりすぎだと思う。

第４２話　女の戦い　＜中編３＞（前書き）

手を抜きたいけど抜けません。今まで全力で書いていたのに急に手を抜くと読者に失礼ですから・・・。

第４２話　女の戦い　＜中編３＞

コンテストは何回やっても慣れない。４回目なのにまだ緊張する。コンテスト前に私とセニョールを間近で見ようと受け付けに集まる野次馬は日々増えていた。ボディガード役のアキラとコウキくん、それにメイドレンジャー達に守られながらコンテスト会場に来た。みんなと受け付けで別れて待合室に向かおうとしたらガヤガヤしていた野次馬が一瞬静かになった。……ママだ！

「おはよう、ヒカリ。やっと会えたわね。気分はどう？」

ママは白いワンピースを着た黄緑色の髪の女の人のようなポケモンを連れていた。肌は色白ではなくて白色そのもの。胸にある赤いコアはまるでルビーのブローチ。抱擁（ほうよう）ポケモンのサーナイトだ！アキコちゃんからもらったデータ通り。ママの賢さ部門担当のポケモンはサーナイトのサーナだった。賢さだけでなく美しさ部門でも優勝を狙えそうな出で立ちだった。見るからに手強そう。

＞ｉ２３０１８―６９９＜

母親でもあり競争相手でもあるママに弱気なところは見せられない。私は平静を装って答えた。

「最高よ」

「ロゼ！」

セニョールは胸を張った。変なところがナポレオンに似てる。今朝恐い夢を見たことはママに黙っておいた。

「先週までコンテストでヒカリと戦えるとは夢にも思ってなかったわ。ママうれしい！」
「期待しててね。負けないから」

娘としてではなくライバルとして対応した。コンテストに勝ったらみんなの前で謝ってもらうんだから！

＊＊＊

今日のビジュアルのテーマは『綺羅びやかなもの』。ロゼリアに黒い『マント』と『シルクハット』を被せた。顔には『ゴージャス眼鏡』をかけて両手に『こつこつストーン』をつけまくった。床には『カーペット』を敷いて『お金持ちコイン』をばらまいた。『キラキラパウダー』と『ピカピカパウダー』をありったけふりかけてこれでもかっていうくらいゴージャスに仕上げた。モチーフは『オペラ座の怪人』。アクセサリーは限界の２０個までつけた。コンテストはランクが上がるごとにつけられるアクセサリーが増えるけど制限時間も伸ばしてほしい。６０秒じゃ足りなさすぎるわ。ビジュアルはママのサーナイトより若干拍手が多かった気がした。

ビジュアルの次は私の苦手なダンス。トランペットの音を聞くとうきうきした。サーカスで流れるような陽気な音楽だった。テンポは少し遅くて乗りにくい。ダンスのステップは自分の番も含めて３２回。５回ステップを踏み外したけど私の中では少ないほう。それ以外のステップはセニョールのおかげでパーフェクト。ママのサーナイトのダンスは完璧だった。くやしいけどダンスではママに完敗だった。

ダンスが終わったあと私はセニョールの余分なアクセサリーを取った。『カーペット』と『お金持ちコイン』は技の審査にはジャマ

なだけ。念のため手につけた『こつこつストーン』も取った。

「ロゼー」

セニョールにハンカチで顔を拭かれた。アカギさんがくれたハンカチだ。アカギさんは今なにをしているんだろう？社長だから会社で働いているのかしら？忙しいからヨスガシティにはいない気がする。社長室のテレビでコンテストの生中継を見ているのかしら？

ハンカチはすぐびっしょりになった。気づかなかったけどけっこう汗をかいてる。緊張してる証だ。次の審査の準備はできたけど心の準備はまだだった。恐怖がぶり返した。手が、脚が、体全体が震える。私はすがるようにセニョールを抱きしめた。

「ありがとう……。ワガママだけど……勇気も分けてくれる……？少しだけ……ほんの少しだけでいいから……」

「ロゼーー！」

セニョールは力いっぱい私を抱きしめてくれた。私の膝にも及ばないその小さな体で。アキラ……コウキくん……アキコちゃん……サヤカお嬢さま……メイドレンジャーたち……。ナポレオン、クルル♪、キララ★、ラミア、ランス、ノワール……そしてファンのみんな！お願い……私に……私とセニョールに力を貸して……！そうでないとプレッシャーに押しつぶされそう……。抑えきれない涙はセニョールが花びらで受け止めてくれた。

＊＊＊

「それでは皆さんお待ちかね！次はコンテストで1番の見所！演技の始まりで～す☆」

ミミィさんの明るい声が客席を湧かせた。コンテストを最も盛り上げる審査、演技。ダンスとビジュアルが駄目でも演技で会場を虜にすれば逆転勝ちも可能だわ。

「現在までの合計点のトップはアカリさんで～す！さっすがわたしの親友♪贔屓（ひいき）したいけど贔屓しませんのでみなさん安心してくださ～い！」

ミミィさんまた言わなくてもよかったこと言ったわ！！

「ふざけるなー！」
「他の出場者のことも考えろー！」
「ロゼ～！！」
「ヒカリちゃんを贔屓しろー！」
「なんだってんだよー！」

会場からブーイングが漏れた。聞き覚えのある声もいくつか混じっている。セニョールも真面目だから怒ってる。マイペースなミミィさんはブーイングをものともせず実況を続けた。

「今回のコンテストの目玉はなんといってもアカリさんとヒカリさんの親子対決！現在アカリさんが優位ですが果たして演技での逆転はありえるのでしょうか！？それではスタートです！」

また余計なこと言った！！

「公平に審査してくださーい！」
「ヒカリさんがんばってくださーい！ボク達がついてますよー！」
「ポチャチャーー！」

でもミミィさんの言う通りだった。ほとんどの観客は私とママの対決を見たくて来たようなものだった。他の参加者は劇で言う脇役のようなもの。観客が脇役よりも主役の2人に注目する。でも脇役がいないと劇は成り立たないようにコンテストは参加者が4人必要だった。脇役になってしまった参加者には申し訳なかった。ママを倒すのに精一杯で名前も覚えてない。わかっているのは2人とも私より年上でマネネとゴースでコンテストに挑んでいるということのみ。……私とママの身勝手のせいで起こってしまったコンテスト騒動。コンテストはもうこれっきりにしよう。このコンテストでママに勝ったら二度とやらない！

「参加者のみなさん位置についてください。どの審査員にどの技でアピールするか決めましたか？」

参加者は指定の位置に立った。私の演技の順番は3番。ママは4番。

演技の審査システムはビジュアルとダンスに比べて複雑だった。ポケモンが1匹づつ順番に1つの技でアピールするもの。参加者は3人いる審査員の中から1人を選び技をアピールする。アピールするチャンスは4回。ポケモンが出す技によってもらえるポイントは変わる。

同じ技を続けて出すことは基本不可能だけど毎回同じ審査員にアピールするのはあり。審査員は1回のアピールが終わるたびに自分にアピールしたポケモンにさらにポイントを追加する。でも選んだ審査員が被るともらえるポイントは減ってしまう。

あと審査員は演技を気に入ると自分の気分を表すボルテージボタンを押す。ボルテージは5段階あって審査員が審査する技によって上がったり下がったりする。自分のポケモンの技で審査員のボルテ

ージを最高値まで上げるとボーナスポイントを大幅にもらえる。

　このクイズ形式のような演技以外に実はもう1つ別の演技システムがある。ポケモンが1匹づつ複数の技を使って一気にアピールするものだ。従来の型にはまった形と違って柔軟性と創造性が求められる。現在流行りつつある新しいアピールシステム。最近はこっちが主流になってきてるけどコンテスト初心者にはレベルが高すぎる。だからコウキくんは私に前者のアピールシステムのほうをオススメした。こっちは心理戦が大きく絡んでいるから度胸と運さえあれば初心者でも勝てるからって。

「それでは3秒後にスタートします。スリー、ツー、ワン、ゼロ！GO！！」

第４２話　女の戦い　＜中編３＞（後書き）

余談ですが実際に私がゲームでコンテストをやるときはものすごく悲惨です。ビジュアルはアクセサリーでポケモンがほとんど見えないし、ダンスのステップを踏み外しまくっています！！（苦笑）

第４２話　女の戦い　＜後編＞　（前書き）

この話を書くためにプラチナのコンテストを１０回以上やりました（笑）。

第４２話　女の戦い　＜後編＞

―この演技、あなたに捧げます！

＞ｉ２３６２４―６９９＜

「この技をサスケさんに捧げます！」

スポットライトが当たったと同時に強気な声が聞こえてきた。最初に演技をしたのはゴースのトレーナーだった。大人の香りが漂うお姉さんだ。でもシロナさんには敵わないと思う。大人のお姉さんは１番左に座る優しそうな青年に演技を捧げた。

「すごすご、『催眠術』！」

「ゴ～ス！」

ぐるぐるメガネをかけたゴースは『催眠術』で次々に数式を出した。あまりにも難しくて複雑な数式に頭がクラッとくる。中学生レベルの知識じゃ解けない問題ばかりだわ。うう……眠い……昨夜緊張してあまり眠れなかったから効くわ……。『催眠術』は審査員のテンションを維持させる効果がある。これで１回目の演技はボルテージが下がらなくなる……のはありがたいけど眠い……。私は両手でほっぺを叩いた。数学は得意じゃないけど起きていなきゃ！

「おお～っと！ジェーンさんのすごすごは『催眠術』で眠くなるような授業を演出しました！高校時代に数学が嫌いだったのでしょうか？！」

ミミィさんの発言にジェーンさんは彼女をキッと睨んだ。いくら

サスケさんのための演技とはいえ睨んじゃダメじゃないかなぁ……。最後に余計なひと言を言うミミィさんもひどいけど。観客は眠気が覚めたあと歓声を上げた。ジェーンさんとすごすごは２０ポイント獲得し、サスケさんのボルテージが上がった。ジェーンさんの番が終わるとマネネのトレーナーがスポットライトで照らされた。

「ビッグさんのために『バトンタッチ』をします！」

２番目はパラソルを持っているお姉さんだった。指名したのは審査員の中で１番えらいビックさん。初老のおじいちゃんだわ。

森のパーティみたいな仮装をしたマネネはサスケさんのために『バトンタッチ』をした。手に持っていたフラッグをバトンに見立てて踊り始めた。歌いながらフラッグを右へ左へと振り回すマネネはとても楽しそう。

「まあ！なんてマネコの見事なバトンさばき！『バトンタッチ』をこんな風に魅せるとは賢いですね！まるでお遊戯を楽しんでいる幼稚園児です！コマコさんは良い幼稚園の先生になりそうですね♪」

パラソルを持ったお姉さんはコマコさんと言うのね。しっかり覚えておかなきゃ。コンテストが終わったあと挨拶するんだから。

「マネーッ！」

マネネは投げたフラッグを受け止めた。最後はマネネ自信がクルクル回ってはい、ポーズ……と、思ったらボールに戻った。……そうだった。『バトンタッチ』はポケモンと交代する技。マネネのですっかり忘れていたわ。

「うむ！孫を思い出すかわいらしい演技だった。４０ポイントあげ

よう」

かわいさの技だったからビッグさんのボルテージは上がらなかったけどなかなかの高評価。観客もワーッと騒いでいる。私も負けてられないわ！

「次は気になるヒカリちゃ……ヒカリさんの演技で～す☆」

今ちゃん付けしようとしたわよね！？

「この演技、ミミィさんへ捧げます！」

「ロゼ！」

天然バリバリのミミィさんをスルーして私はセニョールに『草結び』を指示した。セニョールはしなやかな動きで両手から種をばらまいた。種はぐんぐん育ちちょっとした草むらができた。その草をセニョールは素早く編み妖精の像を作り上げた。

「キャーーー！！出ましたーーー！セニョールの『草結び』！！グレートランクでは大きなバラを編みましたが今回は妖精を生み出しました！ミミィうれしい？４０ポイントあげちゃう！２０ポイントおまけしといたわよ？」

ミミィさんはボルテージボタンを押した。やったわ！４０ポイントＧＥＴ！最初の演技にしては上出来かな？あとは審査員が被らなければもう３０ポイントもらえるんだけど……。

スポットライトが４番の位置に当たった。ママの番だわ！ママは落ち着いた足取りで歩き、ニッコリ笑った。

「わたしもこの演技、ミミィさんへ捧げます」
「「「っ！？」」」

ママ以外の参加者は息を飲んだ。親子で審査員が被るだなんて！ママのサーナイトは半透明の壁を作りだした。オーケストラの指揮者のように腕を振り、不透明な壁が増えていった。『リフレクター』で作り出された壁は徐々に形作られ、やがて城になった。

「～～～～っ！？素敵！ビューティフル☆リフレクターの城に佇むサーナイトはまるでシンデレラ！４０ポイントあげたいところだけど贔屓しちゃダメだから２０点！あとでヒカリちゃんと一緒に２０ポイントあげるから許してね♪」

あとで２０点追加しても私にも２０点追加したら私の勝ちじゃない……。全てのポケモンが技を出し終えたあとさらにポイントが追加された。ジェーンさんのゴースは５０ポイント、コマコさんのマネネは７０ポイントになった。私のロゼリアは６０ポイント、ママのサーナイトは４０ポイント。ママがビッグさんを選べばセニョールとマネネのポイントは逆だったのに……。

「……」

ママを非難するように見つめたのに笑顔で返されてしまった。……なによ。同じ造形の技でもママのほうが上手だってことを見せたかったの？自分のポイントを下げてまでそうしたかったって言うの？

「ロゼ！ロゼ～！」

セニョールに揺さぶられた。そうだった。カッカしちゃいけない。

頭に血が上ったら負けちゃう。

「わかったわ。冷静になる」

「ロゼ！」

クールダウンしたところでミミィさんのアナウンスが入った。

「次の審査はサーナ、すごすご、セニョール、マネコの順番でお願いします！」

＊＊＊

コンテストは難しい。特に最頂点のマスターランクはなにもかも難しい。2回目の演技ではママは狙ったように『未来予知』を放ち70点を勝ち取った。私は『自己暗示』で3回目の演技の下準備をした。演技審査では様々な思惑が絡み合う。審査員が被らないように選ぶだけでなく他のポケモンの技にも気をつけなきゃいけない。『念力』や『ナイトヘッド』のような単純にポイントを稼ぐ技は注意しなくてもいい。でも審査員のボルテージをコントロールする技は要注意。なかには他のポケモンを利用する技もある。……まあ、私も『ギガドレイン』でゴースを利用しておまけの30ポイントもらっちゃったりしたけど。3回目の演技では流れを変えようと『秘密の力』で次の演技の順番をランダムにした。

そんなこんなで4回目の最終演技の時間になった。会場はかなり盛り上がっている。ミミィさんとサスケさんのボルテージは満タン寸前。あと1回賢さの技をアピールしたらボルテージが5段階目になり、ボーナスで50ポイントもらえる。ただ問題はママがどの審査員を選ぶか。私の順番は1番だからミミィさんでもサスケさんでも問題ない。でも2番目のママが私の選んでないほうを選んだら私

と同じくらい高得点をもらうことになる。演技の審査はビジュアルとダンスの審査と同じように最後まで何ポイントもらったのかわからない。休む暇もなく演技を続けていたから今まで演技で何ポイントを得たのか計算する暇もなかった。追い越しては追い越されるの繰り返し。うじうじ悩んでもしかたがないから私は最後の審査で全力をぶつけることにした。

「は～い、いよいよ最終審査です！トップバッターはヒカリさんです！どうぞ！」

「最後の演技、サスケさんに捧げます！！」

「ロゼー！」

セニョールは張り切って前へ出た。両手のバラから交互に大きな種を連続で発射した。種は一定の高さに達すると爆発する。種によって赤い花びら、青い花びら、緑のはっぱが爆発で飛び散るようになっている。

「んまあっ！？これはまたゴージャスな『種爆弾（たねばくだん）』ですね！昼に花火を見れるとは思いませんでした！ワンダフルー☆」

ミミィさんが褒めている間にもセニョールの演技は続く。

「ローッゼ！ローッゼ！ロゼーーーーッ！」

そう……セニョールが演技に使っている技は『種爆弾』！ただの『種爆弾』じゃつまらないからコンテストのため派手さを重視して魅せている。最後はやっぱりインパクトがある技にしなくちゃ！

「おおっ！僕のために演技してくれるのですか！？美しい……！と

ても光栄です」

セニョールに見とれながらサスケさんはボルテージボタンを押した。ボルテージが満タンになった。電光掲示板に表示される私とセニョールの名前の下に大量のハートが追加された。やったわ！ボーナスポイント獲得成功！！

「お次はアカリさんの番でーすっ！逆転なるか！？それとも空振り！？がんばって～～～マイ・ベスト・フレーーーンドッ！！」

ミミィさんのテンションは観客と同じくらい高い。お願い……サスケさんのために演技をして……。サスケさんを選んでいたらママはおこぼれのポイントしかもらえないから……！

「ご期待に応えて、この演技……ミミィさんに捧げます！」

「くっ……！」

私の予想は裏切られた。ママのサーナイトは歌いながらステージへ出た。1歩進むたびに身に着けていたアクセサリーを外れた。絹のベール、ティアラ、キラキラパウダー、青い羽根、まんまるストーンがサーナイトを中心に回り、ラップ現象を引き起こした。コトコさんのマネネと同じ『念力』。マネネは前回の演技で『念力』をジャグリングに使ったけどママのほうが綺麗だった。同じ『念力』でもここまで違うだなんて……！

「いや～～～ん？なんて怪しくて切なくて美しい『念力』！こんなファンタスティックな演技を見せられたらボルテージ、上げちゃいまーす！！」

ミミィさんははしゃぎながらボタンを押した。

「ボーナスポイントもあげちゃいま～す☆」

掲示板でママとサーナイトの名前の下に大量のハートが現れた。私と同じ数だ。ああ……もうどうなっちゃうのかわからない！私の心配をよそに会場はとても盛り上がっていた。２匹連続でボルテージＭＡＸになるなんてこと、滅多にないもの。倒れそうになる私をセニョールが支えた。

「ロゼッ！」

セニョールのはげましで私はかろうじて気力を保った。諦めたら試合終了。コンテストもバトルと同じで最後までどうなるかわからない。マネネかゴース、もしくは両方がミミィさんを選んだらママの追加でもらえるポイントが減って私が勝つ可能性だってある。最後まで見届けなきゃ……このコンテストの結末を！！

―ガコン。

音と同時に会場が暗くなった。割れんばかりの歓声と拍手と熱気で包まれていた観客が静かになる。興奮は戸惑いに変わり、歓声はざわめきとなった。

「なんだってんだよー！？」
「なんだなんだ？」
「こんなときに停電か？」
「せっかく盛り上がってたのに……」
「コンテストで停電……？ありえません！」

前触れもなく訪れた闇は人々を疑問に陥れる。恐怖はない。でも

気になる。いったいなにがおこったの？

―ブオン……。

会場の真ん中が光った。今まで使われたことない大きなスポットライトだ。スポットライトの下には信じられない人物がいた。

「ハーーーイ！みなさんこんにちはーーーー！！未来のアイドル、マーズちゃんでーーす？ギンガ団で幹部やってまーす？」

「なっ……！？」

私の背筋が寒くなった。会場に現れたのは谷間の発電所で戦ったギンガ団のマーズだった。バトルのあと襲われそうになったことを思い出して私は警戒した。セニョールもマーズがポケモンを出すまえから構えている。

「このたびはコンテストに来てくれてありがとうございまーす！会場はあたしたちギンガ団がジャックしましたー♪これからサプライズ・ライブを始めまーす？」

いやな予感がする……。これから恐ろしいことがおこる……！今はセニョールしか手持ちにいないのに……！

「それじゃあみんな～……あたしの歌を聞けーーーーー！！」

ロックな音楽が流れると同時に２ｍくらいするポケモンが飛び出した。マーズのポケモンは触手を何十本も伸ばし観客に襲いかかってきた。

第４３話　キャットファイト　＜前編＞

さっきまで歓声であふれていた会場は悲鳴であふれた。１．６ｍの胴体に何十本もの触手が生えた巨大クラゲが触手をあちこちへ伸ばし始めたからだ。ルビーみたいな大きい水晶が頭に２個もついている水色のポケモンは知っている限り２匹しかいない。

「ドククラゲ！？」
「ご名答～♪」

ドククラゲ。クラゲポケモン。メノクラゲの進化系。８０本の触手と大きな毒針を持っている海の危険ポケモン……！

「キャーーーー！！」
「っ！？」
「ロゼーー！」

知っている声が悲鳴を上げた。セニョールが指す方向を見たらライコちゃんがドククラゲの触手に捕らわれていた。

＞ｉ２３９８２―６９９＜

「ライコちゃん！！」

私はライコちゃんを助けたかったけどセニョールと触手を避けるのに精一杯だった。触手の隙間から様子をうかがうとマーズは鼻歌を歌っていた。ドククラゲがマーズにライコちゃんを差し出すとマーズはニッコリと笑った。

「ねえねえ。今叫んだのはあたしを見れて嬉しいからよね？あたしのファンだから歓声を上げたんだよね？」
「は……はなして……！」
ドククラゲがライコちゃんを縛る触手の力を強めた。ライコちゃんは痛そうに悲鳴を上げた。
「ライコーーー！！」
ライコちゃんのパパも叫んだ。モミさんはライコちゃんのパパを抑えている。隣りにいるナタネさんはくやしそうにドククラゲを見ていた。ナタネさんは草タイプの使い手。水・毒のドククラゲとは相性が悪い。そして、私のロゼリアも……。
「『はっぱカッター』！」
「ロゼッ！」
数枚のはっぱが高速で飛び触手を切る。私はドククラゲから解放されたライコちゃんをなんとかキャッチした。
「ヒカリさん！」
「お父さんと一緒に逃げて！」
ライコちゃんはうなずいてパパのもとまで走った。ナタネさんとモミさんもいるからたぶん大丈夫。人質を失ったマーズと戦うべく私はステージにとどまった。
「なに？ロゼリア1匹であたしに勝てると思ってるの？」
「やってみなければわからないじゃない」

結論を言うとたぶん勝てない。マーズはズバットとブニャットも持っている。今私の手元にいるのはセニョール1匹。ドククラゲと相討ちできたらいいほうかもしれない。

「『バブル光線』」
「『メガドレイン』！」

セニョールは泡の光線を軽やかによけて半透明のオーラをドククラゲへと伸ばした。ところがオーラは紫色になりセニョールへと逆流した。

「ロゼッ……」
「セニョール！？」

セニョールは苦しそうに咳をした。HPを吸う『メガドレイン』でダメージを受けた……！？

「あんたドククラゲの特性も知らないの～？」
「知ってるわよ！『クリアボディ』でしょ？」
「ぶぶ～！ざんね～ん」

そんな！？ドククラゲの特性は能力を下げる技と特性の効果を受け付けない『クリアボディ』じゃないの？

「もうひとつあるのよ。あたしのドククラゲの特性は『ヘドロ液』。HP吸いとられたら逆に相手にダメージ与えるの。あんた勉強不足じゃな～い？」
「くっ……！」

言い返せない……。

「『溶解液』☆」
「『守る』！」

紫色の酸性の液体が私とセニョールに降りかかる。セニョールは両手を交差させてバリアーみたいなものを出した。

「ロ～ゼ～！」
「セニョール！がんばって！」

マーズはドククラゲの攻撃から私を守るセニョールを見てあくびをした。

「あんたバカ～？ポケモンバトルだからトレーナーは攻撃されないとか思ってるわけ？」

当たり前じゃないと言い返そうとしたらコウキくんに名前を呼ばれた。

「ヒカリさん！後ろ！！」
「え？」

振り向いたら爪を立てたブニャットが私に飛びかかっているのが見えた。セニョールは『溶解液』を止めているから身動きができない。私は身を守るのも忘れて叫んだ。

「キャアアアアアアアッ！！」
「ロゼエエエエエエエッ！！」

目をつぶって顔をそらした。だけどいくら待っても痛みは来ない。

目を開けたら私は意外な光景を見た。２匹の猫が対峙している。水色の太った猫の爪を受け止めていたのはクリーム色に紫の頭巾を被っているスレンダーな猫だった。

「わたしの娘に手を出さないでくれる？」

２匹の猫は距離を取るべくそれぞれの主人のもとへ戻った。

「世界でたった１人しかいない私の大切な子どもなの。あまりにもかわいいから他の町へ行ったらさらわれないか心配で……最近旅に出たばかりなのよ」

「はあ？」

マーズは顔をしかめた。エネコロロの後ろにピンク色のワンピースを着たママがいた。めずらしくキリッとした顔になっている。ママ……もしかして……怒ってる……？

「コウキくん。しばらくヒカリを任せてもいいかしら？」

「えっ……あ、はい！」

言うが早いがコウキくんは私の手を取りママとマーズから遠ざかった。ママ……！これはコンテストじゃなくてバトルだよ……。ちゃんと戦えるの？

「へえ～。あんたがヒカリの母親？」

マーズは舌舐めずりをした。獲物を見つけたと言わんばかりにママを睨みつけている。

「あんたの娘……早めに潰そうとして正解だったわ。あのままほっ

といたらあたしより美人になるじゃない。あんたみたいに」
「娘に手を出されて黙っている母親はいないわ」
ブニャットとエネコロロはにらみあっている。コンテストの女の戦いとはまた違ったキャットファイトが繰り広げられそう。
「ポチャ～」
ナポレオンはセニョールと抱き合った。コウキくんは私の手持ちのボールを渡しながらささやいた。
「ヒカリさんのお母さん、まるでギリシャ神話のデメーテルですね。気迫に満ちています。あれじゃあゼウスとハデス相手でも負けませんよ」
「う、うん……。私もあんなに怒ってるママ初めて見たかも……」
いつもどおり爽やかなのが逆に怖い。殺気立っているとまではいかないけど静かに怒っていた。ママは上品に笑った。
「それじゃあ勝負しましょう。どちらの猫が強いか比べましょう。わたしが勝ったらヒカリに謝ってもらうわ。あなたが勝ったらヒカリの代わりにわたしを好きなだけ傷つけてもいいわよ」
マーズは自分の対戦相手がどれくらい恐ろしいかわかってなかった。ふふーんと自信たっぷりの笑みを浮かべて返事をした。
「その勝負……乗ったわ！！」

第４３話　キャットファイト　＜後編＞（前書き）

これから月に１、２回の更新にします。
『ヒカリの日記』はもう書きません。
一話一話を短く、展開を早めにします。
勉強する時間を増やすため趣味の時間は減らします。

第43話　キャットファイト　＜後編＞

マーズとママは静かににらみあった。……ううん。その表現は正しくない。マーズが一方的にママをにらんでるだけ。ママは静かにマーズを見つめていた。

「ドククラゲ！テキトーに暴れまわってなさい。あたしはこのおばはんと戦うから」

「ドククラ～」

ドククラゲはずるずると動いた。いけない……止めなきゃ！ドククラゲを追いかけようとしたらコウキくんが片腕を上げた。

「ぼくに任せてください」

コウキくんは私の手を引いた。

「お母さんとぼくを信じてください」

＊＊＊

紫ＶＳ灰色。スマートＶＳポッチャリ。意地悪なねこと優しいねこの戦いの火ぶたは切って落とされた。ブニャットの『乱れ引っかき』に対してエネコロロは『往復ビンタ』で応戦していた。エネコロロは他のねこポケモンと比べて爪が短い。『ひっかく』『乱れ引っかき』『切り裂く』を全く使えない。でもママのエネコロロは器用にブニャットの前足をはじいて直撃を防いでいた。こんな戦い方もあるの……！？

マーズはふんと短く笑った。

「防戦一方じゃない！やる気あんの？」

「慎重に戦ってるだけよ」

「あたしが怖いだけじゃないの？……臆病者！」

ママは学校の先生みたいに笑った。

「よく鳴く子ね。さみしがり屋なのかしら？」

「うるさい！！」

今のところ勝負は互角。ママはたぶんまだ本気を出していない。ママなら大丈夫。私はマーズをママに任せて会場を見渡した。

＊＊＊

会場の出口はギンガ団の下っ端たちによって固められている。観客は会場に閉じ込められたままだった。ジュンも、ナタネさんも、モミさんも、ミルちゃんも、メリッサさんも戦っている。サヤカお嬢さまとアキヒコさんはメイドレンジャーによって守られていた。ライコちゃんとライコちゃんのお父さんは戦えないかわりに観客をなだめていた。みんな戦ってる。私はボールに手を出した。私だって……！

「無理をしないでください、ヒカリさん！会場は満員です。おまけにテュポーンがオリュンポスに現れたときのようにみなさんはパニックしています！これ以上ポケモンを出したら……」

「イワークは出さないからせめて手助けだけさせて！」

私は３つのボールを投げた。ルクシオ・ヤミカラス・ムックルが

出てきた。

「キララ★はジュン、ノワールはメリッサさん、クルル♪はナタネさんを援護して！」
「ぎゃう！」
「カーー！」
「クルッ！」

３匹は元気に返事をしてそれぞれの持ち場へ散った。セニョールとナポレオンはここで待機。ラミアはボールの中でお留守番。コウキくんは反対しなかった。

「ドククラゲはぼくが相手をします。その間にヒカリさんはロゼリアを回復させてあげてください」
「うん！」
「ポチャポチャ！」

ナポレオンは自分の存在をアピールした。コウキくんは力強い目でナポレオンを見た。

「ヒカリさんを一緒に守りましょう。頼りにしてますよ」
「ポチャー！」

コウキくんはしゃがんでナポレオンとハイタッチした。め、めずらしい！

「ぼくのそばを離れないでください」

＞ｉ２５２５３―６９９＜

私に忠告するが早いがコウキくんの両手からポケモンが2匹放たれた。炎のサルとピンクの妖精……。

「アポロン！アルテミス！行きますよ！」

「ウキーッ！」

「ピッピ！」

モウカザルとピッピはやる気まんまん。コウキくんはポケモン図鑑を開いた。

「ほう……このドククラゲはメスなんですね」

コウキくんは図鑑をしばらく操作していたけどすぐに閉じた。

「お相手願えますか？Ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ？」

＊＊＊

気になってママの戦いを見たらブニャットがエネコロロに卑怯な攻撃をするところだった。

「『不意打ち！』」

「『甘える』」

私が谷間の発電所で追いつめられた技だ。でもママは最初から『不意打ち』が来るのを予想していたように補助系の技を出した。ブニャットの攻撃は空振りに終わった。

「転がってつぶして！！」

ブニャットはマーズの剣幕にビクッとした。主人の機嫌を損ねないためブニャットは丸まりエネコロロめがけて転がった。この技は『転がる』だわ！

「『怪力』で受け止めて」

エネコロロは武者震いをした。ブニャットが来ると細長い2本の前足で相手を受け止めた。ええーっ！？あの細身のどこにそんな力があるの！？ブニャットはエネコロロにつかまれて身動きできない。回転してるけど前へ進めない。マーズはくやしそう。ママはすました顔で次の攻撃を命じた。

「……そのまま『気合いパンチ』」

「はあ？格闘タイプの技をエネコロロが使えるわけ……」

マーズは息を飲んだ。エネコロロは前足1本でブニャットを押さえ、もう1本の前足にエネルギーをためていた。

「これで終わりよ」

「ブニャット！よけなさい！！」

『気合いパンチ』が炸裂した。エネコロロとブニャットは光に包まれて見えなくなった。

＊＊＊

キャットファイトもすごいけどコウキくんのバトルもすごいことになっていた。ドククラゲはモウカザルとピッピに翻弄されていた。でもしかたないと思う。ドククラゲはトレーナーの命令なしで戦ってるとはいえ私でも苦労すると思うもの。だってコウキくんの戦い

方ったら……。

「そのときアポロンは地を駆け、アルテミスは空を飛んだ。アポロンはテュポーンの足元を崩しその隙にアルテミスは光の矢を放った。テュポーンはもがき苦しむが双子の神は攻撃の手を緩めない。諦めの悪い怪物は敗北を拒んだため神々の裁きを受け続けた。星が舞い、炎は揺れ動く」

長い……長すぎる……。こんなに長いセリフを早口で言われたら理解するのに時間がかかる。日本語なのにコウキくんがポケモンたちになにを指示しているのか全然わからない。まるで暗号だわ！

まずモウカザルが『乱れ引っかき』でドククラゲの触手を切りバランスを崩した。ドククラゲが倒れたあとピッピは『チャージビーム』を放った。電気タイプの技だから水タイプのには効果は抜群。ドククラゲは『溶解液』で2匹同時に攻撃したけどピッピの『光の壁』で塞がれた。モウカザルは『マッハパンチ』、ピッピは『目覚ましビンタ』を打ち続けた。ドククラゲはせめてモウカザルだけでも倒そうと『バブル光線』を出したけどモウカザルの『火炎車』で蒸発しちゃったの。ピッピは『スピードスター』をぶつけてきたし……。

「最後の正義の鉄槌はアルテミスによって下された。狩猟と純潔の女神は慈悲からテュポーンに頭を下げた。その直後、抵抗が止まなかったテュポーンは動かなくなった。かくしてオリュンポスはゼウスとレートーの子どもたちによって救われたのだった」

ピッピはエスパー技の『思念の頭突き』で止めをさした。毒タイプでもあるドククラゲは弱点をつかれて動かなくなった。こうしてモウカザルとピッピは見事ドククラゲを退治しましたとさ。めでた

しめでたし。

「ふう……少し手こずりましたね」

コウキくんはさわやかに笑った。ポケットから取り出したハンカチで顔の汗を拭く。

「神話ではテュポーンの禍々(まがまが)しい姿に驚(おどろ)きゼウス以外の神々は逃げてしまいました。アポロンとアルテミスも含(ふく)めて。でもちゃんと落ち着いて戦えば勝てない相手ではありません。パーンのように慌(あわ)てて上半身がヤギで下半身が魚にならなければね」

コウキくんのウインクがまぶしい。よくわからないけど……コウキくん……かっこいい……！

＊＊＊

浮(う)かれていたらマーズのヒステリックな声で現実に戻された。

「ムキーーーッ！！あたしのブニャットがやられるだなんて……。ドククラゲ！あの女の顔を溶かしておしまい！！」

「無理ですよ」

コウキくんはあっさり否定(ひてい)した。マーズは後ろを見た。ドククラゲが倒れているのを見てうろたえた。ママのエネコロロを相手にするのに夢中で背後でコウキくんがドククラゲと戦ってることにまったく気づかなかったんだもの。

「ちいっ……この役立たず！どいつもこいつもあたしの邪魔をして……！」

マーズはしゃがんだ。下を向きながら震えている。マーズのスカートから何かが飛んだ。ズバットだ！

「あの女の首を切り裂いて！！」

「ズバーッ」

コウモリは真空の刃を放つ。あの技……『エアカッター』だわ！

「ママ！！」

「御母さま！！」

―バチッ。

『エアカッター』は何かに弾かれた。エネコロロのしっぽがクルクル回っている。

「猫の手も借りたいって言うでしょ？『猫の手』はランダムで手持ちポケモンの技を“借りて”出す技。特訓すれば借りる技を自由に選べるようになるのよ」

「それでさっき『気合いパンチ』を……」

「そうよ。『電撃波』」

「ニ～～～ッ！」

エネコロロの毛が逆立ち電撃が飛んだ。ズバットは一撃でやられた。

「今ので最後のポケモンね」

「うぐっ……」

ママはマーズを見下ろした。顔は怒ってないけど怖い。私はママにこんなふうに咎められたことないのに……。ママがマーズになにか言おうとした瞬間別の声が割り込んできた。

「なんだってんだよー！そっちに行くな！またヒカリを傷つける気か？！」

「どけ。おまえの妹分を傷つけるつもりはない。今回は別の奴に用事がある」

1人のギンガ団の女性が歩いてきた。下っ端の服と違ってカスタマイズされている。見たことのない人だ。マーズと同じ幹部かもしれない。ジュンはあれこれ言って彼女を止めようとしていた。それにしても……変な格好。レオタード印刷機だなんてマーズよりも趣味が悪い。

「こんなところで何をしている？」

女の人は蛇のようにマーズをにらみつけた。ふざけた格好をしているけど目は凍るように冷たい。

「なにって……そんなのあたしの勝手でしょ！」

「部下を連れてまでやることか？」

「あたしがあたしの部下をどう使おうかジュピターには関係ないでしょ！」

「関係ある」

マーズと対等に……ううん、女の人のほうが年上なぶん対等以上に話している。同じギンガ団なのにケンカをしてる……？女の人は間を置いてから告げた。

「ボスがお怒りだ」
「っ……！？」

マーズの顔色が変わった。動揺（どうよう）してる……？

「な、なんで……？いつもはあたしがなにやっても任務さえこなしていれば文句言わなかったのに……！」
「さあ？数々の命令違反（めいれいはん）についに我慢（がまん）できなくなったのかもしれない。ボスの口から直接聞け。帰るぞ」
「くっ……」

マーズは歯を食いしばりながらジュピターについていった。会場は静かになりつつあった。ジムリーダーたちがギンガ団の下っ端たちを制圧（せいあつ）しつつあるのかもしれない。２人の幹部をだまって見送るなかママは動いた。

「待ちなさい」

先に止まったのはマーズだった。ジュピターはゆっくりと振り返った。

「……なんだ？」
「マーズちゃんにうちの娘を傷つけようとしたことを謝（あやま）ってほしいの。約束（やくそく）したから」

私はコウキくんと顔を合わせた。ママったらまだ約束を覚えていたんだ！私なんてドククラゲとブニャットの戦いに圧倒（あっとう）されて忘れてたのに。ジュピターは肩をすくめた。

「……そんなことか。マーズ、謝れ」

マーズはぐるりと向きを変え、うつむいたまま私に謝った。

「ごめんなさい……」

声が震えていた。すぐ顔をそむけたけど私は見てしまった。マーズの目には涙がにじんでいた。ジュピターは彼女を気にせずギンガ団に号令をかけた。

「全軍撤退！これはボスの命令だ！」

下っ端たちの間に動揺が走る。彼らはあわててポケモンをしまい、退却していった。

第４３話　キャットファイト　＜後編＞（後書き）

この話ではコウキがかっこつけていますが3年後の『ブラックホワイト』の世界では謎の少年にボコボコにされます（笑）。

イラストギャラリー４（前書き）

久々のイラストギャラリーです。去年の１２月～今年の５月の間に描いた絵です。
以前よりカラー絵が多く豪華になっているのは気のせいでしょうか？（笑）

イラストギャラリー4

『シンオウトリオ15歳』
＞i15225―699＜
『長髪の美少女』の3年後の『ブラックホワイト』で成長した姿で登場！
第0章の最後と第3章の冒頭で登場します。
ジュンがイケメンすぎて笑えます。
どうしてこんなにかっこよくなったんだ！？

『Platinum Winter』
＞i15732―699＜
『長髪の美少女』の3年後の『ブラックホワイト』の姿で登場。
去年のブログのクリスマスのトップ絵でした。

『ヒカリうさぎ』
＞i16075―699＜
友達宛てに描いた年賀状です。
ヒカリはうさみみ似合いすぎです。
小説で冬服着るのはいつでしょうね？（汗）

『和装ヒカリ』
＞i16079―699＜
これも年賀状です。15歳のヒカリ。
失敗作です。ヒカリがかわいくない……。

『森ガールのモミさん』
＞i17871―699＜
ブロ友のリクエストです。

ナタネより先にカラーで描かれた幸運なキャラです（笑）。

『ジュンの手持ちポケモン』
＞ｉ１８５０８―６９９＜
よく感想を描いてくれる海桜さんのリクエストです。
そのうちジュンの手持ちを正式に紹介します。
ヒカリとコウキの手持ちも描きたいなぁ……。

『ジュンの罰金箱』
＞ｉ１８７４５―６９９＜
１００円ショップでこの貯金箱を見て「ジュンにピッタリだ！」と思いました（笑）。
最近ダイソーでは罰金箱シリーズが売れているようです。
似たようなものがほしい人はダイソーへＧＯ！！

『ヒカリＩＮワンダーランド』
＞ｉ１８７７８―６９９＜
前から描きたかったものです。
ポッチャマ（ナポレオン）を描くスペースがありませんでした；
いつかメインキャラでアリス描きたいです。

『ヒカリＩＮ図書館』
＞ｉ１８８３２―６９９＜
ヒカリは本が好きです。
ヒカリは自宅学習だったので知識のほとんどは本から得たものです。
ミオの図書館に着くのはまだかな～。早く鋼鉄島に行きたいですｖＶ

『シンオウトリオとこいのぼり』
＞ｉ２３１７９―６９９＜
５月のブログのトップ絵です。

『ブラホワ』ばかり描いていたのでたまには『長美女』キャラを。
キャラの目の大きさや腕の長さがおかしいですが大目に見てくださ
い＞＜

イラストギャラリー４（後書き）

『長髪の美少女』第２回人気投票を６月１６日に開始します。参加してね☆

イラストギャラリー5　人気投票支援イラスト（前書き）

スクーリングで忙しいのでしばらく小説を書けません。ドイツ文学の授業のためエンデの『モモ』とカフカの『変身』を読みました。2冊とも対照的なお話ですがオススメです。

イラストギャラリー5　人気投票支援イラスト

現在、第2回人気投票が開催中です！
＞ｉ２５８６９―６９９＜
前回はジュン・ヒカリ・コウキがＴＯＰ３でしたが今回はどうなるのでしょう？

せっかくなので作者として各キャラに意気込みを訊いてみることにしました！
似たような質問をキャラたちに聞きますが内容はほぼ共通！……ズバリ！

「あなたは人気投票についてどう思われますか？」

まずは読書中のヒカリとポッチャマから。
＞ｉ２６４４１―６９９＜
人気投票のことはあまり気にしてないようです。

お次はくつろぎ中のアカリさんとエネコロロ。
＞ｉ２６４４２―６９９＜
自分の順位よりヒカリが何位になるか気になるようです。

＊＊＊

……おっと！あそこにヒカリさんのポケモンたちがいます！
せっかくですから彼らにもインタビューしてみましょうか♪
すみませ～ん！そんなところでなにしてるんですか～？＾＾
第2回人気投票で誰が1位になるか予想していただきたいのですが

よろしいですか～？

＞ｉ２６４７５―６９９＜

……ってみなさんこれから投票しに行くところですか！？

組織票でヒカリを勝たせようという魂胆……恐ろしや……（―｜―；

ってダメですよ！ポケモンは投票しちゃいけません！！え？なにを

する気ですか？

なんでみなさん戦闘態勢に入ってるんですか？アハハ～、冗談きつ

いですね～（＾□＾；；

ギャアアアアアアアアアアアアアッ！！？＝Д＝＝

＊＊＊

―数分後……。

いや～、さっきはヒカリさんのポケモンたちにひどい目に合いまし

たね～（＾▽＾；

まさか作者である私に攻撃するとは！

まあ、さっきのあれは作者権限でなかったことにして～♪

気を取り直してジュンとコウキに人気投票に対する意気込みを訊い

てみました☆

「現在人気投票が開催されていますが読者に言いたいことはありま

すか？」

＞ｉ２６５２０―６９９＜

ひどいこと言いますね（笑）。

言いすぎではないでしょうか？（・―・；

＞ｉ２６５２１―６９９＜
……と、思ったらコウキもけっこうひどいこと言ってました（笑）。
これでおあいこですね＾＾

＊＊＊

今度は女性陣に突撃インタビューしてみましょう！！≧▽≦

「人気投票についてなにか一言ありますか？」

トップバッターはナタネさん！
＞ｉ２９３０６―６９９＜
それ死亡フラグですよ（笑）。それとも敗北フラグ……？
ナタネもヒョウタも私の小説では１位になれないと思います；

２番手はナタネさんの親友のモミさん！！
＞ｉ２９３０７―６９９＜
おおっ！？モミさん優し～い＾＾でも順位低いんですよね＞＜
投票してくれる人がいるだけマシですが……。

３番手はチャンピオンのシロナさん！！！
＞ｉ２９３０８―６９９＜
描きません（笑）。ＢＬもＧＬも書きませんし描きません。
それにしてもセクシーですね～（＾＾；

４番手はオリキャラのアキラです！！！！
＞ｉ２９３０９―６９９＜
嫌いな人が多すぎです（笑）。
アキラのモデルとなった妹も「多すぎｗ」と苦笑してました。

物語が進んだらもっと増えますよ。赤いアフロの男とか（笑）。

＊＊＊

最後にタッグパートナーとギンガ団にインタビューしました！
企画が進むたびに絵が雑になっていきましたがそこは勘弁してください；

「読者へのメッセージはありますか？」

では気になるあの方にインタビュー！！
＞ｉ２９３５５―６９９＜
青くて黒い人は人気投票も読者も眼中にないようです；
気になるのは特撮の続き……（笑）。

お次はおチビちゃんたちです。幼女と言ってはいけません（笑）。
＞ｉ２９３５６―６９９＜
アキコとミルの仲はあいかわらず微妙です；
票が多かったほうがヒカリを姉にするとか賭けてませんよね？（笑）

ギンガ団のしたっぱにもついでにインタビューしてみました。
＞ｉ２９３５４―６９９＜
よくわかりませんが名物コンビのイン＆サツはがんばってますね。
でも『ドラ●ンボール』の見すぎじゃないですか？
元気玉でも打つつもりなのでしょうか？（笑）

最後はギンガ団幹部に決めてもらいましょう！！
＞ｉ２９３５７―６９９＜
マーズはもっと票がほしいそうです。
投票しないと痛い目に合うかもしれませんよ＞＜

ジュピターは完全に無関心。仕事人間ですね。

＊＊＊

以上、第2回人気投票支援イラストは終了～！
人気投票の締切まで今晩を含めてあと3日。
結果発表のイラストを描くのはめんどくさいですがそれでも結果が楽しみです＾＾
余談ですがコウキ以降の絵から雑になったのは授業中に描いたからです（爆笑）。

イラストギャラリー5　人気投票支援イラスト（後書き）

シロナ「現在第2回人気投票開催中！あたしに投票したら作者がこの小説をガールズラブにするって言ってたわよ♪」

アキラ「そんなわけないだろ！嘘（うそ）をつくな！1位になったキャラは結果発表のイラストでカラーで描かれるんだろ！」

ヒカリ「みなさんシロナさんの言ったことは気にせず好きなキャラに投票してくださいね☆」

※念のため言っておきますがシロナさんはレズではありません。ただ女の子をからかうのが好きなだけです（笑）。

＊人気投票は8月18日23時59分まで投票を受け付けました＊

☆第２回　人気投票　結果発表☆

さあ待ちに待った第２回人気投票結果発表！投票数はなんと全部で１３８票！
前回の投票より７１票も多いです。こんなにたくさんの票が集まってサジうれしい♪
２０１１年６月１６日から８月１８日にかけて行った人気投票。
それでは結果発表を始めます！今年の流行ったマリンルックでお送りいたします！

まずは同率１２位の２人から！

＞ｉ３０７１２―６９９＜
１２位　ミル　１票　ＮＥＷ！

ハクタイシティの元気っ娘！ミルちゃんにも票が入りました！
少ししか出てないけど票が入っていてよかったですね＾＾

ミル「１票しか入らなかったんだ。でもいいや。アキコは０票だし。投票してくれた人ありがとう！」

＞ｉ３０７１３―６９９＜
１２位　モミ　１票　←ＤＯＷＮ（前回６位　１票）

森ガールのモミさん、再び１票獲得！
でも今回は票が入ったキャラが多かったので順位が下がってしまいました。

・出番がそんなに多く出れる訳ではないけど、モミお姉ちゃん及び

この世界でのモミは十分好きになれます☆（男性　，　秘密）

モミ「またこの前と同じ人が投票してくれたの？ありがとう。うれしいわ。優しいのね」

＞ｉ３０７１５―６９９＜
１０位　マーズ　２票　ＮＥＷ！

ギンガ団のアイドル、マーズ初ランクイン！
コンテスト会場で暴れまわったかいがありましたね。

マーズ「なーに？やっとあたしの魅力を理解してくれる読者が２人できたの？んー……とりあえず投票してくれてありがとー♪」

＞ｉ３０７１４―６９９＜
１０位　マキシマム仮面　２票　ＮＥＷ！

こんなやつ使い回しの絵で充分です（笑）。
どうせ正体はちゃんと描かなきゃいけないのですから。
マーズと同じく前回の０票だったのに今回は２票もらいました。
おめでとーございまーす（棒読み）。

・ヒカリちゃんを助けたとき、とてもかっこよかったです！（女性，１５～１７歳）

マキシマム仮面Ｊｒ．「よいこのみんな！オレに投票してくれてありがとう！わるいこには罰金１００万円！！……じゃなくてエビワラーパンチだあー！」

７位はなんと３人います。それでは若い順からどうぞー！

＞ｉ３０７１６―６９９＜
７位　ナタネ　３票　ＮＥＷ！

恋する乙女、ナタネさんの順位はラッキーセブン！
思ってたより票が伸びませんでしたがドンマイです。
原作と違ってヒョウタさんに恋してるところがかわいくありませんか？＾＾

・ナタネさんかわいいです。恋してるんだね～！ガンバ！！（女性，～１４歳）

ナタネ「ありがとう！アタシ……がんばる！恋も、ポケモンバトルも！」

＞ｉ３０７１７―６９９＜
７位　アカリ　３票　ＮＥＷ！

おっとりお母さまも７位です。コンテストで株が上がりましたね。
意外と芯が強かったりします。ほとんど１人でヒカリを育てましたからね。母は強し……！

・コンテストの話での活躍が素晴らしかったです。（秘密　，　１８～２２歳）

アカリ「あら。わたしなんかに投票してくれたの？……うふふ。ありがとう。それよりヒカリはどうなったのかしら？気になるわ～」

＞ｉ３０７１８―６９９＜
７位　あおくてくろい人　３票　←ＤＯＷＮ　（前回５位　２票）

キャーーーー！！▲▲さまーー！！≧≦▽≦≦
うっかりイラストに本名書いちゃったけど見なかったことにしてくださいm（苦笑）。
早くヒカリと会わせたいですがそうもいかないんですよね。

・仮面ファイター（某特撮のパロディ）のなりきりをしながらギンガ団と戦ってくれましたねw？（男性，秘密）
・謎のイケメン、て良いですね☆：ｋｉｒａｒａ（女性，～14歳）

ジュン「仮面ファイターカフェはなかなかだったな……。ん？なにかワタシに用かね？」

＞ｉ３０７１９―６９９＜
６位　イン＆サツ　６票　ＮＥＷ！

んまあ！聞いてくださいよ奥さん。
ギンガ団のしたっぱのくせに幹部のマーズよりも票をもらってますわよ……。
前回ランキング外だったのにちゃっかり入っています。
コンビだからこそ可能だったのでしょうね。

・彼らの、ネタキャラとしてのインパクトの強さは突出していると思います。（Ｍｏｏｎｌｉｇｈｔ）（秘密，１８～２２歳）

イン「サツ先輩！オレたちやりましたね！」
サツ「ああ……。ついにオレたちの時代が来たぜ！ワハハハハ！」

＞ｉ３０７２０―６９９＜

５位　シロナ　８票　ＮＥＷ！

最近アキラとヒカリを引っかき回していた効果が出たのか一気に５位に躍り出ました！
でもその割にはコメント０。さみしいですね。でもシロナさんは書いていて楽しいです♪

シロナ「みんな～、投票してくれてありがと～♪あと１０１票くれれば私が１位になってこの小説がガールズラブになるわよ～？」
アキラ「ならん！っていうか求める票数多すぎるだろ！！」

＞ｉ３０７２１―６９９＜
４位　コウキ　９票　←ＤＯＷＮ　（前回３位　８票）

コウキ、ＴＯＰ３入りできず。票数自体は上がってますが足りません。
今回はけっこう票がバラけましたからね。もっと活躍の場を与えるべきだったでしょうか？
コンテストでヒカリをサポートしましたが……。

・ヒカリちゃんとラブラブしてほしいです。　紅弓　矢藍（女性　，１５～１７歳）

コウキ「ボクもヒカリさんとラブラブしたいです！！でもできないんですよ。ライバルが多すぎて……。くっ……ヒカリさんにふさわしい男になってみせるので期待していてください！」

＞ｉ３０７２２―６９９＜
３位　アキラ　１１票　→ＵＰ！（前回６位　１票）

なんと！オリキャラなのに3位になりました！
モデルとなった私の妹もよろこんでいます！前回の1票から華麗に汚名返上しましたね。
これが本当の下剋上です（笑）。コメントも8個もらいました。

・前回と同じ、アキラです！　理由としては前と同じですが、シロナとのやり取りもとてもおもしろかったですし…ね（笑）（女性　，～14歳）
・アキラのように、カッコイイ女の人が私の憧れです。頑張れアキラ！（女性　，　15～17歳）
・女性なのにカッコいいから（女性　，　～14歳）
・ひらひらの服の絵がよかった。（男性　，　18～22歳）
・かっこいー！！　でもどこかかわいいのがいい～（女性　，　～14歳）
・イケメン（？）なので大好きです！！でも恋してたり、ちょっと乙女なところも好きです！！　Ｈａｒｕｋａ♪（女性　，　～14歳）
・ひそかにアキラが一位になることを願っていたり（笑）。（女性　，　～14歳）
・クールでカッコイイ女の子ってすごくいいなあって思います（秘密　，　15～17歳）

アキラ「なにっ！？私が3位だと？……シロナがしかけたドッキリじゃないよな？よし。みんな！……投票ありがとう。コウキより上でうれしいよ。これからもヒカリの先輩としてかっこよく決めてみせる！」

では気になる1位と2位は……？

＊＊＊

ある1匹のポケモンが港（みなと）にいた。そのポケモンはしきりに掲示板を見ていた。何度みても掲示板の結果は変わらない。待っている間に足音が聞こえてきた。そのポケモンは己（おのれ）の主（あるじ）を見かけると泣きながら飛びついた。

「泣かないで、ナポレオン。私は気にしてないわ」

―うう……うっ、うっ、うっ……。

ペンギンポケモン、ポッチャマは主の腕の中で泣いた。

―ヒカリが気にしなくても、ボクちゃまは気にするもん……。

主は微笑みながらポッチャマの背中をなでた。

「今回も2位だったけど下がらなかっただけマシよ」

―ヒカリが1位じゃなきゃイヤだ!!

「前回の投票より26票も増えたのよ？1位じゃなくてもうれしいわ」

ヒカリは女神のように穏やかな表情を浮かべていた。だがポッチャマの心は晴れない。

―よくないよ……。大好きな人に1位になってほしかった。くやしいよ、くやしいよ……。

大好きな人に抱きしめられながら、ポッチャマは決心した。

―ポケモンの人気投票でボクちゃまが1位になってやる……ヒカリの敵(かたき)を討つんだ！

　自分のポケモンがそんなことを考えているとは露(つゆ)知らず、ヒカリはナポレオンをなで続けた。

＞ｉ３０７２３―６９９＜

２位　ヒカリ　３９票　↓ＳＡＭＥ（前回２位　１３票）

・主人公で可愛いから！（男性　，　１５～１７歳）

・かわいらしいけど、窮地におかれた時には頑張る、その姿が魅力的です。（ｍｏｏｎｌｉｇｈｔ）（秘密　，　１８～２２歳）

・ボクもヒカリのような天才だったらいい！明るく素敵で優しい女の子が好きです！（秘密　，　１５～１７歳）

・可愛いくて、それでいて頑張る姿はいつだって自分に勇気をわけてくれます。そんなヒカリにはその名の通りいつでも元気いっぱいでいてほしいですｗ　Ｋａｒｙｕ（男性　，　１８～２２歳）

・可愛くて、いつも一生懸命頑張っているからです！　ソフィア（女性　，　１５～１７歳）

・ヒカリ可愛いです！オシャレだし～！（女性　，　～１４歳）

・ヒカリちゃんはみんなの憧れの的です！私も見習いたいな～☆（女性　，　秘密）

・やはり最後の投票は主人公の彼女。物語の中心はやはりヒカリですから。（Ｍｏｏｎｌｉｇｈｔ）（秘密　，　１８～２２歳）

ヒカリは今回も2位ですが票の２８％を集めているところを見ると人気が上がりましたね。かわいい、明るい、がんばっていると読者に好感を持たれています。勘違いなされている方がいるみたいですがヒカリは天才ではありません。努力家です。めちゃくちゃ努力し

ています。もともと才能はあるかもしれませんがそれを生かす努力をしているからこそ今のヒカリがあります。だからみなさんもヒカリに負けないくらい強く美しく生きてください！

＊＊＊

ん？まてよ……。ヒカリが2位ということはまさか栄光の1位は……！？

＞ｉ３０７２４―６９９＜

１位　ジュン　５０票　↓ＳＡＭＥ（前回１位　３３票）

・ジュン好きです♪ああでもヒカリとコウキも捨てがたい！（笑（女性　，　１５～１７歳）

・真っ直ぐな彼が好きです♪　いちばん応援したくなるキャラですねｗ　クローネ　（女性　，　１８～２２歳）

・いず♪：めっちゃ好き～！！（女性　，　～１４歳）

・是非ジュンに、　ヒカリちゃんをうばってほしい！！（女性　，　～１４歳）
・素直なで、まっすぐなところが好きです！（女性　，　１５～１７歳）
・ジュンのお騒がせっぷりが大好きです。見ていて楽しくなります！　ｓｎｏｗ　ｗｈｉｔｅ（女性　，　１５～１７歳）
・バカで純粋なところがだいすきです＾＾見ていて楽しい！（女性　，　～１４歳）
・ジュン最強面白いで～す♪♪　アルル（女性　，　～１４歳）
・ジュン、大好きです@響子（女性　，　秘密）
・この小説の中で、たぶん１番面白いと思います＼（＝∀＝）／；○子（女性　，　秘密）
・バカで鈍感だけど、かっこいいから大好きです♪（女性　，　１５～１７歳）
・ジュンはせっかちで、馬鹿だけど、そこが面白くて、ジュンの魅力の一つでもあると思います。ジュンは読むと『笑顔と、勇気と元気を与えてくれるとてもいいキャラだと思います！！（女性　，　秘密）

お騒がせボーイ、再び1位。うひゃ～。ジュン人気すぎ！（笑）ヒカリもアキラもがんばったけどジュンには敵いませんでした。むしろヒカリとアキラの票を合わせて初めてジュンに追いつくという始末（苦笑）。前回の投票数の倍にならなかったとはいえ票の３６％はジュンが独占！すごいですよね。しかも周りがマリンルックの中空気読まずに海賊のコスプレしちゃってます。我が道を歩んでいますね……。

ジュン「海賊王にオレはなる！！……じゃなかった。ポケモンチャンピオンにオレはなる！！よっ！みんな！こんなにオレに投票してくれてサンキューな！なかにはオレに何回も投票してくれる人もい

てオレさま感激したぜ！これからもみんな『長美女』をよろしくな☆」

たくさんの投票ありがとうございました。Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｔｉｍｅ！

☆第2回　人気投票　結果発表☆（後書き）

すみません！結果発表のイラストを書いていたら遅れました。
票が入ったキャラの絵は全て描いたのですが3日もかかってしまいました；
ボールペンで仕上げたのですが修正ペンで直した跡が見えて恥ずかしいです　＞＜

第４４話　サプライズ　＜前編＞

―クルッポー、クルッポー。

窓越しに聞こえてくる野生のムックルの鳴き声。カーテンの隙間から差し込んでくる光。となりから聞こえてくる規則正しい誰かの寝息。きっとナポレオンのね……。いくつかの要素が重なって私は眠りから覚めた。

「おはよう。ナポレオン」

私はとなりにいるポッチャマに声をかけた……つもりだった。でもとなりで寝ていたのは見慣れた青いペンギンじゃなかったの。私のとなりに横たわっていたのは金髪の美女だった。

「キャアアアアアアアアアッ！！シ、シ、シ、シロナさん……？」

私は思わず飛び上がった。そう。となりですやすや寝息を立てている女性はシンオウのポケモンチャンピオン―シロナさんだった。白いフリルつきの黒いランジェリーを着たシロナさんはとても色っぽかった。

「ん～？……あら、ヒカリちゃんお目覚め？」

シロナさんはまぶたをふいたあとあくびをした。私の悲鳴で起こしちゃったみたい……ってなんでシロナさんがここにいるの！？ナポレオンは！？

「ン～……ン～……」

ベッドの横下からくもった声が聞こえる。気になって下を向いてみた。そこにはガムテープで口をふさがれロープでぐるぐる巻きになったポッチャマがいた。ナポレオオオオオオオン！！

「ナポレオン！？これってシロナさんがやったんですか？」

あせる私をよそにシロナさんはのんびり体を伸ばしていた。

「ええ。ヒカリちゃんと一緒に寝ようとしたら暴れてしかたなく……ね♪」

ね♪ってウインクされても～～～～！！

「そもそもなんでシロナさんがここにいるんですか！？ここはウラヤマ家の屋敷ですよ！」

そう。ここは２１２番道路にあるサヤカお嬢さまとアキヒコさんのお屋敷。コンテストが始まる前からお世話になっているところだ。高度なセキュリティと腕効きの護衛がいるからいくらチャンピオンのシロナさんでもそう簡単に入ってこれないはず！

「やだ～。ヒカリちゃんねぼけてるの？かわいい～♪昨日なにがあったか覚えてないの？」

「昨日って……」

私は体を動かすのをやめて全神経を頭に集中させた。ええっと……昨日は朝にマスターランクのコンテストがあって……ギンガ団が会場をジャックして……みんなでギンガ団と戦って…

……ギンガ団がいなくなったあとシロナさんが天井を突き破って現れて……！

「……少し思い出しました」

「も～う、昨日あんなことあったのに忘れちゃうだなんてよっぽど疲れたのね！」

シロナさんはほっぺたをぷく～っとふくらませた。大人の女性なのに子どもっぽい。でも美人だから許せちゃう。アキラは許さないかもしれないけど。

「それより一昨日ヒカリちゃんのためにこれ買ったの！いちごの柄のパンティー！……かわいいでしょ～？ブラジャーもあるわよ？」

「はいっ！？」

シロナさんは下着を持ってジリジリと私に近づいた。いやな予感がして私はあとずさった。

「あたしたち女同士よ？恥ずかしがらなくてもいいじゃな～い♪」

「え……あ、いえ……そうですけど……」

シロナさん……さっきから笑顔だけどなんか怖いんですけど！！

「それじゃあさっそくご試着タ～イム♪」

「キャアアアアアアアアアアッ！！」

先手を取られた。シロナさんは私にぴょーんと飛びつくとひじで私の両手を押さえた。

「ン～！！ン～！！」

ナポレオンの必死なうめき声が聞こえる。でもナポレオンは私を助けられない。助けてほしい人の名前が浮かばなかったけど私はとりあえず叫んだ。

「キャーーーー!!誰か助けてーーーーーー!!」

―ドンッ!

叫び終わったと同時に音がした。ドアがなくなっていた。ドアがあった場所にはアキラとゴウカザルが立っていた。

「ハァ……ハァ……」

昨日の朝と同じように走ってきたのか息が荒い。

「ア、アキラ……!」

「ンンン～!」

＞i26054―699＜

ヒーローが現れた。ナポレオンも私も同じ気持ちだった。アキラは深呼吸をしたあと叫んだ。

「シロナーーーーーーーーー!!貴様はそんな格好でなにをしようとしているんだーーーー?!」

大人の女性がいちご柄の下着を手にしたまま少女の上に乗っかっている。どう考えても怪しい。でもシロナさんはあっけらかんとしていた。

「……あら、アキラじゃない。アキラもヒカリちゃんを味見する？」

このあと現チャンピオンと元チャンピオンは私の部屋で激しいポケモンバトルを繰り広げた。コウキくんが３０秒後に駆けつけたけどゴウカザルの攻撃が飛び火して気絶した。

第４４話　サプライズ　＜中編１＞

そう。思い出した。ギンガ団がいなくなったあとシロナさんが降ってきたんだ。隕石とともに。天井を突き破って。ナポレオンとセニョールはおどろいて私の脚にくっついた。

「ハ～イ！みんな～！ポケモンチャンピオンのシロナよ～～！！あたしが来たからにはもう大丈夫！ギンガ団なんてイチコロよ♪……ってあら？ギンガ団どこ？」

終戦の空気を察知したシロナさんは敵を探したけど見つけられなかった。だってもう人型印刷機軍団はいないんだもん。シロナさんは事情を把握しようと首を動かしたら私を見つけた。私を見たとたんシロナさんの表情がぱあっと明るくなった。１００点の笑顔で両手を広げて私に駆け寄ってきた。

「ヒカリ～！！無事だったの～～？よかった～」

「うぷっ」

私はシロナさんに胸を押し付けられた。むぎゅ～～と抱きしめられているので動けない。シロナさんの推定Ｆカップは柔らかかったけど私から酸素を奪った。く、苦しい……！

「ん～！んん～～！！」

「もしかしてヒカリが全員やっつけたの～？すご～い♪もう次期チャンピオンは決まりのようなものじゃな～い」

「ポチャ！ポチャポッチャー！」

「ロゼ～！」

違います。ママとコウキくんとジュンとナタネさんとメリッサさんたちががんばってくれました。ってそれよりち、ち、ち、窒息死するーーーー!!ナポレオンとセニョールはシロナさんの脚を引っぱったけどビクともしなかった。

「離せ!ヒカリが窒息死する」

アキラの声がした直後シロナさんが離れた。私は呼吸できなかったぶんゼエゼエした。見上げてみたらアキラが両腕でシロナさんの両腕を拘束していた。アキラは顔をしかめている。シロナさんは笑っていた。

「本当はうらやましいんじゃない?」
「私が男だったらな」
「私のEカップが」
「そっちか!?うらやましくない!」
「そんなんだからAカップなのよ~」
「うるさい!関係ないだろう!」

シロナさんは両腕を確保されながらも体をくねくねさせて入場客の笑いを取っていた。まるで震災の被害者をなぐさめるため行われた漫才だわ。ふと2人から目を外すとママと目が合った。

「ヒカリ……」
「ママ……」

ママはいつもと同じように落ち着いたステップで歩いてきた。でも私はこんなときにゆっくり歩けるほど子どもじゃなくて……ママに飛びついた。

「ママ！助けてくれてありがとう！」

あたしは3週間ぶりにママに抱きついた。甘えたかった。泣きじゃくった。ギンガ団が乱入したとき恐かった。ポケモンがいないと……ナポレオンたちがいないと私はこんなに無力だったんだ。セニョールはがんばってくれたけどポケモン1匹じゃマーズにも勝てない。今回私はなにもできなかった。なにも……。

「……ごめん。私ママのこと誤解してた。ママは優しかったんだね。ポケモン持ってること内緒にしてたのも私を危険な目に合わせたくなかっただけなんだよね……」

「ヒカリ……」

涙でママの顔がよく見えないけどわかる。ママの声は私を責めていない。いつもそう。ママは叱る必要なんてないんだ。全てを包み込むほど優しいから……私の胸が罪悪感でいっぱいになって反省しちゃうから。ママの体温が正面だけでなく背中にも回ってきた。

「ママもごめんね。助けるのが遅れて……。ポケモン持っていたこと、言い忘れちゃったの。ヒカリのロゼリアの演技、とっても素晴らしかったわ。ちょっと見ない間にこんなに成長したのね。ママうれしい！」

「ママ……うわあああああああああん！」

私は大声で泣いた。周りの人なんてどうでもよくって。ナポレオンとセニョールも置いていっちゃって。……いいよね？ポケモントレーナーになるまえの私に戻ってもいいよね？ちょっとだけ幼いときのように大声で泣いてママに甘えてもいいよね？

「よしよし。よくがんばったわね。あなたは私の自慢の娘よ」

「ママ～～～！」

私とママは抱き合った。緊張が解けて感情がどっと押し寄せてくる。よろこびも悲しさも全部吐き出すまで泣くのはやめられない。

「オー！家族愛ですねー！ビューティフル！！」

パチパチと手を叩きながら立ちあがったのはジムリーダーのメリッサさんだ。薄紫のドレスはギンガ団との戦いのせいで汚れてところどころ破けてしまっている。４つのお団子も少しほどけていた。メリッサさんは興奮した様子でママごと私をハッグした。

「親子仲が良いのはいいことですねー。アカリもヒカリもコンテストすごかった！もうこれは2人とも優勝でいいですよねー？」

「ええっ！？」

コンテストの勝敗なんて忘れてた。もうこのさい私が勝っても負けてもどうでもいい。大切なことを学んだから。ギンガ団のテロでそれどころじゃなかったし。メリッサさんはママと私をゆりかごのように揺らした。ママはちょっと考えてからこう答えた。

「審査員がいいんならそれでいいんじゃない？」

「決まりですねー！」

メリッサさんは万歳をして私たちから離れると審査員たちを見た。真っ先に動いたのはミミィさんだった。

「さんせ～い♪もうそれでいいんじゃな～い☆アカリもヒカリもだっっいすき！！」

「えっ！？」

「なんと！」

残る審査員2人は顔を見合わせた。サスケさんとビッグさんは迷った。サスケさんは電光掲示板をチラ見した。掲示板はドククラゲの攻撃で落ちて壊れていた。ビッグさんは突然笑いだした。

「ハッハッハッハッ！たまにはいいじゃないか。1位が2人いても」

「えーっ！？でもビッグさん……まあいいや。ミミィさんやビッグさんが賛成しているのに僕だけ反対したら悪者ですもんね」

サスケさんは肩をすくめた。メリッサさんは気を良くして回転した。

「それでは～～～みなさん！2人の優勝者に対して拍手～～～！！」

最初はみんな戸惑（とまど）った。でもライコちゃんとミルちゃんが率先（そっせん）して拍手してくれた。

―パチパチパチパチ。

アキコちゃんもコウキくんも。ジュンもジュンママも。

―パチパチパチパチパチパチ。

アキラとシロナさんも。ナタネさんもモミさんも。

―パチパチパチパチパチパチパチパチ。

サヤカお嬢さまもアキヒコお坊ちゃまもメイドレンジャーも。私

を応援しにきてくれた人たちは迷わず拍手してくれた。やがて他の観客の拍手も合わさって会場は拍手でいっぱいになった。会場はボロボロになったけど、心はとても温かい。午後の太陽は温かく私たちを平等に照らしてくれる。

「おめでっとーーーう！！ハナゾノ親子！」
「引き分け上等！」
「今度こそ白黒つけろよ～～」
「ポケモンもあなたたちも綺麗だったわ！」
「ヒカリさんもアカリさんも大好きですーーー！」
「次こそ勝って～～！」
「かーちゃん超えろよー！」

＞ｉ３０１４９―６９９＜

―パチパチパチ……。

拍手もだいぶ治まったとき、会場に青い制服を着た人たちが入ってきた。警察だ！１人だけコート着てる人がいるけどあれってハンサムさんだよね？

「警察だ！ちなみにわたしだけ国際警察だ！みんな無事か！？」

警察が来たけど遅すぎた。ギンガ団はもう町にはいないと思う。１時間もいたような気がするけど実際ここにいたのは数十分だけ。暴れるだけ暴れてすぐ去ってしまった。まるで竜巻のように。

「誰だ！？『流星群』を使ったのは？ここへ駆けつける途中見たぞ！」

ハンサムさんはいつも以上に眉を吊り上げ口は「へ」の字どころか逆「V」の字になっている。シロナさんは胸を張って答えた。

「ギンガ団のせいです！！彼らは置き土産にポケモンに『流星群』を命じたんです。ひどい方たちでしょう？」

「うむ！なるほど。わかった！」

わかってない。なにもわかってない。ハンサムさんと警察はシロナさんに騙(だま)されている。でも私も発電所をボロボロにしたときギンガ団のせいにしたからなにも言えない。悪いことがあったら全てギンガ団のせいにする。だんだんそれが正義の味方の定番になっていった。

第４４話　サプライズ　＜中編２＞

昨日はとにかくいろんなことがおこりすぎた。コンテストでハラハラして、ギンガ団と戦って、シロナさんと警察が現れて……。会場にいた人たちは全員警察に事情聴取されたあと解放された。幸いケガした人たちは全員軽傷だった。マーズの目的は私とコンテストをメチャクチャにすることだったみたい。誰１人ポケモンも持ち物も盗まれなかった。

私を心配したシロナさんはボディガードとしてウラヤマ家に泊まることを提案。アキラがママと私を同じ部屋にすることを勧めるにも構わず自分のほうが腕が立つと説得。代わりにアキラがママと同じ部屋になることに。ヒカリを襲うなと忠告したにも関わらず今朝シロナさんがあんなことがしたから私の部屋は黒こげになってしまった。

……現在私はウラヤマ家の前庭にいる。大きな丸いテーブルにすわってみんなとアフターヌーンティーをいただくことになったからだ。テーブルの上にはティーポットとカップが複数、食べ物が乗ったお皿もたくさんならんでいる。スコーン、クッキー、マカロン、ケーキ、サンドイッチ、キッシュ……上流階級が午後の紅茶に食べるものは全てそろっていた。スコーン用のジャム、クロテッドクリーム、生クリーム、はちみつまである。屋敷の家族と客は全員テーブルの席についていた。ただ１人、シロナさんを除いて……。

「それにしても良い天気ですわね～。まさに紅茶日和ですわ～」

サヤカお嬢さまは笑っていたけどどこかピリピリしていた。子どもでも本能的にわかるくらいご機嫌ななめだ。

「ヒカリさまを襲い部屋まで台無しにした人がいなくなったのでせいせいしましたわ～」

サヤカお嬢さまは私のとなりにすわっている。本音を言うと今のサヤカお嬢さまのとなりにはすわりたくなかった。だけどサヤカお嬢さまの機嫌をこれ以上損ねたくなかったのですわっている。右にはアキラ、そのさらに右にはママがすわっている。あとはコウキくんのお母さま・アキコちゃん・コウキくん・ジュン・ジュンママ・ウラヤマさん・アキヒコさんとテーブルをぐるりと囲っている。メイドレンジャーは周りで待機。1人だけおじいさん執事がいるけどウラヤマさん専属の執事みたい。ナタネさんとモミさんとミルちゃんはメリッサさんの家に泊まったからここにはいない。ライコちゃんとライコちゃんのパパは昨日のうちにソノオタウンに帰ってしまった。

「ヒカリさまの部屋は今修理しておりますのでもう少しお待ちくださいね。明日までには元通りになりますから今夜は別の部屋を用意しますわ。なんならいっそのことヒカリさま専用の家を敷地内に建てても……」

「えっ!?あっ……いえ、けっこうです!」

もう一晩ウラヤマ家に泊まるのはかまわないけど家一軒建てるのはさすがに困る。ポケモンチャンピオンと図鑑完成の旅はかなり時間がかかる。同じ家に留まることは短いもの。サヤカお嬢さまの機嫌を損ねたくないけど全てサヤカお嬢さまの言う通りにするわけにはいかなかった。

「それにしてもシロナさんったら……ヒカリさまが好きで、さらにアキラと同じチャンピオンと聞いたので信頼していましたのに

……。よりによってヒカリさまを襲うだなんて見損ないましたわ。チャンピオンといえどももう二度と敷地をまたぐことは許しませんわ……！」

ベキッと音のあとサヤカお嬢さまのティーカップがテーブルの上に落ちた。カップの取っ手はサヤカお嬢さまが握ったままだった。その場にいた未成年は全員ゾッとした。メイドレンジャーも青ざめている。サヤカお嬢さまは怒りのあまりティーカップを壊してしまったの。でも大人たちは談笑していてこの出来事に気づいてない。

「サ、サヤカお嬢さま！お怪我は？！」

メイド長のクレアさんが駆けつけた。壊れたティーカップの後始末はメイドピンクがやっている。

「大丈夫よ。代わりを持ってきてちょうだい」

「……かしこまりました」

クレアさんはサヤカお嬢さまに気づかないように私をにらんだ。シ、シロナさんに襲われたのは私のせいじゃないのにーーー！！

―ダッダッ。ダッダッ。ダッダッ。

「ぎゃう～～～！」

そんなときピリピリした空気を壊すのにちょうどいいタイミングで私のポケモンが来た。ルクシオのキララだ。涙目で私になにか訴えている。私たちのポケモンはそれぞれ庭で見つけたお気に入りスポットで遊んでいたはずなのに……。いつもはひかえめなキララがあせっている。私のワンピースを噛んで引っぱっている。しかたな

く私はキララが望むように立った。サヤカお嬢さまはそれを気に入らなかったのか一瞬顔をしかめた。

「ヒカリさまのワンピースを噛まないでくださる？汚れてしまったではないですか。それにワンピースが伸びたらどうするのですか？」

「ぎゃっ！？」

人間みたいに叫ぶとキララは首をカクカク動かし謝った。でも私から離れようとはせず私の後ろに隠れた。……隠れたといってもキララは2本足だったら私とほぼ同じ大きさになる。隠れきれるはずがなく頭もお尻も丸見えだった。

―ダダダダダッ！

そこへまた別のポケモンがやってきた。アキラが気づいてそのポケモンにやめるように命令したけど止まらなかった。

「ガオーーーー♪」

「キャーーーー！？」

「ぎゃう～～ん！！」

―ズッシーン！

黒いライオンのようなポケモンは遠慮なく私ごとキララにのしかかってきた。……お、重い。つぶされる……。青いライオンの背後からアキラの声が響いた。

「こら！スター！いい加減にしろ！」

「ガウ！ガウガウ！」

「ぎゃう～……」

黒いライオンは上半身を起こした。キララより大きくて立派なたてがみを持っている。黄色い星がついたしっぽは機嫌がよさそうに左右にゆれている。ルクシオの進化系、レントラーだ。アキラの手持ちでニックネームはスター。しっぽの形にちなんだんだって。性別はたしかオス。

「おすわり！」
「ガウ！」

ライオンなのになぜかアキラは犬に命令するようなことを言った。スターはしばらくすわっていたものの我慢しきれず私のほうへ跳んできた。

「キャッ！？」
「ぎゃんっ！」

……といっても標的は私じゃない。狙っているのはキララのほうだ。

「あっ！こらっ！」

スターはアキラにかまわずキララの首根っこを噛んで逃げてしまった。

「すまない！ヒカリ！」
「キララーーーー！！」

私はアキラと一緒にスターを追いかけた。追いかけられていることに気づくとスターは屋根の上にジャンプした。これじゃあ手が届

かない。スターは誰にもジャマされないと安心したのかキララを離した。

「ぎゃう～～……」

キララは屋根から地面を見下ろした。１回進化したポケモンとはいえ３ｍ以上の高さから跳び降りるには勇気がいる。ひかえめな性格のポケモンならなおさらだ。スターはにこにこしながらキララ前足で押さえつけ体をなめた。グルーミングだ。キララのために毛づくろいをしているんだわ！

「こら～～！スターーー！降りてこ～～い！」

「ガウ～～～？」

アキラが呼びかけたのにスターは聞こえないフリをした。い、いじわる……。アキラは何回も命令したのにスターにいっこうにしたがう気配がない。アキラはため息をついた。

「すまない……。私のレントラーは無邪気な性格なんだ。バトルのときは言うことを聞くんだがそれ以外のときはたまに言うことを聞かないことがあって……」

「そ、そうなの……？」

キララはか細い声で叫んでいた。キララなりに抵抗しているけどスターはそんなのおかまいなしだ。しまいにはキララを転がして遊ぶようになっちゃった……ってええー！？さすがに困るわ！キララがかわいそう！

「キララ！！」

私は助けを求めようと庭を見た。ナポレオンはコウキくんのモウカザルとジュンのハヤシガメといっしょだ。ラミアとランスとセニョールは日向でお昼寝中。クルルとノワールは木の上でデート。残りのポケモンは私の手持ちじゃないからお願いできないし……。

「ボールに戻したいんならそうしてくれ。私が許可する。スターはあとで叱る」

「う、うん。キララ、戻って！」

「ぎゃう～」

キララは浮かばれるような顔をしてボールに吸い込まれていった。おおげさによろこんでたわね……。スターはというと遊び相手を失いふてくされていた。私たちに背を向けて丸まってしまった。私はキララのボールを見てため息をついた。アキラはめずらしく弱気に話しかけてきた。

「どうしたんだ？私のスターのせいか？」

「ちがうの。私、このままキララと旅しててていいのかなって……」

第４４話　サプライズ　＜中編２＞（後書き）

挿絵は後日追加します。＜後編＞は明日更新します。

第４４話　サプライズ　＜後編＞

楽しい（？）アフターヌーンティーのあとは用事でヨスガシティへ出かけた。用事というのはメリッサさんに特訓をつけてもらうため。ギンガ団が去ったあと私とママはコンテスト会場でジーニアスリボンマスターを受け取った。実はそのときメリッサさんはコンテストがすばらしかったからという理由でレリックバッジももらっていたの。だけどそれじゃあ不公平だと言ったらママがメリッサさんから特訓を受けることを提案した。

でも私はもはや有名人。ときどきテレビにも出ていたのに（しかも無許可）コンテストの事件でもっと有名になってしまった。そうカンタンに町を歩くことはできない。鳥ポケモンに乗ってもいいけど目立ってしまう。そこでアキラがまたまた名案を出した。それはすなわち2つのグループに分かれて変装すること。グループは私・ママ・アキラとコウキくん・ジュン・アキコちゃんに分かれることになった。この作戦の最大の特徴は私がコウキくんの服を着て、コウキくんが私の服を着ることだ。コウキくんが私に変装して囮（おとり）になっている間に私はヨスガジムで修業をすることになったの。

ポッチャマはカモフラージュのためコウキくんのグループと行動することになった。ママは変装のため普段かけないメガネをかけ普段はかないズボンをはいた。こんなママ初めて見るけど悪くない。アキラもめずらしく帽子をかぶっていた。男らしい服装は変わってなかったけど……。

コウキくんたちは私たちより先に町へ出かけた。私たちも町に入ったらさっそく黄色い歓声を聞くことになった。

「キャーーーー！ヒカリ・ハナゾノだわーーーー！」
「コンテスト優勝おめでとうございまーーーす！」
「キャーー！ヒカリさーーーん！待ってくださーーい！」
「わたしたちファンなんでーーす！」
「サインくださーーーーーーーい！」
「彼氏いますかーーーー？」
「好みのタイプを教えてくださーーーい！」
「写真撮らせてーーーー！」

別の通りで若い男女の集団に追いかけられるコウキくんとジュンとアキコちゃんとポッチャマを見かけた。脇道でチラッと見ただけだった。ファンの歓声はしばらく聞こえたけど……。コウキくんだけでなくジュンも女装していた。ジュンママはジュンのくせっ毛をワックスで固めながら「息子もいいけど娘もいいわよね～」とつぶやいていた。実際カチューシャをつけてスポーティなワンピースを着たジュンはいい線をいっている。アキコちゃんも髪の毛をポニーテールにしたからアクティブに見える。私はコウキくんとジュンが女装すると決まったときの会話を思い出した。

『なんでオレまで女装しなきゃなんねーんだよ！』
『ヒカリさんが同い年の男性といることを目撃されたらまた変な噂（うわさ）が立つでしょう！』

コウキくんはバッチリ私になりきっていた。顔さえ見なければ私だってわからない。ウラヤマ家で何回も謝ったけど心の中でもう１度謝った。ジュン、コウキくん、アキコちゃん。巻き込んでごめんね……。

教会とポフィン料理ハウスを横切り、ポケモンセンターの右へ曲がろうとしたらハプニングが起きた。いきなり茶色い毛玉が私の胸

に飛び込んできたのだ。男装しているにもかかわらずキャッと叫んで尻もちをついてしまった。長い耳に大きなしっぽ。そして首を覆うフサフサな毛。このポケモンは……！？

「イーブイ！？」

「「えっ！」」

私たちはおどろいた。だってイーブイはめずらしいポケモン。不安定な遺伝子を持っているため環境に応じて異なるタイプに進化することができる。本来ナエトル・ヒコザル・ポッチャマのように研究所で管理されているポケモンだからこんな町中にいるはずがない。

「ブイ～！ブイ～。ブイ～。ブイ～～～～～？」

当のイーブイは私たちを気にせず私の顔をなめたり自分の顔を私の体にこすりつけてきた。しっぽはパタパタとうごいている。

「せいかーい！」

イーブイがやってきた方向から声がした。軽装の服を着ていて金髪をアップにしている。けっこう若い。アキラと同じかちょっと上……？

「こんちは！あんた男の子みたいなカッコしとるけどヒカリ・ハナゾノやろ？」

私はサッと頭を押さえた。コウキくんのベレー帽がない。イーブイが飛んできたとき落ちたんだ。私のポニーテールは外気にさらされていた。金髪の女性は特徴のある話し方で語ってきた。

「そう警戒せんでー。うちの名前はミズキ！あんたたちポケモントレーナーが使ってるパソコンのポケモンボックスを管理してるのうちやねん！ナナカマド博士からあんたのことは聞いとるでー。そのイーブイ、テレビであんたを見て気に入ったんや」

「は、はあ……」

「ブイ～～？」

不意打ちだった。聞き慣れない話し方を理解しようとするのに夢中で隙ができていた。私はイーブイと顔を合わせたとたんチューされた。ようするに初めてポケモンと唇を合わせてしまった。……ええええーーーっ！？ファースト・ポケモン・キッス～～～？……ああ、でもナポレオンがいなくてよかった。ナポレオンが見たらイーブイがボコボコにされちゃうもん……って問題そこじゃない！！

「うぷっ」

私はイーブイをどけて手の甲で唇をふいた。積極的なアプローチにアキラも引いている。ミズキさんは困った顔をしていた。

「ありゃりゃ！チューしてもうた。男の子やからなー……。すまんなー。その子おっとりした性格なんやけど……普段はボケ～～ッとしとるくせにあんたのことになるとめっちゃ興奮すんねん。コンテスト会場が襲われたときもパニくッてあんた救おうと家から飛び出したんねん。せやけど初めて外出たもんやから迷子になってしもうた。アホな子やな～」

「そ、そうなんですか……」

ミズキさんはおしゃべりだ。しゃべるのも早い。こういう話し方はテレビでときどき聞いたことある。だけどいざ対面すると自分が話すタイミングがつかめない。とつぜん現れたイーブイにキスされ

て混乱してるってのもあるけど……。

『あんたも女の子なのに大変やな～。図鑑完成するの応援しとるで！』

誰かを思い出した。あれ……？これってたしかコガネ弁……？私生のコガネ弁を聞くの初めてじゃないの……？

ふと頭に違和感を覚えた。アキラが私に帽子をかぶせたんだ。ママとアキラは事の成り行きを見守っている。ミズキさんは話を続けた。

「でさ、とーとつやけどあんたそのイーブイ引き取ってくれへんか？あんたと一緒にいたいみたいなんや！」

「えっ！？」

これもまた予想外だった。昨日から予想外のことがおこりすぎだ。私の日常は普通じゃないのが普通になりつつある。

「お願いやー！この子あんたが好きすぎてうちといても言うこと聞いてくれへん。コンテストの事件が終わったあとはしきりにあんたに会わせろと暴れまくるし手がつけられへん。ちょっと前まではボーッと過ごしてなんとなく生きてた感じなんやけど……生きがいを見つけもうたんや。あんたと生きること。うちじゃもう面倒みれへんわ」

「そんなこと言われても……」

私にはもう手持ちが6匹いる。ナポレオン・キララ・セニョール・ラミア・ランス・ノワール。クルルはボックスに預けてある。ナポレオンはコウキくんに預けたのでいちおうイーブイを引き取ること

はできる。でも引き取っても手持ちにいれるかどうかはわからない。ミズキさんは両手を合わせた。

「頼むわ！あんたがもろうてくれたら煮ても焼いてもかまわへん。あんたの言うことは聞いてくれると思うから。うちじゃ手に負えへん。ここは図鑑完成のためにももろうてくれや……な？」

「ブイ～～～～」

イーブイは甘えた目で私を見ている。ここで断ったら私はとんでもない自己中心な女の子ということになる。困っているミズキさんに同情しているのか、イーブイの熱意に感動したのか。どちらかわからないけど私はイーブイを引き取ることにした。

「……わかりました。大事に育てます」

「ブイーーーー？」

「おお！ありがとう！ほな、はい。どうぞ！」

ミズキさんは私にイーブイのボールをわたした。

「あとであんたのポケモンとしてボックスに登録しとくで。ポケモン譲渡の書類を書く必要はあらへん。そこはボックス管理者とあんたの図鑑所有者の特権として免除してもらうわ」

「あ、ありがとうございます」

「ブイブイ～？」

野生のポケモンと人間のポケモンを管理するためトレーナーは新しいポケモンを所持するたびに書類を書かなければならない。でも私は図鑑所有者だから多くの書類作業を免除してもらっている。ミズキさんもボックス管理者として融通（ゆうずう）がきくのだろう。肩の荷が下りたミズキさんは微かに笑った。

「……実はポケモンボックスのな、元々の仕組みはジョウトの友達が作ったんや。で、うちなりに使いやすいように色々改良したんよ！」

「それはマサキのことか？」

アキラが初めてミズキさんの会話に参加した。マサキさん！マサキさんってあの岬の小屋に住んでる有名な……。

「そう！マサキや！あんたよう知っとるね。会ったことあるんか？」

「ああ。昔ジョウトでな。私もイーブイをもらった。今じゃ立派なリーフィアだ」

リーフィア？聞いたことがない。イーブイは5種類のポケモンに進化する可能性を持つポケモン。進化系にそんな名前のポケモンはいないはず……。

「そやそや。そのイーブイもあの人がたくさんいるからってくれたんよ。でも……あの人何匹イーブイの世話してるんやろ？って関係ない話やな。ヒカリ、イーブイは7種類のポケモンに進化するポケモンや。都合に合わせて好きなタイプに進化させるとええで。よろしく頼むで」

用が済んだからかミズキさんはさっさと帰ってしまった。ポケモンセンターのとなりの家に住んでいるみたいだ。ママはイーブイののどをこちょこちょくすぐった。

「かわいいわね～。よかったわね、ヒカリ」

「う、うん……」

「ブイ？」

イーブイをもらったのはいいけど落ち着かない。心がモヤモヤする。私はイーブイの頭をなでながらアキラに訊ねた。

「ねえアキラ。イーブイは電気タイプのサンダース・水タイプのシャワーズ・炎タイプのブースター・エスパータイプのエーフィ・悪タイプのブラッキーの5種類のポケモンに進化するのよね？」

「ああ……。だが数年前に新たなに2種類の進化系が発見されたんだ。草タイプのリーフィアと氷タイプのグレイシア。……見せてやろうか」

アキラはボールのスイッチを押した。出てきたのは耳としっぽがはっぱになっているクリーム色のイーブイのようなポケモンだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5059j/

～長髪の美少女～

2011年10月8日02時47分発行